遊戯王GX～旋風の守護者～

豆フクロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊戯王ＧＸ～旋風の守護者～

【Ｎコード】
Ｎ３４９５Ｌ

【作者名】
豆フクロウ

【あらすじ】
デュエルアカデミアの入試に十代よりも遅れてやって来たマイペースなデュエリスト甲斐祐騎とこの世界にトリップしてしまったオリ主（女）を中心に進む物語です。

第一話　デュエルアカデミア入試試験（前書き）

はじめまして、豆フクロウです。

設定はヒロインを出した後にまとめて出しますのでとりあえずデュエルから始めようと思います。

それでは、第一話どうぞ！

第一話　デュエルアカデミア入試試験

～入試試験受付～

デュエルアカデミアの入試試験会場で受付をしている係員は、先程遅れてやって来た少年を見送った後、試験を受けにきた受験者の数を確認していた。

「さてと、さっきの子で終りかな？」

係員が名簿を確認していると、黒髪で伸ばした髪を尻尾の様に後ろで束ねた少年が係員に話しかけた。

「あの、デュエルアカデミアの入試試験会場はここでいいんでしょうか？」

「そうだが、君は受験生なのかい？」

「はい、電車の事故で遅れてしまって・・・」

少年がそう言うと、係員は腕時計で時間を確認して少年を急かした。

「なら、早く会場に行きなさい、今ならまだ間に合うかもしれない！」

「はい、ありがとうございます」

そう言って頭を下げて少年は走って会場に向かった。

～試験会場～

十代の場のフィールド魔法、摩天楼－スカイ・スクレイパーのビルから飛び降りフレイム・ウイングマンが攻撃態勢をとった。

「フレイム・ウイングマンの攻撃、スカイスクレイパー・シュート！」

フレイム・ウイングマンの攻撃で倒された古代の機械巨人（アンティーク・ギア・ゴーレム）が対戦していたクロノスに覆いかぶさり効果ダメージを与えた。

「ぺ～ペロンチ～ノ！？」

「よかった、まだ終わってなかった」

少年が試験会場に着くと会場の中央でフィールド魔法の効果で攻撃力の上がったフレイム・ウイングマンが古代の機械巨人を倒し、勝負が付いたところだった。

「・・・ぐぬぬ、それで～ハこれで今年のデュエルアカデミア入試試験を終了「あっ、ちょっとまってください」・・・なんナノ～ネ」

クロノスが試験終了を告げようとすると、少年が会場の中央にやって来てそれを止めた。

「受験番号１０４番、甲斐祐騎です、電車の事故で遅れてしまったので試験をお願いします」

そう言って自分の方を見ている祐騎を気にしながら、クロノスは他の試験官に自分がやるという合図を出した。

「分かったノ～ネ。
試験はこのワタクシ、クロノス・デ・メディチが相手になるノ～ネ！（さっきのはマグレナノ～ネ、次で名誉挽回ナノ～ネ）」

そして、二人はフィールドの中央でデュエルディスクを構えた。

「「デュエル！」」

祐騎ＬＰ４０００

クロノスＬＰ４０００

「先行はアナタからナノ～ネ」

クロノスがそう言うと、祐騎はデッキからカードをドローした。

「はい、私のターン、ドロー！
私はカードを二枚伏せてモンスターをセットしてターンエンドです」

祐騎はフィールドに合計三枚のカードを出してターンを終了した。

祐騎　ＬＰ４０００、手札３枚

「ワタクシのタ～ン、ドロー！」

クロノスはデュエルディスクとコートが一つになったデュエルコートからカードを1枚引いた。

「ワタクシ～は、古代の歯車（アンティーク・ギア）（攻／守１００／８００）を召喚！
さらに、このカードの効果により、手札から2体目の古代の歯車を特殊召喚！
続けて、魔法カード二重召喚（デュアル・サモン）を発動！
古代の歯車2体を生贄にして、古代の機械巨人（攻／守３０００／３０００）を攻撃表示で召喚ナノ～ネ！」

クロノスの場に小さな古ぼけた歯車が2体現れ、その歯車が地面の中に引きずり込まれるように消えていくと、地面から古く錆びた部品で出来た巨大な機械の人形が現れた。

クロノスとのデュエルを終えた十代はさっき知り合った翔や三沢のところで観戦していた。

「スゲ～！また、あのモンスターだ！」

「流石、クロノス先生といったところか、またしても一ターン目から古代の機械巨人とは・・・」

そう言って、十代達はクロノスと祐騎のデュエルの続きを観戦し

だした。

「古代の機械巨人でセットモンスターを攻撃！
アルティメット・パウンド！」

クロノスがそう宣言すると、フィールドの巨人は祐騎の場にセットされているカードに向かって拳を打ち出した。

「ちなみに、古代の機械巨人が戦闘を行う場合相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動出来ないノ～ネ！」

「さらに、古代の機械巨人は守備表示モンスターを攻撃した時その守備力を攻撃力が上回っていた場合、その差分のダメージを相手に与えるノ～ネ！」

そして、巨人がセットされていたカードを貫くと、その衝撃は祐騎にまで届いた。

祐騎　ＬＰ４０００→２６００

さらに、祐騎の場のカードが裏返ると、そこには空に向かって腕を伸ばす人の姿が有った。

「クッ！？セットモンスターのリバース効果発動！
セットモンスターはウェポン・サモナー（攻／守１６００／１６００）！効果によりデッキからガーディアンという単語の付いたカ

ードを手札に加える！
私はデッキから守護天使（ガーディアン・エンジェル）ジャンヌを手札に！」

セットしていたカードを墓地に送って、祐騎はデッキの中を確認してデッキから天使の絵柄が描かれたカードを手札に加えた。

「それがどうしたと言うノ～ネ！
ワタクシはカードを一枚伏せて、ターンエンドナノ～ネ！（ワタクシのリバースカードは聖なるバリアーミラーフォース、例えさっきの様に古代の機械巨人の攻撃力を超えるモンスターを出したとしてもこのカードで返り討ちナノ～ネ！）」

クロノスはそう言って、自分フィールドにカードを伏せてほくそ笑み、ターンを終了した。

クロノスＬＰ４０００、手札２枚

「私のターン！ドロー！
・・・クロノス先生」

祐騎は自分の手札を見て少し考えると、クロノスに向かって話しかけた。

「何ナノ～ネ」

「このデュエル、私の勝ちです」

祐騎の発言にクロノスは目を見開いて驚いた。

「ッ！？やれるものならやってみるノ～ネ！」

そして、祐騎の勝利宣言に会場の人達は騒ぎだした。

「リバースカードがあるとはいえ、フィールドにモンスターが居ないこの状態でどうやって勝つというんだ？」

そんな中、会場内の大半の疑問を口にした三沢の言葉に誰も反応しなかった。（憐れ、空気三沢）

そして、そんな状況の中で祐騎はデュエルを再開した。

「行きます！

まず、墓地のウェポン・サモナーをゲームから除外して風の精霊ガルーダ（攻／守１６００／１２００）を攻撃表示で特殊召喚！

さらに、手札からレベル８のモンスター、ガーディアン・エアトス（攻／守２５００／２０００）を攻撃表示で召喚！」

祐騎がデュエルディスクにカードをセットすると、祐騎のフィールド上に鳥とも人とも取れるようなモンスターと、頭に白い鳥の被り物を被って、アメリカインディアンの様な服装で背中に白い翼の生えた女性が現れた。

そして、祐騎が犠牲無しで最上級モンスターを召喚した事で会場内の人達は驚いた。

「なんなノ～ネそのモンスターは！？

それにレベル８のモンスターを犠贄無しに召喚したでス～ト！？」

「ガーディアン・エアトスは自分の墓地にモンスターカードが無い時、手札から特殊召喚出来るカードです！」

祐騎は会場の人々やクロノスの驚きを無視してデュエルを続行した。

「さらに、リバースカードオープン！罠カード、ゴッドバードアタック！

このカードは自分の場の鳥獣族モンスター一体を犠贄にしてフィールド上のカードを二枚選択して破壊します！」

祐騎が自分の場のカードを開くと、そこには鳥のような存在が炎をまとっている姿が描かれていた。

「なんでス～ト！？」

「風の精霊ガルーダを犠贄にして、クロノス先生の場の古代の機械巨人とリバースカードを破壊します！

ゴッドバードクラッシュ！」

祐騎の場のガルーダがクロノスのフィールドに向かって突っ込むと、古代の機械巨人にぶつかり爆発が起こり、クロノスのフィールド上のカードを破壊した。

「ワタクシ～の古代の機械巨人とミラーフォースが～！？」

「さらに、私はガーディアン・エアトスに装備魔法、黒いペンダントを装備して、攻撃力を５００ポイントアップします」

フィールド上のガーディアン・エアトスの首に、黒い宝石のペンダントが付けられた。

ガーディアン・エアトス（攻２５００→３０００）

「ふ、ふん、攻撃力が足りないノ～ネ、それじゃあワタクシを倒せないノ～ネ！」

クロノスが少し声を震わせながらそう言うと、祐騎はクロノスに向かって微笑んだ。

「ええ、ですからガーディアン・エアトスの特殊効果を発動！」

「特殊効果でス～ト！？」

祐騎の発言にクロノスは飛び上がるほどに驚いた。

「ガーディアン・エアトスは自身に装備された装備魔法を一枚墓地に送る事で相手の墓地にあるモンスターカードを三枚までゲームから除外して、このターンのエンドフェイズまで除外したカード×５００ポイント攻撃力がアップします！」

「クロノス先生の墓地の古代の歯車と古代の機械巨人をゲームから除外して攻撃力１０００ポイントアップします！

聖剣のソウル！」

エアトスに付けられていたペンダントが光になって消えると、エアトスの右手に両刃の細い剣が現れ、除外されたモンスターがその剣に集まり剣に吸収された。

ガーディアン・エアトス（攻３０００→２５００→３５００）

「驚かされたノ～ネ、まだ攻撃力が足りないノ～ネ！
これだから、ドロップアウトは困るノ～ネ」

クロノスはエアトスの攻撃力を確認すると、安心して祐騎を馬鹿にするようなことを言ったが、祐騎はそんなクロノスに笑顔で応えた。

「いえ、丁度ぴったりの数値ですよ？」

「へ？な、なぜワタクシのライフが減っているノ～ネ！？」

祐騎が笑顔でクロノスにそう言うと、クロノスは自分のライフを確認してライフが減っていることに気づき大慌てしだした。

クロノスＬＰ４０００→３５００

「ガーディアン・エアトスの効果で墓地に送った黒いペンダントの効果です。
黒いペンダントはフィールドから墓地に送られたとき、相手プレイヤーに５００ポイントのダメージを与えます！」

慌てているクロノスに祐騎がそう言って、自分の墓地にある黒いペンダントのカードを見せて説明するとクロノスはものすごく驚き、意味の解らないことを叫んだ。

「マンマミ～ヤ！？」

「バトル！
ガーディアン・エアトスでダイレクトアタック！
フォビドゥン・ゴスペル！」

祐騎がそう指示すると、エアトスは手に持ったさっきよりも輝きを増した剣でクロノスを切り裂きクロノスのライフを０にした。

「ペーペロンチ～ノ！？」

クロノスＬＰ３５００→０

クロノスはエアトスの攻撃を受けて、また意味の解らないことを叫んでその場に崩れ落ち、エアトスはその後祐騎の傍にやってきてすぐに消えて行った。

《・・・》

「？」

そして、祐騎がクロノスを倒した後、ふとエアトスを見るとエアトスと目が合い、エアトスが微笑んでいる様に見えたが気のせいだと思いそのまま試験会場を後にした。

それから数分後、祐騎がクロノスとのデュエルに勝利し、会場から出ていくのを紅い髪の一人の少女が目で追い掛けていた。

「・・・アイツ、もしかして精霊が見えてる？

だとしたら、予想外のイレギュラーになるかも」

少女が話しかけた場所には、体と1つになったような花の形をしたドレスを着た女性がいた。

「そうだとしたら、我が愛しのマスター様はあの子をどうするつもりなのかしらぁ？」

「・・・とりあえず、アカデミアで接触するわ、答えはそれからよ」

少女がそう言うと、女性は顔を紅潮させ悦に浸ったような顔をした。

「フフッ、楽しみねぇ。
あぁ、あの子の苦痛に歪んだ顔を早く見たいわぁ」

「・・・そ、そう（これさえ無ければなぁ）」

しかし、近くに居た他の少女が、その時の紅い髪の少女の方を見たが、紅い髪の少女以外誰も居らず少女が何も無いはずのところから、若干体を引き顔を引きつらせていたことに疑問を感じていた。

第一話　デュエルアカデミア入試試験（後書き）

最後に出てきたのが本作のヒロインにして、原作知識有りのトリップオリ主（女）です、次の話で名前等出していくつもりです。

あと、作者は今の遊戯王のルールなんかはあまり理解していません、おかしなところがあれば指摘して下さると有りがたいです。

第二話　偽ラブレター事件　ＶＳ深緑の女帝（前書き）

今回はいきなり偽ラブレター事件まで飛びます、ここまでの流れはテンプレになるので省かせてもらいます。
それで、今回メインヒロインがでます。
それでは、第二話をどうぞ。

第二話　偽ラブレター事件　ＶＳ深緑の女帝

～レッド寮～

「・・・ｚｚｚ」

入試試験に遅れたものの無事デュエルアカデミアに入学した祐騎は、オシリスレッドに入れられ早数週間が経過しており、現在祐騎は自室で寝ていた。

ドンドン！

「おーい！祐騎、開けてくれ！」

「んぅ？」

祐騎はドアを叩く音で目を覚まし、ドアを開けるとそこには息を切らせている十代がいた。

「なに？十代君」

「翔が誘拐されたんだ！
助けに行くから一緒に来てくれ！」

「・・・へ？」

十代がそう言うと祐騎は少しの間呆然としていたが、十代に引っ張られて十代についていくことになった。

オシリスレッドになった祐騎は、この寮に来た初日に十代達と知り合いそのまま友人になっていた。

ちなみに、万丈目との最初のデュエルの時祐騎は熟睡していたため置いていかれていた。

～ブルー女子寮前～

十代と祐騎がボートに乗ってブルー女子寮前に来ると、ロープでグルグル巻きにされた翔を明日香とその取り巻きの枕田ジュンコと浜口ももえと紅い髪の女生徒が取り囲んでいた。

「アニキ～！祐騎君～！」

「翔！」

「・・・翔君、何やってるの君？」

翔が泣き顔で二人の名前を呼ぶと、十代は心配そうな声を出し、祐騎は呆れ半分疑問半分といった感じで翔に質問した。

「コイツはね、私達の風呂場を覗いたのよ」

祐騎の翔にした質問を紅い髪をポニーテールにしたツリ目の女子が応えた。

「えっと、失礼ですけど、どちら様ですか？」

「私は、紅龍（くりゅう）　蓮（れん）オベリスクブルー一年の生徒よ」

祐騎は蓮の言ったことが気になって、その真意を確かめようと話しかけた。

「始めまして、甲斐　祐騎です。
それで、翔君が覗きをしたっていうのは本当なんですか？　そりゃあ、日頃から女性に興味があるって話を聞いてますけど。
まさか覗きなんてするとは思いたくないんですけど・・・」

「・・・彼はラブレターで呼び出されたって言ってるけど、誰も覚えがないし呼び出されたとしても風呂場の周りをうろちょろしていたのは事実。
友人を信じたい、あなたの気持ちは分かるけど現実は残酷なのよ」

蓮が遠くの方を見ながらそう言うと、祐騎はチラッと翔の方を見てから肩を落として蓮との会話を再開した。

「・・・そうですか、それは残念です。
それはそうと皆さん綺麗な方々ですね。
翔君が覗きをしようとするわけです」

「あ、あら、ありがとう、でも、おだててもこのメガネは解放しないわよ？」

蓮が祐騎の言葉で少し顔を赤くしてそう言うと、祐騎はそんな蓮のことには気づかずにそのまま話を続けた。

「いえ、本当のことですし、それに本当に翔君が覗きなんてことをしたんだったら、もう煮るなり焼くなりお好きにどうぞ」

「ちょっと、祐騎君何普通に僕が覗きをしたって信じてるんッスか!?

そして、さりげなくナンパッスか!」

祐騎が蓮と普通に会話をしてると、捕まえられている翔が祐騎に向かってそう叫ぶと、祐騎はそんな翔に”わかってないなぁ~”という呆れたような顔をした。

「いや、聞いた限りだと悪いのは君でしょ?

現に捕まってるわけだし、それにこれはナンパじゃないよ、女性を褒めるのは男としてのマナーだよ翔君?」

「そうね、何を言っているのかしら、このメガネは」

「しかも、初めて会ったのに息ピッタリ!?」

祐騎と蓮は特に合図をすることも無くお互いに次に何を言おうとしているかを理解して、そのまま翔を弄ることにした。

「「これくらい普通でしょ?」」

「あれ!?僕何も間違って無いのに、なんか僕が悪いって流れになってないッスか!?」

「「覗きに人権無し!」」

「ヒドッ!?てか僕は本当に覗きなんてしてないッスよ!?

そして、やっぱり息ピッタリじゃないッスか！？」

翔は祐騎と蓮に弄られて半泣きになり周りのみんなはそのやりとりに苦笑していた。

「そうゆう訳だけど、私達とデュエルして勝ったら、今回のことは無かったことにしてあげる」

「よし！そのデュエル受けてたつぜ！」

そんな事があった後、明日香がデュエルで結論を付けようという話になり、十代が待ってましたとばかりにその提案を受けた。

「それじゃあ、十代君頑張ってね～」

「あら、他人事のように言ってるけど貴方は私とデュエルするのよ？」

そんな十代を祐騎が観戦モードで応援しようとすると、蓮から自分もする必要があると言われて固まった。

「へ？」

「私達って言ったでしょう？遊城十代は明日香と、あなたは私とデュエルするの、逃げたらコイツは容赦なく突き出すわよ？」

「・・・判りました、やりましょう」

祐騎は涙目でジッとこちらを見ている翔を見て戦うことを決めた。

～ブルー女子寮前の岸～

ボートの上では十代と明日香のデュエルが行われているため、祐騎と蓮の二人は近くの岸に上がってデュエルすることになった。

「「デュエル！」」

祐騎　ＬＰ４０００

蓮　ＬＰ４０００

「僕のターン！ドロー！
僕はモンスターをセットしてカードを一枚伏せてターンエンド」

祐騎の先攻でデュエルが始まり、まず祐騎は自分のフィールド上にカードを２枚出してターンを終了した。

祐騎　ＬＰ４０００、手札４枚

「私のターン！ドロー！
私はローンファイア・ブロッサム（攻／守５００／１４００）を召喚！
さらに、ローンファイア・ブロッサムの効果を発動！
このカードは自分フィールド上の植物族モンスターを生贄にしてデッキから植物族モンスターを特殊召喚するわ！」

蓮のフィールドに蕾に炎を灯した植物が現れ、その花はフィールドに出てすぐに枯れていき枯れた場所から何かが出てきた。

「私はローンファイア・ブロッサム自身を生贄にデッキから、私のフェイバリットカード椿姫(つばき)ティタニアル（攻／守２８００／２６００）を特殊召喚！」

蓮のフィールドに椿の花の中から現れたような姿をした女性型のモンスターが現れ、祐騎はその召喚スピードに驚いた。

「一ターン目で最上級モンスターを召喚した!?」

「まだ終わりじゃ無いわよ！
さらに、手札から速攻魔法、偽(いつわ)りの種を発動！
手札からレベル２以下の植物族モンスター一体を特殊召喚するわ！」

祐騎が驚いていると、蓮は手札から魔法カードを発動させ、さらにフィールドにカードを出した。

「手札からレベル１のイービル・ソーン（攻／守１００／３００）を特殊召喚！
さらに、召喚したイービル・ソーンの特殊効果を発動！
イービル・ソーンを生贄にしてデッキからイービル・ソーン二体を攻撃表示で特殊召喚、さらに効果で相手プレイヤーに３００ポイントのダメージを与える！」

「クッ！？」

蓮のフィールドに現れた棘の付いた実が成っている植物が現れ、

その植物の実が爆発し実の棘が祐騎に襲い掛り、爆煙が消えると爆発した植物と同じものが二つ現れた。

祐騎ＬＰ４０００→３７００

ダメージを受けた祐騎は一瞬動揺したがすぐに元に戻り、蓮はそんな祐騎を見てさらにカードを使用した。

「そして、椿姫ティタニアルに装備魔法、憎悪の棘（ぞうおのとげ）を装備、このカードを装備したモンスターは攻撃力６００ポイントをアップし、貫通能力を得る！」

「バトル！椿姫ティタニアルでセットモンスターを攻撃！ヘイト・カメリア・ウィップ！」

椿姫ティタニアルは憎悪の棘を装備して凶悪になった棘の付いたツタで祐騎の場のセットモンスターに攻撃を仕掛けた。

「セットモンスターはウェポン・サモナー（攻／守１６００／１６００）！リバース効果でデッキからガーディアン・エアトスを手札に加える！」

「さらに、罠カード発動！ガード・ブロック！このカードの効果で戦闘ダメージを０にしてデッキからカードを一枚ドロー！」

ティタニアルの攻撃は祐騎の場のカードを越えて祐騎自身に向かってきたが、祐騎が発動させたカードが盾代わりになって祐騎を守った。

「・・・憎悪の棘の効果、このカードを装備したモンスターが相手モンスターと戦闘を行ったとき相手モンスターはこのバトルでは破壊されない、そしてダメージ計算後戦闘を行った相手モンスターの攻撃力と守備力を６００ポイントダウンさせる」

ウェポン・サモナー（攻／守１６００→１０００／１６００→１０００）

そして、攻撃を受けた祐騎の場のモンスターは攻撃によってボロボロになり攻撃力と防御力がダウンした。

「私はこれでターンを終了するわ」

蓮ＬＰ４０００、手札２枚

蓮がターンを終えると、祐騎は楽しそうな顔でカードをドローした。

「僕のターン！ドロー！

流石、オベリスクブルーの方ですね、けど僕も負けませんよ！

手札からマイフェイバリットモンスター、ガーディアン・エアトス（攻／守２５００／２０００）を攻撃表示で特殊召喚します！」

《誰が相手でもマスターのために勝たせていただきます！》

「へ！？い、今、エアトスが、し、喋ったぁ！？」

祐騎は自分が召喚したエアトスがいきなり喋ったことに驚いて声

を挙げた。

《?、あっ!》

エアトスは祐騎が自分が喋ったことに驚いたことに不思議がったが、自分のことを祐騎に知らせていないことを思い出した。

《マスター、私はデュエルモンスターズの精霊です。　詳しいことはこのデュエルの後で》

「う、うん、判った」

エアトスからの説明を受けて、祐騎は一応納得してデュエルを再開させようとすると蓮が祐騎に話しかけてきた。

「・・・精霊との話は済んだのかしら?」

「え!?紅龍さんも精霊が見えるんですか!?」

「ええ、というか私の椿姫ティタニアルも精霊よ」

「え?」

祐騎は蓮にもカードの精霊が見えることに驚いて蓮に質問すると、そう言って蓮は自分の側にいる椿姫ティタニアルを指差した。

《はぁい、私は椿姫ティタニアルの精霊で名前はティルっていうのよろしくね～》

「よ、よろしくお願いします」

「さぁ、話はこれくらいにしてデュエルを続けましょう」

自分に挨拶をしてきたティルに、祐騎はお辞儀をして挨拶をしてデュエルを再開した。

「はい、それではいきます！
まずは、手札から速攻魔法サイクロンを発動！
フィールド上の魔法、罠を一枚破壊します、憎悪の棘を破壊！」

「やらせない！椿姫ティタニアルの効果を発動！
椿姫ティタニアルは自分フィールド上の植物族モンスター一体を生贄に捧げ、フィールド上のカードを対象する魔法、罠、モンスター効果を無効にして破壊する！」

「イービル・ソーン一体を生贄にして、サイクロンの効果を無効にして破壊するわ！」

《ふふっ、おイタは駄目よ、サクリファイス・サンクチュアリ！》

一体のイービル・ソーンが枯れると、ティルのツタが壁の様になりサイクロンを弾き返した。

「クッ！ならウェポン・サモナーを生贄にして疾風鳥人（しっぷうちょうじん）ジョー（攻／守２３００／１４００）を攻撃表示で召喚します！」

「そして、ジョーの効果を発動！このカードは風属性のモンスターを生贄にして生贄召喚に成功したとき、フィールド上の魔法、罠カードを全て持ち主の手札に戻します！
リバース・ウィンド！」

フィールドのウェポン・サモナーが風の中に消えていき、その風の中から緑色の翼をした鳥人がフィールドに現れ、さらに風がフィールドを包み込むとフィールドの魔法カードを手札に戻した。

「なっ！憎悪の棘が！？」

《あらら～、これは止められないわね～》

椿姫ティタニアル（攻撃３６００→２８００）

フィールドから憎悪の棘が手札に戻ったことで、ティルのツタの棘が元に戻り攻撃力も元の数値に戻った。

「さらに、手札から装備魔法、団結（だんけつ）の力（ちから）をエアトスに装備させる！」

「悪いけどそれは使わせない！
二体目のイービル・ソーンを生贄にして、椿姫ティタニアルの効果を発動！」

《は～い、こんどは使わせないわよ～
サクリファイス・サンクチュアリ・パート２～》

祐騎がエアトスに装備魔法を装備させようとすると、蓮の場のイービルソーンの養分を吸収したティルのツタが装備魔法のカードを貫いて墓地に送った。

《くぅっ！装備カードも無効化できるのですか！？》

《あぁっ！いい！いいわぁ！その苦悶の表情ゾクゾクしちゃう！》

《（ゾゾッ）ひぅっ！な、なんなんですか、あなたぁ！？（涙目）》

エアトスがティルの効果によって装備魔法を装備できなかったことに苦悶の表情を見せると、ティルは恍惚とした目線をエアトスに向け、それを受けてエアトスは涙目になり、祐騎はティルの行動に引いていた。

「うわぁ、なんなんですか、あなたの精霊」

「・・・言わないで、お願いだから言わないで」

祐騎が蓮にそう言って問うと、蓮は明後日の方向を向いてそう言い祐騎はその姿からもう何も言うことが出来ずにデュエルを再開させることにした。

「そ、それじゃあ、僕はエアトスに装備魔法、魔導師（まどうし）の力（ちから）を装備します！」

エアトス（攻撃２５００→３０００）

「装備魔法！？まだ手札に有ったなんて」

祐騎が先ほどとは違う装備魔法をエアトスに装備するとエアトスの周りに不思議なオーラが現れてエアトスの攻撃力を上昇させた。

「さらに、エアトスの効果で魔導師の力を墓地に送って、紅龍さんの墓地のローンファイア・ブロッサムと二体のイービル・ソーン

をゲームから除外し、攻撃力を１５００ポイントアップ！
聖剣のソウル！」

《墓地に眠りし魂よ私に力を！》

エアトス（攻撃３０００→２５００→４０００）

エアトスを包んでいたオーラが消えると、エアトスの手に現れた剣に蓮の墓地に送られたモンスター達が吸収され強い光を放ちだした。

「バトル！エアトスで椿姫ティタニアルを攻撃！
フォビドゥン・ゴスペル！」

《先程のお返しです！ハァッ！！》

《あぁん！やっぱり、攻撃されると痛いわぁ～、でもこれはこれで、カ・イ・カ・ン》

《ヒィッ！やっぱりこの方は異常ですよ～！？（涙）》

ティルはエアトスの持っている剣で斬られながらも、恍惚とした表情をしながら撃破され、そんなティルにエアトスは涙を浮かべて祐騎の側まで一気に戻っていった。

「・・・ごめん、倒されたのは私の方なんだけど、なんかほんとごめん」

「あ、あはは～（苦笑）
き、気をとりなおして、バトル再開！」

蓮はそんなティルの行動に頭を抱えて祐騎とエアトスに謝り、祐騎はそんな蓮のことを苦笑いしてデュエルを再開した。

「疾風鳥人ジョーでダイレクトアタック！
ソニック・ダイブ！」

「キャアッ！」

蓮ＬＰ４０００→２８００→５００

「カードを一枚伏せてターンエンドです！」

祐騎の場の疾風鳥人ジョーが蓮に向かって突っ込み、蓮に当たる瞬間に上昇して蓮を交わして、その時発生した真空刃によって蓮のライフが削られた。

祐騎ＬＰ３７００、手札２枚

「私のターン！ドロー！私は手札から永続魔法、増草剤（ぞうそうざい）を発動！
このカードは使用したターン通常召喚を行えない代わりに、墓地の植物族モンスター１体を特殊召喚するカード！
墓地から椿姫ティタニアルを蘇生召喚！」

《は～い、私、再臨》

「さらに、私は椿姫ティタニアルにもう一度、憎悪の棘を装備してガーディアン・エアトスを攻撃！
ヘイト・カメリア・ウィップ！」

蓮はドローしたカードを確認して、そのままそのカードを使用すると蓮のフィールドに沢山の草が現れ、その草の下から墓地に送られた椿姫ティタニアルのカードが現れ、さらに蓮は再度ティルに憎悪の棘を装備させてエアトスを攻撃させた。

《さぁ、今度はあなたの悲鳴を聞かせてちょうだい！》

《グゥッ！》

「クッ！」

ティルは、再度装備した憎悪の棘で凶悪になったツタでエアトスを攻撃し、エアトスの体や羽に裂傷を負わせ攻撃力と守備力をダウンさせ、さらに、エアトスをすり抜けたツタの内の数本が祐騎に襲い掛かり、祐騎にダメージを与えた。

祐騎ＬＰ３７００→２８００

《あぁん、やっぱり攻撃を受けて苦痛に歪む顔って最っ高》

「・・・（汗）さ、さらに、憎悪の棘の効果でエアトスは戦闘では破壊されず、攻撃力と守備力を６００ポイントダウンさせる！」

エアトス（攻／守２５００→１９００／２０００→１４００）

ティルは自分の攻撃で傷つき、その痛みとダメージで顔を歪ませた祐騎とエアトスを見て悦に入り、蓮はそんなティルに対して嫌な汗を欠きながらデュエルを続行した。

「私はカードを一枚伏せてターンエンドよ！」

蓮ＬＰ５００、手札１枚

「僕のターン！ドロー！手札から魔法カード、アームズ・ホールを発動！
このカードはこのターン通常召喚をできなくする代わりにデッキから装備魔法を一枚手札に加えます」

「デッキから装備魔法、巨大化（きょだいか）を手札に加えて、そのまま椿姫ティタニアルに装備します！
巨大化は使用者のライフが相手より下なら元々の攻撃力が２倍になりますが、ライフが相手より高い場合元々の攻撃力は半分になります！」

祐騎が魔法カードを発動させると、祐騎はデッキから巨大化の装備魔法カードを手札に加え、その巨大化を蓮の場のティルに装備させるとティルは通常の大きさの半分の大きさに変化してしまい、蓮はそんなティルの姿を見て悔しそうな表情を浮かべた。

「クッ！（ティルの効果を発動したら私の場ががら空きになってしまう）」

椿姫ティタニアル（攻撃３４００→２０００）

「バトル！
疾風鳥人ジョーで椿姫ティタニアルを攻撃！
ソニック・ダイブ！」

《あぁん、またやられちゃったぁ》

「クゥッ！」

疾風鳥人ジョーが攻撃力の下がったティルを貫いて撃破し、そのまま蓮の側を通過して蓮にダメージを与えた。

蓮ＬＰ５００→２００

「これで止めです！
エアトスでダイレクトアタック！」

「まだよ！リバースカードオープン！
罠カード、リビングデッドの呼び声！このカードの効果で墓地の椿姫ティタニアルを蘇生召喚するわ！」

「やらせない！チェーンしてカウンター罠、魔宮（まきゅう）の賄賂（わいろ）を発動！
相手の魔法、罠カードの効果を無効にして破壊する、そして相手はデッキからカードを一枚ドローする」

「クッ！・・・カード、ドロー」

祐騎の攻撃宣言に蓮が伏せていたカードを発動させるも、祐騎は自分の場に伏せていたカウンター罠によってその効果を無効にした。

「バトルを再開！
エアトスでダイレクトアタック！
精霊のオペラ！」

《これで、終わりです！ハアァァッ！》

「キャアッ！」

蓮ＬＰ２００→０

エアトスが体に力を入れて声を発すると、周囲の空気が刃となって蓮に襲い掛かり蓮のライフを０にした。

「・・・負けた、か」

「ふぅ、なんとか勝てたぁ」

祐騎と蓮のデュエルが終わったのと同時に、十代と明日香のデュエルも決着がついたのが祐騎達にも見えた。

「アッチも終わったみたいね？
約束どおりあの今回のことは無かったことにしてあげるから、あなたたちもそろそろ自分達の寮に戻ったほうがいいわよ」

「あ、うん、ありがとう。
それはそうと、紅龍さんに聞きたいことがあるんだけど」

蓮が祐騎に早く自分達の寮に戻るように言うと、祐騎はそんな蓮に礼を言った後に疑問に思ったことが有り、蓮に質問してみようと思い連に声を掛けた。

「そうなの？
まあ、私もあなたに話したいことがあるから、明日の放課後に話しましょう。
それと、私のことは名前で呼んでくれる？他人行儀なのは嫌いな

の」

「分かったよ、蓮さん。
それから、僕の方も名前で呼んでくださいね？」

「ええ、宜しくね祐騎」

祐騎と蓮は、明日また会う約束をして握手をしてお互いを名前で呼ぶことにした。

「はい、それじゃあまた明日！」

「ええ、また明日（さてと、とりあえず接触はできた、あとは明日いろいろ話してみて、それから彼への対処を決めましょうか）」

そう言って、祐騎は十代達の方に向かって行き、蓮はそんな祐騎の後姿を見ながら明日どうするかを考えて明日香達の方に向かって行った。

「なにを話してたんッスか祐騎君？」

「ん？次に翔君が覗きをしたら問答無用で突き出してほしいと・・・」

「ちょっ！？僕は覗きなんてしてないって言ってるじゃないッスか！」

十代達とレッド寮に向かっているとき、翔が祐騎と蓮が最後に何

か話しているのが気になって祐騎に質問すると、祐騎は意地の悪い顔をして翔をからかった。

「冗談だよ、明日ちょっと話をしようと約束しただけだよ」

「そうか、それよりも、あいつ強かったか？」

「うん。
正直、次勝てるかわかんないね」

「そっか、明日香も強かったからな～、く～俺もあいつとデュエルして～！」

「ははっ、十代君らしいね」

十代は祐騎の蓮が強いという話を聞いて、明日香とのデュエルを思い出して興奮しながら、祐騎たちはレッド寮に戻っていった。

祐騎達がレッド寮に向かっているとき、蓮は明日香達と合流して自分達の部屋へと向かう途中で明日香に話しかけられた。

「珍しいわね？あなたが負けるなんて」

「あら？アカデミアの女王（クイーン）も負けることがあるんだから、私だって負けることはあるわよ？」

「よく言うわね、私が女王ならあなたは女帝（エンプレス）じゃないの」

「私はそんな肩書きに興味はないの」

蓮は明日香の言った事に対して少し嫌な顔をして、そのことを否定した。

「まったく、そんな態度だからみんなから植物族デッキ使いの女帝、深緑の女帝なんて呼ばれるのよ」

「・・・やっぱり、その呼ばれ方嫌だわ」

「なら、私のことも女王なんて呼ばないでくれる？」

「・・・ＯＫ、わかったわよ」

蓮は明日香の言った事に今度は物凄く嫌な顔して、明日香はそんな蓮のことを苦笑しながら眺めた。

そして、偽ラブレターから始まった事件はこうして幕を閉じた。

第二話　偽ラブレター事件　ＶＳ深緑の女帝（後書き）

はい、ヒロインのデッキはシンクロ抜きの植物族デッキとなりました。
次はヒロインと主人公の会話を中心にしていこうと思います。
それから、デュエルの流れやデッキの構成などいろいろと指摘していただけるとありがたいです。
それでは、これからもよろしくおねがいします。

キャラ設定（前書き）

今回は、主人公とヒロインの設定と使うデッキを紹介します。

十一月一日設定追加。

二月五日　主人公＆ヒロイン第二期使用デッキ追加

キャラ設定

主人公の設定

名前　甲斐（かい）　祐騎（ゆうき）

身長１５８ｃｍ、体重４５ｋｇ

容姿　外見は劇場版、第一期ハガレンのアルフォンス・エルリックの髪と瞳を黒にした感じで、長い髪を後ろで一纏めにしている。

デッキはガーディアン・エアトスを中心とした風属性モンスター主体の装備ビートデッキです。

性格　基本的にマイペースで一日の大半が睡眠とデュエルで終わってしまうため、周りで騒動が起こっても起きたときにはもう終わっているということがたまにある。

一人称は基本的には僕だが、目上の人と話すときは私になり、怒ったときは俺になる。

境遇　両親は祐騎が五歳のときに事故で亡くなっており、その時から当時十歳年の離れた姉（相当なブラコン）の手により育てられており、女性（姉）に対して優しくするように教育されているため自然と女性を褒めるようになっている。

祐騎の姉は現在Ｉ＆Ｉ社で働きながら、デュエルアカデミアへの授業料を支払っている。

ヒロインの設定

名前　紅龍（くりゅう）　蓮（れん）

身長１６８ｃｍ、体重４２ｋｇ、Ｂ８６、Ｗ５８、Ｈ６３

容姿　外見はリリカルなのはのシグナムを少し小さくして、髪を深紅にした感じ。

デッキは椿姫ティタニアルを主力にした植物族デッキ。

性格　基本的に気に入った人以外には気を許さず、疑問や問題が起きた場合は自分の答えが出るまで一人で悩み続けることがあるので、一度悩み出すとなかなか解決せず周りから置いていかれることがある。

一人称は私

境遇　気がついたらこの世界にいた典型的なトリッパーで、現実世界では漫画やゲーム特に遊戯王が好きな普通の社会人で容姿も平凡なものだったが、いつもどおりの一日を終えて眠り目を覚ましたらこの世界にいて、今の体になっていた。

ちなみに、今の体の家庭は両親が海馬コーポレーションの系列会社でそれなりの地位にいるため一般的な家庭よりも裕福であり蓮はその家の一人娘であるが、両親は現在海外で別居中。

主人公の姉

名前　甲斐（かい）　優奈（ゆうな）

身長１７５ｃｍ、体重４６ｋｇ、Ｂ９０、Ｗ５９、Ｈ７０

容姿　外見は刀語の敦賀迷彩（つるがめいさい）の髪の毛を少し短くした感じで、基本的にスーツを着ている。

性格　基本的には真面目で優しく、悩んでいる人や苦しんでいる人を見ると手を直ぐに貸すが、経験から悪い考えの人物だと思うと放っておく。
そして、極度のブラコンであるため弟である主人公のためなら、かなりの無茶を平気でやる。

境遇　祐騎と同じで十五才の時に両親が事故死した後、両親の遺産目当てでよって来た親戚を追い返しながら近くのカードショップでのアルバイトと遺産で生活を続けていたある時、アルバイト先で近所の子供達相手にカードの絵を描いていると、偶然そこにＩ＆Ｉ社の社員が来店し優奈が描いた絵を見たその社員が優奈をスカウトし、そのままＩ＆Ｉ社に入社することになる。

使用デッキ　エンジェル・パーミッション

ヒロインの義妹

名前　紅龍（くりゅう）　小羽（こはね）

旧姓　小鳥遊（たかなし）　小羽（こはね）

身長１４３ｃｍ、体重３２ｋｇ、Ｂ７０、Ｗ５３、Ｈ７４

容姿　外見が真・恋姫無双の周泰で、髪の毛に黒い羽の形の髪留めを付けている。

性格　気が弱く、自分のことに自身が持てず、いつも周囲を窺っている。

境遇　五年前に両親との旅行中に事故に合い、その時に両親が死亡した後教会が経営する孤児院に引き取られ、そこで蓮の両親に出会い引き取られる。
精霊のマリナとは事故に合う前に出会い、ＢＦデッキを手に入れる前は魔法使い族デッキを使っておりデュエルアカデミアへの入試もそのデッキを使用、現在はＢＦデッキをマリナ用に調整して使っている。

使用デッキ　ＢＦ＋αと魔法使い族デッキ

名前　ジョシュア・クラウド

身長１８５ｃｍ、体重６５ｋｇ

容姿　外見はめだかボックスの人吉善吉の髪を青くして、ジャックのコートの色を黒と赤に変えた感じの物を羽織っている。

性格　基本的に冷静だが、熱くなると周りが見えなくなり暴走することがある。

境遇　八年前のデュエル大会のときに、当時の蓮とデュエルをし

て敗退。
その後、その時の悔しさから、デュエルの特訓を続けてプロになるも、プロの世界に蓮が居ないことを知るとスポンサーに頼み込んで蓮を探し出し、デュエルアカデミアに居る事を知る。
そして、もう一度蓮と勝負するためにデュエルアカデミアへの入学を決意し、アカデミアに通う間のプロ活動の休業を宣言した。

使用デッキ　悪魔族とドラゴン族の混合パワーデッキ

主人公第一期使用デッキ内容　枚数４６枚

上級モンスター　ガーディアン・エアトス×３、守護天使ジャンヌ×１、始祖神鳥シムルグ×１

中級モンスター　疾風鳥人ジョー×１、風帝ライザー×１、マテリアルドラゴン×１、神禽王アレクトール×１

下級モンスター　ウェポン・サモナー×２、風の精霊ガルーダ×２、シルフィード×２、暴風小僧×２、シールド・ウイング×１、霧の谷のファルコン（ミスト・バレー）×２、エヴォルテクター・シュバリエ×１

魔法カード　死者蘇生×１、光の護封剣×１、サイクロン×１、ライトニング・ボルテックス×１、手札断殺×２、トレード・イン

×１、強欲な壺×１、貪欲な壺×１、魂の開放×１、封印の黄金櫃×１、アームズ・ホール×１、巨大化×１、団結の力×１、魔導師の力×１、黒いペンダント×１、ジャンク・アタック×１、レインボー・ヴェール×１、継承の印×１

罠カード　魔宮の賄賂×１、ディメンション・ウォール×１、サンダー・ブレイク×１、砂塵の大竜巻×１、ゴッドバード・アタック×１、ガード・ブロック×１

主人公第二期使用デッキ内容　デッキ枚数５０枚

上級モンスター　ガーディアン・エアトス×２

中級モンスター　ガスタの賢者　ウィンダール×２、ガスタの疾風　リーズ×２

下級モンスター　ガスタ・イグル×３、ガスタ・ガルド×３、ガスタ・スクイレル×２、ガスタの巫女　ウィンダ×３、ガスタの静寂　カーム×２、ガスタ・サンボルト×２、スターダスト・シャオロン×１、スターダスト・ファントム×１、フルール・シンクロン×１、栄光の天使×１、救世竜　セイヴァー・ドラゴン×１

魔法カード　ガスタの交信×２、精霊神器ーエクセリオンー×１、死者蘇生×１、団結の力×１、黒いペンダント×１、女神の聖剣ーエアトスー×１、貪欲な壺×１、強欲な壺×１、Ｄ・Ｄ・Ｒ×１、ワン・フォー・ワン×１、星屑のきらめき×１、ミラクル・シンク

ロ・フュージョン×１、サイクロン×１、アームズ・ホール×１

罠カード　ガスタへの祈り×２、スターライト・ロード×１、異次元からの帰還×１、フローラル・シールド×２、ガード・ブロック×１、魔宮の賄賂×１、激流葬×１

エクストラデッキ　枚数１２枚　スターダスト・ドラゴン×１、セイヴァー・スター・ドラゴン×１、煌翼の守護者－トゥインクル・エアトス－×１、フルール・ド・シュバリエ×１、ダイガスタ・ガルドス×２、ダイガスタ・イグルス×２、ダイガスタ・スフィアード×２、波動竜騎士－ドラゴエクィテス－×１、アルティメット・サイキッカー×１

サブデッキ　枚数１４枚　ガーディアン・エアトス／ブラスト×１、ブラスト・モード×１、ダブル・ショット×１、ブラスト・ブレイク×１、霊銃の咆哮×１、烈風の宝札×１、魔導士の力×１、魂の開放×１、ガスタ・スクイレル×１、ガスタ・サンボルト×１、ガスタの静寂　カーム×１、融合×２、ガーディアン・ユグドラシル×１

ヒロイン第一期使用デッキ　枚数５０枚

上級モンスター　椿姫ティタニアル×２、フェニキシアン・クラスター・アマリリス×２

中級モンスター　ローズ・テンタクルス×2、ギガプラント×2

下級モンスター　イービル・ソーン×3、ローンファイア・ブロッサム×2、ロードポイズン×2、ポタニカル・ライオ×2、ダンディライオン×1、クリッター×1、ガード・ヘッジ×2、フェニキシアン・シード×2、アイヴィ・ウォール×2、ポタニティ・ガール×2

魔法カード　増草剤×2、世界樹×2、スーペルヴィス×1、憎悪の棘×2、手札断殺×2、偽りの種×2、薔薇の刻印×1、死者蘇生×1、ハリケーン×1、生還の宝札×1、サイクロン×1、死者転生×1

罠カード　リビングデッドの呼び声×1、オーバー・デッド・ライン×1、アイヴィ・シャックル×1、棘の壁×2、砂塵の大竜巻×1

ヒロイン第二期使用デッキ　枚数５４枚

上級モンスター　椿姫ティタニアル×2、凛天使　クィーン・オブ・ローズ×1、フェニキシアン・クラスター・アマリリス×1

中級モンスター　ギガプラント×1

下級モンスター　ダンディライオン×1、ポタニカル・ライオ×

2、夜薔薇の騎士×1、グローアップ・バルブ×1、スポーア×1、桜花の王女×1、ロード・ポイズン×2、ローン・ファイアブロッサム×2、クリッター×1、ブルーローズ・ドラゴン×1、イービル・ソーン×3、ガード・ヘッジ×2

魔法カード　薔薇の刻印×1、憎悪の棘×1、死者蘇生×1、強欲な壺×1、手札断殺×1、生還の宝札×1、サイクロン×1、ライトニング・ボルテックス×1、百花繚乱－椿の舞－×1、桃源郷－百花繚乱－×1、偽りの種×2、増草剤×1、星屑のきらめき×1、ハリケーン×1、ワン・フォー・ワン×1、フレグランス・ストーム×2

罠カード、聖なるバリア－ミラーフォース－×1、茨の壁×2、リビングデットの呼び声×1、激流葬×1、百花繚乱－黒薔薇の舞－×1、百花繚乱－桜の舞－×1、威嚇する咆哮×1、オーバー・デッド・ライン×1、砂塵の大竜巻×1、ポリノシス×2、フローラル・シールド×1

エクストラデッキ　枚数4枚　椿女帝ティタニアル×1、ブラッククローズ・ドラゴン×1、スプレンディッド・ローズ×1、ヘル・ブランブル×1

サブデッキ　枚数12枚　椿姫ティタニアル／ブラスト×1、ブラスト・モード×1、ダブル・ショット×1、ブラスト・ブレイク×1、ガード・ブロック×1、融合×2、ガーディアン・ユグドラシル×1、異次元からの埋葬×2、ブラック・ホール×1、貪欲な壺×1

キャラ設定（後書き）

デッキの内容はこんな感じです、もっとこうしたほうが良いという意見があれば教えていただけるとありがたいです。
基本的にパワーアップするまではシンクロモンスターは出しませんが、意見があればシンクロ以外でのデッキ調整をしていきたいと思いますのでよろしくお願いします。

第三話　Ｂｅｆｏｒｅ　Ｓｔｏｒｙ（前書き）

今回はデュエル無しの蓮と祐騎の過去話が中心です。

それでは、第三話どうぞ！

第三話　Ｂｅｆｏｒｅ　Ｓｔｏｒｙ

～デュエルアカデミア購買～

現在、デュエルアカデミアの購買では授業が終わってドローパンやカードパックを購入している人がいる中、蓮はペットボトルのお茶を飲みながら祐騎を待っていた。

蓮ｓｉｄｅ

私は今、昨日デュエルした原作の遊戯王ＧＸではいなかったオシリスレッドの子、祐騎を待っている。

あぁ、言い忘れてたけど私はいわゆるトリッパーってやつなの。

元の世界じゃあオタク趣味の冴えないＯＬだったんだけど、いつのまにかこの世界にいて子供の体になって病院のベッドで目を覚ましたからかなり驚いた。

元々のこの体の持ち主は事故で植物状態だったらしくて、目を覚ましてからは検査とかされて、検査の間私は最初なんでこんなことになったとか、元の世界での私はどうなったとか、色々考えて情緒不安定になってたんだと思う、この世界の両親に自分は別の世界の人間の意識がこの体に乗り移ったって言ってしまった、それからしばらくして両親は私のことを避けるようになった。

両親も初めのころは私を本当の娘として見ようとしていたみたい

だけど、ちょっとした仕草や言葉使い、食べ物の好みとかが本当の娘とは違っていたから次第に私を避けるようになっていった、だけど私はこれから時間をかければ仲良くできると本気で思っていた。

そんな時ある事件が起きた、この体になって暫くして私は誘拐されてしまった、たぶん遊戯王の世界だからと油断してたんだと思う、もちろん最後は無事に助けられたけど警察の人から両親は犯人からの身代金の要請を断ったと言われた。

それで犯人が逆上して逮捕できたと警察の人は言っていたけど、私はその話を聞いたとき両親は私のことを嫌っていることを再確認して泣いてしまった、それから私は両親に好きになって貰おうと一生懸命がんばった、けど両親は私が頑張れば頑張るほど私から離れていき、そしてある日両親からこう言われてしまった”化け物”と。

そのときの私は、両親に褒められたい一心で大学レベルの問題を解いたり、大人に混じってデュエルをしたりしていた、もちろんこれだけだったら天才や鬼才のレベルで済むが、それ以外で私は原作知識からこれから起こることを両親の役に立とうとして教えて、それが実際に起こったときに両親は私から逃げていった。

それからは、私だけを日本に置いて両親は海外へ移住、毎月の生活費の振込みと最低限の手紙のやり取りしかしない関係、そうなって初めて両親が完全に私を否定していることに気づいた、それに気づいたとき私はこの世界で信じられるものは自分以外はいないと思うようになってしまった。

そして、デュエルアカデミアに特待生として中学から入学して一応は友人が出来たが、両親のことが響いてるのか信じきることが出来なかった、そんな時道端に落ちていた椿姫ティタニアルのカード

を拾ったらそれが精霊のカードだったことに驚いていろいろと喋ってしまった。

そして、その話を聞いてその精霊は私のことを信じると言ってくれた、そのときはその言葉を信じ切れなかったけど時間が経つごとに序々に信じられるようになって、それからはずっとその精霊、ティルと二人で生きてきた。

そして、遊戯王ＧＸの原作開始の時になったとき、原作キャラを見ておきたいと思って男子の試験を見に来たら、何故か十代の後にもう一人がやって来て、そのままデュエルを始めてしまった。

しかも、使っているカードが原作無印のアニメオリジナルストーリー、ドーマ編のラフェールが使っていたガーディアン・エアトスだし、しかもそのカードが精霊だったからさらに驚いた。

もしかしたら私と同じトリッパーかオリ主と呼ばれるやつかもしれない、もしそうならこれからの展開が変わってしまうとかもしれない。

そして、彼なら私のことを理解してくれるかもしれないと思って、とりあえず接触しようとしたけどなかなか接触できなかった。

まぁ、昨日の偽ラブレター事件でやっと接触できたから良かったけど、その時にいきなり綺麗だなんて言われて驚いたけど、まぁなんとか誤魔化せたと思う、うん。

蓮が昨日のことを思い出して顔を赤くしていると、隣で祐騎達を待っていたティルがそんな蓮を見てニヤニヤしながら話しかけた。

《顔赤くして、昨日の事でも思い出してるのかしらぁ～？》

「／／／ブッ！？な、なにを言ってるのよ！？」

《ふふっ、大きな声ださないの、皆見てるわよぉ？》

「／／／ッ～！？（こ、この、色欲植物がぁ（怒）！
はぁ、こうゆうところさえなければ最高のパートナーなんだけどな～。）」

蓮がティルの言葉に飲んでいたお茶を噴出して怒ると、周りに居た人たちが蓮のことを不思議そうな顔で見ており、蓮はそんな自分の状況に気づいて顔を赤くした。

《ふふっ、それよりも、あの子達が来たわよぉ？》

「え？」

そんなことをしていると、祐騎とエアトスがやってきた。

蓮ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

祐騎が購買へやって来ると、蓮は顔を赤くしてティルを睨んでいた。

「遅くなってすいません」

「／／／べ、別に良いわよ、そこまで待って無いし」

「ところで、顔が赤いですけど大丈夫ですか？」

祐騎がそういって蓮の頭に手を当てて熱を測ろうとすると、蓮は顔を赤くしてそんな祐騎からすぐに離れた。

「／／／だ、大丈夫、何でもないから！」

「？」

《ふふっ、はいはい、ここじゃ話出来ないし他の場所へ行きましょ～？》

「・・・あんたが仕切らないでよ」

蓮の行動に祐騎が疑問を感じていると、ティルがそんな二人を微笑ましく思いながらこの場所から移動しようと提案すると、いままでの行動から蓮はティルを注意した。

《あらあら、なら私はエアトスちゃんと一緒に新しい世界の扉を・・・》

《開きません！
それに、私にはマスターが付けて下さった、エールというちゃんとした名前があるんです！》

《そうなの？ならエールちゃん、今夜私と暗いお部屋で一晩一緒に・・・》

《だ～か～ら！あなたの趣味には付き合えませんって～！》

蓮に冷たくされたティルがエールに迫り、エールはそんなティルから逃げるようにカードに戻った。

「・・・とりあえず、ここから出ましょうか？」

「・・・ですね」

そんな二人のやり取りを見て、祐騎と蓮は呆れながらここから移動することにした。

～校舎近くの森～

二人は購買を出て人気の無い森へとやって来た。

「さてと、ここなら誰にも聞かれないでしょ。
それで、私に聞きたい事って？」

「いえ、精霊について聞きたいな、と」

「それなら、本人に聞けば良いじゃない」

祐騎がそう言うと、蓮は祐騎の腰にあるエールが入ったデッキケースを指差してそう言った。

「ええ、そうなんですけど他の人の話も聞いてみたいな、と」

「そう、なら遊城十代とは話したの？」

「はい、でもハネクリボーって話せないじゃないですか」

蓮は祐騎の言うことなら自分でなくても、同じく精霊の見えている十代に聞けばいいと思っていたが、祐騎から言われたことがそのとおりで納得した。

「・・・確に」

「だから、結局僕と十代君の二人でエールから精霊がどういった存在なのかとか、精霊の世界があるという話を聞くことになったんですよ」

「そう、でも私が知ってることも同じくらいね」

「そうなんですか。
それじゃあ、蓮さんが話たいことって何なんですか？」

祐騎がそう言うと、蓮は祐騎と視線が合うように少ししゃがんで祐騎の顔を真剣な表情で見つめた。

「・・・祐騎」

「はい」

「あなた、平行世界って信じる？」

「はい？
平行、世界ですか？精霊世界じゃなくて」

祐騎が頭を傾けて蓮に聞き直すと、蓮は頷いて話を続けた。

「ええ、そうよ、この世界が漫画やアニメなんかの二次元の世界として見られている世界があるって、信じられる？」

「・・・信じる、信じないの前にそれを確かめる方法が無いのでなんとも言えないですけど、今ここにデュエルモンスターの精霊がいて精霊世界なんてのがあるって言われたら、平行世界も有ると思いますけど」

祐騎は蓮の話を聞いて少し悩んでから、そう応えた。

「・・・なら、私がその平行世界の人間だったって言ったら」

「あ、それなら信じます」

「えっ？」

蓮は自分の言ったことに即答した祐騎に、一瞬呆然として信じられないものを見るような目を祐騎に向けた。

「だって、蓮さんって意味の無い嘘は言わないと思いますから」

「・・・なに、それ？
私と昨日始めて会ったのに、どうしてそんなことが言えるのっ！？」

蓮はいきなり祐騎の肩を掴んで祐騎の顔を睨みながら、そう言う蓮の目を祐騎はしっかりと見返した。

「じゃあ、嘘なんですか？」

「そ、それは・・・」

「僕、こう見えても人を見る目はあるんですよ？
まぁ、昨日会ったばかりの人間が言うのもなんですが、僕は蓮さんを信じてますから」

蓮は祐騎の自分を信じるという発言に、肩を震わせて祐騎の顔を見直した。

「・・・っ！？
・・・信じてるって、じゃあ私が今ここであなたのデッキを貸してと言ったら私に渡すの？」

「はい」

「・・・昨日会ったばかりで、カードを持ち逃げするかもしれないのに？」

「ええ、だって蓮さんはそんなことしないって信じてますから」

「じゃあ！私が、他人の本人しか知らない秘密を知っていてもそんなことが言えるの！？」

「はい、だって蓮さんが言ったじゃないですかこの世界がアニメになってる世界から来たって、それなら本人しか知らないことを知ってても不思議じゃないですから」

「・・・なによ、なんで、そんなことが、あんたに言えるのよ。両親ですら信じてくれなかったのに・・・」

蓮は自分の言うことに尽く肯定の意思を見せる祐騎を、信じられないといった表情で俯いて、祐騎の肩に手を乗せたままそう呟くと、祐騎は蓮の頭に手を乗せた。

「まぁ、僕が子供のころに両親が事故で死にまして」

「え?」

祐騎がいきなり自分の両親が死んでいることを話し出してたことに驚いて蓮は顔を上げた。

「そこは別にもういいんですよ?かなり昔ですし。両親が死んで僕は姉さんと二人で生活を始めたんです」

「・・・親戚とか、施設とかに引き取られなかったの?」

「ええ、施設にいけば姉弟離れ離れになってしまいますし、両親の残した財産もかなりありましたから生活事態は問題なく行えたんです」

「・・・親戚は?」

「・・・それが問題だったんですよ、両親の親つまり僕の祖父母はすでに亡くなっていましたし、母には兄弟はいませんでした」

「・・・お父さんのほうは?」

蓮が父親の親戚についてきくと、祐騎の目から光が消えて声のトーンも少し下がった。

「・・・まず、父の弟という方が僕たちを引き取ったんですけど、両親の残した財産の四割ぐらいを持って消えたんですよ」

「え？」

「それからも、何度か父の親戚という方が来たんですけど姉さんがお金を渡すとすぐに帰っていって二度と来ませんでした」

「そ、それって」

「ええ、両親の遺産目当てだったんですよ、そんな人たちをずっと見てたら嘘をつく人がどんな人かが判るようになったんですよ」

祐騎はそう言って、蓮の顔を嫌悪感を顕にした顔で見つめた。

「・・・そんなのどうやって、見分けるのよ」

蓮が祐騎の顔を見ると祐騎は苦笑しながら蓮の頭をなでながら答えた。

「・・・笑うんですよ」

「笑う？」

祐騎の言葉に蓮は訳がわからない顔をして、祐騎の顔を見た。

「ええ、他人に嘘をつく人はどんなに表情や声を悲しいものにし

ても目が笑ってるんですよ。
逆に、表情や声がどんなに明るく楽しそうにしていても目が笑っていない人は他人じゃなくて、自分に嘘をついてる人なんです」

「・・・じゃあ、私が嘘をついてないってどうして言えるのよ」

「蓮さんは昨日翔君をいじっていたときも目が笑ってませんでしたし、さっきの質問のときも寂しそうな目をしてましたから」

「・・・なによ、それ、なんでそんなことまでわかるのよ」

蓮は祐騎の肩を掴んでいる手にさらに力を入れ、祐騎はそんな蓮の頭をなで続けて話かけた。

「ご両親に信じてもらえなくて、悲しかったんですよね?」

「・・・うん」

「信じれる人が居なくて寂しかったんですよね?」

「・・・うん」

蓮は祐騎に頭を撫でられながら祐騎の服を掴んで泣くのを堪えながら、祐騎の言葉に答えていった。

「自分のことを心配してくれる人を疑う自分が嫌だったんですよね?」

「・・・なんで、そんなことまで分っちゃうのかなぁ?」

蓮が目に涙を溜めて祐騎を見ると、祐騎は蓮を真っ直ぐ見つめて微笑んだ。

「僕も同じでしたから」

「・・・同じ？」

「ええ、両親が死んでから周りよって来た大人たちの行動を見て人間不信になったときに、姉さんがこうやって宥めてくれたんです。だから、蓮さんも、もう無理しなくていいですから」

祐騎が昔を懐かしむような顔でそう言うと、蓮はそんな祐騎をじっと見つめた。

「・・・それじゃあ、本当に私のことを信じてくれるの？」

「ええ、もちろんです」

「・・・ありがとう。
それと、ちょっとだけ肩借してくれる？」

「ええ、僕の肩で良ければいくらでも」

「・・・ん、じゃあ、借りるね？」

そうして、蓮は祐騎の肩に顔を埋めて静かに泣き出し、祐騎はそんな彼女を抱きしめながら頭をなで続けた。

～三十分後～

蓮は泣いたことで目を赤く腫らし、祐騎の肩には蓮の涙で染みが出来ていた。

「／／／肩、借してくれてありがとね」

「いえ、僕で良ければいつでも力になりますから」

「／／／でも、かなり恥ずかしいんだけど」

「僕はかまいませんよ？それで蓮さんの気持ちが軽くなるなら」

「／／／ありがと」

蓮はそんな祐騎の言葉に心から感謝して礼を言った。

「それよりも、どうしてさっきの話を僕にしたんですか？正直僕に話す理由がないと思うんですけど」

「それは、私が知っているこの世界にあなたが居なかったから」

「へ？」

祐騎が蓮の言ったことを理解出来ないでいると、蓮はさらに話を続けた。

「本当は居たかもしれないけど、私が知る限りこの世界に甲斐祐騎という人間は居なかった」

「・・・それじゃあ僕はなんなんですか？」

「・・・たぶん私というイレギュラーのせいで世界が修正を掛けた結果生まれた別のイレギュラーなんだと思う」

「だから、僕にさっきの話をしたんですか」

「・・・ええ。

自分でも意味不明なことを言ってる自覚はあるんだけど、本当に信じてくれるの？」

蓮が不安そうな表情で祐騎に聞くと、祐騎は笑顔で蓮の方を見て頷いた。

「もちろんです。

それに、こんな話を聞いたらなおさら放っておけませんから。

改めて、これからよろしくお願いしますね？蓮さん」

「ええ！こちらこそよろしくね？祐騎」

祐騎がそう言って手を差し出すと、蓮は輝くような笑顔でその手を握った。

おまけ

蓮が祐騎の肩で泣いている時の精霊たち

祐騎と蓮から少し離れた樹の影からティルとエールは二人の様子を見ていた。

《・・・よかったわね蓮、自分のことを理解してくれる人に会えて》

《・・・蓮さんの前と随分と性格が違いますね？》

エールがそう言うと、蓮達のことを見ていたティルは苦笑してエールの方を見た。

《ふふっ、あれくらいやらないとあの子笑ってくれないんだもの。偽者の笑顔でも、暗い顔よりは随分とましでしょ？》

そう言うティルの顔は今までに無いほど慈愛に満ちた笑顔になっていた。

《・・・その顔を蓮さんにも見せてあげたいですよ》

《まだ、だ～め、蓮が過去を完全に乗り越えられたときに見せるって決めてるの。
でも、これはその第一歩になるからあなたのマスターには本当に感謝してるわ、本当にありがとう》

ティルはそう言って頭を下げ、そんなティルにエールはすぐに頭を上げるように言った。

《いえ、私は何もしてませんから。
でも、本当に祐騎さんが私のマスターで良かったです》

《さてと、それじゃ私達は暫くカードに戻ってましょうかね？
明日からいつもどおりの私でいるために、ね》

ティルがそう言っていつもの顔に戻り、エールはそんなティルを見て苦笑した。

《クスッ、ほどほどにしてくださいね？ティルさん》

《ふふっ、善処するわ》

そうして、二人の精霊は自分たちのカードに戻って行き祐騎と蓮が落ち着くまでカードの中から二人のことを見守っていた。

第三話　Ｂｅｆｏｒｅ　Ｓｔｏｒｙ（後書き）

こんな感じになりました、蓮の現在の状況は５Ｄ，ｓのフォーチュンカップまでの龍可やアキと同じ状況です。

次回は、月一テストになります。

それでは、ご指摘やご感想がありましたら遠慮なくおねがいします。

第四話　月一テスト、祐騎編（前書き）

今回は、月一試験の話です。
正直、デュエルの内容がこれで良いのかどうかが不安です。

第四話　月一テスト、祐騎編

～教室～

森の中での一件の翌日、蓮と祐騎は二人でデッキの調整をしていた。

「祐騎、デュアルモンスターを入れてるのにスーペルヴィスは入れないの？」

「はい、このカード以外に通常モンスターもデュアルモンスターも入ってないですから、他の装備魔法を入れた方が良いと思いまして」

「そっか、まぁレベル４なら召喚もしやすいから問題は無い、か」

「はい、それとあまり墓地にモンスターを残したくないんで」

祐騎がそう言うと、蓮は納得といった表情をした。

「あぁ、エアトスの効果の為にね」

「はい、まぁ効果が使えなくても構わないっていえば構わないんですけど」

「出来れば使って行きたい、でしょ？」

「はい」

蓮はそんな祐騎に自分の持っているカードを見せて、お互いに相談を始めた。

「なら、こっちのカードは・・・」

「あ、それだと、このカードもですね。
あと、このカードは・・・」

二人は授業が始まるまで、お互いのデッキについて話合っていた。

「・・・なんかあの二人急に仲良くなったッスね？」

「そうか？会った時から仲良かっただろ？」

「・・・いや、確に息ピッタリだったッスけど、なんかさらに仲良くなったっていうか」

「そうね、あんなに楽しそうな蓮は始めて見るわよ」

祐騎と蓮から少し離れた場所で十代と翔が二人のことを見ていると、そこに明日香がやって来て十代の隣に座った。

「よぉ、明日香」

「あの、明日香さん、楽しそうな紅龍さんを見るのが始めてってどうゆうことッスか？」

翔が明日香に質問すると、明日香は少し顔を曇らせて翔の質問に

答えた。

「蓮とは中学のころからの知り合いなんだけど、いつも人との間に壁を作ってたのよ。

それに加えてデュエルの実力もトップクラスだったから、その行動と強さで中学の頃から女帝なんて呼ばれて、さらに独りになっていった。

そんな蓮を放って置けなかったから私から近付いてあの子の壁を無くそうとしたんだけど」

そう言って、祐騎と楽しそうに話している蓮を見た。

「・・・あの子、甲斐君に先を越されたみたいね。

ねぇ、甲斐君ってどんな人なの？」

「ん？

アイツは良い奴だぜ！デュエルも強えしな！」

明日香が祐騎について十代に聞くと、十代はとても楽しそうに祐騎についての自分の感想を伝えた。

「そう、それはそうと、もうすぐ月一テストだけどあなた達大丈夫なの？」

「・・・うぅ、自信無いッス」

「まぁ、実技さえ出来てればなんとかなるって！」

明日香の言葉に翔は落ち込み、十代は笑って答え、そんな二人を見て明日香は呆れてしまった。

「・・・そ、そう？」

そうこうしているうちに授業が始まり、その日は何事も無く過ぎていった。

～月一テスト当日～

「うわ～っ！間に合わねぇ！」

「ふわぁ～っ、眠い～」

レッド寮から十代が慌てて走りだし、祐騎も十代に引っ張られる形で走って校舎に向かって走っていき、エールとハネクリボーも焦って二人の後を追っていった。

《ほら！マスター早く走って下さい、試験が終わってしまいますよ！》

《クリクリ～！？》

「だ～っ！間に合え～！」

月一テストの当日、十代と祐騎は寝過ごしてしまいそれからの流

れは原作と変わらず十代と祐騎はトメさんの手伝いをしてから、教室にギリギリで到着した。

「う～、ね～む～た～い～よ～」

「かなりダレてるわね、祐騎。
それよりも、テストはどうだったの？」

筆記試験が終わって蓮が祐騎の所に行くと、祐騎は眠たそうに机に突っ伏していた。

「ん～？とりあえず解答欄全部埋めて、後寝てた～」

「ハァ～、全く相変わらずマイペースねぇ」

蓮が祐騎の発言に呆れていると、明日香がやってきて蓮達に話しかけた。

「あら、あなた達はカードを買いに行かなかったの？」

「ええ、今更新しいカードを手に入れてもデッキが崩れるだけだし（まぁ、買い占められてるのは判ってるしね）」

「・・・ＺＺＺ」

明日香からの質問に蓮が応えていると、祐騎はそのまま眠ってしまった。

「もう、次は実技試験だって解ってるのかしら？」

そう言って、蓮は祐騎の寝顔を見て苦笑した。

そして時間は進み、実技試験は原作通りの流れで進み、十代と万丈目とのデュエルも原作と変わらずに進み、次は祐騎の番になりデュエル場に行くとそこにはオベリスクブルーの2年生が祐騎を待っていた。

「なんで僕の相手がオベリスクブルーのしかも二年生の方なんですか？」

「ふん！俺のようなエリートが貴様のようなドロップアウトとデュエルする必要など本来なら微塵も無いんだが、さきほどのデュエルでオベリスクブルーのエリートがオシリスレッドに劣るなどと勘違いなどされては敵わんからな、特別に貴様と相手をしてやろうというわけだ」

「はぁ、それなら別に僕じゃなくても」

祐騎が自分とオベリスクブルーの生徒とデュエルする理由が解らず相手に聞くと、その2年生は祐騎のことを見下しながら答えた。

「貴様はマグレとはいえ、このデュエルアカデミアの女帝と呼ばれる、あの紅龍蓮とデュエルして勝ったらしいではないか」

「ええ、一応は」

「このエリートの俺が相手をするのだから少しは強い相手でなく

ては張り合いが無い、まぁ勝ったといっても何か卑怯な手でも使ったんだろうがな？
はーはっはっはっは！！」

祐騎が蓮に勝ったことを肯定すると、２年生はそんな祐騎を馬鹿にして大笑いを始めた。

「・・・ぶっ潰す」

「蓮！？落ち着いて、お願いだから！」

オベリスクブルーの２年生と祐騎の話を聞いていた蓮は、ハイライトの消えた眼をして手にどこからか持ち出した木刀を持って２年生を襲いに行こうとするのを隣に座っていた明日香がとめた。

「もしくは、女帝などと呼ばれていても、所詮はその程度の実力しか無いということか？
まぁ、どちらにせよ貴様ごときに「・・・おい」ん？」

「その口を閉じてさっさとデュエルしろよ、このクズ野郎」

「・・・ゆ、祐騎？」

２年生が蓮のことを悪く言い出すと、祐騎はいつも一纏めにしている髪を解き、解けた髪が左目を隠すように覆い隠し、現れている右目で２年生の方を睨みながらそう言った。

「なっ！？
貴様！それが上級生に対する態度なのか！」

「いいから、さっさとデュエルディスクを構えろ、俺は今気が立ってるんだ」

「クッ！」

「「デュエル！」」

2年生が祐騎の発言に怒ると、祐騎はそんな2年生のことを気にせずにデュエルの開始を急かし、2年生の先攻でデュエルが始まった。

祐騎　ＬＰ４０００

2年生　ＬＰ４０００

「俺の先行！ドロー！

俺はリボーン・ゾンビ（攻／守１０００／１６００）を守備表示で召還！

さらに、永続魔法、生還の宝札を発動！

カードを二枚伏せてターンエンド！」

2年生　ＬＰ４０００、手札3枚

2年生は自分のフィールドにゾンビのモンスターを守備表示で召喚し、さらにカードを伏せてターンを終えた。

「・・・俺のターン、ドロー

手札からガーディアン・エアトスを攻撃表示で特殊召喚、さらに速攻魔法、手札断殺（てふだだんさつ）を発動、お互いのプレーヤーは手札を二枚墓地に捨ててデッキから二枚ドローする」

「くくっ、ありがとうよ、おかげでいいカードがきたぜ！」

祐騎は2年生の事を完全に無視してデュエルを進め、エールを召喚してから手札交換カードで手札の暴風小僧と魔法カードを一枚ずつ墓地に送ってカードを二枚ドローした。

「・・・さらに、手札断殺で墓地に送った暴風小僧（攻／守１５００／１６００）をゲームから除外してシルフィード（攻／守１７００／７００）を特殊召喚」

「ふん！それがどうした！（俺の場の伏せカードはデーモンとの駆け引きと魔法筒（マジックシリンダー）の二枚、墓地には自身を墓地から除外することで墓地のアンデット族モンスターを特殊召喚できる馬頭鬼（めずき）（攻／守１７００／８００）がいる。

そして俺の手札にはレベル８で攻撃力２８００の闇より出でし絶望と魔法カード、死者蘇生とアドバンスドローがある、次のターンで馬頭鬼か死者蘇生でモンスターを呼び、闇より出でし絶望を召喚してアドバンスドローで墓地に送ってデーモンとの駆け引きでバーサーク・デッド・ドラゴン（攻／守３５００／０）を呼び、全体攻撃をすれば俺の勝ちは揺ぎ無い！）」

祐騎が墓地の暴風小僧を除外して、顔半分を覆面で隠し両手に鎌のような武器を持ったモンスターを召喚し、2年生はそんな祐騎を相変わらず見下していた。

「・・・さっき良いカードが手札に来たと言っていたな」

「ああ、次のターンで終わらせてやる」

「そうか、なら、残念だったな」

祐騎は2年生の発言を聞くと口の端を吊り上げただけの笑みを浮かべて、2年生の方を睨みながらデュエルを続けた。

「なに？」

「お前に次のターンは無い！
俺はさらにシルフィードを生贄にして、疾風鳥人ジョーを召喚！
ジョーの効果でフィールド上の魔法、罠カードを全て手札に戻す！
リバース・ウィンド！」

「なんだとっ！？」

2年生は自分の場のカードが手札に戻ったことに驚き、祐騎はそんな2年生を無視してさらにデュエルを続けた。

「そして、装備魔法カード、黒いペンダントをエアトスに装備して攻撃力５００ポイントアップ！
そして、疾風鳥人ジョーに装備魔法、ジャンク・アタックを装備！」

エアトス（攻２５００→３０００）

祐騎がカードをデュエルディスクにセットすると、エールの首に黒いペンダントが架けられ、ジョーの周りを鉄くずがジョーの周囲を回りだした。

「さらに、エアトスの効果で黒いペンダントを墓地に送りお前の墓地のモンスターカードを除外してエアトスの攻撃力をアップさせる！
聖剣のソウル！」
エールの首に架けられたペンダントが消滅すると、エールの手に剣が現れ、その剣で2年生の墓地にいた馬面のモンスターを切り裂き攻撃力をアップさせた。
《マスターと同じで私も怒ってるんです！墓地に眠る魂よ我が力となれ！》
「しまった！墓地の馬頭鬼が！？」
エアトス（攻３０００→２５００→３０００）
「そして、黒いペンダントがフィールドから墓地に送られたとき、相手プレーヤーに５００ポイントのダメージを与える！」
墓地のモンスターがいなくなったことに2年生が驚いていると、祐騎の墓地から黒いオーラが2年生を包み、そのオーラによって2年生のライフがダメージを受けた。
「くっ！」
2年　ＬＰ４０００→３５００
「バトル！疾風鳥人ジョーでリボーン・ゾンビを攻撃！

ソニック・ダイブ！」

「クッ！俺のモンスターが・・・（だが、エアトスの攻撃力は３０００、俺のライフを削りきることはできない）「この瞬間！ジャンク・アタックの効果が発動！」なに！？」

「ジャンク・アタックを装備したモンスターが相手モンスターを戦闘で破壊したとき、破壊したモンスターの攻撃力の半分のダメージを与える！」

祐騎の場のモンスターが２年生の場のモンスターを撃破すると、その破壊されたモンスターのの破片ごと周囲の鉄くずを２年生にぶつけてライフを削った。

２年生ＬＰ３５００→３０００

「あ、あ、あ・・・」

「ガーディアン・エアトスでとどめだ！
フォビドゥン・ゴスペル！」

自分のライフとエールの攻撃力が並んだことで、２年生は初めて祐騎の表情を伺うと祐騎は露になっている右目で２年生を睨みつけ、その眼光に２年生は逃げ腰になり祐騎はそんな２年生にとどめを刺した。

「うわあああああっ！！」

「・・・次、蓮さんのことを悪く言えばただでは済まさん、覚えておけ」

そういって、二年生を睨みつけてから祐騎はデュエル会場から観客席へと向かっていった。

「・・・な、なんか、いつもの祐騎君と違ってたッスね」

「あ、ああ、俺これからは祐騎のこと怒らせないようにするよ」

「僕もそうするッス」

観客席でデュエルを見ていた十代と翔がさっきの祐騎について話していると、デュエルを終えた祐騎がやってきた。

「・・・」

「祐騎」

蓮はまだ少し機嫌の悪そうな祐騎に声を掛けると、祐騎が蓮の方を向くと、髪は解けたままだったが目はいつもと同じに戻っていた。

「・・・はい、何ですか?」

「あの自称エリート（笑）のことは気にしないでいいわよ」

「いえ、僕のことは良いんですよマグレっていえばそうですし、僕が許せなかったのは蓮さんのことをあんなふうに言ったことだけですから」

蓮が祐騎を気遣うと、祐騎は笑顔で蓮にそう答えた。

「／／／そう、ありがとう。
あ、後ろ向いてくれる？髪纏めてあげるから」

「あ、はい、すみません」

そういうと、祐騎は蓮に背中を向けて蓮は祐騎の髪をいつものように一纏めにしだした。

「あなた達、もしかして付き合ってるの？」

「「？」」

「いや、そんな不思議そうな顔されても・・・」

祐騎と蓮は明日香に言われたことが理解できずに首を傾げると、明日香はそんな二人に対して呆れたような声を出した。

「いえ、僕と蓮さんはただの友達ですよ？」

「そうね、何を言ってるの明日香？」

「いえ、とてもそうは見えないんだけれど」

二人の言葉に明日香は心からの本音を口に出した。

「知らぬは当人ばかりということか」

「あ、三沢君いたんだ」

「ああ、いたさ！ずっと、そばでデュエルを見ていただろう！？」

そして、そんな二人のことを三沢が評価していると、翔が今気づいたという表情で三沢に言うと、三沢はそれに反論したが、祐騎と蓮はそんな三沢を無視して話を続けた。

「それはそうと、次は蓮さんの番でしたよね？」

「ええ、さっさと終わらせてくるわ」

「俺を無視するなー！」

無視された三沢が二人に食って掛かると、二人はそんな三沢にめんどくさそうな顔で応えた。

「うるさいわね、あんたは空気なんだから少し黙ってて」

「そうだよ、君はそんな感じだから影が薄くなるんだよ？」

「・・・ＯＴＬ」

「・・・いつもの二人ッス」

「・・・ああ、いつもの二人だな」

「・・・蓮のことが変ってきてくれてるのは良いんだけど、なんだか複雑ね」

祐騎と蓮がいつものように言葉だけで三沢を凹ませているのを見て、三人は微妙な視線を二人に送った。

「これで、良しっと！それじゃ、ちょっといって来るわね」

「はい、頑張ってください」

蓮は祐騎の髪を纏め終えるとデュエル場へと向かっていった。

第四話　月一テスト、祐騎編（後書き）

はい、今回ブラック祐騎を出してみました。
次回は、蓮のデュエルです。

ちなみに、今の二人はお互いに大切な友人という感じで恋愛感情はありません。
それでは、また次回。

第五話　月一テスト、蓮編（前書き）

はい、今回は月一試験の蓮編です。
しかし、対戦相手のデッキやデュエル内容がこれでいいのか判りませんがよろしくお願いします。
それでは、第五話始まります。

第五話　月一テスト、蓮編

～デュエル場～

蓮は祐騎達と別れて、先ほど祐騎がデュエルしていた場所にやってきた。

「さて、私の試験相手は誰なのかしら？」

「ふふっ、君の相手はこの僕さ！」

「・・・」

蓮が声のした方を見ると、意味も無く格好付けながらオベリスクブルー男子の3年生がやってきて蓮に話しかけてきた。

「君のような美しい女性の相手が出来て光栄だよ。
まぁ、僕としては女性とデュエルするのは気が引けるけど、先生の指示だからしょうがないね。
お詫びとして、このデュエルが終わった後このエリートの僕がデートしてあげようじゃないか」

ブルー3年生がそう言いながら格好を付け、蓮はそんな3年をまるで石やゴミを見るような目で見ていた。

「なんでかしらね？」

「？」

「祐騎にも同じ様に綺麗だなんて言われたけど、あんたに言われると吐き気がするのよね」

「な！？僕があんなチビに劣るとでも言うのか！？」

蓮が祐騎と３年生のことを比べると、３年生は心外だという感じで蓮に聞きなおし、蓮はそんな３年生の言葉に心の底から湧き出す純粋な怒りを感じた。

「ええ、私からすればあんたなんて祐騎と比べたらゴミ以下の価値すら無いわよ」

「クッ！言わせておけば、ならばこのデュエルで僕が勝ったら僕と付き合って貰おうか！」

「良いわよ、私が負けたらあんたの彼女にでもなんにでも好きにしなさい」

３年生の言葉に、蓮は心底呆れ果てた顔で答えた。

「その言葉忘れないで貰おうか！」

「ええ、もちろんよ」

「「デュエル！」」

蓮　ＬＰ４０００

３年　ＬＰ４０００

「レディーファーストだ、先攻は君に譲ろう」

「そう、なら遠慮なく、私のターン！ドロー！
私は手札から永続魔法、世界樹（せかいじゅ）と生還の宝札を発動！さらにロードポイズン（攻／守１５００／１０００）を守備表示で召喚、さらに手札から速攻魔法、偽りの種を発動して手札からイービル・ソーンを特殊召喚！」

「そしてイービル・ソーンの効果を発動して相手プレイヤーに３００ポイントのダメージを与えデッキから2体のイービル・ソーンを攻撃表示で特殊召喚するわ」

３年生は余裕の表情で蓮に先攻を譲り、蓮はそんな3年生のことを特に気にすることも無く自分のターンを始め、蓮はまずフィールドに2枚の魔法カードを発動させて自分の場にモンスターを召喚してさらに、魔法カードを使って召喚したイービル・ソーンの効果を使って3年生にダメージを与えた。

３年　ＬＰ４０００→３７００

「くぅ！まさか、先攻1ターン目からダメージを受けることになるなんてね」

「私はこれでターンを終了するわ」

蓮　ＬＰ４０００、手札１枚

蓮は3年生の言葉に答えずにそのままターンを終了した。

「僕のターン！ドロー！
僕は手札から魔法カード、テラフォーミングを発動！
テラフォーミングの効果によりデッキからフィールド魔法、スパイダーウェブを手札に加えて、そのままスパイダーウェブを発動！」

3年生がデッキからサーチしたフィールド魔法を発動させると、二人の足元の蜘蛛の巣が現れた。

「スパイダーウェブは攻撃したモンスターをそのコントローラーの次のエンドフェイズまで守備表示にするフィールド魔法だ！
僕はさらにモンスターとリバースカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

3年　LP3700、手札3枚

3年生はフィールドにカードを2枚セットしてターンを終了した。

「私のターン！ドロー！
私はフィールドのイービル・ソーン2体を生贄にして手札からフェニキシアン・クラスター・アマリリス（攻／守2200／0）を攻撃表示で召喚！」

蓮のフィールドに針のように細い花びらをした植物の様なモンスターが現れた。

「バトル！フェニキシアン・クラスター・アマリリスでセットモンスターを攻撃！
フレイム・ペタル！」

「セットモンスターは素早いモモンガ（攻／守１０００／１００）だ！
効果でライフを１０００ポイント回復して、さらにデッキから二体の素早いモモンガを裏守備表示で召還する！」

３年　ＬＰ３７００→４７００

蓮の場のフェニキシアン・クラスター・アマリリスが３年生の場のセットモンスターを攻撃すると、カードが反転して素早いモモンガが攻撃を受けて破壊され、破壊されたカードの欠片が３年生の体を包んでライフを回復させ、さらにデッキからカードを２枚場に伏せた。

「そして、攻撃を行った君のモンスターは守備表示になる！」

「残念だけど、その前にフェニキシアン・クラスター・アマリリスの効果が発動！
フェニキシアン・クラスター・アマリリスは攻撃を行った場合ダメージステップ終了時に、自壊して相手プレーヤーに８００ポイントのダメージを与える！
スキャッター・フレイム！」

「何！？ぐぅ！」

３年生が余裕の表情でフィールド魔法の効果を蓮に告げるが、蓮はそんな３年生の発言をすぐに否定すると、蓮の場のフェニキシアン・クラスター・アマリリスが爆発し、ブルー３年生に襲い掛かった。

３年　ＬＰ４７００→３９００

「そして、フィールド上の植物族モンスターが破壊されたことで私の場の永続魔法、世界樹にフラワーカウンターを１つ乗せる」

世界樹　カウンター×１

「私はこれでターンを終了する。
そして、私のターンのエンドフェイズ時に墓地の植物族モンスターを１体除外することで墓地のフェニキシアン・クラスター・アマリリスを表側守備表示で特殊召喚できる！」

「私は、イービル・ソーンを除外してフェニキシアン・クラスター・アマリリスを特殊召喚！そして私の墓地からモンスターが特殊召喚されたことにより生還の宝札でデッキからカードをドロー！」

蓮　ＬＰ４０００、手札２枚

蓮のフェニキシアン・クラスター・アマリリスが自身の効果で破壊されると、蓮のフィールドに発動されている世界樹のカードにフラワーカウンターが１つ乗り、さらに蓮は自分の墓地からイービル・ソーン
を除外して破壊されたフェニキシアン・クラスター・アマリリスを特殊召喚してターンを終了した。

「僕のターン！ドロー！
僕は場のモンスター１体を生贄にして絶対防御将軍（攻／守１５５０／２５００）を召喚！
絶対防御将軍は召喚に成功したとき守備表示になる、そして絶対防御将軍は守備表示のまま攻撃することができる！」

「ふ～ん」

３年生が巨大な盾を背負ったモンスターを召喚して得意な顔をすると、蓮はそんな３年生のことをどうでも良さそうな顔で見た。

「クッ！バトル！
絶対防御将軍でフェニキシアン・クラスター・アマリリスを攻撃！
ディフェンディング・アタック！」

「フィールド上の植物族モンスターが破壊されたことで世界樹にカウンターを１つ乗せる。
さらに、フェニキシアン・クラスター・アマリリスが破壊されたことで相手プレーヤーに８００ポイントのダメージを与える！
スキャッター・フレイム！」

世界樹　カウンター×２

「グワッ！」

そんな蓮の態度に腹を立てた３年生は、自分の場の絶対防御将軍で蓮の場のフェニキシアン・クラスター・アマリリスを攻撃して破壊すると、フェニキシアン・クラスター・アマリリスは爆発してブルー３年生にその破片をぶつけた。

３年　ＬＰ３９００→３１００

「モンスターが攻撃したことでスパイダーウェブの効果が発動するが、絶対防御将軍は元々守備表示のため意味をなさない。

そして、僕は速攻魔法、ご隠居の猛毒薬でライフを１２００ポイント回復してターンエンド！」

ＬＰ３１００→４３００、手札２枚

「私のターン！ドロー！

私は場の世界樹からカウンターを２つ取り除いて効果を発動！カウンターを２つ取り除いて発動するときフィールド上のカードを一枚破壊する！

私はあんたの場のセットモンスター、素早いモモンガを破壊！」

「くっ！これじゃ効果が使えない」

蓮は自分のフィールドの世界樹からカウンターを２つ取り除いて効果を発動して、３年生のセットモンスターを破壊すると３年生は悔しそうな顔をした。

「さらに、私は手札から速攻魔法、手札断殺を発動！お互いのプレーヤーは手札を２枚捨ててデッキから新たに２枚ドローする！」

「そして、私は場のロードポイズンを生贄にしてデュアルモンスター、ギガプラント（攻／守２４００／１２００）を攻撃表示で召喚して装備魔法、スーペルヴィスを装備！

装備魔法、スーペルヴィスの効果でギガプラントはデュアルした状態になる。そして、ギガプラントの効果を発動！

さらに、このカードがデュアル状態のとき自分の墓地の植物族モンスター１体を特殊召喚できる。私は墓地のロードポイズンを守備表示で蘇生召喚！」

「さらに、生還の宝札の効果でカードをドローして、ドローしたカードを場に伏せてターンエンド！
そして、エンドフェイズに墓地の2枚目のイービル・ソーンを除外してフェニキシアン・クラスター・アマリリスを守備表示で蘇生召喚して、生還の宝札の効果でもう1枚ドロー」

蓮　ＬＰ４０００、手札1枚

蓮はそんな3年生のことを気にせずに連続でカードを発動して、自分の墓地からモンスターを2体召喚してデッキからカードをドローしてフィールド上に合計3体のモンスターが現れた。

「クソッ！僕のターン！ドロー！
手札から魔法カード、ライトニング・ボルテックスを発動！
手札を1枚捨てて、相手の場の表側表示モンスターを全て破壊する！」

蓮のフィールドに雷が落ち、蓮のフィールドのモンスターを全て破壊した。

「クッ！フィールド上の植物族モンスターが破壊されたことにより世界樹にカウンターを1つのせる。
さらに、フェニキシアン・クラスター・アマリリスが破壊されたことにより相手プレーヤーに８００ポイントのダメージを与える！
スキャッター・フレイム！」

世界樹　カウンター×1

「グワッ！」

３年　ＬＰ４３００→３５００

３年生が使った魔法カードの効果で、蓮の場のモンスターが全て破壊されたが３年生も効果ダメージを負った。

「そして、装備していたモンスターが破壊されたことで墓地に送られたスーペルヴィスの効果を発動！
スーペルヴィスはフィールドから墓地に送られたとき、墓地に存在する通常モンスター１体を特殊召還するカード」

「効果によりギガプラントを蘇生召喚！さらに生還の宝札でカードドロー！」

「なんだと！？クッ！魔法カード死者蘇生で僕の墓地から千年の盾（攻／守０／３０００）を守備表示で蘇生召喚してターンエンド！」

３年　ＬＰ３５００、０枚

３年生は蓮の場のモンスターを一掃したと思っていたところで、蓮の場に再びモンスターが復活したことに驚き、自分の墓地から巨大な盾に目が付いたモンスターを召喚した。

「私のターン！ドロー！
私は手札からローンファイア・ブロッサムを召喚、さらにローンファイア・ブロッサムの効果により自身を生贄にしてデッキから植物族モンスターを１体特殊召喚する！
私はデッキから椿姫ティタニアルを攻撃表示で召喚！」

《は～い、ようやく出番ってわけね？》

「ええ、さらに装備魔法、憎悪の棘をティタニアルに装備して絶対防御将軍を攻撃！
ヘイト・カメリア・ウィップ！」

椿姫ティタニアル（攻２８００→３４００）

蓮は召喚したローンファイア・ブロッサムの効果で、デッキからティルのカードを召喚して装備魔法を装備させて攻撃を宣言した。

《そ～れ！女王様とお呼び～！》

「・・・（うう、なんで私の精霊はこんな性格なのよ）憎悪の棘の効果！
このカードの効果により装備したモンスターは貫通能力を得て、戦闘を行った相手モンスターは戦闘では破壊されず、バトルフェイズ終了時に攻撃したモンスターの攻撃力と守備力を６００ポイントダウンさせる」

「リバースカードオープン！ガードブロック！
このカードの効果により、戦闘ダメージを０にしてデッキからカードを１枚ドロー！」

「そして、スパイダーウェブの効果で攻撃を行ったモンスターは守備表示となる！」

絶対防御将軍（攻／守１５５０→９５０／２５００→１９００）

蓮はティルの行動に内心呆れながら絶対防御将軍に攻撃を指示し、

ティルの攻撃が絶対防御将軍を通り抜けて3年生に届く前に3年生が発動させたカードによって攻撃が防がれ、ティルはフィールド魔法の効果で守備表示に変更された。

「くっ！わたしは、これでターンエンド。
そして、エンドフェイズに墓地の3枚目のイービル・ソーンを除外してフェニキシアン・クラスター・アマリリスを守備表示で特殊召喚して、生還の宝札で1枚ドロー！」

蓮　ＬＰ４０００、手札1枚

「僕のターン、ドロー
クソッ！僕はこのまま、ターンエンド」

３年　ＬＰ３５００、手札1枚

蓮がターンを終了して3年生のターンになるが、3年生はなにもせずにターンを終了した。

「私のターン！ドロー！
私はギガプラントをデュアルして、フェニキシアン・クラスター・アマリリスを攻撃表示に変更」

「フェニキシアン・クラスター・アマリリスで絶対防御将軍を攻撃！
フレイム・ペタル！
そして、フェニキシアン・クラスター・アマリリスは自身の効果で破壊、そして効果により８００ポイントのダメージを与える！」

「グッ！」

蓮の場のフェニキシアン・クラスター・アマリリスが絶対防御将軍を攻撃するとお互いに破壊され、３年生にダメージを与えた。

３年　ＬＰ３５００→２７００

「そして、フェニキシアン・クラスター・アマリリスが破壊されたことで世界樹にカウンターを１つ乗せ、フェニキシアン・クラスター・アマリリスの効果で墓地のローンファイア・ブロッサムを除外して守備表示で蘇生召喚、さらに生還の宝札の効果でカードをドローし、ターンエンド！」

世界樹　カウンター×２

蓮　ＬＰ４０００、手札３枚

蓮がターンを終えても蓮のフィールド上のモンスターの数は変わらず、３年生はその状況に焦りだした。

「僕のターン！ドロー！

クッ！僕は巨大ネズミ（攻／守１４００／１４５０）を守備表示で召喚してターンエンド」

３年　ＬＰ２７００、手札１枚

３年生はドローしたネズミ型のモンスターを守備表示で召喚してだけでターンを終了した。

「私のターン！ドロー！
私は手札から速攻魔法、偽りの種を発動！手札からアイヴィウォール（攻／守３００／１２００）を召喚して、そのままアイヴィウォールを生贄にしてローズ・テンタクルス（攻／守２２００／１２００）を召喚！」

蓮は魔法カードの効果で植物のツタで出来た壁のようなモンスターを生贄にして、イカの様な姿をした植物型モンスターを召喚した。

「そして、世界樹からカウンターを１つ取り除いてローズテンタクルスの攻撃力を４００ポイントアップして椿姫ティタニアルを攻撃表示に変更、さらにギガプラントの効果で墓地からロードポイズンを攻撃表示で特殊召喚！
そして、生還の宝札で１枚ドロー！」

「さらに、リバースカードオープン！罠カード、アイヴィシャックルを発動！このカードの効果によって私のターンのみ相手の場のモンスターは全て植物族になる」

ローズ・テンタクルス（攻２２００→２６００）

蓮が場の罠を発動させると、３年生の場のモンスターに植物のツタが絡まりモンスターの種族が変わったが、３年生はそのことを気にせずにデュエルを続けようとした。

「ふ、ふんっ！種族が変わった所で何の意味があるというんだ！」

「ローズ・テンタクルスはバトルフェイズ開始時に相手フィールド上に存在している植物族モンスターの数だけ追加攻撃が可能！
そして、このカードが植物族モンスターを戦闘で破壊したとき相

手プレーヤーに３００ポイントのダメージを与える！」

「なんだと！？」

３年生は蓮が言ったローズ・テンタクルスの効果に驚いたが、蓮はそんな３年生を見て口を吊り上げて笑った。

「バトル！
まずは、椿姫ティタニアルで千年の盾を攻撃！
ヘイト・カメリア・ウィップ！」

「そして、憎悪の棘の効果で貫通ダメージと守備力を６００ポイントダウンさせる！」

「ぐわっ！？」

千年の盾（守３０００→２４００）

３年　ＬＰ２７００→２３００

ティルのツタで千年の盾を貫通し、３年生に襲い掛かりダメージを与えた。

「そして、ローズ・テンタクルスで千年の盾を攻撃！
ソーンウィップ・１！」

「クゥッ！」

ローズ・テンタクルスが千年の盾を破壊すると、３年生にローズ・テンタクルスのツタが絡み付いてダメージを与えた。

３年　ＬＰ２３００→２０００

「そして、ローズ・テンタクルスの追加攻撃で巨大ネズミを攻撃！
ソーンウィップ・２！」

さらに、３年生の場の巨大ネズミを破壊してダメージを与えた。

３年　ＬＰ２０００→１７００

「クッ！？巨大ネズミは戦闘で破壊されたときデッキから攻撃力
１５００以下の地属性モンスターを１体攻撃表示で特殊召喚する。
僕はデッキから二枚目の巨大ネズミを攻撃表示で特殊召喚！」

「もう一度ローズ・テンタクルスで攻撃！
ソーンウィップ・３！」

三度ローズ・テンタクルスの攻撃で３年生の場のモンスターを破
壊して、今度は戦闘ダメージと一緒にダメージを与えた。

３年　ＬＰ　１７００→５００→２００

「グッ！巨大ネズミの効果で三枚目の巨大ネズミを召喚・・・」

「これで終わりよ！ギガプラントで巨大ネズミを攻撃！
プレッシャー・プラント！」

３年　ＬＰ２００→０

３体目の巨大ネズミを３年生ごとギガプラントが押しつぶしてダ

メージを与えて、蓮の勝利でデュエルを終了させた。

「うわあああ～っ！？」

ギガプラントが翻弄するエルフの剣士もろとも、ブルー３年生を押しつぶし、３年生のライフを０にして蓮がデュエルに勝利した。

「それじゃ、私はこれで」

「クッ！僕が負けるなんて・・・」

「そうそう」

「？」

「私、あんたみたいに見かけだけで自信過剰な男って、大っ嫌いなの」

「な！？」

蓮はそう言って、呆然としているブルー３年生に追い討ちを掛けるようなことを言った後、完全に無視しながら祐騎達の居る観客席に戻っていった。

「・・・スゲェ」

「オベリスクブルーの3年生相手にノーダメージで勝利ッスか。祐騎君、よくあの人とデュエルして勝てたッスね」

「あはは、だから言ったでしょ。次やったら、勝てるかどうかわからないって」

「そんなこと無いわよ、ただあの3年が弱かっただけよ」

十代と翔が蓮の強さに驚き、祐騎はそんな二人を見ながら蓮が自分とデュエルしたときの事を思い出していると、デュエル場から蓮が戻ってきた。

「おかえりなさい、蓮」

「ええ、まったく嫌な相手だったわよ」

「なにかあったんですか？」

蓮が不機嫌な顔をしているのを見た祐騎は、そんな蓮に質問すると蓮は表情を和らげて祐騎の方を見た。

「何でも無いわよ、ただ単に相手の性格が最悪だったってだけよ」

「そうですか、それはおつかれさまです」

「まったくよ。
そうだ、気分転換にこの後私とデュエルしてくれる？」

「はい、よろこんで。
僕も、まだちょっと気分が悪いんで」

そんな会話をしている二人は、とても良い笑顔なのに周囲に不気味な黒いオーラを漂わせていた。

「・・・あ、あいつら笑顔なのに、なんでこんなに怖いんだ？」

「ぼ、僕に聞かれてもわかんないッスよ～」

「・・・まさに、触らぬ神に祟りなしだな」

「神というより、悪魔みたいな雰囲気だけどね」

《ああっ！いい！いいわぁ！二人のあの雰囲気、ゾクゾクしてきちゃう！》

《・・・ティルさ～ん、もうちょっと自重しましょうよ～》

《く、クリリ～》

二人の雰囲気に十代達は二人から少し引いて、ティルはそんな二人を見て興奮し、エールはそんなティルに呆れながらハネクリボーを抱きかかえ、ハネクリボーはエールに抱きかかえられながらそんなティルと祐騎達を怖がっていた。

第五話　月一テスト、蓮編（後書き）

今回はこんな感じになりました。
次回は原作ではタイタン戦ですが、そこの流れは省いて次回は主人公の姉とオリカを出す予定です。
それでは、また次回。

第六話　姉来訪、進化する守護者（前書き）

はい、第六話です。
今回は感想で読みにくいところがあると言われたので、ちょっと書き方を変えてみました。
もし、まだ悪い点が有りましたら遠慮なく感想に書き込んでください。
それでは、第六話どうぞ！

第六話　姉来訪、進化する守護者

～レッド寮～

祐騎ｓｉｄｅ

僕は今、レッド寮の部屋で蓮さんとタッグ用デッキの調整をしている。

なんでそんなことをしているかというと、先日僕達は十代君達と廃寮に探検に出てそこでタイタンというデュエリストと十代君がデュエルをして、そのことが先生達にバレてその罰で十代君と翔君がタッグデュエルをすることになった。

まぁ、そこまでは蓮さんから事前に聞いて知っていたし、蓮さんは廃寮でのデュエルでタイタンが本物の闇のデュエルに巻き込まれるのを出来れば止めたいと言って、一緒に廃寮に行ったけれど結果は変わらずタイタンは消えてしまった。

そして、十代君達が制裁タッグデュエルをするように言われたとき僕も受けるように言われ、蓮さんがそのタッグパートナーに立候補してくれた。

そして現在に至るというわけ。

祐騎ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「やっぱり、もうちょっとデッキ構成を近づけた方が良いわね」

「そうですよね～。

それはそうと、アカデミアのタッグルールってパートナーとの墓地が共有で、お互いのフィールドは個別でライトニング・ボルテックスみたいなカードはどちらか一人のフィールドにしか効果が無くて、パートナーの場のモンスターはお互いに生贄には出来るけど攻撃したり防御させたりは出来ないんですよね？」

「ええ、それで良いはずよ」

祐騎と蓮はタッグのルールを確認すると、またデッキの調整について話し出した。

「蓮さんのデッキの植物族は墓地からの特殊召喚等の効果が多いですから、エアトスとはちょっと相性が悪いんですよね」

「そうなのよねぇ、いっそのこと私のデッキを風属性で統一しようかしら？」

「それだと、蓮さんのデッキがかなり変わってしまいますよ？」

「そうなのよね～、どうしたものかしら？」

お互いのデッキの構成について悩んでいると、誰かが祐騎の部屋のドアをノックした。

コンコンッ

「ん？は～い、開いてますよ～」

「祐く～ん！！」

ガバッ！

「うわっ！？」

「な、なんなの！？」

祐騎と蓮がお互いのデッキ構成について悩んでいると、部屋のドアがノックされ祐騎が返事をすると、黒いストレートヘヤーの髪をして紺色のスーツを着た女性が部屋に入ってくるなり祐騎に抱きついてきた。

「祐君！？ちゃんとご飯食べてる？風邪引いてない？いじめとかされてない？辛いことがあったらすぐにお姉ちゃんに連絡するんだよ！？」

「く、苦しいよ、優奈姉さん」

「ああっ！？ごめんね！？」

「・・・祐騎、この人誰？」

蓮はいきなり祐騎に抱きついてきた女性について祐騎に聞くと、祐騎は抱きついてきた女性から離れて蓮に紹介した。

「ああ、僕の姉さんの優奈（ゆうな）姉さんですよ」

「この人が？」

「あ！もしかして、あなたが紅龍蓮さん？」

祐騎が蓮に優奈のことを紹介すると、優奈は蓮の方を向いて微笑んだ。

「え？はい、そうですけど・・・」

「そう、あなたの話は祐君からメールや電話で聞いてるわ」

そう言って、優奈は蓮を抱きしめた。

「え？あ、あの！？」

「・・・辛かったでしょう？誰からも信じてもらえなくて、誰も信じられなくなって」

「っ！！」

優奈がそう言うと、蓮は祐騎を睨み、祐騎は居心地が悪そうに俯いていた。

「祐君を責めないでね、私が無理やり話させたんだから。祐君があんなに一人の子について熱心に話すのを聞くのは初めてだったから、ついその理由を聞きたくなってしつこく聞いちゃったの」

「・・・そう、なんですか」

「ええ、あなたが別の世界からきた人だってことやこの世界で起きることを知ってることも聞いたわ」

そう言いながら、優奈は蓮の頭を撫でた。

「私はあなたの事を信じるわよ？
だって、祐君が信じた子ですもの。
それに、聞いたとおりのいい子みたいだし、昔の祐君と同じ目をしてるんですもの、放っておけないもの」

「・・・本当に」

「ん？」

「本当に、信じてくれるんですか？」

蓮が不安げに優奈の顔を伺うと、優奈はそんな蓮に笑顔で応えた。

「ふふっ、もちろんよ。
私はお姉ちゃんですもの、年下の子の味方なのよ」

「・・・ははっ、なんですかそれ」

蓮は優奈の胸に顔を埋めて泣きながら、苦笑した。

そして、蓮が落ち着いたところで、祐騎は優奈がなぜここに着たのかを聞いた。

「それで、姉さん今日はどうしてここに来たの？」

「もちろん、祐君に会うためよ！」

「いや、そうじゃなくて何か用事があるんじゃないの？」

「・・・本当なのに。
でもまぁ、用事があるっていうのは当たりだけど」

そう言って、優奈は持ってきていたアタッシュケースを開けて中から数枚のカードを取り出した。

「姉さん、このカードは？」

「これはね、私が創ったカード達よ？」

「え！？創ったって・・・」

「あ！そういえば、言ってませんでしたね？
姉さんはＩ＆Ｉ社の社員なんですよ？」

「そうだったの！？」

蓮は祐騎の言ったことに驚いて確認するように優奈の方を見た。

「そうよ？それで、私が創ったカードを祐君達に使って貰おうと思って持ってきたの」

「あの祐騎達って？」

「ん？もちろんあなたのものもあるわよ？」

「え!?で、でも!」

蓮が優奈の言葉に遠慮すると、優奈はそんな蓮を見て微笑みながら答えた。

「いいから、使って頂戴、ね?」

「あ、ありがとうございます」

「ふふっ、どういたしまして。
それじゃあ、カードに慣れるために一回デュエルしましょうか」

「うん、それじゃあ、外でやろうか」

そう言って、三人は部屋から出ていった。

~レッド寮前~

「祐騎、準備できた?」

「はい、出来ました」

祐騎は優奈から渡された五枚のカードをデッキに入れて、変わりにデッキに入っていたカードからエアトスを1枚と守護天使ジャンヌと継承の印を抜いた。

「それじゃ、いくわよ!」

「うん！」

「「デュエル！」」

優奈　ＬＰ４０００

祐騎　ＬＰ４０００

祐騎と優奈のテストデュエルは優奈の先攻で始まった。

「私のターン！ドロー！
手札からフィールド魔法、天空の聖域を発動して、豊穣のアルテミス（攻／守１６００／１７００）を守備表示で召喚してカードを１枚セットしてターン終了」

優奈　ＬＰ４０００、手札３枚

優奈のフィールドに神聖の雰囲気の神殿が現れ、さらにそこから天使族のモンスターが現れ、優奈はさらにカードを伏せてターンを終えた。

「僕のターン！ドロー！
僕は手札からモンスターをセットして、カードを１枚伏せてターンエンド！」

祐騎　ＬＰ４０００、手札４枚

祐騎も２枚のカードをセットしてターンを終了した。

「私のターン！ドロー！
私は手札から、智天使（ちてんし）ハーヴェストを攻撃表示で召喚！」

「そして、豊穣のアルテミスを攻撃表示に変更して、バトル！
智天使ハーヴェストでセットモンスターを攻撃！
ケルビム・ウェーブ！」

優奈のモンスターが祐騎の場のセットモンスターを攻撃すると、セットされていたモンスターが優奈のモンスターの攻撃を受け止めて祐騎のフィールドに現れた。

「セットモンスターはシールド・ウィング！
このカードは同ターン中2回まで戦闘では破壊されない！」

「なら、私はバトルフェイズを終了して、カードを1枚セットしてターンエンド」

優奈　ＬＰ４０００、2枚

優奈はさらにカードを伏せて、ターンを終了させた。

「僕のターン！ドロー！」

「リバースカードオープン！
永続罠、人造天使（シンセティック・エンジェル）を発動！
このカードはカウンター罠が発動する度に私の場に人造天使トークン（攻／守３００／３００）を特殊召喚するわ」

祐騎がカードをドローすると、優奈は自分が先ほど伏せたカードを発動させた。

「・・・僕は手札から霞の谷（ミストバレー）のファルコンを攻撃表示で召喚！
そして、バトル！
霧の谷のファルコンの効果でセットしていたカードを手札に戻して、豊穣のアルテミスを攻撃！
ミスト・スラッシュ！」

「リバースカードオープン！カウンター罠、攻撃の無力化を発動！
このカードの効果により祐君のモンスターの攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了させるわ。
そして、カウンター罠が発動したことで人造天使の効果でトークンを1体特殊召喚、さらに豊穣のアルテミスの効果でカードを1枚ドロー！」

祐騎のモンスターが優奈の場のモンスターに攻撃を行うと、祐騎のモンスターの攻撃は突然現れた渦によって無効化され、優奈の場に人工的の感じのする天使族のトークンが現れ、祐騎はカードを伏せてからターンを終了させた。

「僕はカードを2枚伏せてターンエンド」

祐騎　ＬＰ４０００、３枚

「私のターン！ドロー！
私は人造天使トークンを生贄にして光神（こうしん）テテュス（攻／守２４００／１８００）を召喚！
そして、バトル！光神テテュスで霞の谷のファルコンを攻撃！
シャイン・バースト！」

「ぐぅっ！」

祐騎　ＬＰ４０００→３６００

優奈が召喚したテテュスが放った光線が祐騎の場のファルコンを貫くと、そのまま祐騎も貫いていき優奈はカードを伏せてターンを終了した。

優奈「私はカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

優奈　ＬＰ４０００、手札2枚

十代「おっ！何やってるんだ？」

祐騎と優奈がデュエルをしていると、十代と翔がやってきた。

蓮「祐騎のお姉さんが新しいカードを持って来たからそれの確認のためにデュエルしてるのよ」

翔「へー、そうなんッスか」

十代「なぁ、なぁ、新しいカードってどんなカードなんだ？」

蓮「見てれば判るわよ」

蓮がそう言うと、十代達は興味深そうにデュエルを観戦しだした。

「僕のターン！ドロー！
僕は墓地の霞の谷のファルコンをゲームから除外してシルフィードを攻撃表示で特殊召喚！
さらに、手札からガーディアン・エアトスを攻撃表示で特殊召喚！」

《マスターのお姉さんでも容赦しませんから！》

祐騎は墓地のモンスターを除外して、墓地からモンスターカードを無くしてエールを召喚した。

「やっと出て来たわね、エアトス」

「そして、シールド・ウィングとシルフィードを生贄にして、始祖神鳥（そしんちょう）シムルグ（攻／守２９００／２０００）を攻撃表示で召喚！」

「ふふっ、カウンター罠、キックバックを発動！
このカードの効果で始祖神鳥シムルグの召喚を無効にして手札に戻すわ」

「そして、カウンター罠が発動した事で人造天使とアルテミスの効果でトークンを1体特殊召喚し、カードを1枚ドローする！」

「さらにドローしたカードは天使族モンスターのジェルエンデュオ（攻／守１７００／０）よってテテュスの効果でもう1枚ドロー、次のカードは2枚目のアルテミス、したがってさらにドロー、次のカードは天使族じゃないわ、よって効果はこれで終了」

「そして、私の場のカウンター罠が発動したことで私の場のモンスターを全て生贄にして手札から、裁きを下すもの－ボルテニス（

攻／守２８００／１４００）を特殊召喚！」

祐騎が2体の生贄で最上級モンスターを召喚しようとすると、優奈は自分の場のリバースカードを発動させて、祐騎が召喚しようとしたカードを手札に戻し、さらにモンスター効果と永続罠カードの効果でカードを4枚ドローして自分の場にトークンを1体召喚して、さらに自分の場のモンスターを全て生贄にしてモンスターを召喚した。

「・・・ボルテニス、か」

「ボルテニスの効果を発動！
このカードが自身の効果で特殊召喚に成功したとき、生贄にしたモンスターの数だけ相手フィールド上のカードを破壊できる！」

「私が生贄にした天使族モンスターは4枚、よって祐君のフィールドの3枚カードを全て破壊する！
ジャッジメント・ブレイク！」

優奈が召喚したモンスターが手に持った杖を掲げると、そこから稲妻が生まれ祐騎の場に降り注いだ。

「祐騎君！？」

「こりゃ、まずいんじゃねぇか！？」

「・・・いえ、大丈夫よ。
祐騎の場をよく見てみなさい」

「「え？」」

祐騎の場のカードが破壊されたと思って、慌てる十代と翔を蓮は落ち着けて祐騎の場を見るように言った。

「・・・姉さん、早速使わせて貰ったよ。
罠カード、ブラスト・モードを発動！」

「ブラスト・モードは自分フィールド上のブラストモードに対応するモンスター1体を生贄にして、デッキから生贄にしたモンスターに対応した／ブラストと名の付くモンスター1体を特殊召喚する！」

祐騎の場の罠カードが消えると、祐騎の場に右手に銃身に翼の生えたショットガンの様な銃を持ち、服装がロングスカートの代わりに同じ仕様のズボンと両腕に風の吹いている様な模様が刻まれた手甲が追加されたエールがフィールドに居た。

「ブラスト・モードの効果により、デッキからガーディアン・エアトス／ブラスト（スラッシュ）（攻／守２８００／２３００）を特殊召喚！」

「そして、ブラストモードの効果！このカードの効果によって召喚されたモンスターは召喚されたターンのみ魔法、罠、モンスター効果の対象にならない！」

《すごい、力が溢れてきますよ！？》

祐騎が罠カードを使ったことで、新しくなった自分の姿にエールは驚いた。

「ふふっ、さあ、その力使いこなして見せて」

「うん！ガーディアン・エアトス／ブラストの効果！
このカードが特殊召喚に成功したときお互いの墓地のガーディアン・エアトス以外のモンスター全てを持ち主のデッキに戻し、戻したカード×５００ポイントこのカードの攻撃力がアップする！
聖天（せいてん）のソウル！」

《ハァァッ！眠れる魂よ、我が元に集いて新たな道を切り開かん！》

エアトス／ブラスト（攻２８００→５３００）

エールが手に持った銃を掲げると、そこにデッキに戻っていったはずのカード達が集まり銃に吸収された。

「さらに、手札から速攻魔法、サイクロンを発動！
天空の聖域を破壊！」

「クゥッ！」

祐騎が魔法カードを発動させると、優奈の場のフィールド魔法が破壊された。

「そして、バトル！
ガーディアン・エアトス／ブラストでボルテニスを攻撃！
コミュニオン・ブラスト！」

《いきます、スピリットブラスター、シュート！》

「キャアアッ！」

エールの銃を両手で持って狙いを定めると、その銃についている羽が横に開き、銃口が大きく開いてそこにエネルギーが充填され、そのエネルギーが発射されるとそのエネルギーはボルテニスを貫いて優奈に当たった。

優奈　ＬＰ４０００→１５００

「姉さん、このターンで終わりにするよ。
さらにボルテニスの効果によって墓地に送られた罠カード、ダブル・ショットの効果を発動！
このカードは墓地から発動されたとき、自分の場に存在する／ブラストと名の付くモンスターの攻撃力を半分にしてこのターンのエンドフェイズに破壊する代わりに、もう1度攻撃する事が可能になる」

エアトス／ブラスト（攻５３００→２７５０）

墓地からカードが飛び出してエールの持っている銃に吸収されると、銃の大きさが小さくなった。

「これで、終わり！
霊銃（れいじゅう）の咆哮（ほうこう）！」

《狙い打ちます！》

エールは、今度は片手で狙いをつけて、三発の銃弾を優奈に向か

って発射した。

「クゥッ！」

優奈　ＬＰ１５００→０

こうして、新しく手にしたカードに慣れるためのテストデュエルが終了した。

「姉さん、このカード本当に使ってもいいの？」

「もちろんよ、でも、使ってて気づいたことが有ったら言ってね？一応はテストプレーヤーみたいなものなんだから」

「うん、わかった」

「祐騎！あれがお前の新しいカードなのか！？」

祐騎と優奈が、デュエルを終えて話していると、デュエルを見ていた十代が興奮しながら近づいてきた。

「あ、十代君、見てたんだ」

「おう！なぁなぁ、今から俺ともデュエルしようぜ！」

「えっと、それは良いけど・・・」

そう言って、祐騎は優奈の顔を伺うと優奈は笑顔を浮かべて蓮の方を見た。

「ふふ、私は構わないわよ。
ちょっと、蓮ちゃんとお話をしたいしね？」

「それじゃあ、ちょっと行ってくるね」

「よっしゃあ！負けねぇからな！」

「僕だって負けないよ」

「ああ！？2人とも待ってよ～！？」

2人はデュエルをするために優奈から離れて、翔はそんな二人を追っていった。

「あの、私に話とは？」

「私に敬語はいらないわよ、気軽にお姉ちゃんって呼んで？」

「え！？いや！そんな事言われても！？」

蓮が優奈の言葉に戸惑っていると、優奈は笑って蓮を見ながら懐からカードを取り出した。

「ふふっ、冗談よ。
それよりも、はい、これ」

「！これって」

優奈は蓮に6枚のカードを渡した、その中の2枚はブラスト・モードと椿姫ティタニアル／ブラストと書かれていた。

「それは、あなた用のカードよ？」

「あ、ありがとうございます！
へぇ～、ブラスト・モードってバスターモードと似た能力なんだぁ」

「ッ！？蓮ちゃん！」

「え？」

蓮が何気なく呟いた言葉に優奈は食いついて、すごい剣幕で蓮も見つめた。

「それって、もしかしてこれから生まれてくるカードの事！？」

「え、ええ、そうですけど」

「そこのところ、もうちょっと詳しく教えて頂戴！」

優奈の剣幕に押されて、蓮はチューナーモンスターやシンクロモンスターなどの今この世界に存在していないカードについて教えてしまい、そして優奈はそれを聞いた後、蓮に抱きついて頬ずりした後十代とのデュエルを終えて戻ってきた祐騎の頬にキスをして、他にも数枚のカードを渡して、デュエルアカデミアから出て行った。

おまけ　～優奈帰還後の蓮～

「んむ～？」

《どうしたのぉ？マスター》

優奈が帰った後、蓮も自分の部屋に戻ってきていたが何かを悩むように部屋に戻ってからずっと唸っていた。

「ん～、なんか祐騎が優奈さんにキスされたところを思い出すと、な～んか気分が悪いのよね～？」

《ふ～ん（ニヤニヤ）》

「二人は姉弟なんだから、あれくらいのスキンシップは別に構わないのに・・・」

《まぁ、考えても解らないんだったら、今は置いておきましょ～？》

ティルの発言に少し引っかかるものがあったが、蓮はとりあえず言われたとおりに休むことにした。

「・・・そうね、そうするわ。

それじゃあ、お休みティル」

《は～い、お休みなさぁい、マスタ～（ふふ、自覚してはいないけど、これはいい感じね。
このままいけば近いうちに・・・、ふふふっ）》

蓮の発言にティルは笑顔を浮かべ、自分のマスターのこれからを思ってニヤけていた。

第六話　姉来訪、進化する守護者（後書き）

今回、オリカを出しましたけど、まんまバスターモードのパクリです。
オリカの設定は次話の前に出したいと思います。
それでは、これからもよろしくお願いします。

オリジナルカード説明（前書き）

ここでは、話の中で出てきたオリジナルカードの説明をします。

オリジナルカードが出てくる度に、ここに入れていきます。

オリジナルカードについての質問が有りましたら感想に書き込んで下さい。

オリジナルカード説明

名称：ブラスト・モード

分類：通常罠カード

カード効果：

◎このカードが発動に成功した時、自分フィールド上に存在するこのカードに対応したモンスターを生贄にして、デッキから／ブラストと名の付いたモンスターを特殊召喚する。

◎このカードの効果によって特殊召喚されたモンスターは、召喚されたターンのみ相手の魔法、罠、モンスター効果の対象にならない

名称：ガーディアン・エアトス／（スラッシュ）ブラスト

分類：効果モンスター

モンスター能力：風属性、天使族、レベル１０、攻撃力２８００、守備力２３００

モンスター効果：

◎このカードは「ガーディアン・エアトス」をブラスト・モード

の効果で生贄にした場合のみ特殊召喚をすることが出来る

また、このカードは上記以外の方法以外での召喚、特殊召喚、反転召喚をすることは出来ない。

◎このカードが召喚に成功した時、お互いの墓地に存在する「ガーディアン・エアトス」を除く全てのモンスターを持ち主のデッキに戻す。

そして、戻したカードの枚数×５００ポイント、このカードの攻撃力は召喚したターンのエンドフェイズまでアップする。

◎このカードが破壊された時、墓地に「ガーディアン・エアトス」が存在していた場合、「ガーディアン・エアトス」を自分フィールド上に特殊召喚する。

名称：椿姫ティタニアル／（スラッシュ）ブラスト

モンスター能力：風属性、植物族、レベル１０、攻撃力３０００、守備力２８００

モンスター効果：

◎このカードは「椿姫ティタニアル」をブラスト・モードの効果で生贄にした場合のみ特殊召喚をすることが出来る

また、このカードは上記以外の方法以外での召喚、特殊召喚、反転召喚をすることは出来ない。

◎このカードが自分フィールド上に存在する時、魔法、罠、モンスター効果が発動したとき自分フィールド上の植物族モンスターを生贄にして、その効果の発動を無効にして破壊することが出来る。

◎このカードが破壊された時、墓地に「椿姫ティタニアル」が存在していた場合、「椿姫ティタニアル」を自分フィールド上に特殊召喚する。

名称：ダブル・ショット

分類：通常罠カード

カード効果：

◎自分フィールド上に／ブラストと名の付いたモンスターが存在している時にのみ発動することが出来る。

◎このカードが発動した時、自分フィールド上の／ブラストと名の付いたカードの攻撃力を、このターンのエンドフェイズまで2倍にして、エンドフェイズにそのモンスターを破壊する。

そして、この効果を使った場合、このカードは墓地には行かずゲームから除外される。

◎このカードは墓地から除外することで以下の効果を得る。

自分フィールド上の／ブラストと名の付いたモンスターの攻撃力を半分にして、一度のバトルフェイズ中に二回攻撃出来るようにする。

ただし、この効果を使用したモンスターはエンドフェイズ時に破壊される。

名称：霊銃（スピリット・ブラスター）の咆哮

分類：通常魔法カード

カード効果：

◎このカードは自分のフィールド上に「ガーディアン・エアトス／ブラスト」が存在するときのみ発動することが出来る。

「ガーディアン・エアトス／ブラスト」の元々の攻撃力分のダメージを相手プレーヤーに与える。

このカードを発動したターンのバトルフェイズはスキップされる。

名称：百花繚乱（ひゃっかりょうらん）ー椿（つばき）の舞（まい）

分類：通常魔法カード

カード効果：

◎このカードは自分フィールド上の植物族モンスター1体を生贄にして発動する。

◎このカードは自分フィールド上のレベル8以上の植物族モンスター1体を対象にして発動する。

◎このカードの対象になったカードはエンドフェイズまで攻撃力が800ポイント上昇し、戦闘を行った相手モンスターをダメージステップ終了時に破壊する。

名称：百花繚乱（ひゃっかりょうらん）ー桜（さくら）の舞（まい）

分類：通常罠カード

カード効果：

◎このカードは手札の植物族モンスター1体を墓地に捨てることで発動し、相手はこのターン攻撃宣言することができない。

そして、このカードの効果で墓地に捨てた植物族モンスターは、このターンのエンドフェイズに自分フィールド上に攻撃表示で特殊召喚され、次のターンのエンドフェイズに破壊される。

名称：百花繚乱ー黒薔薇の舞ー

分類：通常罠カード

カード効果：

◎このカードは自分の場にレベル８以上の植物族モンスターが存在するときのみ発動することが出来る。

◎このカードが発動したとき、フィールド上のすべてのカードを破壊し、破壊したカード１枚につき３００ポイントのダメージを相手に与える。

名称：桃源郷ー百花繚乱ー

分類：速攻魔法

カード効果：

◎このカードは、自分の墓地に「百花繚乱ー椿の舞ー」、「百花

繚乱ー桜の舞ー」、「百花繚乱ー黒薔薇の舞ー」が存在するときのみ発動することが出来る。

◎このカードが発動したとき、相手フィールド上の表側表示の全てのカードの効果を無効にして、自分の墓地に存在するレベル４以下の植物族モンスター１体をゲームから除外し、除外したモンスターのレベル以下の植物族モンスター１体を攻撃表示で特殊召喚する。

◎このカードの効果で特殊召喚されたモンスターは、攻撃することは出来ず、アドバンス召喚のためにリリースすることも出来ない、そして表示形式を変更することも出来ない。

名称：ブラスト・ブレイク

分類：通常魔法カード

カード効果：

◎このカードは、自分フィールド上に「／ブラスト」と名の付いたカードが存在するときのみ発動することが出来る。

このカードが発動したとき、フィールド上の全てのカードを破壊し、破壊したカードの枚数×３００ポイントのダメージを相手に与えた後、使用したプレーヤーは与えたダメージ５００ポイントにつき一枚デッキの上からカードを墓地に捨てる。

名称：精霊神器（せいれいじんぎ）－エクセリオン

分類：装備魔法カード

カード効果：

◎このカードはレベル８以上の天使族モンスターにのみ装備することができる。

◎このカードはモンスターに装備したときの支払うコストによって、以下の効果の内１つを得る。

◎装備モンスターの攻撃力を半分にする：装備したモンスターは相手プレーヤーにダイレクトアタック可能になる。

◎手札を１枚捨てる：このカードがフィールドから墓地に送られた時、墓地のモンスター１体を特殊召喚する。

◎デッキの一番上のカードを墓地に送る：このカードがフィールドから墓地に送られる時、墓地には行かず手札に戻る。

この効果は１ターンに１度しか使用できず、この効果で手札に戻ったターンのエンドフェイズ時に手札に存在している場合、ゲームから除外される。

名称：煌翼（こうよく）の守護者（しゅごしゃ）－トゥインクル・エアトス－

分類：シンクロモンスター

モンスター能力：星１０、風属性、天使族、攻撃力３０００、守備力２８００

召喚条件：天使族チューナー＋ガーディアン・エアトス

効果：

◎このカードがシンクロ召喚に成功した時、お互いの墓地のモンスターを全てゲームから除外する。

◎このカードの攻撃力はゲームから除外されているモンスターの数×１００ポイントアップする。

◎このカードがフィールド上に存在する限り、墓地に送られる全てのモンスターは墓地には行かず、ゲームから除外される。

◎このカードが破壊されたとき、お互いの除外しているカードを全てデッキに戻してシャッフルする。

名称：栄光の天使（グローリー・エンジェル）

分類：チューナー、効果モンスター

モンスター能力：星2、光属性、天使族、攻撃力５００、守備力

８００

効果：

◎このカードは天使族シンクロモンスターのシンクロ素材としてしか使用できない。

◎このカードをシンクロ素材にしたモンスターがカード効果で破壊されるとき、攻撃力を５００ポイント減らすことで、破壊を無効にすることが出来る。

◎このカードの効果でシンクロモンスターの攻撃力が０になった場合、相手プレーヤーはこのカードをシンクロ素材にしたシンクロモンスターの守備力分のダメージを受ける。

名称：椿女帝ティタニアル（カメリア・エンプレス）

分類：シンクロモンスター

モンスター能力：星１０、風属性、植物族、攻撃力３３００、守備力３０００

召喚条件：植物族チューナー＋椿姫ティタニアル

効果：

◎このカードは、１ターンに１度自分の場の植物族モンスター１体をリリースすることで、エンドフェイズまでリリースしたモンス

ターの攻撃力の半分の数値を、このカードの攻撃力に加え、さらに通常攻撃に加えて追加攻撃を行うことが出来る。
ただし、この効果を使用したターン、このモンスター以外の自分モンスターは攻撃することが出来ない。

◎このカードは、1ターンに1度墓地の植物族モンスターを除外することで、相手の発動させた魔法、罠、モンスター効果の発動を無効にして破壊することが出来る。

名称：桜花の王女（チェリーブロッサム・プリンセス）

分類：チューナー、効果モンスター

モンスター能力：星2、地属性、植物族、攻撃力0、守備力500

効果：
◎このカードが植物族のシンクロモンスターのシンクロ素材になったとき、墓地のこのカードをゲームから除外することで、墓地に存在する植物族モンスター1体を効果を無効にして表側守備表示で特殊召喚することが出来る。

◎このカードがカード効果によって墓地に送られた時、墓地の植物族モンスターをゲームから除外することで、このカードを自分フィールド上に特殊召喚することが出来る。

名称：烈風の宝札

分類：通常魔法

効果：

◎このカードは、お互いの場に風属性モンスターが存在する時のみ発動する事が出来る。

◎このカードを発動させたターン、レベル５以上のモンスターの召喚、特殊召喚を行うことが出来ない。

◎このカードが発動したとき、フィールド上に存在する風属性モンスターの数だけデッキからカードをドローし、その後相手の場の風属性モンスターの数だけ手札のカードを墓地に送る。

名称：ガーディアン・ユグドラシル

分類：融合モンスター

モンスター能力：星１２、風属性、天使族、攻撃力３５００、守備力３５００

召喚条件：ガーディアン・エアトス＋椿姫ティタニアル
このカードは、上記のモンスター同士の融合召喚でしか特殊召喚することが出来ない。

効果：
◎このカードは植物族モンスターとしても扱う。

◎このカードは1ターンに1度、手札の魔法、罠、モンスターのいずれか1枚を墓地に送ることで、自身の墓地に存在するカードの中から、墓地に送ったカードの種類とは違う種類のカード1枚を手札に加えることが出来る。

◎このカードは、自身の墓地に存在する天使族、又は植物族モンスター1体を選択して装備カード扱いで装備することが出来る。
このカードは、自身の効果で装備したモンスターのモンスター効果を得ることが出来る。
この効果で装備できるモンスターは1体だけとし、装備されたモンスターが場を離れる場合ゲームから除外される。

名称：神写し(かみうつ)の大地(だいち)－Ｎａｓｃａ(ナスカ)－

分類：フィールド魔法

効果：
◎このカードは、「地縛神」と名の付いたカードが自分フィール

ド上に表側表示で存在している場合、相手の魔法、罠、モンスター効果を受け付けない。

◎このカードがフィールド上に表側表示で存在する時、フィールド上に存在する「地縛神」と名の付くモンスターのフィールド上に１体しか存在できないという効果を無効にする。

◎このカードがフィールドを離れた時、デッキ又は墓地に存在する「地縛神」と名の付いたカード１枚を手札に加えることが出来る。

名称：ＢＦ―賢風（けんぷう）のウィング・マジシャン・ガール

分類：シンクロモンスター

モンスター能力：星８、闇属性、魔法使い族、攻撃力２５００、守備力２０００

召喚条件：「ＢＦ」と名の付くチューナー＋ブラック・マジシャン・ガール

効果：

◎このカードは鳥獣族としても扱う。

◎このカードは、自分の墓地に存在する「ＢＦ」と名の付くモンスター１種類に付き攻撃力を１００ポイントアップする。

名称・女神（めがみ）の聖剣（せいけん）ーエアトスー

分類：装備魔法

効果：

◎このカードは自分の墓地にモンスターが存在しないとき、フィールド上に表側表示で存在する天使族モンスターにのみ装備する事が出来る。

◎このカードを装備したモンスターの攻撃力は、相手が除外しているモンスターの数×３００ポイントアップする

名称：ガーディアン・デスサイス

分類：効果モンスター

モンスター能力：星８、闇属性、アンデット族、攻撃力２５００、守備力２０００

効果：

◎このカードは通常召喚出来ず、自分の場に表側表示で存在する「ガーディアン・エアトス」が相手により破壊され墓地に送られた時、手札から守備表示で特殊召喚する事が出来る。

◎このカードは、自分の墓地に存在する「ガーディアン・エアトス」を除くモンスター1体に付き攻撃力を500ポイントアップする。

また、このカードは自分の墓地に「ガーディアン・エアトス」が存在しない場合、攻撃力が0となる。

◎このカードが破壊され墓地に送られた時、手札1枚を墓地に捨て自分の場に破壊された時と同じ表示形式で特殊召喚しなければならない。

名称：黒羽の奇術（くろはねのきじゅつ）

分類：通常罠

効果：

◎このカードは自分フィールド上にに表側表示で存在する「BF」と名の付くモンスター1体が魔法・罠・モンスター効果によってフィールドから離れるとき発動する事が出来る。

◎このカードの対象となった「BF」と名の付くモンスターのレベルより低いレベルの「BF」と名の付いたモンスター以外の闇属性モンスター1体を、効果を無効にして自分フィールドに特殊召喚

することが出来る。

名称：鮮血の薔薇女神（ブラッディ・ローズ・ゴッデス）

分類：融合モンスター

モンスター能力：星１０、炎属性、植物族、攻撃力３０００、守備力２５００

召喚条件：「ブラック・ローズ・ドラゴン」＋「ローズ」と名の付いた植物族モンスター
このカードは融合召喚でしか特殊召喚出来ない。

効果：
◎このカードは１ターンに１度、自身の墓地に存在する植物族モンスター１体を除外する事で、相手フィールド上に存在するカード１枚の効果を無効にする事が出来る。

◎このカードは、１ターンに１度ライフを半分払う事でフィールド上に存在するこのカード以外のカードを全て破壊する事が出来る。

名称：ＢＦ（ブラック・フェザー）イリュージョン

分類：通常罠

効果：

◎自身の場に表側表示で存在する、「ＢＦ」と名の付くレベル６以上のモンスターが、相手モンスターの攻撃対象となった時発動する事が出来る。

攻撃対象となったモンスター１体をリリースする事で、手札又はデッキから「ブラック・マジシャン・ガール」１体を攻撃表示で特殊召喚する事が出来る。

◎このカードの効果で『ブラック・マジシャン・ガール』の特殊召喚に成功した時、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択し、選択したモンスターとこのカードの効果で特殊召喚した「ブラック・マジシャン・ガール」の攻撃力をエンドフェイズまで入れ替える。

そして、対象となった相手モンスターは、このカードによって特殊召喚された「ブラック・マジシャン・ガール」に攻撃しなければならない。

◎また、この効果の対象となったモンスターは、発動したターンのエンドフェイズまで、このカード以外のカード効果によって攻撃力は変化せず、このカードの効果の対象となったモンスター同士のバトルで発生する戦闘ダメージはお互いのプレーヤーが受ける。

名称：マジカル・ピジョン

分類：通常罠

効果：

◎相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができ、自分フィールド上に表側表示で存在する『ブラック・マジシャン・ガール』１体をリリースして発動する。

相手モンスター１体の攻撃を無効にして、自身の場に「鳩トークン」（鳥獣族、星１、攻／守０／０）２体を守備表示で特殊召喚する。

◎このカードの効果で特殊召喚した鳩トークンは、モンスターを召喚するためのリリースとして使用することは出来ず、表示形式の変更をする事も出来ない。

◎このカードを発動したターンのエンドフェイズ、自身の墓地に「ブラック・マジシャン・ガール」が存在している場合、自分フィールド上に存在する鳩トークンを含む全てのモンスターを破壊して、墓地から「ブラック・マジシャン・ガール」１体を効果を無効にして表側守備表示で特殊召喚しなければならない。

名称：黒羽の竜騎士（ブラックフェザー・ドラゴンナイト）

分類：融合モンスター

モンスター能力：星１０、光属性、ドラゴン族、攻撃力３０００、守備力２６００

召喚条件：「ブラックフェザー・ドラゴン」＋「ブラック・マジシャン・ガール」
このカードは上記のモンスター同士の融合召喚でのみ特殊召喚する事が出来る。

効果：
◎相手モンスター1体を選択して、手札から「ＢＦ」と名の付くモンスター1体を墓地に捨てて発動。
選択したモンスターを破壊し、相手プレーヤーに墓地に捨てた「ＢＦ」と名の付くモンスターの元々の攻撃力分のダメージを与える。

◎このカードがフィールド上に表側表示で存在する時、このカードのコントローラーへの効果ダメージが発生する時、このカードに黒羽カウンターを1つ乗せる事で効果ダメージを0にする事が出来る。

◎このカードに乗っている黒羽カウンターを2つ取り除くことで、デッキからカードを1枚ドローする事が出来る。

◎このカードは、自身の効果を発動させたターン、攻撃する事は出来ない。

オリジナルカード説明（後書き）

考えておいてなんですが、エアトス／ブラストが実際に有ったら確実に制限か禁止カードになると思うんですよね～。

アンデット系の墓地にカードを大量に送るデッキと相性が良すぎるんですよ。

墓地にモンスターカードが合計１１枚有ったら総攻撃力８３００で、パワー・ボンド使ったサイバー・エンドより強くなります。

さらに、ダブル・ショットと絡めると１６６００ですよ、リミッター解除と変わらない効果ですから、当然ですけど・・・。

さらに、エンドフェイズに破壊されると、効果でエアトスを召喚しますから、余計にタチが悪い。

しかも、もし墓地にネクロ・ガードナーがいてもデッキに戻されるから意味が無いし。

ブラスト・モードの効果で召喚したターンだけ、なんちゃって自縛神になってしまいますから、対象を取らないミラフォや激流葬でしか破壊されませんし、バウンスもされません。

実際に止めるためには神の宣告等で召喚自体を止めるか、バトルフェーダーや威嚇する咆吼等、このカード以外を対象にするカードや対象を取らないカードが必要になります。

・・・ヤバイ、良く考えたら物凄くチートだ、このカード。

まぁ、唯一の救いは召喚したターンさえしのげれば、後は普通のモンスターと変わらないことですが・・・。

それに比べてティタニアル／ブラストは、劣化版スターダスト／バスターになりました。

スターダストみたいに自己再生能力は無い代わりに、コストが有れば何度でも無効化出来ますが、逆にコストが無ければ無効化できません。

そして、自分をコストにした場合は、ティタニアルを召喚する能力も発動しないので、比較的バランスの良いカードになったと思います。

何故、同じオリカなのにここまでの性能差が・・・。

読者の皆様へ、これからの話ではオリカの使用は控えた方が良いのでしょうか？（特にエアトス／ブラストを）

どちらが良いのか、という意見が有りましたら感想に書き込んで下さい。

投稿オリカ説明（前書き）

ここでは、投稿して頂いたオリカの説明を載せていきます。

また、ここに載せているオリカの中で、投稿時と一部内容が変化している物がありますが、それはゲームバランス等を考えて調整したものですので、ご理解の程をよろしくお願いします。

投稿オリカ説明

名称：異次元の花（ディメンション・フラワー）（湊クレナイさん投稿）

分類：効果モンスター

モンスター能力：闇属性、植物族、レベル2、攻撃力５００、守備力０

モンスター効果：

◎このカードはリリースする事は出来ない。

◎自分フィールド上にチューナーが表側表示で存在する時、墓地に存在する植物族モンスター1体を除外する事で、ゲームから除外されているこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する事が出来る。

◎このカードは自身の効果で特殊召喚されたターンのエンドフェイズ、持ち主のデッキの一番下に戻る。

容姿：イービル・ソーンを黒くして、棘を無くした感じ。

名称：植物の楽園（しょくぶつのらくえん）（ユタさん投稿）

分類：フィールド魔法

カード効果：

◎植物族モンスターが召喚、特殊召喚、反転召喚する度にこのカードにフラワーカウンターを１つ乗せる。

◎このカードに乗っているフラワーカウンター１つにつき１００ポイント、フィールド上に表側表示で存在する植物族モンスターの攻撃力がアップする。

◎このカードに乗っているフラワーカウンターを任意の数取り除く事で、手札に存在する取り除いた数以下のレベルの植物族モンスター１体を特殊召喚する事が出来る。
ただし、この効果で特殊召喚したモンスターはこのターン攻撃する事が出来ない。

容姿：中心に巨大な花が咲き、周囲に色々な植物が生息している庭園

名称：卓越風（たくえつふう）　（戎鴛さん投稿）

分類：永続罠

カード効果：
◎自分フィールド上に風属性モンスターが2体以上表側表示で存在する時、ドローフェイズ時にカードを2枚ドローする事が出来る。

◎自分フィールド上に風属性モンスターが存在しない場合、ドローフェイズ時にカードをドローする事は出来ない。

容姿：2枚のカードが風に飛ばされている絵と、地面にカードが落ちている絵が上下分かれてに描かれている

名称：ガスタの守護神（しゅごしん）　（ＢＲＡＶＥさん投稿）

分類：効果モンスター、ユニオン

モンスター能力：風属性、天使族、レベル3、攻撃力５００、守備力５００

モンスター効果：
◎このカードは、メインフェイズ時に1度、自分フィールド上に表側表示で存在する『ガスタ』又は『ガーディアン・エアトス』と名の付くモンスターに装備カード扱いで装備、又は装備しているこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する事が出来る。

◎このカードを装備したモンスターの攻撃力は６００ポイントアップし、墓地に存在する『ガスタ』と名の付くモンスターが、墓地

からデッキに戻る毎にこのカードを装備したモンスターの攻撃力を６００ポイントアップする。

◎このカードを装備したモンスターが破壊される時、代りにこのカードを墓地に送る事で破壊を無効にする事が出来る。

容姿：ガスタの紋章が中心にある背中に緑色の翼の付いた天使の像。

名称：混沌天使（こんとんてんし）クリステア　（神龍さん投稿）

分類：効果モンスター

モンスター能力：光属性、天使族、レベル８、攻撃力３０００、守備力２６００

モンスター効果：

◎このカードは通常召喚することは出来ない。

◎このカードは墓地に存在する、光属性モンスター１体と闇属性モンスター１体を除外する事で手札から特殊召喚する事が出来る。

◎このカードが特殊召喚に成功した時、フィールド上に存在する全てのカードを破壊する。

◎このカードがフィールド上に表側表示で存在する時、フィールド上に存在する天使族モンスターはカード効果では破壊されない。

◎このカードは破壊された時、墓地には行かず持ち主のデッキの1番上に戻る。

容姿：大天使クリスティアに似た、黒と白の翼を持った天使。

名称：混沌天使の使徒（神龍さん投稿）

分類：効果モンスター、チューナー

モンスター能力：闇属性、天使族、レベル2、攻撃力１００、守備力１００

モンスター効果：

◎このカードが『混沌』と名の付くシンクロモンスターのシンクロ素材となった時、相手プレーヤーに８００ポイントのダメージを与える。

容姿：球状の体に黒と白の翼が付いた姿。

名称：混沌神クリステウス　（神龍さん投稿）

分類：効果モンスター、シンクロ

モンスター能力：光属性、天使族、レベル１０、攻撃力３５００、守備力３０００

召喚条件：闇属性の天使族チューナー＋『混沌天使クリステア』

モンスター効果：

◎このカードがシンクロ召喚に成功した時、墓地に存在する『混沌』と名の付くモンスター以外の天使族モンスター1体を、効果を無効にして自分フィールド上に特殊召喚する事が出来る。

◎このカードがフィールド上に表側表示で存在する時、自分フィールド上に存在するこのカード以外の天使族モンスターの攻撃力は５００ポイントアップする。

容姿：背中に黒と白の6枚の翼を持った龍の姿をした天使。

投稿オリカ説明（後書き）

これから先も、投稿してくださったオリカは、未使用のものも含めて、此処に載せていこうと思っています。

それでは、オリカを提供して下さった皆様、本当にありがとうございます。

提供して頂いたオリカは、必ず一度は使わせてもらいます。

それでは、これからもこの作品をよろしくお願いします。

第七話　タッグデュエル　ＶＳ迷宮兄弟（前書き）

今回は初めてのタッグデュエルです。
それから、今回もオリカが出てきますので詳しいことが知りたい場合は一つ前の説明に載せますので確認してください。
それでは、第七話始まります。

第七話　タッグデュエル　ＶＳ迷宮兄弟

～デュエル会場～

制裁タッグデュエル当日、まずは原作通りにやって来た迷宮兄弟を十代と翔が倒し、祐騎と蓮の番がやってきた。

「それでは、これよりタッグデュエル第二戦を開始するノ～ネ！対戦相手は先程と同じく迷宮兄弟ナノ～ネ」

クロノスが祐騎と蓮に向かってそう言うと、迷宮兄弟は祐騎達を指差して話だした。

「先程は不覚を取って負けたが、今度はそうは行かんぞ！」

「今度こそ、我等迷宮兄弟の実力を思い知らせてくれる！」

「「覚悟しておけ！」」

迷宮兄弟が鏡合わせの様にポーズを取りながら宣言すると、祐騎達は呆れた様な顔をしてそんな二人を見ていた。

「・・・一々ポーズを取らないと喋れないんですか？」

「・・・それに負けたからって、さっきのが全力じゃないって感じに言い訳とか、もろに三流の小悪党のセリフじゃない」

「「グハッ！」」

祐騎と蓮の言葉が迷宮兄弟の胸に突き刺さり、二人は膝を着いた。

「とにかく、早速だけど始めましょうか。
っと、その前に祐騎、アレやるわよ」

「や、やっぱり、やるんですか？
出来ればやりたく無いんですけど・・・」

「こういうのはノリよ。
それに、初めてのタッグデュエルなんだから気合いを入れるついでよ」

「・・・はぁ、分かりました」

祐騎は蓮の言葉に諦めた様な顔して、蓮の言う通りにした。

「ねぇ、アンタ達」

「「ん？」」

迷宮兄弟が蓮の言葉に反応して顔を上げると、祐騎と蓮は迷宮兄弟を指差していた。

「「倒しても良いわよ（ですよ）ね？」」

「「答えは聞かないけど！」」

そう言って、蓮はやりとげた顔をしているのに対して、祐騎は恥ずかしそうに顔を伏せた。

「「ふ、ふざけおって！もはや、容赦せん！」」

「我等の力」

「その身で味わうと良い！」

迷宮兄弟は祐騎達の行動を見て、激昂してデュエルディスクを構えた。

「「「「デュエル！」」」」

迷宮兄弟　ＬＰ８０００

祐騎＆amp;蓮　ＬＰ８０００

※ルールの補足：ターンは交互に迷宮兄→祐騎→迷宮弟→蓮の順に進み、最初のターンは全てのプレーヤーは攻撃することは出来ない。

また、お互いのパートナーのフィールドのモンスターを生贄にすることは可能だが、パートナーのフィールドのモンスターで攻撃をすることは出来ない。

そして、自身が発動させている魔法や罠はパートナーと共有であり、自分フィールドのカード枚数で効果が変わるカードはタッグパートナーのフィールドのカードとの合計枚数で決定する。

パートナーのリバースカードを使用することは可能だが、そのリバースカードを確認することは出来ず効果の対象は使用したプレー

ヤーの方である。

また、アドバンスドロー等でパートナーの場のモンスターを生贄にした場合、デッキからカードをドローするのはパートナーでは無く、カードの効果を使用した方がドローする。

「以上が今回のタッグデュエルのルールの補足だニャ～」

迷宮兄弟と祐騎達がデュエルディスクを構えると、大徳寺先生がそう言って注意書きと書かれたプレートを掲げた。

「私のターン！ドロー！　私はカイザーシーホース（攻／守１７００／１６５０）を攻撃表示で召喚してターンエンド！」

迷宮兄　手札５枚

「僕のターン！ドロー！　僕はガーディアン・エアトスを攻撃表示で特殊召喚、さらにモンスターとリバースカード１枚をセットしてターンエンド！」

祐騎　手札３枚

迷宮兄と祐騎の場のカードと自分の手札を見て、迷宮弟はほくそ笑みながらデッキからカードをドローした。

「私のターン！ドロー！　私は手札から魔法カード名推理（めいすいり）を発動！

このカードが発動した時相手プレーヤーがレベルを宣言し、デッキのカードを一番上から通常召喚可能なモンスターが出るまで捲り、それ以外のカードは墓地に送る！」

「そして、最初に出たモンスターカードが相手プレーヤーが宣言したレベルの場合はそのまま墓地に送り、違った場合は自分フィールドに特殊召喚する！」

「さぁ娘、お前がレベルを宣言しろ！」

迷宮弟が蓮を指差してそう告げると、蓮は少し悩んだあと答えた。

「宣言するレベルは当然7よ」

「フッ、先程のデュエルを見ているから当然か、さて何が出てくるか・・・」

そう言って、迷宮弟がデッキのカードを捲ると、一枚目は生け贄人形、二枚目はアヌビスの裁き、三枚目に地雷蜘蛛のカードを引いた。

「まず、モンスターカード以外を墓地に送る。
そして、地雷蜘蛛（攻／守２２００／１００）のレベルは４、よって私の場に特殊召喚する！」

「そして、私は手札から魔法カード、コストダウンを発動！
このカードは手札を一枚捨てることでこのターンのみ手札のモンスターのレベルを二つ下げる！」

「手札から水魔神スーガを捨て、さらに地雷蜘蛛を生贄に手札か

ら風魔神（ふうましん）ヒューガ（攻／守２４００／２２００）を召喚！」

迷宮弟は手札からスーガを墓地に送ってレベルの下がったヒューガを特殊召喚した。

「・・・ゴメン祐騎、読み違えた」

「いいえ、大丈夫ですよ。
それに、これもデュエルでは良くあることですから」

蓮が祐騎に申し訳無いといった表情で謝ると、祐騎はそんな蓮を笑って許した。

「ふふふっ、その余裕がいつまで続くか見ものだな。
私はさらにカードを２枚伏せてターンエンド！」

迷宮弟　手札０枚

「私のターン！ドロー！
私は手札から永続魔法、生還の宝札を発動！
さらに手札からローンファイア・ブロッサムを召喚して効果を発動！」

「ローンファイア・ブロッサムを生贄にして、デッキから椿姫ティタニアルを攻撃表示で召喚！
さらにカードを２枚伏せてターンエンド！」

蓮　手札２枚

蓮がターンを終えると、迷宮兄弟は口の端を吊り上げて笑った。

「私のターン！ドロー！

私は場のカイザー・シーホースを効果により2体分の生贄にして、雷魔神（らいましん）－サンガ（攻／守２６００／２２００）を召喚！」

「この瞬間、リバースカードオープン！

リビングデッドの呼び声！このカードの効果により、墓地から水（す）魔神（ましん）－スーガ（攻／守２５００／２４００）を蘇生召喚！」

迷宮兄がサンガを召喚すると、迷宮弟が先ほどコストダウンのコストで墓地に送ったスーガを召喚した。

「そして、3体の魔神を生贄に捧げ、出でよゲートガーディアン（攻／守３７５０／３４００）！」

迷宮兄弟の場の魔神を全て生贄にして、迷宮兄はゲートガーディアンを召喚した。

「スゲー！あのゲートガーディアンを、また2ターンで召喚したぞ！」

「・・・大丈夫ッスかね、祐騎君達」

「な～に、あいつらなら大丈夫だって！」

「しかし、あの二人のエースモンスターがいるといっても、今のままでは倒されるだけだぞ」

迷宮兄弟がゲートガーディアンを召喚したことで、祐騎達のことを翔や三沢が心配しているのに対して十代はまったく心配した様子が無いことに皆不思議がった。

「心配いらね～よ！あいつらにはあのカードがあるんだからよ」

「十代、あのカードっていったい・・・」

「へへ、まぁ見てなっておもしろいことになるからさ！」

三沢の言葉に十代が答えたことに疑問を持った明日香が質問すると、十代は楽しそうに答えて二人のデュエルの観戦を続けた。

「バトル！ゲートガーディアンでガーディアン・エアトスを攻撃！魔神衝撃波！」

「やらせない！リバースカードオープン！罠カード、ブラスト・モード！」

ゲートガーディアンがエールに向かって攻撃を放つと、祐騎の場のリバースカードがエールに代わって破壊され、フィールドにはブラスト・モードの効果で／ブラストの姿に変化したエールが現れ、迷宮兄弟はブラスト・モードに驚いた。

《ふぅ～、危なかったです》

「なんだ、そのカードは！？」

「ブラスト・モードは自分の場のモンスターを生贄にしてデッキから／ブラストと名の付いたモンスターを召喚するカードです！
さらに、エアトス／ブラストの効果で墓地のエアトス以外のモンスターを全てデッキに戻し、戻したカードの枚数×５００ポイント攻撃力をエンドフェイズまでアップさせる！」

エアトス／ブラスト（攻２８００→５８００）

「さぁ、モンスターの数が一度変わったのでバトルフェイズは巻き戻されましたよ？」

「クッ！ならば攻撃対象を椿姫ティタニアルに変更する！」

祐騎の言葉に迷宮兄は悔しそうにそう言って、ゲートガーディアンに攻撃を命令した。

「残念ね、リバースカードオープン！
棘（とげ）の壁（かべ）を発動！
このカードは植物族モンスターが攻撃対象になったとき、相手フィールド上の攻撃表示モンスターを全て破壊する！」

「な、なんだと！？」

《あらあら、ご愁傷様～》

蓮がリバースカードを発動させると、突然現れた植物の棘で出来

た壁がゲートガーディアンの攻撃を跳ね返し、そのままゲートガーディアンを破壊し、そんな光景を見たティルは気の毒そうに迷宮兄弟の方を眺めていた。

「「ば、馬鹿な、我等のゲートガーディアンがこんなにあっさりと破壊されるなど・・・」」

「さすがね祐騎、もしものためにブラスト・モードを伏せておくなんて」

「いえ、蓮さんの方こそ、それを見越して攻撃反応型の罠カードをセットするなんてさすがです」

迷宮兄弟がゲートガーディアンが破壊されたことに驚いているのを横目に、祐騎と蓮はお互いに褒めあった。

「クッ！私はカードを1枚セットしてターンエンド・・・」

「エンドフェイズを迎えたことで、エアトス／ブラストの攻撃力が元に戻る」

エール（攻５８００→２８００）

迷宮兄　手札2枚

「僕のターン！ドロー！」

「リバースカード、オープン！
威嚇（いかく）する咆哮（ほうこう）！

このカードが発動したターン、相手は攻撃宣言をすることが出来ない！」

祐騎のターンになった瞬間、迷宮兄が発動したカードによって祐騎の攻撃は封じられた。

「なら、僕は手札から魔法カード、霊銃（スピリット・ブラスター）の咆哮を発動！
このカードは自分フィールド上にガーディアン・エアトス／ブラストが居るときのみ発動できるカードです！
このターンのバトルフェイズをスキップすることで、相手プレーヤーにエアトス／ブラストの攻撃力分のダメージを与える！」

《いきますよ～！わが身に宿りし精霊の力よ、今一度その力を現せ！
スピリット・ブラスター、シュート！》

「「ぐわあああっ！！」」

迷宮兄弟　ＬＰ８０００→５２００

「そして、僕はさらにカードを1枚セットしてターンエンドです」

祐騎　手札2枚

「私のターン！ドロー！
手札から、魔法カード命削りの宝札を発動！
デッキから手札が5枚になるようドローし、5ターン後に手札のカードを全て墓地に送る！

私の手札は0、よって5枚ドロー！」

迷宮弟は命削りの宝札で5枚のカードをドローして、引いたカードを見ると笑みを浮かべた。

「天はまだ我等を見放してはいなかった！
手札から魔法カード、ダーク・エレメントを発動！」

「このカードの効果によって、ライフを半分支払いデッキより闇の守護神ーダーク・ガーディアン（攻３８００）を特殊召喚する！」

迷宮兄弟　ＬＰ５２００→２６００

「「はーはっはっは！！見るがいい、これが我等兄弟の最強のカード、ダーク・ガーディアンだ！」」

迷宮兄弟はダークガーディアンを召喚したことで勢いを取り戻した。

「バトル！ダーク・ガーディアンでガーディアン・エアトス／ブラストを攻撃！
ダーク・ショット・エア！」

《グゥッ！》

「エール！？くっ！
ガーディアン・エアトス／ブラストが破壊されたことにより、墓地からガーディアン・エアトスを特殊召喚する」

ダーク・ガーディアンの攻撃でエアトス／ブラストが破壊され、祐騎に攻撃の余波が当たりダメージを受けたが、祐騎は／ブラストの効果でエアトスを特殊召喚した。

祐騎＆蓮　ＬＰ８０００→７０００

「私は、さらに場にカードを1枚セットしてターンエンド！」

迷宮弟　手札３枚

「私のターン！ドロー！
私は手札からイービル・ソーンを召喚！
そして、効果を発動してイービル・ソーンを生贄にして、相手に３００ポイントのダメージを与える！」

「「グゥッ！」」

迷宮兄弟　ＬＰ２６００→２３００

「そして、イービル・ソーンの効果でデッキからイービル・ソーンを2体を攻撃表示で特殊召喚！
さらに、リバースカードオープン！ブラスト・モード！」

「「な、なんだと！？」」

蓮もブラストモードを発動させたことに迷宮兄弟は驚き、蓮はフィールド上のティルを生贄にした。

「椿姫ティタニアルを生贄にして、デッキから椿姫ティタニアル

／ブラスト（攻／守３０００／２８００）を特殊召喚！」

《は～い、私のパワーアップ姿の初お披露目よ～》

ブラスト・モードの効果で召喚されたティルは、椿の花の飾りが付いた椿の花をモチーフにしたドレスを着て、下半身は花では無く赤いヒールを履き、椿の花が飾りについた帽子を被り、両手に茨が巻き付いている銃を持った姿をしていた。

「そして、私はイービル・ソーン１体を生贄に、手札から魔法カード、百花繚乱－椿の舞を発動！」

「百花繚乱－椿の舞は自分フィールド上のレベル８以上の植物族モンスター１体を対象に発動して、対象のモンスターの攻撃力を８００ポイントアップさせる」

ティル（攻３０００→３８００）

「リバースカード、オープン！永続罠スピリット・バリア！このカードは自分の場にモンスターカードが存在するとき、戦闘によるプレーヤーへのダメージを０にする！」

蓮が魔法カードを発動させると、迷宮弟も永続罠を発動した。

「このタッグデュエルでは魔法や罠の効果はパートナーにも適用される。

つまり、私の場のスピリット・バリアの効果は兄者にも効果がある、さらに私の場のダーク・ガーディアンは戦闘では破壊されないモンスター！」

「すなわち、ダーク・ガーディアンが居る限り、お前たちのモンスターの攻撃は我等には届かない！」

「「我等の連携に隙は無い！」」

迷宮兄弟はそう言って蓮の方を見ると、蓮はそんな兄弟を見て笑った。

「バトル！椿姫ティタニアル／ブラストで闇の守護神ーダーク・ガーディアンを攻撃！」

「「なに！？」」

迷宮兄弟は蓮がダーク・ガーディアンに攻撃をしたことに驚き、蓮はさらに笑みを深めた。

「百花繚乱ー椿の舞の効果！このカードの効果対象になったモンスターが相手モンスターを攻撃したとき、ダメージステップ終了時に相手モンスターを破壊するわ！」

「「な、なんだとぉ！？」」

《ふふっ、さぁ、一緒に逝きましょう？
エンド・オブ・フラワー・ダンシング！》

ティルが両手の銃で踊りながら攻撃していき、最後に左手の銃を放り投げて右手の銃でそれを打ち抜くと放り投げた銃が爆発して、ダーク・ガーディアンとティルをその爆発が包んだ。

「そして、／ブラストのモンスターが破壊されたことで、墓地か

ら椿姫ティタニアルを蘇生召喚する！」

「椿姫ティタニアルはバトルフェイズ中の召喚のため攻撃可能！
さらに、フィールド上からモンスターが居なくなったことにより、
スピリット・バリアの効果は無効になる！」

「「ば、馬鹿な・・・」」

自分達の切り札が居なくなって、迷宮兄弟は青い顔をしてそんな
二人に蓮は容赦なく攻撃を仕掛けた。

「椿姫ティタニアルでダイレクトアタック！
カメリア・ウィップ！」

「「ぐわぁぁぁ～っ！！」」

迷宮兄弟　ＬＰ２３００→０

「・・・これにて、タッグデュエルを終了するノ～ネ」

祐騎達と迷宮兄弟のデュエルが終わって、クロノスによって今回
のデュエルは終了し迷宮兄弟は落ち込みながら会場から出て行き、
祐騎達は十代達のところに戻っていった。

「よう！やったな！」

「二人とも、おつかれさまッス」

「ありがと、十代君、翔君」

「ところで、気になったんだけど、二人が使ったカードって見たこと無いんだけどあれってどうしたの？」

祐騎達が十代達のところに戻ると、祐騎は十代と翔に労われ、蓮は明日香から自分達が使ったブラスト・モード等のカードについて聞かれた。

「ああ、あれはＩ＆Ｉ社に勤めてる祐騎のお姉さんの優奈さんが創ったカードよ。

祐騎と私はあのカードのテストを兼ねて使わせてもらってるの」

「そうか、だからみたことも無いカードだったわけか」

「あ、三沢君いたんだ」

「・・・なぁ、お前達は俺が嫌いなのか？

いつもいつも、居なかったみたいなことを言ってくるのは」

「いやだな～、そんなこと無いじゃない。

ただ単に君の存在感が薄いからだよ」

「・・・ＯＴＬ」

三沢に話しかけられたが、祐騎はいつもの調子で三沢を凹ませた。

「そ、それより、あのゲートガーディアンを破壊したときって狙ってやったの？」

「ええ、祐騎ならなにか手を打ってると思ったから」

「僕も同じですね、蓮さんなら何とかするだろうと思ってましたから」

祐騎と蓮は明日香の質問にそう言って応えて、お互いに笑い合いそんな二人に周りの皆は驚いたような呆れたような視線を向けた。

（（（（これで、ただの友人なん（スよね）（のよね）だよな～））））

こうして、制裁タッグデュエルは無事に終了した。

第七話　タッグデュエル　ＶＳ迷宮兄弟（後書き）

はい、今回の内容はどうだったでしょうか。
次回はオリジナル話を挟んでから、原作の続きになります。
それと、原作二期に入るときにシンクロモンスターとオリカを出すつもりですが、その際主人公のデッキの内容がオリカオンリーと普通のデッキに少数のオリカとどっちが良いですかね？
意見がありましたら、よろしくおねがいします。
それでは、また次回よろしくおねがいします。

第八話　精霊界へのご招待（前書き）

今回から暫くはオリジナル回になります。

そして、今回はデュエル無しの会話回です。

それでは、第八話始まります。

第八話　精霊界へのご招待

～レッド寮～

制裁タッグデュエルから数日たったある休日、祐騎がいつものように自分の部屋で昼寝をしていると、祐騎の部屋に蓮がやって来た。

「・・・ｚｚｚ」

「まったく、休みの時はいっつも寝てるか、デュエルしてるかなんだから」

「ほら、起きなさい、今日はこれからについて話すって言ったでしょ」

ユサユサ

蓮が寝ている祐騎を起こそうと、肩を掴んで祐騎の体を揺らした。

「・・・んぅ」

「あ、起きた？」

ギュッ

「え？」

祐騎が起きたと思った蓮が祐騎から手を放すと、祐騎は寝惚けて蓮に抱きついた。

「／／／え！ちょっ、ちょっと祐騎、いきなりなに！？」

「・・・ＺＺＺ」

「／／／・・・寝てる、のよね」

蓮は自分に抱きついた祐騎を体から離すかわりに、祐騎の頭を自分の膝に乗せた。

「／／／まぁ、抱きつかれるよりはマシね。
無理に起こすと、また抱きつかれそうだし」

蓮はそのまま、祐騎が目を覚ますまで膝枕を続けた。

「ふわぁ～っ、良く、寝た、な・・・」

「／／／・・・やっと起きたのね」

「え？あの、この状況は一体・・・」

祐騎は目が覚めると、蓮の顔が自分を見下ろす形で見えていることに戸惑った。

「／／／それは、後で説明するから、とりあえず起き上がってくれない？」

「あっ、はい」

祐騎は蓮に言われて体を起こし、そして自分が膝枕をされていた

ことにようやく気付いた。

「／／／あ、あの、なんであんなことを」

「／／／しかたなくよ、しかたなく」

祐騎は蓮に自分が何故膝枕をしていたかの理由を聞くと、祐騎は気まずそうに顔を伏せた。

「す、すみません、寝惚けてたといっても、いきなりそんなことを」

「／／／い、いいわよ、もう、次からは気を付けてくれれば」

祐騎と蓮がお互いに気まずい雰囲気でいると、突然二人の周囲が光に包まれその光が消えると祐騎の部屋の中から祐騎と蓮が居なくなり、代わりに実体化したティルとエールが祐騎の部屋に居た。

《ちょ～っと手荒だったかしら？
ま、詳しいことは向こうに着いてからでいいわよね》

《ちょっと、どころじゃないですよ～！
ティルさん！早く、マスター達を追いかけましょうよ！》

《それもそうね～、なら行くとしましょっか。
私達の故郷、精霊世界に》

そう言うと、ティルとエールの二人の姿も消えてしまい祐騎の部屋の中にはとうとう誰も居なくなってしまった。

～精霊世界のとある森の中～

「「えっ！？」」

祐騎と蓮はいきなり周囲が室内から森に変わったことに驚き、周囲を見渡して自分達に何が起きたのかを確認しようとした。

「なんで、私達はたしかに祐騎の部屋に居たはずなのに・・・」

「というか、ここってどこなんですか？
見た限りデュエルアカデミアの敷地内じゃない感じですけど」

《うふふっ、やっぱり驚いてるわね～》

「ティル！？あんた、いったい今までどこに・・・？
って、あんた達、なんか感じが違わない？」

祐騎達が周囲を見渡していると、背後からティルが声を掛けられその声に反応して振り向くと、いつもより存在感が増したティルとエールが居た。

《ふふっ、それはそうよ、だってここは私達の故郷なんですもの》

「こ、故郷って、まさか！？」

《はい、ここは私達デュエルモンスターの精霊が住む世界、精霊世界です》

「「えええええっ！？」」

エールがそう言って祐騎達の向こう側を指差すと、そこには空を飛んでいるグレート・モスやドラゴン・フライといった昆虫族モンスターが居た。

「ま、まさか、本当に精霊世界に来たってゆうの？」

《そうよ～、ちなみに二人をここに送ったのは私だけど、頼んだのはエールちゃんなのよ～》

「エールが？でも、なんでいきなりこんなことを・・・」

祐騎がそう言ってエールを見ると、エールは気まずそうに祐騎達の方を見た。

《すみません、本当だったらちゃんと説明をしてから一緒にこちらに来るつもりだったのですが、ティルさんに説明したらお二人をいきなりここに送ってしまわれたので説明が出来なかったんです》

「ティル、アンタなにやってんのよ・・・」

《ふふっ、別にいいじゃないの、説明なんてこっちでも出来るんだし～》

エールがそう言ってティルを見ると、ティルは全然悪びれずに笑顔で蓮の視線を受け止めた。

「まったく、それで私達を精霊世界に連れてきた理由ってなんなの？」

《はい、お二人をここに連れてきた理由は、私が人間世界に来た理由でもあるんです。

実は、数年前に私達の住処に突然、謎の石版が現れたんです。

それからしばらくして、私達の住処に正体不明の敵が攻めて来たんです。

《その敵が攻めてくる原因が、おそらくはその石版なのではないかという結論になりまして、私は石版の謎についての調査のために人間世界にやってきたんです》

《そして、初めて人間世界で姿を現したのが、マスターが入試試験で私を召喚したときだったんです》

「そっか、それで入試試験の時までエアトスのカードが普通のカードだったわけか」

エールの言葉に祐騎が応えると、エールは首を縦に振って肯定を表した。

「それで、その石版や敵ってのはどんなものなの？」

《はい、その石版には見たことも無いドラゴン族モンスターのような姿が刻まれているんです。

そして、攻めてきている敵というのは、見たことも無いモンスタ

ー達でその中でも特におかしいのは、そのモンスター達の中にこちらからの攻撃だけが一切通じないものが居るんです》

「攻撃が一切通じないモンスターが居るなんて・・・」

「（石版に描かれたドラゴン族モンスターに、こちらの攻撃が通じなくて、あちらの攻撃だけが通じるモンスターって、まさか）・・・とにかく、その石版ってのを見に行きましょう？」

エールからの説明に祐騎は信じられないといった顔をし、蓮はエールの言ったモンスターに心当たりがあるのか少しなやんだ後とりあえず石版を見に行くことにした。

～霧の谷の谷底にある横穴前～

祐騎達はエールに連れられて、霧が立ち込める谷の奥底にある横穴の前までやって来た。

「ここに、例の石版が有るのか・・・」

《はい、そして、ここは風属性モンスター達の住処でもあるんです》

《その声、もしやエアトス殿ですか！》

祐騎がエールに確認するように聞き、エールがそれに応えていると横穴の中から霧の谷のファルコンが現れた。

《ええ、お久しぶりです、ファルコンさん。
それと、今の私にはこちらのマスターに付けて頂いた、エールという名前があるんですよ?》

《おお!それは申し訳無い、それとこちらに戻られたということは、何か手がかりがあったのですか?》

《ええ、マスター達をあの石版の前に連れて行きますから、他の皆さんに説明の方よろしくお願いしますね?》

《わかりました。
それでは、エール殿よろしくおねがい致します》

そう言って、ファルコンは祐騎達の前から飛び立っていった。

《それでは、こちらです》

エールは飛び立ったファルコンを見送ってから、祐騎達を石版の前に連れて行った。

《これが、その石版です》

そう言ってエールが指差したところには、石版に刻まれたスター

ダスト・ドラゴンの姿があった。

「・・・そんな、もしかしたらと思ってたけど、なんでここにスターダストが？」

《・・・やはり、蓮さんはこのモンスターのことをご存知なんですね？》

《なるほどね～、蓮がこの世界が二次元の世界だっていう世界から来たなら、私達の知らないモンスターのことも知ってる可能性が高い、だから連れて来たのね～？》

蓮が石版のスターダストに驚いていると、エールとティルはそんな蓮の様子に納得といった表情をした。

「蓮さん、このモンスターってどんなモンスターなんですか？」

「・・・このモンスターはね、赤き竜のシグナーの証である竜の内の１体なの」

「《《シグナー？》》」

蓮が言った初めて聞くシグナーという単語について祐騎達が聞くと、蓮はシグナーのことやシンクロモンスターなど、この世界の未来にあたる５Ｄ'ｓのことを祐騎達に説明した。

「そうですか、このモンスターはそんなことに関係しているんですか」

《ですが、なぜそんなモンスターの石版がここに現れたんです？》

「・・・これも、私がこの世界に来たことで、世界が色々変化してるからなんだと思う。
ははっ、なんだか私の性でこの世界に厄介事が増えてるみたい、ただでさえ問題が山済みの状態だってのに。
やっぱり、私はこの世界に居ちゃいけない無いのかなぁ」

蓮は自分の存在がこの世界に悪影響を与えていると思って、自虐的な笑みを浮かべて膝を着いた、そして、そんな蓮を祐騎が抱きしめた。

「大丈夫ですよ」

「ゆ、祐騎？」

「蓮さんには、僕や姉さん、ティルさんにエールや十代君達だって居ます。
もし、この世界に蓮さんの居場所が無いなら僕達が居場所になりますから。
だから、もうそんな悲しいことは言わないでください」

「・・・祐騎」

祐騎は蓮を抱きしめたまま、以前のように頭を撫でて蓮を慰めた。

「それに、もし蓮さんがこの世界に来なかったら、僕は存在しなかったかもしれないんですから、蓮さんが僕達の世界に来た事は決して悪いことばかりじゃないんです」

「・・・うん、ありがとう」

祐騎が蓮を抱きしめてそう言うと、蓮は祐騎に礼を言いそのままばらくその状態を続けた。

《うんうん、やっぱりマスターのことは祐騎君に任せるに限るわ～。

それに、いいものが見れて、まさに一石二鳥ね～》

《／／／はぅ～、なんだか恥ずかしいですよ～》

そんな二人を見て、ティルはとても楽しそうな顔をし、エールは二人が抱き合っているのを見て顔を赤くしていると、外から爆発音が響いてきた。

《まさか、奴らが攻めてきたんですか！？》

「・・・ティルさん、蓮さんのこと頼みます」

《・・・ＯＫ、まかせて頂戴、マスターには指一本どころか髪の毛一本にすら触らせないわ》

「祐騎、それにティルも、なにを言ってるの！？」

「蓮さん、ちょっと外の奴の相手をしてきます」

「なっ！？」

祐騎はそう言ってエールと一緒に外に向かって走っていき、それを止めようとした蓮はティルに止められた。

「ティル！アンタ、なんで邪魔するのよ！？」

《・・・今はあの子達に任せましょう？
あの子はあなたが信じた子でしょ、なら最後まで信じなさい》

「・・・祐騎」

蓮がティルを睨むと、ティルはそんな蓮を説得した後、祐騎達の後を追っていった。

祐騎達が横穴から出ると、そこにはボロボロになったファルコンと、そのファルコンとデュエルをしていたと思われる、ボロボロの布を着て仮面を着けた悪魔族モンスターが居た。

《グウッ、エール殿にエール殿のマスター殿、こやつは私に任せてお逃げください！》

《クックックッ！逃がすと思っているのか？
なぜ、ここに人間が居るのかは知らぬが、我のことを見たからには只では返さん！》

ファルコンがそう言って祐騎達を逃がそうとするが、祐騎はそんなファルコンの言葉に反して自分のデッキをデュエルディスクにセットして構えた。

「・・・逃げてもどうにもなりません、それよりもこのままコイツを野放しには出来ません！」

《クックッ、愚かな、いいだろう貴様にも、我等インフェルニティ

の力を思い知らせてくれるわ！》

そういって、デュエルディスクを構えたのはインフェルニティモンスターの内の1体、インフェルニティ・ネクロマンサーであった。

《・・・マスター、大丈夫ですか？》

「うん、いくよエール」

《ククッ、貴様も我等が神の生贄にしてくれるわ！》

「《デュエル！》」

こうして、祐騎の精霊世界での始めてのデュエルが始まった。

第八話　精霊界へのご招待（後書き）

次回はインフェルニティデッキとの戦いです。
あと、このデッキには当然シンクロは無しで、代わりにアレが入っています。
まぁ、最後の方のセリフで丸解りですが・・・

それでは、次回もよろしくおねがいします。

第九話　召喚！地に縛られし神の巨人（前書き）

今回は前回の続きのデュエルからになります。

それでは、第九話はじまります。

第九話　召喚！地に縛られし神の巨人

～霞の谷の横穴前～

「攻めてきた敵って、まさかインフェルニティ・ネクロマンサー！？」

《ほう、我のことを知っているとはな。
この小僧を片付けたら、次は貴様の番だ小娘》

「そんなこと、させはしない！
僕のターン！ドロー！」

蓮とティルが横穴から出ると、ちょうど祐騎がネクロマンサーとのデュエルを開始したところだった。

祐騎　ＬＰ４０００

ネクロマンサー　ＬＰ４０００

「僕は手札から、モンスターを1体セットして、さらにリバースカードを2枚セットしてターンエンド！」

祐騎　手札３枚

《我のターン！ドロー！
手札から魔法カード、おろかな埋葬と封印の黄金櫃を発動！
おろかな埋葬の効果によりデッキからインフェルニティ・デスト

ロイヤーを墓地に送り、封印の黄金櫃の効果でデッキからカードを一枚ゲームから除外して2ターン目の我のターンに手札に加える》

「!?（な、なんなの、この感じは・・・）」

ネクロマンサーがデッキからカードを除外したとき、蓮は急に悪寒に襲われデュエルをしている祐騎を心配そうに見つめた。

《そして、我の分身インフェルニティ・ネクロマンサー（攻／守０／２０００）を召喚!
インフェルニティ・ネクロマンサーは召喚に成功したとき守備表示となる
さらに、我はリバースカードを2枚セットしてターンエンドだ》

ネクロマンサー　手札1枚

「僕のターン!ドロー!
僕はセットモンスターを反転召喚!
セットモンスターはウェポン・サモナー、効果でデッキからガーディアン・エアトスを手札に加える!」

「そして、僕の墓地にモンスターカードが無いため効果により、エアトスを攻撃表示で特殊召喚!
バトル!エアトスでインフェルニティ・ネクロマンサーを攻撃!
精霊のオペラ!」

《私の仲間を傷つけたあなたを許す訳にはいきません!
ハアアアッ!》

エアトスがインフェルニティ・ネクロマンサーを破壊すると、自

分の分身がやられたにも関わらずネクロマンサーは余裕の表情を浮かべた。

《くっくっく、リバースカード、オープン！
罠カード、インフェルニティ・リフレクターを発動、このカードは我のフィールド上のインフェルニティと名の付くモンスターが戦闘で破壊されたとき、手札を全て捨てることで破壊されたモンスターを特殊召喚し、相手に１０００ポイントのダメージを与える！》

「何！？ぐっあああああっ！！（なんだこれ、体中が痛い、まさか体に本物のダメージが！？）」

祐騎　ＬＰ４０００→３０００

ネクロマンサーが発動した罠カードによって、エアトスが破壊したインフェルニティ・ネクロマンサーの欠片が祐騎を襲い、その衝撃により制服は切り裂かれ、その下の皮膚も切られて血が流れ、ネクロマンサーのフィールドには破壊されたはずのインフェルニティ・ネクロマンサーが守備表示で存在していた。

「祐騎！？まさか、これ、闇のデュエル、なの・・・？」

《くっくっく、やはりそこの小娘は色々と知っているようだな、やはりこのデュエルが終わったらすぐに始末せねばならんな》

「・・ま・れ」

《ん？なんだ小僧、痛みでおかしくなったか？》

「黙れ！貴様の相手はこの俺だ！

俺の目が黒い内は、蓮さんに手は出させん！」

ネクロマンサーが蓮のことをさらに狙うような発言をしたとき、祐騎は怒りの形相でネクロマンサーを睨んで自分のターンを続けた。

「俺は、手札から封印の黄金櫃を発動し、デッキからカードを除外してターンエンド！」

祐騎　手札３枚

《ふん、威勢がいいのは口だけだな？
我のターン！ドロー！》

《くっくっく、やはり貴様は我には勝てぬ！我は今ドローしたインフェルニティ・デーモンの効果を発動！
このカードは手札が０のときにドローした場合、相手にこのカードを見せることで特殊召喚することが出来る！》

《インフェルニティ・デーモンを守備表示で特殊召喚！さらに効果を発動する、このカードは手札が０の時デッキから、インフェルニティと名の付いたカードをデッキから手札に加える！》

「ちっ！」

《デッキより、永続魔法インフェルニティガンを手札に加えて発動、さらに我が分身の効果を発動！》

ネクロマンサーのモンスターの連続で発動する効果に、観戦していたティルは唖然としていた。

《ちょっと、なによあのコンボ、手札０なのに、なんであんなにコンボが繋がるのよ》

「・・・ハンドレスコンボ」

《マスター、どうした、の？
って、ちょ、ちょっと、蓮！
あなた、なんでそんなに震えてるの！？》

ティルは蓮が呟いた言葉が気になって蓮の方を向くと、蓮は顔を青くして体を震わせていた。

「・・・間違いない、アレは鬼柳のハンドレスコンボ、それにエールが言ってた奇妙なモンスターに、さっきの除外されたカードの雰囲気、そしてスターダストの石版、極めつけに闇のゲーム、まさか本当にアレがあるの？」

「っ！蓮さん！？」

蓮は震える自分の体を抱きしめながら膝を着き、そんな蓮をティルが支え、そんな蓮を見て祐騎は余計に早くデュエルを終わらせないといけない、という思いに駆られた。

《ふん、我の効果は手札が０のとき自分の墓地より、ネクロマンサーを除くインフェルニティモンスター１体特殊召喚する！
我は墓地より、インフェルニティ・デストロイヤー（攻／守２３００／１０００）を攻撃表示で特殊召喚！》

《バトル！インフェルニティ・デストロイヤーでウェポン・サモ

ナーを攻撃！
デストロイ・バースト！》

「グゥウ！」

《さらに、インフェルニティ・デストロイヤーの効果を発動！
このカードが戦闘により、相手モンスターを破壊したとき相手に
１６００ポイントのダメージを与える！》

「な！？ぐあああああっ！」

祐騎　ＬＰ３０００→７００

インフェルニティ・デストロイヤーがウェポン・サモナーを攻撃
すると、ウェポン・サモナーを超えてデストロイヤーの攻撃が祐騎
を襲い、そのまま祐騎はデストロイヤーの攻撃によって全身にやけ
どを負い、目の焦点もずれてきた。

「・・・やめて、おねがい、もうやめてよ」

《蓮、あなた・・・》

祐騎がボロボロになった姿を見て、蓮は已然として体を震わせ、
泣きながらデュエルの中止を求めた。

《くっくっく、我は別に構わんぞ？
まぁ、もっともそうした場合、そこの小娘の命を貰うことになる
がな？》

「・・・ふざ、けるな、よ、この骸骨野郎！

蓮さんには、手を出させる、もんか」

《ふん、そうゆう事は我に勝ってからいうんだな。
我はこのまま、ターンエンド！》

ネクロマンサー　手札０枚

「俺の、ターン、ドロー！」

祐騎はふらつきながらデッキからカードをドローし、そんな祐騎をエールは心配そうに見つめていた。

「俺は、手札から速攻魔法、サイクロンを発動。
このカードの効果によって、お前の場のインフェルニティガンを、破壊する」

「そして、エアトスにジャンク・アタックを装備して、インフェルニティ・デストロイヤーを攻撃、だ」

《今度こそ！喰らいなさい！》

《グッ！ふん、この程度どうということはない》

ネクロマンサーはエアトスの攻撃とジャンク・アタックの効果を受けても、特に変化を起こさず、余裕の表情でデュエルを続けた。

ネクロマンサー　ＬＰ４０００→２６５０

「俺は、カードを２枚伏せて、ターンエンド」

祐騎　手札０枚

《我のターン！ドロー！
そして、封印の黄金櫃の効果で除外していたカードを手札に加える！》

《くっくっく、貴様はこのターンで終わりだ！
手札からフィールド魔法、ダークゾーンを発動！》

《そして、我は場の二体のモンスターを生贄にして、地縛神（じばくしん）　Ｃｃａｐａｃ（コカパク）　Ａｐｕ（アプ）（攻／守３０００／２５００）を召喚する！
地に縛られし神よ、今こそその力を我に示せ！》

ネクロマンサーが召喚したモンスターは、霧の谷すら超えるほどの大きさで圧倒的な存在感と途轍もなく邪悪な気配を漂わせていた。

「な、なんだ、これ、これがモンスターなのか・・・」

《くっくっく、我等の神である地縛神Ｃｃａｐａｃ　Ａｐｕは相手モンスターの攻撃対象にはならず、ダイレクトアタックが可能！
そして、フィールド魔法、ダークゾーンの効果で攻撃力５００ポイントアップ！》

Ｃｃａｐａｃ　Ａｐｕ（攻３０００→３５００）

「なっ！？攻撃力３５００の、ダイレクトアタック可能なモンスター、だと」

祐騎が地縛神の効果に驚いていると、蓮が先ほどよりも顔を青くして地縛神を見上げた。

「・・・そんな、なんで、なんでここに地縛神が」

《蓮、しっかりして!?（蓮がここまで怯えるなんて、アレはそんなに恐ろしいものなの?）》

蓮が地縛神を見上げる姿を見て、ティルはそんな蓮を支えながら祐騎達と対峙している地縛神を見上げた。

《くっくっく、バトル!
地縛神Ｃｃａｐａｃ　Ａｐｕでダイレクトアタック!》

「クッ!罠発動!ガードブロック!
攻撃を一度だけ、無効にして、デッキから、一枚ドロー」

地縛神Ｃｃａｐａｃ　Ａｐｕが祐騎を押しつぶそうと手を振り下ろすと、祐騎の場のカードがその攻撃を防いだ。

《ふん!運の良い奴、いや悪い奴だな、貴様が足掻けば足掻くほど、より自ら苦痛を味わう目に会うというのに。
我はこれでターンエンドだ》

ネクロマンサー　手札０枚

「僕のターン、ドロー
封印の黄金櫃の効果で、除外していたカードを、手札に」

祐騎はなんとかデュエルを続けるが、すでに立っているのがやっとの状態であり、そんな祐騎の姿にエールは自分の無力さに苛立っていた。

《くっ、マスターが傷ついているのに何も出来ないなんて・・・！》

「ははっ、これからだよ、エール」

《！？マスター、大丈夫なんですか、そんな体で！？》

「正直、もう、駄目だろうね、目も霞んできたから。だから、このターンで決着を、つけるよ、エール！」

《はい！マスター！》

祐騎はエールとの話を終えると、自分の場のカードを発動させた。

「罠カード発動！ブラスト・モード！場の、エアトスを生贄にデッキから、エアトス／ブラストを特殊召喚！

そして、効果により、お互いの墓地のモンスターを、デッキに戻し、戻した枚数×５００ポイント、エアトス／ブラストの攻撃力をアップ！」

エール（攻２８００→４８００）

《くっくっく、いくら攻撃力の高いモンスターであっても地縛神Ｃｃａｐａｃ　Ａｐｕは攻撃対象にはならない、さらに我の場には地縛神Ｃｃａｐａｃ　Ａｐｕのみ、つまり貴様は攻撃対象が居ない、よって攻撃することすらできぬのだ！》

「・・・それが、どうした」

《何？》

ネクロマンサーが自信たっぷりに地縛神Ｃｃａｐａｃ　Ａｐｕについての説明をすると、祐騎はそんなネクロマンサーの言葉を振り払って黄金櫃から手札に入ったカードに手を掛けた。

「攻撃できないなら、全部纏めて破壊してやる！
手札から魔法カード、ブラスト・ブレイクを発動！
このカードは、自分の場に／ブラストと名のつくモンスターが居るときのみ発動可能、フィールド上の全てのカードを破壊、そして破壊したカード一枚につき３００ポイント、相手にダメージを与える！」

《な、なんだと！？》

「フィールドには、合計６枚のカードがある、よって１８００ポイントのダメージを受けてもらう！」

《この一撃で終わらせます！
わが身に宿りし精霊の力よ、今こそ、その力を解き放て！》

エールが地縛神Ｃｃａｐａｃ　Ａｐｕよりも高く飛び上がり、上空からエネルギーが限界まで高まったスピリット・ブラスターを放とうとすると、ネクロマンサーが高笑いを始めた。

《くっはっはっは！なるほど、それならばたしかに地縛神を倒すことは出来るな、だが少し詰めが甘いな、小僧！
リバースカードオープン！カウンター罠、地縛波（グランド・ウェーブ）を発動！》

《このカードは、自分フィールド上に地縛神と名の付いたモンスターが居るときに発動できる罠カード、このカードの効果で貴様の魔法カードの効果を無効にして破壊する！》

エールがエネルギーを放とうとすると、地縛神Ｃｃａｐａｃ　Ａｐｕから衝撃波が放たれ、エールはそのまま祐騎の所まで押し戻された。

《くくっ、残念だったなもう少しで勝てたというのに》

「・・・いや、これで俺達の勝ちだ！」

《何！？》

「手札から装備魔法、精霊神器－エクセリオンをエールに装備する！」

祐騎がエールに装備魔法を装備させると、エールの持っている銃の銃身に黄金に輝く宝玉が組み込まれた。

「精霊神器－エクセリオンは、装備したモンスターの攻撃力を半分にすることでダイレクトアタックを可能にする装備魔法だ！
さらに、罠カード、ダブル・ショットを発動して攻撃力を2倍にする！」

《ば、ばかな・・・》

エール（攻４８００→２４００→４８００）

「ガーディアン・エアトス／ブラストでダイレクトアタック！

エクセリオン・ブラスター！」

《今度こそ、これで終わりです！
いっけえええ！》

エールがネクロマンサーにダイレクトアタックを仕掛けると、その攻撃はネクロマンサーを貫通して、地縛神Ｃｃａｐａｃ　Ａｐｕをも貫いた。

ネクロマンサー　ＬＰ２６５０→０

「ハァ、ハァ、なんとか、勝て、た」

ドサッ

《マスター！？》

「祐騎！？」

祐騎はデュエルの決着がつくと、その場で気を失って倒れてしまった。

《くっくっく、まさか、我が倒されるとは、しかしまだ終わりではないぞ！
くくく、はーっはっはっはっはっ！》

ネクロマンサーはそう言って高笑いをしながら、突然現れた闇へと引きずりこまれていった。

「祐騎、しっかりして、祐騎！」

デュエルが終わってようやく体が動くようになった蓮は、倒れた祐騎を抱き上げて起こそうと名前を呼び続けた。

「・・・蓮、さん？」

「祐騎！良かった、本当に良かった・・・」

「・・・蓮さん、どうして、泣いているんですか？」

祐騎が目を覚ますと、蓮は涙を流しながら祐騎を抱きしめた。

「・・・怖かったの、祐騎が居なくなると思ったら、物凄く怖かった。

地縛神との戦いに負けた者は、地縛神の生贄になって命を奪われる、だからアイツが地縛神を召喚したときは本当に怖かった！

もし、負けたら祐騎が死んでしまうと思ったら、恐怖で動けなくなったの・・・

だから、もう無茶しないで、もし祐騎が居なくなったら私は、私は！」

「・・・すみません、それは約束できません」

「なんでよ！なんで、そんなこと言うのよ・・・」

蓮が祐騎の顔を涙を流しながら見ると、祐騎はそんな蓮を見て笑顔で応えた。

「・・・だって、僕は多分、蓮さんに危険が迫ってきたら、迷わ

ず無茶すると思いますから」

「・・・祐騎、なんでアンタがそこまでするのよ」

「・・・蓮さんと同じで僕にとっても、蓮さんは大切な人ですから」

「・・・祐騎（変な感じ、祐騎が傷つくのが嫌のに、なんでこんなに嬉しいの？）」

蓮は祐騎の言葉を受けて、自分が抱く感情に疑問を持ちながら、さらに強く祐騎を抱きしめた。

《エールちゃん、とりあえず祐騎君の治療を、私もファルコンを運んでついていくから》

《あ、は、はい、わかりました！》

《か、かたじけない》

ティルはエールに祐騎を治療ができるところまで運ばせ、蓮はそれについて行き、ティルは怪我で動けなくなっていたファルコンを自分のツタで運んでいった。

こうして、精霊世界での始めてのデュエルが終わった。

第九話　召喚！地に縛られし神の巨人（後書き）

はい、今回の地縛神はコカパク　アプになりました。
最初に出して、入ってるデッキがインフェルニティならコイツしか無いと思ってコカパク　アプを入れました。

今回、出したオリカも説明の所に追加して置きますので、気になる方は見てください

次回は蓮のデュエル回になります。
それでは、次回もよろしくお願いします。

第十話　ブラック・ガーデンの戦い（前書き）

今回は蓮のデュエルになります。

それでは、第十話始まります。

第十話　ブラック・ガーデンの戦い

～霞の谷の横穴内～

祐騎がインフェルニティ・ネクロマンサーを倒してから、すでに3日が経過していた。

闇のデュエルで傷ついた祐騎は、受けた傷自体は深くなかったものの、精神的なダメージが大きかったのかこの3日間眠り続けており、その間蓮はエールと共に祐騎の看病も続けていた。

そして、眠り続ける祐騎を二人に任せてティルはファルコンに頼んでどこかに手紙を送り、その手紙の返事を待っていた。

そして、祐騎が眠り続けて4日が経過した日、眠り続けていた祐騎がやっと目を覚ました。

「・・・すみません、なんだか迷惑を掛けたみたいで」

「・・・さすがに怒るわよ、私達の代わりに戦って，それで倒れたっていうのに迷惑だなんて言わないで」

《そうですよ、それに元々マスターがここに来てアレと戦うことになったのは、私のせいなんですから》

祐騎が自分の看病をしていた蓮達に謝ると、二人は祐騎に謝らないでほしいと言い、祐騎はそんな二人の言葉と雰囲気に何も言い返せなくなった。

「そ、それはそうと、ティルさんはどこに行ったんですか？」

「さぁ、なんかどこかに連絡してたみたいだったけど」

《あら、祐騎君起きたの？
なんて良いタイミングなのかしら》

祐騎と蓮がティルについて話していると、そのティルが部屋の中に入ってきた。

《ティルさん、良いタイミングというのは一体？》

《それは、移動しながら話すから、付いて来てね～》

「付いて行くって、どこによ」

《ふふ～、私の故郷ブラック・ガーデンへよ》

ティルがそう言うと、祐騎とエールは呆然とし、蓮はその単語に驚いた。

「えっ！？ぶ、ブラック・ガーデンって、まさか・・・」

《あら、その反応、もしかしてあの場所になにかあるの？》

「え、ええ、シグナーに関係があるフィールド魔法カードと同じ名前なのよ」

《・・・そう、なら、なおのこと行かないとね～》

蓮がティルの言葉に応えると、蓮は祐騎の方を見て不安そうにしていると、ティルは笑顔でそんな蓮に話の続きをしだした。

《ふふっ、心配しなくても大丈夫よ、そう何度も同じことは起こらないわよ》

「そうよね、わかったわ。
それじゃあ、祐騎歩ける？」

「・・・はい、ちょっとフラつきますが大丈夫です」

「・・・そう、なら行きましょうか」

祐騎が蓮の言葉に応えると、蓮達は祐騎を支えながら霧の谷から出発した。

ちなみに、出発する際にファルコンがせめてもの礼と言って、ミスト・コンドルに祐騎達をブラック・ガーデンまで送るように手配しており、祐騎達はそんなファルコンに礼を言ってからミスト・コンドルに乗ってブラック・ガーデンに向かった。

～ブラック・ガーデン付近の荒野～

ミスト・コンドルは祐騎達をブラック・ガーデンの近くに下ろす

と、霧の谷に戻って行った。

《はい、ここが私の故郷ブラック・ガーデンよ～
それじゃ、早速入って祐騎君の治療をしましょうか》

ティルがそう言って指差した先には、黒い薔薇と茨に覆われた庭園のような場所が広がっていた。

《ティルさん、マスターの治療をここでやるのは何故ですか？
怪我なら霞の谷でも・・・》

《確かにね～、でもここなら怪我だけじゃなくて体力とかも一緒に回復できるから便利なのよね～
それに、私も挨拶しておきたかったし》

そう言うと、ティルは祐騎達を連れてブラック・ガーデンに入っていった。

～ブラック・ガーデン内～

ティルに連れられてブラック・ガーデンの中を歩いていると、向こう側から赤い薔薇を模った服と翼を持ち、顔に仮面を着けたモンスターがやって来た。

《久しぶり、相変わらず元気そうねティル》

《ええ、そっちも相変わらずね～ローズ》

《あの～、ティルさん、こちらの方は・・・？》

エールがティルに相手のことを聞くと、ティルは笑顔で祐騎達に紹介した。

《この子は、私の友人でこのブラック・ガーデンの剪定士、凛天使（りんてし）クイーン・オブ・ローズのローズよ》

《始めまして、あなた達がティルが手紙に書いていた子達ね》

「あ、はい、始めまして」

蓮がローズに挨拶をすると、ローズは蓮を観察するように見た。

「え、えっと、なにか？」

《いえ、ティルが主にした人間がどんな子か気になっただけよ》

《ふふっ、似たもの同士仲良くできると思うんだけど？》

「《ティル、誰と誰が似たもの同士だって？・・・あっ》」

《ふふっ、ほらやっぱり似たもの同士じゃない》

ティルの言葉に蓮とローズが一緒に反論すると、ティルはそんな二人を微笑ましく見守るように見つめた。

《あ、あの、マスターの治療の方はどうなっているんですか？》

《ああ、そういえばそれが目的だったわね、それじゃあ付いて来て頂戴》

ローズがそう言って祐騎と祐騎を支えているエールを案内しようと歩き出すと、背後から爆発音が轟いてきた。

《この感じ、まさか、ここにもアイツ等が攻めてきたんですか！？》

「くっ！それなら僕が・・・」

「駄目！」

エールが霧の谷で感じていた敵の気配と似た気配を感じて驚いていると、祐騎は爆発音の方に行こうとし、そんな祐騎を蓮が強引に引き止めた。

「れ、蓮さん、どうして止めるんですか？」

「・・・そんなの決まってるじゃない。

怪我人に無茶なんてさせられないし、なにより私は守られるだけってのは嫌なのよ」

そう言って、蓮は祐騎をエールとローズに預けた。

「・・・アレの相手は私がやるから、祐騎のことお願い」

《わかった、この子のことは任せて。
それから、これを持っていって頂戴》

ローズはそう言うと、蓮に自分のカードを渡した。

《ここは私達の故郷なのよ、いくらティルの主といえど任せきりには出来ない。
だから、せめて私の力を使って頂戴》

「ありがとう、それじゃ行って来るわ。
それから祐騎、アンタは私のことは気にせずに自分の体を治すことを優先させること、いいわね？」

蓮が祐騎に向かって念を押すと、祐騎は諦めたような顔をして頷いた。

「・・・はい、解ってます。
蓮さんも気をつけてくださいね」

「ええ、解ってるわよ、それじゃ行くわよティル！」

《ええ、私の故郷を攻撃するなんて、ちょっとお仕置きが必要みたいね～》

蓮の言葉にティルはいつもは見せない真剣な顔をして蓮と一緒に爆発音のした方に向かって行った。

《さてと、それじゃあ私達も行こうか》

《は、はい、解りました！》

蓮達を後ろ姿を見ながらローズが促すと、エールが祐騎を支えてローズの後をついて行った。

～ブラック・ガーデン入り口～

蓮とティルが爆発の有った場所に着くと、そこにはブラック・ガーデンの茨を破壊し続けている神獣王バルバロスがいた。

「あれは、バルバロス！？」

《あん？なんで此処に人間の女が居るんだよ》

蓮が驚いて声を挙げると、その声を聞いたバルバロスは蓮の方を向いて威嚇してきた。

「・・・それは、こっちのセリフよ。
なんで、アンタが此処を攻撃してるのか教えてもらえないかしら？」

《はん！そんなもん此処にある石版をぶっ壊しに来たついでに、目障りなモンを片っ端から壊してるだけだっての》

「石版って、やっぱりアンタ、ネクロマンサーの仲間ね？」

蓮がそう言うと、バルバロスは蓮のことを睨み臨戦態勢に入った。

《・・・そうか、お前、あの陰険野郎を倒したって男の仲間か。話は聞いてるぜ、丁度良いここでお前らを倒せばあとは楽できるってもんだ！》

「そんなこと、やらせないわよ（話を聞いてるってことは、やっぱりコイツ以外にもまだ居るってことか）」

バルバロスの言葉に、蓮はバルバロス以外にも敵が居ることを心配しながらもデュエルディスクを構えた。

《へっ！止められるもんなら止めてみな！》

「《デュエル！》」

バルバロス　ＬＰ４０００

蓮　ＬＰ４０００

蓮がデュエルディスクを構えると、バルバロスの腕にデュエルディスクが現れた。

そして、バルバロスの先攻でデュエルが始まった。

《俺のターン！ドロー！

手札からフィールド魔法、フューチャー・ヴィジョンを発動！》

バルバロスがフィールド魔法を発動させると、周囲が不可思議な空間に包まれた。

《フューチャー・ヴィジョンの効果により、このカードが場にある限り召喚したモンスターは次のターンまでゲームから除外される。さらに、俺は手札から俺自身を効果により生贄なしで召喚！そして、俺が生贄なしで召喚されたとき攻撃力が１９００ポイントになるが、フューチャー・ヴィジョンの効果で除外される》

バルバロスが自分のフィールドに自分のカードである神獣王バルバロス（攻／守３０００↓１９００／１２００）を召喚すると、召喚されたバルバロスはすぐに除外されフィールドから居なくなった。

《そして、カードを1枚伏せてターンエンドだ》

バルバロス　手札３枚

「私のターン！ドロー！
手札から速攻魔法、偽りの種を発動！
手札のイービル・ソーンを特殊召喚！フューチャー・ヴィジョンの効果対象は通常召喚のみ、よってイービル・ソーンは除外されない」

「そして、イービル・ソーンを生贄にして３００ポイントのダメージを与え、デッキから2体のイービル・ソーンを攻撃表示で特殊召喚！」

《ぐっ！》

バルバロス　ＬＰ４０００→３７００

「さらに、イービル・ソーン2体を生贄にしてモンスターをセットして、私はカードを1枚伏せてターンエンド！」

蓮　手札2枚

《俺のターン！ドロー！
この瞬間、除外されていた俺がフィールドに戻る。
もっとも、一度場を離れたことで攻撃力は元々の３０００に戻っているがな》

神獣王バルバロス（攻１９００→３０００）

《俺はモンスターをセットして、俺自身に装備魔法メテオ・ストライクを装備してセットモンスターを攻撃だ！
トルネード・シェイバー！》

「リバースカードオープン！罠カード聖なるバリアー ミラーフォースを発動、このカードの効果で攻撃した相手の場の攻撃表示モンスターを全て破壊する！」

蓮が獣神王バルバロスの攻撃に対して罠カードを発動させると、バルバロスは蓮を鼻で笑って自分の場の伏せカードを発動させた。

《はっ！そんな見え透いた手に乗るかよ、カウンター罠、神の宣

告を発動！
ライフを半分にして、その罠カードを無効にするぜ》

「しまった！？」

バルバロス　ＬＰ３７００→１８５０

《おら！消えな、この雑魚が！》

「くぅっ！だ、だけど、私のセットモンスターはフェニキシアン・クラスター・アマリリス、よって効果により、相手に８００ポイントのダメージを与える・・・」

バルバロスの攻撃は装備魔法の効果により、セットモンスターであるフェニキシアン・クラスター・アマリリスを貫通して蓮に襲い掛かり、蓮の制服を切り裂き、髪留めのゴムを吹き飛ばして蓮の髪が解けてしまった。

蓮　ＬＰ４０００→１０００

バルバロス　ＬＰ１８５０→１０５０

《どうだ！さっさとサレンダーして、あの陰険野郎を倒したっていう男を連れて来な！》

「・・・冗談じゃないわよ」

《あん？》

「もう二度と、あんな思いなんか、してたまるかぁ！」

《!?チッ、俺はこれでターンエンドだ》

バルバロス　手札２枚

バルバロスが蓮に向かって、降参して祐騎と戦わせろと言うと、蓮は解けて目元が隠れるほどの前髪から覗く怒りに染まった眼でバルバロスを睨むと、バルバロスはその眼光に気圧され後ずさりした。

「私のターン、ドロー
手札から強欲な壺を発動してさらに２枚ドロー。
そして永続魔法、生還の宝札を発動、さらに死者転生を発動して手札のフェニキシアン・シードを墓地に送り墓地のフェニキシアン・クラスター・アマリリスを手札に戻す」

「そして、死者蘇生を発動してフェニキシアン・シード（攻／守８００／０）を蘇生召喚、生還の宝札の効果でデッキから１枚ドローし、場のフェニキシアン・シードの効果を発動して、フェニキシアン・シードを墓地に送ることで、手札からフェニキシアン・クラスター・アマリリスを攻撃表示で特殊召喚する」

蓮は鋭い視線をバルバロスに向け、先ほどとは別人のような静かで淡々とした動作で場にモンスターを召喚した。

「バトル、アマリリスでセットモンスターを攻撃！
フレイムペタル！」

《セットモンスターは素早いモモンガだ！効果でライフを１００ポイント回復して同名カードを２枚セット！》

「アマリリスは自身の効果で破壊、そして破壊されたことで相手に８００ポイントのダメージを与える。
スキャッター・フレイム！」

《チィッ！（なんなんだこの女、急に態度が変わりやがって気味が悪いな）》

バルバロス　ＬＰ１０５０→２０５０→１２５０

バルバロスがモンスターを増やしても蓮は反応を見せず、そんな蓮にバルバロスは不気味がった。

「・・・私はモンスターをセットし、カードを１枚伏せてターンを終了する。
そして、エンドフェイズ時に墓地のイービル・ソーンを除外して、アマリリスを守備表示で蘇生召喚、さらに生還の宝札でカードをドロー」

蓮　手札１枚

《俺のターン！ドロー！
！？はーっはっは、これでお前はもう終わりだ！
場のモモンガ２体を生贄にして、モンスターカードをセットするぜ！》

「・・・」

バルバロスが高笑いをしてカードをセットすると、蓮はそのカー

ドからの嫌な雰囲気に眉を寄せた。

《そして、俺自身でセットモンスターを攻撃だ！》

「セットモンスターはロードポイズン、効果により墓地のイービル・ソーンを蘇生召喚、さらに罠カード、ガード・ブロックを発動して戦闘によるダメージを0にしてデッキからカードをドロー、そして生還の宝札の効果でカードをドロー」

《チッ！俺はカードを1枚セットしてターンエンドだ》

バルバロス　手札3枚

「私のターン、ドロー
場の2体を生贄にしてモンスターをセット、さらにカードを2枚伏せてターンエンド。
そして、二枚目のイービル・ソーンを除外してアマリリスを守備表示で蘇生召喚、さらに生還の宝札でドロー」

《おっと、その前にリバースカードオープン！
罠カード強制脱出装置（きょうせいだっしゅつそうち）、このカードの効果でお前のフェニキシアン・クラスター・アマリリスを手札に戻すぜ！》

「・・・」

バルバロスがアマリリスを手札に戻しても、蓮は已然バルバロスを睨んだままターンを終えた。

蓮　手札2枚

《俺のターン！ドロー！
セットモンスターを反転召喚！セットモンスターは地縛神（じばくしん）　Ｃｕｓｉｌｌｕ（クシル）（攻／守２８００／２４００）だ！》

バルバロスがセットモンスターを反転させると、フィールドに巨大なサルのモンスターが現れた。

《はーっはっはっは、これで俺の勝ちだ！
バトｒ「・・・リバースカードオープン」チィッ！》

「バトルフェイズに入る前に罠カード、百花繚乱（ひゃっかりょうらん）ー桜（さくら）の舞（まい）を発動。このカードは手札から植物族モンスター１体を墓地に送り、相手のバトルフェイズをスキップさせる。
そして、墓地に送られたモンスターはこのターンのエンドフェイズに墓地から特殊召喚され、次のターンのエンドフェイズに破壊される」

蓮が罠カードを発動して、手札のカードを墓地に送ると、バルバロスは鬱陶しそうな表情で蓮を睨んだ。

《チッ！なら俺はカードをセットしてターンを終了する（まあ良い、俺が伏せたのは罠カード魔法の筒（マジックシリンダー）、もし次のターンで俺を倒せるモンスターを出してもこれで攻撃をそのまま返してやる！）》

「なら、ターン終了前に永続罠、オーバー・デッド・ラインを発動、このカードは発動後２ターン後に破壊されるが、このカードが場にある限り墓地から特殊召喚した植物族モンスターの攻撃力を１０００ポイントアップする」

蓮はバルバロスがターンを終了させようとするのを止めて、蓮が罠カードを発動させるとバルバロスは苦虫を噛み潰したような顔をした。

「そして、このターンのエンドフェイズに桜の舞の効果で墓地に送られたモンスターを蘇生召喚する」

「私が墓地に送ったモンスター、凛天使（りんてんし）クイーン・オブ・ローズ（攻／守２４００／１３００）を蘇生召喚。
そして、オーバー・デッド・ラインの効果で攻撃力を１０００ポイントアップする」

クイーン・オブ・ローズ（攻２４００→３４００）

《攻撃力３４００のモンスターだと!?》

バルバロスは蓮が自分の攻撃力を超えるモンスターを召喚したことに驚き、蓮はそんなバルバロスを鋭い眼で睨み続けていた。

「さらに、私の墓地から蘇生召喚したことで生還の宝札でドロー、これでエンドフェイズに入る」

《・・・（おいおい、なんだよこれ、今はまだ俺のターンだろ、なんでコイツのターンみたいになってんだよ!?）》

バルバロス　手札２枚

バルバロスは自分のターンのエンドフェイズなのにも関わらず、

蓮が自分のターンのように進めることに恐怖心を抱きだした。

「私のターン、ドロー
私のターンのスタンバイフェイズを迎えたことで、凛天使クイーン・オブ・ローズの効果が発動する。
凛天使クイーン・オブ・ローズは自分のターンのスタンバイフェイズに1度だけフィールド上で1番攻撃力の低いモンスター1体を破壊する」

《1番低いモンスターを破壊するだと？
!?、ま、まさか、これを狙ってやがったのか!?》

バルバロスは蓮の言葉にフィールドを確認すると、青ざめそんなバルバロスの姿に蓮は口の端だけを吊り上げただけの冷たい笑顔を浮かべた。

「フィールド上で1番攻撃力の低いのは、地縛神Ｃｕｓｉｌｌｕの２８００ポイント、よってクイーン・オブ・ローズの効果で地縛神Ｃｕｓｉｌｌｕを破壊する！
断罪の剪定（コンヴィクション・トリマー）！」

蓮の声をきっかけに、クイーン・オブ・ローズが地縛神Ｃｕｓｉｌｌｕに近づき通り抜けると、地縛神Ｃｕｓｉｌｌｕはバラバラに切り刻まれ破壊された。

《クソッ！（だが、まだ俺の場には俺自身に罠カードもある、このターンを凌げば、まだチャンスがある！）》

「私はセットモンスター、椿姫ティタニアルを反転召喚
さらに、罠カード、リビングデッドの呼び声を発動して墓地のロ

ードポイズンを蘇生召喚、そしてオーバー・デッド・ラインで攻撃力１０００ポイントアップして、生還の宝札で１枚ドローする」

ロードポイズン（攻１５００→２５００）

《本当に、なんなんだよコイツは！？》

蓮がフィールド魔法の効果を受けないようにモンスターをそろえ自分を睨む姿に、バルバロスは先ほどよりも強い恐怖心に襲われた。

「バトル、凛天使クイーン・オブ・ローズで神獣王バルバロスを攻撃！
薔薇剪定斬（ローズ・トリマー）！」

《させるか！リバースカードオープン、罠カード魔法の筒！》

「・・・場のカードを対象にする効果のカードが発動したことで、椿姫ティタニアルの効果を発動、ロードポイズンを生贄にして効果の発動を無効にして破壊する」

《なんだとぉ！？》

バルバロスが罠カードを発動させると、蓮はそんなバルバロスを睨みながらティルの効果でそれを無効にし、そんな蓮を横目にティルもバルバロスへの怒りに顔を歪ませていた。

《・・・最近、祐騎君のおかげで良い笑顔が見れてたのに、アンタのせいで昔の蓮に戻ってしまったじゃない、この罪はその存在で償いなさい》

「バトル再開、クイーン・オブ・ローズで神獣王バルバロス破壊」

《な!?グゥウウッ!》

バルバロス　ＬＰ１２５０→８５０

「そして、ティタニアルでとどめ!」

《・・・消えなさい!》

蓮の掛け声と共にバルバロスに攻撃したティルの眼は、蓮を傷つけたバルバロスと守れなかった自分への怒りに満ちており、ティルはそんな自分を消し去るようにバルバロスを攻撃した。

《グゥアアアアアアッ!!》

バルバロス　ＬＰ８５０→０

ティルの攻撃によってバルバロスは地面に倒れ、デュエルは終了した。

《・・・ふざけんな、なんで俺が人間の女なんぞに、やられなきゃいけねぇんだよぉ!》

《うるさいわね、負けたんだからさっさと消えなさい!》

《ガアアアアアアア!!》

ティルは地面に倒れて悔しがっているバルバロスに、とどめの一

撃を喰らわせると、バルバロスは断末魔の叫びを上げて消滅した。

「・・・ティル」

《・・・蓮、もう終わったんだから、早く祐騎君のところに行きましょう？》

「・・・うん」

ティルは蓮がデュエルが終わってから、ずっと虚ろな眼をしているのを見て、蓮を支えながら祐騎達のところへと急いだ。

第十話　ブラック・ガーデンの戦い（後書き）

今回はこんな感じになりました。

次回はデュエル無しの会話回になると思います。

それと、大学の課題が多くなってきてるので更新が遅くなるかも知れませんが、これからもよろしくお願いします。

それでは、また次回！

第十一話　帰還とお願い（前書き）

今回はデュエル無しの会話回です。

あと、野良猫さんの作品とのコラボ作品の視点をこの作品主体に変えているので、編集でき次第投稿したいと思います。

それでは、第十一話始まります。

第十一話　帰還とお願い

～ブラック・ガーデン中心部～

蓮がバルバロスとのデュエルを終えて、祐騎達が連れて行かれたブラック・ガーデンの中心部に向かっていると、ローズがやって来た。

《・・・何が起きたのかは聞かないけど、とりあえず怪我の治療をするからついて来て頂戴》

「・・・うん、解った」

ローズは先程とまるで別人のような、暗く力の無い眼をした蓮を見て、話を聞くよりも先に治療を先にした方が良いという結論に至り、蓮を治療用の植物が生えているところに連れて行き、そんな蓮の姿を見たエールがティルに質問した。

《あの、ティルさん、蓮さんに何があったんですか？まるで別人の様になってますけど・・・》

《・・・ちょっとね、嫌なことがあって、昔の両親に拒絶されたころの蓮に戻ってしまっただけだから、少し時間が経てば元の蓮に戻ってくれるはず》

ティルは、エールに言った自分の言葉の内容を考えてすぐにそれを否定した。

《・・・いえ、やはり祐騎君が居ないと駄目ね、今の蓮は祐騎君や優奈さんのような自分の存在を認めて受け入れてくれる存在が必要なの。
だから、エールちゃん、お願い！》

《蓮のためにも、祐騎君のことを守って頂戴！》

ティルがそう言って頭を下げると、エールはそんなティルに向かって笑顔で頭を上げる様に言った。

《マスターを守ることは私にとって当然のことですし、蓮さんも私にとって大切な友人です。
ですから、私に出来ることでしたら、何でも言ってください》

《・・・ありがとう、エールちゃん》

ティルがエールに礼を言うと、エールは何かを思い出した様に声を挙げた。

《あっ！でも、ティルさんも蓮さんにとって大切な方なんですから、無理とかはしないでくださいね？》

《ふふっ、もちろんよ、私も蓮が悲しむ姿はもう見たくないからね？
それじゃ、暗い話はこれまでにして祐騎君と蓮のところに行きましょうか》

《ええ、そうしましょう！》

エールとティルは話が終わると、お互い微笑みながら祐騎達のと

ころへ向かって行った。

エールとティルが祐騎達のところにやって来ると、祐騎と蓮が植物で出来たベッドの上で眠っており、その周りに甘い香りを放っている植物が置かれて、少し離れたところでローズが二人のことを見ていた。

《・・・ローズ、二人の様子はどう?》

《そうね、体に付けられた傷は大したことは無かったわね、そこは手紙に書いてあった通り、でも精神的なダメージが予想してたよりも大きかったから、今はリラクゼーション効果のある植物の香りを嗅がせながら眠ってもらってるわ》

そう言って、ローズはベッドに寝ている二人を指差し、そんなローズに対してエールが質問した。

《あの、二人はいつごろ眼を覚まされるんですか?》

《・・・そうね、早くて二日、長くても十日あれば眼を覚ますでしょ》

《と、十日!?そんなに眠ったままになるんですか!?》

エールがローズの言葉に驚いくと、ティルはそんなエールを見て

苦笑しながら続きを説明した。

《エールちゃん、あくまでも最大の話よ、それにその間は二人が無茶しないことは決まってるんだし、その間に私達だけでやれることをやっておきましょう？》

《そ、そうですね、わかりました！》

こうして、地縛神との戦いで傷ついて二人は精神のダメージの回復と怪我の治療のため眠り続け、その間エール達は他の種族の集落に地縛神や石版について知らせたりして情報収集に動きだした。

そして、祐騎達が眠り出して三日後二人は目を覚まし、眠っていた場所でお互いが眠る前のことについて話し合っていた。

「・・・まさか、私までそんなに寝てただなんて」

「まぁ、それでも蓮さんが無事でよかったですよ。僕はここに連れてこられてすぐに眠ってしまったので、何も知らなかったんですから」

「私も同じよ、でも長い間寝てたからかな、寝る前の嫌な感じがなくなって良い感じなのよね」

「そうですね、僕も疲れとかがすっかり取れてます」

《二人とも、もう大丈夫ですか?》

祐騎と蓮が話していると、エールがやって来て祐騎達に話しかけた。

「ずっと眠っちゃってて、ごめんねエール、でももう大丈夫だよ」

《そうですか、それは良かったです。
あ!そうそう、お二人に見て欲しい物があるんですが・・・》

「見て欲しい物って?」

《はい、これなんですが・・・》

蓮がエールに何を見て欲しいのかと言うと、エールは手に持っていた2枚の白地のモンスターカードを祐騎達に渡した。

「白地のカード?
初めてみたけど、この絵柄どこかで見たような?」

「・・・スターダストよ」

「え!?
そういえば、あの石版の絵と同じですけど、なんでカードになってるんですか?」

「・・・私にもわからないわよ、それにこっちのカードはブラック・ローズじゃない、もう訳わかんないわよ!」

蓮は渡された2枚のカードを見て頭を抱え、そんな蓮を祐騎は落ち着けてエールに詳しい話を聞いた。

「蓮さん、落ち着いてください、まずは話を聞きましょうよ」

「・・・うん、ごめん、それでエールこのカードどうしたの？」

《はい、実はお二人が眠っている間に、他の種族の住処に石版が存在していないかどうかの調査をしていたんですけど、その調査をしだしてすぐに、ここにあった石版が光を放って、その光が収まると石版があったところにその薔薇の様な姿のドラゴンのカードがあったんです》

《それで、なぜいきなりカードになったのか疑問に思って、霞の谷の方の石版を確認しに行こうとしたときに、先にファルコンさんがこちらの白いドラゴンのカードを持って来てくれたんです》

エールがそう言うと、蓮は悩み出し、祐騎は物珍しそうに2枚のカードを眺めていると、ティルとローズがやって来た。

《二人とも、もう大丈夫みたいね～》

「あ、はい、ティルさんご心配をおかけしましたが、もう大丈夫です」

《それはそうと、やっぱり私のマスターはそのカードに夢中みたいね～》

そう言いいながら、ティルは蓮の方を向いて嬉しそうに微笑んだ。

《まったく、病み上がりだというのに無茶をして倒れないで頂戴よ？》

「・・・心配しなくても、そんな無茶しないわよ。私が無茶すると、それ以上の無茶をするのがここに居るしね？」

蓮はローズの言葉に反応すると、自分の横で2枚のカードを眺めている祐騎を見て苦笑した。

《そう、それならいいわ。そうそう、二人が眠っている間に解ったことを話しておくわね？まず、その2枚のカードになった石版と同じものが四箇所で発見されたの、一つ目は悪魔族の集落に、二つ目は古の森の最奥に、三つ目は機械族の工場にあったのだけど、これは石版ではなく鉄板に刻まれていたの、それで最後の四つ目は黒い羽の鳥獣族の住処にあったわ。

そして、この石版達はまだカードにはなってなかったわよ》

「・・・見事にシグナー関係ね、どこになんのドラゴンの石版が有るのか丸解りよ」

「というか、三つ目の鉄板って・・・」

「・・・そのドラゴンは実際にはドラゴン族じゃなくて機械族だから、じゃないのかしら？」

「・・・そういう問題ですか？」

ローズからの話を聞いて、祐騎が疑問に思ったことを口にして、それに蓮が応えるが結局は二人して悩む形になり、そんな二人をエ

ール達は微笑ましく見守っていた。

《そうそう、それから、私達は一端人間世界に戻ることになったからね～》

「「はぁ！？」」

ティルがいきなり人間世界に戻ると言ったので、祐騎と蓮は驚いてティルを見た。

「な、なんでよ、まだ敵が居るのは解ってるんだから、ここで戻るなんて・・・」

《あのね、この世界は元々私達精霊の世界なのよ、マスター達に頼りっきりになるわけにはいかないの、それに二人は学生なんだから、いい加減戻らないと問題になるでしょう？》

「そ、それは、そうだけど・・・」

蓮がティルの言葉に言葉を濁していると、こんどはローズが蓮に話しかけた。

《私達のために戦ってくれるのはありがたいけど、それでもあなた達にこれ以上の迷惑は掛けたくないの。
もし、私達の手に負えない事態になったら申し訳ないけど、連絡するからその時は手を貸してくれない？》

「・・・本当にいいの？」

蓮がローズに聞くと、ローズだけでなくエールとティルも頷いた。

「解った、けど戻るのには1つ条件があるんだけど」

「《《《条件？》》》」

蓮がそう言うと、祐騎達はそろって蓮に聞き返し、そんな祐騎達を苦笑しながら蓮がその条件を告げると、ローズを残して祐騎達は精霊世界から姿を消した。

～I&I社会長室～

祐騎達が精霊世界から消えたころ、I&I社の会長室では優奈がI&I社の名誉会長であるペガサスと会話していた。

「どうしたのデスカ？Ms．優奈、最近元気がありませ～ン。なにか、悩みがあるのではないのデスカ？」

「・・・はい、実はここ数日私の弟の祐君と、その友達の蓮ちゃんが行方不明になったという連絡がありまして、それで・・・」

「・・・そうデスカ、それは心配デスネ」

優奈がペガサスと話をしていると、いきなり部屋の中が光に包まれた。

「ホワッツ!?なにごとデ～ス！」

「・・・いきなり、ここってどうなってんのよ」

部屋を包んだ光が収まると、部屋の中に祐騎と蓮がいた。

「祐君、それに蓮ちゃん!?なんでここに、っというかどうやって!?」

「・・・姉さん、質問するのに抱きつく必要が有るのかわからないんだけど」

「・・・それに、なんで私にも一緒に抱きつくんですか」

優奈は祐騎達がいきなり現れたことに驚きつつも、祐騎と蓮に抱きつき、それに祐騎達がツッコンでいると、ペガサスがいち早く正気に戻り、異常を感知してこの部屋に来ようとしていた警備員を下がらせて、祐騎達に質問した。

「Ｏｈ、アナタ達がＭｓ．優奈がいつも楽しそうに話している、祐騎ボーイにその友人のＭｓ．蓮デスネ?
どうやってここに入ってきたのかは私も気になりマ～ス。
Ｂｕｔ、それよりも先に、なぜここに来たのかを教えてもらいたいのデ～ス」

「それは、私も聞きたいな。

それに、この数日どこに行っていたのかも教えてくれるよね？」

祐騎達が優奈から離れると、ペガサスが真剣な表情をしてなぜここに来たのかを聞き、それにあわせるように真剣な顔になった優奈が質問した。

「・・・信じてもらえるか解りませんけど、それでもいいなら」

「・・・蓮ちゃん、まさかそれって、アノ事に関係あることなの？」

「・・・（コク）」

優奈が蓮に聞くと、蓮は首を縦に振るだけの返事をして、ペガサスと優奈に精霊世界での出来事や自分についてのことを主にペガサスに話した。

「・・・アンビリ～バボー、デュエルモンスターズの精霊の世界だけではなく、平行世界のＡｎｏｔｈｅｒ　Ｗｏｒｌｄまで存在しているとは、さらにはその世界ではこの世界がトゥーンになっているなどと、私でもＭｓ．蓮の話を直に聞いた今でも信じられないデ～ス」

「・・・それで、二人とも本当に体はもう大丈夫なの？」

「うん、もう体は大丈夫だよ姉さん」

ペガサスは蓮が話した内容を全部信じていないようなことを言っている側で、優奈は祐騎達の心配をしていた。

「・・・やっぱり、信じてもらえませんよね？」

「・・・たしかにＭｓ．蓮の話はにわかに信じられまセーン。Ｂｕｔ、Ｍｓ．蓮の眼は嘘を言ってはいまセーン、ですから私はアナタを信じマース」

「あ、ありがとうございます！」

「祐君と蓮ちゃんが行方不明になった理由は解ったけど、ここに来た理由ってなんなの？」

優奈がそう言うと、蓮は真剣な顔でペガサスを見ながら口を開いた。

「実は、ペガサス会長にお願いがあってここに飛ばしてもらったんです」

「お願いデスカ？」

「はい、その願いとは、ペガサス会長の力でシンクロモンスターを創ってもらいたいんです！」

「「「シンクロモンスターを！？」」」

蓮が言ったことに祐騎を含めて部屋の中の人間は全て驚き、蓮はそんな状態でもじっとペガサスを見ていた。

「私も先ほどの話を聞いて、未来のカードについての興味はかなりありマ～ス。

Ｂｕｔ、しかし創るといってもどんなカードか解らない状態では

創ることは出来ませ～ン、せめて見本になるカードがあればいいのデスガ・・・」

「有りますよ、見本のカード」

「ホワッツ!?本当デスカ!」

祐騎がペガサスの言葉に反応して、デッキケースの中からカードになっていたスターダストのカードをペガサスに渡した。

「・・・これが、シンクロモンスターなのデスネ、とてもビューティフォー、すばらしいデ～ス。
なるほど、これが話に出てきた石版のカードなのですネ?」

「はい、それで創ってもらえるんですか?」

「オフコース!もちろんデ～ス。
Ｂｕｔ、それでも我々だけでは限界がありマース、そこであなた達に手伝ってほしいのデ～ス、よろしいデスカ?」

「はい!もちろん喜んでお手伝いさせてもらいます!」

「蓮さんがやるなら、僕も微力ながら手伝わせてもらいます」

ペガサスが二人に製作の手伝いを頼むと、蓮は二つ返事で了承し、祐騎はそんな蓮についていく形で同意した。

「では、製作に取り掛かる前に、Ｙｏｕ達は一度デュエルアカデミアに戻るのデース、こちらの準備が整い次第連絡しマース。
それから、Ｍｒ．鮫島には二人は我が社の手伝いのために学校を

休むと伝えておきマース、いままでのこともうまく誤魔化しておくので安心してくだサーイ」

「なにから、なにまでありがとうございます！」

「ふふっ、それじゃあ会長、私は二人を応接室に連れて行きますから、後のことよろしくおねがいしますね？」

そう言って、優奈は祐騎達を連れて部屋から出ていき、部屋の中にはペガサスだけになった。

「・・・新しいカード達に出会うのは本当に楽しみデース、しかしそれ以上にあのボーイ達に不幸が訪れないと良いのデスガ」

ペガサスはそう呟くと、デュエルアカデミアに電話を掛けた。

第十一話　帰還とお願い（後書き）

はい、どうだったでしょうか、次回はレイの話になります。

次回が先か、コラボが先かわかりませんがこれからもよろしくお願いします。

では、また次回！

番外編～超展開！？作品を越えた絆～（前書き）

今回は野良猫さんの作品である『精霊と転生者』とのコラボ作品です。

これは、野良猫さんの作品のところにあるものを、私の作品として編集したものです。

話の視点等を変更してますので、基本的な流れ以外は別の作品と思って読んでください。

それでは、番外編コラボ作品、始まります。

番外編～超展開！？作品を越えた絆～

ｓｉｄｅ祐騎

「・・・誰も居ないなんてどうしたんだろ？」

祐騎がいつものように目を覚まして自分の部屋から出ると、いつもなら聞こえてくるレッド寮の生徒の声が聞こえず、周囲の部屋にも誰も居ないことに疑問を抱きながら、とりあえず朝食を食べるために食堂に向かった。

「まぁ、考えてても仕方ないよね、とりあえずご飯でも食べてから校舎に行ってみようかな？」

ガラッ

「おはよう」

「あ、おはようございます（あれ？こんな人、レッド寮に居たかな？）」

祐騎が食堂に入ると、そこには先に朝食を食べているレッドの制服を着た見慣れない少年が居た。

「とりあえず、飯食おうぜ」

「・・・そうですね、失礼します（忘れてるだけかな？でも、こんなに存在感のある人なら忘れるわけないんだけど、三沢君じゃあ

るまいし）」

祐騎はとりあえずその少年と向かい合う形で座って食事を始めた。

「・・・ニーサン」

「えっ、なんか言いました？」

「いや、なんでもない・・・」

突然、少年が意味不明なことを言い、祐騎がそれを聞きなおすと、少年は誤魔化して食事を再開した。

「あの・・・他の人たちってどこにいるんでしょうか？」

「俺も知らないな・・・まあ、飯食ってから考えようぜ」

祐騎が他の人たちのことを少年に聞くと、少年も知らないと応え、それを聞いて祐騎は少し肩を落とした。

「分かりました・・・あ、僕の名前は甲斐祐騎（かいゆうき）って言います（忘れてるだけかも知れないけど、挨拶はしとかないとね）」

「俺は永嶺八雲（ながみねやくも）だ、好きなように呼んでくれ…」

祐騎が忘れているだけかどうか、確認する意味も込めて自己紹介すると、少年は八雲と名乗り祐騎はそれで本当に知らない人だと認識し、食事を再開した。

「メザシうめぇ～」

「ですね～（・・・蓮さんは大丈夫かな～）」

祐騎は表面上はいつもと変わらない雰囲気で食事を続け、心の中では蓮のことを心配していた。

ｓｉｄｅ蓮

「まったく、どうなってるのかしら、平日なのに人っ子一人見えないなんて」

蓮はブルー寮の自分の部屋から、校舎前まで来るのに誰にも会わなかったことを疑問に思い、とりあえずレッド寮の祐騎のところに行こうとしていると、茶髪で小柄な少女が校舎の前でキョロキョロしているのを見つけた。

「（あんな子、ブルーにいたかしら?）ねぇ、ちょっといいかしら?」

「は、はい!?」

蓮が声を掛けると、その少女は驚いて蓮の方を向き、蓮はその少女が某魔砲少女アニメのは○てにそっくりだったことに驚いた。

「・・・（な、なんで、ここには○てが!?そりゃ私の外見もシ○ナムみたいになってるけど、まさか新しいイレギュラー!?）」

「あの、どうしたんですか？」

蓮が自分の思考の中に潜っていると、その少女が話し掛けてきたことで正気に戻ったが、その少女が関西弁では無かったことで、また少し驚いた。

「・・・関西弁じゃ、ない？（そ、そうよね、イレギュラーだったとしても、この世界には〇てが居るわけないわよね）」

「あ、ごめんなさい・・・知り合いに似ていたものだから」

蓮がその少女が関西弁を話さないことに驚き、そのことを口に出してしまいその少女が不思議そうな顔で自分を見てくるのに気づいた蓮は、そのことをすぐに誤魔化した。

「いえ、お気になさらず・・・それで、どうかしたんですか？」

「・・・ええ、今日は平日なのにまったく人がいないでしょ？そんな中であなたを見つけたから声を掛けたのよ（もしかしたら、この子が原因かも知れないし、一応聞いておいた方が良いわよね）」

「えっと、私も今日は誰も見てないんですよ・・・」

「そうなの・・・困ったわね（・・・この子が原因じゃないとするといったい何が？）」

蓮が少女に今の状況について聞くと、少女もわからないと言い、蓮はまた考え込んでいると今度は少女が話しかけた。

「あの・・・これからレッド寮の友達のところに行くんですけど、

一緒に行きませんか？」

「ちょうどいいわ、私もこれからレッド寮に行こうと思ってたの（この子がレッド寮に行くならちょうど良いわね、ついでに祐騎にも事情を聞きましょうか）」

「さあ、行きましょう・・・」

「あ、待ってください・・・私は1年の月代奏（つきしろかなで）って言います」

蓮がレッド寮に向かって歩き出そうとすると、奏が蓮を呼び止め自己紹介をした。

「そう言えば自己紹介がまだだったわね・・・
私も1年で、名前は紅龍蓮（くりゅうれん）、好きに呼んでくれて結構よ」

「よろしくお願いします、蓮さん」

「ええ、こちらこそよろしくね、奏」

二人は挨拶を終えると、レッド寮に向かって歩き出した。

ｓｉｄｅ祐騎

「食後のお茶は格別にうまいよな～」

「そうですね～、日本人に生まれてよかったです」

祐騎と八雲は食事をしながらお互いのことや、最近起こったことなどを話しながら食べ終えて、食後の一杯を飲んでいると、どこからかクリボーに似た精霊が現れ、八雲のところに近づいていった。

《クリ～》

「えっ？それってもしかして、デュエルモンスターズの精霊ですか！？」

祐騎がその存在に驚いていると、その精霊のことを八雲が紹介した。

「そうだ、コイツは俺の相棒ホシクリボー、よろしくな」

《クリー！》

「あ、よろしくね、ホシクリボー（見たことないモンスターだけど、十代君のハネクリボーも会うまでは見たことなかったし、珍しいカードの精霊なのかな？）」

祐騎がホシクリボーのことを物珍しそうに眺めていると、ホシクリボーが手紙を持っていることに気がついた。

「あれ？八雲君、ホシクリボーが手紙持ってるよ」

「マジで？ちょっと貸してくれ」

八雲がホシクリボーの持っていた手紙を確かめていると、どこからかエールがやって来て祐騎に話しかけた。

《マスター、ここにいたんですか・・・》

「あ、エール、おはよう」

《おはようございます、マスター。こちらの方は?》

エールが八雲について祐騎に質問すると、当の本人である八雲自身がエールに自己紹介した。

「俺は永嶺八雲だ・・・よろしくな、ガーディアン・エアトスの精霊さん」

《!!・・・あなたも、私が見えるのですか!?》

エールは自分の姿が八雲にも見えることに驚いていると、八雲は自分の側に居たホシクリボーを指差してエールに紹介した。

「一応な・・・コイツはホシクリボーだ、よろしく頼む」

《クリー!》

《ど、どうも・・・私はエールと申します、こちらこそよろしくお願いします》

エールが八雲とホシクリボーとの挨拶を終えると、祐騎はエールに質問した。

「ところで、どうしたのエール?僕を探していたみたいだけど・・・」

《あ！そうでした・・・さっき黒猫にこの手紙をマスターに渡せって頼まれたんですよ》

そう言って、エールは祐騎に八雲が持っているものと同じ手紙を渡した。

「もしかして・・・」

「ああ、同一人物からの可能性が高いな・・・」

祐騎達はその手紙が、なぜ送られて来たのかを疑問に思ったがとりあえず読んでみることにした。

「とりあえず、読んでみようぜ」

「そうですね」

「え～と、
「ここはどちらの世界でもない世界です。元の世界に帰りたいなら2人でデュエルしてください。
勝敗に関係なく帰れますけど、負けたら罰ゲームですよ。アハッ♪」

・・・何じゃこりゃ？」

「・・・僕のほうも概ね一緒です」

二人に渡された手紙には、ほとんど同じ文章が書かれていた。

ちなみに、祐騎の手紙には負けた場合の罰ゲームについてはなにも書いていなかった。

「・・・デュエルするか！」

「はい！」

手紙を読んだ二人がデュエルをしようとすると、突然食堂の扉が開き、食堂の中に蓮と奏が入ってきた。

ガラッ

「あら、やっぱりいたわね（祐騎の隣の奴、あれがもう一人のイレギュラーかしら）」

「・・・シ○ナム？」

「！！（やっぱり！この世界にはあの作品はない、なのに今の私を見てそう言うってことは間違いなく私と同じトリッパーね）」

蓮が八雲のセリフに驚いていると、祐騎が蓮に話しかけた。

「あ、蓮さん、おはようございます」

「えっ、ええ、おはよう・・・祐騎、その人は・・・」

蓮は祐騎に八雲のことを聞こうとすると、八雲自身がそれに応えた。

「俺は永嶺八雲だ、よろしくな」

「・・・紅龍蓮よ、よろしく（もしかしたら、コイツのせいで皆

居なくなったかもしれないんだから、用心したほうが良いわよね）」

蓮が八雲と警戒しながらも挨拶を終えると、蓮の後ろにいた奏が八雲に話しかけた。

「あっ、八雲くん、おはよう」

「おはよう、奏」

「ねえ、八雲くん・・・アカデミアの人がどこにも居ないんだけど、何か知らない？」

「ああ、実は・・・」

奏が八雲に今の状況について質問すると、八雲は手紙に書いてあったことを、奏と蓮に説明した。

「どうしたんだろう蓮さん、いきなり八雲くんを連れて行ったりして」

手紙についての説明が終わった後、デュエルの準備の前に蓮は八雲を寮の裏に連れて行ってしまい、祐騎達と一緒に寮の前で来た奏が八雲のことを心配していた。

「はっ！まさか、告白とかじゃ！」

《ふふっ、心配要らないわよ～、あの子は今は恋愛ごとに興味が無いからそれは無いわよ～》

蓮が八雲に告白するために寮の裏に連れていったのではないか、という考えを奏がしていると、そんな奏のことを見ていたティルがからかうような口調で否定した。

《・・・それよりも、ねぇあなた、ルナちゃんって言ったわよね？》

《はい、なんですかぁ？》

《今夜一晩、一緒に新しい自分を見つける夢のようなひと時を・・・》

「・・・ティルさん、初対面の人になにやってるんですか」

ティルがいつもの調子でルナにセクハラまがいのことをしようとするのを、祐騎が止めていると、そんな祐騎に奏が話しかけた。

「あ、あの、祐騎くんって、蓮さんとは一体どういう関係なんですか？」

「そうですね～、姉さん以外で一番信頼できる大切な人、ですかね？」

「それって、二人は恋人ってことですか？」

「？いえ、友人ですよ（明日香さんも言ってたけど、そんな風に見えるのかな？）」

「そ、そうですか・・・」

祐騎が奏とそんなことを話していると、八雲と蓮が戻ってきた。

「わりぃ、待たせたな」

「いえ、大丈夫ですよ」

そして、祐騎と八雲はお互いに蓮と奏のところに一端向かった。

「蓮さん、八雲君とは一体何を話したんですか？」

「八雲は私と同じだったから、その確認をしただけよ」

「・・・そういうことですか、道理で見たことないモンスターが精霊な訳ですね」

祐騎がホシクリボーについて納得していると、蓮とティルは観戦するために祐騎から離れていった。

《それじゃ、祐騎君頑張ってね》

「やるからには、全力で勝ちなさいよ？」

「はい、もちろんです」

そして、祐騎は八雲と向かい合う形で立ち、デュエルディスクを構えた。

「それじゃ、始めましょうか？」

「ああ・・・祐騎、楽しいデュエルをしようぜ！！」

「ふふ・・・十代君みたいなことを言うんですね」

そして、二人はデッキから最初の手札を引いて開始の宣言をした。

「「決闘（デュエル）！！！」」

祐騎　ＬＰ４０００

八雲　ＬＰ４０００

「先攻はもらいます、ドロー！」

「僕は、ガーディアン・エアトス（攻／守２５００／２０００）

を攻撃表示で特殊召喚！」

祐騎が先攻を取って、いきなりレベル８のエアトスを召喚したことに奏は驚いて声を挙げた。

「レベル８のモンスターを生贄なしで！？」

「ガーディアン・エアトスは自分の墓地にモンスターが存在しない場合、手札から特殊召喚する事ができます。

・・・頼むよ、エール」

《お任せください、マスター》

祐騎は驚いている奏にエアトスの効果を説明して、デュエルを再開した。

「僕はさらに、霞の谷（ミスト・バレー）のファルコン（攻／守２０００／１２００）を攻撃表示で召喚！」

「カードを１枚伏せて、ターンを終了します（さてと、八雲君はどうゆうカード達を使ってくるんだろう）」

祐騎　手札３枚

「俺のターン、ドロー！」

「俺はＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　エアーマン（攻／守１８００／３００）を攻撃表示で召喚！」

八雲は祐騎のターンが終わり自分のターンになると、手札から背中にタービンのような機械の翼を持ったＨＥＲＯを召喚し、蓮はそのカードを八雲が使っていることに驚き、祐騎は初めて見るカードに驚いた。

「なっ！エアーマンですって！？」

「見たことがないヒーローだ・・・」

「エアーマンは召喚成功時に２つの効果から１つを選択して発動できる・・・
俺はデッキからＥ・ＨＥＲＯを１体手札に加える効果を発動し、Ｅ・ＨＥＲＯオーシャンを手札に加える」

「また知らないヒーローだ・・・」

八雲は驚いている祐騎達のことを見て笑みを浮かべ、さらに新しいＨＥＲＯを召喚したことに祐騎はさらに驚いた。

「そして、融合（ゆうごう）を発動！
場のエアーマンと、手札のオーシャンを融合！！」

「出でよ！Ｅ・ＨＥＲＯアブソルートＺｅｒｏ（攻／守２５００／２０００）！！」

八雲が融合のカードを使うと、フィールドに氷の化身の様なＨＥＲＯが姿を現し、祐騎はいままで見たことのないＨＥＲＯに驚き続け、八雲のデッキの内容が判った蓮は祐騎に警告を告げた。

「十代君とは、まったく別のＥ・ＨＥＲＯ・・・」

「祐騎、気をつけて！八雲の奴、相当手強いわよ！！（まさか、漫画版の十代のＥ・ＨＥＲＯデッキを使ってくるなんて・・・）」

「アブソルートＺｅｒｏは同名カードを除く、フィールド上の水属性モンスター１体につき攻撃力を５００ポイント上昇させ、フィールドから離れるときに、相手フィールド上の全てのモンスターを破壊するぜ・・・」

「なんて効果なんだ・・・」

八雲がＺｅｒｏの効果を説明すると、祐騎はその効果に驚いた。

「行くぜ！アブソルートＺｅｒｏで、霞の谷のファルコンに攻撃！！」

「瞬　間　氷　結《Ｆｒｅｅｚｉｎｇ　ａｔ　ｍｏｍｅｎｔ》！！」

八雲が攻撃宣言をすると、祐騎の場のファルコンが一瞬で凍りつき、その氷が砕けるとその氷の破片が祐騎に襲い掛かった。

「くっ！」

祐騎　ＬＰ４０００→３５００

「いいぞー！八雲くん！！」

《その調子ですぅ！！》

八雲が祐騎にダメージを与えたことで、奏とルナの八雲への応援が強くなった。

「俺はバトルを終了し、カードを3枚セットする・・・」

「そして、永続魔法、悪夢の蜃気楼(あくむのしんきろう)を発動・・・
コイツは、相手のスタンバイフェイズに手札が4枚になるようドローして、次の自分のスタンバイフェイズに手札をドローした枚数ランダムに捨てるカードだ」

「俺はこれでターンエンドだ」

八雲　手札0枚

八雲がターンを終了すると、祐騎は八雲のプレイングに関心して声を挙げた。

「・・・すごいですね、最初のターンで上級モンスターを呼び出すだけでなく、守りや次のターンへの布石も万全に備えている」

「そいつはどうも・・・
でも、負ける気なんてないんだろ？」

「もちろんですよ！・・・ドロー！！」

祐騎は、八雲の言葉に闘志を高めて自分のデッキからカードをドローした。

「僕はエアトスに、黒いペンダント(ブラック・ペンダント)を装備します！」

「そして、エアトスの効果発動！
このカードに装備されたカードを墓地に送ることで、相手墓地のモンスターを3枚までゲームから除外し、除外したモンスター1枚につき攻撃力を５００ポイントアップします！！」

「八雲君の墓地のエアーマンとオーシャンをゲームから除外します！
聖剣のソウル！！」

《墓地に眠りし魂よ、私に力を！！》

エールが効果を発動すると、手に持った剣に除外したＨＥＲＯたちが吸収され、エールの攻撃力をアップさせた。

エアトス　攻２５００→３５００

「いいわよ祐騎！！」

《エールちゃん素敵よ～！》

エールが効果で攻撃力を上げると、蓮とティルも祐騎への応援が強くなった。

「さらに、黒いペンダントの効果で５００ポイントのダメージを与えます！」

八雲　ＬＰ４０００→３５００

「行きます！エアトスでアブソルートＺｅｒｏに攻撃！！」

《覚悟！！フォビドゥン・ゴスペル！！》

エールがＺｅｒｏを攻撃すると、その攻撃はＺｅｒｏを超えて八雲に襲い掛かった。

八雲　ＬＰ３５００→２５００

「アブソルートＺｅｒｏの効果発動！

・・・悪いが、エアトスには退場願うぜ」

《くっ！！》

「エール！！」

エールがＺｅｒｏを破壊すると、Ｚｅｒｏの効果によってエールも破壊され、さらに八雲は自分の場のリバースカードを発動させた。

「そしてトラップ発動！ヒーロー・シグナル！！」

「モンスターが戦闘で破壊され墓地に送られた時、手札かデッキからレベル４以下のＥ・ＨＥＲＯ１体を特殊召喚する・・・

俺はデッキから、Ｅ・ＨＥＲＯフォレストマン（攻／守１０００／２０００）を守備表示で召喚！」

「・・・僕はシールド・ウィング（攻／守０／９００）を守備表示で召喚します。

このカードは１ターンに２回まで、戦闘では破壊されません」

八雲が新しいＨＥＲＯを召喚すると、祐騎もシールド・ウィング

を召喚した。

「僕はこれでターンエンドです」

「おっと、エンドフェイズに速攻魔法、非常食（ひじょうしょく）を発動。自分フィールド上の魔法・罠を墓地に送ることで１枚につき１００ポイントのライフを回復する…俺は悪夢の蜃気楼を墓地に送るぜ」

八雲　ＬＰ２５００→３５００

八雲は祐騎がターンを終了させようとすると、自分の場の悪夢の蜃気楼を墓地に送って自分のライフを回復した。

祐騎　手札２枚

「俺のターン、ドロー！

・・・そして、スタンバイフェイズにフォレストマンの効果発動。デッキか墓地から、融合を手札に加えることが出来る・・・今回はデッキから手札に加える」

「一気に手札を補充した・・・」

「俺は融合を発動し、手札のＥ・ＨＥＲＯボルテック（攻／守１０００／１５００）と、Ｅ・ＨＥＲＯフラッシュ（攻／守１１００／１６００）を融合する！」

八雲が手札を一気に補充したことに蓮が驚いていると、八雲は手

札に戻した融合を使い新たなＨＥＲＯを召喚した。

「Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｔｈｅ（ザ）　シャイニング（攻／守２６００／２１００）召喚!!」

「すごい・・・こんなにも簡単に融合を使いこなすなんて」

祐騎は八雲が手札消費の激しい融合を連続で行ったことに驚き、八雲はそんな祐騎を見て笑みを浮かべてシャイニングの効果を説明した。

「シャイニングは、ゲームから除外されている自分のＥ・ＨＥＲＯ１体につき、攻撃力を３００ポイントアップさせる、そしてフィールドから墓地に送られた時、除外されているＥ・ＨＥＲＯを２体まで手札に加えることができるんだぜ・・・」

「・・・本命はそちらの効果ですね」

「そう言うことだ・・・俺はさらに１枚、カードを伏せる」

祐騎が八雲がシャイニングを召喚した目的を言い当てると、八雲は楽しそうに笑みを浮かべたままデュエルを再開した。

「そして魔法カード、戦士（せんし）の生還（せいかん）を発動。

墓地から戦士族モンスター１体を手札に戻すことができる」

「俺は墓地のアブソルートＺｅｒｏを対象にする・・・

融合モンスターを対象にした場合、手札ではではなく融合デッキに戻るぜ」

「俺はこれで、ターンを・・・」

八雲がＺｅｒｏを融合デッキに戻してターンを終えようとすると、祐騎は自分の場のリバースカードを発動させた。

「エンドフェイズ時に罠カード、ゴッドバードアタックを発動！鳥獣族モンスターを1体を生贄に、フィールド上のカードを2枚破壊します！！」

「なにっ！？」

「僕はシールド・ウイングを生贄にして、八雲君の伏せカードを破壊します！！」

「やべっ！？」

罠カードの効果で八雲の場のリバースカードが破壊されると、八雲はやられたという顔で祐騎を見た。

「・・・威嚇する咆哮にリビングデッドの呼び声ですか」

「いい読みしてるぜ・・・」

祐騎が八雲の場のカードを破壊して、八雲のターンが終了して祐騎のターンになった。

八雲　手札０枚

「ありがとうございます・・・僕のターン、ドロー！」

祐騎はドローしたカードを見て少し考えた後、手札のモンスターを召喚した。

「僕は墓地の霞の谷のファルコンをゲームから除外して、手札から風の精霊　ガルーダ（攻／守１６００／１２００）を特殊召喚します！」

「ガルーダは墓地の風属性モンスターをゲームから除外することで、手札から特殊召喚することができます。
そしてガルーダを生贄に、風帝ライザー（攻／守２４００／１０００）を攻撃表示で召喚！！」

「風帝ライザーの効果発動！生贄召喚に成功した時、フィールド上のカード１枚をデッキの一番上に戻す・・・
僕はシャイニングを戻します！！」

「融合モンスターは手札やデッキに戻らず、融合デッキに戻る・・・でしたよね？」

「ああ、それに墓地に行かないから効果も発動しねぇよ・・・」

八雲は自分の場のシャイニングが効果を発動することなくフィールド上から除外されたことで、驚きと感心が入り混じった様な顔で祐騎を見た。

「よし！風帝ライザーでフォレストマンに攻撃！！」

「くっ！？」

「エアロ・ブラスト！！」

ライザーの攻撃でフォレストマンが破壊され、その衝撃で八雲のフィールドが抉れてしまい、それを見ていた奏は八雲を心配し、蓮は祐騎の応援に力を入れた。

「八雲くん！！」

「祐騎ー！いいわよー！！」

「僕はこれでターンを終了します・・・」

そして、祐騎はそのままターンを終了した。

祐騎　手札1枚

「へへ・・・楽しいな、祐騎」

「そうですね、僕も楽しいです・・・」

「俺のターン！ドロー！！」

八雲は祐騎とのデュエルを本気で楽しんでいる様に笑顔で祐騎に話しかけてから、自分のデッキからカードをドローして、さらに笑みを深めてデュエルを再開した。

「手札から融合回収を発動！墓地に存在する融合と、融合に使用したモンスターを1枚ずつ手札に加えることができる」

「こんな状況からでも融合に繋げてきますか・・・」

祐騎は八雲が少ない手札から、なお融合に繋がるようなプレイングに驚きと感心の表情で八雲を見ていると、八雲はさらに魔法カードを発動させた。

「モチロンだ！俺は墓地から融合とボルテックを手札に加える！！・・・そして手札から、精神操作（せいしんそうさ）を発動だ！！」

「なっ！？」

「このカードは相手モンスター1体のコントロールをエンドフェイズ時まで奪うカードだ・・・
頂くぜ、風帝ライザーのコントロールを！」

「ライザー！？」

祐騎は八雲がライザーのコントロールを奪ったことに驚いたが、八雲が使った精神操作の効果を思い出して八雲に確認した。

「でも、精神操作で奪ったモンスターは攻撃宣言も生贄にもできないんじゃ・・・」

「ああ、確かにそうだ・・・」

「だが・・・融合素材にはできるだろ？」

「そんな！？ライザーを融合素材にもつモンスターなんて…」

祐騎は八雲がライザーを融合の素材にするということを聞いて驚

き、そんな祐騎を見て八雲は笑みを浮かべて手札から融合のカードを発動させた。

「だったら見せてやるぜ・・・
融合を発動して、手札のボルテックと、フィールド上のライザーを融合！」

「来い！Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ（攻／守２８００／２２００）『！！」

「本当に、融合した・・・」

八雲が本当にライザーを素材にして融合モンスターを召喚したことに祐騎が驚いていると、八雲はＴＯＲＮＡＤＯのことを祐騎に説明した。

「俺の融合ヒーロー達のほとんどは融合素材が特殊でね・・・
Ｅ・ＨＥＲＯと、特定の属性を持つモンスターの融合から生まれるんだ」

「なるほど・・・ならそのヒーローは、Ｅ・ＨＥＲＯと風属性モンスターを融合素材に持っているんですね」

「その通りだ・・・
そして、ＴＯＲＮＡＤＯは召喚成功時に相手フィールド上の全てのモンスターの攻・守を半分にするんだが・・・お前の場はがら空きだぜ！」

八雲は祐騎にＴＯＲＮＡＤＯの効果を説明してから祐騎へ攻撃を仕掛けた。

「くっ！」

「行くぜ！ＴＯＲＮＡＤＯでダイレクトアタック！！」

「スーパーセル！！」

「うわぁぁぁ！！」

祐騎　ＬＰ３５００→７００

「祐騎！！」

「すごいよ！八雲くん！！」

ＴＯＲＮＡＤＯの攻撃で祐騎のライフが大きく削られ、蓮と奏は先ほどとは反対に祐騎の心配と八雲への応援の声をあげ、八雲はターンを終了した。

「俺はこれでターンを終了だ・・・」

八雲　手札０枚

「フフ・・・僕のターン！ドロー！！（今の手札じゃ逆転は難しい、けど最後まであきらめない！）」

「僕は魔法カード、トレード・インを発動します！このカードは手札のレベル８モンスター１体を捨てることでデッキから２枚ドローできます！！」

祐騎はドローしたカードを発動し、手札のモンスターを捨ててカードをドローし、さらにドローしたカードで手札の補充を行った。

「手札の始祖神鳥シムルグ（攻／守２９００／２０００）を墓地に捨て、２枚ドロー！！
・・・そして貪欲な壺を発動！墓地のモンスターを5体デッキに戻してシャッフル、その後デッキから2枚ドローします！！」

「僕は墓地のエアトス、シールド・ウィング、ガルーダ、ライザー、そしてシムルグをデッキに戻し、シャッフル・・・そして2枚ドロー！！」

「・・・僕はカードを3枚セットして、ターンを終了します（やるだけのことはやった、後は八雲君がどう出てくるか）」

祐騎は手札のカードすべて伏せてターンを終了した。

祐騎　手札０枚

「俺のターン、ドロー！
・・・手札から強欲な壺を発動し、２枚ドロー！！」

「ＴＯＲＮＡＤＯでダイレクトアタックだ！」

「スーパーセル！！」

「トラップ発動！ガード・ブロック！！
このカードの効果で、戦闘ダメージを０にしてデッキから1枚ド

ローします！」

ＴＯＲＮＡＤＯの攻撃を祐騎は罠カードを使って何とか防いだ。

「さすがに防いでくるか・・・」

「そう簡単には負けませんよ・・・」

「そう来なくちゃな・・・
俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ」

八雲　手札０枚

八雲も祐騎と同じく手札のカードをすべて伏せてターンを終了した。

「・・・八雲君、本当に楽しいですね！」

「・・・ああ、最高だぜ！！」

「それでも、僕は負けませんよ！ドロー！！」

祐騎と八雲はお互いに心からこのデュエルを楽しんでいる証拠に、とてもいい笑顔で会話した後、祐騎はデッキからカードをドローした。

「ありがとう、エール・・・
僕はマイフェイバリットモンスター、ガーディアン・エアトスを召喚！！」

《今一度、マスターの勝利のために戦います！！》

「そして装備魔法『巨大化（きょだいか）』を装備！攻撃力を２倍にします！！」

エアトス　攻２５００→５０００

祐騎は最後のドローでエールのカードを引き、そしてガードブロックの効果で手札にきていた巨大化をエールに装備して、八雲の場のＴＯＲＮＡＤＯの攻撃力を上回った。

「攻撃力５０００・・・」

「バトルです！ガーディアン・エアトスでＴＯＲＮＡＤＯを攻撃！！」

「精霊のオペラ！！」

「ぐわぁぁぁ！！」

巨大化の効果で攻撃力を上げたエールは、ＴＯＲＮＡＤＯを一撃で破壊し、その余波で八雲のライフを削った。

八雲　ＬＰ３５００→１３００

「そして、これが僕の切り札！罠カード、ブラスト・モード発動！！」

「・・・なんだ、あのカードは？」

エールがＴＯＲＮＡＤＯを破壊すると、祐騎は勝負を賭けるために伏せていたブラスト・モードを発動させ、ブラスト・モードを見た八雲は見たことのないカードに驚いていた。

「（そうか、このカードは姉さんが作ったカード、なら八雲君が驚くのは当然だよね）このカードは、対応したモンスターを生贄に捧げて、デッキから「／ブラスト」と名の付いたモンスター１体を特殊召喚します。

また、この効果で召喚されたモンスターはこのターン、あらゆる相手効果を受け付けません！！」

「僕はガーディアン・エアトスを生贄に捧げて・・・

デッキからガーディアン・エアトス／ブラスト（攻／守２８００／２３００）を特殊召喚！！！」

祐騎がエアトスのカードを生贄にして、デッキから／ブラストを召喚すると、八雲はその姿を眺めていた。

「コイツが、ガーディアン・エアトス／ブラストか・・・」

「そう…これが僕の全力です！！」

八雲は／ブラストが召喚されたことで、より闘志に火がついたような目で祐騎とエールをみた。

「そして、ガーディアン・エアトス／ブラストの効果発動！

召喚成功時にお互いの墓地に存在するエアトス以外のモンスターを全てデッキに戻し、戻した枚数１枚につき、エンドフェイズまで攻撃力が５００ポイントアップします！！」

「聖天（せいてん）のソウル！！」

《眠れる魂よ、我が元に集いて新たな道を切り開かん！》

「その効果にチェーン発動！罠カード、スピリッツ・フュージョン！！」

祐騎が／ブラストの効果を発動させようとすると、八雲も自分の場のカードを発動させた。

「このカードは１０００ポイントのライフをコストに、墓地に存在するモンスターをゲームから除外することで融合させる！！」

八雲　ＬＰ１３００→３００

「そんなカードが・・・」

「俺はボルテックとフラッシュをゲームから除外する・・・再び姿を現せ！Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｔｈｅ　シャイニング！！」

祐騎が八雲の発動させた罠カードに驚いていると、八雲は先ほどライザーの効果で融合デッキに戻ったシャイニングをもう一度召喚した。

「くっ！だけど、墓地のフォレストマンとＴＯＲＮＡＤＯをデッキに戻したことで、ガーディアン・エアトス／ブラストの攻撃力アップです！！」

エアトス／ブラスト　攻２８００→３８００

「シャイニングも、自身の効果で攻撃力アップだ！！」

シャイニング　攻２６００→３８００

「２体の攻撃力が・・・」

「並んだ・・・」

／ブラストが効果で墓地のモンスターをデッキに戻して攻撃力を上げるのと同時に、シャイニングも自身の効果で攻撃力を上げて２体の攻撃力が並んだ。

「・・・八雲君、やっぱりキミはすごいよ」

「・・・祐騎、そのセリフ、そっくりそのままお返しするぜ」

「「勝つのは俺一（僕）だ！！」」

祐騎と八雲はお互いに相手を褒め合い、祐騎は決着をつけるためエールにシャイニングを攻撃させた。

「ガーディアン・エアトス／ブラストでシャイニングに攻撃！！」

《エネルギー充填開始！目標、『Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｔｈｅ　シャイニング』！！》

「迎え撃て、『シャイニング』！！」

エールの手に持った銃に集中したエネルギーとシャイニングの放つ輝きが頂点に達し、同時に攻撃を放った。

「コミュニオン・ブラスト！！！」

「オプティカル・ストーム！！！」

「「キャァァァァァ！！！」」

エールとシャイニングの攻撃は拮抗し、周囲にはその余波で突風が吹き、応援していた蓮と奏にもその衝撃が届き、2体がお互いの攻撃で共倒れになりそうになると、祐騎は自分の場のリバースカードを発動させた。

「行くよ！八雲君！！
トラップ発動！ダブル・ショット！！」

「自分の「／ブラスト」をエンドフェイズに破壊する代わりに、そのモンスターの攻撃力を2倍に引き上げる！！」

「ようは、／ブラスト専用のリミッター解除（かいじょ）か！！」

八雲に祐騎は発動させたダブル・ショットの説明をして、エールにその効果を与えた。

「そう言うことだよ！・・・エール！！」

《はい、マスター！！これが私の、全力全開！！》

エールの手に持った銃から許容量を超えるエネルギーがあふれ出し、そのエネルギーによって拮抗していた2体の攻撃が崩れそうになると、八雲は最後のリバースカードを発動させた。

「カウンタートラップ！魔宮の賄賂！！
相手に1枚ドローさせる代わりに、魔法・罠カードの発動を無効にする！！」

「えっ？なんで・・・」

祐騎は八雲がカウンター罠でブラスト・モードを無効にしていなかったことに驚いていると、攻撃を続けていた2体は拮抗した攻撃が爆発を起こし、2体を飲み込んだ。

「エール！！」

「シャイニング！！」

そしてその煙が晴れると、そこには／ブラストから通常のエアトスの姿に戻ったエールの姿だけ存在していた。

「…ガーディアン・エアトス／ブラストの最後の効果です。
自身が破壊された時、墓地に存在するガーディアン・エアトス1体を特殊召喚します」

「…ガーディアン・エアトスでダイレクトアタック！精霊のオペラ！！」

《ハァ！！》

祐騎がエールに最後の攻撃を指示すると、エールは八雲を手に持った剣で切り裂きライフを0にし、そしてライフが0になった八雲は負けても楽しかったというように、笑顔で祐騎に宣言した。

八雲　ＬＰ３００→０

「楽しいデュエルだったぜ！！」

「・・・、う～ん」

「あ、起きた？」

「あれ、連さん？ここは・・・」

祐騎と八雲のデュエルが終わり、祐騎が目を覚ますと祐騎と蓮はいつのまにか祐騎の部屋の中に居た。

「・・・八雲君とのデュエルは夢、じゃないですよね」

「そうね、私も覚えてるし、それよりも随分と楽しそうだったじゃない」

「ふふっ、そうですね。

楽しかったですよ、蓮さんと初めてデュエルしたときみたいで」

祐騎はそう言って、とても良い笑顔で蓮の方を向いた。

「でも、結構危なかったでしょ？」

「はい、あそこでブラスト・モードを無効化されてたら、僕の負けでしたね」

蓮がデュエルの内容について言うと、祐騎はその時のことを思い出して部屋の天井を見上げた。

「次に戦ったら負けるかもね？」

「ふふっ、かもしれませんね。
でも、次も勝ちに行きますよ」

「そうね、次があったら今度は私もデュエルしようかしら」

「そういえば、罰ゲームがあるってあの手紙に書いてありましたけど、なんだったんでしょうか？」

祐騎が思い出した様にそう言うと、蓮はさして興味を示さずに応えた。

「・・・さぁ？どうせ碌でもないことでしょ、たとえば八雲の隠してる１８禁の本が奏に見つかるとか」

「それって、罰ゲームというより処刑なんじゃないですか？」

「それもそうね、ところで祐騎ってその手の物って持ってるの？」

「いえ、姉さんからの教育でそういうことはいけない事だと言われてきたので、持ってないですよ？」

「・・・そ、そうなの（そこまでやりますか、優奈さん）」

祐騎と蓮はそれからもたわいの無い話をしながら、この特殊な出会いの有った日の残りの時間をすごした。

そして、この翌日に二人は自分達が精霊世界に行くことになることなど知る由もなく眠りに着いた。

番外編～超展開！？作品を越えた絆～（後書き）

どうだったでしょうか、今回コラボ作品として書いてくださった野良猫さんに感謝の意味も込めて、私の作品として編集させてもらいました。

これを読んで、野良猫さんの作品に興味が出た人はぜひ読んでみてください。

それでは、コラボしてくださった野良猫さんと読者の皆さんに感謝をしつつ、次回の私の作品もよろしくお願いします。

それでは、また本編をお楽しみに。

第十二話　恋する乙女と女帝の気持ち（前書き）

今回はレイＶＳ祐騎のデュエルです。

レイのデッキに関してはＴＦ３のデッキを元にしてます。

それでは、第十二話始まります。

第十二話　恋する乙女と女帝の気持ち

～デュエルアカデミアの港～

祐騎と蓮は、ペガサスの手配した船に乗ってデュエルアカデミアへと帰還した。

「・・・さてと、まずは明日香達になんて言い訳しようかしら」

「十代君達は問題ないと思いますけど、明日香さんは納得するのは難しいでしょうね」

「そうなのよね、でも行かないことには始まらないし、とりあえずレッド寮に行きましょう」

そう言って、二人はレッド寮に向かって歩き出した。

～レッド寮前～

「・・・はぁ～、それにしても祐騎君達、一体どこに行ったんスかね～？」

「祐騎って、誰なの？」

翔が呟いた言葉に、デュエルアカデミアに編入までしてカイザー亮を追ってきて、先ほどまでレッド寮の近くの崖の下で十代とデュエルしていたレイが聞き返した。

ちなみに、カイザーはすでに自分の部屋のあるブルー寮に戻っていた。

「・・・ああ、レイは知らなかったよな。祐騎は俺や翔と同じオシリスレッドの生徒で、今ちょっと行方不明になってる奴なんだ」

「行方不明!?」

「・・・甲斐君だけじゃないわ、私と同じブルー女子の蓮も一緒に行方不明になってるの」

「ええっ!?そ、そんな、蓮お姉さまの姿が見えないと思っていたら、まさか行方不明だったなんて・・・」

「「お、お姉さま!?」」

十代と明日香が祐騎達のことをレイに説明すると、レイは蓮のことをお姉さまと呼び、そのことに十代と翔が驚き、明日香はどこか納得した顔をした。

「・・・あ～、そういえば、蓮って中学のころ下級生の女の子達から慕われてたわね、本人の知らないところでファンクラブが出来るくらいに」

「だ、だから、お姉さまッスか」

「ってか、レイってカイザー目当てに来たんじゃないのかよ？」

「そ、それは、そうだけど、でも蓮お姉さまにも会いたかったんだもん！」

十代がレイにそう言うと、レイは顔を赤くして十代に言い返した。

「・・・それにしても、今頃どうしてるのかしら」

「・・・もしかして、蓮お姉さまはその祐騎って人に連れ去られたんじゃ！」

「「「いや、それなら逆だ（よ）（ッスよ）」」」

「・・・あんた達、何を好き勝手言ってるのよ」

十代達がレイの言葉を完全否定していると、港から歩いて来た蓮が十代達にツッコンだ。

「蓮！？あなた今までどこにいたのよ！」

「祐騎もだぜ、いきなり居なくなって皆心配したんだからな！」

「心配かけてごめんね、姉さんから急ぎの用だって呼び出されてちょっと島の外に行ってたんだよ」

「私も呼ばれたから一緒に行ってたって訳、連絡とかしなかったのはＩ＆Ｉ社の機密に関わることだから、許可が出るまで秘密にし

てくれって優奈さんに頼まれたのよ」

明日香と十代が祐騎達に詰め寄ると、祐騎と蓮はここに来る前にペガサスや優奈と一緒に考えた嘘の理由を話して二人を何とか納得させた。

「・・・あ、あの！」

「ん？あなたは・・・」

「ぼ、ボク、早乙女レイといいます！
以後、よろしくお願いします、蓮お姉さま！」

「・・・まさか、ここに来てその呼び方をされるなんて（というか、なんでレイが私のことをその呼び方で呼ぶのよ）」

レイが蓮に物凄い勢いで頭を下げ自分のことを紹介すると、蓮はそんなレイの姿を見て呆れたような表情をした。

「十代君、この子どうしたの？」

「あ、ああ、実はな・・・」

祐騎がレイの事を十代に聞くと、十代は祐騎に今までのことを話した。

「そうなんだ、それはそうと十代君」

「ん？なんだ、まだ何かわからないことがあるのか？」

「うん、カイザーって誰？」

「へ？」

十代は祐騎の言った言葉に一瞬呆然となり、側で話を聞いていた翔や明日香も固まり、蓮だけは納得といった表情で祐騎を見ていた。

「そういえば、祐騎ってカイザーと会ったこと無かったっけ」

「で、でも、冬休みが終わってから結構僕達と一緒に居たはずなんッスけど」

「・・・私達がここから居なくなったのは、その冬休み明けからすぐだったと思うんだけど？」

「あ・・・」

翔が自分達と一緒にいることが多くなっているカイザーを、祐騎が知らないのはおかしいと言うと、蓮はそれをすぐに否定した。

「それで、カイザーって誰なんですか？」

「ああ、それはね・・・」

蓮は祐騎にカイザーの事を説明し、その間レイはカイザーのことを知らないと言った祐騎を信じられないものを見る目で見ていた。

「つまりカイザーっていうのは、このデュエルアカデミアで一番強い奴ってことよ」

「へ～、そんな人が居るんですね～」

「・・・ちょっと、あんた！」

「はい？」

祐騎が蓮の話に頷いていると、レイが祐騎に向かって指を刺して呼びかけた。

「亮さまのことを知らない上に、蓮お姉さまと親しくするなんて許さないんだから！」

「・・・え～っと、これは僕が悪いんでしょうか？」

「・・・私に聞かないでよ」

「とにかく、ボクとデュエルで勝負だ！」

レイは祐騎にそう言うと、デュエルディスクを構えた。

「まぁ、デュエルするだけならべつに良いんですけど」

「ぶつぶつ言ってないで、早くして！」

「はいはい、わかりましたよ」

レイが祐騎をせかすと、祐騎は諦めた様にデュエルディスクを構えた。

「「デュエル！」」

レイ　ＬＰ４０００

祐騎　ＬＰ４０００

「ボクのターン！ドロー！
私は手札から永続魔法、強者の苦痛を発動！
さらにカードを１枚伏せて、恋する乙女（攻／守４００／３００）を攻撃表示で召喚してターンエンド！」

レイ　手札３枚

「お！レイの奴最初からあのカードで来たな」

「それに、十代とのデュエルでは使ってこなかった強者の苦痛で、甲斐君のモンスターの攻撃力を下げて自分へのダメージを減らすつもりなのね」

「・・・帰ってきて早々デュエルなんて、祐騎君も大変ッスね～」

祐騎とレイのデュエルが始まると、近くに居た十代達は観戦し出した。

「僕のターン、ドロー！
僕はシールド・ウィングを守備表示で召喚して、カードを１枚伏せてターンエンド。
僕の召喚したシールド・ウィングの攻撃力は０、よって強者の苦

痛の効果は意味を成さない、そしてシールド・ウィングは一度のバトルフェイズで二回まで戦闘では破壊されない！」

祐騎　手札４枚

「なら、ボクはエンドフェイズに永続罠、神の恵みを発動！
このカードの効果で、カードをドローするたびにライフを５００回復するよ！」

祐騎がターンを終了する前に、レイは伏せていたカードを発動させ自分のターンを迎えた。

「ボクのターン！ドロー！
この瞬間、永続罠、神の恵みの効果でライフを回復するよ！」

レイ　ＬＰ４０００→４５００

「そして、ボクは場にカードを1枚伏せて、恋する乙女に装備魔法、ハッピーマリッジを装備！
さらに、シャインエンジェル（攻／守１４００／７００）を守備表示で召喚してターンエンド！
（ボクの伏せカードはディフェンス・メイデン、これでアイツのモンスターの攻撃を恋する乙女に変更して乙女カウンターを乗せて、次のターンでコントロールを奪ってやる！）」

レイ　手札2枚

「僕のターン！ドロー！

・・・僕はシールド・ウィングを生贄にして、風帝（ふうてい）ライザー（攻／守２４００／１０００）を召喚！

そして、ライザーが生贄召喚に成功したとき、フィールド上のカード１枚を持ち主のデッキの一番上に戻す、僕は恋する乙女をデッキに戻すよ」

「え！？」

祐騎がライザーを召喚すると、ライザーの巻き起こす風によってレイの場の恋する乙女がデッキに戻り、恋する乙女に装備されていたハッピー・マリッジは墓地へと送られた。

「で、でも、強者の苦痛の効果でライザーの攻撃力はレベル×１００ポイントダウンするよ！」

風帝ライザー（攻２４００→１８００）

「僕は墓地のシールド・ウィングをゲームから除外して、手札のシルフィードを特殊召喚！

さらに罠カード、砂塵の大竜巻を発動して強者の苦痛を破壊する！」

「そんな！？」

祐騎が発動させた砂塵の大竜巻によって強者の苦痛が破壊され、祐騎の場のモンスターの攻撃力が元の数値に戻った。

風帝ライザー（攻１８００→２４００）

シルフィード（攻１７００→１３００→１７００）

「そして、僕の墓地にモンスターカードが存在しないため、手札からガーディアン・エアトスを特殊召喚！」

《・・・マスター、何故彼女はあんなに怒っていたのでしょうか？》

「・・・さぁ？」

召喚されたエールは、レイが祐騎にこのデュエルを挑んだ理由がわからずに祐騎にその理由を聞いてみるが、祐騎もそれが判らずに首を傾けた。

「僕は装備魔法、団結の力をエアトスに装備して攻撃力２４００ポイントアップ！」

エアトス（攻／守２５００→４９００／２０００→４４００）

「団結の力は自分フィールド上のモンスターの数×８００ポイント攻撃力と守備力をアップさせるカード。
そして、バトル！シルフィードでシャインエンジェルを攻撃！
ストーム・スラッシュ！」

シルフィードは手に持った鎌のような武器でシャインエンジェルを切り裂くと、レイの場のシャインエンジェルが破壊された。

「きゃあっ！しゃ、シャインエンジェルが破壊されたことでデッキから、２体目のシャインエンジェルを攻撃表示で特殊召喚・・・」

「ライザーでシャインエンジェルを攻撃！

エアロ・ブラスト！」

「きゃあああああっ！」

レイ　ＬＰ４５００→３５００

ライザーの放った風の弾丸はレイの場のシャインエンジェルを貫き、レイはその余波を受けライフを削られた。

「ぼ、ボクはシャインエンジェルの効果で最後のシャインエンジェルを召喚する・・・」

「これで、ラスト！
エアトスでシャインエンジェルを攻撃！
精霊のオペラ！」

《すみませんが、これで終わりです！》

「きゃあああっ！！」

レイ　ＬＰ３５００→０

エールがレイに謝りながらシャインエンジェルを破壊すると、その攻撃によって生じた衝撃でレイのライフが０になった。

「・・・負けちゃった、しかもライフを１ポイントも削れないで」

「・・・どうしましょうか、凄く落ち込んでますけど」

「・・・私に聞かないでよ」

デュエルを終えた後、レイは物凄く落ち込んでしまい、そんなレイをどうするか祐騎達は頭を抱えていた。

「そうだわ、蓮今日レイちゃんをあなたの部屋に泊めてあげられない？」

「え？それは別にいいけど、でもそれであの子の機嫌が治るの？」

「ええ、レイちゃんは蓮のこと慕ってるみたいだし、泊めてあげるついでにデュエルについてアドバイスしてあげれば喜ぶと思うわよ」

明日香が蓮にそう言ってレイの方を見ると、レイはその話が聞こえていたのか期待に満ちた顔で蓮を見ていた。

「判ったわよ、それじゃ、もう時間も遅いし早く寮に行きましょう」

「は、はい！ありがとうございます！」

蓮がそう言ってブルー寮に向かって歩き出すと、レイは嬉しそうに蓮の後をついて行き、明日香はそんな二人を見て苦笑いしながら付いていった。

「・・・なんだったんだろ、あの子」

「それにしても、スゲェぜ祐騎！
俺が苦戦したレイに完勝なんてよ！」

「いや、ただの相性だよ、それに蓮さんならもっと相性良いはずだよ？」

蓮達が居なくなってから、十代が祐騎とレイのデュエルについて話しかけると、祐騎はその事について十代に説明しだした。

「特に、蓮さんのデッキに入ってるフェニキシアン・クラスター・アマリリスなら攻撃した後自壊して乙女カウンターが乗らない上に相手にダメージを与えられるから、恋する乙女の効果でコントロールを奪われることは無いし、蓮さんのデッキには薔薇の刻印っていうコントロール奪取系のカードもあるから、デッキ相性で言えばこの中では蓮さんが一番良いんじゃないかな？」

「つまり、アニキみたいにモンスターでの攻撃ばっかの相手は相性が悪いってことッスか」

「うん、それでも攻撃力４０００オーバーのモンスターで攻撃されたらひとたまりも無いけどね」

祐騎と十代達はそんなことを話ながらレッド寮の中に入って行き、十代は祐騎に居なくなってから今まで起きたことを眠るまで話した。

～蓮の部屋～

「・・・だから、このカードを使う場合は相手のモンスターの攻撃力だけじゃなくて、さっき祐騎がやったみたいなカードを手札やデッキに戻す効果や、破壊する効果、私のカードみたいに攻撃すると自壊する効果があるカードについても警戒しないといけないの、わかった？」

「は、はい！ありがとうございます！」

蓮はレイを自分の部屋に泊まらせる許可を得てから、部屋でレイにデュエルについて話していた。

「さてと、後はこれから自分に合ったデッキを作ることね、今みたいに好きなカードを使いたいならカードの効果をよく理解して、そのカードに合った効果のカードを見つけることが重要なのはわかってるわよね？」

「はい！
それはそうと、蓮お姉さま」

「・・・何？（はぁ、やっぱり慣れないわね、その呼ばれ方）」

蓮はレイが自分のことをお姉さまと呼ぶたびに、顔を歪めながらレイの声に応えた。

「あの祐騎って人とはどういう関係なんですか？」

「え?どんな関係って、それは一番心を許せる友人だけど・・・」

「・・・本当に、それだけですか?」

「・・・何が言いたいの?」

蓮がレイに聞き返すと、レイは真剣な表情で蓮を見ながら答えた。

「ボクには蓮お姉さまが、あの祐騎って人のことを友達じゃなくて男の子として好きなんじゃないかと思えたんです」

「え?(私が祐騎の事を異性として好きって、どういうこと?)」

「・・・やっぱり、自覚が無いんですね。
それでは、いまから質問をしますからそれに答えてください」

「え、ええ、別に良いけど・・・」

レイの言った事に頭が混乱している蓮に対して、レイは質問を始めた。

「まず、祐騎さんが蓮お姉さまとは違う女性と楽しそうに話ながら歩いてる姿を想像してみてください、どんな気持ちになりますか?」

「・・・良い気分では無いわね」

「それじゃあ、その女性と祐騎さんが恋人になると聞いたらどうします?」

「・・・え？そ、それは、祐騎の意思が一番重要なんだから、私がとやかく言う筋合いは無いでしょ？」

「自分を誤魔化さないでください！」

「！？」

蓮がレイの言葉に戸惑いながら答えると、レイはそんな蓮の気持ちを理解できているのかのように蓮を怒鳴った。

「いいですか、今お姉さまは祐騎さんと他の女性が恋人になることを嫌がりました。

そして、それこそがお姉さまが祐騎さんを好きだという証拠です」

「・・・私が祐騎を好き、それも友人じゃなくて異性として？」

「・・・多分、そうだと思います。

偉そうなことを言ってしまいましたが、お姉さまの気持ちはお姉さまにしかわかりません。

ですから、これからゆっくりと考えてください、でももう自分を誤魔化さないでくださいね？」

「・・・どうして、年下のあなたにそうまで言われなくちゃいけないのかしらね？」

「お姉さまのことは尊敬してますけど、恋愛ごとならボクの方が先輩ですから！」

レイがそう言って笑顔で胸を張ると、蓮は苦笑して立ち上がった。

「それじゃ、その先輩の話も聞けたことだし、今日はもう寝ましょう？（私が祐騎のことを好きか、この世界に来る前から恋愛なんて経験無かったけど、今のこの暖かい気持ちが恋なのかな？だとしたら、少し嬉しいな・・・）」

「あ、はい！」

蓮がそう言うと、レイは返事をしてすぐに蓮の後についていき、蓮はそんなレイからは自分の赤くなっている顔を見られないように歩いて就寝準備に取り掛かった。

第十二話　恋する乙女と女帝の気持ち（後書き）

どうだったでしょうか、この作品のレイはこういうキャラで行くつもりです。

蓮は中学からのエスカレーター式でデュエルアカデミアに入っているので、これくらいのことはあっても良いかと思って書きました。

次回は、カイザーとのデュエルになります。

それでは、次回もよろしくお願いします。

第十三話　祐騎ＶＳカイザー亮（前書き）

今回はカイザーとのデュエルになります。

それでは、第十三話始まります。

第十三話　祐騎ＶＳカイザー亮

～レッド寮前～

レイがデュエルアカデミアにやって来た翌日、レイがアカデミアから出ていくのを見送るために祐騎達は港に行く準備をしていた。

「さてと、それじゃ行こうぜ！」

「でも、船が出る時間までにはまだ早いよ？」

「だったら、待ってる間デュエルで時間を潰せばいいじゃねえか！」

「それもそうだね～」

「・・・アニキは本当に、デュエルのことしか考えてないッスね～」

祐騎達がそんなことを話していると、レイを連れて蓮と明日香とカイザーがやって来た。

「あれ、皆さんそろってどうしたんですか？」

「実はね、蓮がレイちゃんがここを離れる前に一度生で亮のデュエルを見せてあげたいって言うものだから、対戦相手のところにきたわけなの」

「対戦相手って、十代君ですか？」

「・・・いや、十代とは少し前に対戦した、だから今日は祐騎、お前とデュエルをしようと思っている」

「へ？」

祐騎が明日香にカイザーと戦う相手のことを聞くと、当のカイザー本人が祐騎を指名してきた。

「あ、もしかして、カイザーさんですか？」

「・・・カイザーは俗称だ、俺の名は丸藤亮だ」

「丸藤？もしかして翔君のご兄弟ですか？」

「・・・祐騎君、昨日言ったじゃないッスか、カイザーは僕のお兄さんだって」

「そうだったっけ？」

祐騎の発言にカイザーと翔が呆れていると、十代が話しかけた。

「でもよ、カイザーも祐騎と会うの初めてだろ？なんで、祐騎とデュエルするって話になるんだよ、別に俺でもいいじゃんか！」

「・・・確かに、こうして会うのは初めてだが、祐騎のデュエルは何度か見ていた。十代と同じで、いつかはデュエルしてみたいと思っていた所だ」

「そういうことなら、喜んでデュエルしますよ」

「ちぇ～、俺ももう一度カイザーとデュエルしたかったんだけどな～」

カイザーの言葉に、祐騎は納得し十代はしぶしぶといった感じで諦めた。

「それはそうと、さっきから黙ったままですけど、蓮さんどうしたんですか？」

「／／／へ！？な、なんでもないわよ？（う～、昨日の夜にレイに言われたからなのかしら、祐騎の顔を見るのにこんなに緊張するなんて）」

「？そうですか、気分が悪いんでしたら僕の部屋で休んでくださいね」

「／／／あ、ありがとう、でも大丈夫だから」

祐騎がいつもと違う様子の蓮を不思議に思って話しかけると、蓮は顔を赤くして祐騎に応えた。

「・・・準備はいいな？」

「はい、よろしくお願いします」

そんな祐騎と蓮のやり取りの後、カイザーと祐騎は適度な距離をとりデュエルディスクを構えた。

「「デュエル！」」

祐騎　ＬＰ４０００

カイザー　ＬＰ４０００

「僕のターン！ドロー！
僕はモンスターをセットして、カードを2枚伏せてターンエンドです」

祐騎　手札３枚

「オレのターン、ドロー！
相手フィールド上にのみモンスターが存在することにより、手札からサイバー・ドラゴン（攻／守２１００／１６００）を特殊召喚する！」

「・・・これが、丸藤先輩のサイバー・ドラゴン」

祐騎がカイザーの召喚したサイバー・ドラゴンに集中していると、カイザーはさらにモンスターを召喚した。

「さらに、手札からサイバー・ドラゴン・ツヴァイ（攻／守１５００／１０００）を通常召喚する。
そして、バトル！
サイバー・ドラゴン・ツヴァイでセットモンスターを攻撃、サイバー・ドラゴン・ツヴァイは相手モンスターに攻撃する際、攻撃力

を３００ポイントアップする！
エヴォリューション・ツヴァイ・バースト！」

「クッ！セットモンスターはウェポン・サモナーです。
効果により、デッキからガーディアン・エアトスを手札に加えます！」

「ならば、サイバー・ドラゴンでダイレクトアタック！
エヴォリューション・バースト！」

「リバースカード、オープン！
罠カード、ガード・ブロック！このカードの効果により、戦闘ダメージを０にしてカードを１枚ドローします！」

カイザーの攻撃を何とかダメージを受けずにやり過ごした祐騎に対して、カイザーは余裕の表情のままデュエルを続けた。

「オレは手札から魔法カード、タイムカプセルを発動しデッキからカードを１枚除外する。
このカードは２ターン後のオレのターンに破壊され、除外したカードを手札に加える、さらにカードを１枚伏せてターンエンド」

カイザー　手札２枚

「僕のターン！ドロー！
僕はシールド・ウィングを守備表示で召喚して、カードを１枚伏せてターン終了です」

祐騎　手札３枚

祐騎はカイザーの場のサイバー・ドラゴン達に手が出せず、守りに入る形でターンを終了した。

「オレのターン、ドロー！

オレはフィールド上のサイバー・ドラゴン・ツヴァイの効果を発動する、このカードは手札の魔法カードを相手に見せることでオレのターン中のみサイバー・ドラゴンとして扱う。

オレは手札から魔法カード、融合を見せて効果を発動！」

「そして、手札のサイバー・ドラゴンとフィールド上のサイバー・ドラゴン・ツヴァイを融合！

出でよ！サイバー・ツイン・ドラゴン（攻／守２８００／２１００）！」

カイザーのフィールドに２つの頭を持ったサイバー・ドラゴンが現れ、そのサイバー・ドラゴン達は祐騎を威嚇するように鳴き声をあげた。

「・・・攻撃力２８００と２１００のモンスターをこんなに簡単に召喚するなんて」

「いくぞ！サイバー・ツイン・ドラゴンでシールド・ウィングを攻撃！

エヴォリューション・ツイン・バースト！」

「ですが、シールド・ウィングは１度のバトルフェイズで２回まで破壊されません！」

祐騎がシールド・ウィングの効果を説明するが、カイザーは余裕の表情を崩さずにデュエルを続けた。

「ふっ、残念だったな、サイバー・ツイン・ドラゴンは1度のバトルフェイズで2回攻撃できるモンスターだ！
エヴォリューション・ツイン・バースト！」

「そして、サイバー・ドラゴンでシールド・ウィングを攻撃！
エヴォリューション・バースト！」

「只ではやらせない！罠カード、ゴッドバードアタックをシールド・ウィングを生贄にして発動！
効果により、サイバー・ツイン・ドラゴンとサイバー・ドラゴンを破壊します！」

「ならば、その罠にチェーンして伏せていた速攻魔法、融合解除を発動！
サイバー・ツイン・ドラゴンを融合デッキに戻し、墓地から融合素材として使用したサイバー・ドラゴンとサイバー・ドラゴン・ツヴァイを特殊召喚する！」

祐騎が発動した罠カードは、サイバー・ドラゴン1体を破壊したが、カイザーの場にはサイバー・ドラゴンとサイバー・ドラゴン・ツヴァイが再び現れた。

「サイバー・ドラゴン・ツヴァイは墓地でサイバー・ドラゴンとして扱うため、融合解除で特殊召喚することが出来る。
さらに、バトルフェイズ中の特殊召喚のため攻撃は可能！
サイバー・ドラゴンでダイレクトアタック！
エヴォリューション・バースト！」

「リバースカードオープン！罠カード、ディメンション・ウォールを発動します！
このカードの効果により、この戦闘で僕が受ける戦闘ダメージは相手に移ります！」

サイバー・ドラゴンの攻撃は祐騎の発動させたカードの効果により、次元を超えてカイザーに直撃した。

カイザー　ＬＰ４０００→１９００

「クッ！だが、これでお前の場にカードは存在しない、サイバー・ドラゴン・ツヴァイでダイレクトアタック！
エヴォリューション・ツヴァイ・バースト！」

「くぅっ！」

祐騎　ＬＰ４０００→２５００

祐騎とカイザーがお互いにダメージを受けたことで、観戦に夢中になり黙っていた蓮達が話し出した。

「ここまでは、互角ってところね」

「でも、亮様の場にはモンスターが2体居ますから断然有利ですね！」

「・・・いえ、まだ判らないわ。

祐騎の手札にはエアトスが居るから、召喚出来ればこの状況を覆せるはずよ」

「どっちにしろ、ここからさらに面白くなるってことだな！」

十代がそう言って期待に満ちた目で祐騎達の方を見ると、それにつられて蓮達もデュエルの観戦に戻った。

「オレはカードを1枚伏せてターンを終了する」

カイザー　手札0枚

「僕のターン！ドロー！
手札から魔法カード、強欲な壺を発動してデッキから2枚ドロー！
さらに魔法カード、トレードインをエアトスをコストに発動して2枚ドロー！
そして魔法カード、死者蘇生を発動してエアトスを蘇生召喚します！」

《さぁ、いきますよ！》

祐騎は墓地に送ったエールをすぐに場に召喚し、エールはカイザーのサイバー・ドラゴン達と向かいあって意気込んだ。

「バトル！エアトスでサイバー・ドラゴン・ツヴァイを攻撃！
精霊のオペラ！」

《喰らいなさい！》

「やらせん！罠カード発動、攻撃の無力化！
このカードの効果により攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了させる！」

エールの攻撃はカイザーの発動させたカードによって阻止され、祐騎のバトルフェイズを終了させられた。

「さすがですね、僕はカードを2枚伏せてターンを終了します」

祐騎　手札2枚

「オレのターン、ドロー！
この瞬間タイムカプセルを破壊し、除外していたカードを手札に加える。
さらに、オレは場のサイバー・ドラゴン・ツヴァイの効果を手札の魔法カード強欲な壺を見せて発動！　そして手札から魔法カード、強欲な壺を発動しデッキからカードを2枚ドローする。
いくぞ、祐騎！」

カイザーは手札を確認し、その手札から魔法カードを発動させた。

「オレは手札から魔法カード、パワー・ボンドを発動！
手札とフィールドのサイバー・ドラゴン2体とサイバー・ドラゴンとして扱っているサイバー・ドラゴン・ツヴァイを融合！
出でよ、サイバー・エンド・ドラゴン（攻／守４０００／２８００）！」

「・・・こ、これが、サイバー・エンド・ドラゴン」

カイザーが召喚したサイバー・エンド・ドラゴンの迫力に祐騎は圧倒された。

「パワー・ボンドの効果により、このカードで特殊召喚されたモンスターの攻撃力は2倍となる！」

サイバー・エンド・ドラゴン　（攻４０００→８０００）

「す、凄い、攻撃力８０００のモンスターなんて・・・」

「流石はカイザー、といったところかしらね」

レイはカイザーがサイバー・エンド・ドラゴンをパワー・ボンドで召喚し、攻撃力８０００のモンスターを召喚したことに驚き、蓮は感心したという表情でデュエルを見続けた。

「これが、オレの最強モンスター、サイバー・エンド・ドラゴンだ！

いくぞ、バトル！

サイバー・エンド・ドラゴンでガーディアン・エアトスを攻撃！

エターナル・エヴォリューション・バースト！」

「やらせない！罠カード発動、ブラスト・モード！

このカードの効果により、エアトスを生贄にしてデッキからガーディアン・エアトス／ブラストを特殊召喚します！

さらに、エアトス／ブラストは自身の効果によりお互いの墓地のエアトス以外のモンスターカードをデッキに戻し、戻したカード×

５００ポイント攻撃力をアップさせます！」

「丸藤先輩の墓地には４枚のモンスターカード、僕の墓地には２枚のモンスターカードが存在している、よって合計６枚のカードをデッキに戻してガーディアン・エアトス／ブラストの攻撃力は３００ポイントアップします！」

エアトス／ブラスト　（攻２８００→５８００）

カイザーがサイバー・エンドでエアトスを攻撃しようとすると、祐騎はブラスト・モードを発動させその攻撃を一時的に中断させた。

「だが、攻撃力はサイバー・エンドの方が上だ！
サイバー・エンドでエアトス／ブラストを攻撃！」

「まだですよ！リバースカード、オープン！
ダブル・ショット、このカードの効果によりエンドフェイズまでエアトス／ブラストの攻撃力を２倍にします！」

《これで、倒させてもらいます！》

エアトス／ブラスト　（攻５８００→１１６００）

「攻撃力１１６００！！？
亮様のサイバー・エンド・ドラゴンの攻撃力を超えた！？」

「これなら、カイザーのサイバー・エンドを倒せる！」

「お兄さん！」

祐騎がダブル・ショットを発動させたことで、エアトス／ブラストの攻撃力がサイバー・エンドの攻撃力を超えたことにレイ達が驚いていると、カイザーは嬉しそうに笑った。

「・・・流石だな、だがこのデュエルはオレの勝ちだ！
手札から速攻魔法、リミッター解除を発動！
このカードの効果により、サイバー・エンド・ドラゴンの攻撃力をエンドフェイズまで2倍にする！」

サイバー・エンド・ドラゴン　（攻８０００→１６０００）

「こ、攻撃力１６０００のサイバー・エンド・ドラゴン、これが丸藤先輩、カイザーと呼ばれる人の本気」

祐騎がサイバー・エンドとカイザーの雰囲気に飲まれていると、カイザーは攻撃を再開した。

「いくぞ、サイバー・エンド・ドラゴンの攻撃！
エターナル・エヴォリューション・バースト！」

《クゥッ！》

「エール！？クッ、うわあああ！」

サイバー・エンドの攻撃にエールが反撃するが、その攻撃はサイバー・エンドの攻撃に巻き込まれ、そのままエールを襲い、祐騎のライフを削った。

祐騎　ＬＰ２５００→０

「いたたっ、流石デュエルアカデミア最強のデュエリストですね、完敗ですよ」

「・・・いや、最後の攻撃のときエアトス／ブラストの効果対象のモンスターがもう少し居たらオレの負けだったろう、良いデュエルだった礼を言う」

「こちらこそ、ありがとうございました」

デュエルの決着がついた後、祐騎とカイザーが握手をしていると、蓮達が近づいてきた。

「凄かったです、亮様！」

「祐騎も凄かったぜ！」

「ははっ、ありがとう十代君、でもやっぱり強かったよ」

「でも、楽しかっただろ？」

「もちろん、最高のデュエルだったよ」

祐騎と十代が話していると、明日香がカイザーのところに行っているレイに話しかけた。

「レイちゃん、もうすぐ船が出る時間よ、そろそろ港に行きましょう？」

「・・・あ、もうそんな時間なんだ」

「それじゃあ、行きましょうか」

蓮がそう言うと、レイを見送るために皆は港に向かった。

～デュエルアカデミアの港～

「それじゃあ、来年小学校を卒業したらまた受験してくるからね～！

それまで、待っててね十代様～！」

「はぁ！？なんで、俺なんだよ！？」

「それと、蓮お姉さま私応援してますから、頑張ってくださいね～！」

「・・・ええ！また、会いましょう！」

出港した船の上からのレイの発言で十代が混乱しているのを尻目に、レイは蓮に話しかけて蓮はそんなレイに応えた。

「蓮さん、レイちゃんと何かあったんですか？」

「／／／なにもないわよ、ちょっと私の気持ちの後押しをしてくれただけだから」

「？」

蓮は祐騎の問いに顔を赤くして答えて、そんな蓮を祐騎は不思議そうな顔で首を傾けた。

こうして、一人の少女の来訪によって起こった騒動は終わりを告げた。

第十三話　祐騎ＶＳカイザー亮（後書き）

どうだったでしょうか、今回の話でやりたかったのは攻撃力１００００越えモンスター同士の対決でした。

そして、次回は原作の話をカミューラ戦まで飛ばします。

三幻魔編はほとんど飛ばして、その間にシンクロモンスターを作っているという展開にするので、セブンスターズはほとんど出てきません。

それでは、これからもこの作品をよろしくお願いします。

第十四話　吸血鬼ＶＳ天使（前書き）

今回の話のデュエルは、主人公ではなく姉の優奈とカミューラの対戦になります。

それでは、第十四話始まります。

第十四話　吸血鬼ＶＳ天使

～Ｉ＆Ｉ社内～

レイがデュエルアカデミアから去った翌日に、祐騎と蓮はペガサスからの連絡を受けＩ＆Ｉ社へと向かい、それから数週間の時が過ぎ、その間にデュエルアカデミアではノース校のトップになった万丈目と十代の交流試合等があった。

そして現在、Ｉ＆Ｉ社のとある一室で祐騎達はシンクロモンスターの製作を続けながら、デュエルアカデミアから送られてくる課題をやっていた。

「・・・はぁ～」

「蓮さん、どうしたんですか？」

「・・・何でもないわよ」

「でも、さっきからため息ばかりついてますけど」

「・・・まぁ、隠しても意味無いわよね。
ちょっと、デュエルアカデミアの皆が心配でね」

蓮がデュエルアカデミアの有る方向を見ながらそう言うと、二人の様子を見に部屋に入ってきた優奈が蓮に話しかけた。

「だったら、私が見て来ようか？」

「えっ!?優奈さん、いつからそこに・・・」

「ついさっきよ、それよりも、そんなに心配なら私が様子を見てくるわよ?」

「で、でも、優奈さんも仕事があるんじゃ・・・」

蓮がそう言うと、優奈は笑顔で蓮の言葉を遮った。

「問題無しよ、今の私の仕事はシンクロモンスター関係のカードの製作と調整なんだけど、今は蓮ちゃんの知識での基礎作りの段階だから私の仕事はもう少しあとになるから大丈夫。

それに、蓮ちゃんや祐君の不安要素を取り除いてスムーズに仕事が出来るようにするのも私の仕事なのよ?」

「それじゃあ、お願いしてもいいですか?」

「ええ!お姉ちゃんに任せなさい!

そういうわけだから、祐君と蓮ちゃんは学校の課題をしっかりやって、シンクロモンスターの方も頑張ってね?」

「はい、ありがとうございます!」

蓮がそう言って礼を言うと、優奈は部屋から出て行く前に蓮に耳元で小声で話しかけた。

「(それから、私が居なくなって祐君と二人っきりになる時間も増えるんだから、頑張ってね蓮ちゃん)」

「／／／（ゆ、優奈さん、何をいきなり！？）」

「（ふふっ、ここにきた時の蓮ちゃんの雰囲気で丸判りよ、私蓮ちゃんみたいな妹が欲しかったし、祐君も満更じゃない感じだから、応援してるわよ）」

「／／／（は、はい、ありがとうございます）」

「二人とも何話してるの？」

蓮と優奈の二人が小声で会話をしているのが気になった祐騎が二人に声を掛けると、優奈は蓮から離れて祐騎を笑顔で見つめ、蓮は驚いて体を硬くして祐騎の方を見た。

「ふふっ、女の子同士の内緒話を聞くものじゃないわよ、祐君？」

「そ、そうなんだ、ごめん姉さん・・・」

優奈が笑顔で祐騎にそう言うと、祐騎は二人の様子を不思議に思いながら頷き、そんな祐騎を見てから優奈は部屋から出て行き、デュエルアカデミアへと向かって行った。

～デュエルアカデミア～

「・・・何かしら、このいかにも怪しいと言わんばかりの城は」

蓮の頼みで早速デュエルアカデミアにやって来た優奈は、校舎に行く途中でカミューラによって創られた城を見つけ、呆けていた。

「もしかして、蓮ちゃんはこれを心配してたんじゃ・・・」

「おい、お前そこで何をしている！」

「？」

優奈が不気味な城を見て考え込んでいると、いきなり大声で呼ばれ振り向くと、そこにはカミューラと戦うために城へ行こうとしていた万丈目達が居た。

「見かけない顔だが、まさかお前もセブンスターズの一員か！？」

「・・・えっと、そのセブンなんとかのことは知らないけど、とりあえず冷静になって話をしよう？」

「惚けようったてそうは「やっぱり、祐騎の姉ちゃんじゃないか！」って、なに！？」

優奈が万丈目を落ち着かせて話をしようとするが、万丈目は聞く耳を持たずにデュエルディスクを構え、優奈が困っていると、翔や隼人と一緒に明日香に肩を借りながらやって来た十代が優奈に声を掛けた。

「たしか、十代君と翔君だったわよね、久しぶり」

「それよりも、なんでここに祐騎の姉ちゃんが居るんだよ？」

「ちょっと蓮ちゃんに頼まれて、皆の様子を見に来たんだけど、なんだか大変なことになってるみたいだけど何があったの？」

「実は・・・」

優奈が城や十代の様子を見て不思議に思い、今の皆の状態を聞くと、明日香がセブンスターズと七星門の鍵のことや、カミューラによって倒され人形にされたクロノスとカイザーのことを優奈に話した。

「なるほどね、それで今からそのカミューラって人とデュエルしに行こうとしていた訳ね（やっぱり、蓮ちゃんはこれを心配してたのね）」

「はい、闇のアイテムを持つカミューラに対抗するには、同じ闇のアイテムを持つ十代じゃないと・・・」

「でも、見たところ十代君凄く疲れてるみたいだけど、大丈夫？」

「これくらい、カイザーやクロノス先生に比べたら何でもないぜ！」

優奈がダークネスとなっていた吹雪との戦いでのダメージが残っている十代を心配すると、十代はそんな優奈に大丈夫だと答えた。

「そうだ！そのカミューラって人とは私が先にデュエルさせてもらえないかしら？」

「な、何を言ってるんですか！
私の話を聞いていなかったんですか！？」

「聞いてたから言ってるんじゃないの、聞いた話の限りの話だと、その幻魔の扉っていうのは私なら何とか出来そうだし、それに十代君はまだ疲れてるみたいだから、デュエルするにしてももう少し休まなきゃね？」

優奈がそう言って十代の方を見ると、明日香は気まずそうに十代と優奈を交互に見た。

「で、でも・・・」

「大丈夫、こう見えても私強いんだから。
ちなみに、祐君との本気のデュエルの成績は全勝よ？」

「「ええっ！？」」

「しかも、ほとんどのデュエルで私ノーダメージで終わってるのよ？」

「「・・・」」

優奈の言葉に十代と明日香は声が出ないほど驚いていると、今まで蚊帳の外だった万丈目が話しかけてきた。

「しかし、どれだけ強かろうと鍵を持たないアンタじゃカミュー

ラは相手にしないぞ。
それと、さっきから言っている祐騎とは誰のことだ？」

「・・・そういえば、万丈目ともあったこと無かったんだよな祐騎の奴」

「万丈目さんだ、それで誰なんだその祐騎とか言うやつは」

「月一試験で俺の後にブルーの二年生とデュエルした奴だよ」

「ああ、アイツか、って何だと！？
アイツが1ポイントもダメージを与えられずに負けるというのか！？」

十代に祐騎のことを説明されて、ようやく祐騎と優奈のことを理解した万丈目は目を見開いて優奈を見た。

「まぁ、コストで自分からライフを削ったりはするけどね？
それから、鍵についてはあなた達の内の誰かに貸してもらえば良いと思うんだけど、どうかしら？」

「・・・判りました、私の鍵を貸しますけど、私達も一緒に行きますけど良いですか？」

「ん～、出来れば一人の方が良いんだけど、まぁ良いか。
それじゃ、行きましょうか」

優奈はそう言うと、明日香から七星門の鍵を借りた後、十代達を連れてカミューラの城へと向かって行った。

～城の中～

「ようやく来たわね、待ちくたびれたわ。
それで、私の次の相手は誰かしら？」

十代達を連れて優奈が城の中に入ると、城の扉がひとりでに閉まり優奈達を城から出られなくしてから、カミューラが現れた。

「私がお相手させて貰いますが、よろしいですか？」

「・・・どこの誰かわからないけど、鍵を持ってない者とデュエルする気は無いのだけれど？」

「鍵なら、ほらこの通り持ってますよ」

カミューラが優奈を不信な目で見て鍵のことを理由にデュエルを断ろうとすると、優奈は笑顔で明日香から借りた鍵をカミューラに見せた。

「・・・良いでしょう、それじゃあ始めましょうか、闇のデュエ

ルを！」

「お手柔らかにお願いしますね？」

カミューラはそう言ってデュエルディスクを構え、優奈もカミューラに会わせるように鍵と同様に明日香から借りたデュエルディスクを構えた。

優奈　ＬＰ４０００

カミューラ　ＬＰ４０００

「私のターン、ドロー。

まずは、手札から永続魔法、神の居城－ヴァルハラ－を発動するわね。

そして、私の場にモンスターが居ないためヴァルハラの効果により、手札からＴｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ（スプレンディッド）　ＶＥＮＵＳ（ヴィーナス）（攻／守２８００／２４００）を攻撃表示で特殊召喚、ＶＥＮＵＳの効果でこのカードが存在する限り天使族モンスター以外の攻撃力と守備力を５００ポイントダウンさせる」

「そして、天使族モンスター豊穣のアルテミスを攻撃表示で通常召喚して、カードを2枚伏せてターンエンド」

優奈　手札１枚

「私のターン！ドロー！

手札から魔法カード、死者への手向けを発動！

手札を1枚墓地に捨てて、まずはその目障りなＶＥＮＵＳを破壊するわ！」

「残念ね、カウンター罠、デストラクション・ジャマーを手札を1枚墓地に捨てて発動、私は手札のダグラの剣を墓地に捨てて、死者への手向けの効果を無効にして破壊するわ。
そして、カウンター罠が発動したことでアルテミスの効果でデッキから1枚ドローするわね」

カミューラがＶＥＮＵＳを破壊するために発動させた魔法カードを、優奈がカウンター罠を使って無効にすると、カミューラは不機嫌な顔で優奈を睨めつけた。

「チッ！なら、モンスターをセットしてカードを2枚伏せてターンエンド！」

カミューラ　手札1枚

「私のターン、ドロー。
手札から魔法カード、強欲な壺を発動してカードを2枚ドローするわね」

「なら、カウンター罠、マジック・ジャマーを手札を1枚捨てて発動！
強欲な壺の効果を無効にして破壊するわ！」

「あら、残念ね、ＶＥＮＵＳの第2効果で私の発動する魔法・罠カードを無効にすることは出来ないのよ？
だから、その罠カードの効果は無意味なの、ごめんなさいね」

「なんですって!?」

カミューラは優奈が発動させた強欲な壺を無効にしようとしたが、ＶＥＮＵＳの効果によって不発に終わり、手札を損した上に優奈にさらに手札を増やす結果になってしまった。

「強欲な壺の効果で2枚ドロー、さらにカミューラさんがカウンター罠を発動したことでアルテミスの効果でさらに1枚ドロー、そして私の墓地にモンスターが存在しないことにより手札から、ガーディアン・エアトスを攻撃表示で特殊召喚するわね」

「エ、エアトス!?
なんで、祐騎の姉ちゃんがエアトスを使ってるんだ!?」

「・・・あの人のデッキは見たところエンジェル・パーミッション系のデッキだ、だから天使族のガーディアン・エアトスがデッキに入っていてもおかしくは無いが、デッキ構成を考えるなら他のカードを入れた方が良いはずだ、なぜエアトスを入れているんだ?」

十代が優奈が祐騎のフェイバリットカードのエアトスを召喚したことに驚き、三沢がデッキ構成から見た感想を言っていると、その話声を聞いた優奈が十代達に答えた。

「それはね、私が祐君と同じカードを使いたかったから、この前ここに来たときにデッキから抜いてるのを見て1枚借りてデッキに入れたの。
ふふっ、このカードのおかげでいつでも祐君と一緒に居るみたい

で、お姉ちゃん幸せ！」

「・・・こういう人なのね、理解したわ」

「・・・これが、ブラコンって人種ッスか」

優奈の発言に十代達は若干引きながら優奈を見て、そんな優奈の態度にカミューラは肩を震わせて俯いた。

「ふざけないで頂戴！
そんな理由で組んだデッキで私に挑むなんて、馬鹿にしてるの！？」

「そんなつもりは無いですよ、只単に私は好きなカード達の力を十二分に引き出すデッキを使っているだけで、あなたをなめているわけじゃないですから」

そういうと、優奈は自分のデッキを見て少し考えるとデュエルを再開させた。

「さてと、それじゃあデュエルを再開しましょうか。
私はこれでメインフェイズを終了、そしてバトル！
エアトスでセットモンスターを攻撃！
精霊のオペラ！」

「セットモンスターは魂を削る死霊（攻／守３００→０／２００→０）、よって戦闘では破壊されないわ！」

「あら残念、それなら私はバトルフェイズを終了して、カードを

1枚伏せてターン終了よ」

優奈　手札1枚

「私のターン！ドロー！
くくくっ、私のことを馬鹿にしたツケを払ってもらうわよ！
手札から魔法カード、幻魔の扉を発動！
このカードを発動するには、コストとして人の魂を捧げなければならない、当然私の魂を捧げるわけが無いのは判ってるわよね？」

「今度の生贄は、そうね、ここに来ている鍵を持っていない子全員にしようかしら、一人よりは寂しくなくて良いわよ！」

「・・・独りで盛り上がっているところ悪いんだけど、私の場をよく見てくれないかしら？」

「何を言って・・・！？
そ、そのカードは！？」

カミューラが幻魔の扉を発動させてテンションが上がり高笑いしていると、優奈はそんなカミューラとは対照的に冷静に自分の場に伏せたカードを発動させ、カミューラにそのカードを確認させた。

「そう、最強のカウンター罠、神の宣告を発動させて貰ったわ。
このカードの効果でライフを半分支払って幻魔の扉を無効にする。
そして、カウンター罠が発動したことでアルテミスの効果で1枚ドローするわね。
（体が急に重たくなった？
これが、闇のデュエルのダメージって奴なのね）」

優奈　ＬＰ４０００→２０００

「そ、そんな、幻魔の扉が、無効化されるなんて」

「いくら強力なカードでも、結局はカードテキストに書かれている効果しか持たないのよ。
そのカードに無効化することが出来ないなんて事が、書かれていない時点で無効にすることは可能なの。
さぁ、デュエルはまだ終わってないわよ、続けましょう？」

カミューラが幻魔の扉が無効になったことに動揺していると、優奈がカミューラに話しかけ、デュエルを再開するように言った。

「クッ！私はヴァンパイア・レディ（攻／守１５５０→１０５０／１５５０→１０５０）を守備表示で召喚、さらに墓地の馬頭鬼を除外して効果を発動！
墓地より真紅眼の不死竜（レッドアイズ・アンデットドラゴン）（攻／守２４００→１９００／２０００→１５００）を守備表示で特殊召喚してターンエンド！」

カミューラ　手札０枚

「私のターン、ドロー。
手札からカードを１枚墓地に送って魔法カード、ライトニング・ボルテックスを発動！
効果により、あなたの場のモンスターを全て破壊するわ。
そして、速攻魔法、サイクロンを発動して伏せカードを破壊するわね？」

「そ、そんな、ＶＥＮＵＳの効果で魔法カードの無効化が出来ないのに、そんなのどうやって防げっていうのよ！？」

優奈が一気に魔法カードを発動させ、カミューラの場のカードを全て破壊した。

ちなみに、カミューラの伏せていたカードは攻撃の無力化であり、破壊されなければこのターンは凌げていた。

「そして、バトル！
まずは、エアトスでダイレクトアタック！
精霊のオペラ！」

「クゥッ！」

カミューラ　ＬＰ４０００→１５００

「そして、これでとどめよ！
ＶＥＮＵＳでダイレクトアタック！
ホーリー・フェザー・シャワー！」

「クッ！あああああっ！？」

カミューラ　ＬＰ１５００→０

優奈の場のＶＥＮＵＳの攻撃を受けて、カミューラはデュエルのダメージによりその場に倒れ、優奈も一瞬フラついたが、すぐに持

ち直してカミューラの方へ向かって歩き出した。

「クッ！まさか、この私が、幻魔の扉が敗れるなんて、これでは一族再興の悲願が・・・」

「・・・ねぇ、あなた、よければ私と一緒に来ない？」

「！？な、なにをいきなり、私を侮辱するのも大概にしなさい！散々馬鹿にした挙句、負けた私に情けをかけるつもり！？」

「ううん、違うわよ、あなたが何を思ってこんなことをしているのかは私は知らないし、聞くつもりもない。
けど、困ってる人が居て、その人を手伝える力があるなら、手伝いたいと思うのは普通のことじゃないのかしら？」

カミューラが優奈の言葉に興奮して、倒れたままの状態で優奈を睨みつけると、優奈はそんなカミューラに微笑みながら話し続けた。

「もし、私達のところで出来ないことなら、出て行けば良いし、もし行くあてがあるのならそこに行く前に体を休める意味も含めて一緒に来ない？」

「・・・判った、良いわよそこまで言うなら、とことんあんた達のことを利用してやろうじゃないのさ」

「ふふっ、ええそれでも構わないわよ。
ただし、もうこんな危ないことはしないと約束して頂戴ね」

「・・・判った」

こうして、優奈はカミューラを説得した後、十代達や鮫島校長へ理由等を説明してから、Ｉ＆Ｉ社へと連絡を取りペガサスの協力を取り付けて、闇のデュエルのダメージを回復させるためカミューラと共にデュエルアカデミアの保健室でこの日は眠りにつき、次の日にカミューラを連れてデュエルアカデミアを出発してＩ＆Ｉ社へと向かって行った。

おまけ　～優奈がデュエルアカデミアに行っている間の祐騎達～

「／／／ゆ、祐騎、おやつでクッキー焼いてみたんだけど、食べてみてくれる？」

「はい、喜んでいただきます」

優奈が出て行って数時間後、祐騎と蓮は学校から出された課題を終わらせてシンクロモンスターやチューナーモンスターについての草案を纏める仕事の合間の休憩時間に、蓮が食堂のキッチンを借りて作ったクッキーを祐騎に渡していた。

「／／／ど、どうかしら、味の方は・・・」

「おいしいですよ、僕の好きな味なんでいくらでも食べられそうです」

「／／／ほ、本当！？
よ、よかった～、クッキーなんて久しぶりに焼いたからうまくいっているか心配だったけど、そう言ってもらえると嬉しいわね（優奈さんから祐騎の好みを聞いておいてよかったわ、それにしても本当においしそうに食べるのよね、祐騎って）」

「僕の顔をじっと見たりして、どうかしましたか？」

「／／／へっ！？
な、なんでもない、なんでもないから気にせずに食べて頂戴！」

蓮が祐騎の食べる姿を見続けていると、流石に蓮の視線に気づいた祐騎が蓮に話しかけると、蓮は慌てて誤魔化した。

そして、このまま二人は暫く休憩した後、再びカード製作の仕事の手伝いをするために、自分達に割り当てられた部屋へと向かっていった。

《ふふっ、蓮ってばほんと幸せそうな顔して、これは祐騎君だけじゃなくて、蓮に自分の気持ちを認識させてくれたレイちゃんにもお礼をしなくちゃね～》

《・・・そう言いながら、なんでアナタは蓮さんの赤くなった顔ばかりを映像記録に残してるんですか！？》

《もちろん、後からの観賞用に決まってるじゃない！》

《胸を張って言わないでください！》

祐騎と蓮が休憩をしているところから少し離れたところで、ティルとエールの二人が祐騎達を見守りながら、ティルは蓮の行動を記録として残す作業をし、エールはそんなティルにツッコンでいた。

こうして、このようなことがカミューラを連れて優奈が戻ってくるまで続いた。

第十四話　吸血鬼ＶＳ天使（後書き）

第十四話どうだったでしょうか。

次回は文化祭まで飛んで、シンクロモンスターの初使用の回になります。

あと、今回出した幻魔の扉はアニメ効果のカードです。

それでは、これからもよろしくお願いします。

第十五話　シンクロ召喚、飛翔せよスターダスト・ドラゴン！（前書き）

今回は、原作での文化祭の回で祐騎と万丈目のデュエルになります。

あと、今回からシンクロモンスターを出していきます。

それでは、第十五話よろしくお願いします。

第十五話　シンクロ召喚、飛翔せよスターダスト・ドラゴン！

～Ｉ＆Ｉ社～

優奈がカミューラとのデュエルに勝利してから数週間が経過した。

現在、カミューラは優奈の推薦によりＩ＆Ｉ社で優奈の補佐をする形で働いている。

そして、祐騎達はシンクロモンスターとチューナーモンスターの製作の手伝いをその間も続け、ついに一応の形ではあるがシンクロモンスターを使うための環境が整い、祐騎と蓮は自分のデッキをシンクロモンスターに対応した形に調整し直していた。

「・・・よし！これで、とりあえずは大丈夫ね」

「あ、蓮さん終わったんですか？」

「ええ、祐騎はどう？
私は前から知ってるから、結構簡単に調整が済んだけど祐騎は難しいんじゃない？」

「ええ、特にこのチューナーですけど、このカードの割合がちょっと難しいですね」

祐騎はそう言って、蓮にデッキの横に置いてあったカードの束からチューナーモンスターを蓮に見せた。

「そうなの、まぁ、チューナーに関してはこれから慣れていくし

かないわね」

「ですよね～」

祐騎と蓮がデッキの調整をしながら話をしていると、優奈が二人が居る部屋に入ってきた。

「二人とも、デッキの調整は済んだ？」

「はい、私は問題ないですけど、祐騎はシンクロモンスターに慣れてないですから、調整にはもう少しかかると思いますよ」

「あらそう、それじゃあ、息抜きも兼ねてデュエルアカデミアに戻ってみる？」

「・・・良いんですか、もうアカデミアに戻っても」

蓮が優奈の言葉を聴き直すと、優奈は笑顔で蓮の質問に答えた。

「ええ、二人のおかげでシンクロモンスターの製作は軌道に乗ったし、そろそろアカデミアの皆に会いたいでしょう？
それに、今は私の手伝いでカミューラさんも居るから二人は戻っても大丈夫よ」

「・・・それじゃあ、戻らせてもらいますね。
今から戻ったらアカデミアの文化祭に間に合うと思いますから、丁度よかったです」

「ふふふっ、実はその文化祭で面白いことがあるのを聞いたからこの話を出したのよ」

「え?ま、まさか・・・」

蓮が文化祭のことを話に出すと、優奈は妖しい笑みを浮かべて祐騎と蓮を見た後、一度部屋から出て行き、次に部屋に入ってきた時には2つのスーツケースを持って入ってきた。

そして、祐騎と蓮は優奈から渡されたスーツケースとチューナーとシンクロモンスターのカードを入れた新しいデッキを持ってデュエルアカデミアへと向かって行った。

〜レッド寮前〜

デュエルアカデミアの文化祭当日、レッド寮の前に作られたデュエルステージで、十代とブラック・マジシャン・ガールの精霊とのデュエルが行われていた。

そして、そのデュエルも終盤に差し掛かり、ブラック・マジシャン・ガールが自身のカードを装備魔法

で強化して十代の場のフレイム・ウィングマンを攻撃すると、十代は伏せていた罠カード、立ちはだかる強敵とヒーロー・バリアのコンボでブラック・マジシャン・ガールの場に出ていたマジシャンズ・バルキリアを破壊してライフを0にした。

「あっちゃー、負けちゃったか～。
でも、楽しかったよ～！」

ブラック・マジシャン・ガールがそう言って観客に手を振ると、観客は大盛り上がりになった。

「・・・なんだよ～、これじゃあ俺が悪者みたいじゃんか～」

「そんなこと無いんじゃない？
楽しかったんでしょ？」

「ああ！楽しかったぜ！
あ～あ、祐騎の奴も居ればもっと楽しかっただろうな～」

「そうね、蓮も居ないからちょっと寂しいのよね」

「あら、だったら、今日ここに来たのは間違いじゃなかったわね」

「蓮！？
あなた、またいきなり現れ、て・・・って蓮よね？」

十代と明日香が祐騎達がここに居ないことを残念に思っていると、アカデミアに帰ってきた蓮が明日香に話しかけ、明日香はその声に反応して振り向き、いきなり後ろから話しかけたことを注意しようとすると、明日香は戸惑った様に蓮に確認した。

なぜなら、明日香が振り返った先には、カードに描かれている姿と寸分変らない姿の凛天使クイーン・オブ・ローズと、少し身長の低い神禽王アレクトールが居たためである。

「・・・ええ、そうよ、こんな格好してるけど私よ」

「ってことは、そっちのアレクトールは祐騎か！？」

「・・・うん、そうだよ、僕はこんな格好したくなかったんだけどね」

十代と明日香に確認されて、祐騎と蓮は顔を隠している兜と仮面をはずして自分の顔を二人に見せた。

「どうして、二人がそんな格好を？」

「・・・優奈さんがね、Ｉ＆Ｉ社で働いているアカデミアの卒業生からレッド寮の文化祭について聞いてたらしくて、このコスプレ衣装を作って私達に持たせたのよ」

「・・・姉さんの苦労を無碍にするわけにはいかないですから、ここに来るまでに着替えて来たんです」

「そ、そうなのか。
それはそうと、ここに来てるってことは、もう手伝いの方はいいのか？」

祐騎と蓮が自分達の姿について説明すると、十代は二人にこれからもここに居るのかの確認をした。

「うん、また呼ばれるかも知れないけど、一応は大丈夫らしいからこれからはここでの生活に戻ることになるよ」

「そうか！だったら、戻ってきた記念に俺とデュエルしようぜ！」

「うん、判った「ちょっと、待った！！」よ？」

十代が祐騎とデュエルをしようとすると、ＸＹＺ－ドラゴンキャノンの格好をした万丈目がそれを止めて二人の会話に入り込んできた。

「貴様が、甲斐祐騎だな！
貴様の相手はこの万丈目サンダーがしてやろう！」

「・・・えっと、どちら様ですか？」

「くっ！貴様！
この万丈目サンダーを知らないというのか！」

「・・・だから、俺言ってたじゃん、祐騎は万丈目と会ったこと無いんだって。
祐騎は自分が会ったことの無い人のことを覚えないんだから、知らないのが当然じゃねぇか。
カイザーのことだって、教えるまで知らなかったんだぜ？」

「うぬぬぬっ！
ならば、教えてやろう！
この俺こそが、一度このデュエルアカデミアから去り、ノース校のトップになってこのデュエルアカデミアに帰ってきた男！

その名も、一、十、百、千、万丈目サンダーだ！」

十代の言葉で祐騎が自分のことを知らないことを、再確認した万丈目は高らかに自分の名前を叫び、周囲の人たちは万丈目の釣られて、サンダー、サンダーと繰り返していた。

「・・・それで、そのサンダーさんがなんで僕とデュエルしたいんですか？」

「ふんっ、決まっているだろう。
貴様にも、この俺の実力を教えてやるためだ！
さぁ、ディスクを構えろ！」

「・・・どうしましょうか？」

「丁度いいじゃない、祐騎。
アナタの新しいデッキの力を試すには、丁度いい相手じゃない」

「・・・まぁ、蓮さんがそう言うなら仕方ないですね」

万丈目の言葉に祐騎が戸惑っていると、蓮が祐騎にデュエルするように薦めると、祐騎は渋々といった感じでデュエルディスクを構えた。

「「デュエル！」」

万丈目　ＬＰ４０００

祐騎　ＬＰ４０００

「僕のターン！ドロー！
僕はモンスターをセットして、カードを２枚伏せてターンエンド！」

祐騎　手札３枚

「俺のターン！ドロー！
俺は手札から、Ｘ－ヘッド・キャノン（攻／守１８００／１５００）を攻撃表時で召喚！
さらに、永続魔法、前線基地を発動して、効果により手札からＹ－ドラゴン・ヘッド（攻／守１５００／１６００）を攻撃表示で特殊召喚！」

「いくぞ！バトル！
Ｘ－ヘッド・キャノンでセットモンスターを攻撃！」

「セットモンスターはウェポン・サモナー、よって効果によりデッキからガーディアン・エアトスを手札に加えます！」

「ふん！聞いていた通りの手だな、ならばＹ－ドラゴン・ヘッドでダイレクトアタック！」

「リバースカードオープン！罠カード、ガード・ブロックを発動！
相手モンスターによる戦闘ダメージを一度だけ０にして、デッキからカードを１枚ドローします！」

「ちっ！ならば、俺はカードを２枚伏せてターンエンドだ！」

万丈目　手札1枚

「ねぇ、蓮、さっき甲斐君に言ってた新しいデッキって、もしかしてあなた達がI&I社で手伝いをしていたことに関係があるの？」

祐騎と万丈目のデュエルが始まり、二人がそれぞれの最初のターンが終了すると、明日香が蓮に話しかけた。

「ええ、まぁ見てれば判るわよ、私達がI&I社に手伝いに行っていた理由がね」

「そっか！く～、楽しみだぜ、一体どんなカードが出てくるんだ！」

明日香の問いに蓮が答えると、それを側で聞いていた十代が目を輝かせて祐騎と万丈目のデュエルの観戦を続けた。

「僕のターン！ドロー！

僕は墓地から風属性モンスターのウェポン・サモナーを除外して、手札から風の精霊ガルーダを攻撃表示で特殊召喚！

さらに、相手フィールド上に同属性のモンスターカードが2枚存在することにより、手札から神禽王(しんきんおう)アレクトール（攻／守２４００／２０００）を特殊召喚！

そして、僕の墓地にモンスターが存在しないことにより、手札からガーディアン・エアトスを特殊召喚！」

「やはり来たな！リバースカードオープン！罠カード、威嚇する咆哮！

このカードの効果により、相手はこのターン攻撃宣言することは出来ない！」

祐騎がエアトスを召喚すると、万丈目はすかさず威嚇する咆哮を使用して祐騎の攻撃を封じた。

「攻撃できないか、それなら、このターンで見せてあげるよ、僕と蓮さんが手伝って完成した新しいカードを！」

「なんだと！？」

「僕はまだこのターン通常召喚を行っていない、よって僕は手札よりチューナーモンスター、霞の谷（ミスト・バレー）の戦士（攻／守１７００／３００）を攻撃表示で召喚！」

「チューナーモンスター！？
なんだ、そのモンスターは！？」

万丈目は祐騎が召喚したチューナーモンスターに驚き、周りでデュエルを見ていた皆も聞いたことの無い種類のカードの登場に驚いていた。

「なんなの、あのカード。
蓮、もしかしてあのカードが、アナタ達が手伝って作ったっていうカードなの？」

「ふふっ、半分正解よ。
まぁ、黙って見てなさい、これからが本番だから」

明日香が蓮にチューナーモンスターについて質問すると、蓮は明日香の問いをはぐらかすと、二人のデュエルの観戦に戻った。

「ここからが本番ですよ！
レベル４の風の精霊　ガルーダにレベル４のチューナーモンスター、霞の谷の戦士をチューニング！」

「なんだ、なにが起こっている！？」

祐騎がガルーダに霞の谷の戦士をチューニングすると、霧の谷の戦士は４つの輪となり、その輪の中にガルーダが入り、ガルーダは４つの星になり、その光景に万丈目を始め、蓮を覗いた人たちは何事かと驚きながらその光景を見続けた。

「集いし願いが新たに輝く星となる、光差す道となれ！シンクロ召喚！
飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン（攻／守２５００／２０００）！」

「な、なんだ、このモンスターは・・・
それに、シンクロ召喚だと、なんだそれは！？」

「これが新たなモンスターカード、シンクロモンスター！
そして、シンクロモンスターを召喚するためには、チューナーモンスターとチューナー以外のモンスターのレベルの合計をシンクロモンスターのレベルと合わせることで召喚することが出来る。
これが、新たなモンスター召喚方法、シンクロ召喚です！」

万丈目や観客が、輝きを放ちながら現れたスターダストと、シン

クロ召喚に驚いていると、祐騎は万丈目や周りの観客に聞こえる様にシンクロモンスターについて話した。

「そして、僕はカードを1枚伏せてターンエンドです」

祐騎　手札0枚

祐騎がターンを終了すると、スターダストに眼を奪われていた明日香が蓮に話しかけた。

「・・・綺麗なモンスター、あのカードのことなのね、二人が手伝って完成したカードっていうのは」

「ええ、そうよ（といっても、スターダストは私達が創ったわけじゃないんだけどね）」

「すっげー!!
く～!やっぱり、俺が祐騎とデュエルしたかったぜ!」

明日香は蓮からの答えを聞くと、二人のデュエルの観戦に戻り、十代はスターダストを見て祐騎とデュエルをするのが自分じゃなかったことを悔しがっていた。

「くっ!俺のターン!ドロー!
そのモンスターにどんな力があるか知らないが、このターンで消し去ってくれる!
俺は前線基地の効果で、Ｚ－メタル・キャタピラーを特殊召喚!
そして、フィールドのＸ、Ｙ、Ｚのモンスターを除外して、ＸＹ

Ｚ－ドラゴン・キャノン（攻／守２８００／２６００）を特殊召喚！」

「いくぞ！ＸＹＺ－ドラゴン・キャノンの効果を発動！
手札のカードを１枚墓地に捨てることで、相手フィールド上のカードを１枚破壊する！
俺は、そのスターダスト・ドラゴンを破壊してやる！
ハイパー・デストラクション！」

「なら、スターダストの効果を発動！
スターダスト・ドラゴンはフィールド上のカードを破壊する効果が発動したとき、自身を生贄にすることでその効果を無効にして、破壊する！
ヴィクテム・サンクチュアリ！」

「なんだと！？」

万丈目が手札を１枚捨てると、ＸＹＺの砲身にエネルギーが充填され、その砲身がスターダストの方を向くと、スターダストはＸＹＺを自身の翼で包み込み、ＸＹＺの砲撃が発射されることなく、ＸＹＺはスターダストと一緒にフィールドから消えてしまった。

「くそっ！破壊効果へのカウンター効果だったのか！
俺はＸＹＺの効果のコストで墓地に送った、おジャマジックの効果でデッキからおジャマ・イエロー、グリーン、ブラックを手札に加え、おジャマ・イエロー（攻／守０／１０００）を守備表示で召喚！」

《ち、ちょっと～、万丈目のアニキ～、相手のモンスターは強力なのばっかりなのよ～！？

オイラじゃ、速攻でやられちゃうよ～！？》

「ええい！うるさい！
雑魚は雑魚らしく、相手モンスター1体の攻撃くらい壁として防いで見せろ！（奴の手札は0、そして俺の場のリバースカードは異次元からの帰還、次の奴のターンで奴がモンスターを引かなければ、まだ俺にもチャンスは有る！）」

万丈目はおジャマジックの効果で手札に来たおジャマ・イエローを守備表示で召喚すると、召喚されたイエローと漫才のようなやり取りを繰り広げ、そんな万丈目とイエローの様子を見た祐騎は万丈目に声を掛けた。

「あの、サンダーさん、そのモンスターってもしかしてデュエルモンスターズの精霊ですか？」

「貴様、この雑魚のことがわかるのか！？」

「ええ、僕のエアトスも精霊ですから」

《ご挨拶が送れて申し訳ありません。
マスターの精霊をさせてもらっています、ガーディアン・エアトスのエールと言います。
以後、よろしくお願いします》

《・・・アニキ、オイラこの精霊に対しては、失礼なことをしちゃいけない気がするよ～！？》

「・・・貴様のような品性の欠片も無いような奴には縁の無いものだがな、これが本物の気品というものだ。

（しかし、なぜ俺の精霊だけがこんな奴らなんだ！
それに、紅龍君の横に居る精霊らしき奴は椿姫ティタニアルだというのに！？）」

エールが万丈目とイエローに自己紹介をすると、万丈目は自身の精霊と他に精霊が側にいる人を見て、自分の精霊がおジャマ達なのはどうしてなのかと考えながらエンド宣言をした。

「今はそんなことを考えている暇などないな、ターンエンドだ！」

「この瞬間、墓地のスターダストの効果が発動する！」

「なんだと！？」

「スターダスト・ドラゴンは自身の効果を発動させたターンのエンドフェイズに僕のフィールドに戻ってくる！
再び飛びたて！スターダスト・ドラゴン！」

万丈目はスターダストが召喚されると、苦虫を噛み潰したような顔をした。

「破壊の無効に、自己再生能力を持ったモンスターだと！？（クソっ！これでは、罠カードで召喚したモンスターと、この雑魚がアイツのモンスターの攻撃を防いだとしても、その次のターンの総攻撃で俺のライフは０に・・・）」

万丈目　手札２枚

「僕のターン！ドロー！

・・・僕は魔法カード、強欲な壺を発動して2枚ドロー！
そして、僕はアレクトールを生贄に捧げて、風帝ライザーを召喚！
ライザーの効果により、おジャマ・イエローをデッキの一番上に戻します！」

《あ～れ～！？アニキ～！？（あ、でもこれって攻撃で破壊されないってことなのよね、それならこのままでいいかも、でもそれだと万丈目のアニキが・・・）》

祐騎は少し悩んでから、手札増強の魔法カードを使用してカードをさらにドローして、さらにドローしたライザーの効果でイエローをデッキの一番上に戻した。

「何！？（どういうつもりだ、あのまま攻撃しても勝てるのになぜわざわざ、こんな雑魚をデッキに戻してくる？
除去をするなら、むしろ俺のリバースカードの方を除去するのがこの状況では常道のはず、まさか、ドロー妨害のためだけだとも思えん、どうしてだ・・・）」

「さらに、魔法カード、魂の開放を発動して僕の墓地のガルーダ、霧の谷の戦士、アレクトール、強欲な壺、サンダーさんの墓地からＸＹＺ－ドラゴン・キャノンを除外します。
そして、バトル！
スターダストでダイレクトアタック！
シューティング・ソニック！」

「ぐぅううう！（ええい！せっかくの罠カードもこの状況では意味が無いではないか！？）」

万丈目　ＬＰ４０００→１５００

「これでとどめです。
エアトスでダイレクトアタック！
精霊のオペラ！」

《すみません、これで終わりにさせてもらいます！
ハアアアッ！》

「ぐぅあああああっ！！」

万丈目　ＬＰ１５００→０

エールの攻撃により、万丈目のライフが０になったことでデュエルが終了した。

「おい！この勝負は貴様のシンクロモンスターの効果のおかげだということを覚えておけよ！
そのカードの効果を知っていれば、このデュエルは俺の勝ちだったかも知れんのだからな！」

「はい、それは判ってます。
サンダーさんが知るはずの無いカードの効果を使って勝ったんですから、この勝負の勝敗は無効ですよ」

「・・・ならば良い、それよりも、貴様最後のターンでなぜ、おジャマ・イエローをデッキに戻した？
結果的には勝利につながる選択だったが、普通あの状況ではモン

スターでは無くリバースカードを戻すだろう、どうしてだ」

「それはですね、僕はモンスターカードを出来るだけ墓地に残したままデュエルを終えたくないんです。
ですから、可能な限り墓地にモンスターが残らないようにしてるというのが一番の理由ですね」

「・・・そ、そんな理由であの雑魚をデッキに戻したのか？」

万丈目が祐騎の言葉に呆れて放心していると、十代達がやって来て二人に話しかけた。

「さっきのモンスターすっげぇな、祐騎！
こう、キラキラしてたし、アレがお前の新しいカードなんだよな！
今度は俺とデュエルしようぜ！」

「ははははっ、十代君らしい評価だね、それとデュエルはまた今度になるんじゃないかな？」

「どうしてなんだよ！」

「だって、さっきからこっちをジーッと見てる人が居るんだよね。
それに、ちょっと疲れちゃったから今日はもうお終いにしたいんだよね～」

祐騎がそう言って指を刺した先には、先ほど十代とデュエルをしていたブラック・マジシャン・ガールの精霊が居た。

そして、そのブラック・マジシャン・ガールは祐騎達が自分のことに気づいたのを知ると、近くまで来て祐騎の手を握って話しかけ

た。

「ねぇねぇ、私ともデュエルしてもらえないかな？
さっきの綺麗なモンスター、もう一度見てみたいんだ！」

「え、あの、ちょっと落ち着いて「・・・祐騎からさっさと離れなさい」くださ、い？」

「・・・祐騎はここに来てからすぐにデュエルだったから疲れてるのよ、そんなにデュエルがしたいなら私が相手になるわ」

ブラック・マジシャン・ガールが祐騎の手を握ったまま話し続けていると、二人の間に蓮が割って入り、祐騎の代わりに自分がデュエルすると言い出した。

「それならしょうがないか、それじゃあ、アナタとデュエルね！
楽しいデュエルにしましょう！」

「・・・ええ、楽しいデュエルを、ね」

ブラック・マジシャン・ガールが笑顔で蓮とのデュエルを承諾すると、蓮はブラック・マジシャン・ガールを睨みながらそれに答えた。

「・・・蓮さん、なんであんなに不機嫌なんでしょうか？」

「さ、さぁ、私にはわからないわね（おそらく、蓮は甲斐君の手をいきなり握って話しかけたことに対して不機嫌になってると思うんだけど、甲斐君は気づいてないわね、この感じじゃあ）」

祐騎は蓮がブラック・マジシャン・ガールを睨んでいる理由がわからず、明日香にその理由を聞いてみると、明日香は心の中でだけ答えて、祐騎には言葉を濁すだけに終わった。

第十五話　シンクロ召喚、飛翔せよスターダスト・ドラゴン！（後書き）

今回の話どうだったでしょうか、次回は蓮とＢＭＧのデュエルになります。

そして、次回の話が終わった後は、オリジナルの話の話になります。

それでは、これからもよろしくお願いします。

第十六話　蓮ＶＳＢＭＧ、ブラック・ローズ・ドラゴン召喚！（前書き）

今回は、タイトル通り蓮とブラマジガールのデュエルです。

それでは、第十六話始まります。

第十六話　蓮ＶＳＢＭＧ、ブラック・ローズ・ドラゴン召喚！

～レッド寮前の特設ステージ～

祐騎と万丈目のデュエルが終わった後、二人の前に十代とデュエルしたブラック・マジシャン・ガールが祐騎の手を握ってデュエルに誘うと、そんなブラック・マジシャン・ガールに蓮が割って入り、祐騎の代わりにデュエルすることになった。

「・・・さぁ、始めましょうか」

「うん！楽しいデュエルにしようね！」

「「デュエル！」」

蓮　ＬＰ４０００

ＢＭＧ　ＬＰ４０００

「私のターン、ドロー

私は、ダンディライオン（攻／守３００／３００）を守備表示で召喚、カードを１枚伏せてターンエンド」

蓮　手札４枚

「ワタシのターン！ドロー！

ワタシは手札から、マジシャンズ・ヴァルキリア（攻／守１６００／１８００）を攻撃表示で召喚するよ！
そして、魔法カード、二重召喚（デュアル・サモン）を発動して、もう1枚のマジシャンズ・ヴァルキリアを召喚するよー！」

「・・・やっぱり、マジシャンズ・ヴァルキリアでのロックできたわね」

ブラック・マジシャン・ガールがマジシャンズ・ヴァルキリアを2体召喚すると、二人のデュエルを観戦しているレッド寮の生徒を中心にした生徒達がブラック・マジシャン・ガールを応援するように声を挙げた。

「皆ー！ありがとう！
それじゃ、いっくよ～！
1体目のマジシャンズ・ヴァルキリアでダンディライオンを攻撃！
マジック・イリュージョン！」

「くっ！破壊されたダンディライオンの効果を発動！
ダンディライオンが墓地に送られたとき、私の場に綿毛トークン（攻／守０／０）２体を守備表示で特殊喚するわ！」

「それじゃあ、２体目のマジシャンズ・ヴァルキリアで綿毛トークンを攻撃！
マジック・イリュージョン！」

「クッ！」

ブラック・マジシャン・ガールが蓮の場のダンディライオンを破壊すると、蓮の場に2体の綿毛トークンが現れ、ブラック・マジシ

ャン・ガールは綿毛トークン1体を2体目のマジシャンズ・ヴァルキリアで破壊した。

そして、蓮の場の綿毛トークンが破壊されると、周囲の観客のテンションも上がり、特に翔はいつもに比べておかしいくらいのテンションでブラック・マジシャン・ガールを応援し出した。

「・・・翔君、君はなんでそんなに興奮してるのさ」

「ふっふっふっ、それは、ひとえに愛故だよ！」

「うわっ！？いきなりなんですか、アナタ！？」

ブラック・マジシャン・ガールの応援でテンションが上がりまくっている翔に祐騎が引いていると、祐騎の背後から、明日香の兄の吹雪が現れて祐騎に話しかけた。

「やあ、君が祐騎君だね？
僕は天上院吹雪、明日香の兄だよ」

「あ、どうも、そういえば廃寮で見た写真と同じ顔ですね～」

「そうそう、アスリンと一緒に僕の手がかりを探してあそこに行ったんだってね。
いや～、迷惑を掛けたみたいですまないね」

「兄さん！そのアスリンって呼び方やめてって言ってるじゃない

の！

それに、それを言うなら蓮や皆にも言ってよね」

吹雪は祐騎に自分が行方不明になっていたころの話や、ここに戻ってきた時のことを話してから、明日香をからかいながら祐騎に話しかけた。

「それよりも、翔君があのブラック・マジシャン・ガールの子のことをあんなに応援してるのは、翔君にとってブラック・マジシャン・ガールが最も愛しい存在だからだよ」

「はぁ、そういうものですか・・・」

「そうだ！君も、あの蓮という子の応援はしないのかい？」

「う～ん、特にするつもりはないですね」

「・・・何故だい？

僕は、明日香から君が彼女のことを大切な存在だと公言しているのを聞いていたから、てっきり彼女の応援をするものだと思っていたんだけどね？」

祐騎が蓮のことを応援しないということを言うと、吹雪は珍しく真剣な顔で祐騎に応援をしない理由を聞いた。

「それはですね、蓮さんなら僕の応援がなくても勝てますから、特に応援する必要はないと思いまして」

「なるほど、確かに明日香から聞いていた通りの子だね。

でも、信頼するのは良いことだけど、大切な女性が戦っている時

に応援をしないのは、胸キュンポイントマイナスだよ！」

「・・・む、胸キュンポイントってなんですか」

「ふっふっふっ、それでも君は総合胸キュンポイント７５点だけどね！

これからも、この調子で胸キュンポイントを溜めていくんだよ！」

言いたいことを言って、吹雪はまたどこかへと消えて行った。

「・・・なんだったんでしょうか、あの人は？」

「・・・ごめんなさいね、兄さんったらいつもあんな感じなのよ、私がいくら言っても聞かないし」

「いえ、明日香さんが謝る必要はないですよ。

それに、言われたとおりでしたから」

「そ、そう、それならいいんだけど（兄さんの言ったことが正しかったなんて、甲斐君もちょっと変ってるのね）」

祐騎が笑顔でそう言うと、明日香は呆れたような顔をして祐騎を見た。

「さてと、それじゃ言われた通りに応援しましょうか。

蓮さん！頑張ってくださ～い！」

「・・・ありがとう、祐騎（祐騎が応援してくれてるんだから、このデュエルは絶対負けられないわね）」

祐騎が蓮のことを応援すると、その声が聞こえた蓮は笑みを浮かべてブラック・マジシャン・ガールのほうを向いた。

「ワタシはカードを1枚伏せてターンエンドだよ！」

ＢＭＧ　手札2枚

「私のターン！ドロー！

私は魔法カード、フレグランス・ストームを発動、このカードはフィールド上の植物族モンスターを破壊してデッキからカードを1枚ドローする！

私は綿毛トークンを破壊してカードをドローする！

そして、ドローしたカードが植物族モンスターだった場合相手に確認させることでもう1枚ドローできる！」

蓮はドローしたカードを確認すると、そのままドローしたカードを発動させて綿毛トークンを破壊して効果を発動して、カードをドローした。

「私がドローしたのは、植物族モンスターのロードポイズン！

フレグランス・ストームの効果でもう1枚ドローする！」

「そして、私はチューナーモンスター、デブリ・ドラゴン（攻／守１０００／２０００）を召喚して効果を発動！」

「チューナーモンスター！？

もしかして、あのモンスター以外のシンクロモンスターが見られるの！？」

蓮がチューナーモンスターのデブリ・ドラゴンを召喚すると、ブラック・マジシャン・ガールは期待に満ちた表情で蓮のフィールドを見続けた。

「デブリ・ドラゴンの効果により、墓地の攻撃力５００以下のモンスターを効果を無効にして特殊召喚する！
私は墓地のダンディライオンを攻撃表示で特殊召喚！」

「レベル３のダンディライオンにレベル４のデブリ・ドラゴンをチューニング！
冷たい炎が世界の全てを包み込む、漆黒の花よ開け！シンクロ召喚！
咲き乱れよ、ブラック・ローズ・ドラゴン（攻／守２４００／１８００）！」

蓮の場のデブリ・ドラゴンが４つの光の輪になり、その中にダンディライオンが入ると、ダンディライオンは３つの星になり、その星が光の線で一直線に結ばれると、蓮のフィールドに光が溢れた。

そして、その光が収まると、蓮のフィールドに黒薔薇の様な翼と棘のついた茨を持った深紅のドラゴンが黒い花びらを撒き散らしながら現れた。

「すっご～い！！
でも、私の場にマジシャンズ・ヴァルキリアが２体存在しているから、攻撃はできないよ！」

「そんなこと、このモンスターには関係無いわ」

「え？」

「ブラック・ローズ・ドラゴンの効果を発動！
このカードがシンクロ召喚に成功した時、フィールド場のカードを全て破壊する！
ブラック・ローズ・ガイル！」

蓮がブラック・ローズ・ドラゴンの効果を使用すると、ブラック・ローズ・ドラゴンの周りに黒い花弁を乗せた風が巻き起こり、フィールド上の全てを飲み込もうとすると、蓮はさらに自分の場のリバースカードを発動させた。

「そして、ブラック・ローズ・ドラゴンの効果にチェーンして罠カード、火霊術（かれいじゅつ）－紅（くれない）をブラック・ローズ・ドラゴンを生贄にして発動！
このカードは自分フィールド場の炎属性モンスターを生贄にすることで、生贄にしたモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える！」

「ええっ！？」

蓮の場のブラック・ローズ・ドラゴンが炎に包まれると、その炎がブラック・マジシャン・ガールを襲い、ブラック・ローズ・ドラゴンの効果によりフィールド上のカードを全て破壊した。

「いった～い！！」

ＢＭＧ　ＬＰ４０００→１６００

「そして、私の場のダンディライオンが墓地に送られたことにより、綿毛トークン2体を守備表示で特殊召喚する！
そして、私は場に2枚のカードを伏せてターンエンド」

蓮　手札3枚

「すごい、すごい！！
ワタシも負けてられないね！
ワタシのターン！ドロー！
ワタシは手札から、魔法カード、強欲な壺を発動してデッキから2枚ドロー！
そして、魔導騎士（まどうきし）ディフェンダー（攻／守１６００／２０００）を守備表示で召喚するよ！」

「このカードは召喚に成功したとき、魔力カウンターを1つ乗せる。
そして、自分の場の魔法使い族モンスターが破壊されるとき、代わりにこの魔力カウンターを取り除くことで、破壊を無効にするよ！
そして、カードを2枚伏せてターンエンドだよ！」

「（ワタシが伏せたのは、フィールド上のカードに魔力カウンターを乗せることが出来る永続罠、漆黒のパワーストーンと魔法の筒の2枚。
この2枚とディフェンダーの効果で次のワタシのターンまでディフェンダーを守って、ディフェンダーを生贄にして手札のワタシのカードを召喚できれば・・・）」

ブラック・マジシャン・ガールは、ブラック・ローズ・ドラゴンと火霊術－紅の効果で自分フィールドのカード全てと半分以上のライフを一気に奪っていった蓮を褒め、自分の今できることをやり、次の自分のターンに望みを賭けてターンを終了した。

ＢＭＧ　手札１枚

「私のターン！ドロー！
・・・このターンで終わりにしましょうか」

「え！？」

「私は、手札からローン・ファイア・ブロッサムを攻撃表示で召喚！
そして、ローン・ファイア・ブロッサムの効果で自身を生贄にして、デッキから椿姫ティタニアルを攻撃表示で特殊召喚！」

《さ～て、久々に暴れるとしましょうか》

「さらに、罠カード、ブラスト・モードを発動して、椿姫ティタニアルを生贄にしてデッキから椿姫ティタニアル／ブラストを攻撃表示で特殊召喚して、装備魔法、憎悪の棘を装備させる！」

ティタニアル／ブラスト（攻３０００→３６００）

蓮は一気にティルをティタニアル／ブラストとして召喚し、憎悪の棘を装備させると、ティルの持っている２つの銃に絡まっている蔦が銃身を覆い、銃身の長さと銃口を拡大させた。

「バトル！椿姫ティタニアル／ブラストで魔導騎士ディフェンダーを攻撃！
ヘイト・カメリア・ブラスト！」

《ふふっ、今の私の弾丸は凶悪よ～！》

「けど、魔導騎士ディフェンダーは魔力カウンターを取り除くことで破壊を無効に出来るんだよ！」

蓮の攻撃宣言に、ティルは巨大になった銃でブラック・マジシャン・ガールの場のディフェンダーを撃つと、ブラック・マジシャン・ガールがディフェンダーの効果を言うと、蓮は笑みを浮かべてティルに装備している憎悪の棘の効果を説明した。

「憎悪の棘の効果、このカードを装備したモンスターが相手モンスターと戦闘したとき、相手モンスターは破壊されず、このカードを装備したモンスターの攻撃力が相手の守備力を超えていれば、その分のダメージを与える！」

「なら、罠カード魔法の筒を発動してアナタに攻撃をお返しするよ！」

「無駄よ！カウンター罠、ポリノシスを綿毛トークンを生贄にして発動！
魔法の筒の発動を無効にして破壊する！」

《あらら、ご愁傷様～
まぁ、これでお終いってことで、潔く倒されなさい！》

蓮はブラック・マジシャン・ガールの発動させたカードを、自分

の場のカウンター罠で無効にして、ティルの放った棘の弾丸が魔導騎士ディフェンダーの縦を貫き、ブラック・マジシャン・ガールに襲い掛かりブラック・マジシャン・ガールのライフを0にした。

「そんな!?きゃあああー!!」

BMG　LP1600→0

「あ～あ、また負けちゃったよ～！
でも、楽しかったよ！」

「・・・そう、それは良かったわね」

ブラック・マジシャン・ガールのライフが0になってデュエルが終了すると、観戦していた生徒達はブラック・マジシャン・ガールを慰めるように歓声を上げ、その様子に蓮が引いていると、ブラック・マジシャン・ガールが蓮に話しかけてきた。

「また、機会が有ったらデュエルしようね！
（あと、次に会う時は嫉妬しないでもらえるかな？
アナタのあの眼って、お師匠様が本気で怒った時より怖いから）」

「・・・ええ、判ったわ。
（それに関しては貴女次第よ、次に祐騎にちょっかいを出したら只じゃ置かないから・・・！）」

「あ、あはは～、それじゃあ、またね！
（うう～、だからその眼はやめてってば～！！）」

蓮とブラック・マジシャン・ガールは、表面上は仲良く会話をしながら、小声でお互いに周りに聞こえないように会話をして、蓮がハイライトの消えた眼でブラック・マジシャン・ガールを睨むと、ブラック・マジシャン・ガールは蓮から逃げるようにデュエルステージから走って行った。

《あらあら、ちょ～っと大人気ないんじゃないかしら？
というか、我が愛しのマスター様はこんなに独占欲が強かったのね～、これは今後面白いことが起きそうね！》

「・・・ティル、アンタね～！」

《ふふっ、図星だからって怒らない、怒らない、ほら祐騎君達が来たわよ。
そんな怖い顔を、祐騎君に見られても良いのかしら～？》

「くっ！
・・・覚えときなさいよ、いつか仕返ししてやるから」

ティルが蓮をからかっていると、蓮のデュエルを見ていた祐騎達が蓮の側にやって来た。

「蓮さん、ご苦労様です」

「ええ、応援してくれてありがとう、祐騎」

「いえ、僕も吹雪さんに言われてから応援したので、お礼を言われるほどじゃ・・・」

「いいえ、祐騎の応援のおかげで絶対に勝とうと思ったから、デ

ツキが応えてくれたの。
だから、本当にありがとう、祐騎」

「そういうことなら、どういたしまして」

蓮が祐騎に応援してくれたことに礼を言うと、そんな蓮に明日香が話しかけた。

「蓮、あのドラゴンが貴女のシンクロモンスターなのね？」

「ええ、といっても、シンクロモンスターはあの2体だけじゃないのよ？」

「・・・ということは、他のシンクロモンスターもあなた達は持っているということかしら？」

「そういうこと、それにこれから普通に市場販売が始まるから、シンクロモンスターを使うデュエリストも増えてくるわよ。
あと、もう少ししたら、デュエルアカデミアの教材にシンクロモンスターに関する項目が追加されるらしいわ。
それと、シンクロモンスターが登場したことを機に、ルールやデュエル内での行動に対する呼び方が変更されるらしいわよ」

蓮がデュエルのルールやデュエルアカデミアの教材が変化することを伝えると、勉強の出来る明日香や三沢などは余裕の表情で納得し、勉強の苦手な十代は頭を抱えて唸りだした。

「うがーっ！なんだよ、それ！？
また、勉強することが増えるってことじゃねぇか！？」

「・・・十代、勉強苦手だものね」

「明日香、貴女が教えてあげれば？」

「・・・そうね、これでもし十代が退学になったら嫌だし、教えてあげるわ」

「おお！！サンキュー明日香！
やっぱり、頼りになるぜ！」

蓮の提案に明日香が同意すると、十代は満面の笑顔で明日香の手を握ってお礼を言うと、明日香は少し顔を赤らめ、そんな二人を見た万丈目が二人の間に割って入り、それからはいつもの面子で大騒ぎになり、その後は特設ステージで行われるコスプレデュエルを眺めたりしながら時間が過ぎていった。

～祐騎の部屋～

「ふぅ～、疲れましたね～」

「・・・そうね、あの衣装も結構重かったし、疲れたわね」

祐騎と蓮は、レッド寮の周りで後夜祭が行われている中、祐騎の部屋で休憩していると、二人のデッキケースから光が溢れその光が収まると、そこにはデフォルメされヌイグルミの様な姿のスターダストとブラック・ローズの姿が有った。

「クアーッ」

「・・・キュウ～」

「「な、なんだ、これー!?」」

《なにが起きたんですか、一体!?》

《不思議な事があるものね～、それにしても可愛いい姿になちゃったわね～》

デフォルメされた2体のドラゴンは、それぞれ祐騎と蓮の側に行き、スターダストは祐騎の頭に乗り、ブラック・ローズは座っている蓮の膝の上に乗った。

「なんで僕の頭に乗るの、スターダスト?」

「クゥ?」

「・・・もう、そのままで良いよ」

「クゥアーッ!」

祐騎がスターダストに何故頭に乗るのかを聞くと、スターダスト

は首を傾けて頭に?マークを浮かべると、祐騎はスターダストに頭に乗ることを許可すると、スターダストは嬉しそうに翼を広げてアピールした。

《・・・この状況、どうしましょうか?》

《ま、なるようになるわよ～、それに可愛いから別に良いじゃないかしら?》

《そういう問題じゃない気がしますが・・・》

こうして、色々なことが起きながらも、一応は無事に祐騎と蓮のデュエルアカデミア帰還の初日の日が終わった。

第十六話　蓮ＶＳＢＭＧ、ブラック・ローズ・ドラゴン召喚！（後書き）

第十六話、どうだったでしょうか。

今回はブラック・ローズの初使用と、２体のドラゴンのデフォルメ精霊化の回になりました。

次回から、オリジナル回に入ります。

それと、悠さんの作品であるアルカナ～切り札の騎士～で私の作品とのコラボ作品が公開されていますので、是非読んでみてください。

それでは、これからも私の作品をよろしくお願いします。

第十七話　シンクロモンスター実演デュエル　祐騎&蓮ＶＳ十代&明日香（前書き）

今回は、十代と明日香相手のシンクロモンスター主体のデッキ同士でのタッグデュエルになります。

そして、十代と明日香にはそれぞれ戦士族のシンクロデッキと氷結界デッキを使わせます。

原作キャラが、自分のデッキ以外を使うのが嫌いな方は注意してください。

それでは、第十七話始まります。

第十七話　シンクロモンスター実演デュエル　祐騎&蓮ＶＳ十代&明日香

～アカデミア教室内～

「え～、授業の前に生徒諸君に～ハ、Ｉ&Ｉ社から通達があった必要事項を伝える～ノ。
この度、Ｉ&Ｉ社ヨ～リ、新機軸のカードであるシンクロモンスターが発表されたノ～ネ。
それに伴って、デュエル用語の変更が有るノ～ネ」

「まず、融合デッキの名称がエクストラデッキに変更になったノ～ネ、これはシンクロモンスターもエクストラデッキに置いておくカードの為ナノ～ネ。
次に、生贄召喚についてナノ～ネ、モンスターを生贄にすることを、これからはリリースと呼び、生贄召喚のことをアドバンス召喚と言う様にするノ～ネ」

「他にも、色々と変更点がありまス～ガ、これ以上のことはこれからの授業で教えていきまス～ノ、それでは、授業を始めル～ノ！」

祐騎と蓮がデュエルアカデミアに帰ってきた3日後、文化祭の片付けも済み、二人が久しぶりの授業へ行くと、授業の始まる前にクロノスから生徒達にシンクロモンスターやルールや名称の簡単な変更点が説明され、そのことに生徒の大半は困惑して騒ぎ出したが、クロノスの言葉でとりあえず静かになり、授業が開始された。

～授業後の教室～

クロノスの説明から始まった授業が終わり、昼休憩になり祐騎達が昼食を取ろうとしていると、そこにクロノスがやって来た。

「シニョール祐騎～にシニョーラ蓮、ちょっと待って欲しいノ～ネ」

「はい、何でしょうか、クロノス先生？」

「午後の実技の時間で、二人にシンクロモンスターの実演デュエルをして貰いたいノ～ネ。
こちらで選んだ生徒とシンクロモンスター主体のデッキ同士でデュエルして貰いたいのデス～ガ、よろしいでス～カ？」

「あ、はい、ペガサス会長から聞いてましたから、大丈夫ですよ。でも、デッキの方はどうするんですか？
その場で組んだ即席デッキだとまずいんじゃ・・・」

祐騎が対戦相手のデッキについてクロノスに質問すると、クロノスは指を振ってそれについて説明しだした。

「ノン、ノン、問題はありませン～ノ。
その生徒達に～ハ、前日にＭｒ．ペガサスか～ラ送られて来た、

シンクロモンスターとチューナーモンスターを渡して演習デュエル用のデッキに慣れさせていまス～ノ。
ですから、シニョ～ル達も本気で挑んで欲しいノ～ネ」

「わかりました、全力でお相手させてもらいます」

「私も了解しました」

「それデ～ハ、よろしく頼むノ～ネ」

祐騎と蓮がクロノスに頷いて了承すると、クロノスは笑顔で二人から離れて行った。

そして、昼休みが終わり午後の授業をするために、生徒達はデュエル場へと向かって行った。

～デュエル場～

「それデ～ハ、これよりシンクロモンスターの実演デュエルを行うノ～ネ！
対戦するのは、シンクロモンスターの製作の手伝いとしてＩ＆Ｉ社に行っていた、シニョール祐騎とシニョーラ蓮の二人とオシリスレッドのシニョール十代とオベリスクブルーのシニョーラ明日香な

ノーネ！」

クロノスが祐騎達の名前を宣言すると、デュエル場の中央に祐騎達が上がってきた。

「まさか、私達の相手があなた達だとはね」

「私達もクロノス先生から話を聞いた時は驚いたわよ」

「へへっ、早速文化祭のときの約束を守ってもらうぜ！」

「ああ、そういえばまだデュエルしてなかったよね」

祐騎達が話していると、クロノスがいきなり何かを思い出したかのように声を挙げた。

「アーッ！
1つ言い忘れていることがあったノーネ、今回の実演デュエルはタッグでやってもらいたいノーネ！」

「クロノス先生！いきなり、そんなことを言われても・・・」

「判りました、タッグデュエルでシンクロモンスターの使い方を見せればいいわけですね？」

「蓮！？」

クロノスがいきなりデュエルをタッグで行って欲しいという言葉に、明日香はクロノスに抗議を入れようとしたが、蓮がそれを止める形で承諾した。

「へへっ、楽しくなりそうだな！」

「うん、手加減はしないからね」

「それは、こっちも同じよ！」

「それじゃ、いくわよ二人とも！」

「「デュエル！」」

祐騎＆蓮　ＬＰ８０００

十代＆明日香　ＬＰ８０００

「僕の先攻！ドロー！

僕は霞の谷のファルコンを攻撃表示で召喚して、カードを2枚伏せてターンエンド！」

祐騎　手札３枚

「俺のターン！ドロー！

俺は、スピード・ウォリアー（攻／守９００／４００）を守備表示で召喚！

カードを1枚伏せてターンエンドだ！」

十代　手札４枚

「私のターン！ドロー！
私は速攻魔法、偽りの種を発動して手札からイービル・ソーンを特殊召喚！
さらに、イービル・ソーンをリリースして相手に３００ポイントのダメージを与え、デッキから２体のイービル・ソーンを特殊召喚！」

「「クゥッ！！」」

十代＆明日香　ＬＰ８０００→７７００

「そして、手札からチューナーモンスター、黒薔薇の魔女（ブラック・ローズ・ウィッチ）（攻／守１７００／１２００）を攻撃表示で召喚！」

「チューナー！？
まさか、１ターン目からシンクロ召喚をするつもりなの！？」

蓮がチューナーモンスターを召喚すると、蓮の場にシンクロ召喚のための条件が１ターンで揃ったことに驚き、そんな明日香を見て蓮は笑みを浮かべた。

「そういうこと、いくわよ！
レベル１のイービル・ソーン２体にレベル４の黒薔薇の魔女をチューニング！
聖なる森に潜みし華麗なる棘の狩人よ、戒めの鞭を持ちて今こそ姿を現せ！シンクロ召喚！
現れろ！スプレンディッド・ローズ（攻／守２２００／２０００）！」

「1ターン目は攻撃できないから、私はカードを1枚伏せてターンを終了するわ」

蓮　手札2枚

「流石ね、蓮。
私のターン！ドロー！
私は、氷結界の修験者（攻／守1500／1000）を攻撃表示で召喚！
さらに、カードを2枚伏せてターンエンド！」

明日香　手札3枚

「・・・紅龍さん、凄すぎッス」

「1ターン目でシンクロ召喚を成功させるとはね、まるで十代君や亮の融合みたいな速攻じゃないか」

「完全にシンクロ召喚を使いこなしてるんだなぁ」

祐騎達がそれぞれ第1ターンを終了すると、周りで観戦していた生徒達は蓮が1ターン目からシンクロ召喚を行ったことの驚き、感心の声を挙げた。

「僕のターン！ドロー！
僕は、手札からチューナーモンスター、霧の谷の祈祷士（攻／守１２００／１２００）を攻撃表示で召喚！」

「・・・まさか、祐騎もシンクロ召喚をするつもりなのか！？」

「もちろんだよ。
レベル４の霞の谷のファルコンにレベル３の霞の谷の祈祷士をチューニング！
霧の谷に潜みし鬼神よ、今こそ雷の力を得てその姿を現せ！シンクロ召喚！
轟け！霞の谷の雷神鬼（攻／守２６００／２４００）！」

祐騎がシンクロ召喚に成功したことで、祐騎と蓮の場にはそれぞれ一体づつシンクロモンスターが存在することになり、デュエルを見ていた生徒達はこれからの展開を見守るように、静かに観戦を続けた。

「僕はさらに装備魔法、メテオ・ストライクを霞の谷の雷神鬼に装備して、雷神鬼の効果でそのメテオス・トライクを手札に戻す！」

「装備したカードを自分から戻すだって！？」

「霞の谷の雷神鬼は１ターンに１度、自分の場のカードを手札に戻すことで、自身の攻撃力をエンドフェイズまで５００ポイントアップすることが出来るカード！
これにより、雷神鬼の攻撃力を５００ポイントアップさせる！」

霞の谷の雷神鬼　（攻２６００→３１００）

「そして、雷神鬼の効果で手札に戻ったメテオ・ストライクをもう一度雷神鬼に装備！
バトル！
霞の谷の雷神鬼でスピード・ウォリアーを攻撃！
鬼神雷豪波（きじんらいごうは）！」

「ぐっ、あああああっ！！」

「十代！？」

十代＆明日香　ＬＰ７７００→５０００

祐騎の場の雷神鬼の放った雷撃が十代の場のスピード・ウォーリアーに当たると、その雷撃はスピード・ウォリアーを貫いて十代に襲い掛かり、十代のライフを削った。

「僕は、このままターンを終了するよ」

霧の谷の雷神鬼　（攻３１００→２６００）

祐騎　手札２枚

「へへっ、やっぱりスゲェな、祐騎。
けど、俺も負けてねぇぞ！
俺のターン！ドロー！」

「俺は手札からチューナーモンスター、ジャンク・シンクロン（

攻／守１３００／５００）を召喚！」

十代がジャンク・シンクロンを召喚すると、シンクロモンスターとチューナーモンスターについての知識のある祐騎達以外の生徒は、自分のフィールドに他のモンスターが居ない状態でチューナーを召喚した十代を不思議な表情で見た。

「・・・アニキ、チューナーだけ召喚してどうするんだろう？」

「このデュエルはタッグ戦だ、明日香君の場のモンスターを使えばシンクロ召喚できるが、その場合明日香君の場にモンスターが居なくなって、次の紅龍君のターンでダイレクトアタックを受ける可能性が高くなってしまうぞ」

「いや、十代君の考えはそうじゃないみたいだよ。見たまえ、十代君のフィールドを祐騎君達が真剣に見ている、これはまだ何かあるよ」

吹雪がそう言って十代の方を見ると、翔達もデュエルの行方を見るためにデュエル場の方を向いた。

「いくぜ！
ジャンク・シンクロンの効果発動！
ジャンク・シンクロンの召喚に成功したとき、俺の墓地のレベル２以下のモンスターを効果を無効にして、守備表示で特殊召喚出来る！

蘇れ、スピード・ウォリアー！」

「そして、レベル２のスピード・ウォリアーにレベル３のジャンク・シンクロンをチューニング！
集いし星が新たな力を呼び起こす、光差す道となれ！シンクロ召喚！
出でよ！ジャンク・ウォリアー（攻／守２３００／１３００）！」

「さらにジャンク・ウォリアーの召喚にチェーンして、永続罠、リミット・リバースを発動させて墓地のスピード・ウォリアーを攻撃表示で蘇生させる！
そして、ジャンク・ウォリアー効果が発動！
ジャンク・ウォリアーの攻撃力をスピード・ウォリアーの攻撃力分上昇させる！
パワー・オブ・フェローズ！」

ジャンク・ウォリアー（攻２３００→３２００）

十代は、シンクロ召喚したジャンク・ウォリアーの効果が発動する前にシンクロ素材として墓地に送られたスピード・ウォリアーをリミット・リバースで蘇生し、ジャンク・ウォリアーの攻撃力を上昇させた。

「行くぜ、祐騎！
ジャンク・ウォリアーで霞の谷の雷神鬼を攻撃！
スクラップ・フィスト！」

「くっ！雷神鬼の効果でメテオ・ストライクを手札に戻して攻撃力を５００ポイントアップさせる！」

霞の谷の雷神鬼　（攻２６００→３１００）

「だけど、攻撃力はまだジャンク・ウォリアーの方が上だ！」

「グゥッ！」

祐騎＆蓮　ＬＰ８０００→７９００

十代の場のジャンク・ウォリアーの拳が祐騎の場の雷神鬼を貫くと、その衝撃波で祐騎のライフを削った。

「そして、スピード・ウォリアーで祐騎にダイレクトアタック！」

「グアッ！」

祐騎＆蓮　ＬＰ７９００→７０００

スピード・ウォリアーの回し蹴りが祐騎に当たると、さらに祐騎のライフが削られた。

「俺は、これでターンエンドだ！」

十代　手札４枚

「流石に手ごわいわね。

私のターン！ドロー！

（攻撃力３２００のジャンク・ウォリアーは脅威だけど、それ以上に明日香の場のモンスターが曲者なのよね。

氷結界モンスターを使っているということは、必ずあのシンクロ

モンスターを使ってくるはず、けどこのままジャンク・ウォリアーを残しておくわけにもいかないわよね・・・）」

「私は手札から魔法カード、アースクエイクを発動してフィールド上の表側表示のモンスターを全て守備表示に変更する！

そして、リミット・リバースによって蘇生したスピード・ウォリアーが守備表示になったことで、リミット・リバースの効果によりスピード・ウォリアーとリミット・リバースを破壊！」

蓮が発動させた魔法により、フィールドのモンスターが全て守備表示になり、リミット・リバースによって特殊召喚されたスピード・ウォリアーはリミット・リバースの効果によって破壊されてしまった。

「そして、手札からレベル1のチューナーモンスター、コピー・プラント（攻／守0／0）を召喚！」

「・・・チューナーモンスターを召喚した？

これで、蓮の場のモンスターのレベルの合計は7、ということは・・・」

「さぁ、いくわよ！

レベル6スプレンディッド・ローズにレベル1コピー・プラントをチューニング！

冷たい炎が世界の全てを包み込む、漆黒の花よ開け！シンクロ召喚！

咲き乱れよ！ブラック・ローズ・ドラゴン！」

「来たわね、蓮のエースシンクロモンスター、ブラック・ローズ・ドラゴン（けど、ブラック・ローズ・ドラゴンを召喚するなら、何

故モンスターを守備表示に？
効果で破壊するなら守備表示に変更する必要は無いはず、何を考えているの、蓮？）」

蓮がブラック・ローズ・ドラゴンを召喚すると、明日香はブラック・ローズ・ドラゴンの効果で破壊する前にフィールド上のモンスターを守備表示に変更する意図がわからずに困惑し、そんな明日香の考えを読んだかのように蓮が明日香に話しかけた。

「明日香、貴女今ブラック・ローズ・ドラゴンを召喚する前に、なんでモンスターを守備表示にしたのかって思ってるでしょ？」

「・・・だとしたら、どうしたっていうのよ」

「これが、答えよ。
私はブラック・ローズ・ドラゴンの効果を発動せずにバトルフェイズに入る！」

「えっ、効果を使わない！？」

蓮がブラック・ローズ・ドラゴンの破壊効果を発動させず、バトルフェイズに突入したことに会場の生徒達は驚き、蓮の行動に注目した。

「そして、ブラック・ローズ・ドラゴンの第2の効果を発動！
墓地の植物族モンスターをゲームから除外することで、相手フィールド上の守備表示モンスターを攻撃表示に変更する！
私は、墓地のイービル・ソーンを除外して、十代の場のジャンク・ウォリアーを攻撃表示に変更する！
ローズ・リストリクション！」

「守備モンスターを攻撃表示にするなんて、しかも攻撃力の高いジャンク・ウォリアーを攻撃表示にするなんて一体どういうつもりなの、蓮！」

「ふふっ、ブラック・ローズ・ドラゴンの効果で守備表示から攻撃表示になったモンスターの攻撃力は０になるのよ！」

「「なっ！？」」

ジャンク・ウォリアー　（攻３２００→０）

ブラック・ローズ・ドラゴンの蔦のよって攻撃表示に変更させられたジャンク・ウォリアーの攻撃力が０になると、十代と明日香は驚きの声を挙げて戦闘態勢に入っているブラック・ローズ・ドラゴンを見た。

「バトル！
ブラック・ローズ・ドラゴンでジャンク・ウォリアーを攻撃！
ブラック・ローズ・フレア！」

「クッ！速攻魔法、収縮を発動してブラック・ローズ・ドラゴンの攻撃力を半分にするわ！」

十代＆明日香　ＬＰ５０００→３８００

明日香はブラック・ローズ・ドラゴンの攻撃がジャンク・ウォリアーに当たる直前で、伏せていた魔法カードによってブラック・ローズ・ドラゴンの放った炎の大きさが半分になり、ライフへのダメ

ージを軽減させた。

「・・・私はこれでターンを終了するわ」

蓮　手札１枚

「私のターン！ドロー！
私は手札からレベル２のチューナーモンスター、氷結界の術者（ひょうけっかいじゅつしゃ）（攻／守１３００／０）を攻撃表示で召喚！」

「そして、レベル４の氷結界の修験者に氷結界の術者をチューニング！
氷の世界に閉じ込められし海竜よ、今こそ氷の力を得てその姿を現せ！シンクロ召喚！
凍結せよ！氷結界の竜ブリューナク（ひょうけっかいりゅう）（攻／守２３００／１４００）！」

明日香が自分の場のモンスターをチューニングしてシンクロモンスターを召喚すると、明日香の場に氷の体を持った海竜が現れ祐騎と蓮を威嚇した。

「・・・やっぱり来たわね、ブリューナク」

「いくわよ、蓮！
氷結界の竜ブリューナクの効果を発動！
手札を１枚墓地に捨てることで、フィールド上のカード１枚を手札に戻す！
私は手札の罠カード、スキル・サクセサーを墓地に送って、蓮の場のブラック・ローズ・ドラゴンを手札に戻す！」

「やらせない！罠カード発動、シンクロ・バリアー！
このカードは、自身の場のシンクロモンスター1体をリリースして発動する罠カード。
このカードの効果で、このターン僕達が受けるダメージを全て0にします！」

明日香の場のブリューナクの放った氷の息がブラック・ローズ・ドラゴンに襲い掛かる寸前で、祐騎の発動させた罠カードによりフィールドから居なくなり、ブリューナクの効果は不発に終わった。

「・・・流石ね、甲斐君。
まさか、効果を不発にするだけじゃなくて、ダメージも与えられなくするなんて思わなかったわよ。
私は、これでターンエンドよ」

明日香　手札2枚

「エンドフェイズに永続罠、ウィキッド・リボーンを発動！
このカードはライフを800ポイント支払うことで、墓地のシンクロモンスター1体を効果を無効にして攻撃表示で特殊召喚して、このカードを装備する！
蘇れ、ブラック・ローズ・ドラゴン！」

祐騎&蓮　LP7000→6200

「・・・すげぇ、居なくなったと思ったらそのターンに戻ってくるなんて。

く～っ、やっぱりお前達とのデュエルは最高だぜ！」

「・・・まったく、相変わらず暢気なんだから」

蓮がブラック・ローズ・ドラゴンを蘇生させると、十代は興奮した様子で祐騎と蓮を見ており、そんな十代の様子に明日香は呆れながらも笑みを浮かべて十代を見た。

「僕のターン！ドロー！

・・・蓮さん、いきますよ」

「ええ、一気に決めましょうか」

「僕は手札からレベル１のチューナーモンスター、ターボ・シンクロン（攻／守１００／５００）を召喚！」

「また、チューナーモンスターを召喚した！？」

祐騎の場に、車のエンジンの様な姿をしたチューナーが現れたことで十代や明日香は警戒を強くした。

「いくよ、レベル７ブラック・ローズ・ドラゴンにレベル１ターボ・シンクロンをチューニング！

集いし願いが新たに輝く星となる、光差す道となれ！シンクロ召喚！

飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン！」

ターボ・シンクロンが顔を隠すようにヘルメットのようなものを被ると、１つの輪を作りブラック・ローズ・ドラゴンがその輪に入ると、ブラック・ローズ・ドラゴンは７つの星になり、その星が線

で結ばれると、光が溢れその中からスターダスト・ドラゴンが現れた。

「そして、バトル！
スターダスト・ドラゴンで氷結界の竜ブリューナクを攻撃！
シューティング・ソニック！」

「罠発動！ドゥーブルパッセ！
このカードの効果で相手モンスターの攻撃をダイレクトアタックとして受け、攻撃対象になったモンスターで相手プレーヤーにダイレクトアタックを行う！
コキュートス・バースト！」

「なっ！？クゥッ！」

「キャアア！」

十代&明日香　ＬＰ３８００→１３００

祐騎&蓮　ＬＰ６２００→３９００

祐騎がスターダストでブリューナクを攻撃すると、明日香の発動させた罠によりその攻撃はダイレクトアタックになり、祐騎にもブリューナクからのダイレクトアタックが放たれ、お互いのライフを削った。

「・・・なんとかモンスターを残せたわね（これで、次の十代のターンでブリューナクの効果を使えばスターダストをエクストラデッキに戻せる。
そして、十代が私の墓地のスキル・サクセサーの効果と合わせて

攻撃力１６００以上のモンスターを召喚できれば、私達の勝利！）」

「流石ですね、けどまだ僕のバトルフェイズは終了してませんよ！」

「え！？

で、でも、もうあなた達のフィールドに攻撃出来るモンスターは居ないはず・・・」

十代と明日香が祐騎の言葉に困惑していると、祐騎は自分の場の最後の伏せカードを発動させた。

「いきます！

リバースカードオープン！罠カード、バスターモードを発動！」

「「バスターモード！？」」

祐騎の発動させたバスターモードに十代と明日香は驚き、翔達は祐騎や蓮が今まで使っていたブラスト・モードに似た名前のカードが出たことで混乱しだした。

「あれ？確か、祐騎君達あのカード前にも使ってなかったッスか？」

「いや違うよ、翔君が言っているのは文化祭の時に蓮君が使ったカード、ブラスト・モードのことだろう？

あのカードは名前が似ているけど、別のカードだよ（とはいえ、ここまで名前が似てるってことは効果のほうも似た様な効果なのか

も・・・）」

「あっ！そういえば、そうッス！」

吹雪の言葉にブラスト・モードとバスターモードが違うカードだということに気づいた翔は再びデュエルに意識を集中させた。

「このカードは自分フィールド上のシンクロモンスター1体をリリースして、デッキからリリースしたモンスターの名称が含まれる／バスターと名の付くモンスターを特殊召喚するカードです！
僕はスターダスト・ドラゴンをリリースして、デッキからスターダスト・ドラゴン／バスター（攻／守３０００／２５００）を特殊召喚します！」

「・・・そういえば、このカードが有ったのよね、シンクロモンスターには」

祐騎がバスターモードを発動させると、祐騎の場のスターダストの姿がより戦闘向きの姿に変り、その能力も上昇した。

「バトルフェイズ中の召喚のため、攻撃は可能！
スターダスト・ドラゴン／バスターで氷結界の竜ブリューナクを攻撃！
アサルト・ソニック・バーン！」

「「うわあああ（きゃあああ）！」」

十代＆明日香　ＬＰ１３００→０

スターダスト・ドラゴン／バスターの攻撃によってブリューナクの体が砕け、その破片が十代と明日香に襲い掛かり、ライフを０にした。

「くっそー！負けたー！」

「まぁ、まぁ、本当の自分のデッキじゃなかったんだから、しょうがないって」

「い～や！そんなことは関係無い！
自分のデッキじゃなくたって、悔しいもんは悔しいんだよ～！」

「そ、そうだよね～」

「だから、今度は本当のデッキで勝負しようぜ！」

「うん、そうだね～」

祐騎が負けたことを悔しがっている十代に話しかけると、十代は祐騎に今度はお互いに本当の自分のデッキで勝負しようと言い、祐騎はそれを承諾した。

そして、このデュエルを見ていた生徒達から拍手を受けながら、祐騎達はデュエル場から降り、その後クロノスが会場に居る生徒達に先ほどのデュエルを例に挙げて、シンクロモンスターについての授業を始め、いつも通りの時間が流れてこの日は終わりを告げた。

おまけ

～祐騎達が実演デュエルを行っている間の精霊達～

《はぁ～、マスター達大丈夫でしょうか・・・》

《もう、エールちゃんたら、さっきからそればっかりじゃないの～》

《しょうがないじゃないですか、マスターのところに来てから初めてなんですよ、デッキから外されるの》

エールとティルは祐騎達が実演デュエルを行っている間、祐騎の部屋で待機していた。

《そうは言ってもね～、シンクロ主体のデッキでのデュエルなんだから、私達みたいなシンクロ素材になりにくいレベル８の上級モ

ンスターは我慢しないとね～》

《・・・わかってますよ、それくらい》

《あらら、ご機嫌ナナメね～（ま、無理も無いわよね～、精霊としてマスターの側に居られないのは不安でしょうがないものだしね～。

それにしても暇ね～、久しぶりにエールちゃんで遊んでみようかしら？）》

《ひぅ！？な、なんですか、この悪寒は！？》

ティルがエールをからかおうかと思うと、エールに強烈な悪寒が走り、エールはそれがどうして起きたのかわからず、辺りを見渡した。

《・・・チッ、あいかわらず勘の良い娘ね～》

《今、チッって舌打ちしましたよね！？》

《なんのことかしら～、エールちゃんの気のせいでしょ～》

《いやいや！？気のせいとかじゃないですって、確かにしましたよね！？》

エールとティルは祐騎達が校舎から戻ってくるまで、図らずもティルの望み通りエールをからかって遊ぶ形になり、この様なやり取りを続けていた。

第十七話　シンクロモンスター実演デュエル　祐騎&蓮ＶＳ十代&明日香（後書

どうだったでしょうか、今回の話ではアニメオリジナルのカードであるドゥーブルパッセを使わせてもらいました。

私は明日香がこのカードを使うイメージが定着してるので、使わない方が違和感を覚えてしまうので出させてもらいました。

次回もオリジナルの話になります。

暫くは原作から離れた話が続きますが、これからもこの作品をよろしくお願いします。

第十八話　シンクロ召喚！輝け！煌翼の守護者ートゥインクル・エアトスー（前

今回は、新しいオリカの登場と、主人公達とのデュエルが無かったカミューラとのデュエルになります。

オリカについては、オリカ紹介のほうに追加しておきますので、気になる人は確認して見てください。

それでは、第十八話始まります。

第十八話　シンクロ召喚！輝け！煌翼の守護者ートゥインクル・エアトスー

～祐騎の部屋～

十代と明日香を相手に蓮と行った実演デュエルの翌日、祐騎は優奈に連絡を取っていた。

「・・・という訳なんだよ、姉さん」

「そう、精霊のエールさんが拗ねちゃって、手が付けられない状態なんだ・・・」

「うん、昨日シンクロモンスターの実演デュエルでデッキから抜いた事がよっぽど気に入らないみたいなんだよ。
・・・シンクロ主体だと使えない事が多いし、墓地に送りっぱなしでデュエルが終わることになる可能性があるから外したって言ったんだけど、納得してくれなくて」

「そっか～、うん、丁度良い機会だね」

「？」

祐騎が優奈にエールが不機嫌な理由を相談すると、優奈は嬉しそうに祐騎に話を続けた。

「えっとね、蓮ちゃんからシンクロモンスターについて初めて聞いた時から考えてたカードが、ついさっき出来上がったの。
それで、今度の休みの時に渡しに行こうかと思ってたんだけど、そういうことなら今からそっちに持って行くね」

「で、でも、仕事はどうするのさ?」

「・・・本当は私が直接行って渡したいんだけど、さすがに今の会社の状況じゃ無理だから、カミューラさんに持って行って貰うわ」

優奈が祐騎に電話越しにそう言うと、電話の向こう側からカミューラの抗議の声が聞こえて来たが、優奈はそれを完全に無視して話を続けた。

「それじゃあ、楽しみにしててね～」

「あ、ちょっと、姉さん!?」

祐騎が返事をする間もなく、優奈は電話を切ってしまった。

「・・・どうするつもりなの、姉さん」

～アカデミア港～

「まったく、なんだって私がこんな子供の使いみたいなことを・・・！」

優奈からカードを運ぶように頼まれたカミューラは、その日のうちにデュエルアカデミアへとやってきていた。

「こうなったら、あのブラコン女の弟で憂さ晴らししてやる！」

カミューラは、優奈によって無理やりカードを運ばされたことに腹を立て、祐騎を優奈の代わりにして憂さ晴らしをしようと心に決めて、祐騎達が居ると思われるレッド寮へと向かって行った。

～レッド寮～

カミューラがアカデミアへと到着した頃、レッド寮では行方不明になってから誰もその姿を見ていない大徳寺のことを心配して、食堂で話し合っていた。

「・・・どこに行っちまったんだろうな、大徳寺先生」

「・・・もしかしたら、本当にセブンスターズの人間に倒されちゃって、以前のお兄さんやクロノス先生みたいに身動きが取れなくなってるのかも」

「滅多なことを言うなよ、翔！
大徳寺先生は大丈夫だって、それにもしセブンスターズの刺客が大徳寺先生を倒したんだったら、俺達の所に絶対やってくるはずだ！
その時に、ソイツを倒して大徳寺先生を助けるんだ！」

十代は翔の言った事を即座に否定して、翔を励ました。

「そうッスよね！」

「・・・僕達は蚊帳の外の話ですね、蓮さん」

「しょうがないでしょ、私達の居ない時の話だったんだから（まぁ、その分祐騎を危ないことに巻き込んじゃったけどね・・・）」

祐騎が自分達が居ない間に起きていたセブンスターズとの戦いについて、自分達が蚊帳の外であることを悔しがり、蓮はそんな祐騎を慰めながら、自分達が精霊世界で戦った自縛神のことを思い出していた。

そして、大徳寺のことを心配する話から、これからのことについ

てやデュエルについて話していると、食堂の扉が勢いよく開けられ、カミューラが姿を現した。

「・・・アンタ達、こんなボロいとこで何してるのさ?」

「お、お前、カミューラか!?
お前こそ、なんでここに居るんだよ!?」

「・・・そこの坊やの姉さんの使いで来たのよ」

以前に比べて格段に明るくなり、普通のＯＬが着るようなスーツを着ているカミューラの登場に驚いた十代が、ここにやって来た理由を尋ねると、カミューラは心底嫌そうに祐騎を指差して応えた。

「すみません、カミューラさん姉さんのせいで・・・」

「まったくもってその通りよ。
ほら、アンタの姉からの贈り物よ、受け取りなさい」

カミューラはそう言って、手に持っていたカードの入っている鞄を祐騎に投げ渡した。

「あ、ありがとうございます」

「・・・さっさと、その中のカードをデッキに入れて来なさい。
私がデュエルしてあげるから」

「あ、はい、わかりました」

祐騎はカミューラの申し出に応えると、デッキを調整するために

自分の部屋に戻っていった。

「嫌々来た感じのことを言ってたくせに、デュエルするなんてどういうつもりなの？」

「・・・デュエルするまでが、あのブラコンの頼みなのよ。ついでに、あの坊やでいままでのアイツから受けたストレスの憂さを晴らしてやる！」

「・・・あなた格好だけじゃなくて、性格まで変ってない？」

「しょうがないじゃない、人間の会社で働いてるんだから、それなりに愛想がないとやってけないのよ。おかげで、毎日毎日ストレスが溜まる一方よ！それもこれも、全部あのブラコン女のせいよー！」

蓮がカミューラの変りように驚くと、カミューラはウンザリしたようにその理由を応えた後、優奈への恨み言を叫んだ。

～祐騎の部屋～

《・・・シンクロモンスター、か～》

《クゥ～・・・》

《ああっ！スターダストは何も悪くないんですよ！？
悪いのは、マスターが私のためを思ってデッキから外したことに納得しない私なんですから・・・》

エールは祐騎の部屋に閉じ篭り、昨日行われた実演デュエルで祐騎が自分のカードをデッキから外したことを、納得できないでいる自分に自己嫌悪しながら落ち込んでおり、そんなエールを慰めようとスターダストは一生懸命に行動していた。

ちなみに、今の二人の状況は、落ち込んだエールがスターダストをぬいぐるみの様に抱きかかえ、スターダストはそんなエールを心配そうに見上げていた。

そして、エールが落ち込んで自己嫌悪になるという悪循環を続けていると、部屋に祐騎が入ってきた。

「エール、居る？」

《マ、マスター！？》

《クゥッ！》

祐騎が部屋の中に入ってきたことで、エールは悪循環になってい

た思考を停止させ、スターダストは嬉しそうに翼を広げて祐騎を迎えた。

「エール、昨日はごめんね、やっぱりまだデッキから抜いたこと怒ってるよね？」

《い、いえ、こちらこそすみませんでした。
マスターは私のことを思ってデッキから外したことは私も分かっています。
けど、これから先マスターには私の力は必要無いのかもしれないと思ってしまって・・・》

「そんなこと無いよ。
エールは僕のデッキのエースで、フェイバリットなんだから、もっと自信持ってよ、ね？」

《は、はい！》

エールは自分が祐騎に必要とされないかもしれないと思っていたと祐騎に伝えると、祐騎はそのことを否定してエールを励ました。

「それと、姉さんからエールのための贈り物が届いたんだよ？」

《私のため、ですか？》

《クゥ～？》

祐騎はそう言って、頭の上に？マークを浮かべているエールとスターダストにカミューラから渡された鞄から数枚のカードを取り出した。

《こ、これって・・・！？》

《クゥーッ！》

祐騎が取り出したカードをエールとスターダストに見せると、エールはそのカードに驚き、スターダストは嬉しそうに翼を広げた。

そして、祐騎はそのカードをデッキに入れるためにの調整を始めた。

～レッド寮前～

祐騎がデッキの調整を済ませて部屋を出ると、レッド寮の前でカミューラがデュエルディスクを付けてすでに待機しており、カミューラから少し離れたところに観戦のため蓮達も食堂から出てきていた。

「お待たせして、すみませんでした」

「・・・別に良いわよ、それよりもさっさと始めましょう」

「はい、よろしくお願いします」

祐騎がカミューラの声に応えると、二人は同時にデュエルディスクを構えた。

「「デュエル！」」

カミューラ　ＬＰ４０００

祐騎　ＬＰ４０００

「私の先攻！ドロー！

私は手札から魔法カード、手札抹殺（てふだまっさつ）を発動！

このカードの効果でお互いのプレーヤーは全ての手札を捨て墓地に捨て、捨てた枚数分デッキからカードをドローする！」

「・・・最初から手札抹殺を使ってくるなんて（これじゃ、エールを呼びづらくなってしまう）」

カミューラが発動させた手札抹殺の効果で、カミューラは馬頭鬼、ゾンビキャリア、真紅眼の不死竜、ゴブリンゾンビ、テラ・フォーミングを墓地に捨てた。

そして、祐騎は手札から暴風小僧、風帝ライザー、霞の谷の戦士、シンクロ・ヒーロー、魔導士の力、ディメンション・ウォールが墓

地に送られた。

「ふふっ、さらに手札から魔法カード、おろかな埋葬と速攻魔法、手札断殺を発動するわ！
まずは、手札断殺の効果でお互いに手札を2枚墓地に捨てて、デッキから2枚ドローする！」

「また、手札破壊のカードを！？」

カミューラは手札断殺の効果で、手札のゾンビ・マスターと闇より出でし絶望を墓地に送り、祐騎は手札からガーディアン・エアトス／ブラストとブラスト・モードを墓地に送り、二人はデッキから2枚づつカードをドローした。

「あら、そのカードってあの女が作ったってカードでしょ？
それを捨てるなんて、他によほど大切なカードが手札にあるのかしらねぇ？」

「・・・まだ、貴女のターンですよ？」

「はいはい、判ってるわよ。
私はおろかな埋葬の効果で、デッキからヴァンパイア・ロードを墓地に送って、私はモンスターをセットして、カードを1枚伏せてターンエンドよ」

カミューラ　手札1枚

「僕のターン！ドロー！
僕は、墓地の暴風小僧をゲームから除外して、シルフィードを特

殊召喚します！
そして、手札からチューナーモンスター、デルタフライ（攻／守１５００／９００）を攻撃表示で召喚します！」

「チッ、シンクロ素材が揃ったか・・・」

「さらに、デルタフライの効果を発動します！
デルタフライは自分の場のこのカード以外のモンスターのレベルを１つ上げることが出来ます。
この効果で、レベル４のシルフィードをレベル５にして、レベル５のシルフィードにレベル３のデルタフライをチューニング！」

「集いし願いが新たに輝く星となる、光差す道となれ！シンクロ召喚！
飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン！」

祐騎がレベルの上がったシルフィードにデルタフライをチューニングして、スターダスト・ドラゴンをシンクロ召喚した。

「バトル！
スターダスト・ドラゴンでセットモンスターを攻撃！
シューティング・ソニック！」

「セットモンスターはライトロード・ハンター　ライコウ（攻／守２００／１００）よ。
このカードのリバース効果で、デッキの上から３枚を墓地に送り、フィールド上のカードを１枚破壊するわ！
スターダスト・ドラゴンを破壊！」

「やらせない！

スターダストをリリースして、ライコウの効果を無効にして破壊します！」

スターダストの攻撃により、セット状態から表側表示になったライコウがスターダストに向かって吼えると、カミューラのデッキからヴァンパイア・レディ、アンデット・ワールド、浅すぎた墓穴が墓地に送られ、ライコウが吼えたことで発生した衝撃波をスターダストが翼で包み込み、効果を無効にした。

「・・・僕はカードを1枚伏せてターンエンドです」

「エンドフェイズに罠カード発動！
針虫の巣窟、このカードの効果により、私はデッキの上から5枚を墓地に送る！」

カミューラの発動した罠カードにより、カミューラのデッキから、ピラミッド・タートル、ゾンビ・マスター、ライトロード・ハンター　ライコウ、激流葬、ライトニング・ボルテックスが墓地に送られ、そのまま祐騎のターンが終了した。

祐騎　手札3枚

「私のターン！ドロー！
それじゃあ、そろそろいきましょうか。
私は手札から、永続魔法、生還の宝札を発動！
さらに、魔法カード、死者蘇生を発動して墓地のゾンビ・マスター（攻／守１８００／０）を攻撃表示で蘇生召喚！
そして、生還の宝札で1枚ドロー！」

「さらに、今引いたの龍骨鬼（りゅうこつき）を墓地に捨て、２体目のゾンビ・マスターを蘇生召喚！
生還の宝札で１枚ドロー！」

「そして、今ドローしたピラミッド・タートルを墓地に捨てて、２体目のゾンビ・マスターの効果で墓地のゾンビ・キャリアを蘇生召喚！
さらに、生還の宝札で１枚ドロー！」

カミューラはアンデット族モンスターの効果で墓地のモンスターを連続で蘇生させ、生還の宝札でカードをドローし続けた。

「まだまだ、これからよ！
レベル４のゾンビ・マスターにレベル２のゾンビキャリアをチューニング！」

「・・・シンクロ召喚ですか」

「冥府を総べる覇王よ、今こそ汝に供物を捧げその身を蘇らせん！シンクロ召喚！
現れよ、蘇りし覇王ハデス（攻／守２４５０／０）！」

カミューラの場に、アンデット族となったハデスがその姿を現した。

「さらに、墓地の馬頭鬼をゲームから除外して墓地の闇より出でし絶望（攻／守２８００／３０００）を攻撃表示で蘇生召喚、生還の宝札で１枚ドロー！
そして、ゾンビ・マスターをリリースして真紅眼の不死竜をアドバンス召喚！」

「上級モンスターを一気に3体も召喚した・・・」

「さぁ、行くわよ！
闇より出でし絶望でスターダスト・ドラゴンを攻撃！
ダークネス・ディスペアー！」

「スターダストは倒させない！
速攻魔法、ハーフ・シャットを発動！
このカードの効果で、スターダストの攻撃力を半分にする代わりに戦闘での破壊を無効にする！」

スターダスト・ドラゴン　（攻２５００→１２５０）

「だけど、ダメージは受けて貰うわよ！」

「グゥウウッ！」

祐騎　ＬＰ４０００→２５５０

「さらに、蘇りし覇王ハデスでスターダストを攻撃！
冥界覇王撃（めいかいはおうげき）！」

「くぅううっ！」

祐騎　ＬＰ２５５０→１３５０

「そして、真紅眼の不死竜でスターダストを攻撃！
獄炎弾（ごくえんだん）！」

「うわぁあああっ！」

祐騎　ＬＰ１３５０→２００

「これで、アンタのライフは風前の灯、私はこれでターンを終了するわ」

カミューラ　手札０枚

「・・・祐騎君が押されてるっス」

「大丈夫だって、祐騎ならこれから逆転できるさ！」

「・・・いえ、かなり厳しい状況よ」

祐騎とカミューラのデュエルを観戦していた翔が祐騎が不利な状況になったことに弱音を吐くと、十代がそんな翔を励ますが、蓮がその言葉を否定して祐騎の方を見た。

「祐騎の場にはスターダストがいるけど、ライフは残り２００だから浅すぎた墓穴は使えないし、墓地にモンスターが居るからエアトスも呼べない、さらにブラスト・モードはすでに墓地にいっているから使えないし、相手のカミューラさんはアンデット使いだから、今の場のモンスターを破壊してもすぐに戻すことが可能、この状況はかなり厳しいわよ」

「大丈夫だって、祐騎が勝つさ！」

「・・・そう、ね」

蓮は十代の前向き発言によって、再び祐騎の勝利を祈ってデュエルを見守った。

「流石ですね、けど僕もやられっぱなしで終わりませんよ！僕のターン！ドロー！

僕は手札から貪欲な壺を発動して、僕の墓地の風帝ライザー、シルフィード、デルタフライ、霧の谷の戦士、エアトス／ブラストをデッキに戻してシャッフルして、デッキから2枚ドローします！」

祐騎は墓地のモンスターをデッキに戻してシャッフルした後、祈る様に眼を閉じてデッキからカードをドローした。

「・・・来た！

僕の墓地にモンスターが存在しないことにより、手札からガーディアン・エアトスを特殊召喚します！」

《マスターの思いに応えるためにも、このデュエル負けられません！》

「今更そのモンスターを召喚したところで、どうということは無いわよ」

「いいえ、ここからが本番ですよ！」

「・・・どういう意味よ（あのモンスターの強化カードは既に墓地にいっている、強化カードも無い状況でどうするつもり？）」

祐騎がエールを召喚し、さらに何かをしようとしていることにカミューラが警戒していると、祐騎は手札のカードを1枚手に取った。

「いきます！手札からレベル2のチューナーモンスター、栄光の天使（グローリー・エンジェル）（攻／守５００／８００）を攻撃表示で召喚！」

「チューナーモンスターですって！？」

「・・・私の知らないカード、もしかしてあのモンスターが優奈さんからの贈り物なの？（この状況、まさか新しいシンクロモンスターが出てくるの！？）」

祐騎の場に四枚の輝く翼を持ち、白いドレスの上に黄金に輝く鎧を付けた天使族のチューナーモンスターが現れたことに、カミューラは驚き、蓮は自分が見たことのないカードに驚いた。

「いくよ、エール。
レベル８のガーディアン・エアトスにレベル２の栄光の天使をチューニング！」

「なっ！？最上級天使をシンクロ素材にするですって！？」

「風の守護者よ、今こそ栄光をその手に数多の魂を救う光となれ！シンクロ召喚！
輝け！煌翼の守護者（こうよくのしゅごしゃ）ートゥインクル・エアトスー（攻／守３０００／２８００）！」

栄光の天使が２つの光の輪になり、その輪の中にエールが入るとエールは８つの星となり、その星が光の線で１つになり祐騎の場が

光に包まれ、その光が収まると祐騎の場には頭の鳥の飾りが甲冑の兜のようになり、アメリカインディアンの様な服は緑を基調としたドレスに銀色に輝く精霊の力が篭った装甲が付いた服装になり、背中に光り輝く6枚の翼を持ち、その手には神聖な輝きを放つ剣を持った姿のエールが現れた。

《これが、新しい私の姿・・・》

「そう、これが姉さんが作ってくれたエール専用の新しいカードだよ」

《はい！この力で、これからもマスター達をお守りいたします！》

エールが新しい自分の姿に驚いていると、祐騎がエールに話しかけ、エールはこれからも祐騎や蓮を守っていくことを誓い直した。

「それじゃ、カミューラさんいきますよ！
トゥインクル・エアトスのモンスター効果を発動！
トゥインクル・エアトスがシンクロ召喚に成功した時、お互いの墓地に存在するモンスターを全てゲームから除外します！」

「何ですって！？」

「そして、トゥインクル・エアトスはゲームから除外されているモンスターの数×１００ポイント攻撃力を上昇させる！
天界のオペラ！」

《さまよえる死者の魂よ、今こそ汝らを魂の牢獄より解き放たん！》

エールが手に持った剣を掲げると、祐騎とカミューラの墓地のモンスター達は天高く上って行き、エールの剣は天から降り注いだ光でその輝きを増した。

トゥインクル・エアトス　（攻３０００→４６００）

「僕達が除外していたモンスターとトゥインクル・エアトスの効果で除外したモンスターの合計は１６枚、よって攻撃力は１６００ポイントアップして、４６００となる！」

「クッ！除外効果に攻撃力上昇の効果を持ったモンスターですって！？」

「そうそう、言い忘れていましたけど、トゥインクル・エアトスがフィールド上に存在する限り、全てのモンスターは墓地には行かずゲームから除外されます」

「なによ、その効果！？」

祐騎がトゥインクル・エアトスの効果を説明すると、カミューラは自分のデッキとの相性最悪な効果に驚いて大声を出した。

「さらに、手札から装備魔法、精霊神器ーエクセリオンーと団結の力をトゥインクル・エアトスに装備します！

まず、エクセリオンは第１効果を選択して装備することで、トゥインクル・エアトスの攻撃力を半分にしてダイレクトアタックを可能にします！

そして、団結の力でさらに攻撃力を１６００ポイントアップします！」

トゥインクル・エアトス　（攻４６００→２３００→３９００）

「バトル！
スターダストで、真紅眼の不死竜を攻撃！
シューティング・ソニック！」

「くぅっ！」

カミューラ　ＬＰ４０００→３９００

「そして、トゥインクル・エアトスの効果で破壊されたモンスターは除外され、除外されているモンスターが増えたことで、さらにトゥインクル・エアトスの攻撃力がアップします！」

トゥインクル・エアトス　（攻３９００→４０００）

「ちょっと、本当に洒落にならないわよ、そのカードの効果！？」

「トゥインクル・エアトスでカミューラさんにダイレクトアタック！
セイクリッド・ゴスペル！」

《いきますよ、カミューラさん！
ハァアアアッ！》

エールは輝きの増した剣をその場で振るうと、手に持った剣から閃光がカミューラ目掛けて放たれ、カミューラのライフを０にした。

「キャアアアッ！」

カミューラ　ＬＰ３９００→０

「・・・まったく、冗談じゃないわよ。
何よあのカード、アンデットの天敵じゃないのよ」

「・・・すみません、カミューラさん。
今度姉さんにカミューラさんにお礼をするように言っておきますので、姉さんのことを怒らないでくれませんか？」

「怒る気も無いわよ、優奈に何言っても無駄なのはもう理解してるから・・・」

「本当にすみません」

祐騎がカミューラに優奈の行動に対して謝ると、カミューラは諦めたようにそう言うと、祐騎はさらに頭を下げた。

「これで、私がここに来た用事は済んだことだし、そろそろ帰るわね。
それと、あの鞄の中のカードは好きに使って良いそうよ、それじゃあね坊や達」

カミューラはそう言うと、Ｉ＆Ｉ社に戻るために港へと向かって行った。

「やったな、祐騎！」

「うん、これも姉さんのカードのおかげだよ」

「それにしても、凄い効果のモンスターだったわね、ほとんどアンデットのメタカードみたいな効果じゃない」

「そうなんですよね～、まぁ召喚条件がガーディアン・エアトス＋天使族チューナーですから、難しいといえば難しいんですけどね？」

「・・・祐騎君なら最初のターンから召喚して来そうで怖いッスよ」

祐騎達は、カミューラとのデュエルが終わってから、優奈の創ったカードについて話し合いながら、この日は終わりを迎えた。

そして、祐騎は蓮が自分の部屋の在るブルー寮に戻ろうとしたとき、優奈の創ったカードの入っている鞄を蓮に渡して、この日は分かれた。

第十八話　シンクロ召喚！輝け！煌翼の守護者ートゥインクル・エアトスー（後

第十八話、どうだったでしょうか？

今回出したのは、エアトスの強化シンクロモンスターとチューナーです。

今回は効果を使用してませんが、チューナーの方も効果がありますので、確認して見てください。

次回からは、再び精霊世界に行きます。

あと、オリカについての質問等が在りましたら遠慮なく感想の方に書き込んでください。

それでは、これからもこの作品をよろしくお願いします。

第十九話　地縛神再び　君臨せよ！椿女帝ティタニアル（前書き）

今回から、精霊世界の話になります。

あと、今回もオリカを出しますので、気になった方はオリカ説明の方を確認してください。

それでは、第十九話始まります。

第十九話　地縛神再び　君臨せよ！椿女帝ティタニアル

～祐騎の部屋～

カミューラが祐騎の元に優奈の創った新しいカード達を持ってきてから数日後、十代達は大徳寺を捜索し続けていた。

そして、十代達が大徳寺の捜索を続けている一方、祐騎と蓮は蓮の持つクイーン・オブ・ローズのカードを介してローズからの連絡が入ったため、祐騎の部屋でその話を聞くことにした。

「・・・久しぶりね、ローズ」

《ええ、残念なことにあなた達の力を借りないといけない状況になってしまったから、連絡させてもらったわ》

《・・・結構切迫した状況みたいね》

《・・・そうじゃなきゃ、あなた達に助けは求めないわ。自分達の世界の事情に、他の世界の力を借りるなんて、本当なら絶対に嫌なのはわかってるでしょ？》

《そうね、本来なら蓮や祐騎君には関係の無い話だもの。だけど、私は蓮から離れるわけにはいかないしね・・・》

ティルがそう言うと、ローズは苦笑しながらティルの方を見ながら話を続けた。

《まったく、ティルのマスター好きには困ったものね。

おかげで、ブラック・ガーデンでの私の仕事が増える一方よ》

《ふふっ、それはごめんなさいね～》

「・・・雑談はそれくらいにして、さっさと用件を言いなさいよ」

ティルとローズが二人で盛り上がっていると、蓮が割って入り、ローズに用件を確認した。

《そうね、それじゃあ、あなた達にお願いしたいことは2つあるの。

その2つは、あなた達が持っているカードになった石版に関することなの》

「石版について、ということは、また地縛神が絡んでくるのね・・・」

《ええ、報告を受けた限りだと、悪魔族の集落と黒い羽の鳥獣族の集落にシャチとハチドリの形をした自縛神らしきモンスターの姿が確認されているの。

だから、二人には二手に分かれて、この二つの集落に現れたモンスターの相手をしてもらいたいの》

「私は良いわよ、もともと地縛神が活動してるのは私のせいなのかもしれないんだし。

けど、また祐騎に危険な真似をさせるのは・・・」

蓮がそう言って祐騎の方を見ると、祐騎は蓮を安心させようと笑顔で蓮の顔を見ながら、蓮の言葉に応えた。

「僕なら大丈夫ですよ、前とは違ってスターダストも居ますから。
それに、蓮さんが危険なところに行くのに、黙って見ているだけなのは嫌ですから」

「・・・ありがとう、祐騎」

《さてと、本人の承諾を得たことだし、早速あなた達を石版の在る集落に飛ばすから、ティルお願いね》

《は～い、わかったわよ》

ローズとティルが祐騎達を精霊世界に送ろうとすると、蓮が思い出した様にティルに問いかけた。

「ねぇ、前から気になってたんだけど、どうやって私達を精霊世界に飛ばしてるのよ？」

《ああ、それはね、ティルの力よ》

「ティルの？」

《ええ、ティルは昔から人間の世界と私達の世界の両方の世界を行き来する力が有ったのよ、もちろん送れる人数に制限は有るけど。
だから、その能力のおかげで、時空の歪みとかの事故でこっちの世界に来た人間を元の世界に送り返したり、人間の世界に行ったまま帰れなくなった精霊を連れ戻したりしてたのよ》

「そうだったの・・・
それじゃあ、まさか私と初めて合った時もその力で？」

蓮がローズの話を聞いてティルの方を見ると、ティルは首を縦に振って蓮の言葉を肯定した。

《ええ、あの時はこっちの世界から精霊世界に戻れなくなってた精霊を戻した後、暇つぶしで店のパックに入ってた私のカードに憑いてみたら、そのパックを買った奴に捨てられて、そのすぐ後に貴女に拾われたってわけなの》

「・・・そうだったの」

《はいはい、この話はお終い！
それじゃ、二人とも飛ばすわよ～》

ティルは自分の能力についての話は終わらせて、祐騎と蓮を精霊世界の石版が在る集落へと飛ばした。

《さ～てと、それじゃ私達も行きましょうか～》

《・・・一度に飛ばせるのは二人までなんですか？》

《ううん、最大で４人まで転送ＯＫなんだけど、今回は場所が決まってるからね～》

《最大の場合は転送先はランダムなんですか！？》

《そういうこと～、それじゃ、こっちの用事が済んだら迎えに行くからね～》

ティルはそう言うと、エールを先に祐騎を飛ばした場所に転送して、自分も蓮の居るところへと飛んでいった。

ちなみに、スターダストとブラック・ローズはカードの中に戻って祐騎達と一緒に転移し、ローズは自分のカードから離れて精霊世界のブラック・ガーデンで、祐騎達が怪我をした場合の準備を始めていた。

～精霊世界・悪魔族の集落～

「ここは、見るからに悪魔族のモンスターが居ますって感じのところね・・・」

《それはそうでしょ、ここは悪魔族モンスターの集落なんだから》

ティルによって悪魔族の集落に飛ばされた蓮は、後からやって来たティルと共に、石版の在る場所に向かって歩いていた。

「・・・それにしても、不気味なところね」

《そんなこと言わないの、悪魔族モンスター達に聞かれたら怒られるわよ～》

「・・・それもそうね」

蓮はティルの言葉に、どこか上の空で答え、そんな蓮を見てティルは蓮を心配そうに見た。

《やっぱり、祐騎君のことが心配なの？》

「うん、地縛神のせいで祐騎が傷つくことになったのは、やっぱり私のせいだし・・・」

《蓮、いい加減にしないと怒るわよ》

「て、ティル？」

蓮が以前地縛神との戦いで、祐騎が怪我をしたのが自分のせいだと言うと、ティルは真剣な顔で蓮を見つめた。

《祐騎君が傷ついたのは、確かに地縛神との戦いのせい、だけどそれが貴女のせいだと考えるのは、大間違いよ》

「で、でも、この世界で地縛神が活動しだした原因は私にあるかもしれないんだし・・・」

《それを言うなら、この世界にあなた達を連れてきた私やエールちゃんにだって責任があるわ。
だから、もう自分を責めるのは止めなさい》

「・・・ティル」

《わかったのなら、この話はお終い。
そろそろ目的の場所に着くわよ》

ティルが話を終わらせて前方を指差すと、薄暗い洞窟の入り口があった。

そして、二人が洞窟の前まで来ると、洞窟の中から悪魔族モンスターの冥府の使者ゴーズがボロボロの姿で現れ、二人の目の前で倒れた。

《ちょっと、大丈夫!?》

《オレのことよりも、早く石版のところへ・・・》

《判った、私達は石版のところへ行くから、アナタも早く誰かに手当てしてもらいなさいよ!》

ティルはゴーズにそう言うと、蓮の手を引っ張って全速力で石版の在る洞窟の中へと進んでいった。

そして、負傷したゴーズは他の悪魔族モンスター達によって、すぐに治療するために運ばれていった。

～洞窟内～

ティルが蓮を連れて洞窟の中を走っていると、洞窟の奥の開けた場所に出た。

そして、その場所は洞窟の天井が無く、巨大なドームの様な形をしており、その中央に力強い姿のドラゴンが描かれた石盤の前で槍を構えているアトランティスの戦士が居た。

「やっぱり、あの石版のドラゴンはレッド・デーモンズ・ドラゴンで間違いないわね・・・」

《そこのモンスター、その石版に何をしているの！》

《チッ！まだ、居たのか》

蓮が石版に描かれているレッド・デーモンズを見て、自分の予想と同じだったことに呆れていると、ティルが石版を破壊しようとしていたアトランティスの戦士を止めて、近づいた。

《アナタにその石版を破壊させるわけにはいかないのよ》

《へっ、止められるモンなら止めてみな！》

「・・・絶対に止めてやるわ！」

「《デュエル！》」

蓮　ＬＰ４０００

アトランティス　ＬＰ４０００

蓮とティルが石版を破壊しようとしていたアトランティスの戦士を止めると、アトランティスの戦士はデュエルディスクを構え、それを見た蓮もデュエルディスクを構えてデュエルを始めた。

「私の先攻！ドロー！
私はローンファイア・ブロッサムを攻撃表示で召喚！
さらに、ローンファイア・ブロッサムをリリースして効果により、デッキから椿姫ティタニアルを攻撃表示で特殊召喚！」

《さてと、最初から飛ばしていくわよ！》

「そして、手札から魔法カード、死者転生を発動！
手札のダンディライオンを墓地に送り、墓地のローンファイア・ブロッサムを手札に戻す！
そして、ダンディライオンが墓地に送られたことにより、私の場に綿毛トークン２体を守備表示で特殊召喚される！」

「カードを２枚伏せて、ターンエンド」

蓮　手札２枚

蓮は最初のターンからティルのカードを召喚し、一気に自分の場を整えたが、相手のアトランティスはそんな蓮を余裕の表情で見ながらデッキからカードをドローした。

《オレのターン！ドロー！

オレは手札から、アトランティスの戦士（攻／守１９００／１２００）を墓地に送り効果を発動！

デッキから、フィールド魔法、伝説の都アトランティスを手札に加えて、そのまま発動する！

このカードの効果で、水属性モンスターの攻撃力と守備力を２００ポイントアップし、レベルを１つ下げる！》

《そして、墓地のアトランティスの戦士を除外して、水の精霊アクエリア（攻／守１６００→１８００／１２００→１４００）を特殊召喚！

さらに、アクエリアをリリースして、超古深海王シーラカンス（攻／守２８００→３０００／２２００→２４００）を攻撃表示で召喚！》

アトランティスのフィールドが水の中に沈んだ都市になり、その水の中に巨大な魚型モンスターが現れた。

《さらに、手札のテラフォーミングを捨ててシーラカンスの効果を発動！

デッキから、可能な限り魚族モンスターをオレの場に特殊召喚する！》

《オレは、デッキからオイスターマイスター（攻／守１６００→１８００／２００→４００）を２体と光燐のトビウオ（攻／守１７

００↓１９００／１０００↓１２００）とヒゲアンコウ（攻／守１５００↓１７００／１６００↓１８００）を守備表示で特殊召喚する！》

「だけど、その効果で召喚したモンスターは効果を無効にされて、攻撃宣言は出来ないわよ！」

《そんなことは承知の上に決まってるだろ！
バトル！
超古深海王シーラカンスで椿姫ティタニアルを攻撃！
オーシャン・プレッシャー！》

アトランティスの攻撃宣言を受けて、シーラカンスがティルに向かって水の砲弾を放つと、蓮は伏せていたカードを発動させた。

「リバースカードオープン！
罠カード、棘の壁！
このカードの効果で、相手フィールド上の攻撃表示モンスターを全て破壊する！」

《チッ！オレはカードを3枚伏せてターンエンドだ！》

アトランティス　手札０枚

蓮の発動させた罠カードの効果で、シーラカンスが破壊され、アトランティスの戦士は不愉快な顔をしながらターンを終了した。

「私のターン！ドロー！
私は、ローンファイア・ブロッサムを召喚！」

《ソイツを待ってたぜ！罠カード発動、激流葬（げきりゅうそう）！》

「な！？（しまった、アイツの場にはあのモンスター達が・・・）」

アトランティスの戦士は、蓮がモンスターを召喚すると、罠カードを発動して、フィールド上のモンスターを全て破壊すると、アトランティスの戦士の場に2体のトークンが現れた。

《オイスターマイスターの効果で、オレの場にオイスタートークンを特殊召喚するぜ！》

「くっ、私は手札を1枚伏せてターンエンドよ」

蓮　手札1枚

《オレのターン！ドロー！
へっ、運がねぇなぁ人間よぉ！
オレは、オイスタートークン2体をリリースして、出でよ！
地縛神　Ｃｈａｃｕ（チャク）　Ｃｈａｌｌｈｕａ（チャルア）（攻／守２９００／２４００）！》

「地縛神！？（そんな、この状況で引き当てたの！？）」

アトランティスの戦士のフィールドに、巨大な黒いシャチの姿をしたモンスターが現れた。

「くっ、リバースカードオープン！

百花繚乱－桜の舞－！
このカードの効果により、手札のイービル・ソーンを墓地に送ることで、このターン相手は攻撃宣言することが出来ない！」

《ハッ！無駄なんだよ！
地縛神Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａの効果発動！
このカードは1ターンに1度攻撃を行わないことで、相手にこのカードの守備力の半分のダメージを与える！
ダーク・ダイブ・アタック！》

「うあああああっ！」

蓮　ＬＰ４０００→２８００

蓮が発動させた罠カードによって、攻撃はされなかったものの、効果により半分近いダメージを受け、体中に切り傷が出来、そこから血が流れ出した。

《蓮、大丈夫！？》

「え、ええ、これくらいなんともないわよ・・・」

《その余裕がどこまで続くか見ものだぜ、ターンエンド！》

「エンドフェイズに、桜の舞の効果で墓地に捨てたイービル・ソーンを私の場に特殊召喚するわ」

アトランティス　手札０枚

蓮は、桜の舞の効果で自分の場にコストとして墓地に捨てたイービル・ソーンを召喚して自分のターンを迎えた。

「私のターン、ドロー
私はイービル・ソーンの効果を発動！
イービル・ソーンをリリースして相手に３００ポイントのダメージを与え、デッキから2体のイービル・ソーンを攻撃表示で特殊召喚する！」

アトランティス　ＬＰ４０００→３７００

《ちっ！この程度のダメージなんざどうってこと無いぜ！》

「そして、魔法カード、フレグランス・ストームをイービル・ソーンを破壊して発動！
このカードの効果で、デッキからカードをドローする」

「私がドローしたのは、植物族モンスターの凛天使クイーン・オブ・ローズ、よって効果でもう一枚ドローする！」

蓮はドローしたカードをアトランティスに見せてから、再びデッキからカードをドローした。

「・・・私はさらに、強欲な壺を発動してデッキからカードを2枚ドローする！
そして、魔法カード、手札抹殺を発動！
このカードの効果で手札を全て墓地に捨てて、捨てた枚数分デッキからカードをドローする！」

《チッ！いい加減にしろよ！》

蓮は手札のクイーン・オブ・ローズと椿の舞を墓地に捨て、デッキからカードを2枚新たにドローし、そんな蓮の行動に、アトランティスはイラつきながら蓮のターンが終わるのを待ち続けた。

「私は手札から永続魔法、増草剤を発動！
このカードの効果で、墓地の椿姫ティタニアルを攻撃表示で特殊召喚する！
さらに、罠カード、百花繚乱－黒薔薇の舞（くろばらのまい）－を発動！」

「百花繚乱－黒薔薇の舞－の効果、このカードは自分フィールド上にレベル8以上の植物族モンスターが存在するときのみ発動できる罠カード！
このカードが発動したとき、フィールド上の全てのカードを破壊する！」

蓮が発動させた罠カードにより、フィールド上に黒薔薇の花弁が吹き荒れフィールド上のカードを全て破壊しようとすると、アトランティスは自分の場の伏せカードを発動させた。

《モンスターなんざ怖くねぇが、そのカードは使わせねぇ！
カウンター罠、魔宮の賄賂を発動！
その罠カードの効果は無効になるぜ！》

「クッ！お願い、この状況を変えるカードを！
ドロー！」

蓮がアトランティスが発動させたカードの効果で、デッキからカードをドローすると、ドローしたカードが一瞬光を放った。

「来た！私は手札から速攻魔法、桃源郷（とうげんきょう）一百花繚乱（ひゃっかりょうらん）一を発動！
このカードは、自分の墓地に、百花繚乱一椿の舞一、一桜の舞一、一黒薔薇の舞一が存在するとき発動できるカード！
このカードが発動した時、相手の場の表側表示のカードの効果を全て無効にする！」

《なんだと！？》

「そして、私の墓地のレベル４以下の植物族モンスター１体をゲームから除外することで、デッキから除外したモンスター以下のレベルの植物族モンスター１体を攻撃表示で特殊召喚する！
ただし、この効果で召喚されたモンスターは攻撃することは出来ず、アドバンス召喚のためのリリースにすることは出来ない、そして表示形式の変更もすることが出来ない」

蓮が引き当てたカードを発動させると、アトランティスの場のＣｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａは力無くうな垂れ、フィールド魔法はその力を失ったように輝きを無くした。

そして、蓮はこのカードの効果で墓地からローンファイア・ブロッサムを除外して、デッキからレベル２のチューナーモンスター桜花の王女（チェリーブロッサム・プリンセス）（攻／守０／５００）を特殊召喚！」

「私は、墓地のレベル３のローンファイア・ブロッサムを除外して、デッキからレベル２のチューナーモンスター桜花の王女（チェリーブロッサム・プリンセス）（攻／守０／５００）を特殊召喚！」

「いくわよ、ティル！
レベル８の椿姫ティタニアルにレベル２の桜花の王女をチューニ

ング！
草木を総べし姫よ、今こそその真の姿を現し、新たな花を咲かせよ！シンクロ召喚！
君臨せよ、椿女帝ティタニアル（カメリア・エンプレス）（攻／守３２００／３０００）！」

蓮がティルのカードと桜花の王女をチューニングすると、椿の花を模った帽子と、今までよりも肌の露出が多くなっているドレスに、赤いハイヒールを身に付け、手には茨の巻きついた装飾剣を持ち、髪がロングストレートになった姿のティルが現れた。

《あら、この服良いわね。
普段からこっちで生活しようかしら？》

「余裕が出たからって、ふざけないで！」

《はいはい、さっさと終わらせましょうか》

シンクロ召喚された自分の姿を見て、その姿を気に入ったティルがふざけるように言うと、蓮がそんなティルを怒ることでデュエルに戻った。

「待たせたわね、デュエルを再開させるわよ！
シンクロ素材となった桜花の王女の効果を発動！
桜花の王女は植物族のシンクロモンスターのシンクロ素材になったとき、このカードを除外することで、墓地に存在する植物族モンスター１体を効果を無効にして守備表示で特殊召喚することが出来る！」

《チッ！（だが、オレの場の伏せカードは和睦の使者だ、このカードがあればこのターンは凌げる。

そうすれば、アイツの魔法カードの効果はなくなって、地縛神のダイレクトアタックでオレの勝ちだ！）≫

「私は、桜花の王女の効果で墓地から凛天使クイーン・オブ・ローズを守備表示で特殊召喚！
さらに、椿女帝ティタニアルの効果を今蘇生召喚したクイーン・オブ・ローズをリリースして発動！」

「このカードは、１ターンに１度自分の場の植物族モンスター１体をリリースすることで、エンドフェイズまでそのモンスターの攻撃力の半分をこのカードの攻撃力に加え、さらに通常攻撃に加えて追加攻撃を行うことが出来る！
ただし、この効果を使ったターンこのカード以外のモンスターは攻撃することが出来ない！」

椿女帝ティタニアル　（攻３３００→４５００）

≪クッ！罠カード、和睦の使者を発動するぜ！
このカードの効果で、このターンオレの場のモンスターは戦闘では破壊されず、戦闘ダメージも０になる！≫

蓮が椿女帝の効果を発動させると、アトランティスは伏せていた最後のカードを発動させ余裕の表情になると、蓮はそんなアトランティスを見て笑みを浮かべた。

「残念ね、椿女帝ティタニアルの効果を発動！
１ターンに１度、墓地の植物族モンスター１体をゲームから除外することで、相手の発動した魔法、罠、モンスター効果の発動を無効にして破壊する！
サクリファイス・サンクチュアリ！」

《はいは～い、そんな罠なんて使っても無駄よ～》

《なんだと！？》

蓮は、椿女帝の効果で、アトランティスの発動させた罠を無効にして破壊した。

「・・・それじゃ、これでお終いよ。

バトル！

椿女帝ティタニアルで地縛神Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａを攻撃！

カメリア・ストライク！」

《そ～れ、シャチの三枚おろしの出来上がり～っと》

ティルはＣｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａに近づき、手に持った剣で踊りながら攻撃を加え、Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａを破壊した。

《グゥウウウ！》

アトランティス　ＬＰ３７００→２１００

「そして、追加攻撃！

追撃のセカンド・ストライク！」

《これで、お終いよ！》

《ガアアアアッ！》

アトランティス　ＬＰ２１００→０

ティルの放った攻撃によって、アトランティスは切り裂かれ、光となってその場から消えていった。

「・・・勝った」

《ええ、これでここに居る理由は無くなったわけだし、早くブラック・ガーデンに行ってその怪我を治しましょう？》

「ええ、そうね・・・」

蓮とティルが洞窟から出ようとすると、以前と同じ様にいきなり石版が光だし、そのままその石版は消えてしまった。

そして、以前のスターダストやブラック・ローズの時とは違い、石版のあった場所にはカードは存在していなかった。

「どういうこと、なんで今回はカードにならなかったの・・・？」

《・・・いえ、多分カードにはなってるわよ》

「どういう意味よ、それ」

《さっき、強力な時空の歪みを感じたの、おそらくさっきの石版がカードになった瞬間に、どこかに転移したんだと思うわ》

「そうなの・・・」

《さぁさ、今は早く怪我の治療をしないと！》

「う、うん」

そうして、ティルに押し切られる形で、蓮は洞窟から抜け出し、悪魔族のモンスターからブラック・ガーデンまで行くための移動手段を貸してもらい、ブラック・ガーデンへと向かって行った。

第十九話　地縛神再び　君臨せよ！椿女帝ティタニアル（後書き）

どうだったでしょうか、今回出した世界間の移動についての説明については、深く考えずに、一種の超能力程度に思っておいてください。

そして、次回もオリジナル回になります。

それでは、これからもよろしくお願いします。

第二十話　Ａｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕＶＳセイヴァー・スター・ドラゴン（前書き

今回の話は、原作の時期でいうと、影丸とのデュエルの直前になります。

そして、後2，3話で第1期の話は終了になります。

それでは、第二十話始まります。

第二十話　Ａｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕＶＳセイヴァー・スター・ドラゴン

～ＢＦの巣～

ティルによって石版の在る場所に飛ばされた祐騎とエールは黒い羽を持った鳥獣族のモンスターが生活をしているに場所に飛ばされた。

「ここが、ローズさんが言っていた場所か・・・」

《そうみたいですね。
ローズさんが言っていた通りに、黒い羽のモンスター達が居ますから間違いないですね》

「うん、蓮さんが言っていたここのモンスター達の名前は、たしかＢＦ（ブラックフェザー）だったよね？」

《はい、そう言ってましたね。
あと、インチキ効果集団とか言ってましたけど、どういう意味なんでしょう？》

「さぁ？」

祐騎とエールが蓮の言っていたＢＦについて話しながら歩いていると、ＢＦ達の巣の在る崖が見えるところまで近づくと、その崖の側面の岩に尾が鳥の羽のような４枚の羽根を持ったドラゴンが刻まれていた。

「あれが、ここの石版の竜か・・・」

《クゥアッ！》

「あ、スターダスト！？」

《・・・この我にいきなり攻撃するとは、躾がなっていないのぅ、小僧》

祐騎が崖に刻まれているドラゴンを見上げていると、祐騎のデッキケースの中のカードに戻っていたスターダストがいきなり姿を現し、背後の草むらに向けて攻撃を放つと、その草むらの中から祐騎達を睨みながらハーピィ・クィーンが姿を現した。

「・・・いきなり攻撃したことは、すみませんでした。ですが、貴女は何故隠れていたんですか？」

《そこの石版を破壊しに来たところにいきなり主が現れたのでな、様子を見るために一端身を隠したまでのこと。

・・・もしや、そのチビ助は石版の化身か？

もしそうなら、主があの根暗の骸骨を倒した小僧ということか、気は乗らぬがここで合ったのが運の尽きだと思って相手をしてもらおうかの？》

クィーンは祐騎の質問に答えると、祐騎はクィーンを警戒し、そんな祐騎を見たクィーンは羽根の生えている腕にデュエルディスクを構えた。

「・・・簡単にはやられませんよ」

《ふむ、そうでなくては面白くない》

「《デュエル！》」

祐騎　ＬＰ４０００

クィーン　ＬＰ４０００

「僕のターン！ドロー！

僕は、シールド・ウィングを守備表示で召喚して、カードを3枚伏せてターンエンドです」

祐騎　手札2枚

《我のターン、ドロー。

我は手札から我のカード、ハーピィ・クィーンを墓地に捨て、デッキからフィールド魔法、ハーピィの狩場（かりば）を手札に加え、そのまま発動！

このカードの効果で、鳥獣族モンスターの攻守を２００ポイントアップさせ、ハーピィ・レディとハーピィ・レディ三姉妹を召喚、特殊召喚した時、相手の場の魔法、罠カードを1枚破壊する。

・・・この効果は、主の場のモンスターにも適応される、よって主の場の鳥獣族モンスターであるシールド・ウィングの攻守は２００ポイントアップじゃ》

シールド・ウィング　（攻／守０→２００／９００→１１００）

クィーンがフィールド魔法を発動させると、二人の周囲が鳥の巣の様な景色に変化した。

《そして、ハーピィ・レディ１（攻／守１３００→１６００／１４００→１６００）を召喚！
ハーピィ・レディ１の効果により、フィールド上の風属性モンスターの攻撃力を３００ポイントアップ、さらにフィールド魔法の効果で攻撃力をさらに２００ポイントアップし、主の場の一番左のセットカードを破壊する！》

「クッ！ですが、ハーピィ・レディ１の効果で、僕の場のシールド・ウィングの攻撃力はさらに３００ポイントアップします」

シールド・ウィング　（攻２００→５００）

クィーンが、フィールド魔法の効果で祐騎が一番左に伏せていたディメンション・ウォールを破壊した。

《ふん、この程度で終わると思うておるのか？
我は、さらに手札から魔法カード、万華鏡－華麗なる分身－を発動！》

《このカードの効果で、デッキからハーピィ・レディ三姉妹（攻／守１９５０→２１５０→２３５０／２１００→２３００）を特殊召喚！
さらに、フィールド魔法の効果で主の場の右のセットカードを破壊じゃ》

クィーンが魔法カードを発動させると、クィーンの場に新たにハーピィ・レディ三姉妹が現れ、さらにフィールド魔法の効果で祐騎の場に伏せられていたガード・ブロックが破壊された。

「ですが、僕の場のシールド・ウィングは一度のバトルフェイズで二回まで戦闘では破壊されませんよ！」

《そのようなこと、我が知らぬと思うておるのか？
我はさらに手札から、魔法カード、二重召喚（デュアル・サモン）を発動し、手札のハンター・アウル（攻／守１０００→２５００→２８００→３０００／９００→１１００）を召喚じゃ！》

クィーンの場にフクロウの顔をした鳥人のモンスターが現れ、そのモンスターに他の風属性モンスター達から風が送られ、そのモンスターは送られた風を纏った。

「・・・やはり、そのモンスターが居ましたか」

《ふむ、主のデッキは報告で聞いた通りの風属性中心のデッキ、ならばこのカードの効果は理解しておろう？》

「・・・ええ、わかってますよ」

《ならば、これ以上の問答は無用じゃな。
バトル、ハンター・アウルとハーピィ・レディ三姉妹とハーピィ・レディ１の３体でシールド・ウィングを攻撃！》

クィーンの場のモンスターが、祐騎の場のシールド・ウィングに襲い掛かると、祐騎はハンター・アウルとハーピィ・レディ三姉妹の攻撃が終わり、ハーピィ・レディ１がシールド・ウィングに襲い掛かった瞬間、最後のリバースカードを発動させた。

「只ではやらせません！

罠カード発動、ゴッドバードアタック！」

《なんじゃと！？》

「このカードの効果で、シールド・ウィングをリリースしてハーピィ・レディ1とハーピィ・レディ三姉妹を破壊します！」

《チッ、最後のカードがそれとはついて無いのぅ、我はカードを1枚伏せてターンエンドじゃ》

クィーン　手札0枚

「僕のターン、ドロー！

僕は墓地のシールド・ウィングを除外してシルフィードを攻撃表示で特殊召喚！

さらに、手札からチューナーモンスター、霞の谷の戦士を攻撃表示で召喚します！」

「さらに、手札から魔法カード、烈風の宝札を発動！

このカードは、お互いの場に風属性モンスターが存在し、このターン中レベル5以上のモンスターの召喚と特殊召喚を行わない代わりに、フィールド上に存在する風属性モンスターの枚数と同じ枚数デッキからカードをドローし、その後相手の場の風属性モンスターの数だけ手札のカードを墓地に送るカードです」

「アナタの場の風属性モンスターは1体、僕の場の風属性モンスターは2体、よってデッキから3枚のカードをドローし、手札から1枚を墓地に捨てます」

祐騎は発動させた魔法カードの効果で、デッキからカードを3枚ドローし、ドローしたカードの中から小さな竜が描かれたモンスターカードを墓地に送った。

「そして、バトル！
シルフィードでハンター・アウルを攻撃！
ストーム・スラッシュ！」

《チッ！》

クィーン　ＬＰ４０００→３８００

「そして、霞の谷の戦士でダイレクトアタック！
ミスト・クラッシュ！」

《・・・おのれ、よくもやりおったな》

クィーン　ＬＰ３８００→２１００

祐騎の場のモンスターの攻撃を受けると、クィーンは怒りの形相で祐騎を睨んだ。

「僕はカードを1枚伏せてターンエンドです」

《ならば、エンドフェイズに速攻魔法、終焉（しゅうえん）の焔（ほのお）を発動させて、黒焔トークン2体を守備表示で特殊召喚じゃ》

祐騎　手札1枚

祐騎が伏せカードをセットして自分のターンを終了しようとすると、クィーンは伏せていた魔法カードを発動させて自分の場に黒い焔のトークンを2体召喚した。

《我のターン、ドロー！
手札から魔法カード、強欲な壺を発動してデッキからカードを2枚ドロー！
さらに魔法カード、闇の誘惑を発動してデッキから2枚ドロー！》

《そして、闇の誘惑のコストで手札から闇属性モンスターのダーク・シムルグをゲームから除外じゃ》

クィーンは手札増強の魔法カードを連続で使用し、手札から黒い姿の鳥獣族モンスターをコストに除外して手札を確保した。

《・・・さて、そろそろ反撃といこうかのぅ。
我は黒焔トークン2体をリリースして、現れよ地縛神　Ａｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕ（攻／守２５００→２７００／２５００→２７００）！》

「・・・これが、ローズさんの言っていたハチドリの地縛神」

クィーンが自分の場のトークン2体を生贄にして、ハチドリの地縛神を召喚した。

《Ａｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕは鳥獣族モンスター、よってフィールド魔法の効果で攻守が２００ポイントアップじゃ。
行くぞ、バトルじゃ。

地縛神　Ａｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕでダイレクトアタック！
アースバウンド・ストリーム！》

「うあああああっ！！」

祐騎　ＬＰ４０００→１３００

Ａｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕが翼を羽ばたかせて風を起こすと、その風が祐騎を襲って祐騎の体に無数の裂傷を作り、そこから血が滲み出てきた。

《さて、ここからどうでてくるかのぅ。
我はカードを1枚伏せてターンエンドじゃ》

クィーン　手札1枚

「クッ、僕のターン、ドロー！
魔法カード、強欲な壺でさらに2枚ドローします！」

「よし、レベル4のシルフィードにレベル4の霞の谷の戦士をチューニング！
集いし思いが新たに輝く星となる、光差す道となれ！シンクロ召喚！
飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン！」

《そやつは、まさか先ほどのチビ助か！？
だが、いまさらソイツを呼んだところで戦況は変らんぞ？》

「いいえ、まだ終わりませんよ！
さらに、スターダスト・ドラゴンのシンクロ召喚に成功したことにより、墓地のスターダスト・シャオロン（攻／守１００／１００）を攻撃表示で特殊召喚します！」

祐騎がスターダスト・ドラゴンを召喚すると、烈風の宝札の効果で墓地に送られたスターダスト・シャオロンが自身の効果で特殊召喚された。

「そして、手札からチューナーモンスター、救世竜（きゅうせいりゅう）セイヴァー・ドラゴン（攻／守０／０）を攻撃表示で召喚します！」

《・・・石版の竜の先ほどの姿といい、チビ助ばかりじゃのう》

「小さいからといって、甘く見ないでくださいよ？
レベル８のスターダスト・ドラゴンとレベル１のスターダスト・シャオロンにレベル１のセイヴァー・ドラゴンをチューニング！」

セイヴァー・ドラゴンが光の輪になり、その輪の中にスターダスト・ドラゴンとスターダスト・シャオロンが入ると、２体のドラゴンは星に変った。

「集いし星の輝きが、新たな奇跡を照らし出す、光差す道となれ！シンクロ召喚！
光来せよ、セイヴァー・スター・ドラゴン（攻／守３８００／３０００）！」

「そして、セイヴァー・スター・ドラゴンの効果を発動！
このカードは、１ターンに１度相手フィールド上のモンスター１体の効果をエンドフェイズまで無効にして、その効果を得ることが

出来る！
僕は、地縛神Ａｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕの効果を無効にしてその効果を得ます！
サブリメーション・ドレイン！」

《なんじゃと！？》

セイヴァー・スター・ドラゴンがＡｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕ目掛けて光を放つと、その光を受けたＡｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕは力を失い、翼を畳んでうな垂れた。

「さらに、手札から装備魔法、黒いペンダントをセイヴァー・スター・ドラゴンに装備して、攻撃力を５００ポイントアップさせます！」

セイヴァー・スター・ドラゴン（攻３８００→４３００）

「セイヴァー・スター・ドラゴンがＡｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕを戦闘で破壊すれば、戦闘ダメージで１６００ポイントのダメージ、そしてセイヴァー・スター・ドラゴンがフィールドを離れれば装備している黒いペンダントは墓地に送られ、貴女に５００ポイントの効果ダメージを与えて、ライフは０です」

《・・・つまり、これで終わりと言いたいわけじゃな？》

「はい、もうこれ以上デュエルを続ける意味は有りません。
ここで、お終いにしませんか？」

《くくっ、なるほど我に情けをかけるか。

だが、我にも意地が在るのでな！》

《リバースカードオープン！
罠カード、ヒステリック・パーティー！》

祐騎が、クィーンにデュエルを中止しようと提案すると、クィーンはその提案を蹴って、自分の場の最後のカードを発動させた。

《我は、手札のハーピィ・レディ・ＳＢ（サイバー・ボンテージ）を墓地に捨てて、墓地のハーピィ・レディと名の付くモンスターを可能な限り特殊召喚する！
我は墓地から、ハーピィ・レディ・ＳＢ、ハーピィ・レディ１、ハーピィ・レディ三姉妹、そして我が分身ハーピィ・クィーンを特殊召喚じゃ！》

《そして、フィールド魔法の効果でフィールド魔法自身を破壊する》

ハーピィ・レディ・ＳＢ（攻／守１８００→２１００／１３００）

ハーピィ・レディ１（攻／守１３００→１６００／１４００）

ハーピィ・レディ三姉妹（攻／守１９５０→２２５０／２１００）

ハーピィ・クィーン（攻／守１９００→２２００／１２００）

「・・・フィールド魔法が存在しなくなったことで、地縛神は自身の効果で破壊されアナタの場のハーピィ達の攻撃力と守備力が２００ポイントダウン、さらにハーピィ・レディ１の効果でセイヴァー・スター・ドラゴンの攻撃力は３００ポイントアップします」

セイヴァー・スター・ドラゴン（攻４３００→４６００）

クィーンが罠カードの効果でハーピィ・レディ達を特殊召喚すると、自分の場のフィールド魔法の効果で祐騎の場の黒いペンダントと自身のフィールド魔法自体を破壊し、フィールド魔法が破壊されたことで
Ａｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕは自身の効果で破壊された。

「・・・どうして、フィールド魔法を破壊したんですか？」

《・・・地縛神を場に残したまま負けるなど我には我慢ならん。なにより、我のために今まで尽くしてきたモンスター達を場に残したいと思うのは当然であろう？
それに、このデュエルは闇のデュエルじゃ、一度始めたらどちらかが完全に倒れるまで終わらぬ。
さぁ、一思いに止めをさせ！》

「・・・わかりました、いきますよ！
バトル！
セイヴァー・スター・ドラゴンで、ハーピィ・クィーンを攻撃！
シューティング・ブラスター・ソニック！」

クィーン　ＬＰ１６００→０

セイヴァー・スター・ドラゴンの攻撃が、フィールドのハーピイ・クィーンを貫いて、プレーヤーであるクィーンにその余波が当たり、ライフを０にした。

《すまんのぅ、地縛神なぞに出会う前に主と出会っておれば、このような形でデュエルをせずに済んだものを・・・》

「クィーンさん・・・」

《最後に良いデュエルだった、礼を言うぞ》

《あの、どうして石版を破壊しようとしたんですか？
そんなことをしようとしなければ、マスターとも戦わずに済んだのに・・・》

クィーンはライフが０になり体が消え始めたのにも関わらず祐騎に礼を言い、そんなクィーンにエールが何故石版を破壊しようとしていたのかと聞くと、クィーンは苦笑いをしながら応えた。

《主等は、石版の竜と地縛神が敵対関係なのは知っておるのか？》

「はい」

《・・・地縛神は自身の目的を使用者に強制させる能力が有ってのぅ、我は偶然地縛神を手にしてしまい、その力の影響を受けてしもうた。
それ以降、地縛神の意志に従う以外に無くなってのぅ、それで石版を破壊しに来たところで主達と合ってデュエルしたという訳じゃ》

《それじゃあ、他の地縛神を使う精霊達も貴女のように・・・》

《否、我以外の者は自らの意思で地縛神に協力しておるよ。
故に、我は自由を求め、最後に地縛神を葬った訳だ・・・》

クィーンが祐騎とエールからの質問に答えると、体の半分以上が消えていた。

《・・・これまで、か》

「クィーンさん・・・」

《手間を取らせたな、おかげで地縛神の呪縛から逃れることが出来た。
あらためて礼を言うぞ、ありがとう、最後に戦ったのが主達で良かった。
主等に風の加護があらんことを・・・》

クィーンが祐騎とエールに礼を言うと、そのまま光の粒子になって消えてしまった。

《・・・マスター》

「・・・とりあえず、ティルさんが来るまで待とう」

《・・・はい、わかりました》

祐騎とエールが暗い顔をしていると、いきなり精霊の姿になっていたスターダストが騒ぎ出した。

《クゥ、クゥアッ!!》

「スターダスト、そんなに慌ててどうしたの?」

《ま、マスター、あれを・・・》

スターダストがいきなり騒ぎ出し、祐騎がどうしたのかと思っていると、エールが石版が在ったところを指差しそこを見上げると、そこに石版は存在していなかった。

「・・・もしかして、スターダストやブラック・ローズのときと同じことが起きたのかな?」

《でも、カードになっていませんよ?》

「・・・このことは、蓮さん達と合流してから考えようか」

《・・・ですね》

《・・・クゥ～》

祐騎達はティルが迎えに来るまで、傷の応急手当などをしながら待ち続けた。

そして、ティルが迎えに来ると直ぐに蓮の居るブラック・ガーデンに戻っていった。

第二十話　Ａｓｌｌａ　ｐｉｓｃｕＶＳセイヴァー・スター・ドラゴン（後書き）

今回の話はどうだったでしょうか。

期末試験が近くなり大学の課題が多くなってきたので、次回の更新も遅くなると思いますが、これからもこの作品をよろしくおねがいします。

第二十一話　蓮の告白&ティルの暴走（前書き）

ようやく期末試験が終わって書きあがったので投稿します。

今回はデュエル無しの会話回になります。

それでは、第二十一話始まります。

第二十一話　蓮の告白&ティルの暴走

～ブラックガーデン～

地縛神との戦いを終えた祐騎と蓮は、ティルによってブラックガーデンに運ばれ、ローズによって傷の手当を受けながら消えた石版や祐騎が戦ったクィーンについて話し合っていた。

「・・・そうですか、蓮さんのところの石版も消えてしまったんですか」

「ええ、それにしても、祐騎の相手が地縛神に操られていたなんてね・・・（この世界の地縛神も原作の地縛神と同じで使用者を操れるなんて、相変わらず性質の悪いカードね）」

「・・・」

「祐騎？」

祐騎がいきなり黙ってしまい、蓮は不思議そうに祐騎の顔を覗いた。

「す、すみません、ちょっと考え事をしていたもので・・・」

「考え事って、何を考えてたのよ？」

「いえ、話すようなことでは・・・」

「いいから、話してみなさい。
・・・祐騎にはいつも迷惑を掛けてるんだから、悩みの相談ぐらいはさせて欲しいのよ」

蓮の言葉に祐騎が言葉を濁すと、蓮は少し不機嫌そうにそう言った。

「・・・はい、実はクィーンさんを助ける手段は本当に無かったのか、と考えてしまいまして」

「・・・祐騎」

「もちろん、クィーンさんだけじゃなくて、今まで僕達と戦って消えていった相手や、十代君達が戦って消えていった人達もですけど・・・」

「・・・やっぱり、祐騎を巻き込んだのは間違いだったのかも、ね」

「え？」

祐騎が今までの戦いで消えていった者達のことを助ける方法が無かったのかと考えていたと蓮に話すと、蓮は暗い顔をしながら祐騎に話掛けた。

「・・・祐騎は、優し過ぎるのよ。
そんな祐騎だから私も頼りにして、怪我をさせるようなことや、危険な目に合わせて、もう祐騎が傷付くところを見たく無いのに、それでも、まだ頼ろうとしている。
そんな私自身が、嫌になってきて、いっそ、最初から、合わなか

った、方が、良かったのかな、って」

「蓮、さん？」

「ご、ごめんね、いきなり、こんなこと、言って、今言ったことは、忘れｔ「先に謝っておきます、すみません」ゆ、祐騎？」

「・・・」

蓮が祐騎の言葉を聞いて、最近思うようになっていたことを話していくと、次第に蓮の目に涙が溜まっていき、そんな蓮の姿を見た祐騎は蓮に断りを入れてから、蓮の体を抱きしめた。

「僕は蓮さんと出会って良かったと思ってます。
たしかに、最近の出来事で辛いことがありましたけど、それ以上に蓮さんや皆と過ごした時間の方が僕にとっては重要なんです。
それに、蓮さんは僕が姉さん以外で心の底から信頼できる唯一の人なんですから」

「うっ、ううっ、なんで、なんで私にそこまで・・・」

「・・・なんででしょうか、僕にもわからないんです、けど蓮さんが辛い顔をしたり泣いたりしているところは見たく無いので、これからも迷惑でしょうけど関わらせてもらいますよ？」

「ううん、迷惑じゃない、むしろ祐騎が居てくれないと駄目みたい。
ねぇ、祐騎」

「はい、なんですか？」

祐騎が蓮の体を抱きしめながら慰めると、蓮は意を決した様に自分を抱きしめている祐騎の顔を正面から見て話しかけた。

「・・・私、やっぱり貴方のことが好き」

「それは、僕もですよ？」

「ううん、祐騎の言う好きは友達としてでしょう？私の好きは、一人の異性として、貴方を、甲斐祐騎という男性を一人の女として好き、ってこと」

「へ、あ、え？」

「／／／・・・つまり、Ｉ　ＬＯＶＥ　ＹＯＵってこと」

「／／／っ！？」

蓮の告白を受けて、祐騎は蓮を抱きしめた状態で体が動かなくなった。

「／／／ねぇ祐騎、私も祐騎が辛いことにあったり、傷ついたりするのは嫌よ。

そして、祐騎が他の女性と仲良くするのも嫌、だからさっき言った様に祐騎の側から離れるのも、もう嫌なの、だから・・・」

「・・・蓮さん、僕にはそういったことはよく判りません」

「・・・うん」

「蓮さんの言う通り、僕がいままで言ってきた好きは友人としての好きなんだと思います」

「・・・そう、ね」

「ですから、改めて言わせて貰います」

「え？」

祐騎は、蓮を抱きしめて固まっていた状態から、目を合わせられる様に少し体を離してから、蓮の目を真っ直ぐに見て話し出した。

「・・・いままで自分でも判らなかった不思議な感覚が、蓮さんの言葉でやっと判りました」

「・・・」

「僕も、蓮さんのことが好きです」

「・・・友人としてじゃなくて、異性として？」

「はい。
僕は、蓮さんを一人の女性として好きです」

「本当？」

「僕が蓮さんに嘘を言ったことがありますか？」

「・・・ううん、言った事無い。
本当に、私で良いの？」

「僕に蓮さんはもったいないですけど、僕は蓮さんのことが好きですから」

「ありがとう、祐騎」

祐騎が蓮のことを好きであること言い、それを蓮が確認して祐騎がそれに応えると、蓮は自分の目を真っ直ぐに見ていた祐騎の顔に自分の顔を近づけて、蓮は祐騎の口にキスをした。

「／／／んぅっ！？」

「／／／・・・これは、私のことを好きって言ってくれたことのお礼。

これからも、よろしくね、祐騎」

「／／／は、はい」

祐騎と蓮がお互いに告白をしているとき、ティルはエール達と一緒に祐騎達から少し離れたところから二人の様子を見ていた。

《良かったわね、蓮》

《ティル、娘に恋人が出来たときの母親みたいな顔してるわよ》

《ふふっ、別に良いでしょそれくらい》

《まぁ、悪いって訳じゃないけど、それよりもあの娘どうするのよ?》

ティルが祐騎と抱き合って嬉しそうな顔をしている蓮を見て嬉しそうな顔をしていると、隣で一緒に見ていたローズが指差す方をティルが見ると、そこには顔を真っ赤にしてボーッとしているエールが居た。

《あらら、エールちゃんには刺激が強かったかしら?》

《／／／・・・》

《応答無し、っと。
それじゃ、強制的に覚醒してもらいましょうか～》

《・・・ティル、アンタまさか!?》

《うふふ、私の前で正気を失ったのが運の尽きよぉ!》

ティルはそう言うと、自身の体から数本の蔦を取り出してエールに向けて動かし出した。

《・・・ほどほどにしなさいよ（ごめん、昔私もやられたけど、こうなったティルは止められないの、だから私を恨まないで）》

《ふふふっ、今までガードが固くて手が出せなかったけど、今こそ好機！》

《／／／・・・えっ？》

ティルの出した蔦がエールの体に触れると、今まで放心状態だったエールがティルの蔦にやっと気づくが、すでにティルの蔦で体を拘束され、自身の服の中に蔦が進入し始めた後だった。

《／／／きゃっ！ちょ、ちょっと、ティルさん、なにしてるんですか～！？》

《うふふ、さぁ、天国への階段を上りましょう？》

《クゥアーッ！》

《・・・キュウッ！》

ティルがエールに襲い掛かろうとしたとき、スターダストとブラック・ローズが現れてエールを拘束していたティルの蔦を引き裂いた。

《あん、もうちょっとだったのに～》

《・・・ううっ、ティ～ル～さ～ん？》

《あ、あらら～？もしかして、怒ってる？》

ティルが残念そうに呟くと、そんなティルをエールは目に涙を浮かべながら怒りの形相で睨んだ。

《当然です！！》

《・・・え～っと、ごめんね？》

《謝っても、今回ばかりは、許しません！》

《あ～ん、ローズ助けて～！》

《自業自得ね》

《・・・キュウ》

《・・・クゥ～》

ティルがローズに助けを求めると、ローズはそんなティルとエールの様子に呆れ、ローズの側に居たスターダストとブラック・ローズも同様に呆れた様な声を出した。

「・・・賑やかだと思ったら何をしてるのよ、アンタ達は」

《あ～、なんと言ったら良いのかしら・・・

とりあえず、カップル成立おめでとう？》

「／／／まさか、見てたの！？」

《・・・ごめんね？》

「／／／そ、それはそうと、どうしてエールはティルさんを追いかけてるんですか？」

エールがティルを追い掛け回していると、その騒動に気づいてローズ達のところにやって来た蓮と祐騎に、ローズ達が出歯亀をしていたことを知らせると、蓮と祐騎は顔が真っ赤になり、祐騎は自分の顔が熱くなったのを誤魔化すように話を逸らした。

《えっと、まぁ、なんと言ったら良いのか、ティルの発作にエールが巻き込まれたというところかしら？》

「・・・アイツは何をやってるのよ」

「あの、エールがブラスト・モードとダブル・ショット発動させて、ティルさん目掛けて乱射してますけど・・・」

《待ちなさーい！》

《ちょっ、それは流石に洒落にならないわよ～！？》

ローズがエールとティルの状況について祐騎達に説明していると、エールは／ブラストの姿に変って、手に持った銃を撃ちながらティルを追いかけだしていた。

「まぁ、あっちはティルの自業自得だから放っておくとして、これからどうするのかを話しましょうか」

「・・・え～っと、良いんでしょうか？」

《構わないわよ、というか私的にはむしろもっとやって頂戴ってところね》

「そ、そうですか・・・」

蓮がティルとエールのことを放って置いて話を始めようとすると、祐騎がティルのことを心配してローズに止めなくても良いのかと聞くと、ローズは止めようとはせずに話を始めた。

「それで、他の地縛神に関して何か判ったことは無いの？」

《いえ、今のところは無いわね。
だけど、それ以上に厄介というか、不思議な事が起こったって報告が来てるわ》

「・・・厄介なことって？」

《残る2つの石版も他の石版同様に消えたそうよ》

「えっ、それって本当なの！？」

蓮がローズの言葉に驚くと、ローズは頷いて蓮に答え、不思議そうに首を傾けながら話を続けた。

《ええ、しかもその2つの石版の周囲には、今まで一度も地縛神やそれに関わっていそうなモンスターは発見されていないのよ》

「一度も見つかってないって、それって一度も襲われてないってことですか？」

《そうよ、だから余計に不思議なのよね。
どうしてその2箇所だけ襲われなかったのか、石版がいきなり消えたのはどうしてなのかとか、疑問が尽きないわよ》

「・・・消えたのは他の石版の竜と同じだとしても、襲われなかった理由って一体なんなのかしらね？（おそらく残りの石版の竜は、エンシェント・フェアリーとパワー・ツールのはず。
フィールド魔法を破壊出来るエンシェント・フェアリーを襲わなかったのは、万が一デュエル中にカードになって使われた場合を想定して、念のための判断だということなら判るけど、パワー・ツールの石版というか鉄板を襲わなかったのはどうしてかしら）」

「えっと、それじゃあ僕達はこれからどうしたら良いんでしょうか？」

蓮が消えた石版のことを考えていると、祐騎がローズにこれから自分達がどうすれば良いのかをローズに尋ねると、ローズは顔が仮面で隠れているが、それでも判るほどに楽しそうな雰囲気を出しながら祐騎の質問に答えた。

《そうね～、恋人同士になったばかりの二人に危険な事をやらせるのは気が引けるし、やってもらうこともないから、人間世界に戻ってもらおうかしら？》

「／／／・・・そう」

「あ、あの、だったらティルさんを呼ばないといけないんじゃ・・・」

《その必要は無いですよ、マスター》

「え、エール？」

祐騎が人間世界に戻るためにティルを呼ぼうとすると、エールが服の所々が焦げ、ボロボロになっているティルを笑顔で引きずりながらやって来た。

《ううっ、ちょっとしたコミュニケーションなのに～》

《・・・何か言いましたか？》

《あ、あはは～、なんでもないわよ～？》

《ならば良し、です》

ティルがエールに自分に対しての扱いに不満そうな声を挙げると、エールは無表情な顔で睨みつけてティルを黙らせると、いつもの顔に戻って祐騎達の方に向き直った。

「え、エール、何もそこまでしなくても・・・」

《いいえ、マスターはティルさんについて何もわかってないから、そんなことが言えるんです！》

《そうね、真面目な時以外のティルは性欲の塊で女の敵だし、これくらいの扱いで丁度良いわね》

「むしろ、もう少し厳しくても良いくらいね」

《ちょっと、私が一体何をしたっていうのよ！？》

《《「自分の胸に聞いてみろ（てください）、この変態植物！」》》

《失礼な、私は自分の欲求に正直なだけよ！
それに、私は仮に変態だとしても、変態という名の愛の戦士よ！？
あっ、あと、もう一回罵ってくれない？》

《・・・なるほど、まだ懲りてないという訳ですか》

祐騎がティルの扱いについてやりすぎではないかとエールに言うと、エールだけでなく蓮とローズも一緒になってティルの扱いが正当なものだと言い、ティルがそれに反論すると、エールは再び怒りの形相になり、今度はトゥインクル・エアトスの姿になって、再びおしおきという名の私刑を今度は蓮とローズを加えてやり始め、そんな四人を祐騎は苦笑いをしながら、巻き込まれないようにスターダストとブラック・ローズと一緒に少し離れたところから眺めていた。

《ううっ、ひどい目に遭ったわ～、けどちょっと気持ち良かったかも？》

《・・・これだから、変態は手に負えないわ》

「・・・え～っと、それで僕達の世界に戻るんでしたよね？」

《ええ、こっちでやってもらいたいことは無くなっちゃったしね》

《う～ん、でももう少しの間帰れそうに無いわね～》

「えっ！？どういうことよ、ティル」

蓮達のティルへの私刑が終わり、人間世界に戻ろうとすると、ティルが今は戻ることが出来ないと言った。

《今ちょ～っと時空間が安定してないのよね～、この状態で転移したらどこに出るか解んないし、無事に転移出来るかどうかも解んないから、安定するまでは転移は無理ね》

《時空間が安定してないって、何でまたそんなことに・・・》

「三幻魔の影響でしょうね」

「三幻魔って、十代君達が守っていた鍵で封印されているモンスター達でしたよね？」

「ええ、この世界の三幻魔の力はオリジナルの三幻神に匹敵する力が在ると言われているから、時空の歪み程度なら引き起こせるわ。実際に私の知っているこの世界の未来で、三幻魔のエネルギーともう1枚のカードを利用して時空転移をしてたしね。それに、そろそろ三幻魔の封印が解かれる時期だから、十中八九その影響でしょうね」

蓮がそう言うと、祐騎達は納得した表情をし、ティルが人間世界に転移出来るようになるまで、ブラック・ガーデンの中で待つことにした。

そして、しばらくして時空間の歪みが収まりティルの転移が可能になると、祐騎達は人間世界へと戻るためにティルによって飛ばさ

れていった。

しかし、その転移の最中に祐騎の背中には黒い蜥蜴が、蓮のポニーテールにして後ろに垂らしている髪には黒い蜘蛛がそれぞれ張り付き、祐騎達と共に人間世界へと飛ばされていった。

第二十一話　蓮の告白&ティルの暴走（後書き）

今回の話はどうだったでしょうか、私は恋愛経験が完全に０なので、変な感じになっていないか不安です。

そして、次回は人間世界でのデュエル回です。

ちなみに、今回の話中にもあるように、この作品の今の時間は原作の影丸ＶＳ十代戦後になります。

それでは、これからもこの作品をよろしくおねがいします。

第二十二話　地縛神Ｕｒｕ&ａｍｐ;Ｃｃａｒａｙｈｕａ　ＶＳガーディアン

一ヶ月ぶりにやっと更新出来ました。

今回の話では、相手側もオリカを使用しますので詳しい効果が気になる人はオリカ説明を読んでください。

それでは、第二十二話始まります。

第二十二話　地縛神Ｕｒｕ&ａｍｐ;Ｃｃａｒａｙｈｕａ　ＶＳガーディアン

〜レッド寮前〜

祐騎達がティルの力によって祐騎の部屋へと転移すると、転移の際に祐騎と蓮にくっ付いてきた蜥蜴と蜘蛛が二人から離れてどこかへと消えていった。

祐騎達は蜘蛛や蜥蜴のことには気づかずに、祐騎達はしばらく祐騎の部屋で今の日時や、デッキの調整等をした後、周囲の状況を把握するために部屋の外へと出て行くことにした。

そして、祐騎達がレッド寮の前に出ると、快晴だった空がいきなり曇り出し、日の光が遮られ薄暗くなった。

「いきなり曇るなんて、夕立でしょうか？」

「さぁ？

雨は降ってないみたいだけど・・・」

祐騎と蓮が急に空が雲に覆われたことを不思議がっていると、海岸の方の空に蜘蛛と蜥蜴の地上絵に似た光の線が現れた。

「なんでしょうか、あれ？」

「なんで、あれがここに出てるのよ！？」

「蓮さん？」

空に現れた光の線を見た蓮が驚いて声を挙げると、祐騎はそんな蓮を不思議そうな目で見ていると、海岸の方から、万丈目と三沢が走ってやって来た。

「お～い！！」

「三沢君と万丈目君？」

「万丈目さん、だ！」

「今はそんなことを言っている場合では無いだろう、万丈目！」

万丈目が祐騎の自分への呼び方をいつも通りに指摘すると、三沢がそんな万丈目を焦った口調で注意した。

「一体どうしたの、二人とも急いでいたみたいだけど？」

「ああ、俺達は祐騎と紅龍君がレッド寮に居るから急いで呼んで来いと言われて、呼びに来たんだ。
とにかく、俺達と一緒に来てくれ！」

「う、うん、それは構わないけど、呼んで来いって誰に言われたの？」

「それは、目的地に着いたら解る。
とにかく、急いでいくぞ！」

祐騎が三沢の説明を聞いて、自分達を呼んだ相手が気になって聞いてみるが、祐騎の言葉を聞いた万丈目が、祐騎の質問には答えずに祐騎達を光の線が浮かんでいる海岸の方に走って誘導しだした。

～海岸～

祐騎と蓮が三沢と万丈目に誘導されながら海岸に着くと、そこには黒いオーラの様なものを体に纏い、腕にそれぞれ蜘蛛と蜥蜴の刺青の様な物が浮かんでいる翔と隼人が十代達と対峙する形で立っていた。

「おい、言われたとおりに連れて来たぞ！」

《ご苦労、もう貴様らに用は無い、失せろ》

《まぁ、自ら死に急ぎたいというならば、ここに留まればいいがな》

「翔、隼人もお前達本当にどうしちまったんだよ！？」

万丈目がいつもと様子の違う二人に、祐騎達を連れてきたと告げ

ると、その声が聞こえた二人は、いつもの二人の声と同時に別の低い声が聞こえる様な、不思議な話し声で話し出し、そんな二人に十代が話しかけるが、二人はそれを無視して、祐騎達をにらみ付けた。

「やっぱり、アンタ達の仕業って訳ね、地縛神」

「なるほど、クィーンさんと同じということですか」

《そういうことだ、もっとも人間の体は何かと不便なものだな、精霊のように我等地縛神の力を全て移す事が中々できぬ》

《そのせいで、我等の闇の力をこの体に馴染ませるのに時間が掛かかっておるのだが、我等としては一刻も早く貴様らの持つシグナーの竜を消しておきたいのでな。

それに、今回ばかりは貴様らにとっても良いことだろう、この状態の我等が相手ならば、万が一我等を倒してもこの人間達に影響は出んのだからな。

もっとも、貴様らが負けた場合は変らんがな?》

《それでもやるというのなら、手っ取り早く二人同時に掛って来るがいい》

「そういうことなら!」

蓮と祐騎がデュエルディスクを構えて地縛神に操られている二人とデュエルしようとすると、話を聞いていた十代達が割って入ってきた。

「ちょっと待てよ!

さっきから聞いてると、精霊とか闇の力とか、一体どういうこと

だよ！？
影丸のじいさんやセブンスターズの奴らなら俺達が全員倒したはずだろ！？」

「そうだ！
それに、さっきから言っている地縛神とは何のことだ！？」

「悪いけど、今はそれを説明してる暇は無いわ。
何が起きてるのかは、デュエルが終わってから教えてあげるわ」

「そういうことなので、十代君達には悪いと思いますが、この件に関しては僕達に任せてもらいます」

祐騎と蓮はそう言うと、自分達のデュエルディスクにセットしていたデッキとデッキケースに入れていたタッグ用のデッキと交換して、地縛神に操られている二人とデュエルディスクを構えて対峙した。

「「《《デュエル！》》」」

祐騎＆蓮　ＬＰ８０００

翔（蜘蛛）＆隼人（蜥蜴）　ＬＰ８０００

「僕の先攻！ドロー！
僕の墓地にモンスターが存在しないことにより、手札からガーディアン・エアトスを攻撃表示で特殊召喚します！」

《私達の世界だけでなく、マスター達の世界でマスターのご友人

にまで害を及ぼしたアナタ達には、最早一切の容赦はしませんよ！》

祐騎がエールのカードを場に出すと、エールは黒い影に覆われた二人の影に向かって声を荒げた。

「さらに、シールド・ウィングを守備表示で召喚して、カードを2枚伏せてターンエンド！」

祐騎　手札2枚

《我のターン、ドロー！
我は、ドラゴンフライ（攻／守１４００／９００）を守備表示で召喚し、カードを3枚伏せてターンエンドだ》

翔（蜘蛛）　手札2枚

地縛神に操られている翔が、いつも使っているロイドデッキでは無い昆虫族モンスターを使ったことに十代達が驚いているのを横目に見ながら、蓮は自分のターンを開始した。

「私のターン！ドロー！
私は手札から魔法カード、おろかな埋葬を発動してデッキからダンディライオンを墓地に送る。
そして、ダンディライオンが墓地に送られたことにより、私の場に綿毛トークン2体を守備表示で特殊召喚する！」

「さらに、手札から魔法カード、死者転生を発動して手札のスポーア（攻／守４００／８００）を墓地に送り、墓地のダンディライ

オンを手札に戻す。
そして、ローンファイア・ブロッサムを召喚し、ローンファイア・ブロッサムをリリースしてデッキから椿姫ティタニアルを攻撃表示で特殊召喚！」

《さ～てと、こっちの世界にまでやって来たことを嫌というほど後悔させてあげようかしら～》

蓮がティルのカードを場に出すと、エールとは違って表面上では軽い感じで戦闘体制に入った。

「さらに装備魔法、憎悪の棘を椿姫ティタニアルに装備して攻撃力を６００ポイントアップさせる！」

ティタニアル　（攻２８００→３４００）

「バトル！ティタニアルでドラゴンフライを攻撃！
ヘイト・カメリア・ウィップ！」

《フン、リバースカードオープン！
次元幽閉を発動、このカードの効果で攻撃モンスターをゲームから除外する！》

「させない！
椿姫ティタニアルの効果を発動！
私の場の綿毛トークンをリリースして、次元幽閉の効果を無効にして破壊する！」

《あらあら、私にオイタして良いのは、かわいい子だけよ～》

《そういう問題じゃないですよ！？》

蓮がティルの効果を使うと、ティルを飲み込もうとしていた次元の穴が塞がり、エールはティルのセリフにツッコミを入れるが、ティルはそれを完全にスルーし、デュエルが続けられた。

「罠が無効になったことでバトルを再開！
ティタニアルでドラゴンフライを攻撃！」

ティルの放った攻撃により相手の場のドラゴンフライを貫通し、攻撃の余波を地縛神に操られている翔が受け、翔の後に在る黒い影が苦しんでいるように揺らいだ。

翔（蜘蛛）＆隼人（蜥蜴）　ＬＰ８０００→５５００

ドラゴンフライ　（攻／守１４００→８００／９００→３００）

「さらに、憎悪の棘の効果でドラゴンフライは破壊されず攻撃力と守備力を６００ポイントダウンさせる！
そして、エアトスでドラゴンフライを攻撃！
精霊のオペラ！」

ティルの攻撃によって攻撃力と守備力がダウンしているドラゴンフライにエールが攻撃すると、ドラゴンフライは破壊されるが、効果によってデッキから2体目のドラゴンフライを特殊召喚した。

《ドラゴンフライの効果により、デッキから二枚目のドラゴンフライを攻撃表示で特殊召喚する》

「なら、私はカードを1枚伏せてターンエンド」

蓮　手札1枚

《我のターン、ドロー。
ふむ、我は手札から魔法カード、テラ・フォーミングを発動。
このカードの効果でデッキからフィールド魔法1枚を手札に加え、そのままそのフィールド魔法を発動させる！》

地縛神に操られている隼人がフィールド魔法を発動させると、周囲の風景が広い荒野の上に地縛神に対応する地上絵の描かれた大地の広がるフィールドに変化した。

「何なの、このフィールドは？」

《これこそが我等地縛神が真の力を発揮できる大地、フィールド魔法、神映し（かみうつし）の大地（だいち）－Ｎａｓｃａ（ナスカ）－、このカードは自分フィールド上に地縛神と名の付くモンスターが居る場合、相手の魔法、罠、モンスター効果を受けない。
そして、地縛神のフィールド上に1体しか表側表示で存在出来ないという効果を無効にする》

「じょ、冗談じゃないわよ、なによそのインチキカードは！？」

《フン、我等も後が無いのでな、全力で行かせて貰う！
手札からエーリアン・ソルジャー（攻／守１９００／８００）を攻撃表示で召喚。
さらに魔法カード、二重召喚を発動させ、場のドラゴンフライとエーリアン・ソルジャーをリリースして、地縛神　Ｃｃａｒａｙｈ（コカラ）（イア）

ｕａ（攻／守２８００／１８００）を攻撃表示で召喚！》

地縛神に操られている隼人が場のドラゴンフライをリリースして、手札から地縛神を召喚すると、フィールド魔法によって現れた地面に描かれている地上絵の中の蜥蜴の地上絵が青黒く光り、その光が巨大な蜥蜴の姿をした地縛神へと変化した。

「で、デケェ・・・」

「三幻魔と同じ、いやそれ以上の大きさだぞ！？」

「これが地縛神、なの？」

地縛神の巨大さに十代達が驚いているのを見ながらも、地縛神に操られている隼人はそれを無視してデュエルを続行した。

《行くぞ、バト「バトルフェイズに入る前にリバースカードオープン！」チッ！》

「罠カード、威嚇する咆哮を発動！
このカードの効果でこのターン相手は攻撃宣言することが出来ない！」

《フン、悪あがきだな。
我はこのままターンエンドだ》

蓮が場に伏せていた罠カードを発動させると、攻撃態勢に入っていた地縛神は動きを止めて攻撃が中断され、地縛神に操られている隼人はそのままターンを終了した。

隼人（蜥蜴）　手札２枚

「僕のターン、ドロー！
僕は手札から魔法カード、アームズ・ホールを発動！
このカードの効果で、デッキの一番上のカードを墓地に送り、このターン通常召喚しない代わりにデッキから装備魔法カード、精霊神器ーエクセリオンーを手札に加える！」

祐騎はデッキの一番上に在ったシルフィードを墓地に送って、デッキから装備魔法を手札に加えた。

「そして、今手札に加えた装備魔法をエアトスに装備する！
装備魔法、精霊神器ーエクセリオンーは装備したモンスターの攻撃力を半分にすることでダイレクトアタックすることが出来る！」

エアトス（攻２５００→１２５０）

「バトル！
エアトスでプレーヤーにダイレクトアタック！
精霊のオペラ！」

《チィッ！》

翔（蜘蛛）＆隼人（蜥蜴）　ＬＰ５５００→４２５０

「僕はこれでターンを終了します」

《ならば、エンドフェイズに速攻魔法、終焉の焔を発動！
このカードの効果により、我等の場に黒焔トークン2体を守備表示で特殊召喚する》

祐騎　手札2枚

祐騎が自分のターンを終了させようとすると、地縛神は伏せていた魔法カードを発動させて、自分の場に2体のトークンを呼び出した。

《我のターン、ドロー！
我は場の黒焔トークン2体をリリースして、手札から地縛神　Ｕｒｕ（ウル）（攻／守３０００／３０００）を攻撃表示でアドバンス召喚！》

フィールドに存在している黒い焔がフィールド魔法により浮かび上がっている蜘蛛の地上絵に吸い込まれると、その地上絵から黒い影が現れ、その影が巨大な蜘蛛のモンスターへと姿を変えた。

《バトルだ！
地縛神ＵｒｕとＣｃａｒａｙｈｕａでダイレクトアタック！》

「罠カード、ガードブロックを発動して地縛神Ｕｒｕの攻撃による戦闘ダメージを0にして、デッキからカードを1枚ドローする！」

《しかし、Ｃｃａｒａｙｈｕａの戦闘ダメージは受けてもらうぞ！》

「くぅうっ！」

「きゃあああっ！」

祐騎が伏せていた罠カードを発動させると、蜘蛛の地縛神の放った糸による攻撃を防いだが、蜥蜴の地縛神が地面を叩き付けることで発生した衝撃波は防ぐことが出来ず、祐騎達は体とライフにダメージを受けた。

祐騎＆蓮　ＬＰ８０００→５２００

「な、なんだ、あのモンスターの攻撃が実体化してるのか？」

「このデュエルが闇のゲームというのは本当だったのか！？」

「そうだとしても、あのモンスターは一体なんなのかしら・・・」

祐騎と蓮への攻撃の衝撃によって発生した突風が離れた場所で観戦していた十代に襲いかかると、十代達はこのデュエルが闇のデュエルであることを再確認し、観戦を再開した。

《我はカードを１枚伏せてターンエンドだ》

翔（蜘蛛）　手札２枚

「私のターン！ドロー！
私は手札から魔法カード、強欲な壺を発動してデッキからカードを2枚ドロー。
そして、ダンディライオンを攻撃表示で召喚！」

「そして魔法カード、フレグランス・ストームを発動させ、ダンディライオンを破壊してデッキからカードを1枚ドロー！
さらに、ドローしたカードは植物族モンスターのギガプラント、よって効果によりもう1枚ドロー！」

「そして、ダンディライオンの効果で私の場に綿毛トークンを2体守備表示で特殊召喚する！」

蓮は魔法カードを連続で使用して、自分の手札と場のモンスターを増やすと、少し考え込む様な仕草をすると、翔達を操っている地縛神達に話しかけた。

「ねぇ、一つ聞いてもいいかしら？」

《なんだ、女》

「どうして、アンタ達は残っていた二つの石板の場所に行かずに、ここに来たのか教えてもらえないかしら？」

蓮がどうして残りの石板の所に行かなかったのかと聞くと、地縛神は蓮の質問に不愉快そうに答えた。

《フン！
簡単なことだ、我等の力を受け入れる器が無かっただけのこと》

「そう、ならコンドルの地縛神も今は動くための肉体が無いから動いていないってことね？」

《貴様、ネクロマンサーの時もそうだが、何故我等のことをそこまで知っている！？》

「さてね、ウチの変態精霊曰く、良い女には秘密が付き物らしいわよ？」

地縛神が驚きの声を挙げて蓮に質問するが、蓮はその質問を軽い口調で誤魔化してデュエルを再開した。

「それじゃ、いくわよ！
バトル！
エアトスでダイレクトアタック！」

《やらせん！
永続罠、地縛神の咆哮を発動！
このカードの効果により、攻撃を仕掛けた相手モンスターの攻撃力が我等の場の地縛神の攻撃力よりも低い場合、攻撃した相手モンスター1体を破壊する！》

「残念だけど、そのカードの効果は場のカードを対象にとる効果。よって、椿姫ティタニアルの効果により、綿毛トークン1体をリリースすることで効果を無効にして破壊する！」

《はいは～い、本日二回目のサクリファイス・サンクテュアリ～っと》

エールが攻撃を仕掛けると、翔を操っている地縛神が発動させた罠カードの効果により場の地縛神がエールに向かって吠えると、その咆哮がエールに届く前にエールの前に蔦の壁が現れて、地縛神の咆哮はかき消されエールには届かなかった。

「罠カードの効果が無効になったことでバトルを続行！
精霊のオペラ！」

《グゥッ！》

翔（蜘蛛）＆隼人（蜥蜴）　４２５０→３０００

「私はカードを2枚伏せてターンエンドよ」

蓮　手札2枚

蓮がターンを終了させると、地縛神に操られている翔と隼人を覆っている黒い影が大きくなり、祐騎達に対する威圧感が上昇した。

《我のターン！ドロー！》

「この瞬間、リバースカードオープン！
罠カード、百花繚乱－桜の舞－！
このカードの効果により、手札のギガプラントを墓地に送る事により、相手はこのターン攻撃宣言することはできない！」

《チッ！
ならば、我は手札からガガギゴ（攻／守１８５０／１０００）を

攻撃表示で召喚する！》

「Ｕｒｕの効果コストのためのモンスターを用意させる訳にはいかないわ。
カウンター罠、ポリノシスを綿毛トークンをリリースして発動！
ガガギゴの召喚を無効にして破壊する！」

《クソッ！（何故だ、この女何故我等の事をここまで知っている！？）》

地縛神Ｕｒｕの効果を使わせないためにモンスターの召喚を封じた蓮の行動に、地縛神は疑問を感じながらもデュエルを続けた。

《我はカードを1枚伏せてターンエンドだ！》

「エンドフェイズに桜の舞の効果により、墓地に送られたギガプラントを攻撃表示で特殊召喚する！」

隼人（蜥蜴）　手札1枚

「僕のターン、ドロー！
いきますよ、蓮さん」

「ええ、私達の切り札をコイツ等に見せてやりましょう」

「はい、僕は手札から魔法カード、融合（ゆうごう）を発動！」

《融合、だと！？》

祐騎が手札から融合のカードを発動すると、祐騎と蓮を除いた全員が驚いた表情をした。

「祐騎って融合を使ったことあったか？」

「いや、俺の知る限り一度も使っているところを見たことが無いぞ」

「蓮だってそうよ、今まで一度も融合を使ったところなんて見たこと無いわよ」

「一体どんなモンスターが出てくるんだ・・・？」

十代達は祐騎達が今まで一度も使ったことの無い融合を使ったことに驚きながらも、デュエルの行方を観戦し続けた。

「融合の効果により、エクストラデッキに存在する融合モンスターの融合素材として決められた手札又は場のモンスターを墓地に送る事で、融合モンスターを特殊召喚する！
僕は場のガーディアン・エアトスと椿姫ティタニアルを墓地に送り融合！」

《ガーディアン・エアトスと椿姫ティタニアルの融合だと！？》

「数多の命を生み出し、見守る守護者よ、今こそその姿を現わさん！

融合召喚！
生誕せよ、ガーディアン・ユグドラシル（攻／守３５００／３５００）！」

祐騎がエールとティルのカードが融合のカードの効果により１つになると、祐騎達の場には下半身が樹の根が集まった形をして、薄い緑色のドレスに琥珀と翡翠の装飾品を身に付けた白く大きな羽を持ったモンスターが現れた。

《ふぅ、初めてこの姿になりましたが、なんだか不思議な感じが致しますね》

「その感じだと、融合したらエールが主体なのかしら？」

《ふふっ、そうではありませんよ。
今の私の意識は、エールとティル二体の精霊の意識が混ざり合った存在ですから、別の精霊と思って頂けると幸いです、マスター蓮、マスター祐樹》

「ええ、よろしくね」

「よろしく、ユグドラシル」

蓮が融合したモンスターに話しかけると、エールとティルの二人の声を合わせたような声で蓮と祐騎に応え、蓮と祐騎もそれに応えた。

《フン、なにが切り札だ、そのようなモンスターで何が出来る！》

「これから見せてあげますよ。

ガーディアン・ユグドラシルの効果を発動！
ガーディアン・ユグドラシルは1ターンに1度、手札のカード1枚を墓地に送ることで、墓地に送ったカードとは違う種類の墓地のカード1枚を手札に加える事が出来る！」

「僕はこの効果により、手札の罠カード、ダブル・ショットを墓地に送り、墓地の装備魔法、精霊神器ーエクセリオンーを手札に加える
輪廻転札（りんねてんさつ）！」

《移ろい行く存在よ、その身に宿りし光を、今一度我が前に現わしたまえ！》

祐騎がユグドラシルの効果を使用すると、ユグドラシルの周囲に今まで祐騎達が墓地に送られた罠カード以外のカードが包み込むように回りだし、その回転が止まるとユグドラシルの正面にエクセリオンのカードが止まり、そのカードが祐騎の手に収まった。

「そして、ユグドラシルに装備魔法、精霊神器ーエクセリオンーをデッキの一番上のカードを墓地に送ることで、エクセリオンの第3効果を選択して装備する！」

「さらに、ガーディアン・ユグドラシルはフィールド上に表側表示で存在するとき、自分の墓地に存在する天使族または植物族モンスター1体を装備カード扱いとして装備することが出来る！
この効果によりモンスターを装備した場合、装備したモンスターの効果を得ることが出来る！
僕はユグドラシルの効果で、墓地のガーディアン・エアトスを装備カード扱いで装備する！」

《一時の眠りに付きし我が子等よ、その魂を我が身に乗せ、今一度その意思を示したまえ！
魂魄憑装（ソウル・オブ・ユニオン）！》

祐騎がデッキの一番上に在ったデルタ・フライを墓地に送り、墓地のエアトスのカードをガーディアン・ユグドラシルに装備すると、ガーディアン・ユグドラシルの姿にエアトスの姿が溶け込むように消えていくと、ユグドラシルの背中の羽の周りに緑色の光が現われた。

「ユグドラシルに装備したエアトスの効果により、装備魔法である精霊神器－エクセリオン－を墓地に送ることで、アナタ達の墓地のドラゴンフライ2体とエーリアン・ソルジャーをゲームから除外して、攻撃力を１５００ポイントをアップさせる！」

「さらに、精霊神器－エクセリオン－はデッキの一番上のカードを墓地に送ってフィールド上のモンスターに装備している場合、フィールドから墓地に送られた時、手札に戻る！」

ガーディアン・ユグドラシル　（攻３５００→５０００）

「そして、ユグドラシルの元々の攻撃力を半分にして精霊神器－エクセリオン－を装備することで、ダイレクトアタックを可能にする！」

ガーディアン・ユグドラシル　（攻５０００→３２５０）

祐騎がユグドラシルとエアトスの効果と装備魔法の効果を使って、ユグドラシルを強化すると、その様子を静観していた地縛神に操ら

れている翔達が驚いた様な表情をし、翔達の周囲に存在している黒い影が焦っている様に揺らいだ。

《ば、バカな、我等が負ける、だと》

「まぁ、他の地縛神も倒されてるんだから、観念することね」

《クッ、貴様ぁ！？》

蓮が地縛神をバカにする様に話すと、翔達の周りの影が大きくなり蓮に襲い掛かろうとした時、祐騎がユグドラシルに攻撃を指示した。

「蓮さんには手を出させません！
ガーディアン・ユグドラシルで相手プレーヤーにダイレクトアタック！
ワールド・オブ・シャイン！」

《グアアァッ！》

《グウウウゥッ！》

翔（蜘蛛）＆隼人（蜥蜴）　ＬＰ３０００→０

ユグドラシルの体から虹色の光が放たれると、翔達を覆っていた黒い影は翔達から離れて消えてしまい、翔達はその場に仰向けで倒れてしまった。

「・・・なんとか、勝てましたね」

「そうね。
それに、いつものことながら疲れたわ」

「そうですけど、皆への説明どうしましょうか？」

「明日にしましょう。
今日はもう説明する気力も無いわよ」

「そうしましょうか」

祐騎と蓮がデュエルに勝利したことに安堵してその場に座り込むと、デュエルを観戦していた十代達が倒れた翔と隼人のところに駆け寄ってきた。

「翔、隼人、大丈夫か！？」

「ｚｚｚ～」

「むにゃ、むにゃ、もう食べられないんだな～」

「なんて、ベタな寝言を言ってるんだこいつは」

「この様子だと、大丈夫みたいね」

「でも、一応この二人は保健室に運ぶとしようか。
祐騎君達に今回のことを説明してもらいたいしね？」

「そうだ！
祐騎、早く説明を・・・」

駆け寄って来た十代達が翔達の状態を確認すると、翔と隼人は寝息と寝言を立てて眠っており、その状態の二人を運ぶように言った吹雪の言葉で、祐騎達から地縛神等の説明してもらわなければならないことを思い出した十代が祐騎達の方を見ると、祐騎達は疲れて座り込んだ場所で互い体を寄せ合って眠ってしまっていた。

「おやおや、これじゃあ二人が起きるまで説明はお預けだね。それじゃ、目を覚ましたら直ぐに話が聞けるように翔君達と一緒に保健室に行こうか」

吹雪がそう言うと、十代達は翔と隼人と共に祐騎達を保健室へと連れて行った。

デュエル後の精霊ｓｉｄｅ

祐騎達がデュエルに勝利した後、融合状態から元の姿に戻ったエールは皆の様子を少し離れた場所で見ていた。

《ふぅ、なんとか勝てましたね、ティルさん。
あれ、ティルさん？》

《ふふふ、良い、良いわ～。
無防備な姿に、安心しきった表情、これは良いおか、もとい記録になるわ～！》

《またアナタは、何をしてるんですか～！》

エールがティルに話しかけても返事が無いことに気になってティルの居る方を向くと、そこにはカメラ片手に祐騎に寄りかかって寝ている蓮を激写しているティルが居た。

《何って、前にも言ったでしょ、後で見る用の写真を撮ってるのよ～？》

《いえ、そういう意味では無くてですね！》

《そうそう、それはそうと、エールちゃんとの融合は良かったわ～いっそのこと、今から精神だけじゃなくて体の方でも融合しましょうよ～》

《／／／か、か、体の方って、なんですかー！？》

《ふふふっ、それはもちろん、ナニに決まってるでしょ～？》

《／／／け、結構ですー！！》

ティルの言葉を聞くと、エールは慌てて自分のカードに戻って行

き、その姿を見ると笑いながら見送ると、翔達と一緒に保健室へと運ばれている祐騎達を確認して自分もカードへと戻っていった。

第二十二話　地縛神Ｕｒｕ&ａｍｐ;Ｃｃａｒａｙｈｕａ　ＶＳガーディアン・ケルベロス

今回の話で原作での第一期は終了になります。

次回は、原作キャラ達への説明と第一期の終わりへの流れを書きますので、デュエルは無しになります。

それから、オリカの詳しい能力はオリカ説明に乗せますので、気になった人は是非読んでみてください。

あと、今回のデュエルで出てきたオリカの精霊神器ーエクセリオンーの能力を少し変更しましたので、そこの部分も気になった人は確認してみてください。

それでは、これからもこの作品をよろしくお願いします。

第二十三話　一年の終わり、そして新たな年へ（前書き）

今回はデュエル無しの会話回で、原作の第一期の終了と二期への繋ぎになります。

この話は、原作第一期の終わりと二期の始めを繋ぐ為のものなので、原作の流れをかなり省略して、いつもより短くなっています。

それでも構わない方は、読んでいただけると幸いです。

それでは、第二十三話始まります。

第二十三話　一年の終わり、そして新たな年へ

～レッド寮～

翔と隼人に取り付いた地縛神との戦いを終えた後保健室へと運ばれた祐騎達は、翌日には目を覚まして、十代達に地縛神についての説明をするためにレッド寮の食堂に集まっていた。

「それじゃあ、昨日のことについて説明してもらうわよ」

「ええ、こっちもそのつもりだったから構わないわよ。
それで、何から聞きたいの？」

「まずは、翔君達がどうしてあんなことになったのかを教えてくれないかい？」

「それは、単に地縛神に操られてただけよ」

「その地縛神というのは、そもそもなんなんだ？」

明日香が昨日の翔達のことを蓮に尋ね、蓮が地縛神に操られていたと答えると、三沢が地縛神について質問し、その質問を聞いた十代達が蓮と祐騎に注目した。

「地縛神っていうのは、読んで字の如く地面に縛られた、つまり封印されてた神のことよ」

「神！？

あのデカイのが神のカードだっていうのか！？」

「ええ、もっとも武藤遊戯の使っていた三幻神よりも、三幻魔に近い性質のモンスターだけどね」

「その地縛神が、どうして蓮たちを襲うような真似をしたの？」

「それは、私と祐騎の持っているブラック・ローズとスターダストが地縛神を封印していたカードの一部だったからでしょうね。私達が地縛神と遭遇したのは、この2枚のカードに出会ってからだったから」

「それじゃあ、もしかして冬休み明けくらいにI&I社に行っていたのや、セブンスターズとの戦いの間いなくなってたのは、その地縛神絡みだった、という訳か？」

「はい、姉さんを通してペガサス会長から話を聞いて、僕と蓮さんが地縛神の調査をしていたんです。もちろん、その間にシンクロモンスターの開発の手伝いもしてましたけど」

蓮と祐騎が、明日香や三沢からの質問に対して、あらかじめ話し合っておいた原作知識や精霊界の事を隠しての説明を聞いて、十代達はとりあえず納得した様に頷いた。

「それにしても、何故その地縛神の封印が解けたんだい？さっきの話を聞く限り、封印が解ける理由が分からないんだけどね」

「・・・さぁ？

カミューラさんから聞いた話だと、三幻魔の封印を解くために影丸理事長が事前に色々やってたみたいだから、その影響じゃないかってのがペガサス会長の考えなんだけど、詳しいことは解らないですね。

（地縛神の封印やシグナーの竜が現れたのは、十中八九私が原因でしょうね。

それにしても、一人の人間が変われればその人間に関わるはずの未来も変わるって、まるで５Ｄ’ｓのイリアステルのやってた未来改変みたいな状況ね）」

吹雪が地縛神の封印が解けた理由を蓮に聞くと、蓮は顔には出さずに自己嫌悪になりながら、吹雪に事前にペガサスやカミューラ達と話し合っておいた嘘の情報を答えて、十代達への説明が終わり十代達はそれぞれ自分達の部屋へと戻って行った。

～祐騎の部屋～

十代達への説明を終えて、祐騎と蓮はデッキ調整やこれからの話をするために祐騎の部屋に来ていた。

「蓮さん、ちょっと良いですか？」

「ん？
どうしたの、祐騎？」

「いえ、勘違いなら良いんですが、蓮さんもしかして、また自分が原因で地縛神が現れたなんて考えて無いですよね？」

「ふぇっ！？
も、もちろんよ、なんでそんなこと思うのよ」

「・・・そんなに驚いた声を出したら図星なのがバレバレですよ？」

「ううっ、なんで分かったのよ。
自分でも上手く隠せたと思ったんだけど？」

「皆に説明していた時、蓮さんの目が曇りましたから。
それに、蓮さんは自分が思ってる以上に隠し事が下手ですから、明日香さん辺りは蓮さんが何か悩んでる位にはバレてますね」

祐騎がそう言って苦笑すると、蓮は観念した様に肩を落として俯いて溜息を吐いた。

「・・・ハァ～ッ。
しょうがないじゃない、私の知っている大まかな歴史の流れは変わって無いのに、私の周りの状況が変わり過ぎてるんだから、自分

のせいだと思って当然じゃない？」

「それを言うなら、僕が原因かも知れないですよ？
僕は、この世界で初めて蓮さんが見つけたイレギュラーなんですよ？」

「そ、それは、そうだけど、でも元はと言えば私がこの世界に来たことが事の始まりだった訳なんだから、そう考えるとやっぱり私が原因じゃない」

「いいえ、そのなんでも自分のせいだと思う考え方が間違っているんです。
良い機会ですから、今日は蓮さんのその間違った考え方について話し合いです！」

「良いわよ、どこが間違ってるのか教えて貰おうじゃないの！」

こうして、祐騎と蓮は日が暮れるまで話し合いを続け、お互いに疲れた所で蓮は自分の部屋があるブルー寮へと戻り、祐騎はそのまま深い眠りに着いた。

～アカデミア港～

祐騎と蓮が十代達に地縛神の説明を終えてから数週間が経過し、この年のデュエルアカデミアの卒業式が執り行われた。

そして、その数週間の間に隼人は進級試験に合格出来なかったものの、カードデザイナーとしてＩ＆Ｉ社からのスカウトを受けてアカデミアを去り、十代とカイザー亮の卒業記念の模範デュエルが行われたりした後、この年のデュエルアカデミアの行事が終了し、祐騎と蓮は新年度までアカデミア島から出て、Ｉ＆Ｉ社で優奈の手伝いをするために港に来ていた。

「それじゃあ、新年度までさよならだね」

「おう、隼人に会ったらよろしく言っといてくれよ」

「うん、十代君と翔君も元気でね」

「祐騎君も無理とかしないようにね」

祐騎が十代と翔に別れの挨拶をしている傍で、蓮も明日香と話していた。

「それじゃ、また新学期でね」

「ええ、それはそうと、蓮。

貴女、何か悩みとか有るんだったら誰かに相談した方が良いわよ？」

「ええ、解ってる。
というか、祐騎の言った通りバレてたのね」

「まぁ、これでも貴女との付き合いは長いからね。
それにしても、あの誰も近づけない雰囲気だった蓮がここまで変わるなんて、甲斐君のお陰よね。
ねぇ、私達の所に居ない間何があったの？」

「／／／な、なんだって良いでしょ！？
ほ、ほら、船が出るから早く乗るわよ、祐騎！」

「う、うわっ！？
ちょ、ちょっと、蓮さん！？」

明日香が蓮をからかう様に祐騎との事を聞くと、蓮は祐騎の手を引っ張って船に乗り込むと、船の汽笛が鳴って祐騎達を乗せた船はアカデミアの港を出港した。

それからさらに数週間の時間が過ぎ、デュエルアカデミアの新年度が始まりを迎え、祐騎達は無事に二年生へと進級し、新入生より

も先にアカデミア島に入っていた。

そして、新入生を乗せた船がアカデミアの港に到着すると、恐竜の柄のバンダナを被った大柄の少年を始めとしたたくさんの新入生達が船から降りて来る中、一番最後にセミロングの黒髪に黒い羽の髪留めを着けた一際小柄な少女が降りてきて、港から見えるアカデミアの校舎を眺めた。

「本当に、ここに居るんだよね」

《うん、写真の人がここに居るのはちゃ～んと確認したんだから》

「そっか、これでやっとあの人に会えるんだ」

少女は周りに少女以外の人が誰も居ない場所でそう呟くと、笑みを浮かべながら校舎と寮に向かって歩き出した。

第二十三話　一年の終わり、そして新たな年へ（後書き）

次回から、原作の二期に突入します。

それから最後に出てきたのは、二期に出すオリキャラです。

もう一人出す予定ですが、それはもう少し話が進んでからになります。

それでは、これからもこの作品をよろしくお願いします。

第二十四話　黒羽の来訪者（前編）（前書き）

今回の話から原作での第二期の話になります。

それから、話が長くなったので今回は前後編に分けました。

後、今回の話で新しいオリキャラを出しますが、そのキャラの詳細は後編の後にキャラ設定の方に載せますので、気になる方は少々お待ちください。

それでは、第二十四話始まります。

第二十四話　黒羽の来訪者（前編）

～レッド寮付近の森の中～

新学期が始まり、祐騎と蓮もアカデミアに戻り、久しぶりに会った十代達と話したり、新入生がアカデミアにやって来た日、その日は午前中だけで授業が終わりになったため、祐騎はいつもの習慣で森の中の木陰で昼寝をしていると、そんな祐騎の近くに一人の少女が歩いて来た。

「ｚｚｚ～」

「あ、あの～、もしも～し、起きてくださ～い」

「ｚｚｚ～」

「うぅ～っ、道に迷ってようやく人に会えたのにお昼寝中なんて、しかも全然起きてくれないし。
もしも～し、起きてくださーい！」

「う～ん、後３０分～」

「長いですよ！？
じゃなくて、起ーきーてーくーだーさーいー！」

「んぁ～っ？」

少女が祐騎の傍で大声を挙げると、祐騎はようやく目を覚まして目の前の見覚えの無い少女を不思議そうな眼で見つめた。

「ふぅ～、ようやく起きてくれました～」

「えっと、君は？」

「はぅっ！？

そうでした、初めまして、私は今年このデュエルアカデミアに入学した、オベリスクブルー1年の紅龍小羽（くりゅうこはね）と言います、よろしくお願いします」

「あ、うん、こちらこそ。

それより、僕に何か用なの？（蓮さんと同じ名字だけど、偶然かな？）」

「はい！

実は、風で飛ばされたカードを追いかけていたら道に迷ってしまって、そんなときにアナタを見つけたので、出来れば道案内をお願いしたいと思いまして」

「それくらいならお安いご用だよ。

それじゃ、行こうか」

「はい！」

祐騎がそう言ってレッド寮の在る方に向かって歩き出すと、小羽は祐騎の後に着いて行った。

～レッド寮前～

祐騎が小羽を連れてレッド寮を目指している時、祐騎に会うために蓮がレッド寮を目指して歩いていた。

「まったく、授業が終わったからって直ぐに寮の方に戻るなんて、今日はタッグ用デッキの調整をしようと思ってたのに」

《そんなこと言って～、本当は一緒に居たいだけなくせに～》

「ち、違うわよ、そんなんじゃないって」

《ふ～ん、ここに来るまでず～っと落ち着かなかったくせに、説得力無いわよ～》

「う、うるさい！
いい加減にしないと、またぶっ飛ばすわよ！」

《それならむしろ、こっちからお願いしたいくらいよ！》

「・・・はいはい、私が悪かったわよ」

ティルが蓮をからかい、蓮はそんなティルにあきれながらレッド寮の前まで来ると、ちょうど祐騎が小羽を連れて森から出てレッド寮の近くに来ていた。

「あれ、蓮さん？
どうしたんですか、こんなところで」

「それは、こっちが聞きたいくらいよ。
授業が終わって直ぐに寮に戻ったって聞いてたから、てっきり部屋で寝てると思って来てみたんだけど、祐騎はどうしてこんなところに居るのよ？」

「いえ、今日はいい天気だったので森の木陰で昼寝しようと思って寝ていたら、この子に起こされまして、道に迷ったらしいのでここまで案内して来たんです」

祐騎はそう言って後に居た小羽を蓮に紹介しようと後を向くと、小羽は驚いたような顔で蓮の顔を凝視していた。

「えっと、私の顔になにか付いてる？」

「い、いえ！？
あ、あの、初めまして、蓮お姉さん！」

「は？
お姉さん？（まさか、この子もレイちゃんみたいな子なのかしら）」

「え、あ、あの、お父さんとお母さんから何も聞いてないんです

か？」

「聞くって、貴女みたいな人の事は誰からも聞いてないけど。
というか、お父さんとお母さんって貴女のよね、私と知り合いなの？」

蓮がそう言うと、小羽は困惑した様な顔をした後に、不安そうに蓮の顔を見ながら話しだした。

「あ、あの、お父さんとお母さんっていうのは私のというより、私達の両親です」

「は？私達？」

「はい、私の名前は、紅龍小羽と言います。
以後よろしくお願いします、蓮お姉さん」

「え、紅龍って、私と同じ名字、よね。
それで、私達の両親に、お姉さんって、ど、どういうこと？」

「・・・私は、2年前に紅龍のお家の養子になった、蓮お姉さんの義理の妹、なんです」

「っ！」

小羽が自分のことを蓮に話すと、蓮は始め何を言われているのか分からないといった顔をしていたが、だんだん話が理解して行き、次第に顔を青くして行き、小羽が自分が蓮の義理の妹だと告げると、小羽に背を向けて走り出して行ってしまった。

「あっ！
ま、待ってください！」

「ちょっと待って」

「は、離してください～！」

小羽が蓮を追いかけようとすると、祐騎が小羽の両肩を掴んで引き留めた。

「今、君が追いかけても蓮さんは話を聞いてくれないよ？」

「そ、それは、そうかもしれないですけど」

「だから、まずはどうして蓮さんが逃げ出したのかを考えよ？」

「・・・はい」

祐騎がそう言うと、小羽は蓮が走って行った方を見ながら渋々頷いて、祐騎と話をするために近くの木に腰かけた。

「あの、蓮お姉さんはどうして逃げて行ったんでしょうか？」

「多分、蓮さんと両親の関係が原因だと思うんだけど」

「・・・やっぱり、そうですよね」

「小羽ちゃんは、蓮さんの両親とはどんな感じだったの？」

祐騎がそう言って小羽に問いかけると、小羽は苦笑気味に笑顔を

浮かべて話しだした。

「とても良くしてくださいましたよ。
孤児院で初めて会った時からとても優しくしてくれて、引き取られてからも優しくて温かい人たちでした。
でも、お父さんとお母さんの部屋で偶然蓮お姉さんが映っている写真を見つけて、話を聞いてみたんですけど、何かいつも話をはぐらかされて、偶然聞けた話でようやく蓮お姉さんの名前とお父さん達がお姉さんを嫌ってるのが分かったんです」

「そっか、それで小羽ちゃんはどうしてここに来たの?」

「一番の目的は、もちろんデュエルの勉強です。
それと、できれば蓮お姉さんと仲良くなって、お父さん達と仲直りして貰いたいなと思ってたんですけど、どうしてこうなったんでしょうか?」

「多分、蓮さんはご両親が自分が居るのに養子を取ったことをいきなり知ったから、両親に自分が必要無いと思われていると思って混乱して、小羽ちゃんと一緒に居ると何をするか分からないから、頭を冷やすために距離を取ったんだと思うよ」

「あの、私嫌われちゃったんでしょうか?」

「それは無いよ、蓮さんは優しい人だから」

「それなら、良いんですけど。
でも、これからどうしたら良いんでしょうか?」

「それなら、大丈夫。

僕に考えが在るから」

「えっ、本当ですか！？」

「うん、だからちょっとここで待っててくれる？」

「はい、もちろんです！」

祐騎がそう言うと、小羽は沈んでいた顔が嘘の様に輝かせて祐騎にお礼を言って、蓮が走っていった方を見つめ、祐騎はそんな小羽から少し離れた場所まで行って、周りに人が居ないことを確認するとエールに蓮への伝言を伝えて貰うように頼んで、小羽の元に戻った。

～蓮の部屋～

蓮は小羽の話を聞いた後ブルー寮の自分の部屋まで全速力で走って行き、部屋に入るとそのままベッドにもぐりこんでしまった。

《蓮、大丈夫？》

「・・・」

《もう、あの子が何かしたわけじゃないんだし、話ぐらい聞いてみれば良いのに～》

「うるさい」

《蓮？》

「うるさいって言ってんのよ！
いつもいつもしつこく絡んできて、アンタは私の何だっていうのよ！」

ティルが蓮を心配して話しかけると、蓮は目に涙を溜めながらティルに向かって怒鳴ると、ティルは呆れた様に溜息を吐いて蓮に語りかけた。

《はぁ～っ。
あのね蓮、貴女は私のマスターで、大好きな人なんだから、元気になってほしいのは当然でしょう？》

「そんなの、私には関係ないわよ」

《それじゃ、祐騎君にも同じことが言えるの？》

「え？」

《貴女が逃げ出して今ここに居るんだから、貴女のために祐騎君があの子の面倒を見ることになってるでしょうね～》

「そ、それは」

《祐騎君なら蓮の行動から、心情まで理解してるでしょうけど、このままだと嫌われちゃうかもね～》

「っ！？」

ティルがいつものように蓮をからかうと、蓮は潜り込んだベッドから顔を出してティルを睨みつけた。

《ふふっ、冗談よ、じょーだん》

「え？」

《祐騎君がそんなことで蓮を嫌いになる訳ないじゃないの。今頃は、あの子にフォローの一つでも入れてるわよ～》

「そ、そうよね」

《でも、このままじゃダメなのは本当よ？このまま、あの子とのことを引き延ばしにしてると、祐騎君に負担ばっかりかけることになるんだから》

「それは、そうだけど、でもどうすればいいのか解らないし、今あの子に会ったら自分でもどうなるか解らないし」

《それは、問題ないと思うわよ。

ね～、エールちゃん》

ティルがそう言って窓の方を見ると、窓をすり抜けてエールが部屋に入って来た。

《気づいてたんですか、ティルさん》

《もっちろん、エールちゃんの事ならたとえ見えない場所に居ても、匂いで解るわ！》

《に、匂いってなんですか！？》

《それは、エールちゃんの良い匂いに決まってるじゃない！》

「・・・アンタはもう黙ってなさい」

エールが部屋に入ってきてから妙にテンションが高くなったティルをエールから遠ざけて、蓮はエールの方を向いた。

「それで、何の用なの？」

《えっと、マスターからの伝言を伝えに来たんですけど》

「伝言？」

《はい、内容はですね、ご両親の事は今は忘れて、小羽ちゃんとデュエルしてくれませんか、とのことです》

「あの子とデュエルを？」

《はい、マスターは蓮さんがご両親の事を気になさっているのは分かっているけど、小羽ちゃん自身には関係の無いことだから、これからどうやって付き合っていくかはデュエルして、小羽ちゃんのことを少しでも知ってから考えても遅くないと思いますよ、とも言ってましたよ？》

エールがそう言って蓮の顔を覗き込むと、蓮は少しの間考え込んでから立ち上がった。

「分かったわよ、とりあえずあの子とデュエルすれば良いんでしょ」

《あら、さっきまでの駄々っ子っぷりが嘘みたいに素直ね～。これも一重に愛故にってことね～》

「／／／だから、アンタは黙ってなさいって言ってるでしょうが！」

ティルがようやくいつも通りになった蓮をからかうと、蓮は照れ隠しにティルに怒鳴り、その二人をエールは苦笑しながら眺めていた。

そして、エールから祐騎の伝言を聞いた蓮は、ようやくいつもの調子に戻りデュエルの為の準備を始めて、その準備を終えると、蓮はティルとエールを連れて祐騎と小羽の居るレッド寮に再び向かって行った。

～レッド寮～

祐騎から蓮とデュエルして欲しいと言われた小羽は、蓮が自分とデュエルしてくれるのか不安だったが、祐騎の頼みに頷くと、不安そうにレッド寮の前で蓮が来るのを待っていた。

「本当に来てくれるんでしょうか？」

「大丈夫、心配ないから」

「あ、あの、お兄さんは蓮お姉さんと、どういう関係なんですか？」

「なんで、そんなこと聞くの？」

「なんだか、蓮お姉さんの事が全部解ってるみたいな事を言ってたのが、ちょっと気になりまして」

小羽がそう言って祐騎の方を見ると、祐騎は小羽から目を反らして頬を掻きながら応えた。

「ああ、うん、えっと、一応蓮さんの恋人やってるんだけど」

「ええーっ!?
こ、恋人って、お兄さんって蓮お姉さんの彼氏さんだったんですか!?」

「まぁ、一応は」

「そ、そうだったんですか。
あ、そういえば、お兄さんのお名前まだ聞いてませんでした!?」

「ああ、ごめん、僕はオシリスレッド2年の甲斐祐騎だよ」

「甲斐お兄さんですか。
あの、お姉さんとどうやって仲良くなったのか聞いてもいいですか?」

「うん、別に良いけど、それは又今度ね。
蓮さんが来たみたいだから」

「えっ!?」

小羽が祐騎から蓮に近づくための方法のヒントを聞こうとすると、祐騎がそんな小羽の後ろ側を指差すと、小羽は直ぐに振り返り祐騎の指差す方を見ると、その先には蓮が歩いてくる姿が有った。

「・・・来たわよ、祐騎」

「はい、来てくれてありがとうございます」

「お礼なんて良いわよ、元はといえば私の問題なんだから」

蓮はそう言うと、祐騎の側で蓮のことを不安そうに見つめていた小羽の方を向いた。

「そういう訳だから、よろしく」

「は、はい、よろしくお願いします！」

蓮は小羽の横を通り過ぎて距離を取って、デュエルディスクを構えると、小羽は蓮に向かい合う形でデュエルディスクを構えて、デュエルを開始した。

「「デュエル！」」

蓮　ＬＰ４０００

小羽　ＬＰ４０００

「私の先攻、ドロー！

私は手札からローンファイア・ブロッサムを召喚して効果を発動、ローンファイア・ブロッサム自身をリリースしてデッキからギガプラントを攻撃表示で特殊召喚。

さらに装備魔法、スーペルヴィスを装備しデュアル状態にして効果を発動！」

「ギガプラントの効果を発動して、墓地のローンファイア・ブロッサムを特殊召喚、さらに効果によりローンファイア・ブロッサム

をリリースしてデッキから、凛天使クイーン・オブ・ローズを攻撃表示で特殊召喚！
そして永続魔法、世界樹を発動し、カードを2枚伏せてターンエンド」

蓮　手札1枚

蓮がデッキの中でも主力の2体を1ターン目から召喚すると、小羽は自分の手札を見て考え込みながらデッキからカードをドローした。

「私のターン、ドロー！
蓮お姉さん、全力で行きますよ！
相手フィールド上にのみモンスターが存在することにより、手札からＢＦ－暁（あかつき）のシロッコ（攻／守２０００／９００）をリリース無しで攻撃表示で召喚します！」

「ブッ、ＢＦですって！？」

小羽が黒い翼の鳥獣族モンスターを召喚すると、蓮は驚いて声を挙げた。

「ふぇっ！？
蓮お姉さん、この子達のこと知ってるんですか！？」

「ま、まぁね、それよりも、どこでそのカードを手に入れたの？」

「えっと、話すと長くなるのでデュエルの後でも良いですか？」

「それは構わないけど・・・」

「それじゃ、続けますね。
私の場にＢＦと名の付くモンスターが存在することにより、手札からＢＦ－黒槍（くろやり）のブラスト（攻／守１７００／８００）とＢＦ－疾風（しっぷう）のゲイル（攻／守１３００／４００）を攻撃表示で特殊召喚します！」

「や、やっぱり、来たかぁ、流石は速攻のＢＦって所かしら」

小羽が一気にテューナーを含む3体のモンスターの召喚に成功すると、蓮は引きつった顔をしながら小羽の動きに注目した。

「そして手札から罠カード、デルタ・クロウ－アンチ・リバースを発動します！
このカードは私の場にＢＦと名の付くモンスターが3体以上存在しているとき、手札から発動することが出来、相手の魔法・罠カードの裏側表示のカードを全て破壊します！」

「残念ね、そのカードにチェーンして罠カード、威嚇する咆哮とサンダー・ブレイクを発動。
まずは、サンダー・ブレイクのコストで手札からグローアップ・バルブ（攻／守１００／１００）を墓地に送り、ＢＦ－疾風のゲイルを破壊するわ」

「うぅっ、破壊出来なかっただけじゃなくて、逆にこっちが破壊されるなんて」

蓮は小羽の発動させたカードに伏せカードをチェーンで発動させることで破壊を不発にして、逆に小羽の場のカードを破壊すると、

小羽は少し落ち込みながらデュエルを続けた。

「それと、威嚇する咆哮の効果でこのターン、貴女は攻撃宣言出来ないわよ」

「うぅっ、手札から魔法カード、ダーク・バーストを発動します！このカードの効果で、墓地の攻撃力１５００以下の闇属性モンスターの疾風のゲイルを手札に加えて、もう一度攻撃表示で特殊召喚して、効果を発動！

疾風のゲイルは１ターンに１度、相手の場のモンスターの攻撃力と守備力を半分にすることが出来ます！

この効果で、ギガプラントの攻守を半分にします！」

ギガプラント　（攻／守２４００→１２００／１３００→６００）

「やっぱり、そう来るわよね。

流石、ＢＦの代名詞といったところかしらね」

「さらに、レベル４の黒槍のブラストにレベル３の疾風のゲイルをチューニング！

皆を守る翼、今こそ漆黒の鎧を纏って、羽ばたく時！シンクロ召喚！

ＢＦ－アーマード・ウィング（攻／守２５００／１５００）！」

小羽の場のブラストとゲイルが飛び立つと、飛び立った２体を竜巻が包み込み、その竜巻の中から翼まで覆う黒い鎧を身に着けたモンスターが現われた。

「はぁ～っ、また厄介な奴を呼んだわね」

「この子のことまで知ってるんですか!?」

「ええ、そのカードの効果はよーく知ってるわよ、嫌というほど、ね」

「はぅっ、私はカードを1枚伏せてターンを終了します」

小羽　手札０枚

蓮が小羽の召喚したモンスターを知っているという言葉を聴くと、小羽は少し落ち込みながら自身のターンを終了した。

「私のターン、ドロー！

私のターンのメインフェイズを迎えたことにより、クイーン・オブ・ローズの効果が発動。

このカードの効果により、フィールド上で最も攻撃力の低いモンスターであるギガプラントを破壊するわ。

そして、植物族モンスターが破壊されたことで世界樹にフラワーカウンターを1つ乗せ、ギガプラントに装備していたスーペルヴィスが墓地に送られたことで、墓地からギガプラントを攻撃表示で特殊召喚」

「さらに、ギガプラントを再度召喚して効果を発動。

墓地のローンファイア・ブロッサムを特殊召喚して効果を発動、ローンファイア・ブロッサムをリリースしてデッキからポタニカル・ライオ（攻／守１６００／２０００）を攻撃表示で特殊召喚！

ポタニカル・ライオは自身の場の植物族モンスターの数×３００ポイント攻撃力をアップするわ」

ポタニカル・ライオ（攻１６００→２５００）

「そして、バトル！
クイーン・オブ・ローズで暁のシロッコを攻撃！
薔薇剪定斬（ローズ・トリマー）！」

「くぅっ」

小羽　ＬＰ４０００→３６００

蓮の場のクイーン・オブ・ローズが小羽の場の暁のシロッコを切り裂くと、小羽は攻撃の際に出来た衝撃でライフが削られた。

「さらに、ポタニカル・ライオでアーマード・ウィングを攻撃！」

「ふぇっ!?
アーマード・ウィングは戦闘では破壊されませんよ!?」

「ええ、解ってるわよ。
アーマード・ウィングは戦闘では破壊されず、戦闘によるダメージも０にして、戦闘を行った相手モンスターに、取り除くことで攻撃力を０にすることが出来る楔カウンターを乗せる効果がある、でしょ？」

「そ、そうです！
ですから、攻撃力が同じでもポタニカル・ライオだけ破壊されちゃいますよ!?」

「そうね。
だけど、その代わりに私の場の世界樹にフラワーカウンターが１つ乗るわ」

蓮の場のポタニカル・ライオがアーマード・ウィングに攻撃を仕掛けると、アーマード・ウィングの拳とポタニカル・ライオの牙が同時に当たるが、ポタニカル・ライオだけが破壊された。

「そして、バトルフェイズを終了して、世界樹に乗っているカウンターを２つ取り除いて効果を発動するわ。
世界樹はカウンターを２つ取り除いて効果を発動させた時、相手の場のカードを１枚破壊することが出来る！
この効果で、ＢＦ―アーマード・ウィングを破壊！」

「キャッ！？」

「カードを１枚伏せて、ターンを終了するわ」

蓮　手札０枚

「私のターン、ドロー！
うぅっ、私はモンスターをセットして、ターンエンドです」

小羽　手札０枚

小羽はドローしたカードを見て、困った様子でドローしたカードを伏せてターンを終了した。

「私のターン、ドロー！
私のターンのスタンバイフェイズを迎えたことで、クイーン・オブ・ローズの効果が発動。
効果により、クイーン・オブ・ローズ自身を破壊し、植物族モンスターが破壊されたことで、世界樹にカウンターを１つ乗せる」

「そして、ギガプラントの効果で墓地のクイーン・オブ・ローズを蘇生召喚して、バトル！
クイーン・オブ・ローズで守備モンスターを攻撃！」

クイーン・オブ・ローズが小羽の場にセットされたモンスターを切り裂くと、銀色の盾の様な体のモンスターが一瞬現われて消えていった。

「私の場のセットモンスターは、ＢＦ－銀盾（ぎんたて）のミストラルです！
銀盾のミストラルが破壊され墓地に送られたことにより、私はこのターンで受ける戦闘ダメージを１度だけ０に出来ます！」

「なら、攻撃しても無駄ね。
私はこのままターンを終了するわ」

蓮　手札１枚

「私のターン、ドロー！
ターンエンドです」

小羽　手札１枚

蓮がターンを終了して小羽のターンになったが、小羽はドローしたカードを見ると、そのまま何もせずにターンを終了した。

「私のターン、ドロー。
私のスタンバイフェイズを迎えたことで、クイーン・オブ・ローズの効果でクイーン・オブ・ローズ自身を破壊して、世界樹にカウンターを1つ乗せる」

「そして、ギガプラントの効果で墓地のクイーン・オブ・ローズを蘇生召喚して、バトル！
クイーン・オブ・ローズとギガプラントでダイレクトアタック！」

「今です！
罠カード発動！
ＢＦ－バックフラッシュを発動させます！」

「なっ、そのカードは！？」

蓮が小羽にダイレクトアタックを仕掛けると、小羽は最初のターンから伏せていたカードを発動させた。

「ＢＦ－バックフラッシュは墓地にＢＦと名の付くモンスターが5体以上存在するとき、相手モンスターのダイレクトアタック時に発動することが出来る罠カードです。
このカードが発動した時、相手の場のモンスターを全て破壊します！」

「クッ！」

小羽が罠カードを発動させると、小羽のデュエルディスクから5

つの光が現われて、蓮の場に向かって飛んで行き、その光が蓮の場にぶつかると蓮の場のモンスターが全て破壊された。

「流石はＢＦってところだけど、まだまだね。
植物族モンスターが破壊されたことで世界樹にカウンターが１つ乗るわ。
これで世界樹に乗っているカウンターは３つとなり、この３つのカウンターを全て取り除いて墓地のギガプラントを攻撃表示で特殊召喚！」

「うぅ～、折角破壊したのにまた戻ってくるんですか～！」

「まぁ、この再生力が植物族の本領だし。
それじゃあ、私はカードを１枚伏せてターンを終了するわ」

蓮　手札１枚

「私のターン、ドロー！
私は手札から魔法カード、闇の誘惑を発動します！
このカードはデッキからカードを２枚ドローした後、手札から闇属性モンスター１体をゲームから除外します！」

「デッキからカードを２枚ドロー！
よし、手札から闇属性モンスターのＢＦ－激震（げきしん）のアブロオロス（攻／守２６００／１８００）をゲームから除外！
さらに、手札からＢＦ－極北（きょくほく）のブリザード（攻／守１３００／０）を攻撃表示で召喚します！」

小羽が手札から薄い水色の体に翼の先端が黒い鳥のモンスターを

召喚すると、召喚されたモンスターは小羽のデュエルディスクを嘴で突いて、墓地からカードを1枚取り出した。

「BF－極北のブリザードが召喚に成功した時、墓地のレベル4以下のBFと名の付くモンスター1体を守備表示で特殊召喚することが出来ます！

このカードの効果で、私は墓地のBF－黒槍のブラストを守備表示で特殊召喚します！」

「そして、レベル4の黒槍のブラストにレベル2の極北のブリザードをチューニング！

漆黒の翼、皆を守る力をその手に、今こそ飛びたて！シンクロ召喚！

来て、BF－アームズ・ウィング（攻／守2300／1000）！」

小羽の場の2体のモンスターが竜巻に包まれ、その竜巻が収まると銃剣を手に持った鳥獣型のモンスターが姿を現した。

「行きますよ！

BF－アームズ・ウィングでギガプラントを攻撃！

ブラック・チャージ！」

「甘いわね、罠カード発動！

フローラル・シールド！

このカードは相手モンスターの1体の攻撃を無効にしてデッキからカードを1枚ドローすることが出来る！

このカードの効果で、アームズ・ウィングの攻撃を無効にしてデッキからカードを1枚ドローするわ」

「こっちの方が攻撃力が低い状態で攻撃を中止するなんて、どうして・・・」

蓮が伏せていたカードを発動させると、ギガプラントに向かって攻撃を仕掛けようとしたアームズ・ウィングの目の前に大量の花びらが現われ、アームズ・ウィングの攻撃を阻止した。

「残念ね、攻撃力の低いＢＦで攻撃を仕掛けるんだから、手札に有るんでしょ？
ＢＦ－月影（げつえい）のカルート（攻／守１４００／１０００）が」

「うぅっ、こんなに行動を読まれたのは初めてですよ～。
私はこれでターンを終了します」

小羽　手札１枚

「私のターン、ドロー。
私は墓地のグローアップ・バルブの効果発動。
グローアップ・バルブはデュエル中に1度だけデッキの一番上のカードを墓地に送ることで墓地から特殊召喚することが出来る！
この効果で、デッキの一番上のカードを墓地に送り、墓地のグローアップ・バルブを特殊召喚！」

蓮はデッキの一番上にあったフェニキシアン・クラスター・アマリリスを墓地に送って、墓地のグローアップ・バルブを召喚した。

「レベル６のギガプラントにレベル１のグローアップ・バルブをチューニング！
冷たい炎が世界の全てを包み込む、漆黒の花よ、開け！シンクロ

召喚！
咲き乱れよ、ブラック・ローズ・ドラゴン！」

「ブラック・ローズ・ドラゴンの効果発動！
ブラック・ローズ・ドラゴンがシンクロ召喚に成功した時、フィールド上に存在する全てのカードを破壊する！
焼き尽くせ、ブラック・ローズ・ガイル！」

蓮がブラック・ローズ・ドラゴンを召喚し効果を発動させると、フィールド全体に黒い炎が放たれ、フィールド上のカードを全て破壊した。

「フィールドにＢＦが居なければカルートの効果は使えないでしょ？」

「・・・蓮お姉さん、そのドラゴンは一体？」

「デュエルの後で貴女の話を聞く時に教えてあげるわ。
それじゃ、デュエルを再開するわよ？」

「あ、はい！」

蓮がブラック・ローズ・ドラゴンを召喚して効果が発動する前に、小羽のエクストラデッキの中の１枚が小さく光を放ち、それを見た小羽が蓮にブラック・ローズ・ドラゴンのことを聞くと、蓮は予想していた様に小羽に言葉を流した。

「私はこのターン、まだ通常召喚を行っていない。
よって、手札からローズ・ウィッチ（攻／守１６００／１０００）を攻撃表示で召喚！」

「バトル！
ローズ・ウィッチでダイレクトアタック！
ローズウィップ！」

「くぅっ！」

小羽　ＬＰ３６００→２０００

蓮が召喚したモンスターが両手の蔦で出来た鞭で小羽に向かって攻撃すると、小羽の直前でその鞭は地面を直撃して、小羽のライフを削った。

「私はこれでターンを終了するわ。
そして、エンドフェイズに墓地のグローアップ・バルブを除外して、墓地からフェニキシアン・クラスター・アマリリスを守備表示で特殊召喚！
私のターンはこれで終了よ（さて、これからどう出てくるかしらね）」

蓮　手札２枚

蓮がターンを終了すると、小羽は顔を俯かせた状態でデッキの上に手を置いた。

「やっぱり、蓮お姉さんは強いですね」

「なによ、いきなり。

まさか、サレンダーするとか言い出さないわよね？」

「違います！
蓮お姉さんが私が思っていたよりも強くて、とっても嬉しいんです！
私のターン、ドロー！」

蓮が小羽の呟きに応えると、小羽は目を輝かせて嬉しそうに顔を上げてデッキの上に乗せた手で、そのままカードをドローすると、ドローしたカードが一瞬光を放った。

「手札から魔法カード、光の護封剣を発動させます！
このカードの効果で蓮お姉さんは3ターンの間攻撃することが出来ません！」

「まさか、ここで護封剣を引くとはね」

小羽がドローしたカードを発動させると、蓮の場に光の剣が現われて蓮の場のモンスターの動きを封じた。

「まだまだ、負けませんよ！」

「フフッ（思ってたよりも、楽しくなってきたわね）」

小羽の言葉と態度に釣られて、蓮もいつもより楽しそうにデュエルを続けた。

第二十四話　黒羽の来訪者（前編）（後書き）

今回の話、どうだったでしょうか？

タイトルで丸解りですが、新しいオリキャラの使うデッキはＢＦデッキになりました。

それから、後編で新しい精霊のオリキャラを出します。

それでは、次回はもう少し早く更新出来るように努力しますので、これからもこの作品をよろしくお願いします。

第二十五話　黒羽の来訪者（後編）（前書き）

この話は、前話の続きになります。

今回、新しいオリキャラの精霊が出てきます。

後、今回原作で出たシンクロモンスターのシンクロ召喚時のセリフをオリジナルに変えているので、元に戻した方が良ければ感想に書き込んでください。

それでは、第二十五話始まります。

第二十五話　黒羽の来訪者（後編）

～レッド寮前～

今年の新入生としてデュエルアカデミアにやって来た、蓮の義理の妹と名乗る小羽と蓮のデュエルは蓮の召喚したブラック・ローズ・ドラゴンの効果でフィールド上の全てのカードが破壊され、その後に召喚された蓮のモンスターのダイレクトアタックを受けた小羽が、自身のターンのドローで光の護封剣を引いて発動させた所から、二人はデュエルを再開した。

小羽　ＬＰ２０００　手札１枚

蓮　ＬＰ４０００　手札２枚

「私はこれでターンを終了します！」

小羽　手札１枚

「私のターン、ドロー。
私はフェニキシアン・クラスター・アマリリスを攻撃表示に変更して、カードを１枚伏せてターンエンド」

蓮　手札２枚　護封剣１ターン経過

「私のターン、ドロー！

私は手札から魔法カード、強欲な壺を発動！
このカードの効果でデッキからカードを2枚ドローします！
よし、私は手札からＢＦ－鉄鎖（てっさ）のフェーン（攻／守５００／８００）を攻撃表示で召喚！」

「ＢＦ－鉄鎖のフェーンは相手プレーヤーにダイレクトアタックすることが出来ます！
バトル！
鉄鎖のフェーンでダイレクトアタック！」

「クッ！」

蓮　ＬＰ４０００→３５００

「さらに、鉄鎖のフェーンの効果発動！
鉄鎖のフェーンは相手プレーヤーにダメージを与えた時、相手の場のモンスター1体の表示形式を変更することが出来ます！
この効果で、蓮お姉さんの場のフェニキシアン・クラスター・アマリリスを守備表示に変更します！」

小羽が召喚した顔を布で隠し、両手に鎖を持ったモンスターが蓮に攻撃を仕掛けると、蓮に攻撃を仕掛けた鎖がそのまま蓮の場のモンスターに絡み付いて動きを止めた。

「私はカードを1枚伏せてターンを終了します！」

小羽　手札1枚

「私のターン、ドロー！
私は手札から魔法カード、フレグランス・ストームを発動！
このカードは自分の場の植物族モンスターを1体を破壊して、デッキからカードを1枚ドローして、ドローしたカードが植物族モンスターだった場合、もう一度ドローすることが出来る！」

「私はこのカードの効果で、私の場のフェニキシアン・クラスター・アマリリスを破壊してデッキからカードをドロー！
ドローしたカードは植物族モンスターの桜花の王女、よってデッキからさらにカードをドローする！」

「そして、フェニキシアン・クラスター・アマリリスが破壊されたことにより、相手に８００ポイントのダメージを与える！
スキャッター・フレイム！」

「はぅっ！？」

小羽　ＬＰ２０００→１２００

蓮が魔法カードの効果で自分の場のモンスターを破壊して、デッキから2枚のカードをドローし、さらに破壊したモンスターの効果でダメージを受けた小羽は驚いた様な声を挙げた。

「私はエンドフェイズに墓地のフェニキシアン・クラスター・アマリリスの効果を発動！
墓地のポタニカル・ライオを除外して自身の効果で、私の場に守備表示で特殊召喚してターンを終了するわ」

蓮　手札４枚　護封剣２ターン経過

「私のターン、ドロー！
私の場にＢＦと名の付くモンスターが存在することにより、手札からＢＦ－漆黒（しっこく）のエルフェン（攻／守２２００／１２００）をリリース無しで召喚して効果を発動します！
漆黒のエルフェンは召喚に成功した時、相手の場のモンスター１体の表示形式を変更することが出来ます！
このカードの効果で、蓮お姉さんの場のフェニキシアン・クラスター・アマリリスを攻撃表示に変更します！」

「えっ？（守備力０のアマリリスを攻撃表示にするなんて、どういうつもりなの？）」

「さらに、手札から速攻魔法、スワローズ・ネストを発動します！」

「なっ！？」

小羽が召喚したモンスターの効果で、蓮の場の守備力が０のモンスターを攻撃表示に変更したことを蓮が不思議がっていると、小羽はさらに手札から魔法カードを発動させ、そのカードを見た蓮は驚きの表情を浮かべてから、すぐに納得した表情に変った。

「速攻魔法、スワローズ・ネストは自分の場の鳥獣族モンスター１体をリリースすることで、デッキからリリースしたモンスターと同じレベルの鳥獣族モンスターを特殊召喚します！
このカードの効果により、私の場のレベル２の鉄鎖のフェーンをリリースして、デッキから２体目の銀盾のミストラルを特殊召喚します！」

「そして、レベル６の漆黒のエルフェンにレベル２の銀盾のミストラルをチューニング！
皆の痛みを翼に乗せて、今こそその力を解き放って！シンクロ召喚！
羽ばたいて、ブラックフェザー・ドラゴン（攻／守２８００／１６００）！」

「クッ！（やっぱりこの子のところに来てたのね、ブラックフェザー・ドラゴン）」

小羽の場の銀盾のミストラルが２つの光の輪になり、その輪の中に漆黒のエルフェンが入ると、漆黒のエルフェンは６つの星に変り、その星が光の線で結ばれると眩しい光が周囲を包み込み、その光が収まると黒い翼を持ち赤い眼をしたドラゴンが姿を現した。

「バトルです！
ブラックフェザー・ドラゴンでフェニキシアン・クラスター・アマリリスを攻撃！
ノーブル・ストリーム！」

「くぅっ！」

蓮　ＬＰ３５００→２９００

「・・・フェニキシアン・クラスター・アマリリスが破壊された時、相手に８００ポイントのダメージを与える。
だけど、そうはいかないでしょ？」

「はい、フェニキシアン・クラスター・アマリリスの効果にチェーンしてブラックフェザー・ドラゴンの効果が発動します！
ブラックフェザー・ドラゴンはコントローラーへの効果ダメージが発生した時、このカードに黒羽カウンターを１つ乗せることで、効果ダメージを０にします！
ダメージドレイン！」

蓮の場のフェニキシアン・クラスター・アマリリスが小羽の場のブラックフェザー・ドラゴンの攻撃によって破壊されると、フェニキシアン・クラスター・アマリリスの効果が発動して小羽に効果ダメージを与えようとするが、その効果ダメージが小羽に届く前にブラックフェザー・ドラゴンの口の中に吸い込まれて小羽に届くことは無くなり、その代わりにブラックフェザー・ドラゴンの両方の翼の一番下の部分が黒く変った。

「そして、ブラックフェザー・ドラゴンは黒羽カウンター１つにつき７００ポイント攻撃力がダウンします」

ブラックフェザー・ドラゴン　（攻２８００→２１００）

「さらに、ブラックフェザー・ドラゴンのもう１つの効果を発動します！
ブラックフェザー・ドラゴンは１ターンに１度自身に乗っている黒羽カウンターを全て取り除くことで、相手の場のモンスター１体の攻撃力を取り除いた黒羽カウンターの数×７００ポイントダウンさせ、ダウンした攻撃力と同じ数値のダメージを相手に与えます！」

「この効果により、ブラックフェザー・ドラゴンに乗っている黒羽カウンター１つを取り除いて、蓮お姉さんの場のローズ・ウィッ

チの攻撃力を７００ポイントダウンさせ、蓮お姉さんに７００ポイントのダメージを与えます！
ブラック・バースト！」

「うぅっ！」

ブラックフェザー・ドラゴン　（攻２１００→２８００）

ローズ・ウィッチ　（攻１６００→９００）

蓮　ＬＰ２９００→２２００

ブラックフェザー・ドラゴンが自身に取り込んだ効果ダメージを黒い息吹として蓮の場のローズ・ウィッチに向けて放つと、その息吹によってローズ・ウィッチは体の植物部分が少し枯れてしまい、その息吹の余波を受けて蓮のライフも削られた。

「私はこれでターンを終了します！」

小羽　手札１枚

「私のターン、ドロー！
流石はＢＦってところね。
けど、このターンで終わりにさせて貰うわ！」

「の、望むところです」

「私は、ローズ・ウィッチの効果によりローズ・ウィッチを２体

分のリリースとして使用し、手札から椿姫ティタニアルを攻撃表示でアドバンス召喚！」

《ウフフッ、ようやく出番ね？
さぁ、貴女の悲鳴を聞かせて頂戴！》

「・・・ったく、この変態植物が」

《その言葉、私にとっては褒め言葉ね！》

「褒めてないわよ！」

「あ、あの～？」

「あっ、いや、これは（しまった、この子がブラックフェザー・ドラゴンを使うからって、精霊が見えるって決まった訳じゃ無いのに！）」

ティルがいつもの調子で現われると、蓮は小羽の事を忘れてティルを怒鳴り、それを見ていた小羽が蓮に声を掛けことで蓮は小羽の事を思い出して焦り出した。

「あの、そのモンスターさんは、もしかして精霊さんですか？」

「え？
あ、貴女、コレが見えるの！？」

《ちょっと～、コレは無いんじゃないの～、コレは》

「アンタは黙ってなさい！

それで、改めて聞くけど、貴女もカードの精霊が見えるの？」

「あ、はい、見えますし、一応、私も精霊の宿ったカード持ってますから」

「それって、ブラックフェザー・ドラゴンのこと？」

「いえ、この子もですけど、他にもう一人いるんです。
今はちょっとはぐれてしまって、ここには居ないんですけど」

「そうなんだ。
悪かったわね、いきなり中断させて」

「い、いえ、大丈夫です！」

「そう、なら再開するわね？」

「はい！」

小羽が精霊を見ることが出来ることを知ると、蓮は自分のせいで中断していたデュエルを再開した。

「私は手札から速攻魔法、偽りの種を発動！
このカードは、手札からレベル２以下の植物族モンスター１体を特殊召喚することが出来る！
このカードの効果で、私は手札からレベル２の植物族チューナーモンスター、桜花の王女を攻撃表示で特殊召喚！」

「さらに、レベル８の椿姫ティタニアルにレベル２の桜花の王女をチューニング！

草木を総べし姫よ、今こそその真の姿を現し、新たな花を咲かせよ！シンクロ召喚！
君臨せよ、椿女帝ティタニアル！」

桜花の王女が2つの光の輪に変りティルがその中を潜ると、ティルは8個の星に変りその星を光の線が貫くと辺りに光が溢れ、その光が収まると蓮の場に椿の花びらが舞い、その花びらの中心に椿女帝の姿に変ったティルが現われた。

「レ、レベル10のシンクロモンスター！？
け、けど、そのモンスターさんの攻撃でも私のライフを削りきることは出来ませんよ！（私のセットカードは、相手モンスターの攻撃を無効にして無効にした数値分のライフを回復するドレイン・シールド、もし攻撃力が高いモンスターが出てきてもこのターンは耐えられる）」

「このモンスターだけなら、ね。
私は、椿女帝ティタニアルのシンクロ素材となった桜花の王女をゲームから除外して効果を発動！
桜花の王女は植物族シンクロモンスターのシンクロ素材となった時、このカードを除外することで墓地の植物族モンスター1体を守備表示で特殊召喚することが出来る！」

「このカードの効果で、私は墓地から凛天使クイーン・オブ・ローズを守備表示で特殊召喚！
さらに、椿女帝ティタニアルの効果を発動！」

「椿女帝ティタニアルは、1ターンに1度自分フィールド上の植物族モンスター1体をリリースすることで、リリースしたモンスターの攻撃力の半分の数値をこのカードに加えることが出来る！

このカードの効果により、桜花の王女の効果で特殊召喚したクイーン・オブ・ローズをリリースして、クイーン・オブ・ローズの攻撃力２４００の半分、１２００ポイントを椿女王ティタニアルに加える！」

《ああっ、やっぱり良いわぁ～、この効果を使った時のこの感覚！出来れば本物のローズに対して使いたいわね～》

「流石に可愛そうだから、本当にしないでよね！？」

蓮が椿女帝の効果を発動させると、ティルは桜花の王女の効果で召喚されたクイーン・オブ・ローズに自身の蔦を絡ませると、その蔦でクイーン・オブ・ローズからエネルギーを吸収し、吸収されたクイーン・オブ・ローズは羽の薔薇が枯れていき、最後には全てのエネルギーを吸収されて墓地に送られた。

椿女帝ティタニアル　（攻３３００→４５００）

「そして、手札から速攻魔法、サイクロンを発動して光の護封剣を破壊！」

「くぅっ」

「そして、バトル！
椿女帝ティタニアルでブラックフェザー・ドラゴンを攻撃するわ！」

「させません！
罠カード、ドレイン・シールドを発動します！

このカードの効果で、蓮お姉さんのモンスターの攻撃を無効にして、無効にしたモンスターの攻撃力分のライフを回復します！」

「残念ね、ドレイン・シールドにチェーンして椿女帝の効果を発動！

椿女帝ティタニアルは1ターンに1度、自身の墓地から植物族モンスター1体を除外することで、相手が発動した魔法、罠、モンスター効果の発動を無効にして破壊する！

私は、墓地のクイーン・オブ・ローズを除外して、ドレイン・シールドの効果を無効にして破壊！

サクリファイス・サンクチュアリ！」

《はいは～い、毎度お馴染みのサクリファイス・サンクチュアリ～っと》

小羽が発動させた罠カードがティルの攻撃を防ぐ前に、ティルの腰辺りから伸びた蔦によって罠カードを締め付けて破壊すると、ブラックフェザー・ドラゴンの周囲を覆っていた虹色の壁も同時に消えてしまった。

「そ、そんな！？」

「ドレイン・シールドの効果が無効になったことでバトルを再開！

カメリア・ストライク！」

《フッ、これで、お終いっと！》

《クワァァァッ！！》

「ブラックフェザー・ドラゴン！？

キャアッ！！」

小羽　ＬＰ１２００→０

小羽が発動させた罠カードを無効にすると、ティルは手に持った剣をブラックフェザー・ドラゴンに向かって振るうと、椿と薔薇の花びらを纏った衝撃波がブラックフェザー・ドラゴンに襲い掛かり、花びらがブラックフェザー・ドラゴンの周りを囲むと、ブラックフェザー・ドラゴンは苦しそうに声を挙げてその姿を消し、小羽は衝撃波の余波を受けて驚いて尻餅を着いて倒れた。

「ちょっと、大丈夫！？」

「はぅ～、だ、大丈夫です～、ちょっと驚いただけですから」

「ほら、手貸しなさい」

「あ、ありがとうございます～」

ティルの攻撃でデュエルが終わり、小羽が倒れたのを見ると蓮は慌てて小羽の側に寄ると、蓮は小羽の手を取って立ち上がらせた。

「良いデュエルでしたよ、二人とも」

「ありがと、祐騎」

「はぅっ！？

そ、そんな、私なんて、完全に蓮お姉さんに手の内を読まれてましたから、全然ですよぅ」

「あ～、それは気にしないで、今回のデュエルでの私の読みは反則やカンニングの類だから、貴女は十分に強いわよ」

「そ、そうなんですか？」

「そうよね、祐騎」

「はい。

というか、今回のデュエルで蓮さんが以前言っていた意味がようやく解りましたよ。

事前知識の無い僕が相手をしてたら負けてましたね」

「それはやってみないとわからないけど、祐騎の言う通り普通に戦ったら貴女は十分に強いんだから、もっと自信を持ちなさい」

「は、はい！」

デュエルを終えた蓮と小羽に祐騎が労いの言葉を掛けると、小羽は蓮に自分の行動を読まれて完全に負けていたことに落ち込んでしまい、そんな小羽を見て蓮と祐騎は小羽を励ました。

「あ、あの、蓮お姉さん、早速なんですけど、この子達の事どうして知っていたんですか？

私自身この子達に出会ったのは、つい1月前なのに、どこでこの子達のこと知ったんですか？」

「・・・それは、その」

「僕から説明しますよ、蓮さん」

「祐騎？」

「まだ振り切れてないのに無理したら駄目ですよ、ね？」

「・・・うん、ありがとう」

「あ、あの、私何か悪いことしたんでしょうか！？」

「ううん、小羽ちゃんは何も悪くないよ。
ただ、これから話すことは蓮さんの心の傷に関わることだから、
心して聞いてね」

「は、はい！」

小羽からＢＦの事を知っていた事を聞かれた蓮がその理由を話そうかと悩んでいると、祐騎が蓮の代わりに話すと言って蓮の手を握り、蓮を落ち着かせてから祐騎は小羽に蓮から聞いた異世界から今の体に意識だけ乗り移った事や、その世界ではこの世界やこの世界の未来に当たる事がアニメや漫画になっており、ＢＦの事を知っているのはそれが原因であり、その事を両親に伝えた事で両親から避けられている事を話した。

「と、いうわけなんだけど、解ってくれたかな？」

「・・・」

「小羽ちゃん？」

「本当、なんですか、その話？」

「信じられないのが普通でしょうけど、本当のことよ。
解った？
これが、お父さん達が私を避ける理由よ。
解ったら、貴女も私なんかに関わらず、普通の学園生活を楽しんで「・・・嫌です」え？」

祐騎から蓮の事を聞いた小羽が信じられないという顔で蓮の方を見ると、蓮は自嘲気味な無理やりの笑顔を浮かべながら小羽に自分とは関わらずにいた方が良いと言うが、小羽は顔を俯かせた状態で蓮の言葉を否定した。

「そんなの、嫌です！
お父さん達の気持ちは解りますけど、話の通りだと蓮お姉さんは自分の意思で来た訳じゃないのに、そんなの悲しすぎます、グスッ」

「な、なんで、そう思うの？」

「だって、グスッ、さっきから、蓮お姉さん、辛そうな顔、してますし、グスッ、私にとって、蓮お姉さんは、今の蓮お姉さん以外居ません、から、私は、私は」

「・・・もう良いわよ、ありがとう。
それとごめんね、さっきはあんな事言って。
だから、もう我慢しないで、ね？」

「ヒック、グスッ、お姉さんっ！」

小羽が泣くのを我慢しながら言った言葉を聞くと、蓮はそんな小

羽を抱きしめながら先ほど自分に関わるなと言ったことを謝ると、小羽は蓮に抱きしめられながら暫くの間泣き続けた。

そして、小羽が落ち着くまでの間、蓮は小羽を抱きしめ続け、祐騎は二人の邪魔にならないように少し離れた場所まで移動し、小羽が落ち着いたところで話を再開させた。

「あ、あの、ごめんなさい、私のせいで話を中断してしまって」

「ううん、大丈夫だよ。
それよりも、蓮さんのことを受け入れてくれてありがとう。
蓮さんって、こう見えて後ろ向きな性格してるから、一人でも蓮さんのことを受け入れてくれる人が増えてくれると、蓮さんの心の支えになるから嬉しいよ」

《そうそう、蓮はネガティブというより、紙メンタルだしね！》

「・・・悪かったわね。
どうせ、私のメンタル面打たれ弱いですよ～だ」

《ああっ、蓮さんいじけないでくださいよ～！？》

祐騎とティルの言葉で蓮が落ち込むと、いままで祐騎のデッキの中に居たエールが出てきて蓮を立ち直らせようとすると、小羽は驚いた様にエールを見つめた。

「も、もしかして、アナタも精霊さんですか！？」

《あ、はい。

ご挨拶が遅れて申し訳ありません。
私は、ガーディアン・エアトスの精霊のエールと言います、以後よろしくお願いします》

「あ、はい、こちらこそよろしくお願いします！
それで、エールさんもお姉さんの精霊さんなんですか？」

「違うわよ、エールは祐騎の精霊よ」

「はぅっ！？
お兄さんも精霊さんが見えてたんですか！？」

「いや、私達の会話に普通に入ってきてるんだから、見えてるに決まってるじゃない。
それよりも、そろそろ貴女がどこでそのカードを手に入れたのか教えて貰える？」

「は、はい！
えっと、この子達はこのデュエルアカデミアの入試試験を終えて、直ぐの夜に夢にこの子達が出てきまして。
その夢を見た次の日に、その夢の中でこの子達が出てきた場所に行ってみたら、ブラックフェザー・ドラゴンの石版とこの子達のカードが在って、石版に触れてみたら石版がいきなりカードになってしまって」

「そのとき一緒に居た私のもう一人精霊がこの子達が私を選んでくれたって、言うのでそれからこの子達を使ってるんです」

小羽がＢＦのカードを手に入れた経緯を話すと、蓮は納得した表情をして頷いた。

「なるほど、この世界なら不思議じゃないわね」

「そういえば、小羽ちゃんのもう1人の精霊ってどういうカードの精霊なの？」

「それはですね、マリナって言う名前のブｒ《やっと見つけたよ、小羽！》あっ、マリナ！？」

《も～うっ、いきなり姿が見えなくなったから心配してたんだからね！》

「それはこっちのセリフだよ！
少し眼を離した隙に、マリナの方がどっか行っちゃったんじゃない！」

「ね、ねぇ、もしかして、貴女のもう一人の精霊って、ソレ？」

「あ、はい、そうですよ。
ほら、マリナ挨拶して」

《はーい！
どうも～、ブラック・マジシャン・ガールの精霊のマリナでーす。
二人とも、久しぶりだね！》

小羽が自分の精霊について話をしようとすると、近くの森の中からブラック・マジシャン・ガールの精霊が現われ、小羽はその精霊の事をマリナと呼んで祐騎達に挨拶をさせると、マリナは祐騎達に以前合った様な口調で自己紹介した。

「ひさしぶりって、まさか貴女、文化祭の時のブラック・マジシャン・ガール？」

《そうだよー。
いや～、他の精霊から聞いて楽しそうだからこの島に遊びに来てたら、小羽が見せてくれた写真の人が居るんだもん、吃驚したよー》

「この子が、私がデュエルアカデミアに居ることを知ってたのは、そういうことだったのね（アニメじゃあの後のことは判らなかったから、変っているかどうかは判らないわね）」

「はい、お父さん達は蓮お姉さんの事は何も教えてくれませんでしたから、マリナの話を聞いてここに来ようと思ったんです」

「それにしても、あの人達がよく私の居るここへの入学を許したわね」

「それは結構簡単でしたよ？
お父さん達は私に蓮お姉さんの事を教えたくないみたい、私がここに入学するのを止める理由を話せないんですから、私を止めるなんて出来ません！」

「でも、それなら他の地域のアカデミアに入れって言われ無かった？」

「言われましたけど、私はここが良いって押し切りました！」

蓮は小羽が両親にデュエルアカデミアへの入学を認めたことが気になって小羽に理由を聞いてみると、小羽は胸を張ってその理由を応えた。

「そ、そうだったの。
それと、ブラック・マジシャン・ガールの精霊が居るってことは貴女のデッキにも入ってるのよね、そのカードが」

「はい、入ってますよ？」

蓮が小羽のデッキにＢＭＧのカードが入っていること聞いてみると、小羽はデッキの中からＢＭＧの全身が描かれているカードを取り出して蓮と祐騎に見せた。

「このカード、どこで手に入れたの？
確か、このカードってデュエルキングしか持ってないって聞いてたけど」

「え、普通にパックを買ったら当たりましたけど？」

「あぁ、それは多分絵違いのカードね。
校舎の展示室に在るデュエルキングのレプリカデッキを見てみれば判ると思うけど、デュエルキングのデッキに入っているブラック・マジシャン・ガールのカードとは絵が違うのよ。
他のカードにも何種類か在るみたいだから、デュエルキングのデッキに入っているのが１枚だけの絵違いカードってことだと思うわ」

「そうなんですか」

祐騎が小羽にＢＭＧのカードをどこで手に入れたのかを聞くと、小羽は普通に手に入れたと言い、蓮がそのカードの事を祐騎に説明した。

「でも、ＢＦデッキに魔法使い族のブラック・マジシャン・ガールって合わないんじゃない？
闇属性だから他の属性よりかはマシでしょうけど」

「それは、そうなんですけど、マリナもＢＦも大切なカード達ですから、どちらか１つは選べなかったんです」

「まぁ、どんなデッキを使うかは人それぞれだから私にはこれ以上は何も言えないけど、貴女にとっての最高のデッキにしなさいよ」

「はい、お姉ちゃん！」

「お、お姉ちゃん！？」

「あ、す、すみません！
嬉しくって、つい」

小羽が蓮のことを今までの呼び方とは違う呼び方で呼んだため、蓮が驚いて声を挙げると、小羽は直ぐに謝り、蓮はそんな小羽を見て苦笑した。

「謝らなくていいわよ、ちょっと驚いただけだから」

「そ、それじゃ、これからはお姉ちゃんって呼んでも良いですか？」

「ええ、良いわよ、これからよろしくね小羽」

「はい、お姉ちゃん！」

蓮が小羽の名前を言うと、小羽は笑顔で蓮に抱きついた。

～精霊サイド～

蓮達が話をしている時、少し離れた場所で精霊達も話をしていた。

《やっほー、元気だったー？》

《ええ、元気よ～》

《まさか、貴女が小羽さんの精霊だとは思いませんでしたよ》

《えへへー、吃驚したでしょ？
けど、私も吃驚したんだよー、あの怖いお姉さんが小羽のお義姉さんだったなんて》

《ふふっ、仕方ないわよ～、好きな人にちょっかい出されて平気な人なんていないでしょ？》

《そうだよねー。
それにしても、凄い格好だね》

マリナがそう言ってエールの方を見ると、そこには頭にデフォルメされたブラック・ローズが停まり、腕にスターダストとブラックフェザー・ドラゴンを抱いたエールの姿が在った。

《ううっ、どうして皆私に寄って来るんですか?》

《・・・キュ》

《クゥ?》

《ガゥッ》

《あぁ良いわね~、私もエールちゃんに抱きつきたわ~》

《変な事言ってないで助けてくださいよ!?》

《あはははっ、やっぱり面白いねー!
うん、これから、楽しくなりそうだよー》

蓮達の話が終わる頃には、精霊達も仲良くなっていた。

こうして、蓮にとって色々有った長い一日は終わった。

第二十五話　黒羽の来訪者（後編）（後書き）

今回の話どうだったでしょうか。

今回出したブラマジガールの精霊は、普通のＢＦデッキだと完全なガチデッキになってしまいそうだったので、強さの調整のために他のカードを入れようと思っていたので、以前感想で出して欲しいと言われて丁度良いので登場させました。

それから、小羽の詳細な設定はキャラ設定の方に追加しておくので、気になった人は見てみてください。

あと、ついでに今まで書いてなかった祐騎の姉の優奈の設定も一緒に追加しておくので見てみてください。

それでは、次回は祐騎ＶＳ恐竜のデュエルにしようと思っているので、次回もよろしくお願いします。

第二十六話　一陣の風を纏う守護者（前書き）

今回は、祐騎と剣山のデュエルになります。

それと、今回から祐騎のデッキを変更します。

それでは、第二十六話始まります。

第二十六話　一陣の風を纏う守護者

～祐騎の部屋～

蓮の義妹である小羽との遭遇から数日が経ったある日、蓮は小羽を連れて祐騎の部屋でデッキ調整や1年の時に起こった出来事を話したりしていた。

「ほぇ～、そんなことが有ったんですか～」

「ええ、しかも地縛神はあと1体は確実に残ってるし、今年は今年で色々と厄介事が有るはずだから気をつけないと」

「もし、何か有った時は私もお手伝いします！」

「ええ、頼りにしてるわ。
お願いね、小羽」

「はい、お姉ちゃん！」

蓮の言葉に小羽が嬉しそうに応えている側で、祐騎は自分のデッキと手持ちの他のカードを並べて難しそうな顔をしていた。

「う～ん、コレで良いかな？」

「祐騎、さっきから難しい顔してカードとにらめっこしてるけど、どうしたのよ？」

「いえ、ちょっとデッキの構成を変更してたんですよ。

今までのデッキは前に使っていたデッキを元にして、シンクロ用に変更しているのは蓮さんも知ってるでしょ？」

「ええ、それは知ってるけど」

「この前の蓮さんと小羽ちゃんのデュエルを見て、ちょっとデッキを根本から変えてみようと思って変えてみたんですけど。蓮さん、ちょっと見てくれません？」

「ええ、良いわよ」

祐騎がそう言って、今まで見ていたデッキを蓮に手渡すと、蓮は渡されたデッキを確認した。

「どれどれ。
・・・ねぇ、祐騎」

「はい？」

「今更だけど、祐騎ってアイドルカード好きなの？」

「え？
なんですか、それ？」

「解らないなら別に良いの、確かにこのカード達は祐騎向きのカードだし、問題ないわよね、うん」

「「？」」

蓮の言葉に祐騎と小羽が首を傾げていると、外で騒ぐ声が聞こえ

てきた。

～レッド寮前～

「だーかーらー！
アニキは僕のアニキなんだってば！」

「何言ってるドン！
アニキは俺のアニキなんだザウルス！」

レッド寮の前で十代が呆れているのにも気づかずに、翔は恐竜の柄のバンダナを被っている大柄の少年と大声で言い争っていた。

「お～い、もういい加減にしてくれよ～」

「コレってどういう状況なの、十代君？」

「おお！
祐騎、実はな・・・」

翔と大柄の少年の言い争う声を聞いて部屋から出てきた祐騎達が、十代にこの状況について聞くと、十代は大柄の少年、ティラノ剣山がデュエルディスク狩りと呼ばれていたことや、それを理由で自分からデュエルを挑んでそのデュエルに勝利して、その後自分のことをアニキと呼ぶ様になり、同じく自分のことをアニキと呼ぶ翔と、どっちが自分の弟分にふさわしいのかを言い争っていると説明した。

そして、その説明を終えると、蓮の隣にいた小羽に気づいて小羽のことを聞くと、蓮が十代に小羽の事を説明した。

そして、今まで言い争っていた二人もようやく祐騎達に気づいて近づいてきた。

「アニキ、その人達誰ザウルス？」

「始めまして、僕は十代君と同じオシリスレッドの甲斐祐騎だよ」

「オベリスクブルーの紅龍蓮よ」

「は、始めまして、オベリスクブルー1年の紅龍小羽です！」

「始めましてだドン！
オレは、ラーイエロー1年のティラノ剣山ザウルス！」

祐騎達がお互いに自己紹介を済ませると、翔が祐騎達に話しかけた。

「そういえば、祐騎君達はどうしてここに来たんスか？」

「ちょっとデッキを新しくしたから、デュエルして調子を確かめようと思ってね」

「そうだったんっスか」

「なら、オレが相手になるザウルス！」

「ちょっと、剣山君！？
祐騎君はアニキと同じ位強いんだよ！？」

「アニキと同じ位強いなら、なおさらオレがデュエルするザウルス！
オレはアニキに出会ってから、進化すると決めたドン！
進化するためには強い相手と戦うのが一番ザウルス！」

「そこまで言うなら、デュエルしようか」

「もちろんザウルス！」

剣山の意気込みを聞いて、祐騎がデュエルを了承すると二人は距離を取って向かい合った。

「「デュエル！」」

祐騎　ＬＰ４０００

剣山　ＬＰ４０００

「僕の先攻、ドロー！
僕は手札から、ガスタの巫女（みこ）ウィンダ（攻／守１０００／４００）

を守備表示で召喚。
カードを2枚伏せて、ターンエンド」

祐騎　手札3枚

「オレのターン、ドロー！
そんな、貧弱なモンスターにオレの恐竜さん達は負けないザウルス！
オレは手札から、俊足（しゅんそく）のギラザウルス（攻／守１４００／４００）を攻撃表示で特殊召喚！
このカードが自身の効果で特殊召喚に成功した時、相手は墓地のモンスターを1体特殊召喚する事が出来るけど、祐騎先輩の墓地にモンスターは居ないザウルス！」

「さらに、オレはギラザウルスをリリースして、手札から魔法カード、大進化薬（だいしんかやく）を発ドン！
このカードの効果により、オレは3ターンの間レベル5以上の恐竜族モンスターを召喚するのに、モンスターをリリースしなくても良くなったザウルス！」

「そして、オレは手札からキラーザウルス（攻／守１８００／１１００）を墓地に送り、デッキからフィールド魔法、ジュラシックワールドを手札に加えてそのまま発ドン！
さらに、暗黒（ダーク）ドリケラトプス（攻／守２４００／１５００）を攻撃表示で召喚！
ジュラシックワールドの効果で攻撃力と守備力が３００ポイントづつアップするザウルス！」

暗黒ドリケラトプス　（攻／守２４００→２７００／１５００→

１８００）

剣山が特殊召喚したモンスターをコストに発動した魔法カードの効果で、剣山の場に黒い姿の恐竜族モンスターが現われ、フィールド魔法によって召喚したモンスターの攻撃力と守備力が強化された。

「バトル！
暗黒ドリケラトプスでガスタの巫女　ウィンダを攻撃！
怪鳥（けちょう）！
さらに、暗黒ドリケラトプスは相手守備表示モンスターを攻撃した時、相手に貫通ダメージを与えるザウルス！」

「それなら罠カード、フローラル・シールドを発動して戦闘を無効にして、デッキからカードを１枚ドローするよ」

「クッ、カードを１枚伏せてターンエンドン！」

剣山　手札１枚

「僕のターン、ドロー！
手札からチューナーモンスター、ガスタ・ガルド（攻／守５００／５００）を攻撃表示で召喚！」

「レベル２ガスタの巫女　ウィンダにレベル３ガスタ・ガルドをチューニング！
大いなる風に選ばれし巫女、今こそ風の使者と共に大空に羽ばたけ！シンクロ召喚！
翔けよ、ダイガスタ・ガルドス（攻／守２２００／８００）！」

祐騎の場小さな鳥型のモンスターが３つの光の輪になると、もう１体の少女の姿をしたモンスターがその光の輪の中に入ると、光の輪を包むように竜巻が発生し、その竜巻が収まると巨大な姿に変化したガスタ・ガルドに乗ったウィンダが現われた。

「そんなモンスターを呼んだところで、攻撃力はオレのモンスターの方が上ザウルス！」

「うん、だからダイガスタ・ガルドスの効果を発動させるよ。ダイガスタ・ガルドスは墓地のガスタと名の付くモンスター２体をデッキに戻してシャッフルすることで、相手の場に表側表示で存在するモンスター１体を破壊する！ブレイク・オブ・フォース！」

「なっ！？」

「そして、僕の墓地にモンスターが存在しない事により手札からガーディアン・エアトスを攻撃表示で特殊召喚！」

ダイガスタ・ガルドスの効果で剣山の場のモンスターを破壊すると、祐騎はガルドスの効果のコストによって墓地のモンスターが０になったことで手札からエアトスを特殊召喚した。

「バトル！ダイガスタ・ガルドスとガーディアン・エアトスでダイレクトアタック！」

「罠カード、生存本能（せいぞんほんのう）を発ドン！このカードの効果で、墓地の恐竜族モンスター３体を除外して１２００ポイント、ライフを回復するザウルス！」

剣山　ＬＰ４０００→５２００→５００

「流石に、これで終わらないか。
僕はカードを1枚伏せて、ターンエンド」

祐騎　手札２枚

祐騎の攻撃を何とか防いだ剣山は祈る様にデッキからカードをドローした。

「オレのターン、ドロー！
よし！
オレは手札から、超伝導恐竜（スーパーコンダクターティラノ）（攻／守３３００／１４００）を攻撃表示で召喚！」

「さらに、超伝導恐竜はジュラシックワールドの効果で攻撃力と防御力を３００ポイントづつアップするザウルス！」

超伝導恐竜　（攻／守３３００→３６００／１４００→１７００）

「まずは、その厄介な効果を持ったシンクロモンスターから消えて貰うドン！
バトル！
超伝導恐竜で、ダイガスタ・ガルドスを攻撃！
レール・バイト！」

「罠カード、ガード・ブロックを発動！
このカードの効果で、戦闘ダメージを1度だけ0にしてデッキからカードを1枚ドローするよ」

剣山の場の超伝導恐竜が祐騎の場のダイガスタ・ガルドスを噛み付いて破壊するが、祐騎の眼前にカードが現われて祐騎へのダメージを防いだ。

「・・・また、ライフを削れなかったザウルス。
オレは、これでターンエンドン！」

剣山　手札1枚

「僕のターン、ドロー！
僕は、手札からチューナーモンスター、栄光の天使を攻撃表示で召喚！」

「チューナーモンスター！？
まさか、またシンクロ召喚をするつもりザウルス！？」

「そのまさかだよ。
レベル8ガーディアン・エアトスにレベル2栄光の天使をチューニング！
風の守護者よ、今こそ栄光をその手に数多の魂を救う光となれ！
シンクロ召喚！
輝け！煌翼の守護者ートゥインクル・エアトスー！」

祐騎の場のエアトスと栄光の天使がシンクロすると、祐騎の周りに白く輝く羽を落としながらトゥインクル・エアトスが姿を現した。

「トゥインクル・エアトスの効果発動！
トゥインクル・エアトスがシンクロ召喚に成功した時、お互いの墓地のモンスターを全てゲームから除外する！
さらに、このカードはお互いがゲームから除外しているモンスターの数×１００ポイント攻撃力をアップさせる！」

「今、剣山君の墓地にモンスターは存在しないけど、３枚のモンスターが既に除外されている。
そして、僕は墓地から3枚のカードを除外。
これにより、今除外されているカードは全部で6枚、よってトゥインクル・エアトスの攻撃力は６００ポイントアップする！
天界のオペラ！」

《皆、私に力を貸して！》

トゥインクル・エアトス　（攻３０００→３６００）

「そ、それでも、攻撃力はオレの場の超伝導恐竜と同じザウルス！
それじゃあ、オレの恐竜さんに勝つことは出来ないドン！」

「そうだね、けどこれならどうかな？
トゥインクル・エアトスの特殊召喚に成功したことで罠カード、激流葬（げきりゅうそう）を発動！」

「なっ！？」

祐騎が発動させた罠カードの効果で、二人の場が水に覆われてお互いの場のモンスターがその水に飲み込まれた。

「罠カード、激流葬はモンスターが召喚、特殊召喚された時に発動することが出来る罠カード。
このカードが発動した時、フィールド上に存在する全てのモンスターを破壊するよ」

「けど、それじゃあ祐騎先輩のモンスターも破壊されるドン！
自分のモンスターを自分から破壊するなんて、何を考えてるザウルス！」

「それはどうかな？
僕の場を良く見てみなよ」

「なっ！？」

祐騎の言葉を聴いた剣山が祐騎の場を良く見ると、祐騎と剣山の場を覆っていた水が引いていき、全ての水が無くなり二人の場がはっきりと見えるようになると、そこには羽に残っている水を羽ばたく事で飛ばしているトゥインクル・エアトスの姿が有った。

《うぅっ、冷たいですよ～》

「なんで、祐騎先輩の場のモンスターだけ破壊されてないザウルス！？」

「トゥインクル・エアトスのシンクロ素材となった栄光の天使の効果だよ。
栄光の天使をシンクロ素材にしたシンクロモンスターは、攻撃力を５００ポイント下げることで、カード効果での破壊を無効にする事が出来る！」

トゥインクル・エアトス　（攻３７００→３２００）

「さらに、剣山君の場の超伝導恐竜が破壊されたことで、トゥインクル・エアトスの効果で除外され、除外されているモンスターの数が増えた事でトゥインクル・エアトスの攻撃力が、またアップするよ」

《・・・結果的にはダウンしてるんですけどね》

「エール、もしかして怒ってる？」

《いーえー、怒ってなんていませんよー》

エールが不機嫌な顔で祐騎の言葉を否定すると、祐騎は苦笑いをしながらもデュエルを続けた。

「と、とにかく、バトル！
トゥインクル・エアトスで剣山君にダイレクトアタック！
セイクリッド・ゴスペル！」

「うわぁぁぁっ！」

剣山　ＬＰ５００→０

祐騎が剣山へ攻撃を宣言すると、トゥインクル・エアトスの姿になったエールが手に持った剣を地面に叩きつけると、剣を叩きつけた所から衝撃波が眩い光を放ちながら剣山に向かって襲い掛かり、

剣山のライフを0にした。

「1ポイントのダメージも受けずに勝つなんて、お兄さんすごいです！」

「まぁ、手札が良かったからね」

「それでも、私だったらあそこまで攻撃を防ぐなんて出来ませんよ」

「いや、小羽の場合は防御するまでも無く、速攻で勝負が決まるじゃない」

「けど、その分手札の消耗が激しいから、速攻を防がれたら辛いんですけど」

「「それでも、BFだったら何とかなるんじゃない？」」

「声を合わせて言わないでくださいよぉ！」

デュエルが終わった後、祐騎の側にやって来て話していた小羽が祐騎と蓮の言葉に涙ぐみながら反論しているその近くで、落ち込んでいる剣山に十代と翔が話し掛けていた。

「・・・完敗ザウルス」

「元気だせよ、剣山！」

「そうだよ、ちょっと相手が悪かっただけなんだから！」

「けど、ダメージを与える事も出来なかったなんて、悔しいドン」

「だったら、もっと練習して強くなればいいじゃないか！
もっと強くなって、次にデュエルした時に勝てばいいだろ！」

「その通りだよ、剣山君！」

「解ったドン！
これから、アニキや祐騎先輩みたいに強くなれるように頑張るザウルス！」

「けど、アニキの弟分は僕だけどね」

「いいや、アニキの弟分はオレザウルス！」

十代と翔の言葉でやる気を取り戻した剣山と翔が再び言い合いを始めると、祐騎達は巻き込まれない様にその場から離れていき、それから暫くの間レッド寮の近くで剣山と翔の言い争う声が続いた。

そして、自分の部屋に戻った祐騎は剣山とのデュエルで不機嫌になったエールに何度も謝る事でなんとか機嫌を直してもらってから、眠りに付いた。

第二十六話　一陣の風を纏う守護者（後書き）

今回の話、どうだったでしょうか。

前書きに書いた様に、今回の話から祐騎の使うデッキは今までの風属性デッキから、ガスタ中心のデッキに変更しました。

次回は、４人目のオリキャラを登場させます。

それから、今月発売するスパロボの新作をやるので更新が遅くなると思いますけど、これからもよろしくお願いします。

それでは、次回もこの作品をよろしくお願いします。

第二十七話　咆哮する紅き魂、レッド・デーモンズ・ドラゴン！（前書き）

スパロボＬを1週クリアしたので、ようやく更新です。

今回は、サブタイトルにある通り、レッド・デーモンズが出ます。

後、今回４人目のオリキャラを出します。

それから、今回の話の中には原作でも場面も出てますが、最後の場面だけですので注意してください。

それでは、第二十七話始まります。

第二十七話　咆哮する紅き魂、レッド・デーモンズ・ドラゴン！

～レッド寮～

祐騎と剣山のデュエルから数日が経ったある日、祐騎達はカイザーが出場しているプロリーグのＴＶ中継を見るために教室に集まっていた。

『それでは、本日のプロリーグ第一試合、エド・フェニックスＶＳカイザー亮の試合を開始致します！』

「え、第一試合？」

「どうしたの、蓮？」

「ねぇ、第一試合ってことは、この二人の後にまだ誰かデュエルするの？」

「そうよ。
ＴＶのＣＭや雑誌でも出てたのに、知らなかったの？」

「え、ええ、私最近雑誌とか見てなかったから。
それで、デュエルする人の名前って解る？（元々知ってたから確認するのを忘れてたなんて、言えないわよね）」

「確か、エックスとジョシュア・クラウドって名前だったと思うわ」

「そう、ありがとう明日香（エックスは、確か原作で出たデッキ

破壊の使い手だったはず、けどジョシュアなんて人物原作には居なかった、まさかとは思うけど、もしかして）」

蓮が明日香の話を聞いて、考え事をしていると教室のモニターでエドとカイザーのデュエルが開始された。

「罠発動、デステニー・デストロイ！
このカードのエフェクトでデッキから、クレイマン、エッジマン、ワイルドマン、バブルマン、ヒーロー・シグナルの５枚のカードをセメタリーに送る！」

「シャイニング・フェニックス・ガイのエフェクト発動！
セメタリーのＨＥＲＯカード１枚につき、攻撃力を３００ポイントアップする！」

シャイニング・フェニックス・ガイ（攻３７００→４９００）

「何！？」

「これで、シャイニング・フェニックス・ガイの攻撃力がサイバー・エンド・ドラゴンの攻撃力を上回った。
迎え撃て、シャイニング・フェニックス・ガイ！」

「ヌゥッ！」

教室のモニターに移されたエドとカイザーのデュエルは、原作通りにカイザーの召喚したサーバー・エンド・ドラゴンからの攻撃を攻撃力を上げたシャイニング・フェニックス・ガイの反撃を受けたことでカイザーのライフが０になり、エドの勝利で終わった。

「そんな、カイザーが負けるなんて」

「まぁ、こんな所でしょうね。
今日のカイザー相手なら、小羽でも楽勝だと思うし当然かしらね」

「蓮！？」

「お姉ちゃん、いきなり何を言い出すんですか！？」

「私は事実を言ったまでよ。
相手に良い様にデュエルを進められたばかりか、相手の伏せカードの事を忘れて攻撃を仕掛けるなんてことをした今日のカイザーだったら、小羽のＢＦデッキなら楽勝よ」

「確かに、今日の丸藤先輩はいつもと違ってちょっと無用心でしたね。
パワー・ボンドを使うのに、そのコストへの対処を用意してなか

ったり、モンスターの攻撃もいつもより単調でした」

「そういうこと、自分のデュエルを見失って勝てるほど、プロのデュエルは甘くないってことよ」

カイザーが負けたことで同様している十代達を他所に、蓮と祐騎が冷静にエドとカイザーのデュエルの感想を言っていると、教室のモニターに次のデュエルを行うデュエリストが出てきた。

『さぁ、白熱した第1試合の熱が冷めないうちに、第二試合の開始致します！』

『相手のデッキを破壊することで、デュエリストとカードの絆を断つ死神ことエックスを相手にするのは、プロになってから30戦無敗、アマチュア時代から負け無しと噂される次代のデュエルキングこと、ジョシュア・クラウド！』

教室のモニターに移されたドームの中央に、全身黒ずくめの服を来た冷たい笑みを浮かべるエックスの前に、黒と赤のコートを着た青い髪の青年が現われた。

「よろしくお願いしますよ、ジョシュア君？」

「御託は良い、さっさと始めるぞ」

「フフッ、威勢が良いですねぇ。
その威勢がどこまで続くか見物ですねぇ」

二人はドームの中央で少し話をすると、互いに距離を取ってデュエルディスクを構えた。

「「デュエル！」」

ジョシュア　ＬＰ４０００

エックス　ＬＰ４０００

「俺の先攻、ドロー。
カードを3枚伏せて、ターンエンドだ」

ジョシュア　手札３枚

「カードを伏せただけで終了とは、手札事故ですかねぇ。
まぁ、私には関係無いですが。
私のターン、ドロー」

ジョシュアがカードを伏せただけでターンを終了したことに、ドームの観客や教室で観戦している生徒達が同様する中、エックスはターンを進めた。

「私は手札から、トラップ・スルーザーを守備表示（攻／守８０／１３００）で召喚。
さらに、カードを2枚伏せてターンエンドです」

エックス　手札３枚

「俺のターン、ドロー！」

「この瞬間１０００ポイントのライフを支払って永続罠、モンスターレジスターを発動！
　このカードは、お互いにモンスターを召喚、特殊召喚する度にお互いのプレーヤーのデッキから、召喚したモンスターのレベルと同じ枚数を墓地に送る」

「さらに、私の場のトラップ・スルーザーは表側表示で存在する限り、このカードのコントローラーは永続罠の効果を受けない！」

エックス　ＬＰ４０００→３０００

ジョシュアがカードをドローした瞬間に、エックスは伏せていた罠カードを発動させ、余裕の表情でジョシュアの顔を伺い、そんなエックスに対してジョシュアは表情を崩さずにデュエルを進めた。

「相手フィールド上にのみモンスターが存在する事により、手札からバイス・ドラゴン（攻／守２０００／２４００）を攻撃表示で特殊召喚。
　ただし、この効果で特殊召喚されたバイス・ドラゴンの攻守は半分になる」

バイス・ドラゴン　（攻／守２０００→１０００／２４００→１２００）

「この瞬間永続罠、モンスターレジスターの効果発動！
　バイス・ドラゴンのレベルは5、よってお互いにデッキから5枚のカードを墓地に送る！」

「ですが、私の場にトラップスルーザーが表側表示で存在するため、私は永続罠の効果を受けない。
よって、デッキからカードを墓地に送るのはアナタだけです」

「・・・」

エックスの場のモンスターレジスターの効果で、モンスターレジスターから伸びて来た舌がジョシュアのデッキの上から5枚のカードを奪って墓地へと送った。

「どうです、一方的にデッキのカードが無くなっていく気分は！
カードとの絆が強ければ強いほど、デッキのカードへの思い入れが大きいほど、デッキが無くなることへの精神的ダメージが大きくなる！
そうして、精神的に追い詰められ絶望する姿を見ることが私の最大の楽しみなのです！
さぁ、アナタの絶望に満ちた姿を見せ「少し黙れ」て、何？」

「アンタ、今は俺のターンだ。
さっきから、ゴチャゴチャと五月蝿いんだよ」

「なっ！？」

エックスは上機嫌になってジョシュアに語りかけるが、ジョシュアは相変わらず冷静にエックスの話を断ち切ってデュエルを再開させた。

「俺は、さらに手札からチューナーモンスター、ダーク・リゾネーター（攻／守１３００／３００）を攻撃表示で召喚！」

「モンスターを召喚したことで、モンスターレジスターの効果が発動！
そのモンスターのレベルは3、よって3枚のカードを墓地に送る！」

ジョシュアがもう1体モンスターを召喚すると、ドームの観客やアカデミアの教室でデュエルを見ていた生徒達が不思議そうにデュエルの行方を見守る中、驚いた表情をした後、真剣な表情をしてモニターに映るデュエルの様子を見つめる蓮に祐騎が話しかけた。

「蓮さん、あの人のデュエルに何か気になることが有るんですか？」

「ええ。
祐騎、小羽もこのデュエルを良く見ておきなさい、おそらく次に出てくるモンスターは私達に関係する奴だから」

「えっ、お姉ちゃんそれって、もしかして」

「四体目の石版の竜、ですか？」

「おそらく、ね」

蓮がそう言うと、祐騎と小羽も蓮と同じようにモニターに集中しだした。

モンスターレジスターの効果で、デッキからさらに3枚のカードが墓地に送られたジョシュアは、表情を変えずにデュエルを続けていた。

「さらに、レベル5のバイス・ドラゴンにレベル3のダーク・リゾネーターをチューニング！
王者の鼓動、今ここに列を成す、天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！」

「咆哮せよ、紅蓮の魂！レッド・デーモンズ・ドラゴン（攻／守3000／2000）！」

ジョシュアの場のダーク・リゾネーターが手に持った音叉を鳴らすと、3つの光の輪になりバイス・ドラゴンがその輪の中に入ると、5つの星に変って辺りを強烈な光が包み込み、その光が収まると紅い悪魔の様な姿をしたドラゴンが現われた。

「な、なにをするかと思えば、そんなモンスターを呼んでどうするつもりですか。
そのモンスターのレベルは8、モンスターレジスターの効果でさらにデッキから8枚のカードが墓地に送られます！」

「それがどうした。
俺は、さらにリバースカードオープン、バスター・モード！」

「バスター・モードですと！？」

「バスター・モードの効果で、レッド・デーモンズ・ドラゴンをリリースして、デッキからレッド・デーモンズ・ドラゴン／バスタ

ー（攻／守３５００／２５００）を特殊召喚する！」

「そのモンスターのレベルは１０、さらに１０枚のカードが墓地に送られますよ！（何を考えている、このターンだけで既に２６枚のカードがデッキから墓地に行っている、奴のデッキが限度枚数の６０枚だとしても半分以上のカードを失って、どうしてそんなに涼しい顔をしていられる）」

エックスはジョシュアが連続で高レベルモンスターを召喚し、デッキのカードが大量に墓地に送られているのに顔色を変えずにデュエルしている姿に、戸惑っていた。

「俺はさらに手札から魔法カード、死者蘇生を発動！
このカードの効果で、墓地のダーク・リゾネーターを攻撃表示で特殊召喚！」

「モンスターレジスターの効果で、３枚のカードを墓地に送ります！」

「そして罠カード、ナイトメア・デーモンズをダーク・リゾネーターをリリースして発動！
このカードの効果で、アンタの場にレベル６のナイトメア・デーモン・トークン（攻／守２０００／２０００）３体を攻撃表示で特殊召喚する！」

「ふふっ、何をするつもりかと思えば、自分のモンスターをリリースして私の場にトークンを召喚するとは、勝負を捨てたということですか？
私の場にレベル６のトークンが３体召喚されたことで、アナタのデッキから合計１８枚のカードを墓地に送ります！」

「残念だが、俺のデッキのカードの残りは４枚だ」

ジョシュアはそう言って、自分のデュエルディスクのデッキを置く場所をエックスに見せると、モンスターレジスターの効果で４枚のカードが墓地に送られ１枚のカードも残っていなかった。

「これで、私の勝ちですねぇ」

「おいアンタ、仮にもプロなんだったらルールくらい把握しておけ。

デッキからカードが引けなくなったら負けだが、カード効果でデッキが０になっただけでは負けにはならないぞ」

「だとしても、次のアナタのターンで終わりですよ」

「なら、このターンで倒せば問題無いだろ」

「っ、この状況でやれるものならやってみなさい！」

ジョシュアの言葉に頭に来たエックスが怒鳴り声を挙げると、ジョシュアはそんなエックスを鼻で笑ってデュエルを続行した。

「バトル！

レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスターでナイトメア・デーモン・トークンを攻撃！

エクストリーム・クリムゾン・フォース！」

「永続罠、拷問車輪（ごうもんしゃりん）を発動！

このカードは相手モンスター１体を選択し、選択されたモンスタ

ーは攻撃することは出来ず、表示形式の変更も出来ない。
さらに、私のターンのスタンバイフェイズ毎に相手に５００ポイントのダメージを与えます！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスターがナイトメア・デーモン・トークンに攻撃を仕掛けると、エックスが場に伏せていた罠カードを発動させ、レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスターは発動した罠カードに捕まってしまった。

「残念でしたねぇ、アナタのモンスターはこれで攻撃出来ない。
そして、次の私のターンで何もしなくてもアナタに次のターンは無い、これで私の勝利です！」

「フッ、何を勘違いをしている」

「なんですと？」

「俺のバトルフェイズはまだ終わってないぞ」

「何を言っているんですか！
アナタの場に攻撃できるモンスターは存在しないでしょう！」

「ああ、今はな。
俺は罠カード、バスター・スラッシュを発動する！
このカードは、自分の場に／バスターと名の付くモンスターが存在する時、フィールド上に存在する全てのモンスターを破壊する！」

「なっ、フィールドのモンスターを全て破壊するですと！？」

エックスが自身の勝利を確信していると、ジョシュアが伏せてい

た最後のカードは発動させ、フィールド全体が炎に包まれ、フィールドに居たモンスターを全て破壊した。

「何をするかと思えば、私の場のモンスターを破壊した所で、アナタの場のモンスターも居なくなっては意味が無いではないですか」

「フッ、俺の場を良く見てみろ」

「なっ、なぜ、アナタの場にモンスターが！？」

ジョシュアの言葉を聴いたエックスがジョシュアの場を見ると、そこには／バスターの姿から元の姿へと変化したレッド・デーモンズ・ドラゴンの姿が在り、それを見たエックスが驚いて声を挙げると、ジョシュアがエックスに説明しだした。

「レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスターの効果だ。レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスターは破壊され墓地に送られた時、墓地に存在するレッド・デーモンズ・ドラゴン１体を特殊召喚出来る！」

「そ、そんな、この状況を作るために、あのモンスターを呼んだというのですか・・・」

「さらに、ナイトメア・デーモン・トークンが破壊されたことで効果発動！
ナイトメア・デーモン・トークンが破壊された時、そのコントローラーは１体につき８００ポイントのダメージを受ける！」

「なっ！？
わ、私の場に存在したナイトメア・デーモン・トークンは３体、

つまり」

「そう、８００×３で２４００ポイントのダメージだ！」

「グゥッ！？」

エックス　ＬＰ３０００→６００

ジョシュアが発動した罠カードの効果で、フィールド上のナイトメア・デーモン・トークンが破壊されたことで、エックスに効果ダメージが発生すると、エックスは怯えた目でジョシュアとジョシュアの場に存在するレッド・デーモンズ・ドラゴンを見つめた。

「これで終わりだ。
バトル！
レッド・デーモンズ・ドラゴンでダイレクトアタック！
アブソリュート・パワー・フォース！」

「う、うわあぁぁぁぁっ！」

エックス　ＬＰ６００→０

レッド・デーモンズ・ドラゴンの攻撃を受けてライフが０になりエックスの負けが決まると、会場に歓声が響き渡り、それを教室のモニターで見ていた生徒達も驚きと感嘆の声を挙げていた。

そして、ジョシュアのデュエルを見た蓮が苦笑いをしながら頭に

手を当てて呆れていた。

「バイスリゾネーターからのレモンバスターとバスター・スラッシュで相手の場をがら空きにした後、レモンのダイレクトアタックで1キルって、一体どこのキングだって話よ」

「あ、あの、お姉ちゃん、大丈夫？」

「えぇ、大丈夫よ。
あまりにも私の知ってるレモン使いに似てる戦い方だから、ちょっと呆れてただけだから」

「あの、さっきから言ってるレモンって、もしかしてレッド・デーモンズ・ドラゴンのことですか？」

「あ～、うん、そうよ。
私がこの世界に来る前の世界じゃ、カードの名前を略したりあだ名付けたりする事が多かったから。
例えば、スターダストだとスタダ、ブラックローズだとブラロとか」

「あの、お姉ちゃん、ブラックフェザー・ドラゴンはなんて呼ばれてたんですか？」

「ブラックフェザー・ドラゴンは名前の頭文字でＢＦＤとかね（流石にあだ名の方は言えないわよね）」

「へ～、そうなんですかぁ」

祐騎達が雑談をしていると、モニターに映っている会場では、エックスが憔悴した表情で会場を出て行き、勝利したジョシュアの所にＴＶレポーターがインタビューのために近寄って来ていた。

「おめでとうございます！
コレでプロでの戦績が３１戦無敗になりましたね。
アマチュアの時からの戦績を考えると、もうアナタに勝てる人は居ないんじゃないですか？」

「いや、そういった考えは持ってはいない。
俺は、まだまだ未熟だ。
だからこそ、もっと強くなるために全てのデュエルで全力を持って、勝ちを目指しているだけだ。
結果として連勝してはいるが、そんなことは俺には関係無い」

「そうまでして強くなろうとするからには、何か理由が有るんじゃ無いですか？」

「・・・そうだな、丁度良い機会だから言わせて貰おう。
俺が強くなりたい理由は、ある一人のデュエリストを探し出してデュエルし、勝利するためだ」

「えっと、その方とはどういった関係なんでしょうか？」

「そいつは、昔俺を負かしたデュエリストだ」

「えっ！？
アマチュア時代から無敗と噂されている貴方に勝った方が居るんですか！？」

「ああ、八年前の秋に海馬ランドで開催されたデュエル大会の結果は有るか？」

「少し待ってください。
ああ、有りました！
あれ、けど優勝者の名前は貴方の名前ですけど？」

レポーターがジョシュアの言った資料を見つけ出して見てみると、その資料の大会優勝者の名前のところにはジョシュアの名前が在り、そのことを不思議に思ったレポーターがジョシュアに質問すると、ジョシュアは苦虫を噛み潰した様な顔でレポーターの質問に答えた。

「その大会では、予選敗退者に対して敗者復活のチャンスが在ったんだ。
俺は予選で負け、その後、敗者復活で本戦に勝ち上がり、優勝したんだ」

「ですが、それならば予選で負けたという方には既に勝たれているのでは？」

「いや、本戦でそいつと戦うのは決勝戦だった。
だが、決勝戦の当日、開始の時間になってもアイツはやって来なかった、そのため俺は不戦勝となり結果として優勝という事になったんだ」

「だが俺は、奴に負けた時とても悔しかった。
あの大会に出る前にも、何度か大会に出場して優勝していたし、周りに俺より強い奴なんて居なかった、確かにあの時は油断をしていたのかもしれない。
けど、圧倒的だった、まったく歯が立たなかった！

俺がやろうとしている事が完全に読まれている様なプレイングに、完璧な戦術、圧倒的な実力差、そういったものを見せ付けられ、そして負けた」

ジョシュアは話ながら拳を握り締めながら、徐々に声を強めていった。

「予選で負けた後、俺はアイツに勝ちたいと心の底から思った！だから、決勝で奴と戦えると知ったとき、俺は奴に勝つために、少しでも強くなることだけを考えていた。
だが、奴は姿を現さなかった」

「その時から俺は奴に勝つために努力し、今まで戦い続けプロを目指して、去年ようやくプロになった。
奴の実力なら早々にプロになっていると思ったからだ」

「それで、その方には出会えたんですか？」

「いや、プロの中に奴は居なかった。
それどころか、最近になって解ったことだが、俺が負けた大会から一度も、奴は大会にすら出ていなかった。
全くと言って良いほど、手がかりが掴めない状態だったんだ」

「だった、ということは、何か手がかりを見つけたんですか？」

「あぁ、ついこの間、奴の居場所がようやく解った」

「それは、どこなんですか！」

レポーターが興奮した様子でジョシュアに詰め寄ると、ジョシュ

アはそんなレポーターを手で制してから、話しだした。

「その前に、伝えなければならない事が有る」

「なんでしょうか？」

「俺は、今から暫くの間プロを休業する」

「えぇっ！？」

ジョシュアの言葉に会場の観客や、モニターで見ていた生徒達は騒然とするが、ジョシュアは構わずに話を続けた。

「俺は、奴と戦うために長期間の間、一定の場所に留まれなければならない。

無理をすればプロの仕事を続ける事は可能だが、そんな事をしても観客の皆を楽しませる様なデュエルをすることは出来ない。

だから、俺は奴を倒して自分の弱さを克服するまでプロには戻らないことにしたんだ」

「そのことは、関係者の方には？」

「既に話してある。

俺の我侭で休業する事に対して、俺との契約をそのままにして置いてくれると言ってくれた。

だから、必ずプロに戻り、この恩を必ず返すと今ここで誓わせて貰う！」

「それで、そこまでして戦いたい相手というのは、一体どこの誰なんですか？」

「それは、デュエルアカデミアに在籍している真紅の髪の女デュエリスト、紅竜蓮だ」

「は？」

「ほぇ？」

「・・・どうして、こう厄介事が続くのかなぁ」

ジョシュアの発言を教室に映っているモニター越しに聞いた祐騎と小羽は、イキナリの事に呆けた顔で蓮の方を向き、蓮は騒がしくなっていく周囲の騒ぎから現実逃避するため、顔を隠すように頭を抱えて机に突っ伏した。

第二十七話　咆哮する紅き魂、レッド・デーモンズ・ドラゴン！（後書き）

どうだったでしょうか。

今回、原作キャラのエックスを出しましたが、口調がコレで良いのか不安です。

後、今回原作アニメのオリカであるトラップ・スルーザーとモンスターレジスターを出しました。

エックスといったらこのカードだと思うので、今回は原作準拠でいきました。

それと、新しいオリキャラの設定をキャラ設定に追加しておくので、気になった方は確認してください。

それでは、これからもこの作品をよろしくお願いします。

第二十八話　羽ばたけ、ＢＦ一賢風のウィング・マジシャン・ガール！（前書き

今回は、タイトル通りＢＦのオリカが出ます。

今回出すオリカは、簡単に言うとＢＭＧのＢＦ化です。

それと、今回のデュエル相手はＴＦのキャラです。

おかしな所がありましたら、遠慮なく書き込んでください。

それでは、第二十八話始まります。

第二十八話　羽ばたけ、ＢＦ一貫風のウィング・マジシャン・ガール！

～祐騎の部屋～

先日、行われたプロリーグでのエドとカイザーの後にデュエルを行ったジョシュアの発言で、一気にアカデミアの全員から注目の的になった蓮は、そんな周囲から逃げる様に祐騎の部屋に篭り、そんな蓮を心配して小羽も祐騎の部屋にやって来ていた。

「えっと、お姉ちゃん、大丈夫？」

「大丈夫じゃ無いわよ。
こんな調子じゃ、まともに授業も受けられないじゃない」

「皆、蓮さんに話を聞きたがってますからね」

「あぁっ、もう、なんでＴＶであんな事言うのよ！？
おかげでこっちは良い迷惑よ！」

「まぁまぁ、落ち着いてくださいよ、蓮さん」

「そ、そうだよぉ。
ここでそんな事言ったって、どうしようもないよ？」

「解ってるわよ。
だけど、言わないとやってられないのよ」

祐騎と小羽の言葉で少し冷静になった蓮は、それでも少し不機嫌そうにしており、そんな蓮を見て祐騎と小羽は苦笑していた。

「それで、蓮さんはあのジョシュアという人に見覚えは無いんですか？」

「そうね、私が最後に出た大会の予選で当たった相手ってことだから、確かあの時の予選で戦った中でアイツに似てる奴といえば・・・」

蓮は昔の事を思い出すため考え込み、暫くして思い出した事を話し出した。

「そういえば、居たわね、青い髪の私と同じ年くらいの相手。確かあの時はアイツのドラゴン族デッキを私が当時使ってたデッキで圧勝したのよね」

「どんなデッキだったんですか？」

「占い魔女デッキよ」

「それは、なんていうか」

「良く圧勝出来ましたね」

「まぁ、あの時のアイツは攻撃が単調だったからなんだけどね」

祐騎と小羽の言葉に蓮が苦笑で応えると、祐騎がもう1つの疑問を蓮に尋ねた。

「それで、どうして決勝戦に出なかったんですか？」

「・・・うん、その前日にね、お父さんに言われたんだ。
お前なんか娘じゃない、この化け物って。
それで、すごく、辛くなって、その日は部屋に閉じこもって、デュエルどころじゃなかったんだ。
可笑しいよね、そう言われても仕方が無いし、実際私はあの人達の娘じゃない、それどころか、娘を奪った相手も同然なん、だし」

「もういいですよ、蓮さん。
辛い事を思い出させて、すみません。
今は、少し休んでください、ね？」

「うん、そうさせてもらうね」

蓮が昔の事を思い出して、辛そうな表情でその時のことを祐騎と小羽に話すと、蓮は話の最後の方では涙ぐみながら話をしだし、そんな蓮を祐騎が慰めるために抱きしめて休むように言うと、蓮は祐騎の言うとおりに休むため、祐騎のベットで横になり、横になると直ぐに眠り出した。

「お兄さん、私ちょっと外に出て行きますから、お姉ちゃんの事お願いしても良いですか？」

「それは良いけど、いきなりどうしたの？」

「えっと、お姉ちゃんが起きたときに何か食べる物が有った方が良いかな、と思って。
孤児院でシスターが教えてくれたんです、お腹が空いてると嫌な事を思い出しやすいって。
だから、お菓子でも買って来ようかなぁと思って」

「そういうことなら、僕が行くけど」

「いえ、お兄さんは此処でお姉ちゃんの事をよろしくお願いします。
起きたときにお兄さんが居ないと、お姉ちゃん不安がると思いますから」

「それじゃあ、お願いしても良い？」

「はい、もちろんです」

祐騎がそう言うと、小羽は祐騎の部屋から出て購買に向かって行った。

～購買～

「コレだけあれば十分だよね」

小羽が購買で買った菓子を持って祐騎の部屋に戻ろうとしていると、後ろから声を掛けられた。

「ねぇ、もしかして貴女、蓮さんの妹さん？」

「ほぇ？」

小羽が声がした方に振り向いて見ると、そこには桃色の髪の毛を頭の上に2つ輪になるようにして纏めた女生徒が居た。

「やっぱり、蓮さんの妹さんの小羽ちゃんだ！」

「あ、あの、貴女は？」

「あっ、ごめんね。
私は、貴女と同じ1年の嶺開花（りんかいほう）っていうんだ、よろしくー」

「あ、はい。
こちらこそ、よろしくお願いします」

「うん、よろしくねー。
それで、早速で悪いんだけど、蓮さんが今どこにいるか知らない？」

「・・・それを聞いて、どうするつもりなんですか？」

嶺が蓮の居場所を小羽に聞くと、小羽は先ほどまでの不安そうな顔から真剣な顔に変り、嶺を見つめると、嶺はいきなり小羽の雰囲気が変わったことに驚きながらも、小羽の質問に答えた。

「う、うん、この前のＴＶのことが本当の事か聞きたいなぁ、って思ってるんだけど」

「すみませんけど、お姉ちゃんは皆さんからその事を聞かれて疲れてますから、今お姉ちゃんの居場所を教える訳にはいきません」

「えっと、どうしても駄目？」

「どうしても駄目です」

「だったら、デュエルしよう！
私が勝ったら、蓮さんの居場所を教えて貰うから！」

「解りました。
その代わり、私が勝ったらお姉ちゃんに迷惑を掛ける様なことは、今後一切しないで貰いますから！」

「「デュエル！」」

小羽　ＬＰ４０００

嶺開花　ＬＰ４０００

二人は購買から少し離れた場所で、デュエルディスクを構えて対峙した。

「私の先攻です、ドロー！
私は、手札から永続魔法、黒い旋風を発動します！

このカードは、私がＢＦと名の付くモンスターの召喚に成功した時、デッキから召喚したモンスターの攻撃力未満の攻撃力のＢＦと名の付くモンスター１体を手札に加える事が出来ます！」

「そして、私は手札からＢＦ－蒼炎（そうえん）のシュラ（攻／守１８００／１２００）を攻撃表示で召喚します！

さらに、黒い旋風の効果でデッキから攻撃力１８００未満の攻撃力のＢＦ－そよ風のブリーズ（攻／守１１００／３００）を手札に加えます！」

「さらに、手札に加えたブリーズの効果を発動！

このカードはカードの効果で手札に加わった時、特殊召喚することが出来ます！

ＢＦ－そよ風のブリーズを攻撃表示で特殊召喚！」

「レベル４の蒼炎のシュラにレベル３のそよ風のブリーズをチューニング！

皆を守る翼、今こそ漆黒の鎧を纏って、羽ばたく時！シンクロ召喚！

ＢＦ－アーマード・ウィング！」

「ねぇ、そのカード初めて見るけど、どんな効果なの？」

「はい、ＢＦ－アーマード・ウィングは戦闘では破壊されず、戦闘によるコントローラーへのダメージも０になり、戦闘を行ったモンスターに取り除く事でそのターンのエンドフェイズまでそのモンスターの攻守を０にすることが出来る、楔カウンターを１つ置くことが出来ます」

小羽はモンスターの連続召喚で、１ターンでアーマード・ウィン

グを召喚し、その光景を見た嶺は引き攣った笑みを浮かべていた。

「うわぁ、何そのインチキ効果」

「い、インチキじゃないですよぉ！？
と、とにかく、私はカードを2枚伏せてターンエンドです」

小羽　手札2枚

「よーし、いくよ！
私のターン、ドロー！
私は、手札から魔法カード、テラフォーミングを発動！
このカードの効果で、デッキからフィールド魔法、魔法都市（まほうとし）エンディミオンを手札に加えて、そのまま発動するよ！
このカードは、魔法カードが発動する度に、このカードに魔力カウンターが1つ乗り、このカードが破壊される時、フィールド上に存在する魔力カウンターを1つ取り除く事で破壊を無効にすることが出来るよ！」

「そして、私は手札から魔法カード、魔力掌握（まりょくしょうあく）を発動！
このカードは自分フィールド上の魔力カウンターを置くことが出来るカードの上に魔力カウンターを1つ置き、デッキから同名カードを1枚手札に加える事が出来るよ！」

「私は、このカードの効果でフィールド魔法エンディミオンに魔力カウンターを1つ乗せて、デッキから2枚目の魔力掌握を手札に加えるよ！
けど、魔力掌握は1ターンに1度しか使えないから、今手札に加えた魔力掌握はこのターン使えないけどね」

「さらに、魔法カードが発動した事で、エンディミオンに魔力カウンターがさらに1つ乗るよ！」

魔法都市エンディミオン　魔力カウンター×2

「まだまだいくよ！
手札から魔法カード、成金ゴブリンを発動！
効果により小羽ちゃんのライフが1000ポイント回復する代わりにデッキからカードを1枚ドローするよ！
さらに、魔法カードが発動したことで、エンディミオンに魔力カウンターが1つ乗るよ」

魔法都市エンディミオン　魔力カウンター×3

小羽　LP4000→5000

「そして速攻魔法、手札断殺を発動！
このカードの効果で、お互いに手札のカード2枚を墓地に送って、デッキから新たに2枚のカードをドローするよ」

嶺が発動したカードの効果で、小羽は手札から追い風のアリゼとアゲインスト・ウィインドを墓地に送り、嶺は手札から神聖魔導王エンディミオンとダーク・ヴァルキュリアを墓地に送り、デッキから新たに2枚のカードをドローした。

「さらに、魔法カードが発動した事で、エンディミオンにカウンターを1つ置くよ！」

魔法都市エンディミオン　魔力カウンター×４

「さらに魔法カード、封印の黄金櫃と２枚目のテラフォーミングを発動！
このカードの効果で、デッキから光の護封剣を除外して、エンディミオンに魔力カウンターを１つ置くよ！
そして、デッキから２枚目の魔法都市エンディミオンを手札に加えて、フィールドのエンディミオンに魔力カウンターを１つ置くよ！」

魔法都市エンディミオン　魔力カウンター×６

「そして、魔導騎士ディフェンダーを守備表示で召喚！
このカードは召喚に成功した時、自身に魔力カウンターを１つ乗せ、私の場の魔法使い族モンスターが破壊されるとき、変わりにフィールド上の魔力カウンターを取り除くことで破壊を無効にすることが出来るよ！」

魔導騎士ディフェンダー　魔力カウンター×１

「・・・すごい、１ターンであんなに色々やってるのに手札が全然減ってないなんて」

「えへへー、まだ終わりじゃないよ！
私はさらに墓地の神聖魔導王エンディミオンの効果を発動するよ！
このカードはフィールド魔法、魔法都市エンディミオンに乗って

いる魔力カウンターを６つ取り除くことで手札・墓地から特殊召喚することが出来るんだよ！」

「私はフィールド魔法、魔法都市エンディミオンに乗っている魔力カウンターを６つ取り除いて、墓地から神聖魔導王エンディミオン（攻／守２７００／１７００）を攻撃表示で特殊召喚！」

魔法都市エンディミオン　魔力カウンター×６→０

「そして、エンディミオンが自身の効果で特殊召喚に成功した事で効果発動！
このカードが自身の効果で特殊召喚に成功した時、墓地に存在する魔法カード１枚を手札に加える事が出来るよ！
私は、エンディミオンの効果で墓地から魔法カード、手札断殺を手札に戻すよ！」

「なっ！？
そっちのもインチキ効果じゃないですか！」

嶺が召喚したモンスターの効果に驚いた小羽が嶺に先ほど言われた事を言い返すと、嶺は苦笑しながら小羽をなだめた。

「ま、まぁまぁ、落ち着いて。
とりあえず、デュエルを再開するよ？」

「むぅっ、解りました」

「あはは～っ（あちゃ～、怒らせちゃったかな？）」

嶺がデュエルを再開すると言うと、小羽は渋々納得して嶺はデュエルを再開した。

「私は速攻魔法、手札断殺を発動！
このカードの効果で、お互いに手札のカード2枚を墓地に送り、新たにデッキから2枚ドロー！
さらに、魔法都市エンディミオンに魔力カウンターが1つ乗るよ！」

手札断殺の効果で、小羽は手札の精鋭のゼピュロスとデルタ・クロウ－アンチ・リバースを墓地に送り、嶺は手札の魔力掌握と2枚目の魔法都市エンディミオンを墓地に送り、カードをドローした。

魔法都市エンディミオン　魔力カウンター×1

「さらに、神聖魔導王エンディミオンの効果を発動！
このカードは、1ターンに1度手札の魔法カード1枚を墓地に送る事で、フィールド上に存在するカード1枚を選択して破壊する事が出来る！
このカードの効果で、手札の魔法石の採掘を墓地に送り、アーマード・ウィングを破壊するよ！」

「させません！
罠カード、ボム・ガードを発動します！
このカード、私の場のモンスター1体を破壊する効果が発動した時、その効果の発動を無効にして破壊。
さらに、相手に５００ポイントのダメージを与えます！」

「なら、ディフェンダーの効果で、ディフェンダーに乗っている

魔力カウンターを取り除いてエンディミオンの破壊を無効にするよ」

「ですが、ダメージは受けてもらいます！」

「キャッ！？」

魔導騎士ディフェンダー　魔力カウンター１↓０

嶺開花　ＬＰ４０００↓３５００

嶺がエンディミオンの効果でアーマード・ウィングを破壊しようとするが、小羽は罠カードでそれを防いで、逆に相手にダメージを与えた。

「あちゃー、ドジったなー。
それじゃ、カードを１枚伏せてターンエンドだよ」

嶺　手札０枚

「私のターン、ドロー！
私は、ＢＦ－銀盾のミストラルを守備表示で召喚！
さらに、黒い旋風の効果でデッキから銀盾のミストラルの攻撃力１００未満の攻撃力の、ＢＦ－熱風のギブリ（攻／守０／１６００）を手札に加えます！」

「バトル！
ＢＦ－アーマード・ウィングで神聖魔導王エンディミオンを攻撃！
ブラック・ハリケーン！」

「攻撃力は、エンディミオンが上だけど・・・」

「そうです、アーマード・ウィングは戦闘では破壊されず、戦闘によるダメージは０になり、エンディミオンに楔カウンターを１つ置きます！

この楔カウンターを全て取り除くことで、楔カウンターの乗っているモンスターの攻守を０にすることが出来ますけど、このターン楔カウンターは取り除きません。

その代わり、私はこの戦闘のダメージステップ終了時に手札のモンスターの効果を発動します！」

「えっ、このタイミングで発動するカード！？」

「私は、手札のＢＦ一二の太刀のエテジア（攻／守４００／１６００）の効果を発動します！

このカードは、私の場のＢＦと名の付くモンスターが、相手の場のモンスターと戦闘したダメージステップ終了時に戦闘を行った相手モンスターがフィールド上に存在する場合、手札から墓地に送ることで相手に１０００ポイントのダメージを与えます！」

「なっ！？」

小羽の場のアーマード・ウィングが嶺に場のエンディミオンに攻撃を仕掛けると、エンディミオンは手に持った杖でアーマード・ウィングの攻撃を防ぐが、アーマード・ウィングはその杖に楔を打ち込んで再び距離を取った。

そして、アーマード・ウィングが距離を取ると、アーマード・ウィングによって死角になっている位置から嶺に向かって二本の刀を

持った半透明になったモンスターが嶺を切り付けてダメージを与えた。

嶺開花　ＬＰ３５００→２５００

「私はこれでターンを終了します」

小羽　手札２枚

「お願い、私のデッキ！
私のターン、ドロー！
やった！」

「え？」

「手札から魔法カード、強欲な壺を発動！
このカードの効果で、デッキからカードを２枚ドロー！
そして、魔法カードが発動した事で魔法都市エンディミオンにカウンターをつ置くよ！」

魔法都市エンディミオン　魔力カウンター×２

「来た来た！
手札からレベル２のチューナーモンスター、マジカルフィシアリスト（攻／守８００／４００）を攻撃表示で召喚！
このカードは召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを１つ置く。

そして、このカードに乗っている魔力カウンターを1つ取り除くことで、自分の場のモンスターの攻撃力をエンドフェイズまで500ポイントアップさせる事が出来るよ！」

魔導騎士ディフェンダー　攻1600↓2100

「私は、マジカルフィシアリストに乗っている魔力カウンターを取り除いて、ディフェンダーの攻撃力を500ポイントアップ！
さらにリバースカードオープン、ディメンション・マジック！」

「そのカードは！？」

「えへへー、ディメンション・マジックは自分の場の魔法使い族モンスター1体を手札に戻すことで、手札の魔法使い族モンスター1体を特殊召喚して、相手の場のモンスター1体を破壊することが出来るカード！
このカードの効果で、私は場の神聖魔導王エンディミオンを手札に戻し、手札からクルセイダー・オブ・エンディミオン（攻／守1900／1200）を攻撃表示で特殊召喚！」

「さらに、ディメンション・マジックの効果で、アーマード・ウィングを破壊！」

「あぅっ、アーマード・ウィングが・・・」

「そして、魔法カードが発動したことで魔法都市エンディミオンに魔力カウンターを1つ乗せるよ！」

魔法都市エンディミオン　魔力カウンター×3

嶺が発動させた魔法カードの効果で、嶺は自分の場と手札のモンスターを入れ替え小羽の場のアーマード・ウィングを破壊して、フィールド魔法にさらにカウンターを乗せた。

「そして、レベル４のクルセイダー・オブ・エンディミオンにレベル２のマジカルフィシアリストをチューニング！
魔導の光、今此処に集いて、爆発せよ！シンクロ召喚！
出番だよ、エクスプローシブ・マジシャン（攻／守２５００／１８００）！」

「攻撃力２０００以上のモンスターが２体も・・・」

「それだけじゃないよ！
エクスプローシブ・マジシャンの効果発動！
このカードは自分の場に存在している魔力カウンターを２つ取り除く事で、相手のの場の魔法・罠ゾーンに存在するカードを１枚破壊することが出来る！
エクスプローシブ・マジシャンの効果で、魔法都市エンディミオンに乗っている魔力カウンターを２つ取り除いて、小羽ちゃんの場のリバースカードを破壊するよ！」

「うぅっ、ですがこの瞬間、破壊された罠カード、ＢＦ－マインの効果発動！」

「ええっ！？」

「罠カード、ＢＦ－マインは自分の場にＢＦと名の付いたモンスターが存在する場合、相手のカード効果で破壊された時、相手に１０００ポイントのダメージを与えて、デッキからカードを１枚ドロ

ーします！」

「うそっ、またドジったー！？」

嶺開花　ＬＰ２５００→１５００

嶺がエクスプローシブ・マジシャンの効果で、小羽の場のセットカードを破壊すると、破壊されたカードの破片が嶺に襲い掛かりダメージを与えた。

「くぅっ、とりあえず魔導騎士ディフェンダーを攻撃表示に変更してバトル！
ディフェンダーで銀盾のミストラルを攻撃！」

「銀盾のミストラルの効果発動！
銀盾のミストラルが戦闘で破壊されたターン、１度だけ相手モンスターの攻撃によるダメージを０にします！」

「なら、私はこれでターンエンド」

嶺開花　手札０枚

「私のターン、ドロー！
あっ」

『あららー、ＬＰは勝ってるけど結構ヤバめな状況だねー』

「うん、だけどマリナが来てくれたから、もう大丈夫だよ」

『あはははっ、そんなに信頼してくれるんなら、私も頑張り甲斐があるってもんだねー』

「いくよ、マリナ」

『オッケー、全力全壊だー！』

「なんか、字が違わない？」

『気にしたら負けだよー』

小羽が精霊のカードであるブラック・マジシャン・ガールのカードを引き、嶺に聞こえない小さな声でマリナと話していると、そんな小羽の行動を不思議がった嶺が小羽に話しかけた。

「ねぇ、さっきから小声で何を喋ってるの？」

「ふぇ！？
な、なんでもないですよ！？」

『そんなに驚いてたら、嘘だってのがバレバレだよー』

「本当に？」

『ほら、疑われてるじゃん』

「うぅっ、本当になんでもないんですってば！」

「そ、そう？

まぁ、なんでもないならいいんだけど」

小羽が嶺の質問を必死で否定すると、嶺は小羽の様子に驚きながらも小羽の言葉に頷いた。

「なら、デュエルを再開しますよ？」

「うん、良いよー」

「それでは、いきます！
手札から魔法カード、闇の誘惑を発動します！
このカードの効果で、デッキからカードを2枚ドローして、手札の闇属性のＢＦ－熱風のギブリを除外します！」

「魔法カードが発動したことで、エンディミオンに魔力カウンターを1つ置くよ」

魔法都市エンディミオン　魔力カウンター×1

「私は、さらに手札からチューナーモンスター、ＢＦ－極北のブリザードを攻撃表示で召喚します！
この瞬間、極北のブリザードの効果を発動します！
極北のブリザードが召喚に成功した時、墓地に存在するレベル４以下のＢＦと名の付いたモンスター1体を自分の場に効果を無効にして、守備表示で特殊召喚することが出来ます！」

「この効果で、私は墓地からレベル４の蒼炎のシュラを特殊召喚します！
さらに、黒い旋風の効果でデッキから攻撃力１３００未満のＢＦ

―空風のジン（攻／守６００／５００）を手札に加えます。
そして手札から魔法カード、二重召喚を発動します！
このカードの効果で、私はこのターンもう一度モンスターを通常召喚することが出来ます！」

「けど、魔法カードが発動したことで、エンディミオンに魔力カウンターがまた１つ乗るよ！」

魔法都市エンディミオン　魔力カウンター×２

「私は場の蒼炎のシュラをリリースして、手札からブラック・マジシャン・ガール（攻／守２０００／１７００）を攻撃表示でアドバンス召喚します！」

『よーし、久しぶりの出番だから、張り切っていくよー！』

「うそっ、ブラック・マジシャン・ガール！？」

小羽がマリナのカードを召喚すると、嶺は驚いて声を挙げて興奮した様子で小羽に質問した。

「ね、ねぇ！
そのブラック・マジシャン・ガールのカードって本物！？」

「は、はい、そうですけど」

「良いな、良いなー。
ねぇ、私の持ってるカードと交換してくれない？」

「だ、駄目ですよ！？
このカードは私の一番のお気に入りで、大切な友達（カード）なんですから！」

「じょ、冗談だって、だからそんなに警戒しないでよー（出来れば本当に欲しかったんだけどね～）」

「本当に、冗談ですよね？」

「も、もちろんだよ」

嶺がブラック・マジシャン・ガールのカードを物欲しそうに見ると、小羽はカードをセットしているデュエルディスクを抱え込むようにして嶺を睨むと、嶺は渋々といった感じでカードの事を諦めた。

そして、嶺は鳥獣族ばかりのＢＦを使う小羽がデッキにブラック・マジシャン・ガールを入れている事が気になって小羽にその理由を尋ねた。

「ねぇ、どうして小羽ちゃんはそのカードをデッキに入れてるの？」

「えっと、どういう意味ですか？」

「さっきから小羽ちゃんが使ってる、ＢＦってカード種族が全部鳥獣族じゃない？
だから、魔法使い族のブラック・マジシャン・ガールを入れてるはなんでかなーって。
あっ、もしかして好きだから入れてるとか！」

「それもありますけど、それだけじゃないです」

「それじゃ、なんで入れてるの？」

「今からその理由を見せてあげます！」

「見せるって、どういう・・・」

「いきます！

レベル６のブラック・マジシャン・ガールにレベル２極北のブリザードをチューニング！

魔法を操る乙女、今こそ漆黒の翼を得て、大空に羽ばたいて！シンクロ召喚！

舞い上がれ、ＢＦ－賢風（けんぷう）のウィング・マジシャン・ガール（攻／守２５００／２０００）！」

小羽の場の極北のブリザードが羽ばたいて風を起こすと、その風が竜巻になってブラック・マジシャン・ガールを包み込み、その竜巻が晴れるとその中にから、背中に一対の黒い翼を生やし、手には鳥の翼の形を模した杖を持ち、頭の帽子が黒い鳥の頭の様な形になり、短かったスカートはスリットの入った足首まである黒いロングスカートになり、靴にも小さな黒い羽が着いた姿のマリナが居た。

『さーて、この姿になるのは初めてだけど、いつも通り頑張るよ！』

「うん、頼りにしてるよマリナ」

『任せてー、今の私は六課の隊長さえも凌駕する！』

「？」

マリナの言葉に頭の上に？マークを浮かべるが、小羽は今は気にしないようにして嶺に話しかけた。

「嶺さん、これが私のデッキのエースモンスター、ＢＦ－賢風のウィング・マジシャン・ガールです！」

「もしかして、そのモンスターの召喚条件って・・・」

「はい、このモンスターはＢＦのチューナーとブラック・マジシャン・ガールをシンクロ素材にするシンクロモンスターです」

「なるほど、これがさっき言った理由なんだね？」

「はい！
それでは、デュエルを再開しますよ！」

「うん、いつでも良いよ！（あのモンスターの攻撃力は２５００、ディフェンダーが攻撃されてもライフは残る、それにディフェンダーの効果で魔力カウンターを取り除けば、ディフェンダーの破壊は防げる。
それに、次の私のターンで除外している護封剣が手札に来るから、このターンを乗り越えればまだチャンスはある！）」

小羽が召喚したモンスターに驚いた嶺の質問に答えると、小羽はデュエルを再開させた。

「それではまず、ＢＦ－賢風のウィング・マジシャン・ガールの効果を発動します！

ウィング・マジシャン・ガールは私の墓地に存在する、ＢＦと名の付くモンスター１種類に付き、攻撃力を１００ポイントアップします！」

「私の墓地に存在するＢＦと名の付くモンスターは、蒼炎のシュラ、そよ風のブリーズ、銀盾のミストラル、アーマード・ウィング、二の太刀のエテジア、極北のブリザード、追い風のアリゼ、精鋭のゼピュロスの合計８種類！

よって、ウィング・マジシャン・ガールの攻撃力は８００ポイントアップして、攻撃力は３３００ポイントになります！」

「うそっ、攻撃力３３００！？」

「バトル！

ＢＦ一賢風のウィング・マジシャン・ガールで魔導騎士ディフェンダーを攻撃！

ブラック・フェザー・マジック！」

『受けてみて、コレが私の全力全開！』

「キャアァァッ！？」

嶺開花　ＬＰ１５００→０

マリナが手に持った杖を掲げると、杖の先端に黒い光が集中し、その光をエクスプローシブ・マジシャンに向けると、杖の先端に集中した光が黒い羽を纏いながら魔導騎士ディフェンダーに襲い掛かり、その光が命中すると周囲に黒い羽が舞い、攻撃を受けた魔導騎士ディフェンダーは跡形も無く消えてしまった。

「あちゃー、負けちゃったかー」

「それじゃあ、約束忘れないでくださいよ？」

「うん、それはもちろんだよー。
それはそうと、小羽ちゃん」

「何ですか？」

「私と一緒にアイドルデュエリスト目指さない！？」

「ふぇっ！？」

「大丈夫、小羽ちゃんなら絶対なれるから、一緒にアイドルデュエリスト目指そうよ！」

「け、結構ですー！！」

「気が向いたら声を掛けてねー！
いつまでも待ってるからー！」

嶺が小羽の手を握って、引っ付くくらい顔を近づけて小羽を勧誘すると、小羽は嶺の手を振り払って走ってその場を去って行き、そんな小羽の後ろ姿を見ながら嶺は手を振って小羽を見送った。

そして、小羽が祐騎の部屋に戻ると既に蓮は目を覚ましており、戻ってきた小羽の様子が気になった二人が小羽に質問するが、小羽は二人の質問に答える前に力尽きてしまい、そのまま眠ってしまったため、二人は小羽に話を聞くことが出来ず、その日はそのまま解

散することになった。

ちなみに、蓮と小羽はブルー寮に戻ると面倒なことになるので、現在は万丈目が増築した部屋で眠る事にしているため、蓮は疲れて寝てしまった小羽をベットまで抱えて運び、蓮もそのまま眠りに付いた。

こうして、小羽にとって長い一日は終わった。

第二十八話　羽ばたけ、ＢＦ一賢風のウィング・マジシャン・ガール！（後書き

どうだったでしょうか？

オリカを強くしすぎたかもしれないですけど、ＢＦならコレくらいの効果でも良いかなと思ってこの効果にしました。

詳細はまたオリカ紹介の方に乗せておきますので、気になった方は見てみてください。

それでは、次回もこの小説をよろしくお願いします。

追記：感想からの指摘でもう少し控えめな効果の方が良いかもしれないと言われ、改めて考えてみると、デッキ全体で見ると効果が強くなりすぎていたので、オリカの攻撃力上昇能力の攻撃力の上昇値を３００から１００に変更しました。

番外編その2～闇纏う風と旋風の守護者～（前書き）

一ヶ月ぶりにようやく更新です。

今回は、語り部さんの作品である、遊戯王ＧＸ～闇纏う風と盗賊王～とのコラボになります。

それでは、番外編その２始まります。

番外編その2～闇纏う風と旋風の守護者～

～アカデミア校舎内～

ＴＶでのジョシュアの発言から数日経ったある日、蓮と小羽は他に誰も居ない校舎の中を歩いていた。

「あの、お姉ちゃん、なにか変じゃないですか？」

「ええ、変ね、校舎の中に誰も居ないなんて普通じゃないわよ」

「その割には落ち着きすぎだと思うんですけど・・・」

「前にも何回かこんな感じになってるから、もう慣れたわよ」

「何回もですか！？」

「ええ、だから大丈夫よ。
私達以外にも誰かこの近くに居るはずだから、その相手とデュエルしたら元の場所に帰れるはずだから」

「そうなんですかぁ」

蓮と小羽が話しながらレッド寮に向かって歩いていると、黒い髪をショートカットにしてオベリスクブルーの制服を着た何かを探すように周囲を伺っている少女が居た。

「もしかして、あの人ですか？」

「多分ね。
他にも誰か居るかも知れないけど、とりあえず話を聞いてみましょうか」

「うん！」

蓮と小羽はそう言うと、黒髪の少女に向かって歩き出した。

そして、少女の近くまで来ると、小羽がその少女に声を掛けた。

「あの～、少し良いですか？」

「誰だ、お前ら？」

小羽が少女の声を掛けると、少女は鋭い目を小羽に向け、その目を向けられた小羽は萎縮して蓮の後ろに隠れる様に移動した。

「あ～、いきなり話しかけて驚いたのは解るけど、うちの義妹を睨まないで貰えるかしら」

「睨んでねぇよ、この目は生まれつきだ」

「そうなの？
初めて会うのに、失礼なこと言って、ごめんなさいね。
それはともかく、まずは自己紹介ね。
私の名前は紅龍蓮、後ろに居るのが私の義妹の小羽よ」

「オレは、加賀見（かがみ）沙耶（さや）だ」

「よ、よろしくお願いします」

「ああ」

お互いに自己紹介を終えると、蓮は沙耶にこの世界について説明した。

「と、いうわけで、ここは私や小羽の居た所でも、貴女の居た場所でも無い場所なの。
だから、他に誰か居ないか確認した後で、デュエルをすれば元居た場所に帰れるはずよ」

「本当の話なのかよ、それ」

「ええ、本当よ。
それに、カードの精霊が居るんだから、異世界が在ってもおかしくないでしょ？」

「アンタも精霊が見えるのか！？
いや、それよりも何でオレにそのことを話したんだ？」

「ええ、私だけじゃなくて小羽も見えるわよ。
それに、話した理由は貴女の後ろでうちの変態を返り討ちにしてるドラゴンが見えてるからよ」

「はぁ？」

蓮の言葉に後ろを振り返ってみると、そこにはタイラントドラゴンに追いかけられているティルと、そんなティルの姿を見て爆笑しているマリナが居た。

『あ～ん、ちょっと驚かせようと思っただけなのに～！？』

『グオオオッ！！』

『あっはははは！
面白～い、もっとやっちゃえー！』

「な、なんだ、この状況・・・」

「気にしないで良いわよ。
貴女にちょっかい出そうとしたうちの変態精霊を、貴女の精霊が追い払ってるだけだろうから」

呆気にとられている沙耶に蓮が状況の説明していると、タイラントドラゴンに追いかけられていたティルは、最終的にタイラントドラゴンの吐いた炎に焼かれてボロボロになり、ティルのその姿を見たタイラントドラゴンはカードへと戻って行った。

「とりあえず、私達はレッド寮に行くけど、一緒に行く？」

「あ、ああ、それは構わねえけど、あれは放置してて良いのかよ？」

「ええ、あの変態にはアレくらいならむしろご褒美なんじゃないかしら」

「そ、そうなのか？」

蓮はそう言って小羽と沙耶を連れてレッド寮に向かって歩き出した。

ちなみに、その場に放置されたティルは恍惚な表情をしており、
そんなティルを見てマリナはかなり引いていたが、後でレッド寮に
連れて行くため仕方なくその場に残った。

～レッド寮前～

蓮達がアカデミアからレッド寮に続いている道を進んでいると、
レッド寮の前に佇んでいる黒髪の少年が居るのが見えてきた。

そして、その少年を見た沙耶は走ってその少年のところに行って
しまった。

「あの人の知り合いだったんですね」

「そうみたいね、とりあえず話をしに行きましょうか」

「は、はい・・・」

蓮が沙耶の知り合いの少年のところに行こうとすると、小羽は蓮の服の袖を持って蓮の後を付いていった。

そして、沙耶と少年に近づいて行き、少年の顔を見た蓮は無意識の内に思った事を声に出してしまった。

「・・・バクラ？」

「「！？」」

「アンタ、なんでその名前を・・・」

「ハァ、その反応だと、あの盗賊王と関係あるみたいね」

蓮が呟いた単語に沙耶と少年が反応すると、蓮は面倒な事になったなと思いながら話を続けた。

「とりあえず自己紹介ね。
私の名前は紅龍蓮よ」

「わ、私の名前は紅流小羽と言います、よろしくお願いします！」

「俺は紫藤嵐（しどうあらし）、呼び方は好きにしてくれ。
それよりも、アンタどうしてバクラの事を知ってる？」

「えっと、どう言ったら良いか」

「・・・もしかしてアンタ、別の世界から来た、とかか？」

「っ！え、ええ、そうよ。
それにしても、いきなりその話が出るってことは貴方も私と同じってことで良い訳ね？」

「ああ、そういうことになるな」

嵐と蓮がお互いについて話し合っていると、レッド寮の一室から寝ぼけ眼の祐騎と、そんな祐騎の側で浮かんでいるエールが出てきた。

「ふぁ～っ、良く寝たぁ～」

『もう、マスターは寝すぎですよ。
また変な世界に来たっていうのに、相変わらず起きないんですから』

「そう言わないでよ、眠いものは眠いんだからさ～」

「けど、流石にちょっと寝すぎよ祐騎」

「あれ？
蓮さんに小羽ちゃんも、どうしたんですか、こんなところで」

「はぁーっ、またこのおかしな世界に来たから祐騎を迎えに来たんじゃない」

「それは、すみませんでした。
それより、そちらの方達は一体？」

祐騎は蓮に嵐と沙耶の事を聞くと、蓮は今までのことを祐騎に説

明し、蓮が祐騎に説明をしている間に、沙耶は嵐に蓮から聞いたこの世界の事を説明した。

「挨拶が遅れてすみません。
僕の名前は甲斐祐騎と言います、よろしくお願いします」

「ああ、よろしくな。
それじゃ、さっさと元の場所に戻れるよう、早速デュエルしようぜ。
こっちは、俺がやるからそっちも誰がやるか決めてくれ」

祐騎が自己紹介をすると、嵐が早くデュエルしようと提案した。

「えっと、それじゃあ誰がやりましょうか？」

「私と小羽はティルとマリナがまだ戻ってきてないから、頼んでも良い？」

「はい、それは構いませんよ。
それじゃ、始めましょうか」

「ああ、いくぞ！」

祐騎と嵐がデュエルをする為に対峙すると、蓮達は邪魔にならないように距離を取った。

「「デュエル！」」

祐騎　ＬＰ４０００

嵐　ＬＰ４０００

「先攻は貰います、ドロー！
僕は手札から、ガスタの巫女　ウィンダ（攻／守１０００／４００）を守備表示で召喚！
さらにカードを２枚伏せてターンエンド」

祐騎　手札３枚

「俺のターン、ドロー！
俺は手札から、霞の谷のファルコン（攻／守２０００／１２００）を攻撃表示で召喚！
さらにカードを１枚伏せる」

「バトル！
俺は、さっきセットしたカードを手札に戻し、霞の谷のファルコンでガスタの巫女　ウィンダを攻撃！
ミスト・スラッシュ！」

嵐の場の霞の谷のファルコンが祐騎の場のウィンダを破壊すると、破壊されたウィンダの居た場所に風が渦巻き、その中から小さな鳥が飛び出した。

「ガスタの巫女ウィンダが相手モンスターとの戦闘で破壊された時、デッキからガスタと名の付くチューナーモンスター１体を特殊召喚することが出来ます！
この効果で、僕はデッキからチューナーモンスター、ガスタ・ガルド（攻／守５００／５００）を守備表示で特殊召喚します！」

「チューナーモンスターってことは、シンクロ召喚か」

「チューナーモンスターに、シンクロ召喚って何言ってるんだ？」

「まぁ、黙って見てなさい。
すぐに答えが解るわよ」

祐騎と嵐の会話をシンクロ召喚を知らない沙耶が不思議に思っているが、蓮に言われてデュエルの観戦を続けた。

「俺はカードを3枚伏せてターンエンドだ」

嵐　手札2枚

「僕のターン、ドロー！
僕は、手札から2枚目のガスタ・ガルドを守備表示で召喚して、ターンエンドです」

祐騎　手札3枚

「俺のターン、ドロー！
守ってばかりじゃ勝てないぜ！
俺は手札からキラートマト（攻／守１４００／１１００）を攻撃表示で召喚！」

「バトル！
俺は場のセットカードを１枚手札に戻し、霞の谷のファルコンでガスタ・ガルドを攻撃！」

「ガスタ・ガルドの効果を発動します！
ガスタ・ガルドがフィールドから墓地に送られた時、デッキからレベル２以下のガスタと名の付くモンスター１体を特殊召喚する事が出来ます！
このカードの効果で、デッキからガスタ・イグル（攻／守２００／４００）を守備表示で特殊召喚します！」

「ならキラートマトで２体目のガスタ・ガルドを攻撃だ！」

「なら、もう一度ガスタ・ガルドの効果を発動します！
効果により、デッキからガスタ・スクレイル（攻／守０／１８００）を守備表示で特殊召喚します！」

「俺はカードを１枚伏せてターンエンドだ」

嵐の場のモンスターの攻撃を受けても、祐騎の場のモンスターの数は変らず、嵐はカードをセットしてターンを終了した。

嵐　手札２枚

「僕のターン、ドロー！
僕は、手札から魔法カード、ガスタの交信を発動します！
このカードは、墓地に存在するガスタと名の付くモンスター2体をデッキに戻す事で、相手の場に存在するカード1枚を破壊します！
このカードの効果で、墓地のガスタ・ガルドとガスタの巫女　ウィンダをデッキに戻してセットカードを破壊します！」

祐騎が発動した魔法カードの効果で、嵐の場にセットされていたミラーフォースが破壊された。

「クッ！」

「そして、僕は手札から2枚目のガスタ・スクレイルを攻撃表示で召喚します！
そして、モンスターの召喚に成功した事で罠カード、激流葬を発動します！」

「なら、チェーンして罠カード、風霊術―雅―を霞の谷のファルコンをリリースして発動！
このカードの効果で、祐騎の場の守備表示のガスタ・スクレイルをデッキの一番下に戻す！」

祐騎が罠カードを発動すると、嵐は自分の場のモンスターが破壊される前に自分の場のモンスターをリリースして罠カードを発動させた。

そして、祐騎が発動させた罠カードの効果で、フィールド上のモンスターが全て破壊された。

「ですが、この瞬間、破壊されたもう一体のガスタ・スクレイルの効果を発動！
　このカードがカード効果で破壊され墓地に送られた時、デッキからレベル５以上のガスタと名の付いたモンスター１体を特殊召喚することが出来ます！
　このカードの効果で、僕はデッキからレベル５のガスタの疾風（しっぷう）リーズ（攻／守１９００／１４００）を攻撃表示で特殊召喚！」

「バトル！
ガスタの疾風　リーズでダイレクト・アタック！
ソニック・ザンバー！」

「リバースカードオープン！
罠カード、魔法の筒を発動！
このカードの効果で、祐騎のモンスターの攻撃を無効にして無効にした数値分のダメージを与える！」

「させません！
カウンター罠、魔宮の賄賂を発動します！
このカードの効果で、魔法の筒の発動を無効にして破壊します！」

「グッ！？
だが、魔宮の賄賂の効果でデッキからカードをドローする！」

祐騎の場のモンスターが嵐に攻撃を仕掛けると、嵐はセットしていた罠カードを発動させるが、祐騎はそのカードの効果をセットしていたカードで無効にして、モンスターの攻撃を嵐にヒットさせた。

嵐　ＬＰ４０００→２１００

「僕はカードを2枚伏せてターンエンドです」

祐騎　手札0枚

「俺のターン、ドロー！
俺は、墓地の霞の谷のファルコンとキラートマトを除外して手札から、ダーク・シムルグ（攻／守2700／1000）を攻撃表示で特殊召喚する！」

「バトル！
ダーク・シムルグでガスタの疾風　リーズを攻撃！
ダークテンペスト！」

「罠カード、フローラル・シールドを発動！
このカードの効果で、ダーク・シムルグの攻撃を無効にしてデッキからカードを1枚ドローします！」

「なら、俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ」

嵐　手札2枚

「僕のターン、ドロー！
僕は手札から、ガスタ・サンボルト（攻／守1500／1200）を攻撃表示で召喚！
さらに、罠カード、ガスタへの祈りを発動！
ガスタへの祈りは、自身の墓地に存在するガスタと名の付くモンスター2体をデッキに戻すことで、墓地に存在するガスタと名の付

くモンスター1体を特殊召喚することが出来る！」

「僕は、このカードの効果で墓地のガスタ・スクレイルとガスタ・ガルドをデッキに戻し、墓地のガスタ・イグルを攻撃表示で特殊召喚！」

「そして、レベル5のガスタの疾風　リーズにレベル1のガスタ・イグルをチューニング！

疾風と共に在る乙女、今こそ一陣の風と共に全てを包み込め！シンクロ召喚！

舞え、ダイガスタ・スフィアード（攻／守２０００／１３００）！」

祐騎の場のガスタの疾風　リーズの周りをガスタ・イグルが飛び回ると、リーズを竜巻が包み込み、リーズを包み込んだ竜巻が晴れると、そこにはリーズの束ねた髪を解き、顔に金色の仮面の様な物を被った姿のモンスターが現れた。

「ダイガスタ・スフィアードの効果を発動！

ダイガスタ・スフィアードがシンクロ召喚に成功した時、墓地に存在するガスタと名の付くカード1枚を手札に加える事が出来る！

この効果で、墓地からガスタへの祈りを手札に加えます！」

「そして、バトル！

ガスタ・サンボルトでダーク・シムルグを攻撃！

ライジング・ソニック！」

「くっ、迎え撃て、ダーク・シムルグ！

ダークテンペスト！」

祐騎が嵐の場のダーク・シムルグを攻撃力の低いサンボルトで攻撃したことに、沙耶と小羽は不思議そうに祐騎を見て呟いた。

「・・・あいつ、攻撃力の低いモンスターで攻撃するなんて、どういうつもりだ？」

「いえ、アレで良いのよ」

「お姉ちゃん、どういう事？」

「見てれば解るわよ。
それに、嵐の方は理解してるみたいだし」

蓮が沙耶と小羽にそう言うと、二人はデュエルの観戦に集中すると、サンボルトの攻撃に反撃したダーク・シムルグの攻撃でサンボルトが破壊されていた。

そして、祐騎に向かってサンボルトとの戦闘によって発生したダーク・シムルグの戦闘ダメージが襲い掛かると、ダーク・シムルグの攻撃を風が包み込み、その攻撃はそのまま嵐に向かって行った。

「ダーク・シムルグとバトルしたことでサンボルトは破壊され、

僕は戦闘ダメージを受けますが、この瞬間ダイガスタ・スフィアードの効果が発動します！
ダイガスタ・スフィアードがフィールド上に表側表示で存在する時、自分の場に存在するガスタと名の付くモンスターが相手モンスターとの戦闘で受けるコントローラーへの戦闘ダメージは、代わりに相手が受けるようになります！
ミラージュ・オブ・ペイン！」

「クッ！」

嵐　ＬＰ２１００→９００

祐騎がダイガスタ・スフィアードの効果で、自分が受けるはずの戦闘ダメージを嵐に移したことに驚いて沙耶は声を挙げた。

「なんだよ、あの効果！？」

「アマゾネスの剣士の効果と同じ効果を特定のモンスターに共有させる効果、それがあのカードの２つ目の効果よ」

「２つ目ってことは、まだ効果があるんですか？」

「ええ、ダイガスタ・スフィアードは前の２つの効果の他に、戦闘では破壊されないっていう効果があるのよ。
だから、スフィアード自身とリクルーターのガルド、イグル、サ

ンボルトの順で相手モンスターに攻撃すれば、１ターンで大ダメージを与えられるってわけ」

蓮の言葉を聞いて、沙耶は不安そうにデュエルをしている嵐を見つめた。

「そして、スフィアードでダーク・シムルグを攻撃！
エクストリーム・ソニック・ザンバー！
スフィアードは自身の効果により、戦闘ダメージは相手が受け、このカードは戦闘では破壊されません！」

「グッ！」

嵐　ＬＰ９００→２００

「これで、僕はバトルフェイズを終了します。
そして、この瞬間、墓地のガスタ・サンボルトの効果を発動！
ガスタ・サンボルトは戦闘で破壊されたターンのバトルフェイズ終了時に、墓地に存在するガスタと名の付くモンスター１体を除外することで、デッキから守備力１５００以下の風属性、サイキック族モンスター１体を特殊召喚することが出来る！」

「僕はこの効果で、墓地のガスタ・サンボルトを除外して、デッキからガスタの賢者（けんじゃ）　ウィンダール（攻／守２０００／１０００）

を攻撃表示で特殊召喚！」

「僕はこれでターンを終了します」

「エンドフェイズに速攻魔法、終焉の焔を発動する！
このカードの効果で、俺の場に黒炎トークン（攻／守０／０）２体を守備表示で特殊召喚！」

祐騎　手札２枚

「俺のターン、ドロー！
手札から魔法カード、天使の施しを発動！
このカードの効果で、俺はデッキからカードを３枚ドローし、その後手札から２枚を墓地に送る！」

「そして、俺は、場の２体の黒炎トークンと墓地のクリッターをゲームから除外。
フィールドを取り囲み制圧しろ！
Ｔｈｅ　アトモスフィア（攻／守１０００／８００）を攻撃表示で特殊召喚！」

嵐がアトモスフィアを召喚すると、先ほどまで不安そうにデュエルを見ていた沙耶が声を挙げた。

「よし、嵐の切り札のアトモスフィアだ！」

「この状況でアトモスフィアか、祐騎にはきついわね」

「で、でも、あのモンスターの攻撃力はたったの１０００ですよ？それに、ダイガスタ・スフィアードが居る限り、お兄さんに戦闘ダメージは与えられないはずですよね？」

「いえ、アトモスフィアならこの状況を一気に逆転できるのよ」

蓮がそう言うと、小羽は不思議そうにデュエルに意識を戻した。

「アトモスフィアの効果を発動！
アトモスフィアは１ターンに１度、相手の場に存在するモンスター１体を選択して、選択したモンスター１体を装備カード扱いとして１体のみ、このカードに装備することが出来る！
この効果で、俺はダイガスタ・スフィアードを装備カード扱いで装備する！」

嵐の場に球体を抱えた鳥獣族モンスターが姿を現すと、その球体にダイガスタ・スフィアードが吸い込まれ、吸い込まれたダイガスタ・スフィアードは嵐のモンスターの抱える球体の中に閉じ込められたしまった。

「なっ、スフィアードが！？」

「そして、この効果で相手モンスターを装備した時、アトモスフ

ィアの攻撃力と守備力は装備したモンスターの数値分アップする！」

Ｔｈｅ　アトモスフィア　（攻１０００→３０００守８００→２１００）

「行くぞ！
バトル！
Ｔｈｅ　アトモスフィアでガスタの賢者　ウィンダールを攻撃！
テンペスト・サンクションズ！」

「くっ！」

「ダイガスタ・スフィアードは今アトモスフィアの装備カードとなっているため、効果は発動しない！
戦闘ダメージは受けてもらうぞ！」

祐騎　ＬＰ４０００→３０００

「さらに、ダーク・シムルグでダイレクトアタック！
ダークテンペスト！」

「ぐぅっ」

祐騎　ＬＰ３０００→３００

「俺はこれでターンエンドだ」

嵐　手札２枚

「僕のターン、ドロー！
僕は、手札から魔法カード、ライトニング・ボルテックスを発動！
手札のカード１枚を墓地に送る事で相手の場の表側表示のモンスターを全て破壊します！」

祐騎は手札から、ガスタへの祈りを墓地に送って魔法カードを発動させると、嵐の場のモンスターが全て破壊されてしまった。

「くっ、アトモスフィアが！」

「そして、僕は手札からガスタの静寂（せいじゃく）　カーム（攻／守１７００／１１００）を攻撃表示で召喚します！
さらに、ガスタの静寂　カームの効果を発動！
ガスタの静寂　カームは１ターンに１度、墓地に存在するガスタと名の付くモンスター２体をデッキに戻すことで、デッキからカードを１枚ドローすることが出来ます！」

「この効果で、僕は墓地のダイガスタ・スフィアードとガスタの賢者　ウィンダールをデッキに戻してカードを１枚ドローします！」

「これで終わりです、バトル！
ガスタの静寂　カームでダイレクトアタック！
サイレント・ソニック！」

「まだだ！
墓地のネクロ・ガードナーの効果を発動！」

祐騎が召喚したモンスターで攻撃を仕掛けると、嵐の墓地から黒い鎧を纏ったモンスターが現われて祐騎のモンスターの攻撃を防いだ。

「ネクロ・ガードナーは墓地から除外する事で相手モンスター１体の攻撃を無効にする事が出来る！」

「天使の施しの効果で墓地に送っていた訳ですか。
僕はカードを１枚伏せてターンを終了します」

祐騎　手札０枚

「俺のターン、ドロー！
よし！
俺は、手札から時を司る神鳥－ユリウス－（攻／守１００／１００）を墓地に送り効果を発動する！」

「時を司る神鳥－ユリウス－は、俺のターンのメインフェイズにのみ効果を発動することができ、ライフを半分支払う事で、このターンの前の自分、または相手のターン中に墓地に送られた自分の場のモンスターを可能な限り特殊召喚する！
ただし、この効果で特殊召喚したモンスターが破壊された時、俺は破壊されたモンスターの元々の攻撃力分のダメージを受ける！」

嵐　ＬＰ２００→１００

「俺は、ユリウスの効果で祐騎のターンで墓地に送られた、ダーク・シムルグとＴｈｅアトモスフィアを攻撃表示で特殊召喚するぜ

！」

「そして、アトモスフィアの効果でガスタの静寂　カームを装備カード扱いで装備する！」

Ｔｈｅ　アトモスフィア（攻／守１０００→２７００／８００→１９００）

「行くぞ、バトル！
Ｔｈｅ　アトモスフィアでダイレクトアタック！
テンペスト・サンクションズ！」

「うあああっ！！」

祐騎　ＬＰ３００→０

嵐がユリウスの効果で特殊召喚したアトモスフィアが祐騎の場のカームを吸収し、カームを吸収したアトモスフィアは祐騎にダイレクトアタックを仕掛け、祐騎のライフを０にした。

「もうちょっとだったんですけど、負けちゃいましたね。
けど、楽しいデュエルでした、ありがとうございます」

「ああ、こっちも楽しかったよ」

デュエルの決着が着いて祐騎と嵐が話していると、二人のデュエルを観戦していた蓮達が二人のところにやって来て、蓮と小羽は祐騎の側に行き、沙耶は嵐の側へと行った。

「惜しかったわね、祐騎」

「はい、もう少しだったんですけど、攻め切れなかったです」

『すみませんマスター、私が出ていれば負けずに済んだかもしれないのに・・・』

「ううん、エールのせいじゃないよ。
それに、エールを出せてても勝てたか解らないし、それよりも僕としてはエールが墓地に行ったままデュエルが終わらなくて良かったと思うんだ。
でも、次に嵐さんとデュエルする時は勝てるよう頑張ろうね」

『はい、マスター！
次は勝ちましょうね！』

エールがデュエルに出ることなく祐騎が負けた事に落ち込んでいると、祐騎がそんなエールを励ましていると、蓮が祐騎に話しかけた。

「それにしても、珍しいわね。
祐騎がエールを出さなかったなんて」

「そうですか？」

「ええ」

「まぁ、こういう事もありますよ。
それに、さっきエールにも言いましたけど、エールを出せてても

勝てたかは解りませんから」

『あらら、もう終わっちゃったの？』

祐騎と蓮が話していると、マリナに連れられたティルが祐騎達のところにやって来た。

「遅いわよ、此処に来るのにどんだけ掛かってるのよ」

『気絶してたんだからしょうがないでしょ～。
それよりも、私達を置いて行った蓮にそんな事言われたくないんだけど～』

「何言ってるのよ、アレは完全にアンタの自業自得でしょうが。
コレに懲りたら少しは自重することを覚える事ね」

『だが断る！
私は自分の思いを捻じ曲げてまで生きたくないのよ！』

「格好つけても駄目よ、この変態植物！」

『・・・小羽、私もう疲れたよ～』

「ど、どうしたの、マリナ！？」

蓮とティルが口論している側で、ティルを此処まで連れてくる事に精神的に疲れたマリナが小羽に抱きついたりしていると、嵐と沙耶が話し終えて祐騎達の方にやって来た。

「楽しかったぜ、祐騎」

「はい、こちらこそ楽しいデュエルでした」

「なぁ、これで元の世界に戻れるんだよな？」

「え？

ええ、多分そろそろ戻れると思うわよ」

ティルと口論していた蓮に沙耶が質問して、その質問に蓮が答えると、祐騎達を光が包み込み始めた。

「これは！？」

「言った側からもうお別れみたいね」

「じゃあ、これで元の場所に戻れる訳だな」

「ええ」

「それじゃあ、お二人とも縁が有ったらまたお会いしましょう」

「ああ、またな」

祐騎と嵐が別れの挨拶を済ませると、祐騎達を光が完全に包み込んで、祐騎達を元の場所へと飛ばした。

こうして、闇纏う風と旋風の守護者の特殊な邂逅は終わり、それぞれ在るべき場所へと戻っていった。

番外編その2～闇纏う風と旋風の守護者～（後書き）

どうだったでしょうか、今回のコラボは私の作品のキャラの視点で書いたので、語り部さんの作品のキャラの出番が少なくなってしまいました。

しかも、思った以上にスフィアードが強くて、エアトスを出さずにデュエルが終わってしまいました。

やっぱり、コラボは難しいというのを再確認しました。

こんな作者ですが、これからもこの作品をよろしくお願いします。

最後に、コラボしてくださった語り部さん、本当にありがとうございます。

この話を読んで、語り部さんの作品に興味を持った方は是非読んでみてください。

それでは、語り部さんの作品ともども、これからもよろしくお願いします。

第二十九話　祐騎ＶＳエックス　新たなる闇の胎動（前書き）

今回から、オリジナルの話に入ります。

後、今回の話で出すキャラの過去は作者の想像なので、本当はどうか知りませんので、注意してください。

それでは、第二十九話始まります。

第二十九話　祐騎ＶＳエックス　新たなる闇の胎動

～レッド寮～

ジョシュアの発言から始まった騒動が治まり、蓮が普通に授業を受けられる状態になるまでに、エド・フェニックスに敗れて十代が行方不明になったり、万丈目がホワイトサンダーになったり等、色々な事が起こっていた。

そんな事があった数週間が経過したある日、レッド寮の祐騎の部屋で祐騎と蓮がデッキの調整をしていると、自分の部屋に忘れ物をして祐騎の部屋から出て行った小羽が焦った様子で祐騎の部屋に戻ってきた。

「お姉ちゃん、お兄さん、大変です！！」

「ど、どうしたの、そんなに慌てて」

「い、今、ブルー寮にこの前ＴＶでジョシュアさんとデュエルしていたプロデュエリストのエックスって人がやって来て、お姉ちゃんを探して手当たり次第にデュエルしてるんです！！」

「はぁっ、何よそれ！？」

小羽から、エックスが自分を探して暴れていると聞いて、蓮は困惑しながらも祐騎たちと一緒にブルー寮へと向かって行った。

～ブルー寮～

「これで終わりだ、この雑魚共がぁ！！」

「う、うわぁぁぁっ！？」

祐騎達が小羽の話を聞いてブルー寮へとやって来ると、そこには複数のブルー寮の生徒を相手に鬼の様な形相でデュエルしているエックスの姿が在った。

「いい加減に出て来い！
このオレを虚仮にしたあの野郎を倒した奴が、此処に居るんだろうがぁ！」

「五月蝿いわよ、私に用が有るんだったら、もう少し静かにしてくれないかしら」

「っ！？」

デュエルを終え、負けたブルー寮の生徒達には目も暮れずに、叫

んでいるエックスに蓮が話しかけると、エックスはその声に反応して蓮を睨んだ。

「お前が紅龍蓮か？」

「ええ、そうだけど、私に何のようか解らないけど、こんな事をしなくても普通に尋ねて来れば直ぐに対応したんだけど？」

「そうか、お前が、お前が、あの野郎を倒したデュエリストか・・・」

「ねぇ、人の話聞いてるの？」

「ええ、聞いてますよ、聞いていますとも。
私がここに来たのは、貴女とデュエルするためなのですよ」

蓮がエックスに声を掛けると、エックスは先ほどまでの鬼の様な形相から一転して、歪んだ笑みを浮かべて蓮の方を向いて、ここにやって来た理由を話した。

「私と？」

「ええ、ええ、そうです。
貴女を倒せば私を虚仮にしたアイツを見返せるんですよ、この私を虚仮にしたアイツに、アイツのせいで私のプロデュエリスト人生はお終いですよ！」

「・・・そういうこと（大方、あのデュエルが原因で仕事が入らなくなったとか、契約が解消されたとかでプロデュエリストを続けられなくなったってとこでしょうけど、それにしたって雰囲気がお

かしいのよね）」

「ですから、私とデュエルをしてもらいますよ！」

「はぁっ、私には関係ないけど、このままだと被害が大きくなるだけだし、良いわ、デュエル「待ってください」って、祐騎？」

蓮がエックスとのデュエルを受けようとすると、祐騎が蓮の言葉を遮って引き止めた。

「その人とは僕がデュエルしますから、蓮さんは下がっていてください」

「祐騎！？」

「ア？

なんだお前は、オレの相手はそこの女だ、お前は関係ないだろうが！」

「関係ないのは蓮さんも同じです、貴方の事情に蓮さんを巻き込もうとするなら、先に僕を倒してからにしてもらいます」

「・・・良いだろう、そんなに言うならお前もそこの奴らと同じ目に合わせてやるよ！」

祐騎が蓮の代わりにデュエルすると言うと、エックスは不機嫌そうにしながらも祐騎とデュエルするために距離を取った。

「祐騎、別に私がやっても良いんだけど」

「いえ、あの人の相手は僕にやらせてください」

「で、でも、アイツは私を狙ってきた訳だし、それに祐騎がアイツとデュエルする理由なんて無いじゃない」

「いえ、理由なら有ります」

「え？」

エックスが祐騎から距離を取ると、祐騎はデュエルの準備をしながら蓮が祐騎にデュエルをする理由が無いのに何故デュエルしようとするのか聞くと、祐騎はエックスの方を睨みながら蓮に理由を答えた。

「あの人はカード達の事をただの物としか見ていません。

いえ、物としてだけでなく、自分の為の道具や使い捨ての駒ぐらいにしか思っていないのかもしれません」

「・・・」

「デュエリストにとってカード達は大切なパートナーであり、カード達にも魂が在るんです。

それが精霊のカードじゃなくても、そんな風にカードを使うあの人が許せないんです」

「そう、なら絶対に勝ちなさいよ！」

「もちろんです」

蓮との話を終えた祐騎は、エックスと対峙してデュエルディスク

を構えた。

そして、蓮はデュエルの邪魔にならない様に小羽と一緒に二人から距離を取った。

「話は済んだようだな、行くぞ！」

「ええ」

「「デュエル！」」

エックス　ＬＰ４０００

祐騎　ＬＰ４０００

「オレの先攻、ドロー！
モンスターをセット、カードを2枚伏せてターンエンドだ！」

エックス　手札3枚

「僕のターン、ドロー！
僕の墓地にモンスターが存在しない事により、手札からガーディアン・エアトスを攻撃表示で特殊召喚します！
さらに、ガスタの巫女　ウィンダを守備表示で召喚！」

「バトル！
ガーディアン・エアトスでセットモンスターを攻撃！
精霊のオペラ！」

「フンッ、セットモンスターはウォーム・ワーム（攻／守６００／１４００）だ！
このカードが破壊された時、相手はデッキの上からカードを3枚墓地に捨てる！」

「くっ」

エックスの場のセットモンスターが破壊されると、そのモンスターの効果で祐騎のデッキからガスタ・イグル、ガスタ・ガルド、精霊神器ーエクセリオンーが墓地に送られた。

「僕はカードを2枚伏せてターンエンド」

祐騎　手札2枚

「オレのターン、ドロー！
オレは、シールド・ワーム（攻／守８００／２０００）を召喚！
シールド・ワームは召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、守備表示になる。
さらに、このオレの場に存在する昆虫族モンスターの数だけ相手のデッキの上からカードを墓地に捨てさせる！」

「オレの場にはシールド・ワームが1体のみ、よってデッキから1枚墓地に捨てろ！」

「くっ、やはりデッキ破壊中心のデッキですか」

エックスが召喚したモンスターの効果で、祐騎のデッキからガス

タの巫女　ウィンダが墓地に送られた。

「オレは、これでターンエンドだ」

エックス　手札3枚

「僕のターン、ドロー！
ガスタの巫女　ウィンダを攻撃表示に変更して、バトル！
ガーディアン・エアトスでシールド・ワームを攻撃！
精霊のオペラ！」

「フンッ」

エアトスの攻撃でエックスの場のシールド・ワームが破壊されたが、エックスはその事にまるで感心が無い様な顔をしていた。

「ガスタの巫女　ウィンダでダイレクトアタック！」

「罠カード、ドレイン・シールドを発動！
このカードの効果で、オレはそのモンスターの攻撃力分のライフを回復する！」

「なっ！？（このタイミングでドレイン・シールドを使うなんて、さっきの攻撃の時に使っていればシールド・ワームは破壊されなかったのに、どういうつもりなんだ）」

エックス　ＬＰ４０００→５０００

「僕はこれでターンエンドです」

祐騎　手札3枚

祐騎はエックスの行動を不思議に思いながらも自分のターンを終了した。

「オレのターン、ドロー！」

エックスが自分のデッキからカードをドローすると、ドローしたカードには黒いオーラの様なモノが纏わり付いており、そのオーラがエックスを中心に広がっていき、一瞬で祐騎達を包み込むように周囲を黒い靄が覆い尽くした。

「なっ！？」

「クッ、ククッ、クハハハハッ！
来た、来た、キタァァ！」

祐騎がいきなり変化した周囲に驚いていると、エックスはさっきドローしたカードを手に興奮していた。

「オレは、罠カード、リビングデットの呼び声を発動！
このカードの効果で、オレは墓地からシールド・ワームを特殊召喚！」

「さらに、シールド・ワームの特殊召喚にチェーンして、手札から速攻魔法、地獄の暴走召喚を発動！
このカードの効果で、オレは手札、デッキ、墓地からシールド・ワーム2体をさらに特殊召喚する！

さぁ、お前もモンスターを召喚しろ！」

「僕は、デッキと墓地から2体のガスタの巫女　ウィンダを守備表示で特殊召喚する！」

「ヒャハハハハッ、シールド・ワーム3体が特殊召喚した事で、効果発動だ！
デッキから9枚のカードを墓地に捨てろ！」

「クッ！（このためにわざとシールド・ワームを破壊させた訳ですか）」

エックスが墓地のシールド・ワームの特殊召喚に対して地獄の暴走召喚を発動させると、エックスの場にシールド・ワームを2体新たに召喚され、エックスの場の3体のシールド・ワームの効果で祐騎のデッキから、ガスタの静寂　カーム、ガスタの疾風　リーズ、ブラスト・モード、ガスタの交信、スターダスト・シャオロン、魔導士の力、ダブル・ショット、ガスタ・スクイレル、貪欲な壺が墓地に送られた。

「そして！
場の2体のシールド・ワームをリリースして、手札からダークチューナー、カオスローグ（攻／守０／０）をアドバンス召喚！」

エックスがカオスローグを召喚すると、二人のデュエルを観戦していた蓮が驚いた様に声を挙げた。

「・・・嘘、何でアイツがダークチューナーを！？」

「お姉ちゃん、あのカードの事、知ってるんですか」

「え、ええ（なんで、地縛神はこっちの世界にはもう来ていないはず、なのになんでアイツがダークチューナーを）」

小羽の質問に、蓮は頭の中で考えながらデュエルの観戦に戻った。

「ククッ、行くぞ！
レベル４のシールド・ワームにレベル８のダークチューナー、カオスローグをダークチューニング！
闇と闇重なりし時、冥府の扉は開かれる、光無き世界へ！ダークシンクロ！
現われろ、漆黒（しっこく）のズムウォルト（攻／守２０００／２０００）！」

「なっ！？」

エックスの場のカオスローグが星になってシールド・ワームの中に入っていくと、シールド・ワームの星と、カオスローグの星が重なり合うと、その星は消えていき残った星は黒い星になり、一瞬周囲を闇が包み込み、その闇が晴れると黒い縁のカードに描かれた杖を持った黒いローブを纏ったモンスターが現われた。

「そんな、モンスターの星が、闇に」

「クッ、クヒャッ、クヒャハハハハッ！
そう、これが、ダークシンクロモンスター、漆黒のズムウォルト！
あの野郎を倒すため、オレが手に入れた最強の力だ！」

「これが、蓮さんが言っていたダークシンクロモンスター、なの

か」

エックスの場にズムウォルトが現われると、ダークシンクロモンスターについて聞いていなかった小羽が蓮に質問した。

「な、なんですか、あのモンスターは・・・」

「・・・あれは、ダークシンクロモンスター、チューナー以外のモンスターのレベルからダークチューナーのレベルを引くことで召喚できるモンスターよ。

シンクロモンスターが足し算する事で現れる光のモンスターだとするなら、ダークシンクロモンスターは引き算で現われる闇のモンスターよ」

「け、けど、レベル4から8を引いたモンスターなんて・・・」

「ダークシンクロモンスターのレベルは全てマイナスになってるの。

だから、あのモンスターのレベルはレベル4じゃなくてレベル－4になってるというわけ」

「・・・そ、そうなんですか」

蓮が小羽にダークシンクロモンスターの効果を説明すると、二人は再びデュエルの観戦に戻った。

「カオスローグの効果発動！

カオスローグがダークシンクロ召喚によって墓地に送られた時、

相手はデッキのカードを上から5枚墓地に捨てる！」

「くっ、またデッキ破壊を・・・」

蓮達が観戦に戻ると、エックスはカオスローグの効果を発動させ、祐騎のデッキからガーディアン・エアトス／ブラスト、ガスタ・イグル、ガスタの賢者　ウィンダール、魂の開放、黒いペンダントを墓地に送った。

「バトル！
漆黒のズムウォルトでガーディアン・エアトスを攻撃！
ダーク・ドラッグ・ダウン！」

「攻撃力の高いエアトスに攻撃を！？」

「漆黒のズムウォルトの効果発動！
このカードは、戦闘では破壊されず、このカードが相手モンスターを攻撃するとき、そのモンスターの攻撃力がこのカードの元々の攻撃力を超えていた場合、その数値１００ポイントにつき1枚、相手のデッキの上からカードを墓地に捨てる！」

「そんな！？」

「ガーディアン・エアトスの攻撃力は２５００、よって5枚のカードを墓地に捨てろ！」

「クッ！
ですが、戦闘ダメージは受けてもらいます！」

エックス　ＬＰ５０００→４５００

ズムウォルトの攻撃は、エアトスを通り抜けて祐騎のデッキから、ガスタ・スクイレル、ガスタ・サンボルト、ガスタ・イグル、ガスタ・ガルド、霊銃の咆哮が墓地に送られた。

「オレは、これでターンエンドだ！」

エックス　手札２枚

「僕のターン、ドロー！
バトル！
ガーディアン・エアトスで漆黒のズムウォルトを攻撃！
精霊のオペラ！」

「チッ！」

エックス　ＬＰ４５００→４０００

「カードを１枚伏せて、ターンエンド！」

祐騎　手札３枚

「オレのターン、ドロー！
手札のカード１枚を墓地にすて、装備魔法カード、閃光の双剣（せんこう そうけん）ートライスを漆黒のズムウォルトに装備する！」

『っ、トライスの剣を！？』

エックスが手札から、ニードル・ワームを墓地に送り、ズムウォルトに光を放っている双剣を装備させると、エールはその剣を見て驚いて声を挙げた。

「閃光の双剣－トライスを装備したモンスターの攻撃力は５００ポイントダウンするが、装備したモンスターは１度のバトルフェイズ中に２回の攻撃が可能になる！」

漆黒のズムウォルト　攻２０００→１５００

「なっ、２回の攻撃！？」

「ククッ、バトル！
漆黒のズムウォルトでガーディアン・エアトスに攻撃！
ダーク・ドラッグ・ダウン、二連撃！」

「クッ！
ですが、２回分の戦闘ダメージは受けてもらいます！」

「ヒャハハハッ！
もう、ライフなんぞ関係あるか！
これでお前のデッキの残りは後わずかだ！」

エックス　ＬＰ４０００→３０００→２０００

閃光の双剣を装備したズムウォルトがエアトスに二回攻撃をしか

けると、祐騎のデッキから、ガスタ・サンボルト、ガスタの賢者ウィンダール、ガスタの静寂　カーム、ガスタへの祈り、激流葬、ブラスト・ブレイク、死者蘇生、フルール・シンクロン、サイクロン、スターライト・ロードが墓地に送られた。

「さらに、オレは手札から魔法カード、命削りの宝札を発動！
このカードの効果で、5ターン後にすべての手札を捨てるかわり、デッキからカードを5枚ドローする！」

「そして、魔法カード、手札抹殺を発動！
お互いのプレーヤーは手札を全て捨て、捨てた数を同じ枚数分デッキからカードをドローする！」

「くっ！」

エックスが発動した手札抹殺の効果で、祐騎は手札から、ガスタ・ガルド、星屑のきらめき、スターダスト・ファントムを墓地に送り、エックスは手札から、リグレット・リボーン、破滅へのクイックドロー、ウォーム・ワーム、宮廷のしきたりを墓地に送り、それぞれデッキからカードをドローした。

「カードを2枚伏せて、ターンエンドだ！」

エックス　手札2枚

「僕のターン、ドロー！
魔法カード、ガスタの交信を発動！
このカードの効果で、墓地からガスタ・イグルとガスタ・ガルドをデッキに戻してシャッフルすることで、漆黒のズムウォルトを破

壊します！」

「させるかよ！
カウンター罠、マジック・ジャマーを発動！
手札１枚を墓地に捨て、ガスタの交信の発動を無効にして破壊する！」

祐騎が発動したガスタの交信をエックスは、マジック・ジャマーで無効にして、コストとして手札のニードル・ワームを墓地に送った。

「クッ、ならバトル！
エアトスで漆黒のズムウォルトを攻撃！」

「罠カード発動、パワー・ウォール！
このカードは、オレのデッキから任意の枚数墓地に捨てる事で、捨てたカード１枚につき１００ポイント、相手モンスターとの戦闘でオレが受ける戦闘ダメージを軽減する事が出来る！」

「オレは、デッキから１０枚のカードを墓地に捨て、ダメージを０にする！」

「なっ！？」

エックスはエアトスの攻撃が届く前に、デッキから１０枚のカードをまるでゴミを捨てるかのように無造作に墓地に送ってエアトスの攻撃によるダメージを０にすると、祐騎はエックスを睨みながら話しかけた。

「・・・貴方は、カード達をなんだと思っているんですか！」

「ア？
カードなんて、替えの効く只の紙束だろうが、何熱くなってるんだ」

「違う！
カードは只の紙束なんかじゃ無い！
デュエリストにとってカード達は共に戦うパートナーだ！」

「クッ、ククッ、クヒャハハハッ！！
笑わせる、カードがパートナーだ？
こんなのもの破けば使えなくなる只の紙だろうが！」

「違う！
カード達はデュエリストの魂が、心が宿るモノなんだ！
只の紙なんかじゃない！」

「ハッ、そんな事はオレを倒してから言うんだな！」

「絶対に負けない！
カードを1枚伏せてターンエンド！」

祐騎　手札2枚

「オレのターン、ドロー！
オレは速攻魔法、ご隠居の猛毒薬を発動！
このカードの効果で１２００ポイントのライフを回復する！」

エックス　ＬＰ２０００→３２００

「そして、バトル！
漆黒のズムウォルトでガーディアン・エアトスを攻撃！」

「クッ」

エックス　ＬＰ３２００→２２００

ズムウォルトの攻撃によって、エックスのライフは１０００ポイントのダメージを受けるが、祐騎のデッキからは、アームズ・ホール、ワン・フォー・ワン、救世竜　セイヴァー・ドラゴン、異次元からの帰還、烈風の宝札が墓地に送られた。

「お前のデッキはあとわずか、これで終わりだ！
もう１度、漆黒のズムウォルトでガーディアン・エアトスを攻撃だ！」

「させない！
罠カード、フローラル・シールドを発動！
このカードの効果で、漆黒のズムウォルトの攻撃を無効にして、デッキから１枚ドローする！」

「何！？」

祐騎は伏せていた罠カードの効果で、ズムウォルトの攻撃を１度無効にして、デッキ破壊を何とか防いだが、フローラル・シールドの効果でカードをドローしたことで、デッキの残りが後６枚になってしまった。

「チッ、だがこれでお前のデッキは残り6枚、次のターンがお前のラストターンだ！
オレはカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

エックス　手札0枚

「僕のターン、ドロー！」

祐騎がカードをドローした事で、祐騎のデッキが残り5枚になり、祐騎はドローしたカードを確認した。

「よし！
手札からチューナーモンスター、栄光の天使を攻撃表示で召喚！
行くよ、エール」

『はい、マスター！』

「レベル8のガーディアン・エアトスにレベル2の栄光の天使をチューニング！
風の守護者よ、今こそ栄光をその手に数多の魂を救う光となれ！
シンクロ召喚！
輝け！煌翼の守護者ートゥインクル・エアトスー！」

「フンッ、今更そんなモンスターを呼んで何をしようと無駄だ！
お前のデッキは残り5枚、次のオレのターンでズムウォルトの攻撃でデッキは無くなり、お前の負けだ！」

「なら、このターンで決着を付ければ良いだけだ！

トゥインクル・エアトスの効果発動！
トゥインクル・エアトスがシンクロ召喚に成功した時、お互いの墓地に存在するモンスターを全て除外する！
そして、トゥインクル・エアトスは除外されているモンスターの数×１００ポイント、攻撃力がアップする！
天界のオペラ！」

「なに！？」

トゥインクル・エアトスの効果で、祐騎の墓地からは２２枚のカードが除外され、エックスの墓地からは１５枚のカードが除外され、除外されたモンスター達はエールの持つ剣に吸い込まれていった。

「トゥインクル・エアトスの効果で除外されたモンスターの数は合計３７枚！
よって、トゥインクル・エアトスの攻撃力は３７００ポイントアップして、６７００となる！」

トゥインクル・エアトス　攻３０００→６７００

「なっ、攻撃力６７００だと！？」

「まだだ！
貴方が傷つけたカード達の痛みを思い知らせて上げます！
手札から装備魔法、女神の聖剣－エアトス－をトゥインクル・エアトスに装備する！」

祐騎が装備魔法を発動させると、エールの手に細身の片刃で柄に羽の装飾の付いた光を放つ剣が現われ、その剣にエックスの墓地か

ら除外されたモンスター達が吸収されていき、剣が放つ光がさらに大きくなっていった。

『・・・貴方には私や貴方に傷つけられたモンスター達の声は聞こえないでしょうが、この力で貴方に傷つけられたカード達の痛みを教えてあげます！』

「女神の聖剣－エアトス－は、自分の墓地にモンスターが存在しない時、フィールド上に表側表示で存在する天使族モンスターにのみ装備することが出来、装備したモンスターの攻撃力を相手が除外しているモンスターの数×３００ポイントアップする！」

「トゥインクル・エアトスの効果で貴方が除外しているモンスターは全部で１５枚！

よって、トゥインクル・エアトスの攻撃力は３００×１５で４５００ポイントアップして、攻撃力は合計で１１２００となる！」

トゥインクル・エアトス　攻６７００→１１２００

「こ、攻撃力１１２００だと！？」

「行きます！

バトル！

煌翼の守護者－トゥインクル・エアトス－で漆黒のズムウォルトを攻撃！

セイクリッド・ソウル・ゴスペル！」

「ま、負けて堪るかぁ！

永続罠、スピリット・バリアを発動！

このカードの効果で、オレの場にモンスターが存在する限りオレが受ける戦闘ダメージは0になる！」

「無駄です！
カウンター罠、魔宮の賄賂を発動！
相手はカードを1枚ドローするかわりに、相手が発動した魔法、罠カードの発動を無効にして破壊します！」

「な、なんだと！？
グアアアアッ！？」

エックス　LP2200→0

エックスが罠カードの効果でエールの攻撃を防ごうとするが、祐騎が発動させたカウンター罠でエックスが発動した罠カードは無効となり、エールが振り下ろした剣から放たれた光がズムウォルトとエックスを飲み込み、エックスのライフを0にした。

そして、エックスのライフが0になると祐騎達を包んでいた闇が消え去り、エックスはその場に倒れ、祐騎はそんなエックスに背を向けて蓮達の方に向かって行った。

「やったわね、祐騎」

「はい、今回は負けるわけには行きませんでしたから」

「それにしても、なんでアイツがダークチューナーとダークシンクロモンスターを持ってたのかしら？」

「それは、本人から聞いてみないと解りませんけど・・・」

「あっ、起きたみたいですよ！」

祐騎が蓮と話していると、デュエルが終わってその場に倒れていたエックスが起き上がり、周りを確かめる様に見渡し始めた。

「ここは、一体？」

「ねぇ、大丈夫？」

「え、ええ、大丈夫ですが、それよりも貴女達はどなたですか？それと、此処は一体どこなのでしょうか？」

「「「は？」」」

蓮が起き上がったエックスに話しかけると、エックスは祐騎達のことや此処がどこなのかも忘れている様子で祐騎達に尋ねてきた。

「ね、ねぇ、本当に私達の事を覚えていないの？」

「え、えぇ、ジョシュア君とのデュエルで負けてスポンサーからの契約が切られ、１からやり直すために修行の旅に出た先で、何かに呼ばれるような感じでとある墓地に行った、ということまでは覚えているのですが、それ以降の記憶が無いのですよ」

「まさか、ちょっとデッキ見せてもらうわよ！」

「え、ちょっ、なにを！？」

エックスが自分が最後に覚えている事を祐騎たちに話すと、蓮は慌てた様子でエックスのデッキを調べ始めた。

「いきなりどうしたんですか、蓮さん？」

「・・・やっぱり」

「お姉ちゃん、何がやっぱりなの？」

「・・・この人のデッキの中に入ってないのよ、カオスローグとズムウォルトのカードが。

それどころか、この人のデッキの内容、さっきのデュエルで使ってたデッキとはまるで別物よ」

「「えっ！？」」

蓮がエックスのデッキを確認してみると、先ほどのデュエルでエックスが使ってダークチューナーとダークシンクロモンスターのカードがデッキには入っておらず、デッキの内容も先ほどのデュエルでのデッキ破壊中心のデッキではなく、儀式モンスター中心のデッキになっていた。

「本当に全く別物のデッキですね」

「あの、他にデッキは持っていないんですか？」

「ええ、旅に出るときに昔使っていたそのデッキと必要なものだけを持って出ていますから、他にデッキは持っていませんが・・・」

「そうですか。
あの、そういえばどうしてこのデッキで修行の旅に？」

「それは、昔の自分を取り戻すため、ですかね」

「昔の自分、ですか？」

「ええ、昔の私はそのデッキを使ってデュエルを純粋に楽しんでいたはずだったんですが、いつからか勝つ事に固執し、対戦相手のやる気を無くすようなデュエルをすることで相手よりも優位であると思う事が楽しくなり、そのための道具としてデュエルやカードを利用していた事をジョシュア君のおかげでようやく解ったのです」

祐騎の質問にエックスは手に持った自分のデッキを見ながら、思い出すように話し出した。

「それに、ジョシュア君に負けたあの日、デュエルの後で彼に私が負けた原因を聞くと、なんて言ったと思います？」

「なんて言ったんですか？」

「彼は、【アンタは自分のためにしかデュエルをしていない、そんな奴に負けるようじゃあの女に勝つなんて夢のまた夢だからな。
それに、あんな戦い方じゃアンタも観客も楽しくないだろう？
あの女が言ってたことだが、《デュエルは楽しむものよ、最後まで楽しんで、自分の限界に挑み続ける奴が最後に勝つの、だから楽しんでデュエルしてないアンタに私は絶対負けない》ってな】」

「【昔の俺はその時まで負け無しで、デュエルがつまらなくなり掛けてた、そんな時にアイツに会ってこの言葉を聴いて負けた、だ

から今の俺が居るんだと思っている。
だから、アンタもオレに勝ちたかったらまずは自分が本当に楽しめるデュエルをするんだな】と言ったんですよ」

「蓮さん、あの人にそんなこと言ってたんですか？」

「え、ええ、アイツとデュエルした時、最初あまりにもつまらなそうな顔でデュエルしていたものから、ついそんな事を言っちゃったのよ。
それにしても、もう八年も経つのに良く覚えてたわねアイツも」

「それだけ衝撃的だったんじゃないですか？」

「そう、なのかしらね」

エックスが修行の旅に出た理由を聞いて、蓮が昔の事を思い出していると、エックスはデッキをデュエルディスクに戻して立ち上がって蓮に話しかけた。

「貴女はもしかして、ジョシュア君が言っていた紅竜蓮さん、ですか？」

「え、ええ、そうよ」

「と、いうことは、ここはデュエルアカデミアですか？」

「はい、そうですよ」

「どうして私はここに居るのですか？
それに、先ほどからの会話から察するに私は貴方達の内のどなた

かとデュエルしたのですか？」

「えっと、僕達もなんて言ったら良いのか解らないんですけど、まず今解っていることだけ説明しますね」

祐騎は、エックスにこの状況について解っていることだけを説明した。

「そんな事になっていたんですか」

「えぇ、どういう事なのか僕達にも解らないから、なんて言ったら良いのか解らないんです。
それよりも、貴方はこれからどうするつもりなんですか？」

「そうですね、もう少し旅を続けてみようと思います。
本当の自分のデュエルというものを取り戻すまでは、終わるわけにはいかないですしね」

「そうですか。
もし、何か困った事が会ったら連絡してください、力になれるかもしれないですから」

「はい、そうなった時はよろしくお願いします」

そう言うと、エックスは祐騎達に頭を下げて、この島から出て行くために港に向かって行こうとすると、祐騎がエックスを呼び止めて質問した。

「あの、最後に1つだけ良いですか？」

「ええ、良いですが、何ですか？」

「今の貴方にとって、カード達ってどういう存在ですか？」

「フム、そうですね、少し前の私なら単なる道具と答えていたでしょうが、今の私にとって大切なパートナー、でしょうか。
今までの私の行いからすれば、こんな事を言うのはおかしいでしょうが、本当の自分をこのカード達と一緒に取り戻そうと思っています」

「そう、ですか。
取り戻せると良いですね」

「ええ。
それでは皆さんまたお会いしましょう」

祐騎の質問に答えたエックスは、そのまま港へ向かって歩いて行った。

「あの人の考え方が変ってて良かったわね、祐騎」

「ええ、今のあの人だったらカード達も幸せになれそうで良かったです」

「そう、それじゃ、私達も寮に戻りましょうか」

「ええ、そうしましょうか」

祐騎と蓮がエックスの背中を見ながらそう言うと、二人は小羽と一緒にレッド寮の方に足を向けた。

『・・・ミツケタ』

「ん？」

「どうしたの、祐騎？」

「いえ、何か聞こえたような気がして」

「空耳じゃないの？」

「そう、ですね」

祐騎は何か聞こえたような気がして先程エックスとデュエルをしていた場所を振り向いてみるが、そこには何も無く、空耳と思って蓮達と一緒にレッド寮へと戻っていった。

そして、祐騎達がその場から完全に居なくなると、祐騎がエックスとデュエルしていた場所に、祐騎達がデュエルしていた時に発生した黒い靄が集まり、その集まった靄は人の様な形になっていき、顔には左目の場所にだけ穴の開いた仮面が現われ、体中に古そうな包帯を巻き、背中にボロボロな翼を持った姿になった。

『・・・ヨウヤク、ミツケタヨ、モウヒトリノ、ワタシ』

仮面から地の底から出てくるような声が周囲に響くと、一陣の風が吹き抜け、風が止むとその場所には何も存在していなかった。

こうして、破滅の光が動き出した裏で、新たな闇が動き出した事を、このとき誰も知らなかった。

第二十九話　祐騎ＶＳエックス　新たなる闇の胎動（後書き）

どうだったでしょうか、今回出した半オリカの女神の聖剣の詳細はオリカ説明の方に載せておくので、気になる方は確認してみてください。

後、エックスはカミューラと同じように半オリキャラ状態でこれからも出す予定です。

それでは、次回もこの作品をよろしくお願いします。

第三十話　黒薔薇竜ＶＳ紅蓮魔竜（前書き）

今回は、タイトルで解るように蓮とジョシュアのデュエルになります。

それでは、第三十話始まります。

第三十話　黒薔薇竜ＶＳ紅蓮魔竜

～アカデミア港～

祐騎がエックスと戦い、数日が過ぎたある日、アカデミアの港に右手にスーツケースを持ったジョシュアがやって来ていた。

「・・・やっと、お前との決着を付ける時が来た、待って居ろ紅龍蓮」

ジョシュアはアカデミアの校舎を見上げながらそう呟くと、アカデミアに向かって歩き出した。

～アカデミア校舎内～

「はぁ～っ、一体何の用なのかしら」

「なんだか疲れてるね、お姉ちゃん」

「それはそうよ。
というか、この前なんて小羽も一緒にアイドルデュエリスト養成クラスに入れられそうになったじゃない」

「・・・はぃ、あの時の嶺さんは怖かったですぅ」

「私だって、あの時のナオミには鳥肌が立ったわよ」

蓮と小羽はクロノスに呼び出されて校長室に向かう途中で、祐騎がエックスと戦った後にクロノスとナポレオンの提案によるアイドルデュエリスト養成クラスへの勧誘を断るためにデュエルした嶺開花と大庭ナオミとのデュエルした時のことを思い出して身震いした。

「だから、またあんな事になるんじゃないかと思うと気が重いのよ」

「そ、そうだね。
それはそうと、お姉ちゃんがお兄さんと一緒じゃないなんて珍しいけど、どうしたの？」

「祐騎なら、優奈さんから連絡が来たから二人で行って来てって言ってたから、部屋で待ってるんじゃないかしら」

「そっかぁ、でもお姉ちゃん寂しくないの？」

「なっ、なによ、いきなり！？」

「だって、お姉ちゃんっていっつもお兄さんと一緒だから、お兄さんが近くに居ないと寂しいんじゃないかなぁって」

「／／／べ、別に、祐騎が側に居なくても、寂しくなんかないわよ！

ま、まぁ、一緒に来てくれなくてちょっと不安だったりもしたけど、でも別に寂しいなんてことは無いんだからね！？」

『フフッ、ツンデレ乙、ってとこかしら～』

「／／／う、うるさいわね、この変態！」

『あらあら、照れちゃって、もう可愛いんだから～』

「／／／～っ！」

ティルが蓮をからかうと、蓮は顔を紅くしてティルから顔を背けて校長室に向けて早足で歩いて行った。

「あっ、待ってよ、お姉ちゃん！」

『蓮～、義妹を忘れちゃいけないわよ～』

『ティルさんのせいだから、そんなこと言っても説得力ないんじゃないかな？』

「マリナもティルさんにツッコミしてないで行くよ！」

『はーい』

小羽は早足で先に行ってしまった蓮を追って駆け足で蓮の後を追っていった。

～デュエルアカデミア校長室～

コンコンッ

「失礼します」

「ああっ、待っていたノ～ネ、シニョーラ蓮、それにシニョーラ小羽も」

「いきなり呼び出したりして、今日は一体何の用なんですか」

「実は、シニョーラにお客さんが来ているノ～ネ」

「私に客、ですか？」

「そうなノ～ネ、今こっちに向かっている所だと連絡が有ったから、もう直ぐ来るはずなノ～ネ」

コンコンッ

「噂をすれば何とかなノ～ネ、どうぞなノ～ネ」

「失礼する」

蓮と小羽が校長室にやって来て、クロノスから呼び出した理由を聞いていると、校長室の扉を叩いてジョシュアが中に入ってきた。

「久しぶりとでも言っておこうか、紅龍蓮」

「私を呼んだのはこういう事、ですか」

「そうなノ～ネ、シニョーラ蓮にはシニョールジョシュアとデュエルして貰うノ～ネ！」

「断ったり負けた場合は、レッド寮は廃止、そして貴女達はアイドルデュエリスト養成クラスに入って貰うのデアール」

「そう言うと思ってたわよ。
それに、元々断るつもりは無いわ、断ったところでどうせいつかはデュエルする事になるんだから」

「それでこそ俺を倒した奴だ。
それはそうと、先生方コイツが負けた時の条件は無しにして貰おうか」

「な、なんでデアールか！？」

「当たり前だろう、俺には負けた時のリスクが無くてコイツだけにリスクの有る勝負なんて、フェアじゃないからな」

「解ったノーネ、シニョール蓮の負けた時のペナルティは無しにするノーネ」

「クロノス臨時、どういうつもりデアールか！？」

「臨時を強調しないで欲しいノーネ！
対戦相手からの要望なノーネ、受け入れるのは当然なノーネ」

「ぐぬぬっ、しょうがないのデアール」

「それでは、明日の午後にデュエル場で対戦という事で良いノーネ？」

「ええ」

「ああ、もちろんだ」

クロノスがデュエルの日時を蓮達に伝えると、蓮とジョシュアは頷いて了承すると、ナポレオンとクロノスがいつもの口論を聞きながら部屋を出て行った。

そして、蓮は小羽と一緒に祐騎の居るレッド寮に向かって行き、ジョシュアはクロノス達に用意されていた自分の部屋へと向かって行った。

～デュエル場～

蓮がクロノスに呼び出されてジョシュアと会った翌日、蓮はデュエル場の脇の入場口の所で祐騎達と話をしていた。

ちなみに、蓮の格好はいつものアカデミアの制服の上に、背中に赤椿と白椿の花が茨で繋がり輪を作っている絵が描かれた真っ赤なコートを羽織り、制服のミニスカートはスリットの入っている茨の模様の入った黒いロングスカートに変えていた。

「はぁっ、まったく、なんでこんな格好でデュエルしないといけないのよ」

「すみません、姉さんがどうしても蓮さんにその服を着て欲しいって聞かなかったものですから」

「えっ、それってお兄さんのお姉さんが作った服なんですか！？」

「うん、姉さんってこういう事好きだから仕事の合間に作ってたみたいで、昨日こっちに送ったから受け取って欲しいって連絡が有ったんだ」

「昨日の用事ってこの事だったんですか！？」

「そうなんだよ、しかもこのデュエルの事をペガサス会長経由で知ったらしくて、蓮さんに着てデュエルして欲しいって連絡が入ったんだ」

「優奈さんにはお世話になってばかりだからコレくらいの事はやるけど、やっぱり気が進まないわ」

蓮は優奈が作った服を確認しながら、困惑した表情で呟くと、祐騎は申し訳なさそうに蓮に話しかけた。

「すみません、姉さんの我侭に付き合ってもらって」

「謝らなくても良いわよ、さっきも言ったけど優奈さんには迷惑掛けてるから、こんなことで良ければいくらでも付き合うわよ」

「はい、ありがとうございます。
それと、遅くなりましたけど、とっても似合ってますよ」

「／／／ッ！？」

祐騎が蓮の格好を褒めると、蓮は顔を紅くしてその場で固まってしまった。

「蓮さん？」

「／／／あぅ、あ、ありがとう、嬉しいわ」

「そうですか、それは良かったです」

「あ、あの、お姉ちゃん、そろそろ時間だよ？」

「え、もうそんな時間なの？」

「それじゃあ、僕と小羽ちゃんは十代君達と応援してますから、頑張ってください」

「ええ、ありがとう」

祐騎と小羽は蓮と別れて観客席の方に向かって行き、蓮は祐騎達を見送ると、デュエル場に向かって歩き出し、デュエル場の中央で腕を組んで待っていたジョシュアと向かい合う形で対峙した。

そして、蓮とジョシュアが対峙すると、観客席で見ている生徒達が歓声を挙げた。

「お待たせ、準備は良いかしら？」

「ああ、お前とのデュエルの準備なら八年前からずっと出来ているからな」

「そう、なら始めましょうか」

蓮とジョシュアがお互いにデュエルディスクを構えると、二人の間に審判役のクロノスが現われて、デュエルの開始を告げた。

「それデ～ハ、これよりシニョーラ蓮とシニョールジョシュアのデュエルを開始するノ～ネ！」

「それじゃ、行くわよ」

「ああ！」

「「デュエル！」」

蓮　ＬＰ４０００

ジョシュア　ＬＰ４０００

「私の先攻、ドロー！
手札から速攻魔法、偽りの種を発動！
このカードの効果で手札から、レベル２以下の植物族モンスター、イービル・ソーンを攻撃表示で特殊召喚！
さらに、イービル・ソーンをリリースすることで効果発動！」

「イービル・ソーンは自身をリリースすることで、相手に３００ポイントのダメージを与え、デッキから２体のイービル・ソーンを攻撃表示で特殊召喚する！」

「クッ」

ジョシュア　ＬＰ４０００→３７００

「さらに、場の2体のイービル・ソーンをリリースして手札からフェニキシアン・クラスター・アマリリスを攻撃表示でアドバンス召喚！
そして、手札から魔法カード、フレグランス・ストームを発動！」

「フレグランス・ストームの効果で、フェニキシアン・クラスター・アマリリスを破壊してデッキからカードをドロー！
ドローしたカードは植物族モンスターの異次元の花（ディメンション・フラワー）（攻／守５００／０）、よってフレグランス・ストームの効果でもう1枚ドローする！」

「さらに、フェニキシアン・クラスター・アマリリスが破壊された事で、相手に８００ポイントのダメージを与える！
スキャッター・フレイム！」

「グゥッ！」

ジョシュア　ＬＰ３７００→２９００

「さらに速攻魔法、手札断殺を発動！
このカードの効果でお互いのプレーヤーは手札を2枚墓地に送り、デッキから新たに2枚ドローする！」

蓮が発動させた手札断殺を発動すると、蓮は手札の異次元の花とグローアップ・バルブを墓地に送り、ジョシュアは手札からダーク・リゾネーターとスキル・サクセサーを墓地に送った。

「カードを1枚伏せ、エンドフェイズに墓地のフェニキシアン・クラスター・アマリリスの効果を発動！

墓地の植物族モンスター、異次元の花を除外して、フェニキシアン・クラスター・アマリリスを守備表示で特殊召喚！
これで、ターンエンド」

蓮　手札2枚

「俺のターン、ドロー！
ククッ、先攻1ターン目からコレとは、流石だな。
八年前と変らない、いやそれ以上の強さで安心したぞ」

「それはどうも。
そういえば、どうやって私が此処に居るって知ったのよ、自慢じゃないけどアカデミアの外にまで名前が出るような事はしてないつもりだったんだけど」

「あぁ、その事か。
確かにお前の事に関する情報は、俺の知っている事以上の物は存在しなかったからな」

「じゃあ、どうやって私の居場所を突き止めたのよ」

「斎王という男の占いだ」

「斎王ですって！？」

「あ、ああ、知っているのか？」

「ええ、少しね（まさか斎王が絡んでるなんて、厄介な事にならなければ良いんだけど）」

ジョシュアが自分の居場所をどうやって知ったのか気になった蓮が、ジョシュアにその事を聞くと、ジョシュアは斎王に占ってもらったと言い、それを聞いた蓮は驚いて声を挙げた後、一瞬不安げな表情をしたが直ぐに元の表情に戻った。

「中断させて悪かったわね。
それじゃ、再開しましょうか」

「ああ、今の俺の全力でお前を倒させてもらうぞ！」

「そう、でも悪いわね。
始めは良い勝負にして負けようかと思ってたけど、事情が変ったから全力で倒させて貰うわ」

蓮が真剣な表情でそう言うと、ジョシュアは自分の手札を見てから、蓮の顔を睨みながら手札から1枚のカードをディスクにセットした。

「なら、俺はお前の全力を超えてやる！
俺は手札から魔法カード、融合を発動！」

「俺は、手札の真紅眼の黒竜（攻／守２４００／２０００）とデーモンの召喚（攻／守２５００／１２００）を融合する！」

ジョシュアが融合の効果で手札から真紅眼とデーモンの召喚を墓地に送ると、デュエルを観戦していた吹雪がジョシュアが真紅眼を使った事に驚いて声を挙げた。

「なっ、彼も真紅眼を使うのか！？」

「それに、あの２体を融合するモンスターといえば、デュエリストキングダムでデュエルキングの武藤遊戯と、その親友にしてライバルの城之内克也との戦いで使われた、伝説のレアカードじゃないか！？」

「そ、そんなモンスターが出てくるんッスか！？」

「いきなりそんなモンスターを出すなんて、流石プロのデュエリストだドン！」

ジョシュアが召喚しようとしているモンスターの事を三沢が説明すると、それを聞いた翔達はデュエルに意識を戻して集中した。

「真紅眼の黒竜とデーモンの召喚を融合！
現われろ！
悪魔竜、ブラック・デーモンズ・ドラゴン（攻／守３２００／２５００）！」

「まさか、初手からブラック・デーモンズとはね」

「これだけじゃないぞ！
さらに、手札からランサー・デーモン（攻／守１６００／１４００）を攻撃表示で通常召喚だ！」

「ランサー・デーモンか、ならリバースカードオープン！
罠カード、威嚇する咆哮！
このカードの効果でアンタはこのターン攻撃宣言することは出来ないわよ」

「くっ、カードを2枚伏せてターンエンドだ！」

ジョシュア　手札０枚

「私のターン、ドロー！
フェニキシアン・クラスター・アマリリスを攻撃表示に変更して、バトル！
アマリリスでランサー・デーモンを攻撃！
フレイム・ペタル！」

「グッ！」

ジョシュア　ＬＰ２９００→２３００

「さらに、フェニキシアン・クラスター・アマリリスの効果発動！
このカードが戦闘を行った場合、ダメージステップ終了時に破壊される！
そして、アマリリスが破壊された事で、８００ポイントのダメージを与える！」

「グゥッ！」

ジョシュア　ＬＰ２３００→１５００

「カードを1枚伏せ、エンドフェイズに墓地のイービル・ソーンを除外して、フェニキシアン・クラスター・アマリリスを守備表示で特殊召喚して、ターンエンド！」

蓮　手札2枚

「俺のターン、ドロー！
手札から魔法カード、強欲な壺を発動して、さらに2枚ドローする！」

「手札から魔法カード、思い出のブランコを発動！
このカードの効果で、墓地に存在する通常モンスター1体を特殊召喚する事が出来る！
ただし、この効果で特殊召喚したモンスターはこのターンのエンドフェイズに破壊される！」

「俺は、思い出のブランコの効果で墓地の真紅眼の黒竜を攻撃表示で特殊召喚！
さらに、手札からチューナーモンスター、バリア・リゾネーター（攻／守３００／８００）を攻撃表示で通常召喚！」

「行くぞ、レベル7の真紅眼の黒竜にレベル1のバリア・リゾネーターをチューニング！
王者の鼓動、今此処に列をなす、天地鳴動の力を見るが良い、シンクロ召喚！
燃え上がれ、紅蓮の魂！
レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

「来たわね、レッド・デーモンズ」

ジョシュアがレッド・デーモンズ・ドラゴンを召喚すると、蓮はやはりといった表情でレッド・デーモンズ・ドラゴンを見上げた。

「バトルだ！
レッド・デーモンズ・ドラゴンでフェニキシアン・クラスター・アマリリスを攻撃！
アブソリュート・パワー・フォース！」

「アマリリスが破壊されたことで効果発動！
８００ポイントのダメージを与える！」

ジョシュア　ＬＰ１５００→７００

「クッ、だがこれでお前の場にモンスターは存在しなくなった！
ブラック・デーモンズ・ドラゴンでダイレクトアタック！
さらに、墓地のスキル・サクセサーを除外する事でブラック・デーモンズ・ドラゴンの攻撃力をこのターンのみ８００ポイントアップさせる！」

ブラック・デーモンズ・ドラゴン　攻３２００→４０００

「これで終わりだ！
行け、メテオ・フレア！」

「させない！

罠カード発動、ガード・ブロック！
このカードの効果で相手モンスターの攻撃によるダメージを1度だけ0にして、デッキからカードを1枚ドローする！」

「クッ、ターンエンドだ！」

ジョシュア　手札0枚

「私のターン、ドロー！
さっきの攻撃は危なかったわ、あの頃よりやるようになってるじゃない。
これなら、もう私に拘らないでも良いんじゃないの？」

「ハッ、冗談を言うな。
あの程度の攻撃でお前を倒せるなんて始めから思っていないさ。
それに、俺はお前に勝って今までの俺自身を超えるまで、お前に拘り続ける！
そうでなければ、今までの俺の人生が無意味な物になるからな！」

「そう。
なら、私は先に進んで行くから、アンタはそのままの状態で止まってなさい！」

ジョシュアが蓮に拘るのをやめないと言うと、蓮はそんなジョシュアを付き放つように言葉を放ち、手札から1枚のカードを手に取った。

「手札から、チューナーモンスター、デブリ・ドラゴンを攻撃表示で召喚！」

「チューナー、シンクロ召喚か！？」

「ええ、そうよ。
デブリ・ドラゴンの効果発動！
デブリ・ドラゴンが召喚に成功した時、自身の墓地に存在する攻撃力５００以下の攻撃力のモンスター１体を効果を無効にして、攻撃表示で特殊召喚する事が出来る！」

「私はこの効果で、墓地から攻撃力１００のイービル・ソーンを攻撃表示で特殊召喚！
さらに、除外している異次元の花の効果発動！
このカードは、自分フィールド上にチューナーが存在している時、墓地に存在する植物族モンスター１体を除外する事で、ゲームから除外しているこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する事が出来る！」

「私は、墓地に存在する３枚目のイービル・ソーンを除外して、異次元の花を攻撃表示で特殊召喚する！
行くわよ、レベル１のイービル・ソーンとレベル２の異次元の花にレベル４のデブリ・ドラゴンをチューニング！」

「冷たい炎が世界の全てを包み込む、漆黒の花よ、開け！
シンクロ召喚！
咲き乱れよ、ブラック・ローズ・ドラゴン！」

デブリ・ドラゴンが４つの光の輪になると、イービル・ソーンと異次元の花がその輪の中に入り、輪の中に入った２体のモンスターが３つの星に変り、その星が光の線で一直線になると、周囲に黒い薔薇の花びらが舞い、蓮の場にブラック・ローズ・ドラゴンが現わ

れた。

そして、ブラック・ローズ・ドラゴンが召喚されると、蓮の場のブラック・ローズ・ドラゴンとジョシュアの場のレッド・デーモンズ・ドラゴンのカードが一瞬光を放つが、その光は直ぐに消えてしまった。

「何だ、今のは!?」

「小羽の時と同じ、か（原作みたいに直接戦う事でヴィジョンが見えたりはしないのね、ということは今のこのカード達と赤き竜は関係が無いって事なのかしら）」

「おい、お前は今の現象が何なのか知っているのか！」

「さぁ、ね。
ただ、アンタのレッド・デーモンズと私のブラック・ローズに因縁がある事だけは確かよ。
まぁ、他にも後4体ぐらい居るけどね」

「何だと!?」

蓮の言葉を聴いたジョシュアが驚いた表情で自身のデュエルディスクにセットしているレッド・デーモンズを見ると、蓮は動揺しているジョシュアに話しかけた。

「さてと、おしゃべりはコレくらいにして、デュエルを再開させるわよ」

「あ、ああ」

「ブラック・ローズ・ドラゴンがシンクロ召喚に成功した事で、効果発動！
このカードがシンクロ召喚に成功した時、フィールド上に存在する全てのカードを破壊することが出来る！」

「何！？」

「どんなに強力なモンスターでも効果破壊耐性がないなら、このカードで破壊できる！
全てを吹き飛ばせ、ブラック・ローズ・ガイル！」

「クッ、させん！
罠発動、亜空間物質転送装置（あくうかんぶっしつてんそうそうち）！
さらに速攻魔法、神秘（しんぴ）の中華鍋（ちゅうかなべ）を発動する！」

「ッ！」

「まず、神秘の中華鍋の効果でブラック・デーモンズ・ドラゴンをリリースして、ブラック・デーモンズの攻撃力分のライフを回復する！」

ジョシュア　ＬＰ７００→３９００

「そして、亜空間物質転送装置の効果で、俺はレッド・デーモンズ・ドラゴンをこのターンのエンドフェイズまでゲームから除外する！」

ブラック・ローズ・ドラゴンが薔薇の花びらが舞う風でフィール

ドのカードを全て破壊しようとすると、ジョシュアの発動させたカードの効果で、ブラック・デーモンズ・ドラゴンは光に変化してジョシュアを包み込んで墓地に行き、レッド・デーモンズ・ドラゴンは背後に現われた次元の狭間へと消え、ブラック・ローズ・ドラゴンの効果から逃れた。

「まさか、伏せてたカードがその2枚とはね」

「このカード達をただ破壊される訳にはいかないからな」

「そう、なら私はカードを1枚伏せ、エンドフェイズに墓地の異次元の花を除外して、フェニキシアン・クラスター・アマリリスを守備表示で特殊召喚して、ターンエンドよ」

「エンドフェイズに、ゲームから除外しているレッド・デーモンズ・ドラゴンはフィールドに戻って来る！」

蓮　手札3枚

「俺のターン、ドロー！
手札から魔法カード、紅蓮魔竜の壺を発動！
このカードは、次の相手ターン終了時までモンスターの召喚、特殊召喚を行わない代わりに、デッキからカードを2枚ドローする！」

「カードを2枚伏せてターンエンドだ！」

ジョシュア　手札0枚

ジョシュアは自分の場にレッド・デーモンズ・ドラゴンが戻り、自分のターンでドローした2枚のカードを伏せ、蓮を睨みながらターンを終了させた。

「私のターン、ドロー！
私は手札から、ローンファイア・ブロッサムを攻撃表示で召喚！
さらに、ローンファイア・ブロッサムの効果発動！」

「ローンファイア・ブロッサムは、自身の場に存在する植物族モンスター1体をリリースすることで、デッキから植物族モンスター1体を自分の場に特殊召喚する事が出来る！
この効果で、私はローンファイア・ブロッサム自身をリリースして、デッキから植物族モンスター、椿姫ティタニアルを攻撃表示で特殊召喚する！」

『あら、良い男じゃない、襲っちゃおっかな～』

「やめなさいよ、この変態精霊」

『あん、ちょっとくらい良いじゃないの～
最近女の子ばっかりで刺激が欲しいのよ～』

「駄目に決まってるでしょ」

「おい、さっきから何を一人でブツブツ言っているんだ？」

「な、なんでもないわよ（ほら、アイツにはアンタの事見えてないみたいなんだから、諦めなさい）」

『は～い』

蓮が場に出てきたティルと話していると、精霊が見えていないジョシュアが蓮の行動が気になり、蓮に話しかけると、蓮は焦りながら誤魔化し、ティルに小声で話すと、動揺を隠しながらデュエルを再開した。

「そ、それじゃ、再開させるわ。
私は手札から魔法カード、百花繚乱－椿の舞－を発動！
このカードは自身の場に存在する植物族モンスター1体をリリースして発動し、自分フィールド上に存在するレベル8以上の植物族モンスター1体の攻撃力を、このターンの間だけ800ポイントアップさせる！」

「私はフェニキシアン・クラスター・アマリリスをリリースして、椿姫ティタニアルの攻撃力を800ポイントアップさせる！」

椿姫ティタニアル　攻2800→3600

「行くわよ、バトル！
椿姫ティタニアルで、レッド・デーモンズ・ドラゴンを攻撃！」

「させん、リバースカードオープン！
罠カード、プライドの咆哮（ほうこう）！」

「ッ、そのカードは！？」

「罠カード、プライドの咆哮の効果で戦闘ダメージ計算時に、相手モンスターの攻撃力より自身のモンスターの攻撃力が低い場合、自身のモンスターの攻撃力と相手モンスターの攻撃力の差分のライ

フを支払うことで、ダメージ計算時のみ自身のモンスターの攻撃力を相手モンスターとの攻撃力の差＋３００ポイント攻撃力をアップさせる！」

「レッド・デーモンズ・ドラゴンの攻撃力と椿姫ティタニアルの攻撃の差は６００ポイント、よって６００ポイントのライフを払い、レッド・デーモンズ・ドラゴンの攻撃力を９００ポイントアップさせる！」

ジョシュア　ＬＰ３９００→３３００

レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻３０００→３９００

「迎え撃て、レッド・デーモンズ・ドラゴン！
灼熱のクリムゾン・ヘルフレア！」

「クゥッ！」

蓮　ＬＰ４０００→３７００

『あらら、ちょ～っとミスっちゃったみたいね～。
けど、只じゃやられないわよっと』

ティルがレッド・デーモンズ・ドラゴンに攻撃を仕掛けると、ジョシュアが発動した罠カードの効果で攻撃力を上昇させ、逆にティルを倒し蓮にダメージを与えるが、ティルは破壊される時に自身の蔦でレッド・デーモンズ・ドラゴンを貫いて破壊した。

「ふぅ、ティルには悪いけど使ったのが椿の舞で助かったわね」

「な、何故、俺のレッド・デーモンズ・ドラゴンが！？」

「椿の舞の２つ目の効果よ。
椿の舞の効果対象になったモンスターと戦闘を行ったモンスターは、ダメージステップ終了時に破壊されるのよ」

「くっ、そんな効果があのカードに・・・」

「私はカードを１枚伏せて、墓地のイービル・ソーンを除外して、フェニキシアン・クラスター・アマリリスを守備表示で特殊召喚して、ターンエンドよ」

蓮　手札１枚

「俺のターン、ドロー！
良し、俺は手札から魔法カード、星屑（ほしくず）のきらめき発動！」

「やっぱり有ったのね、そのカード」

「このカードの効果で、俺は墓地の真紅眼の黒竜とバリア・リゾネーターを除外して、レッド・デーモンズ・ドラゴンを攻撃表示で特殊召喚する！」

「バトルだ！
レッド・デーモンズ・ドラゴンでフェニキシアン・クラスター・アマリリスを攻撃！
レッド・デーモンズが攻撃した時、相手の場に存在する守備モン

スターを全て破壊する！
焼き尽くせ、デモン・メテオ！」

「けど、フェニキシアン・クラスター・アマリリスの効果発動！
８００ポイントのダメージを受けて貰うわ！」

「グッ！」

ジョシュア　ＬＰ３３００→２５００

「だが、これでお前を守るモンスターは消えた、リバースカードオープン！
罠カード、破壊神（はかいしん）の系譜（けいふ）を発動！」

「ダメージ覚悟で攻撃してきたのはそういう事ね」

「破壊神の系譜は、相手の場に存在する守備モンスターを破壊したターン、自分の場に居るレベル８のモンスター１体を選択し、選択したモンスターはこのターン２回目の攻撃を行う事が出来る！
俺の場には、レベル８のレッド・デーモンズ・ドラゴンしか居ない、よって破壊神の系譜の効果でレッド・デーモンズ・ドラゴンはこのターン、もう一度攻撃できる！」

「行け、レッド・デーモンズ・ドラゴン！
ダイレクトアタック！
アブソリュート・パワー・フォース！」

「クゥッ！」

蓮　ＬＰ３７００→７００

「俺はコレでターンエンドだ」

ジョシュア　手札０枚

「私のターン、ドロー！
フッ、どうやらこのターンで終わりみたいね」

「何だと！？」

「手札から魔法カード、薔薇（ばら）の刻印（こくいん）を発動するわ」

「そのカードは！？」

「薔薇の刻印は墓地の植物族モンスター１体を除外して発動し、相手モンスターに装備する事で装備したモンスターのコントロールをエンドフェイズまで得る事が出来る！」

「私は墓地のローンファイア・ブロッサムを除外して、薔薇の刻印をレッド・デーモンズ・ドラゴンに装備して、コントロールを得る！」

「クッ、レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

蓮が薔薇の刻印を発動させると、レッド・デーモンズ・ドラゴンの顔に薔薇の形の刺青の様なものが現われ、レッド・デーモンズ・ドラゴンはジョシュアの場から蓮の場へと移動した。

「これで終わりにしてあげる。
バトル！
レッド・デーモンズ・ドラゴンでダイレクトアタック！
アブソリュート・パワー・フォース！」

「グッ、クゥッ！」

ジョシュア　ＬＰ２５００→０

《そ、それまでなノ～ネ！
勝者、シニョール蓮なノ～ネ！》

蓮がジョシュアからコントロールを奪ったレッド・デーモンズ・ドラゴンでジョシュアのライフを０にすると、クロノスがデュエルの終了を宣言し、デュエルが終了した。

そして、蓮はコントロールを奪ったことで自分のデュエルディスクにセットされていたレッド・デーモンズ・ドラゴンをジョシュアに返すため、ジョシュアに近づいていった。

「はい、コレ」

「ああ、すまないな」

「どう、これで満足した？」

「ああ、負けはしたが、良いデュエルだった。
これで心置きなくお前という目標を追うことが出来る」

「ハァ！？
何よ、それ！？」

「当然だろう。
お前は俺よりも強い、強い奴を目標にして何が悪い」

「いや、それなら、私以外にも居るでしょう！？」

「かもしれない、だが暫くの間はこのデュエルアカデミアに通い、お前のデュエルを観察させて貰う。
いつの日か、お前を超える時までな。
それに、取材を受けた時にも言っていただろ、暫く1つの場所に長く留まるから暫くプロの活動を休止すると」

「・・・やっぱり、ワザと負けとけば良かったかな～」

「そんな事をしていれば、お前が本気でやるまで追い続けるまでだ。
それに、もしお前より俺の方が強かったとしても、此処に居ればもっと強い奴と戦う事ができるかもしれないからな」

「・・・もう勘弁してよ」

蓮はそう言って、呆れた表情でジョシュアを見てため息をついた。

こうして、ジョシュアの発言から始まった騒動は一応の終わりを迎えた。

第三十話　黒薔薇竜ＶＳ紅蓮魔竜（後書き）

どうだったでしょうか、今回湊クレナイ様から提供して頂いたオリカの異次元の花を使わせてもらいました。

異次元の花の詳細は、私の作品の感想の中や湊クレナイ様の作品である遊戯王ＧＸ～Ｃｌｉｍａｘ　ｒｅｖｏｌｕｔｉｏｎ！！～の第六話に載っていますので、気になる方は確認してみてください。

また、オリカを提供してくださった湊クレナイ様の作品も良かったら読んでみてください。

それから、湊クレナイ様、オリカの提供本当にありがとうございました。

それでは、これからもこの作品をよろしくお願いします。

第三十一話　現われる闇の守護者　ガーディアン・デスサイス（前書き）

お久しぶりです、一ヶ月ぶりの更新です。

今回はサブタイトル通りデスサイスを出します。

後、デスサイスは半オリカ状態になるので、詳細の方をオリカ説明の方に載せてますので、気になる方は見てみてください。

また、オリカの中で烈風の宝札の効果を少し変更して、使っている第二十話の部分も変更させてもらいましたので、気になった方は確認してみてください。

それでは、第三十一話始まります。

第三十一話　現われる闇の守護者　ガーディアン・デスサイス

～祐騎の部屋～

蓮とジョシュアのデュエルから数日が経ち、その間に一時期プロの世界から居なくなっていたカイザー亮がヘルカイザーとなって戻ってきたり、行方不明となっていた十代がネオスペーシアン達の力を得て戻り、エドとの再戦に勝利したり、ホワイトサンダーとなった万丈目と明日香が戦い、負けた明日香が万丈目と同じようになったりしていた。

そんなことが有ったある日、祐騎達はレッド寮の祐騎の部屋で今後の事を話し合っていた。

「蓮さん、これからどうするんですか？
サンダーさんだけじゃなくて、明日香さんまで変になってしまいましたけど」

「二人には悪いとは思ってるけど、私達が下手に介入して事態が悪化してもいけないから基本的に原作で起きた事には干渉はしないでおこうと思ってるの。
それに、二人や光の結社以外に気になることもあるしね」

「お姉ちゃん、それってエックスさんの事？」

「ええ、ダークシンクロモンスターが居たって事は地縛神が関係してるのは間違いないでしょうからね」

「でも、その地縛神って去年お姉ちゃんとお兄さんが倒したはず

なんだよね？」

「ええ、そのはずよ。

それに、もし倒せていなかったとしてもこっちの世界には来れないはずなんだけど、なんでこの世界にダークシンクロモンスターが現われたのか不思議なのよね。

可能性としては、今まで姿を現していないコンドルの地縛神か、他の地縛神が生き残っててこっちの世界の何かに干渉しているとか、かしらね」

「そうだとしたら、干渉されているのは精霊でしょうか？」

「多分ね。

この世界の地縛神は人間より精霊の方が操りやすいみたいだし、原作での地縛神の目的って冥界の王を蘇らせる事だったし、エックスさんも呼び声に呼ばれて墓場に着いてからの記憶が無いみたいだから、可能性としてはアンデット系のモンスターの精霊が一番有力ね」

「それじゃあ、お姉ちゃんその干渉されてる精霊さんに心当たりとか無いの？」

「アンデット系のモンスターって言っても沢山居るんだし、そんな、心当たりなんて、有る訳・・・」

『？

あ、あの、どうかしました？』

蓮は小羽の質問に応えながら、ふと祐騎の背後でスターダスト達の相手をしていたエールの方を見て、言葉を詰まらせた。

「な、なんでもないわよ、気にしないで（あのモンスターの訳無いわよね、だってあのモンスターはあのカードの効果の中だけのモンスターなんだから）」

『そうですか？』

『クゥー！』

『・・・キュッ！』

『ギャウッ！』

『ああ、皆を無視してる訳じゃないですから怒らないでください！』

『あらあら、流石エールちゃんね。
それなら、私も抱きついちゃお～っと』

蓮の視線に気づいて蓮の方を向いたエールが、自分達を無視していると勘違いしたスターダスト達がエールに飛び掛り、それに乗じてティルもエールに抱きついて体の色々な所を触り出した。

『／／／ひゃあ！？
ティルさん、や、止めてくださいよー！』

『ふっふっふ、良いじゃないの、女同士なんだからコレくらい～』

「・・・ティル、いい加減にしないと本気で怒るわよ、私」

『あん、ちょっとしたスキンシップじゃないの～』

『／／／ティルさんの場合、そのスキンシップが過激過ぎるんですよ！』

『え～、そんな事無いと思うんだけどな～』

『完全に犯罪者予備軍だよねー、ティルさんって』

『・・・コレさえなければ、良い人なんですが』

『皆酷い！？
私は只、自分の欲望に忠実なだけなのに～』

「だから、いっつも言ってるでしょうが、少しはその欲望を抑える努力をしなさいよ！」

『断るわ！』

「威張って言うな！」

ティルの行動で話の流れが完全に変ってしまい、暫くの間ティルと蓮が言い争いを続け、その間祐騎達はデッキの調整をしていた。

そして、ティルと蓮の言い争いが終わって二人が落ち着いて再び話を再開させようとすると、祐騎の部屋のドアを誰かがノックしてきた。

「どうぞ、鍵は開いてますよ」

「そうか、なら邪魔するぞ」

「ええ、邪魔だから帰って頂戴」

「・・・いきなりそれは無いだろうが」

祐騎がドアをノックした人物に部屋に入っても良いと言うと、祐騎の部屋のドアを開けてジョシュアが入って来て、その姿を見た蓮は不機嫌な表情をして部屋に入ってきたジョシュアに帰れと言い、ジョシュアは困惑した表情になって蓮に言い返した。

「それで、何の用なの？」

「あ、ああ、実はお前に勝った奴が居ると聞いたから、そいつにデュエルを申し込もうと思って来たんだが」

「そう、なら今は取り込み中だからさっさと帰って頂戴」

「だから、なんでそんなに俺を追い返したがるんだよ！？」

「だって、祐騎は今私達と重要な話をしてるんだもの、関係無いアンタに帰って貰いたいのは当然でしょ」

「グッ、だ、だが、俺もソイツとデュエルをしないと気が治まらないんだよ！」

「あ、あの、蓮さん？」

「何、祐騎？」

蓮が部屋に入ってきたジョシュアを追い返そうとしていると、ジョシュアが可哀相に思えてきた祐騎が蓮に話しかけると、蓮はジョシュアに向けていた不機嫌な顔から一転して笑顔で祐騎の方を向いた。

「あの、僕は構わないですよ？
この話はまた後でも出来ますし」

「駄目よ、こういう奴は一度甘やかすと付け上がるんだから。
それに、もし私の時みたいにしつこく再戦を挑まれたらどうするのよ、コイツならやりかねないわよ」

「・・・紅龍お前、俺の事そこまで嫌いか？」

「ええ、嫌いね。
そもそも、考えなしに公の場で人の名前を出したり、悔しかったからって仕事放り出してこんな所までやって来るストーカーもどきの事を、どうやったら好きになれるってのよ」

「誰がストーカーもどきだ、誰が！」

「アンタ以外にいないでしょうが！」

「ま、まぁまぁ、二人とも落ち着いてください。
そうだ、ジョシュアさん」

「な、なんだ？」

「今からデュエルしますから、デュエルが終わったら今日のところは引き上げて貰えますか？」

「俺としてはお前とデュエル出来ればそれで良いんだが、大丈夫なのか？」

祐騎が条件付きでデュエルをすると言うと、ジョシュアは蓮の顔を伺うように覗き込んだ。

「・・・祐騎がそう言うんなら、好きにすれば良いじゃない」

「よ、良し！
なら早速外に出てデュエルするぞ！」

「はい、解りました」

蓮は拗ねた様子でジョシュアに祐騎とのデュエルを許可すると、ジョシュアと祐騎は部屋の外へと出て行き、蓮と小羽も二人の後を追って部屋から出て行った。

～レッド寮前～

部屋から出た祐騎とジョシュアはレッド寮の前の広い場所でお互いに距離を取ってデュエルディスクを構えた。

「それじゃあ、始めましょうか」

「ああ、行くぞ！」

「「デュエル！」」

祐騎　ＬＰ４０００

ジョシュア　ＬＰ４０００

「先攻は貰います、ドロー！
ガスタ・サンボルトを守備表示で召喚して、カードを2枚伏せてターンエンドです」

祐騎　手札３枚

「俺のターン、ドロー！
俺は手札からヘルウェイ・パトロール（攻／守１６００／１２００）を攻撃表示で召喚！」

「バトル！
ヘルウェイ・パトロールでガスタ・サンボルトを攻撃！
ヘル・チェイス！」

「さらに、ヘルウェイ・パトロールが戦闘により相手モンスターを破壊し墓地に送った時、相手に破壊したモンスターのレベル×１００ポイントのダメージを与える！」

「グゥッ」

祐騎　ＬＰ４０００→３６００

「バトルフェイズが終了した事で、墓地のガスタ・サンボルトの効果を発動します！
ガスタ・サンボルトは戦闘で破壊されたターンのバトルフェイズ終了時に、墓地に存在するガスタと名の付くモンスター１体を除外する事で、デッキから守備力１５００以下の風属性、サイキック族モンスター１体を特殊召喚する事が出来ます！」

「僕は、墓地のガスタ・サンボルト自身を除外して、デッキからガスタの賢者　ウィンダールを攻撃表示で特殊召喚します！」

「なら、俺はカードを１枚伏せてターンエンドだ」

ジョシュア　手札４枚

「僕のターン、ドロー！
僕は手札からチューナーモンスター、フルール・シンクロン（攻／守４００／２００）を攻撃表示で召喚！」

「そして、レベル６のガスタの賢者　ウィンダールにレベル２の

フルール・シンクロンをチューニング！
光速より生まれし肉体よ、革命の時は来たれり、勝利を我が手に！シンクロ召喚！」

「きらめけ、フルール・ド・シュバリエ（攻／守２７００／２３００）！」

祐騎の場のフルール・シンクロンが２つの光の輪になり、その輪の中にウィンダールが入るとウィンダールは６個の星に変り、その星が光の線で繋がり辺りを光が包み、その光が消えると祐騎の場に花びらの様な頭をした女騎士の姿をしたモンスターが現れた。

「なら、罠カード発動、奈落の落とし穴！
このカードは相手が攻撃力１５００以上のモンスターを召喚、反転召喚、特殊召喚した時発動し、召喚したモンスターを破壊して除外する！」

「させません！
奈落の落とし穴にチェーンしてフルール・ド・シュバリエの効果を発動します！
このカードは自身のターンに１度相手が発動した魔法、罠カードの発動を無効にして破壊する事が出来ます！
フルール・ド・シュバリエの効果で、奈落の落とし穴の発動を無効にして破壊します！」

「なんだとっ！？（あのカードにそんな効果が有ったのか、失敗したな）」

ジョシュアが伏せていた罠カードを発動させると、祐騎が召喚したフルール・ド・シュバリエの足元に底の見えない穴が現われフル

ール・ド・シュバリエを破壊しようとするが、フルール・ド・シュバリエはその穴には落ちず、ジョシュアの場で表側表示になっている奈落の落とし穴のカードを切り裂いて破壊した。

「さらに、フルール・ド・シュバリエのシンクロ素材となったフルール・シンクロンの効果を発動します！
フルール・シンクロンがシンクロ素材となって墓地に送られた時、手札からレベル２以下のモンスター１体を特殊召喚する事が出来ます！
僕は、このカードの効果で手札からレベル１のガスタ・イグルを守備表示で特殊召喚します！」

「そして、バトル！
フルール・ド・シュバリエでヘルウェイ・パトロールを攻撃！
フルール・ド・オラージュ！」

「クッ！」

ジョシュア　ＬＰ４０００→２９００

「僕はこれでターンを終了します」

祐騎　手札２枚

「俺のターン、ドロー！
俺は手札からチューナーモンスター、ダーク・リゾネーターを攻撃表示で召喚！」

「さらに、墓地のヘルウェイ・パトロールの効果を発動！
ヘルウェイ・パトロールは墓地に存在するこのカードを除外する事で、手札から攻撃力２０００以下の悪魔族モンスター１体を特殊召喚する事が出来る！」

「俺は墓地のヘルウェイ・パトロールを除外して、手札から攻撃力１６００のランサー・デーモンを攻撃表示で特殊召喚する！」

ジョシュアは墓地のヘルウェイ・パトロールの効果を使い、自身の場に２体のモンスターを並べると、嬉しそうな笑みを浮かべて祐騎を見た。

「楽しいな、お前とのデュエルは」

「そう言って貰えると嬉しいですね」

「ああ、だから見せてやる、レッド・デーモンズに続くもう一体の俺のエースシンクロモンスターを！
レベル４のランサー・デーモンにレベル３のダーク・リゾネーターをチューニング！」

「天頂に輝く死の星よ、地上に舞い降り生者を裁け！シンクロ召喚！
降臨せよ、天刑王（てんけいおう）　ブラック・ハイランダー（攻／守２８００／２３００）！」

ダーク・リゾネーターが手に持った音叉を鳴らすと、３つの光の輪になり、その輪の中にランサー・デーモンが入ると、ランサー・デーモンは４つの星に変り、辺りを光が包み込み、その光が消えるとジョシュアの場に大鎌を持った悪魔族モンスターが現われた。

「まずいわね、居るとは思ってたけどまさかブラック・ハイランダーが出てくるなんて」

「お姉ちゃん、あのモンスターってそんなに厄介なの？」

「ええ、ブラック・ハイランダーが場に存在する限りお互いにシンクロ召喚出来ないのよ」

「え、シンクロ召喚出来ないんですか！？」

「そうよ、それにあのカードは１ターンに１度相手モンスター１体に装備されている装備カードを全て破壊して、破壊した装備カードの数×４００ポイントのダメージを与える効果があるの。だから、祐騎はシンクロと装備カードを封じられたと言っても良い状況になったのよ」

「そ、そんな効果まであるんですか！？」

「まぁ、ＢＦほどのインチキ効果じゃ無いわよね」

「だから、インチキって言わないでくださいよぉ！」

「ごめん、ごめん、冗談だから、そんなに怒らないで」

蓮がジョシュアの召喚したモンスターの効果を小羽に説明すると、小羽は驚いて声を挙げ、そんな小羽を見た蓮がＢＦの事で小羽をイ

ジると、小羽は涙目になって蓮に抗議した。

そして、蓮が小羽を宥めると、二人は祐騎達のデュエルの観戦に戻った。

「バトル！
天刑王　ブラック・ハイランダーでフルール・ド・シュバリエを攻撃！
死兆星斬（デス・ポーラ・スレイ）！」

「罠カード発動、フローラル・シールド！
ブラック・ハイランダーの攻撃を無効にして、デッキからカードを1枚ドローします！」

「なら、俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ」

ジョシュア　手札2枚

「僕のターン、ドロー！
僕は、フルール・ド・シュバリエを守備表示に変更して、手札からガスタの巫女　ウィンダを守備表示で召喚してターンエンドです」

祐騎　手札3枚

「俺のターン、ドロー！
俺は、手札から魔法カード、強欲な壺を発動！

効果により、デッキからカードを2枚ドローする！」

「そして、手札から仮面竜（マスクド・ドラゴン）（攻／守１４００／１１００）を攻撃表示で召喚！」

「バトル！
ブラック・ハイランダーでフルール・ド・シュバリエを攻撃！
今度こそ決める、死兆星斬！」

「くっ！」」

「さらに、仮面竜でガスタの巫女　ウィンダを攻撃！
マスク・クラッシュ！」

「ガスタの巫女　ウィンダの効果発動！
ガスタの巫女　ウィンダが相手モンスターにより破壊され墓地に送られた時、デッキからガスタと名の付くチューナーモンスター１体を特殊召喚する事が出来ます！」

「僕は、この効果でデッキからレベル３のチューナーモンスター、ガスタ・ガルドを守備表示で特殊召喚します！」

ジョシュアの場の仮面竜が自身の仮面を使って祐騎の場のウィンダに突撃すると、ウィンダの居た場所に風が発生し、その風の中からガスタ・ガルドが現われた。

「俺はコレでターンエンドだ」

ジョシュア　手札３枚

「僕のターン、ドロー！
僕は手札から魔法カード、ワン・フォー・ワンを発動！
このカードの効果で手札のガスタ・スクイレルを墓地に送り、デッキからレベル1のスターダスト・シャオロンを守備表示で特殊召喚します！」

「さらに魔法カード、貪欲な壺を発動！
墓地のフルール・シンクロン、フルール・ド・シュバリエ、ガスタの賢者　ウィンダール、ガスタ・スクイレル、ガスタの巫女　ウィンダをデッキに戻しシャッフルして、デッキからカードを2枚ドローします！」

「そして、僕の墓地にモンスターが存在しないため、手札からガーディアン・エアトスを攻撃表示で特殊召喚します！」

祐騎は貪欲な壺を発動して、墓地の5体のモンスターをデッキとエクストラデッキに戻してデッキからカードを2枚ドローすると、墓地のモンスターが0になった事で手札に有ったエアトスを召喚した。

「さらに、手札から装備魔法、黒いペンダントをエアトスに装備します！
そして、エアトスの効果を発動します！
エアトスは、自身に装備している装備魔法カード1枚を墓地に送ることで、相手の墓地に存在するモンスターを3体まで除外し、エンドフェイズまで自身の攻撃力を除外したモンスターの数×５００ポイントアップします！」

「僕は、エアトスに装備した黒いペンダントを墓地に送り、ジョ

シュアさんの墓地からランサー・デーモンとダーク・リゾネーターを除外して、エアトスの攻撃力を１０００ポイントアップさせます！精霊のオペラ！」

ガーディアン・エアトス　攻↓２５００↓３０００↓３５００

「さらに、墓地に送った黒いペンダントの効果が発動！黒いペンダントがフィールド上から墓地に送られた時、相手に５００ポイントのダメージを与えます！」

「グゥッ！」

ジョシュア　ＬＰ２９００↓２４００

「そして、僕は手札からガスタの静寂　カームを攻撃表示で召喚して、バトル！」

「エアトスでブラック・ハイランダーを攻撃！フォビドゥン・ゴスペル！」

「グッ！」」

ジョシュア　ＬＰ２４００↓１７００

エアトスが効果を発動した時に現われた剣を地面に叩きつける様に振るうと、光と衝撃波がブラック・ハイランダーに襲い掛かり、ブラック・ハイランダーは一瞬その衝撃波を耐えたが、直ぐに押し

切られて破壊された。

「そして、カームで仮面竜を攻撃！」

「させん！
速攻魔法、神秘の中華鍋を発動！」

「えっ、この状況で神秘の中華鍋を！？」

「神秘の中華鍋の効果で仮面竜をリリースして仮面竜の攻撃力分のライフを回復する！」

ジョシュア　ＬＰ１７００→３１００

「なら、カームでダイレクトアタックです！」

「グゥッ」

ジョシュア　ＬＰ３１００→１４００

「ジョシュアさん、どうしてわざわざ自分からダイレクトアタックを受ける様にしたんですか？」

「ふっ、今それを教えてやる！
俺の場にカードが１枚も存在しない時にダメージを受けた時、手札から冥府(めいふ)の使者(ししゃ)　ゴーズ（攻／守２７００／２５００）を特殊召喚する事が出来る！」

「さらに、冥府の使者　ゴーズが戦闘ダメージによって特殊召喚した時、俺の場にレベル7の冥府の使者　カイエントークン（攻／守?／?）1体を特殊召喚する事が出来る！」

「この時、カイエントークンの攻撃力と守備力は受けた戦闘ダメージと同じ数値になる！
ゴーズを召喚した時に受けたダメージは1700、よってカイエントークンの攻撃力と守備力は共に1700となる！」

カイエントークン　攻／守?→1700／?→1700

祐騎の場のガスタの静寂　カームがジョシュアにダイレクトアタックをすると、ジョシュアの場に下から上がってくる階段が現われ、その階段から冥府の使者　ゴーズとカイエントークンが現われた。

「くっ、そういうことですか、僕はこれでターンエンドです」

祐騎　手札1枚

「俺のターン、ドロー！
俺は、手札から魔法カード、コール・リゾネーターを発動！
このカードの効果で、デッキからリゾネーターと名の付くモンスター1体を手札に加える！
俺は、デッキからチューナーモンスター、バリア・リゾネーターを手札に加える！」

「そして、俺は今手札に加えたバリア・リゾネーターを攻撃表示で召喚！」

「さぁ、いくぞ！
レベル7の冥府の使者　カイエントークンにレベル1のバリア・リゾネーターをチューニング！
王者の鼓動、今ここに列を成す、天地鳴動の力を見るが良い！シンクロ召喚！
燃え上がれ、紅蓮の魂、レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

「バトル！
まず、レッド・デーモンズでカームを攻撃！
アブソリュート・パワー・フォース！」

「罠カード発動、ガード・ブロック！
戦闘ダメージを1度だけ無効にして、デッキから1枚ドローします！」

レッド・デーモンズ・ドラゴンの攻撃でカームは破壊されたが、祐騎は発動させた罠カードの効果で戦闘ダメージを0にしてデッキからカードを1枚ドローした。

「なら、ゴーズでエアトスを攻撃！
ヘル・ソード・ブラッシュ！」

『きゃああ!?』

「くっ、エール!?」

『トキハ、ミチタ』

「え?」

祐騎　ＬＰ３６００→３４００

ゴーズの攻撃によってエアトスが破壊され、祐騎がダメージを受けると祐騎を中心にして、祐騎がエックスと戦った時と同じ様な黒い靄が現われ、祐騎がガード・ブロックで引いた１枚のカードからも黒い靄が現われ、祐騎とエールを包み込んだ。

そして、ジョシュアはいきなりの出来事に驚いてその場に固まり、蓮は祐騎とエールが包み込まれた靄に向かって走って近づいて黒い靄に触れると、その靄に拒まれるように弾き飛ばされ来を失い、弾き飛ばされた蓮を心配して小羽が蓮に駆けつけた。

「な、なんだ、コレは！？」

「祐騎、エール！
キャアッ！？」

「お姉ちゃん！？」

「・・・うぅっ」

～靄の中～

祐騎とエールは突然現われた靄に包まれた状態で周りの様子を確認していた。

「エール、なにが起きたか、解る？」

『いえ、私には何がなんだか。
マスターは何か思い当たる事とか、無いんですか？』

「エールがゴーズの攻撃を受けて破壊された時におかしな声が聞こえたと思ったら、この状況だったんだ。
だから、多分あの声が関係してるんじゃないかと思うんだ」

『声、ですか？』

「うん、時は満ちたって言ってたんだよ。
そういえば、その声エールと似てた様な」

『私ですか！？』

「うん、気のせいかもしれないけど」

『キノセイ、デハ、ナイ』

「『!?』」

祐騎とエールが話していると、二人の背後から先程と同じ声が聞こえ、二人はその声の方を向くと、そこには、祐騎がエックスとデュエルした後に現われた仮面と羽を持った黒い靄が存在していた。

『アナタは一体何者です!』

『ワタシハ、アナタ』

『え?』

『アナタハ、ワタシ。
ワタシト、アナタハ、モトモト、ヒトツ、ダッタ』

『な、何を・・・』

『ダカラ、サガシタ。
サガシテ、ヨウヤク、ミツケタ。
モウヒトリノ、ワタシ』

『私がアナタと元々一つだったとして、何で私を探していたんですか!?
それだけでなく、どうしてマスターまで巻き込んでこんな事をするんですか!』

『モウイチド、ヒトツ、ニ』

『な!?』

エールが靄に自分を探していた理由と、自分と祐騎を閉じ込めた理由を聞くと、靄はエールに近づいて、エールの体を靄が包み込んだ。

「エール！？」

『くっ、力が！？
コレは、一体』

『心配、無用』

『っ！？』

『一時、支配。
主、拝借』

『な、なにを・・・』

『説明、不可能。
謝罪』

『あっ・・・』

靄がエールと重なると、靄が着けていた仮面がエールの顔に現われ、エールの翼や服装も靄が身に纏っていた物になり、靄の話し方も片言から、単語毎に区切る話し方に代わっていった。

そして、エールと靄が完全に重なると、エールの姿は靄がしていたものと完全に一緒になると、今まで靄になっていた部分がエールと同じ体をした姿になった。

「え、エール？」

『否定、我名、デスサイス』

「デス、サイス？」

『肯定。
汝、我主』

「主って、それよりもエールをどうし、っ！？」

祐騎がエールをどうしたのか聞こうとデスサイスと名乗った者に詰め寄ると、デスサイスは仮面に開いている左目が赤く光り、祐騎の目を見つめた。

デスサイスに詰め寄った祐騎はデスサイスの赤い眼で見つめられると、身動きが取れなくなってしまった

「くっ！？」

『一時、催眠』

「・・・」

『催眠終了、行動開始』

デスサイスは祐騎の目から光が消えるのを確認すると、デスサイスは祐騎のデュエルディスクにセットされたままのエアトスのカードに入っていくと、そのカードの絵がエアトスからデスサイスのも

のに変った。

そして、カードの絵が変ると祐騎の周りを包んでいた靄が消えていった。

～レッド寮前～

祐騎を包んでいた靄が消えると、吹き飛ばされた蓮を心配そうに見ていた小羽が祐騎の方に駆け寄ってきた。

「お兄さん、無事だったんですね！」

「・・・」

「お、お兄さん？」

「・・・退け」

祐騎は駆け寄ってきた小羽を押しのけてジョシュアの方を向いてデュエルディスクを構えた。

「デュエル再開だ」

「お、おい、本当に大丈夫なのか？」

「いいから、早く再開させるぞ」

「お、おう」

祐騎がジョシュアとのデュエルを再開させようとする姿を見て、小羽は蓮の側までもどりティルに質問した。

「ティ、ティルさん、どういう事なんでしょうか？」

『解らないわ、祐騎くんに何か有ったのかも。
それに、どういうわけかエールちゃんの気配が無いの』

「え、本当ですか！？」

『ええ、なんか嫌な感じよね』

「う、ううっ、一体どうしたっていうのよ」

「あ、お姉ちゃん！」

「小羽？」

小羽がティルと祐騎の事を話していると、気絶していた蓮が目を覚まして、周りの様子を確認した。

「頭が痛いんだけど私、どうしたのかしら？」

「お姉ちゃん、覚えてないの？」

「覚えてないって、あっ！
そうだ、祐騎！」

『祐騎君なら、あそこよ』

「よかった、無事だったのね」

『果たして、無事と言って良いのかしらねぇ』

「え、それってどういう事よ？」

『まぁ、今はもう少し様子を見ましょうか』

「え、ええ」

ティルがそう言うと、蓮と小羽は祐騎達のデュエルの観戦に戻った。

「さて、エアトスがゴーズに破壊されたところで中断していたな」
「あ、ああ、そうだな（なんだ、コイツこんな感じだったか？）」
「なら、そこから再開させようか」
「解った」
ジョシュアは、先程と様子が違う祐騎を不思議がりながらもデュエルを再開させた。
「俺のモンスターは全て攻撃を終えているから、バトルフェイズを終了させ「まて」ん？」
「私はエアトスが破壊された事で手札のモンスターの効果を発動させる。
問題あるか？」
「い、いや、無い」
「なら、私の場に表側表示で存在するガーディアン・エアトスが相手により破壊され墓地に送られた時、手札のこのモンスターを守備表示で特殊召喚する事が出来る」
「死者の世界から蘇れ。
不死の死神、ガーディアン・デスサイス（攻／守２５００／２０００）」

祐騎の場に深い亀裂が現われ、その亀裂から靄の中で完全な姿になったデスサイスが現われた。

祐騎が手札からデスサイスを召喚すると、蓮は驚いて声を挙げた。

「そんな、何であのカードが!?」

『蓮、なんなのあのモンスターは?』

「・・・なんで、ガーディアン・デスサイスが、だってオレイカルコスの結界はもう無いのよ?
なのに、なんであのカードがあるのよ!」

『蓮、落ち着きなさい!』

「お姉ちゃん!」

デスサイスを見て、頭を抱えた蓮を心配して、小羽とティルが話しかけるが、蓮は二人の声が聞こえていない様子で、独り言を呟き続けた。

「ガーディアン・デスサイス、だと?」

「そうだ。
そして、デスサイスの効果発動、デスサイスは自身の墓地に存在するガーディアン・エアトスを除くモンスターの数×５００ポイント攻撃力をアップさせる。
今、私の墓地にはエアトス以外のモンスターが１体、よって５００ポイント攻撃力をアップさせる。
さぁ、まだお前のターンだぞ」

ガーディアン・デスサイス　攻２５００→３０００

「くっ、カードを２枚伏せてターンエンドだ！」

ジョシュア　手札２枚

「私のターン、ドロー。
デスサイスを守備表示から攻撃表示に変更、そしてこの瞬間デスサイスの効果発動。
デスサイスが守備表示から攻撃表示になったとき、自身の場に存在するデスサイス以外のモンスターを全て破壊する」

「なに！？」

「よって、私の場のガスタ・イグル、ガスタ・ガルド、スターダスト・シャオロンを破壊。
そして、墓地のモンスターの数が増えた事でデスサイスの攻撃力がさらにアップする」

ガーディアン・デスサイス　攻３０００→４５００

「攻撃力４５００だと！？」

「ただし、デスサイスがフィールド上に表側表示で存在する限り、私はモンスターを召喚、反転召喚、特殊召喚することが出来ない、よってガスタ・ガルドの効果は発動できない」

「バトル。
デスサイスでレッド・デーモンズを攻撃。
フォビドゥン・レクイエム」

「くっ、仕方ない。
罠カード発動！
ショック・ウェーブ！」

「何？」

祐騎の場のデスサイスが手に持った大鎌でレッド・デーモンズの首を切り裂こうとするが、ジョシュアが罠カードを発動させた事で攻撃を中止した。

「罠カード、ショック・ウェーブは自身のライフが相手より低い場合のみ発動する事が出来る！
フィールド上に存在するモンスター１体を破壊し、お互いのプレーヤーに破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与える！」

「俺はこのカードの効果で、俺の場のレッド・デーモンズを破壊する！」

「だが、私のライフは残り３４００、攻撃力３０００のレッド・デーモンズでは届かない、自滅するつもりか」

「そんな訳ないだろ。
さらに、速攻魔法、突進を発動！
このカードの効果で、レッド・デーモンズの攻撃力を７００ポイントアップさせる！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻３０００→３７００

「なんだと？」

「これで、終わりだ！」

「くっ」

「グゥッ！」

祐騎　ＬＰ３４００→０

ジョシュア　ＬＰ１４００→０

祐騎の場のデスサイスがレッド・デーモンズに攻撃を仕掛けると、ジョシュアは伏せていた罠カードを発動させ、お互いのライフを０にすることで、引き分けにした。

そして、デュエルが終わると、祐騎はカードを片付けるとジョシ

ュアや蓮達の事を無視するように歩き出した。

「・・・」

「お、おい、どこ行くんだよ！」

「祐騎！」

「・・・」

歩き出した祐騎に気づいた蓮が、祐騎に駆け寄って声を掛けると、祐騎は光り消えた眼で蓮を一度見るが、直ぐに歩き出した。

「っ！
祐騎、待って！」

『無駄』

「っ！？」

蓮が再び歩き出した祐騎と引きとめようとすると、祐騎の背後からデスサイスが現われ、蓮の首に手に持った大鎌を突きつけた。

『蓮！』

『停止、無事』

『それは、動けば無事じゃないって事かしら？』

『肯定』

『なるほどねぇ（隙が無いわね、今動くのは無理、か）』

ティルが蓮の側に行こうとすると、デスサイスがティルを止め、そのまま蓮の方を見た。

「・・・なんで、なんでアンタが居るのよ。アンタはオレイカルコスの結界の中だけのモンスターのはずでしょ！？」

『否定。
我存在、結界、不要』

「っ！
祐騎に何をしたの！」

『彼、我主。
一時、拝借、催眠状態』

「・・・催眠、ですって？」

『肯定』

「ふざけないで！
祐騎の手が借りたいなら普通に説明して頼みなさいよ！
なんでこんな事するのよ！」

『事情有、説明、不可能』

「事情があるじゃないわよ！

それはアンタの事情でしょう、祐騎を、私達を巻き込まないでよ！」

『否定。
汝等、関係有』

「え？」

『彼、我主、一時。
事情、終了後、返却』

デスサイスはそれだけ言うと、消えてしまい、祐騎を黒い靄が包み込んで、祐騎も姿を消してしまった。

そして、祐騎が消えた後には、事情が飲み込めていないジョシュアと、デスサイスの言葉を聞いて力無くその場に座り込んだ蓮と、そんな蓮を心配して声を掛ける小羽とマリナ、祐騎が消えて行った方向と蓮を交互に見つめるティルだけが残った。

第三十一話　現われる闇の守護者　ガーディアン・デスサイス（後書き）

今回の話は、どうだったでしょうか？

今回の話は話の中で書いているように、原作での剣山ＶＳ斎王の前になります。

それでは、これからもこの作品をよろしくお願いします。

それから、いまさらですが感想をユーザー以外の人も書けるようにしたので、感想を書いてくださるとありがたいです。

第三十二話　凍える闇　氷結のフィッツジェラルド（前書き）

来月でこの作品が1周年を迎えることになるので、それを記念してキャラの人気投票と特別編を書こうかと思っています。

それについての詳細とアンケートを今回のあとがきに載せてますので、良かったら読んでみて下さい。

それでは、第三十二話始まります。

第三十二話　凍える闇　氷結のフィッツジェラルド

～レッド寮増築部屋～

祐騎がデスサイスと共に姿を消した翌日、事情を知らないジョシュアに説明をするため小羽はジョシュアと共に万丈目が増築した部屋にやって来ていた。

「それで、昨日のアレはなんだったんだ？
紅龍の奴は何も居ない所に話しかけてたし、甲斐の奴もいきなり姿を消したりするし、一体なにが起きてるんだ？」

「えっと、その説明をする前に、信じられないかも知れないですけど、知っておいて貰いたいことがあるんです」

「知っておく事って、ソレを知らないと話せないって事か？」

「話せないというか、説明できないというか、とにかく聞いてください」

「あ、ああ、解った」

ジョシュアが小羽の言葉に頷くと、小羽は精霊の事や地縛神の事、エックスについての事など、蓮の事以外で自分が教えられる全てをジョシュアに伝えた。

「・・・と、いうわけなんです」

「・・・おいおい、本当なのか、その話？」

「本当です！
まぁ、ジョシュアさんは精霊が見えてないみたいですから、信じられないのは解りますけど」

「そりゃあ、いきなり精霊だのなんだのと言われて、はいそうですか、とは言えないだろ」

「ですよねぇ」

「ところで、紅龍の奴はどうした？
こういう話なら、アイツも一緒の方が良いんじゃないのか？」

「実はお姉ちゃん、昨日部屋に戻ってから一歩も外に出なくて、それだけじゃなくて部屋に誰も入れないんです」

「ちょっと待て、部屋と言うが、アイツの部屋のある寮って、今は白の結社とかいう奴等に占拠されてるんじゃないのか？」

「あ、部屋と言ってもブルー寮の部屋じゃなくて、このレッド寮にあるお兄さんの部屋なんです。
白の結社の人達がブルー寮を占拠する少し前から、お姉ちゃんはお兄さんと一緒にお兄さんの部屋で、私はこの部屋で生活してるんです」

「そうなのか」

小羽がジョシュアに説明し終えると、今まで蓮の側に居たティルが小羽の側にやって来た。

『説明終わったの？』

「あ、はい」

『そう、けどこの様子じゃ信じて貰えてないのね？』

『うん、やっぱり頭固いよねー、精霊見えない人って』

『まぁ、しょうがないでしょ、私達って見えない人にとってはお化けと大差ないんだし。
それよりも、小羽ちゃん』

「は、はい」

『ジョシュア君にレッド・デーモンズとゴーズのカードを持たせてくれない？』

「別にいいですけど、どうしてですか？」

『それは、やってからのお楽しみ』

「は、はい、解りました」

小羽とティルが話をしている間、ジョシュアは不思議に思いながらも何も無いところに話しかけている小羽を見ながら、目を擦ったり、頭を捻ったりしていた。

「あ、あの、ジョシュアさん？」

「なぁ、其処に精霊ってのが居るのか？」

「あ、はい、そうですけど」

「あー、駄目だ、全然見えない。
なぁ、見えるようになる方法とか無いのか？」

「さ、さぁ？
私は知らないですけど。
それよりも、ジョシュアさんレッド・デーモンズとゴーズのカードを手に持って貰えませんか？」

「別に良いが、何なんだ一体」

小羽に言われてジョシュアはデッキケースの中からレッド・デーモンズとゴーズの2枚を手に取った。

そして、ティルはジョシュアがその2枚を手に取るのを確認すると、意識を集中して次元転送を行って精霊世界からゴーズを呼び寄せた。

『な、何だ、いきなり！？』

『は～い、突然ごめんね～』

『アナタは、あの時の』

『ちょ～っと、貴方の力が必要だったから呼ばせてもらったわね～』

『オレの命を救って貰い、外敵を退治してくださったアナタ達の

力になれるなら、コレくらい些細なことだ』

『うふふっ、そう言って貰えると嬉しいわ～。
さて、あっちの方はどうなったのかしらぁ』

ティルは以前悪魔族の集落で会ったゴーズの精霊を呼び出すと、2枚のカードを持っていたジョシュアの方を向いた。

そして、ティルがジョシュアの方を向くと、そこにはブラック・ローズ達と同じ様にデフォルメされたレッド・デーモンズがジョシュアに手を差し出しているところだった。

「お、お前、まさか、レッド・デーモンズ・ドラゴンなのか？」

『ガウッ！』

『ほらほら、折角レモンちゃんが握手しようって手を出してるんだから、早く握手してあげなきゃ』

「あ、ああ、待たせたみたいで悪かったな、レッド・デーモンズ」

『ガウッ♪』

「それはそうと、誰だレッド・デーモンズの事をレモンだなんて言ったのは！」

『は～い、私よ私～』

「なっ！？」

ティルがジョシュアの声に応えると、ジョシュアは部屋の中を見回し、先程まで自分と小羽以外居なかった部屋の中に居るティル達を見て驚いて声を挙げた。

「お、おい、コイツ等、まさか全部」

「はい、精霊です」

『うふふっ、実験大成功～』

『ねぇ、ティルさん。
あの人、なんでいきなり私達の事見える様になってるの？』

『それはねぇ、ちょっと強引だけど、ゴーズとレモンちゃんの力を借りて、精霊との干渉力を強めてみたの～。
精霊が見える人っていうのは、精霊との繋がりや、精霊の宿っているカードとの相性が良くて精霊との干渉力が高い人だからね～。
だから、ジョシュア君が前に会った事のあるゴーズのカードを持ってたから、出来るかどうか不安だったけど、ゴーズを呼んでみたって訳。
まぁ、何はともあれ成功して良かったわぁ』

『なるほど、オレを呼び出したのはこのためか』

『そういうこと～、いきなり呼んじゃってごめんなさいね～』

『いや、こちらとしても、主となる者の所に来る事が出来、感謝している』

『そう？

なら、良いんだけどねぇ』

ゴーズはティルと話した後、驚いて固まっているジョシュアに近づいていった。

『貴方が、オレの主か』

「ご、ゴーズの、精霊か？」

『ああ、これからよろしく頼む』

「あ、ああ、こちらこそ」

ジョシュアとゴーズがお互いに挨拶をしていると、ティルが此処に来ていることに疑問を持った小羽がティルに話しかけた。

「あの、ティルさん」

『ん？
どうしたの～？』

「お姉ちゃんの側に居なくても良いんですか？」

『・・・そのことなんだけど』

「お姉ちゃんに何かあったんですか！？」

『ううん、その逆よ、何も無いわ。
本当に、何も無いの』

「それって、どういうことなんですか？」

『昨日から食事もほとんど取らないし、私が話しかけても返事もしない、ずっと祐騎君の部屋で自分を責め続けてるの』

「どうして、そんな事を・・・」

『あの娘、デスサイスが言ってた自分達にも関係が有るって事がそうとうショックだったみたいなのよ。
日頃から、自分が居るから祐騎君や小羽ちゃん達を危険な目にあわせたり迷惑を掛けるかもしれないって、思ってるところに昨日の出来事が会ったから、完全に塞ぎ込んじゃってるの』

「そんな・・・」

「おい、どうしてアイツがそんな事を思うんだ？
何でもかんでも自分のせいだと思うなんて、それこそ馬鹿のやる事じゃないか」

『まぁ、そうなんだけどねぇ。
蓮の場合、ちょっとした訳があるのよ』

「どういう訳かは聞かないが、紅龍の奴がそんな状態なら、これからどうするんだ？」

小羽がティルと話している間、ゴーズと話をしていたジョシュアは、ティルの言った今の蓮の状態を聞こえていたようで、これからどうするのかティルに訊ねると、ティルは悩みながらも話し出した。

『そうねぇ、今のところ祐騎君の居場所は解らないし、これから

も白の結社やダークシンクロモンスター関係のゴタゴタも有るでしょうから、今は待つ事しか出来ないわね～』

「そう、か」

ティルはジョシュアの問いに応え、ジョシュアがその応えに頷くと、二人の居る増築部屋のドアを勢い良く開けて、息を切らせながら翔が入ってきた。

「た、大変ッス！」

「ひぅっ！？
ビ、ビックリしたぁ～」

「あっ、ごめんッス」

「お前は、確かヘルカイザーの弟だったな。
そんなに慌ててどうしたんだ？」

「ジョシュア・クラウド！？
なんで此処に！？」

「俺の事は良いから、要件を言ったらどうだ？」

「そ、そうだ！
今、校舎で黒いローブを着た人が白の結社の人たち相手にデュエルを挑んで回ってるんスよ！
しかも、その黒尽くめの人の使うモンスターがシンクロモンスターみたいな黒い縁のカードで、実際にダメージがあるみたいで大騒ぎになってるんス！」

「おい、紅龍の妹、これって」

「・・・ダーク、シンクロモンスター。クッ！」

「お、おい！？」

「ちょ、ちょっと、どうしたんスか！？」

小羽は翔の話を聞くと、アカデミアの校舎に向かって走り出し、翔とジョシュアは小羽のいきなりの行動に驚いて動きが一瞬止まるも、直ぐに小羽の後を追って行った。

『・・・蓮、相手はいつまでも塞ぎ込んでる暇は与えてくれないみたいよ？』

そして、小羽達が走って出て行ったのを見送った後、ティルは蓮が居る祐騎の部屋の方を眺めながらそう呟いた。

～アカデミア内デュエル場～

「ウアアアッ！」

「ッ！？」

小羽がアカデミア内にあるデュエル場に着くと、翔が言っていた黒いローブを着た人の場に居るモンスターの攻撃で白の結社の一人が吹き飛んで行く所だった。

「やはり、白だ光だと言っている輩の力なんて、こんなもの。闇の力こそ真の力、お前達の言う光は闇には勝てないという事がこれで解っただろう。
さて、次の相手は誰だ？」

「くっ、言いたい放題言ってくれる。良いだろう、次はこの俺が相手に「待ってください！」って、なんだ！」

黒いローブを着た人の言葉を聞いたホワイトサンダーが自分が相手をすると言おうとするが、それを遮る様に小羽が声を挙げた。

「あの人の相手は私がやります」

「ふんっ、これはアイツと俺達白の結社の問題だ、部外者は引っ込んでいて貰おうか」

「いえ、私にもあの人と戦う理由が有ります。

ですから、先にあの人とデュエルさせて貰います」

「こちらはどちらでも構わん、早くしろ」

「ふんっ、そこまで言うならお前からやれば良いさ」

「ありがとうございます」

小羽はホワイトサンダーに礼を言うと、黒尽くめの立っているデュエル場の中央にお互いが向かい合う形で対峙した。

「いきます！（お兄さんが居なくて、お姉ちゃんも戦えない今、私が頑張らないと）」

「フンッ」

「「デュエル！」」

黒ローブ　ＬＰ４０００

小羽　ＬＰ４０００

「我のターン、ドロー！

我は、グリズリーマザー（攻／守１４００／１０００）を守備表示で召喚し、カードを２枚伏せてターンエンド！」

黒ローブ　手札３枚

「私のターン、ドロー！
私の場にカードが１枚も存在しない事により、手札からＢＦ－逆風のガスト（攻／守９００／１４００）を守備表示で特殊召喚します！」

「さらに、私の場にＢＦと名の付くモンスターが存在する事により、手札からＢＦ－黒槍のブラストを特殊召喚します！」

「そして、逆風のガストと黒槍のブラストをリリースして、手札からＢＦ－激震のアブロオロス（攻／守２６００／１８００）をアドバンス召喚します！」

小羽は特殊召喚で呼び出した２体のＢＦをリリースして、手札から巨大な棍棒を持ったモンスターを召喚した。

「私は激震のアブロオロスの効果を発動させます！
激震のアブロオロスは１ターンに１度、相手の魔法、罠ゾーンに存在するカードを全て手札に戻す事が出来ます！
シェイク・フェザー・バック！」

「なんだと！？」

小羽の場のアブロオロスが手に持った棍棒を地面に叩きつけると、黒ローブの魔法、罠ゾーンに伏せられていた２枚のカードを手札に戻した。

「ただし、この効果を使った場合このカードの攻撃力は１０００ポイントダウンします」

激震のアブロオロス　攻２６００→１６００

「バトルです！
激震のアブロオロスでグリズリーマザーを攻撃！
リターン・ショック！」

「だが、グリズリーマザーが戦闘で破壊され墓地に送られた時、
我はデッキから攻撃力１５００以下の水属性モンスターを１体特殊
召喚することが出来る！」

「いいえ、そうはいきません！
激震のアブロオロスが戦闘を行ったモンスターはダメージ計算終
了後に持ち主の手札に戻ります！」

「なに！？」

小羽がアブロオロスの効果を説明すると、アブロオロスの攻撃を
受けたグリズリーマザーが黒ローブの手札に戻って行った。

「私はカードを１枚伏せてターンエンドです」

小羽　手札２枚

「くっ、面倒なモンスターだな。
我のターン、ドロー！
我はもう一度グリズリーマザーを守備表示で召喚！
そして、カードを２枚伏せてターンエンドだ！」

「それを待ってました！

罠カード発動、デルタ・クロウ一アンチ・リバース！
このカードは自身の場にＢＦと名の付くモンスターが存在する時にのみ発動することが出来、相手の場にセットされている魔法、罠カードを全て破壊します！」

「なんだと！？」

「このカードの効果で、貴方の場にセットされた魔法、罠カードを全て破壊します！」

「くっ！」

小羽が発動させた罠カードの効果で黒ローブの場にセットされていた魔法の筒とリビングデットの呼び声が破壊され墓地に送られ、小羽のターンになった。

黒ローブ　手札４枚

「私のターン、ドロー！
私は手札から魔法カード、黒羽の宝札を発動します！
このカードは、１ターンに１度しか使うことが出来ず、このターン特殊召喚を行わない代わりに、手札のＢＦと名の付くモンスター１体を除外して、デッキからカードを２枚ドローします！」

「私は、手札のＢＦ－極光のアウロラを除外してデッキから２枚ドロー！
そして、手札からＢＦ－精鋭のゼピュロス（攻／守１６００／１０００）を攻撃表示で召喚します！」

「バトル！
激震のアブロオロスでグリズリーマザーを攻撃！
そして、アブロオロスの効果でグリズリーマザーを手札に戻します！」

「くっ、またか！」

「さらに、精鋭のゼピュロスでダイレクトアタックです！」

「グッ！」

黒ローブ　ＬＰ４０００→２４００

「おのれ、よくもやってくれたな！」

「あ、アナタは！？」

小羽の場の精鋭のゼピュロスの攻撃を受けた黒ローブは、その衝撃で目深に被り顔を隠していたフードが捲れると、ウェーブの掛かった青い髪をした女性の顔が現われた。

「海野さん！？」

「ふんっ、何を驚いている」

「どうして、海野さんが・・・」

「貴様には関係無いだろう、それよりもデュエルを続行しないのか？」

「くっ、カードを1枚伏せてターンエンドです！」

小羽　手札1枚

小羽は、隠れていた顔が顕になったのを見て、それが自身の知っているオベリスクブルー女子の海野幸子だった事に驚くが、幸子はそんな小羽のそんな様子を無視してデュエルを続行させた。

「我のターン、ドロー！
手札から魔法カード、テラフォーミングを発動！
このカードの効果で、デッキからフィールド魔法、伝説の都　アトランティスを手札に加える！」

「そして、今手札に加えた伝説の都　アトランティスを発動！
このカードの効果により、手札と場の水属性モンスターのレベルが1つ下がり、攻撃力と守備力が２００ポイントアップする！」

「さらに、我は手札からマーメイド・ナイト（攻／守１５００／７００）を攻撃表示で召喚！
そして、伝説の都　アトランティスの効果により、マーメイド・ナイトのレベルは4から3になり、攻撃力と守備力は２００ポイントアップだ！」

マーメイド・ナイト　レベル４↓３　攻／守１５００↓１７００／７００↓９００

「バトル！

マーメイド・ナイトでＢＦ－精鋭のゼピュロスに攻撃！」

「くっ！」

小羽　ＬＰ４０００→３９００

「けど、これで攻撃は終わりに「まだだ」えっ！？」

「マーメイド・ナイトの効果、このカードは海のフィールド魔法がある時、１度のバトルフェイズ中二回の攻撃をすることが出来る！」

「け、けど、今のフィールドは海じゃないはず！」

「残念だが、伝説の都　アトランティスは海としても扱う！」

「そんな！？」

「マーメイド・ナイトでＢＦ－激震のアブロオロスを攻撃！
サブマリン・クロス・スラッシュ！」

「グッ、ですが激震のアブロオロスの効果でマーメイド・ナイトは手札に戻ります！」

小羽　ＬＰ３９００→３８００

幸子の場のマーメイド・ナイトの2回攻撃により、小羽の場のモンスターが全て破壊されたが、小羽の場のアブロオロスの効果によ

って、幸子の場のマーメイド・ナイトも手札に戻りお互いにモンスターが居なくなってしまった。

「我は、カードを1枚伏せてターンエンドだ」

幸子　手札2枚

「私のターン、ドロー！
私は、手札からBF－蒼炎のシュラを攻撃表示で召喚します！」

「バトル！
蒼炎のシュラでダイレクトアタックです！」

「させん！
永続罠、竜巻海流壁（トルネード・ウォール）を発動！
このカードはフィールド魔法、海が存在する時のみ発動することが出来、海がフィールドに存在しない場合このカードは破壊されるが、このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、モンスターからの攻撃による自身へのダメージは0になる！」

「くっ、ターンエンドです」

小羽　手札1枚

「我のターン、ドロー！
我はグリズリーマザーを守備表示で召喚、伝説の都　アトランティスの効果で攻守が200ポイントアップし、レベルが1つ下がる。
我はこれでターンエンドだ」

グリズリーマザー　レベル４↓３　攻／守１４００↓１６００／１０００↓１２００

幸子　手札２枚

「私のターン、ドロー！
手札から魔法カード、強欲な壺を発動！
効果によりデッキから２枚ドローします！」

「そして、手札からＢＦ－陽炎（かげろう）のカーム（攻／守６００／１８００）を守備表示で召喚して、バトル！」

「蒼炎のシュラでグリズリーマザーを攻撃！」

「グリズリーマザーが戦闘により破壊された事により、デッキから２体目のグリズリーマザーを攻撃表示で特殊召喚！
当然、このグリズリーマザーもアトランティスの効果で攻守が２００ポイントアップし、レベルが１つ下がる」

グリズリーマザー　レベル４↓３　攻／守１４００↓１６００／１０００↓１２００

「ですが、蒼炎のシュラは相手モンスターを戦闘で破壊した時、デッキから攻撃力１５００以下のＢＦと名の付くモンスター１体を効果を無効にして特殊召喚することが出来ます！」

「私はこの効果で、デッキからＢＦ－そよ風のブリーズを守備表示で特殊召喚します！」

「そして、バトルフェイズを終了して、メインフェイズ２に入ります。
レベル４のＢＦ－陽炎のカームにレベル３のそよ風のブリーズをチューニング！」

「皆を守る翼、今こそ漆黒の鎧を纏って、羽ばたく時！
シンクロ召喚！
ＢＦ－アーマード・ウィング！」

小羽は自身の場の２体のモンスターをシンクロさせ、アーマード・ウィングを攻撃表示で召喚した。

「私はこれでターンエンドです」

小羽　手札１枚

「我のターン、ドロー！
我は手札から魔法カード、強欲な壺を発動！
効果でデッキからカードを２枚ドロー！」

「さらに魔法カード、強欲なウツボを発動！
我は手札の、水属性のマーメイド・ナイトとアトランティスの戦士をデッキに戻してシャッフルし、カードを３枚ドローする！」

「そして、手札からガガギゴ（攻／守１８５０／１０００）を攻撃表示で召喚し、墓地のグリズリーマザーを除外して、水の精霊

アクエリア（攻／守１６００／１２００）を攻撃表示で特殊召喚！
この２体もアトランティスの効果でレベルが１下がり、攻撃力と守備力がアップする！」

ガガギゴ　レベル４→３　攻１８５０→２０５０　守１０００→１２００

水の精霊　アクエリア　レベル４→３　攻１６００→１８００
守１２００→１４００

「さらに、手札から魔法カード、二重召喚を発動！
このカードの効果により、我はこのターンもう一度通常召喚を行う事が出来る！」

「我は、場の水の精霊　アクエリアとガガギゴをリリースして、手札からＤＴ－カタストローグ（攻／守０／０）をアドバンス召喚！」

「ダークチューナー！？」

幸子が自身の場のモンスター２体をリリースしてダークチューナーを召喚すると、小羽は驚いて声を挙げた。

「レベル３となっているグリズリーマザーにレベル８のＤＴ－カタストローグをダークチューニング！」

「闇と闇渦巻くとき、冥府の底より極寒の息吹が目覚める、光なき世界へ！
ダークシンクロ！

凍てつけ、氷結（ひょうけつ）のフィッツジェラルド（攻／守２５００／２５００）！」

「こ、これが、レベル－５のダークシンクロモンスター！？」

幸子の場のカタストローグが８つの星に変りグリズリーマザーの中に入っていくと、グリズリーマザーの中で８つの星の内３つの星が消え、残りの５つの星が黒くなると、辺りを黒い光が包み込み、その光が収まると全身が氷で出来たモンスターが姿を現した。

「これがアイツの言っていたダークシンクロモンスター、か」

「なぁ、アンタあのカードの事知ってるのか？」

「ん？
誰だ、お前」

「あぁ、俺は遊城十代、よろしくな！」

「ああ、お前があの遊城十代か。
俺の事は知っていると思うが、ジョシュア・クラウドだ。
それと、あのカードは話で聞いたことがあるだけで詳しくは知らないぞ」

「そうなのか」

幸子がフィッツジェラルドを召喚したのを見て小羽を追ってデュエル場に来ていたジョシュアが呟くと、ジョシュアの近くで翔や吹

雪達とデュエルを観戦していた十代がジョシュアに語りかけ、ジョシュアは初めて会った十代達と軽く挨拶を交わすと観戦に戻った。

「フィッツジェラルドのダークシンクロ素材となったカタストローグの効果発動！
カタストローグがダークシンクロの素材となり墓地に送られた時、場のカード１枚選択して破壊する！
我は、この効果でお前の場のＢＦ－アーマード・ウィングを破壊だ！」

「させません！
罠カード発動、ボム・ガード！
このカードは、自分の場のモンスター１体を破壊する効果のカード効果を無効にして、相手に５００ポイントのダメージを与えます！」

幸子　ＬＰ２４００→１９００

「チッ！
だが、フィッツジェラルドは水属性、よってアトランティスの効果でレベルが１つ下がり攻守が２００ポイントづつアップする！」

氷結のフィッツジェラルド　レベル－５→－６　攻２５００→２７００　守２５００→２７００

「バトル！

氷結のフィッツジェラルドでＢＦ－精鋭のゼピュロスを攻撃！
ブリザード・ストライク！」

「くっ、きゃあああああっ！」

小羽　ＬＰ３８００→２７００

幸子の場のフィッツジェラルドが体を作っている氷を飛ばして攻撃を仕掛けると、小羽の場のゼピュロスが凍りついて砕け散り、その破片が小羽に襲い掛かり小羽の体に無数の切り傷が出来た。

「お、おい、やっぱりダメージが本物になってるぞ！？」

「まさか、闇のデュエルッスか！？」

「けど、彼女は闇のアイテムを持っているという訳ではない様だし、一体どういうことなんだろうね？
君は何か知らないのかい？」

「いや、知らないな」

フィッツジェラルドの攻撃で小羽の体に傷が出来た事で、このデュエルで発生するダメージが本物である事を再確認した十代達が驚いて声を挙げる一方で、ジョシュアは吹雪からの質問を軽く避して、小羽のデュエルを見続けた。

「くぅっ、これが実体化したモンスターの攻撃、なんだ（お兄さんとお姉ちゃんはこんなデュエルを何度もしてたんだね）」

『小羽、大丈夫！？』

「う、うん、大丈夫だよ。
コレくらいで根を上げてたら、お姉ちゃんの手伝いなんて出来ないもん。
だから、まだ大丈夫だよ、マリナ」

『・・・小羽』

マリナが小羽を心配して声を掛けると、小羽は笑ってマリナに自分は大丈夫だと告げると、幸子と再び対峙した。

「ふんっ、何をゴチャゴチャ言っているのか知らんが、我はこれでターンエンドだ」

幸子　手札０枚

「私のターン、ドロー！
良し！
私は、手札から速攻魔法、サイクロンを発動してフィールド魔法、伝説の都　アトランティスを破壊します！」

「ちっ、海としても扱うアトランティスが破壊されたことで、竜

巻海流壁も破壊され、フィッツジェラルドの能力も元に戻る」

氷結のフィッツジェラルド　レベル－６→－５　攻／守２７００→２５００／２７００→２５００

「そして、バトル！
アーマード・ウィングで氷結のフィッツジェラルドを攻撃！
ブラック・ハリケーン！」

「攻撃力は同じ、相打ち狙いか」

「いいえ、アーマード・ウィングは戦闘では破壊されません！
よって、破壊されるのは貴女の氷結のフィッツジェラルドだけです！」

小羽の場のアーマード・ウィングがフィッツジェラルドに攻撃を仕掛けるが、フィッツジェラルドの攻撃はアーマード・ウィングには効かず、フィッツジェラルドにアーマード・ウィングの拳が当たると、フィッツジェラルドの居た場所が爆発を起こし、フィッツジェラルドは粉々に砕け散った。

「なるほど、そういうことか。
だが、残念だったな」

「な、何がですか！」

「氷結のフィッツジェラルドはこのカードが戦闘で破壊され墓地に送られた時、自身の場にモンスターが存在しない場合、このカードを表側守備表示で我の場に特殊召喚する！

蘇れ、フィッツジェラルド！」

幸子がそう叫ぶと、アーマード・ウィングの攻撃で発生した爆発で辺りに充満していた煙が一つになっていき、最終的にはアーマード・ウィングと戦う前と同じ姿のフィッツジェラルドが姿を現した。

「さらに、バトルフェイズ終了時にフィッツジェラルドがフィールド上に表側表示で存在する時、このターン氷結のフィッツジェラルドと戦闘を行ったモンスターを全て破壊する！」

「そ、そんな！？」

「戦闘で破壊出来なくとも、効果でなら別だろう？
フィッツジェラルドよ、その目障りなモンスターを破壊しろ！
フリーズ・ジ・エンド！」

「くっ、アーマード・ウィングが・・・
私はカードを1枚伏せて、ターンエンドです」

小羽　手札0枚

「我のターン、ドロー！
氷結のフィッツジェラルドを守備表示から攻撃表示に変更して、バトル！
氷結のフィッツジェラルドでダイレクトアタック！」

「させません！
私は、墓地のＢＦ－陽炎のカームの効果を発動させます！
陽炎のカームは、相手のバトルフェイズ中に自分の場にモンスタ

ーが存在しない時、墓地からこのカードを除外する事で、私の墓地に存在するシンクロモンスター1体を選択して私の場に特殊召喚することが出来ます！」

「私は、陽炎のカームの効果で、墓地からシンクロモンスターであるＢＦ－アーマード・ウィングを守備表示で特殊召喚します！
ただし、この効果で特殊召喚したシンクロモンスターはバトルフェイズ終了時にゲームから除外されます」

「なら、我は攻撃を中断してバトルフェイズを終了する」

「バトルフェイズ終了時に、陽炎のカームの効果によりアーマード・ウィングは除外されますが、この瞬間、罠カードを発動させます！」

「なに！？」

「罠カード、黒羽の奇術を発動！
このカードは、自分の場に表側表示で存在するＢＦと名の付くモンスター1体がカード効果によってフィールドから離れる時発動することが出来、このカードの対象となったＢＦと名のつくモンスターのレベルより低いレベルのＢＦと名の付くモンスター以外の闇属性モンスター1体を、デッキから効果を無効にして特殊召喚することが出来ます！」

「私はこのカードの効果で、デッキからレベル６の闇属性モンスター、ブラック・マジシャン・ガールを効果を無効にして攻撃表示で特殊召喚します！」

『ようやく出番だね！

今まで出れなかった分、頑張るよ！』

小羽が罠カードを発動させると、小羽の場のアーマード・ウィングを黒い羽が覆い隠し、その羽が消えると、先程までアーマード・ウィングが居た場所にマリナのカードが現われた。

ちなみに、小羽がマリナを召喚した時、ジョシュアは近くで観戦していた翔がいきなり興奮しだしたのを見て、そんな翔に引いたジョシュアは翔から少し距離を取っていた。

「ふんっ、今更そんなモンスターを呼んだ所で無駄だ。
我はこのままターンエンド！」

幸子　手札1枚

「私のターン、ドロー！
私は手札から魔法カード、天使の施しを発動します！
このカードの効果により、デッキかカードを3枚ドローし、その後手札のカードを2枚墓地に捨てます！」

小羽は新たにドローした3枚のカードの中から、モンスターカード1枚と罠カード1枚を墓地に捨てた。

「そして、手札からＢＦ－極北のブリザードを攻撃表示で召喚します！
このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル４以下のＢＦと名のつくモンスター1体を効果を無効にして、守備表示で特殊召喚することが出来ます！」

「このカードの効果で、墓地からＢＦ－月影のカルートを守備表示で特殊召喚します！」

「っ、それは先程の天使の施しで墓地に捨てたカードか！」

「そうです。
さらに、私は墓地の精鋭のゼピュロスの効果を発動します！
ＢＦ－精鋭のゼピュロスはデュエル中に１度だけ、自分の場に表側表示で存在するカード１枚を手札に戻す事で、自分の場に特殊召喚することが出来ます！」

「私は、月影のカルートを手札に戻して、精鋭のゼピュロスを攻撃表示で特殊召喚します！
ただし、この効果を使用した場合、４００ポイントのダメージを受けます」

小羽　ＬＰ２７００→２３００

小羽がブリザードの効果で特殊召喚したカルートを手札に戻して、墓地からゼピュロスを特殊召喚すると、小羽から特殊召喚したゼピュロスに靄の様な物が送られて小羽のライフが減少すると、小羽は眩暈を感じてふらついた。

「くぅっ」

『小羽、大丈夫！？』

「う、うん、大丈夫。
それよりも、一気に決めるよ、マリナ」

『了解、いつでも良いよ！』

「いくよ！
レベル６のブラック・マジシャン・ガールにレベル２の極北のブリザードをチューニング！」

「魔法を操る乙女、今こそ漆黒の翼を得て、大空に羽ばたいて！
シンクロ召喚！
舞い上がれ、ＢＦ－賢風のウィング・マジシャン・ガール！」

「また、フィッツジェラルドと同じ攻撃力のモンスターか、先程の出来事をもう忘れたのか？」

「忘れてなんていません！
賢風のウィング・マジシャン・ガールは、自分の墓地に存在するＢＦと名の付くモンスター１種類につき１００ポイント攻撃力がアップします！」

「今、私の墓地に存在しているＢＦは、逆風のガスト、黒槍のブラスト、蒼炎のシュラ、そよ風のブリーズ、激震のアブロオロス、極北のブリザードの６体！
よって、攻撃力は６００ポイントアップして３１００となります！」

ＢＦ－賢風のウィング・マジシャン・ガール　攻２５００→３１００

『皆、行くよ、力を貸して！』

マリナが手に持っている杖を掲げると、小羽の墓地に存在しているＢＦ達が杖に吸収されていき、ＢＦ達を吸収した杖から強い光があふれ出した。

「ちっ（だが、あの攻撃力なら我のライフは残る、それにフィッツジェラルドが破壊されても効果で蘇生し、フィッツジェラルドに攻撃した奴のモンスターは効果で破壊される、それに我の手札には攻撃力１９００のアトランティスの戦士、次のターンで終わりだ）」

「バトルです！
ＢＦ－賢風のウィング・マジシャン・ガールで氷結のフィッツジェラルドを攻撃！」

「さらに、ダメージステップ時に手札の月影のカルートの効果を発動します！
月影のカルートは手札から墓地に送る事で、自分の場に表側表示で存在するＢＦと名の付くモンスター１体の攻撃力をエンドフェイズまで１４００ポイントアップさせます！」

「そして、カルートが墓地に送られた事で、墓地に存在するＢＦと名の付くモンスターの数が増えた事で、ウィング・マジシャン・ガールの攻撃力は自身の効果でさらに１００ポイントアップします！」

ＢＦ－賢風のウィング・マジシャン・ガール　攻３１００→４５００→４６００

「なんだと！？」

「コレで、終わりです！
ブラックフェザー・バーニング！」

「くっ、莫迦なぁぁぁっ！」

幸子　ＬＰ１９００→０

マリナの攻撃がフィッツジェラルドに直撃してライフが０になると、その攻撃で発生した余波により、幸子は後ろに飛ばされて倒れこみ、小羽もその場に力無く座り込んでしまった。

「な、なんとか、勝てたよぅ」

『小羽、本当に大丈夫？』

「うん、ちょっと疲れたけど、大丈夫だよ。
そうだ、海野さんは！」

『オノレェ、コムスメガァッ！』

「ひぅっ！」

『ヨクモ、ヤッテクレタナァッ！』

『小羽！』

小羽が倒れた幸子を心配して幸子が倒れた方を見ると、幸子が使っていたデュエルディスクにセットされたままだったフィッツジェ

ラルドのカードから黒い影が現われ、いきなり小羽に襲い掛かり、マリナが小羽を守ろうと小羽と影の間に立つが、黒い影がマリナと小羽に襲い掛かる直前に何かに切り裂かれ、小羽達に襲い掛かる事は無かった。

『ナ、ナン、ダト！？』

『一体、なにが・・・』

「これで2体目、だね」

『「ッ！？」』

小羽とマリナが何が起きたのか解らずに混乱していると、小羽達の背後から声が聞こえ、その声に釣られて振り向くと、そこには黒いコートを羽織った祐騎と手に持った大鎌を振り切った形で停止しているデスサイスの姿が有った。

『キ、キサマ、ナゼ！？』

『身魂分離、憑依状態、自由行動』

『ッ、オ、オノレェ！』

『見敵必殺、魂魄浄化』

『ガアアアッ！』

小羽達に襲い掛かろうとした黒い影が驚いた様子でデスサイスを確認すると、デスサイスはその影と少し話すと、手に持った大鎌で

黒い影を再び切り裂いた。

そして、切り裂かれた黒い影はそのまま消えて行き、黒い影が出てきたカードは、黒い縁から白い縁の通常のシンクロモンスターのカードへと変化していった。

「さて、次だね」

『行動迅速、被害軽減』

「うん、それが一番だ」

「お兄さん、待ってください！」

「・・・何、かな？」

「何かな、じゃないですよ！
今まで何処にいたんですか！
いえ、それよりも今は直ぐにお姉ちゃんに会って下さい！」

「っ、蓮さんがどうかしたの？」

黒い影が消えた事を確認した祐騎がその場から移動しようとしているのを小羽が止めて、祐騎に蓮と有ってくれる様に頼むと、祐騎は一瞬動揺するが直ぐに冷静な声で小羽に蓮の事を聞いた。

「お姉ちゃん、お兄さんが居なくなってからずっと自分を責め続けてるんです。
だからお兄さん、お姉ちゃんに会ってあげてください！」

「・・・そうか、そんな事になってたんだ。
だけど、ごめん」

「え？」

「今は蓮さんとは会えないんだ」

「ど、どうしてですか！？」

「それも言えない。
だけど、コレだけは蓮さんに伝えてくれるかな」

「なん、ですか」

「今回の出来事は蓮さんのせいじゃない、関係が有るだけだって」

『へぇ、やっぱりそうだったのね』

『ティルさん！？』

祐騎が小羽に蓮への伝言を伝えると、いつの間にか来ていたティルが祐騎に話しかけた。

『それにしても、前言ってた催眠っていうのはもう解けてるのよね？』

『肯定。
主、我協力、承諾』

『ふ～ん、それって私達には要請しないのかしらぁ？』

『危険』

『それは祐騎君も同じでしょ？』

『否定。
我、主魂魄、守護。
汝等主、守護不完全』

『それじゃあ、守りが完全なら問題ないって訳ね？』

『肯定』

『そう、なら祐騎君』

「・・・はい、なんですか」

『必ず手伝えるようにするから、それまで無茶だけはしないで。
貴方に何か有れば、今度こそ蓮が壊れてしまうから』

「・・・はい、約束します。
それでは、蓮さんへの伝言、よろしくお願いします」

ティルはデスサイスとの話の後に、ティルは祐騎に話掛けると、祐騎はティル達に別れを告げてその場からまた煙の様に姿を消してしまった。

そして、祐騎が消えた後に小羽達のところにジョシュアがやって来て、小羽に祐騎の事を聞くと、小羽はジョシュアに祐騎と話した事を告げると、先程のデュエルでの疲れが来たのか、気を失ってし

まった。

そして、ジョシュアは気を失った小羽を抱え、遅れてやって来た十代達にデュエルが終わってから気を失い続けてる幸子を任せて、小羽を保健室に運んだ。

こうして、二度目のダークシンクロモンスターに関する事件は終わった。

第三十二話　凍える闇　氷結のフィッツジェラルド（後書き）

今回の話、どうだったでしょうか。

それでは、前書きにあった様にアンケートを取りたいと思います。

今回のアンケートは、特別編で書く企画の投票をお願いします。

1つ目が他の作品の方とのコラボ。

2つ目がキャラ投票1位のキャラ（主人公の場合は2位のキャラ）の短編。

3つ目がこの作品のオリキャラを他の世界に飛ばすとどうなるか？

の3つの中から1つ選んで投票してください。

コラボは、希望してくださる方が居た場合ですが、2つ目と3つ目は投票数の多い方を書きます。

1つ目は、希望してくださる方が居ればの話ですが、もしも万が一複数の申し込みが有った場合、先着3名までとさせてもらいます。

それ以上ですと、本編の更新が長く途絶えると思いますので。

それから、3つ目の場合ですと、どんな世界に飛ばすかも書いてくださるとありがたいです。

書いていただいた世界の中から、書ける物を選ばせて貰います。

後、最後にキャラ投票の方法ですが、感想にアンケートと一緒にお一人3票で順位づけて投票してください。

投票の得点は、1位が3点、2位が2点、3位が1点という配点で総合点数で順位を決めます。

なお、投票の対象は原作キャラ以外のキャラでしたら誰でもOKですので、気軽に投票してください。

それから、投票の締め切りは1週間後の4月21日にさせてもらいます。

それでは、アンケートの投票よろしくお願いします。

第三十三話　試練への旅立ち（前書き）

今回はデュエル無しの回です。

後、アンケートの受付期間を延長しますので、良ければ感想に書き込んでください。

それと、コラボは一応受け付けますが、先着3名様とのコラボの後何話か本編を更新してからコラボさせて貰う様にさせて頂きます。

それでは、第三十三話始まります。

第三十三話　試練への旅立ち

～祐騎の部屋～

小羽が氷結のフィッツジェラルドを使う海野幸子とデュエルを行い、行方不明になっていた祐騎と再会し、祐騎から蓮への伝言を預かった翌日、気を失い保健室に運ばれた小羽は保健室で目を覚ましたが、保健医の鮎川先生に安静にしているように言われたため、ティルに祐騎からの伝言を伝えて貰う様に頼んで、再び寝りについた。

そして、小羽から伝言を託されたティルは蓮の居る祐騎の部屋にやって来ていた。

『蓮、入るわよ～？』

「・・・（ブツブツ）」

『蓮？』

「私のせいだ、また私のせいでおかしな事が起きた、だから祐騎が居なくなった、全部私のせいだ、そうよ私のせいで皆に迷惑掛けて、私が居るから・・・」

『ッ！？

蓮、しっかりしなさい！

蓮！』

ティルが祐騎の部屋に入ると、蓮は祐騎の部屋の中で祐騎の予備

の制服を抱えて、虚ろで光の消えた眼で呟き続けており、蓮のそんな姿を見たティルは慌てて蓮の側に寄って呼びかけた。

「てぃ、る？」

『ええ、そうよ！』

「ねぇ、ティル？」

『な、何？』

「私ってここに居ても良いのかな？」

『あ、当たり前でしょ！？
いきなり何を言い出すのよ！』

「だって、私のせいで余計な事が起こるし、私が居るから祐騎達も危ない目に遭うんだから、ここに居るのが今の私より、この体の元々の持ち主だったらこんな事には『いい加減にしなさい！』ティル？」

蓮がティルの存在に気づいてティルに自分が居ない方が良いと話すと、ティルは目に涙を溜めながら蓮を怒鳴った。

『なんで、そんなに自分を責めるのよ！
今の蓮じゃなくて、以前の蓮だったらこんな事は起きなかった？
ええそうね、確かにそうかもしれない』

『けど、今の蓮じゃなかったら私は此処に居ないし、祐騎君だって居なかったかもしれない、エールちゃんもこっちに来なかったか

もしれないし、小羽ちゃんだって貴女の両親に引き取られなかったかもしれない、ジョシュア君だって貴女に会って負けたからこそ強くなってプロにまでなった、それなのに自分は居なかった方が良かったですって！？』

『勘違いにも程が有るわよ！

良い？

貴女の周りに今の貴女に不満が有る人なんて居ないの、此処に居るのが今の貴女だからこそ私達は此処に居るし、此処に居たいと思ってる。

私達の思いを無視して勝手に自分を責めて、その挙句自分は居ない方が良いなんて、悲しい事を言わないでよ！』

「てぃ、ティル？」

『祐騎君も小羽ちゃんも、ジョシュア君だって貴女が居なくなった方が良いなんて思ってない。

皆、今の貴女以外の貴女は知らない、だから今の貴女を否定する人はたとえ貴女自身であっても絶対に許さない！

だって、皆今の貴女が好きで一緒に居るの、だから少しくらい辛い事があったとしても貴女が居なくなった方が良いなんて思わないわ』

「本当？

本当に、私、此処に居ても、良い、の？」

『当たり前じゃない！

例え、誰かが貴女の事を否定したとしても、私達は貴女を否定しないわ』

「ぐすっ、ごめ、ん、ぐすっ、ごめんね、ごめん、ね」

『良いのよ、今は一杯泣いて溜まった物を全部吐き出しなさい』

「ぐすっ、う、ん、うあああああっ！」

ティルの言葉を聴いた蓮は、祐騎の制服を手に持ったままその場で大声で泣き出し、暫くの間泣き続けていたが、泣き止むと疲れたのか蓮はその場で眠ってしまい、ティルはそんな蓮の側でずっと見守り続けていた。

そして、蓮が泣きつかれて眠ってから数時間後、眼を覚ました蓮は光の消えていた眼に光が戻ったが、それでもいつもより弱々しい感じになっていた。

『蓮、大丈夫？』

「・・・うん、大丈夫、ありがとう」

『もぅ、大丈夫な訳ないでしょ？
けど、さっきに比べれば大分ましね。
さてと、それじゃ本題に入りましょうか』

「本題？」

『そ、貴女がこの部屋で鬱全開の時に起きた事を教えとこうと思ってね』

「なにか、有ったの？」

『まぁね、またダークシンクロモンスターが出たのよ』

「えっ？」

『けど、それはもう小羽ちゃんが倒したから問題無しよ』

「そう、なんだ」

『けど、重要なのはこの後よ』

「えっ、まだ何か起きたの？」

『祐騎君が現われたの』

「え？」

ティルが祐騎が現われたと言うと、蓮は一瞬何を言われたのか理解出来なかったが、次第に理解していき、完全に理解出来ると、ティルに詰め寄った。

「祐騎が現われたって、それじゃあ祐騎は帰って来たの！？」

『ううん、なんでもやる事が有るって言って、またデスサイスと一緒に消えたわ。
しかも、そのやる事は話せないし、行き先も言えないって言われたの』

「・・・そう、なんだ」

『ほらほら、そんなに落ち込まない。

一番重要なのは、これからなんだから』

「えっ、まだあるの？」

『ええ、祐騎君からの伝言を預かってるの。
今回の出来事は関係が有るだけで、蓮のせいじゃないって』

「私の、せいじゃない、の？」

『ええ、祐騎君はそう言ってたわよ』

「本当、に？」

『私が嘘を言う訳ないでしょ、全部本当の事よ』

「そっか、私のせいじゃ無いんだ、そうなんだ」

ティルから祐騎の伝言を聞いた蓮は、安心した声で呟いて、手に持っていた祐騎の制服を再び抱きしめた。

『ほらほら、解ったら今日はもう寝なさい。
今まで眠れてなかったんでしょ、顔が凄い事になってるわよ？』

「そう、かな？」

『ええ、そりゃあもう、目の下に大きな隈が出来てるし、髪もボサボサ、さっき泣いたから眼も真っ赤だし、頬に涙の跡が出来てて酷いもんよ。
そんな顔、小羽ちゃん達に見せられないでしょ？』

「うん」

『だから、今日はもう寝て、明日小羽ちゃん達と話をしましょう？』

「話って、何を話すの？」

蓮がティルに質問すると、ティルはいつもの笑顔になって蓮に応えた。

『それは、明日のお楽しみ。
ほらほら、早く寝ちゃなさい、ね？』

「うん。
ねぇ、ティル」

『なに？
まだ何か気になる事が有るの？』

「ううん、あの、ありがとう」

『ふふっ、どういたしまして』

蓮がティルにお礼を言うと、ティルは蓮に微笑んで応え、ティルの笑顔を見た蓮は、その後直ぐに眠りにつき、ティルは眠った蓮の側で蓮が目覚めるまで蓮の事を見守っていた。

そして、その次の日、目を覚ました蓮は小羽達と話をする為、ティルが皆を呼んだ増築部屋に向かった。

～レッド寮増築部屋～

「お姉ちゃん！」

「こ、小羽！？」

蓮が増築部屋に入ると、既に部屋の中に居た小羽がいきなり蓮に抱き着いて来たので、バランスを崩して倒れそうになったが、何とか持ち直して抱きついてきた小羽に話しかけた。

「い、いきなりどうしたの？」

「だ、だって、お姉ちゃん、一昨日から、ずっと部屋から出ないし、ティルさんが、ずっと自分を責めてるって、言ってたから、心配で、私」

「・・・ごめんね、私がこんなだから心配掛けて。

それだけじゃなくて、危険な目に合わせちゃったし、本当にごめん」

「ううん、そんなのは良いの！
お姉ちゃんが元気で居てくれれば、それで良いの！
だから、もう一人で抱え込まないで」

「私じゃあ、お兄さんの代わりは出来ないけど、それでもお姉ちゃんの力になりたいの！
だから、もう少し私にも頼って、自分一人で全部抱え込まないでよ」

「ごめんね、そんな風に思ってくれてるなんて考えもしないで、自分一人で抱え込んで心配させて、こんな駄目駄目なお姉ちゃんだけど、頼らせてもらっても、良いかな？」

「もちろん！」

小羽が涙目で蓮に訴えると、蓮はそんな小羽を抱きしめながら小羽の言葉に応え、蓮の応えを聞いた小羽は蓮の顔を見ながら笑顔で頷いた。

そして、蓮が小羽を離して部屋の中を見渡すと、ソファーに座って蓮と小羽を見ていたジョシュアを見つけ、蓮と小羽はジョシュアに近づいていった。

「もう良いのか？」

「ええ、なんだか情けない所を見せちゃったわね」

「それくらい構わないぞ、むしろお前が人並みに悩む事が解って良かったと思ってる所だ」

「・・・アンタ、私を一体なんだと思ってたのよ」

「俺を負かした完璧超人、もしくは人外レベルの化け物、か？」

「リアルにぶっ飛ばすわよ、このストーカーもどき」

「ふっ、それだけ元気なら、もう大丈夫そうだな」

「ええ、おかげさまでね」

蓮とジョシュアが言い争いの後に、お互いに笑顔になったのを確認したのか、ティルが現われて蓮達に話しかけた。

『さてと、おしゃべりはこのくらいにして、話に入りましょうかぁ』

「そういえば、結局何の話なの？」

『それはねぇ、簡単に言えば祐騎君の手伝いをするために必要な事よ』

「・・・祐騎の手伝いのために必要って、祐騎の手伝いをするのに必要な事があるって言うの？」

『そうよ、デスサイスが言うには祐騎君がやろうとしてる事、もしくは今やってる事は魂魄、魂が危険になるような事らしいわ。祐騎君には今アンデット族のデスサイスが憑いてるから、魂の防御は完璧のはずだけど、私達じゃあアンデット族や天使族の精霊みたいに魂を守る力は無いわ』

『だから、祐騎君は私達、特に蓮が危険に会わない様に私達を避けてるんだと思うの』

「そっか、だからお兄さんは、あの時お姉ちゃんには会えないって言ったんだね？」

『ええ、そうだと思うわ。
だって、そうじゃないと祐騎君が蓮を避ける理由が無いもの』

ティルと小羽が祐騎と話した時の事を思い出していると、その話を聞いた蓮はまた暗い顔になって俯いた。

「やっぱり、私のせいで『はい、ストーップ！』ッ！？」

『アンタは、またそうやって自分を責めて、昨日の私との話やさっき小羽ちゃんに言った事、もう忘れちゃったの？』

「そうだよ！
さっき私も頼ってくれるって言ったのに、また一人で抱え込むきなの？」

「ううっ、ごめ『はい、謝らない！』ぐぅ」

蓮が小羽とティルに謝ろうとするのをティルが遮り、蓮は何も言えなくなって、うな垂れた。

『ふふっ、蓮を苛めるのはこの辺にして、話を戻しましょうかぁ』

「そうだな、それで何をすれば良いんだ？」

『あら、いきなりそこ？
せっかちねぇ、もう少し余裕がないと、女の子に嫌われるわよ～
？』

「今はそんな事に興味は無いからな。
それに、こういう事はさっさと済ませた方が良いだろ？」

『解ったわよ～。
それじゃ、本題に入るわね？』

「ええ」

ティルが話を再開させると、俯いていた蓮も何とか顔を上げてティルの方を向いてティルの話を聞いた。

『簡単に言えば、皆には精霊界で試練を受けて貰うわ』

「試練、ですか？」

『ええ、そうよ。
精霊界の集落には、それぞれの集落の中で命尽きた精霊の魂を冥界に送る場所が有るんだけど、そこを守護してる番人から与えられる試練をクリアすれば、魂を守る加護が与えられるの』

「なんで、そんな事をしてるんですか？」

『そりゃあ、冥界に行かないといけない事が有るからよ。
特に天使族とかは冥界との繋がりも多いし、間違って冥界に行っちゃった精霊を連れ戻したりするのに必要なんだけど、誰彼構わず

行ける様になると色々問題が有るから今の制度になったみたいよ？』

『ふむ、その話ならオレも知っている。
というか、そもそもオレがその番人だったがな』

「えっ、ゴーズ！？」

『おお、挨拶がまだだったな。
この度ジョシュア殿の精霊となった、冥府の使者　ゴーズのザンだ。
以後、よろしく頼む』

「よ、よろしく。
というか、もしかして貴方って、石版を探してた時に会ったゴーズ？」

『ああ、その節は世話になった。
あの時の恩は一生忘れん』

『そういえば、名前付けてもらったんだね？』

『うむ、昨日主が付けてくださったのだ、ゴーズは種族名だから紛らわしいと言ってな』

『そっか、これからよろしくね、ザン』

『ああ、こちらこそだ』

ティルの話にザンが応えると、ザンが居るのを始めて知った蓮が驚き、そんな蓮にザンは挨拶をし、マリナがザンに名前が付いてい

た事を疑問に思って聞くと、ザンは昨日ジョシュアに付けて貰ったと言い、マリナと改めて挨拶をした。

『はいはい、話を戻すわよ～』

『む、済まない、脱線してしまったな』

『別に構わないわよ～。
それよりも、ザンがさっき言った事って本当？』

『ああ、といっても今はカイエンに任せているがな』

『そっか、ならジョシュア君の方も問題は無いわね』

「俺の方もって、他の奴の行く場所の番人の事知ってるのか？」

『もちろん、蓮と私が行くブラックガーデンに居る冥界の番人とは顔馴染みだもの』

「そうなの！？
あっ、もしかしてローズの事？」

『いいえ、ローズじゃないわよ。
ローズはブラックガーデンの剪定士、言ってみれば表の番人、冥界の番人とは別物よ』

「そっか」

ティルの応えに蓮が納得している一方で、小羽がティルに質問した。

「あ、あの、私の行くところの事については、何か無いんですか？」

『う～ん、小羽ちゃんの場合、ＢＦの集落に送るべきか、魔法都市に送るべきか迷ってるのよね～』

『あっ、魔法都市は止めといた方が良いよ？』

『あら、どうしてかしら？』

『だって、冥界関係はお師匠様やエンディミオン様みたいな最高位の魔導士様達が厳重に封印してるって話を聞いた事あるから』

『あらま、それじゃあＢＦの集落に送りましょうか』

『だが、その集落の何処に冥界の番人が居るか解らないだろ？』

『現地の子に頼めば大丈夫じゃない？』

『あー、なるほどねー』

ティルの言葉に納得した様子で頷き、ティル達の話が飲み込めなかった小羽はいまだに首を傾げたままで、ティル達の話を聞き続けた。

「それで、いつ行くのよ」

『これから直ぐだけど？』

「「「今直ぐ（ですか）！？」」」

『だって、早くやるに越した事は無いでしょ？』

「それは、そうだけど」

『大丈夫、皆なら試練を乗り越えられるはずよ。
それに、これを乗り越えないと祐騎君を手伝えないのよ？
それでも良いの？』

「それは、嫌だけど。
けど、二人を巻き込む訳には・・・」

「もう、お姉ちゃん！
同じ事を何回も言わせないでよ！
私はお姉ちゃんの力になりたいの、だからお姉ちゃんが拒否しても行くからね！」

「ふん、何か勘違いをしてるみたいだから言っておくが、俺はお前のために行く訳じゃないぞ。
甲斐の奴とのデュエルは横槍が入って有耶無耶になったからな、早くちゃんとした形で再戦するためには奴を手伝って面倒ごとをさっさと終わらせるのが一番だからな」

「アンタ達・・・」

蓮は二人を巻き込む事を気にして、二人が精霊世界に行くことを止めようとしたが、小羽とジョシュアは蓮の言葉を遮り、精霊世界に行くことを宣言した。

『ね、言った通りでしょ？』

「うん。
二人とも、ありがとう」

「言っただろう、俺自身の都合だと。
礼を言われる筋合いは無いぞ」

「ジョシュアさんも頑固なんですねぇ」

「うるさいぞ、紅龍の妹」

「小羽です」

「何？」

「私の事は名前で呼んでください。
苗字だと、お姉ちゃんとの区別が面倒でしょうし」

「どうしてもというなら、呼んでやる」

「はい、どうしてもです」

「ぐっ！」

『いつもは弱気なのに、こういう時だけは強いんだよね、小羽』

『そこが小羽ちゃんの良い所でしょ？』

『まぁね！』

小羽とジョシュアの言い合いを見ていたティルとマリナが笑顔で二人を見つめ、ジョシュアが小羽に折れて小羽の事を名前で呼んだのを確認すると、ティルは蓮達をそれぞれの場所に転移させた。

第三十三話　試練への旅立ち（後書き）

今回の話、どうだったでしょうか。

次回は、蓮視点の話か、コラボになります。

それでは、これからもこの作品をよろしくお願いします。

第三十四話　魔天使の試練　咲き誇れ、ブラッディ・ローズ・ゴッデス（前書き）

今回は蓮視点の話で、２回目のパワーアップ回になります。

それでは、第三十四話始まります。

第三十四話　魔天使の試練　咲き誇れ、ブラッディ・ローズ・ゴッデス

～ブラック・ガーデン～

小羽とジョシュアをそれぞれ試練を受ける場所に送ったティルは、蓮と共にブラック・ガーデンにやって来た。

そして、ブラック・ガーデンの中に入った蓮とティルは、ブラック・ガーデンの中で待っていたローズを見つけ、近づいていった。

『やっほー、ローズ』

『ティル、それに蓮も!?
どうしたのよ、連絡もせずにいきなり来て』

『ちょ～っと、野暮用でね～。
それはそうと、サラの所に案内してくれない?』

『別に良いけど、サラに何か用なの?』

『ええ、ちょっと蓮に試練を受けさせようと思ってね』

『なっ!?』

ティルが蓮に試練を受けさせると言うと、ローズは信じられない物を見たように驚き、ティルに詰め寄った。

『アンタ、正気なの!?
蓮に試練を受けさせるって、それがどういう事か解ってるの!?』

『・・・ええ、解ってる。
けど、今はそれしか方法が無いのよ』

『何があったの？
アンタが蓮を危険に晒してまで、やらないといけない、何かが起きてるんでしょ？』

「祐騎を手伝う為よ」

『祐騎を手伝う為って、そういえばあの二人はどうしたの？』

『それも含めて説明するわよ、実はね・・・』

蓮の言葉で祐騎とエールが居ない事に気づいたローズに、ティルはデスサイスやダークシンクロモンスターの事等、今起こっている事や解っている事を話した。

『そんな事が・・・』

『ええ、だから試練を受けないと祐騎君を手伝う事が出来ないの』

『けど、手伝うも何もそれ以前に、試練で蓮に何かあったら、それこそ本末転倒じゃないの！』

「ローズがそんなに言うってことは、それだけ危ない事なんだと思うけど、私は祐騎を手伝いたい。
私のせいじゃなくても、祐騎は今も戦ってる、そして私はそれに少なくとも関係が有る。
それなのに、私が何もせずにいて祐騎に何か有ったら、私、もう

どうしたら良いか、判らなくなる」

『・・・私だって、正直蓮を危険な目に合わせたくない、だけどこのまま何も出来ずに祐騎君が本当に居なくなれば、今度こそ蓮は壊れてしまう。
それだけは、絶対に防がないといけないの！』

『・・・判ったわよ。
だけど、これだけは約束して頂戴、決して無理をせず、危なくなったら試練を放棄してでも無事に帰ってきなさい、良いわね？』

「うん、ありがとう、ローズ」

蓮がローズの言葉に頷くと、ローズは蓮とティルを連れてブラック・ガーデンの奥へと、二人を導いていった。

～ブラック・ガーデン最奥～

蓮達がローズに連れられてブラック・ガーデンの最深部に着くと、そこには植物の蔦が絡み付いて扉が開かなくなっている巨大な門が有り、その門の前には黒い薔薇の翼を持ち、仮面を着けた精霊、魔天使　ローズ・ソーサラーが佇んでいた。

『サラ、ちょっと良いかしら？』

『・・・こんな所に何の用ですか、姉上？
ここは、姉上の様な方が居るべき場所では無いのですから、直ぐにお戻りください』

『そう言わないで、今日は貴女に用が有って来たんだから』

『用が有るのは私ではなく、私の役目では無いのですか？』

『確かにそうだけど、貴女に用が有るのも本当の事よ』

『取り繕う必要は無いのですよ、姉上はこのブラック・ガーデンの剪定士、私の様な者に用がある筈が無いでしょうから』

『もう、サラは相変わらずねぇ』

サラがローズの言葉を否定して自分の事を尽く卑下する様に話すのを見ていたティルは、溜息を吐いてサラに話しかけた。

『ティル様も相変わらずのようで』

『まぁね』

『それで、このような場所に姉上共々やって来られたのは、どう

いった用件ですか？
姉上もティル様も既に試練は終了しているはずですが？』

『ええ、その通りよ。
だから、今日来たのは私達じゃなくて、私のマスターに試練を受けさせて貰おうと思ってね』

『マスター、つまりそこの人間の方ですね』

ティルが此処に来た理由をサラに言うと、サラはティルの側に居る蓮に顔を向けた。

「始めまして、ティルのマスターしてる紅龍蓮よ」

『そうですか、ご挨拶が遅れてしまい申し訳ございません。
ここ、ブラック・ガーデン最深部にて、冥界門の監視兼試練の監督をしている、魔天使（まてんし）　ローズ・ソーサラーのサラと申します。
以後お見知りおきを』

「えっと、サラとローズって姉妹なの？」

『ええ、サラは私の妹よ』

『妹などと、私の様な者は愚妹で十分です姉上』

「ど、どうなってるの、これ？」

『はぁ～、昔からサラは自分の事を過小評価して卑屈になってるのよ』

『とんでもない、僭越ながら姉上が私の事を過大評価していらっしゃるのです。
凛天使である姉上と、魔天使である私とではそれこそ天と地程の差が有るのですから』

『そんな事ないって、いつも言ってるでしょ。
私が今までブラック・ガーデンの剪定士として動けていたのは、貴女がここで冥界門を監視していてくれたからなんだから』

『それが、魔天使たる私の使命ですので』

『魔天使や凛天使なんて、そんなの少しの違いしかないじゃない』

『いえ、ソレは違います』

『いいえ、違わないわ！
大体ねぇ・・・』

ローズとサラが言い合いを始めると、二人の会話に着いていけなくなっていた蓮は、ティルにサラの事を聞いた。

「ねぇ、あの二人ってどうしてあんな風になったの？」

『う～ん、私も詳しい事は知らないんだけど、ローズとサラは元々天使なんて呼ばれてなかったんだけど、それぞれ此処での試練を受けた後凛天使と魔天使になって、それが原因でサラがあんな風になったって話よ』

「そうなんだ。
あ、そういえば、聞いてなかったけど試練の危険って何なの？」

『試練はね、一度クリアしたり、途中で棄権した場合は何も危険な事は無いんだけど、二度と試練を受けられなくなるの。
それで、試練に失敗した場合、最悪、消えるてしまうの』

「え？」

『死ぬわけじゃないの、ただ試練に失敗した場合、その挑戦者の精神に多大な負荷が掛かって、人格が変ることが有るの。
だから、消えるっていうのはその人の存在じゃなくて、その人がその人じゃ無くなるって事なの』

「そう、なんだ」

『やっぱり止める？』

「ううん、やるわ。
小羽達もやるんだから、私だけ逃げるわけにはいかないもの」

『解った。
それと、試練には私は付いていけないから、しっかりね』

「うん、ありがとティル」

蓮とティルが話を終えてローズ達の方を見ると、ローズ達の話も終わったようで、蓮達に近づいてきた。

『それでは、これより試練を始めます。
用意はよろしいですか？』

「ええ、お願い。
だけど、具体的には何をすれば良いの？」

『特に何をするかは決まっておりません。
ここでの試練は冥界の力を跳ね返す力を受け入れる為に、当人に欠如している物を補う為に行うのです。
なので、ここでの試練でなすべき事は貴女次第という事になります』

「そうなの？」

『はい、そしてここでの試練は貴女の精神世界で行われますので、当人以外は試練に参加する事は出来ません。
よろしいですか？』

「ええ、解ったわ」

蓮がサラの言葉に頷くと、サラは蓮の額に手を当て、目を瞑って集中しだした。

『では。
冥界の力退ける力、今此処に集いて、彼の物に試練を与えん』

「・・・」

ドサッ

サラが蓮の額に手を当てて言葉を放つと、蓮は目を閉じてその場に倒れ込み、ティルはそんな状態になった蓮を楽な姿勢で寝かせると、蓮のすぐ側に座って祈り始めた。

『（蓮、絶対に無事に帰ってきなさいよ）』

～精神世界内～

サラによって精神世界に送られた蓮は、茨が犇き所々に薔薇や椿など赤い花が至る所に咲いている空間に佇んでいた。

「ここが、私の精神世界、なの？」

「そうよ」

「誰！？」

蓮は自分が呟いた独り言に返事をされ、驚いて後ろを向くと、そこには蓮と全く同じ姿をしたもう一人の蓮が立っていた。

「誰だなんて他人行儀ね、私は私（あなた）よ」

「わた、し？」

「ええ、この精神世界に閉じ込められたもう一人の私よ」

「それって、まさか」

「安心しなさい、私は私、憑依した体の元々の持ち主とは違う」

「それじゃ、貴女は一体？」

蓮がもう一人の蓮に問いかけると、もう一人の蓮は歪んだ笑顔を浮かべて蓮に話しかけた。

「言ったでしょう、私は私だと。
私は私の心の中にある闇の人格よ」

「闇の、人格？」

「そう、私は私の自己嫌悪、独占欲、嫉妬、後悔、罪悪感、猜疑心、そういった負の感情によって形作られた人格。
さぁ、構えなさい」

「え？」

「デュエルよ。
私が勝てばそのまま此処から出られる、けど、私が勝ったら私は消える」

「そ、そんな、私は・・・」

「さぁ、構えなさい！」

「っ！？」

「デュエル！」

「デュ、デュエル！」

蓮が、もう一人の蓮の声で咄嗟にデュエルディスクを構えると、そのままデュエルに突入した。

蓮　ＬＰ４０００

蓮（闇）　ＬＰ４０００

「先攻は私（あなた）からよ」

「わ、私のターン、ドロー。
手札から、ポタニカル・ライオを守備表示で召喚、カードを１枚伏せて、ターンエンド」

蓮　手札４枚

「私のターン、ドロー！
私は、手札のモンスター１枚を墓地に送る事で、手札からクイック・シンクロン（攻／守７００／１４００）を守備表示で特殊召喚！」

「クイック・シンクロンって、まさか!?」

「さらに、墓地に送ったモンスターはダンディライオン、効果により私の場に綿毛トークン2体を守備表示で特殊召喚!
そして、手札から魔法カード、調律(ちょうりつ)を発動!」

「このカードの効果により、デッキからシンクロンと名の付くチューナーモンスター1枚を手札に加えてデッキをシャッフル、その後デッキの一番上のカードを墓地に送る!
私はこのカードの効果により、デッキからジャンク・シンクロンを手札に加えてシャッフルし、デッキの1番上のカードを墓地に送る」

蓮(闇)の発動させた魔法カードの効果で、デッキから中華鍋を被ったモンスターが墓地に送られた。

「さらに、今手札に加えたジャンク・シンクロンを攻撃表示で召喚!
そして、ジャンク・シンクロンの効果を発動、墓地に存在するレベル2以下のモンスター、チューニング・サポーターを守備表示で特殊召喚!」

「そして、レベル1の綿毛トークン2体にレベル5のクイック・シンクロンをチューニング!
集いし思いがここに新たな力となる、光差す道となれ!
シンクロ召喚!
燃え上がれ、ニトロ・ウォリアー(攻/守2800/1800)!」

「続いて、レベル1のチューニング・サポーターにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！
集いし拳が新たな力を掴み取る、光差す道となれ！
シンクロ召喚！
来なさい、アームズ・エイド（攻／守１８００／１２００）！」

「さらに、アームズ・エイドのシンクロ素材となったチューニング・サポーターの効果発動！
チューニング・サポーターがシンクロ素材となって墓地に送られた時、デッキからカードを1枚ドローする！」

「アームズ・エイドの効果発動！
アームズ・エイドは1ターンに1度自分フィールド上に存在するモンスター1体に装備カード扱いで装備する事が出来る！
私はアームズ・エイドをニトロ・ウォリアーに装備カード扱いで装備する！」

蓮（闇）の場に現われた手甲型のモンスターがニトロ・ウォリアーの右腕に装備された。

「そして、アームズ・エイドを装備したモンスターは、攻撃力を１０００ポイントアップし、装備したモンスターが相手モンスターを戦闘で破壊した時、相手プレーヤーに破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与える！」

ニトロ・ウォリアー　攻２８００→３８００

「バト「バ、バトルフェイズに入る前に罠を発動するわ」ふんっ」

「罠カード、百花繚乱－桜の舞－を発動！
手札から、植物族モンスター、グローアップ・バルブを墓地に送ることで、相手はこのターン攻撃宣言をする事が出来ない！」

「なら、カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

「エンドフェイズ時に、桜の舞の効果で墓地に送ったグローアップ・バルブを守備表示で特殊召喚する」

蓮（闇）　手札3枚

「わ、私のターン、ドロー」

「動揺してるわね」

「貴女、そのデッキは」

「ええ、私（あなた）の考えている通り、このデッキは私（あなた）が元の世界で使っていたデッキの内の一つよ」

「っ！」

蓮（闇）が自分が使っているデッキが、蓮が元の世界で使っていたデッキだと言うと、蓮は動揺して息を呑んだ。

「わ、私は、手札から魔法カード、おろかな埋葬を発動！
デッキからダンディライオンを墓地に送り、ダンディライオンの効果で私の場に綿毛トークン2体を守備表示で特殊召喚する！」

「そして、レベル1の綿毛トークン2体とレベル4のポタニカル・ライオにレベル1のグローアップ・バルブをチューニング！」

「冷たい炎が世界の全てを包み込む、漆黒の花よ開け！
シンクロ召喚！
咲き乱れよ、ブラック・ローズ・ドラゴン！」

「ブラック・ローズ・ドラゴンの効果発動！
このカードの召喚に成功した時、フィールド上に存在する全てのカードを破壊する！
ブラック・ローズ・ガイル！」

「甘い！
速攻魔法、禁じられた聖杯をブラック・ローズ・ドラゴンを選択して発動！
このカードの効果で、このターンのエンドフェイズまでブラック・ローズ・ドラゴンの攻撃力を４００ポイントアップさせ、効果を無効にする！」

「くっ！」

ブラック・ローズ・ドラゴン　攻２４００→２８００

蓮の場に召喚されたブラック・ローズ・ドラゴンが、フィールド上のカードを破壊しようとするが、蓮（闇）が発動させた魔法カードの効果により、ブラック・ローズ・ドラゴンの効果が無効にされた。

「ロードポイズンを守備表示で召喚して、カードを1枚伏せてタ

ーンエンド」

「エンドフェイズにブラック・ローズ・ドラゴンの攻撃力は元に戻る！」

ブラック・ローズ・ドラゴン　攻２８００→２４００

蓮　手札２枚

「私のターン、ドロー！

私は手札から、シンクロン・エクスプローラー（攻／守０／７００）を攻撃表示で召喚！

そして、シンクロン・エクスプローラーの効果発動！

墓地に存在するシンクロンと名の付くチューナーモンスターを効果を無効にして特殊召喚する事が出来る！」

「私は墓地から、ジャンク・シンクロンを特殊召喚！

さらに、私の墓地からモンスターが特殊召喚された事により、手札からドッペル・ウォリアー（攻／守８００／８００）を攻撃表示で特殊召喚！」

「そして、レベル２のシンクロン・エクスプローラーとレベル２のドッペル・ウォリアーにレベル３のジャンク・シンクロンをチューニング！」

「集いし雷が、新たな力を生み出す、光差す道となれ！

シンクロ召喚！

轟け、ライトニング・ウォリアー（攻／守２４００／１２００）

！」

「そして、ドッペル・ウォリアーの効果発動！
ドッペル・ウォリアーがシンクロ素材となった時、私の場にレベル１のドッペルトークン（攻／守４００／４００）２体を攻撃表示で特殊召喚する！」

「バト「罠カードを発動！」ちっ、またか」

「罠カード、威嚇する咆哮！
このカードの効果で、相手はこのターン攻撃宣言する事が出来ない！」

「なら、カードを１枚伏せてターンエンド！」

蓮（闇）　手札１枚

蓮が罠カードを発動させ、２ターン続けて攻撃出来なかった事にイラつきながら蓮（闇）はターンを終了した。

「私のターン、ドロー！
私は、手札１枚を墓地に送り、魔法カード、ライトニング・ボルテックスを発動！」

「カウンター罠、魔宮の賄賂を発動！
さぁ、カードをドローしなさい」

「くっ」

蓮が手札のフェニキシアン・クラスター・アマリリスを墓地に送り発動させた魔法カードを、蓮（闇）は難なく無効にした。

「こうなったら、バトル！
ブラック・ローズ・ドラゴンでドッペルトークンを攻撃！
ブラック・ローズ・フレア！」

「くっ」

蓮（闇）　ＬＰ４０００→２０００

「そして、カードを2枚伏せて、エンドフェイズに墓地のポタニカル・ライオを除外してフェニキシアン・クラスター・アマリリスを守備表示で特殊召喚して、ターンエンド！」

蓮　手札０枚

「私のターン、ドロー！
私は、魔法カード、ワン・フォー・ワンを発動！
手札から、グローアップ・バルブを墓地に送り、デッキからレベル1のチューナーモンスター、エフェクト・ヴェーラー（攻／守０／０）を特殊召喚！」

「そして、レベル7のライトニング・ウォリアーにレベル1のエフェクト・ヴェーラーをチューニング！
大いなる風に導かれた翼を見よ！
シンクロ召喚！」

「その口上、まさか！？」

「響け、スターダスト・ドラゴン！」

蓮（闇）の場に通常とは違い、体のほとんどが黒くなった姿のスターダスト・ドラゴンが現われた。

「そんな、スターダストまで」

「これで終わりじゃないわよ。
私はさらに、墓地のグローアップ・バルブの効果発動！
デッキの１番上のカードを墓地に送る事で、墓地から攻撃表示で特殊召喚する！」

「私はデッキの１番上から、手札断殺を墓地に送り、グローアップ・バルブを攻撃表示で特殊召喚！」

「そして、レベル１のドッペルトークンにレベル１のグローアップ・バルブをチューニング！
集いし願いが、新たな速度の地平に誘う、光差す道となれ！
シンクロ召喚！」

「希望の力、シンクロチューナー、フォーミュラ・シンクロン（攻／守２００／１５００）！」

「シンクロチューナー、まさか！？」

「フォーミュラ・シンクロンの効果発動！
このカードがシンクロ召喚に成功した時、デッキからカードを１枚ドローする！」

「さらに、レベル８のシンクロモンスター、スターダスト・ドラゴンにレベル２のシンクロチューナー、フォーミュラ・シンクロンをチューニング！
集いし夢の結晶が、新たな進化の扉を開く、光差す道となれ！
アクセルシンクロ！
生来せよ、シューティング・スター・ドラゴン（攻／守３３００／２５００）！」

蓮（闇）の場を黒い光が包み込み、強烈な風が吹き抜けると、蓮（闇）の場に、スターダスト・ドラゴン同様、体が黒くなっているシューティング・スター・ドラゴンが現われた。

「そんな、シューティング・スター・ドラゴンまで、どうして」

「驚く事はないでしょう、このデッキは私（あなた）の元々のデッキ、このカードが入っているのは想像できたでしょうに」

「くっ（確かに、前の世界で使ってたデッキにシューティング・スターは入れていたけど、まさかこっちの世界で戦う事になるなんて）」

「さぁ、再開するわよ。
手札から魔法カード、貪欲な壺を発動！
墓地の、クイック・シンクロン、ジャンク・シンクロン、エフェクト・ヴェーラー、グローアップ・バルブ、シンクロン・エクスプローラーをデッキに戻してシャッフルし、新たに２枚ドローする」

「さらに、シューティング・スター・ドラゴンの効果発動！
シューティング・スター・ドラゴンは１ターンに１度、デッキの

上からカードを5枚確認し、その中にチューナーが存在していれば、このターン中その枚数分攻撃できる！」

「1枚目ジャンク・シンクロン、2枚目くず鉄のかかし、3枚目スターライト・ロード、4枚目デブリ・ドラゴン、5枚目ゾンビ・キャリア！

確認したカードの中にチューナーは3枚、よってシューティング・スターはこのターン3回の攻撃が可能！」

「バトル！

まずは、ニトロ・ウォリアーでブラック・ローズ・ドラゴンを攻撃！

そして、ニトロ・ウォリアーの効果発動！

ニトロ・ウォリアーは私が魔法カードを使用したターン、ダメージ計算時に1度だけ攻撃力を1000ポイントアップして攻撃する事が出来る！」

「このターン、魔法カードを使っているため攻撃力が1000ポイントアップする！」

ニトロ・ウォリアー　攻3800→4800

「さらに、ニトロ・ウォリアーに装備されたアームズ・エイドの効果が合わせれば、合計4800ポイントのダメージを与える事になる。

この攻撃で終わりよ！」

「まだ終わりじゃない！

罠カード、フローラル・シールドを発動！

このカードの効果でニトロ・ウォリアーの攻撃を無効にして、デッキからカードを1枚ドローする！」

ブラック・ローズ・ドラゴンにニトロ・ウォリアーの拳が迫るが、蓮が発動させた罠カードの効果で発生した花びらで攻撃が中断された。

「無駄なことを、シューティング・スター・ドラゴンで、ブラック・ローズ・ドラゴン、フェニキシアン・クラスター・アマリリス、ロードポイズンに攻撃！
スターダスト・ミラージュ！」

「グゥ！」

蓮　ＬＰ４０００→３１００

「ロードポイズンが戦闘により破壊され、墓地に送られた事により、墓地からダンディライオンを守備表示で特殊召喚！
さらに、フェニキシアン・クラスター・アマリリスが破壊された事により、相手に８００ポイントのダメージを与える！」

蓮（闇）　ＬＰ２０００→１２００

「くっ、次のターンで終わりにしてあげるわ、カードを1枚伏せてターンエンド！」

蓮（闇）　手札１枚

「わ、私のターン」

「もう何をしても無駄よ、諦めなさい」

「い、いきなり、何を」

「解っているでしょう、私（あなた）のデッキに今の状況を覆せるカードは無い。

効果破壊を無効に出来、除外する事でモンスター1体の攻撃を無効に出来るシューティング・スターに、アームズ・エイドを装備したニトロ・ウォリアー」

「ライフが１２００ポイントある今、イービル・ソーンとアマリリスのダメージでも１００ポイントのライフが残り、百花繚乱のカードは発動条件が満たさせれておらず、椿女帝の召喚もほぼ不可能、召喚出来たとしても攻撃を無効にするため意味が無い」

「くっ」

「諦めなさい、ここで諦めて私に負けて、その体を私に渡しなさい」

「なっ！？」

蓮（闇）が蓮に体を渡すように言うと、蓮は驚いて声を挙げて蓮（闇）の顔を見た。

「私に体を明け渡せば、もう苦しまずに済むのよ？

それだけじゃない、私なら祐騎や小羽、皆を守ることも出来る。

私に勝てない私(あなた)ではそれも無理でしょ？」

「それは」

「それに、私ならその体の両親との仲も修復できる自信が有るわ」

「本当？」

「そう、私(あなた)が望む事の全てを叶えてあげる、だからその体を私に渡しなさい」

「私の望む事が、全て、叶う」

蓮（闇）の言葉を聴いた蓮は、少しづつ蓮（闇）の方に向かって歩いて行き、蓮に蓮（闇）の手が届く距離まで近づき、蓮（闇）が蓮の肩に手を置こうとした瞬間、蓮が着けているデュエルディスクの墓地からブラック・ローズ・ドラゴンのカードが現われ、そのカードから眩い光が放たれると、蓮と蓮（闇）の間に、真っ赤な髪の少女が現われた。

「なっ、お前は！？」

「お姉ちゃんを惑わせようとしても、そうはいかないんだから！」

「あ、貴女は、一体？」

「えへへ、始めましてだよね。
私は蓮、紅龍蓮だよ、お姉ちゃん」

「まさか、今度は本当に」

「うん、今のお姉ちゃんの体の元々の持ち主、その残留思念だよ。本当なら此処にこうしていることも出来ないんだけど、この子が力を貸してくれてたから、出て来れたんだ」

そう言って蓮（少女）は先程墓地から出てきたブラック・ローズ・ドラゴンのカードを蓮に手渡した。

「お前、なぜ邪魔をする！私が勝てば、その体を取り戻す事が出来るというのに！」

「え？」

蓮（少女）が蓮にブラック・ローズ・ドラゴンを手渡すと、蓮（闇）が蓮（少女）に怒鳴ると、それに驚いて蓮が蓮（少女）を見ると、蓮（少女）は怒った表情で蓮（闇）を見ながら話し出した。

「私はそんな事望んでなんて無い！私は既に死んでる存在、今更生き返ろうとは思ってない！そもそも、今の紅龍蓮は私じゃなくてお姉ちゃんの方だよ！」

「お姉ちゃんが私の体に入って生きてきた時間は、手に入れた物は全部お姉ちゃんだけの物、いまさら私が戻っても意味なんて無い！」

「くっ！」

「そんな、なんで貴女が私を」

「あのね、本当なら私はあの時死んでるはずだった、けどお姉ち

ゃんが私の体に入った事で、消える事無く今までお姉ちゃんの中で存在する事が出来たの。
私は表に出る事は出来なかったけど、お姉ちゃんのおかげでいろんな事を知って、いろんな人に会えたし、好きな人と居る事がどれだけ幸せかって事も知ることが出来たんだ」

「だから、本当に感謝してるんだ、ありがとうお姉ちゃん」

「そんな、お礼なんて、私は貴女の人生を狂わせたのに」

「さっきも言ったけど、私の人生はあの時終わってたはずなの、だからお姉ちゃんが気にする事なんて無いんだよ？
それに、私の体に入ったからパパ達の事で色々苦しませてたから、謝るのはこっちの方だよ」

蓮（少女）が蓮にお礼を言いながら抱きつくと、蓮は涙を流しながら蓮（少女）を抱きしめた。

「・・・ありがとう、本当にありがとう」

「それは、私もだよ。
ありがとう、お姉ちゃん」

「くっ、いい加減にしろ！
いまさら、何をしたとしても無駄だ！
もう私に私を倒す術は無い、潔く負けを認めて体を明け渡しなさい！」

「・・・ごめんね、折角助けてもらったのに、やっぱり」

「大丈夫だよ」

「え？」

「カードを、デッキを、なによりお姉ちゃん自身を信じなきゃ、まだライフも残ってるし、カードをドローしてもいないのに、諦めちゃ駄目だよ」

「だけど」

「大丈夫、私もその子も力を貸すから、最後まで諦めちゃ駄目だよ」

「うん、解った」

蓮が蓮（少女）の言葉に頷くと、蓮は蓮（闇）と再び距離を取ってデッキに手を置いて、目を閉じて集中しだした。

「何をしようと無駄だと言っただろう、無駄な事をせずに諦めろ！」

「・・・（デッキよ、カードよ、私の、私達の声に応えて！）」

「私のターン、ドローッ！！」

蓮がデッキの一番上からカードをドローすると、そのカードが光の線を描いて、蓮の手札に加わり、そのカードを見た蓮は驚きの表情を浮かべた。

「えっ、このカードは！？」

「（なんだ、何を引いた？）」

「大丈夫だよお姉ちゃん、カードを信じて！」

蓮（少女）の声を聞いた蓮は、突然頭の中にカードの使い道が思い浮かび、その閃きを信じて手札のカードを手に取った。

「この閃きに掛ける！

私は場のダンディライオンをリリースして、手札から凛天使　クイーン・オブ・ローズを攻撃表示でアドバンス召喚！

そして、ダンディライオンの効果で私の場に、綿毛トークン2体を守備表示で特殊召喚！」

「ふっ、何かと思えば、そんなモンスターを今更召喚したところで何が出来る！」

「まだよ、これが私の最後のカード！

私は手札から魔法カード、ミラクルシンクロフュージョンを発動！」

「ミラクルシンクロフュージョンだと！？（馬鹿な、私（あいつ）のデッキにあのカードは無かったはず、それ以前にこの状況で呼び出せるカードなど）」

「ミラクルシンクロフュージョンの効果で、私はエクストラデッキに存在するシンクロモンスターを融合素材とする融合モンスター1体を選択し、選択したモンスターの融合素材となるモンスターをフィールド又は墓地から除外して、選択した融合モンスターを融合召喚扱いで特殊召喚する！」

「私は墓地のシンクロモンスター、ブラック・ローズ・ドラゴンと、私の場の植物族モンスター、凛天使　クイーン・オブ・ローズを除外して融合！」

「何！？」

蓮は頭の中に閃いた通りに、場のクイーン・オブ・ローズと墓地のブラック・ローズ・ドラゴンを除外すると、２体のモンスターが次元の渦に飲み込まれ、蓮のエクストラデッキから１枚のカードが現われると、蓮は初めて見るそのカードを手に取り自分のデュエルディスクにセットした。

「これが、私がカードを信じた答え！
咲き誇れ、鮮血の薔薇女神（ブラッディ・ローズ・ゴッデス）（攻／守３０００／２５００）！」

「ブラッディ・ローズ・ゴッデス、だと！？」

「あっ、このカードは、一体？」

蓮は自身が無我夢中で召喚した血の様に赤い薔薇の翼持ち、両腕に茨を巻き付け、ブラック・ローズ・ドラゴンを模った西洋風の甲冑を着け、兜で顔を隠した赤い長髪の女性型のモンスターを改めて見ると、驚いて声を挙げた。

「そのモンスターはお姉ちゃんがカードを、デッキを信じたからこそ生まれた、お姉ちゃんだけのカードだよ」

「私だけの、カード」

「うん、だから解るはずだよ、そのカードの力が！」

「このカードの力・・・」

蓮（少女）の言葉を聞いて、蓮はデュエルディスクにセットした鮮血の薔薇女神のカードを見つめ、そんな蓮の姿を見た蓮（闇）は焦った様子で蓮に声を掛けた。

「何をしようとも無駄だ！
そのモンスターの攻撃力は３０００、攻撃力３３００のシューティング・スターと攻撃力３８００のニトロ・ウォリアーには及ばない！
それに、シューティング・スターは除外することで相手モンスター１体の攻撃を無効にする事が出来る、何をしようと無駄だ！」

「・・・それはどうかしら」

「何？」

「いくわよ、鮮血の薔薇女神の効果発動！
鮮血の薔薇女神は１ターンに１度、墓地に存在する植物族モンスター１体を除外することで、相手フィールド上に表側表示で存在するカード１枚を選択し、エンドフェイズまで選択したカードの効果を無効にする事が出来る！」

「なっ！？」

「鮮血の薔薇女神の効果で、墓地のロードポイズンを除外して、シューティング・スター・ドラゴンの効果を無効にする！
サブリメイション・ローズ・チェーン！」

「くっ！」

蓮の場の鮮血の薔薇女神が右腕をシューティング・スター・ドラゴンに向けると、蓮（闇）の場のシューティング・スター・ドラゴンの体に、鮮血の薔薇女神の右腕に巻かれていた茨が巻きつき、シューティング・スター・ドラゴンを拘束した。

「くっ、だがモンスターの攻撃力はこちらが上だ！」

「そんな事は解ってるわよ。
私はさらに、鮮血の薔薇女神の第２の効果を発動！
鮮血の薔薇女神は１ターンに１度、ライフを半分支払うことで、フィールド上に存在するこのカード以外のカードを全て破壊する！」

「なんだと！？」

「全てを飲み込め、ブラッディ・ローズ・ガイル！」

蓮　ＬＰ３１００→１５５０

鮮血の薔薇女神が、左腕の茨を蓮のデュエルディスクを付けている左腕に絡め、茨で蓮の左腕を締め上げると、蓮のライフが減少し、鮮血の薔薇女神の翼が真っ赤な光を放ち出した。

そして、ライフを吸収した鮮血の薔薇女神は、自身の翼から真っ赤な薔薇を撒き散らし、フィールド上の自身以外のカードを全て破壊した。

「馬鹿な、こんな事が・・・」

「これで終わりよ！
鮮血の薔薇女神でダイレクトアタック！
ブラッディ・ローズ・ブレイズ！」

「クッ、アアアアッ！」

蓮（闇）　ＬＰ１２００→０

鮮血の薔薇女神が右手を掲げると、その手に炎の球が現われ、その炎が薔薇の花びらの形に変ると、蓮（闇）に向かってその炎を投げつけ、その炎が蓮（闇）を包み込む様に動き、蓮（闇）を飲み込むと、蓮（闇）のライフが０になり、蓮（闇）はその場に崩れ落ちた。

「か、勝った、の？」

「うん、お姉ちゃんの勝ちだよ」

「そっか。
ありがとう、今回勝てたのは貴女のおかげよ」

「ううん、お姉ちゃんの実力だよ。
それじゃあ、そろそろお別れだね」

「え？」

蓮が蓮（少女）の言葉に驚いた顔をすると、蓮（少女）は苦笑し

ながら蓮に話しかけた。

「お姉ちゃんが此処に来た目的は達成されたんだよ、だからお別れ」

「もしかして、これが試練だったの？」

「うん。

今のお姉ちゃんに足りない物、それは自分を信じて、諦めない事。

今回のデュエルでお姉ちゃんは自分を、自分のデッキを心から信じて、最後まで諦めなかった。

だからその子が、お姉ちゃんだけのカードが生まれたんだよ？」

「私だけのカード」

蓮は蓮（少女）にそう言われると、デュエルディスクにセットされたままの鮮血の薔薇女神のカードを手に取って見つめた。

「そのカードはお姉ちゃんだから生み出せたカード、お姉ちゃんが存在している事の証なんだよ。

だから、お姉ちゃんはもう大丈夫だよね？」

「ええ、もう迷わない。

私は私として生きていく、それで良いんでしょ？」

「うん！」

蓮（少女）が蓮に頷くと、蓮の体が徐々に透け始めた。

「それじゃあ、さよなら」

「さよならじゃないよ、私はいつもお姉ちゃんと一緒なんだから」

「そうよね。
それじゃ、またね蓮」

「うん、またね蓮お姉ちゃん」

蓮と蓮（少女）が互いに微笑みながら挨拶をすると、蓮の体が完全に消え、精神世界から戻っていった。

「良かったのか、本当に」

「うん、だって祐騎君が好きなのは私じゃなくて、お姉ちゃんだもん」

「ふっ、やはりそこが基準なんだな」

蓮が精神世界から居なくなると、蓮に敗れ雰囲気の変った蓮（闇）が蓮（少女）に話しかけた。

「それだけじゃないよ、さっきも言ったけど、お姉ちゃんが経験した物、お姉ちゃんに会った人たちは全部お姉ちゃんが得たもの、私が手にして良いものじゃないもん。
それに、お姉ちゃんが私の体に入った事には何か理由が有るはずだから」

「そうか」

「貴女は、これからどうするの？」

「決まっているだろう、私は私（あいつ）の心の一部、今までもこれからもソレは変らない」

「そっか、なら私と一緒だね！」

「ふっ、そういうことになるな」

蓮（闇）と蓮（少女）はそう言って笑うと、二人も蓮と同じ様に消えていき、精神世界も徐々に真っ白な世界へと変化していった。

～ブラック・ガーデン最深部～

「う、ん」

『蓮！？』

「てぃ、る？」

『ああ、良かった！
無事に戻ってこれたのね！』

蓮が目を覚ますと、蓮の側で蓮の無事を祈っていたティルが蓮に抱きついてきた。

「え、あの、ティル！？」

『もう心配だったんだから！
それで、試練はどうだったの？』

「大丈夫、無事にクリアしたから」

『そう、良かったわ～
あれ、ねぇ蓮、そのカードどうしたの？』

「え？」

蓮がティル言われて手に持っていたカードを見ると、そのカードは精神世界で現われた鮮血の薔薇女神のカードであり、ソレを見た蓮は嬉しそうに笑ってそのカードを自分のエクストラデッキに入れた。

「私の存在の証、だって」

『どういうこと、それ？』

「ふふっ、内緒よ」

『ちょっ、ソレは無いでしょ！？』

蓮がティルと笑いながら話をしていると、ローズとサラやって来て、ローズから自身のカードを蓮に渡したという事を聞いたサラから、自分のカードも良ければ使って欲しいと、ローズ・ソーサラーのカードを貰い、ローズとサラに暫く安静にしておくようにと言われた蓮は、ティルが小羽達を連れてくるまでの間ブラック・ガーデンの中で休息を取ることにした。

こうして、蓮は自分自身と戦うという試練を乗り越え、新たな力を得ることが出来た。

第三十四話　魔天使の試練　咲き誇れ、ブラッディ・ローズ・ゴッデス（後書き）

今回の話どうだったでしょうか？

次回からは暫くコラボになりますので、本編の更新は遅くなると思いますけど、これからもこの作品をよろしくお願いします。

一周年記念コラボその１　零の英雄の使い手ＶＳ旋風の守護者（前書き）

今回はシルフさんの作品である、零の英雄の使い手とのコラボになります。

これから3話ほどコラボになります。

それでは、コラボその１始まります。

一周年記念コラボその1　零の英雄の使い手ＶＳ旋風の守護者

～アカデミア校舎内～

アカデミアの校舎を移動していた祐騎と蓮の二人が気づかない内に、周囲の様子が変化し、普段なら騒がしいくらいの校舎の中が静まり返り、人の気配が消えている事に気づくと、蓮は諦めた様に溜息をついて祐騎に話しかけた。

「はぁ～、また此処かぁ」

「そうみたいですね、人の気配がないですし」

「それじゃ、早速今回の対戦相手を探しましょうか」

「はい」

祐騎が蓮に応えると、二人は他に人が居ないか探し始めた。

～レッド寮前～

祐騎達が校舎から人を探しながらレッド寮まで来ると、レッド寮の前に長い黒髪を後ろで一纏めにした少年が、自身の隣に浮かんでいるデブリ・ドラゴンの精霊に話しかけていた。

「なぁ、伊吹」

『なに、マスター？』

「なんか、おかしくないか？」

『そりゃそうだよ、今僕達が居るのは異空間なんだから』

「・・・マジで？」

『本当と書いてマジだよ』

「どうやったら戻れるか、解らないか？」

『う～ん、僕にはちょっと解んないよ』

「そうか。
それじゃあ、これからどうするかな」

「ねぇ、あなた達ちょっと良いかしら？」

「ん？」

伊吹と呼ばれていたデブリ・ドラゴンの精霊と話していた少年に、蓮が声を掛けると、蓮達の事に気づいていなかった少年が蓮達の方を向いた。

「元の世界に戻る方法なら、私達が知ってるわよ？」

「本当か！？」

「はい、僕達は何度かこの世界に来てますから」

「そうか、良かった。
あ、自己紹介してなかったな、俺は泰戸仁（たいとじん）だ。
よろしくな」

「僕は、甲斐祐騎です。
こちらこそよろしくお願いします」

「私は紅龍蓮よ、よろしく」

祐騎達がお互いに自己紹介をしている傍らで、精霊同士も自己紹介を済ませると、伊吹をティルが見つめ続け、そんなティルの行動を不思議に思ったエールがティルに話しかけた。

『あ、あの、ティルさん？』

『ん、なぁに？』

『どうして、伊吹さんを見つめてるんですか？』

『ん～、異種姦もアリかなぁって』

『・・・は？』

エールがティルの発言に固まっていると、ティルは伊吹に近寄って行った。

『ねぇ、私とイイコトし・な・い？』

『く、喰われる！？』

『あ、そっちが攻めでもオールＯＫよ？
むしろ食べて頂戴、もちろん性的な意味で！』

『そういう問題じゃ無いですよ！？』

ティルの発言に伊吹は体を震わせながらエールの背中に隠れ、エールはティルに説教を始めたが、ティルはそんなエールを見て息を荒げ出し、結局エールもティルから距離を取るように祐騎達の所まで移動した。

「だ、大丈夫なのか、アレ？」

「・・・気にしたら負けよ」

「そ、そうか。
それで、元の場所に戻るにはどうすれば良いんだ？」

「ああ、それならデュエルすれば良いのよ」

「それだけで良いのか？」

「ええ、勝ち負けも関係無いから、気楽にやれば良いのよ」

「良し！
なら、早速デュエルしようぜ」

「私はそこの変態を抑えとくから、祐騎お願いね？」

「はい、解りました」

蓮は祐騎にそう言うと、伊吹やエールに迫っているティルに近づいて行き、ティルの首筋を掴むと、二人から引き離し、ティルが暴走しない様に監視を始め、そんな蓮を横目に祐騎と仁はお互いに距離を取って、デュエルディスクを構えた。

「そういえば、伊吹見ても驚かないって事はシンクロ知ってるのか？」

「はい、知ってますし、僕も使っていますから」

「そうか。
それじゃ、いくぞ」

「はい」

「「デュエル！」」

祐騎　ＬＰ４０００

仁　ＬＰ４０００

「先行は貰います。
僕のターン、ドロー！」

「僕は、ガスタ・ガルドを守備表示で召喚！
カードを1枚伏せてターンエンドです」

祐騎　手札４枚

「俺のターン、ドロー！
ガスタデッキか。
なら俺は、手札から魔法カード、Ｅ－エマージェンシーコールを発動！
このカードの効果で、デッキからＥ・ＨＥＲＯ1体を手札に加える！」

「俺は、デッキからＥ・ＨＥＲＯ　エアーマンを手札に加える！」

「Ｅ・ＨＥＲＯ、しかもエアーマンですか」

「知ってるなら話は早いな。
俺は、今手札に加えたエアーマンを攻撃表示で召喚！
さらに、エアーマンの効果を発動して、デッキからＥ・ＨＥＲＯアナザーネオス（攻／守１９００／１３００）を手札に加える！」

「アナザー、ネオス？」

「コイツの事は知らないのか？」

「はい。
十代君のネオスに名前が似てますけど、関係が有るんですか？」

「まぁ、一応な」

「そうですか」

アナザーネオスを見て驚いた祐騎に仁が応えると、祐騎は警戒しながらもデュエルディスクを構えなおし、仁の行動に注目した。

「それじゃ、いくぞ。
バトル！
エアーマンでガスタ・ガルドを攻撃！
エアロ・スマッシャー！」

「ガスタ・ガルドがフィールドから墓地に送られた事で、効果発動！
デッキから、ガスタの巫女　ウィンダを守備表示で特殊召喚します！」

「カードを1枚伏せて、ターンエンドだ！」

仁　手札5枚

「僕のターン、ドロー！
僕は、ガスタの巫女　ウィンダをリリースして、手札からガスタの賢者　ウィンダールを攻撃表示でアドバンス召喚！」

「バトル！
ガスタの賢者　ウィンダールでエアーマンを攻撃！」

「速攻魔法、月の書を発動！
ウィンダールを裏守備表示に変更する！」

「くっ、カードを1枚伏せてターンエンドです」

祐騎　手札3枚

「俺のターン、ドロー！
俺は、手札の沼地の魔神王（攻／守５００／１１００）の効果発動！
このカードを手札から墓地に捨てる事で、デッキから融合のカードを手札に加える事が出来る！」

「沼地の魔神王の効果でデッキから融合を手札に加える！
そして、手札からデブリ・ドラゴンを攻撃表示で召喚！」

『良し、早速行くよ！』

「デブリ・ドラゴンの効果発動！
デブリ・ドラゴンが召喚に成功した時、墓地に存在する攻撃力５００以下のモンスター1体を自分の場に効果を無効にして、攻撃表示で特殊召喚する事が出来る！」

「俺は、この効果で墓地の沼地の魔神王を特殊召喚！
そして、レベル3の沼地の魔神王にレベル4のデブリ・ドラゴンをチューニング！」

「凍てつく翼が、眼前の世界を凍結する、降臨せよ第二の槍！
シンクロ召喚！
貫け、氷結界の龍　グングニール！」

仁が伊吹の効果で特殊召喚した、沼地の魔神王と伊吹をチューニングすると、仁の場に体が氷で出来たドラゴンが現われた。

「グングニールの効果発動！
グングニールは1ターンに1度、手札のカードを2枚まで墓地に捨てる事で、捨てたカードの枚数分、相手の場のカードを破壊する事が出来る！」

「俺は、手札のE・HERO　アナザーネオスとE・HERO　オーシャンを墓地に捨て、祐騎の場の2枚のセットカードを破壊する！」

「残念ですが、そうはさせません！
罠カード、スターライト・ロードを発動します！」

「スターライト・ロードだと！？」

「このカードの効果で、僕の場のカードを2枚以上破壊する効果が発動した時、そのカードの効果を無効にして破壊します！
よって、氷結界の龍　グングニールの効果を無効にして破壊します！」

「くっ！」

「さらに、スターライト・ロードの2つ目の効果により、エクス

トラデッキからスターダスト・ドラゴン1体を特殊召喚する事が出来ます！
スターライト・ロードの効果により、スターダスト・ドラゴンを攻撃表示で特殊召喚します！」

仁の場のグングニールが、祐騎の場のセットカードを破壊しようとするが、祐騎の発動した罠カードの効果によって逆にグングニールが破壊され、祐騎の場にスターダストが現われた。

「なら、俺は手札から融合を発動！
手札のデブリ・ドラゴンと場のＥ・ＨＥＲＯ　エアーマンを融合！」

「来い、全てを吹き飛ばす嵐の英雄、Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ！」

「ここで、ＴＯＲＮＡＤＯ、ですか」

「ＴＯＲＮＡＤＯの効果発動！
ＴＯＲＮＡＤＯの召喚に成功した時、相手の場に表側表示で存在するモンスターの攻撃力と守備力を半分にする！
タウン・バースト！」

スターダスト・ドラゴン　攻２５００→１２５０　守２０００→１０００

「いくぞ、バトル！
ＴＯＲＮＡＤＯでスターダストに攻撃！
スーパーセル！」

「罠カード、フローラル・シールドを発動！
ＴＯＲＮＡＤＯの攻撃を無効にして、デッキからカードを１枚ドローします！」

「くっ、カードを１枚伏せてターンエンドだ」

仁　手札０枚

「僕のターン、ドロー！
僕は、場のウィンダールを攻撃表示に変更！
さらに、手札からチューナーモンスター、フルール・シンクロンを攻撃表示で召喚！」

「なっ、フルール・シンクロンだと！？」

「レベル６のガスタの賢者　ウィンダールにレベル２のフルール・シンクロンをチューニング！
光速より生まれし肉体よ、革命の時は来たれり、勝利を我が手に！
シンクロ召喚！
ひらめけ、フルール・ド・シュバリエ！」

「さらに、フルール・シンクロンがシンクロ素材になったことにより、手札からレベル１のガスタ・イグルを守備表示で特殊召喚します！」

「そして、手札から魔法カード、ミラクルシンクロフュージョンを発動します！」

「この状況で使うって事は、まさか！？」

「僕は、場のドラゴン族シンクロモンスター、スターダスト・ドラゴンと戦士族モンスター、フルール・ド・シュバリエを除外して、融合！
来て、波動龍騎士（はどうりゅうきし）　ドラゴエクィテス（攻／守３２００／２０００）！」

祐騎の場のスターダストとフルール・ド・シュバリエが次元の穴に飲み込まれると、祐騎の場に螺旋状の槍を持った龍騎士が現われた。

「そして、ドラゴエクィテスの効果を発動します！
ドラゴエクィテスは１ターンに１度、墓地に存在するドラゴン族シンクロモンスター１体を除外する事で、除外したモンスターの効果を得る事が出来ます！」

「この効果は相手の墓地も対象にする事が出来ます！
よって、仁さんの墓地のドラゴン族シンクロモンスター、氷結界の龍　グングニールを除外してその効果を得ます！」

「やっぱり、そう来るか」

「そして、ドラゴエクィテスが得たグングニールの効果を発動します！
手札のアームズ・ホールを墓地に捨てて、仁さんの場のセットカードを破壊します！」

「くっ！」

ドラゴエクィテスが手に持った槍を仁の場に向けて振り下ろすと、ドラゴエクィテスにグングニールの影が重なり、振り下ろした槍から氷の矢が放たれ、仁の場に伏せられていたミラーフォースが破壊された。

「バトル！
ドラゴエクィテスでＴＯＲＮＡＤＯを攻撃！
スパイラル・ジャベリン！」

「ぐっ！？」

仁　ＬＰ４０００→３６００

「僕は、これでターンエンドです」

祐騎　手札１枚

「俺のターン、ドロー！
良し！
俺は手札から魔法カード、ミラクルフュージョンを発動！」

「このカードは、フィールド又は墓地に存在する融合モンスターの素材として決められたモンスターを除外する事で、エクストラデッキからＥ・ＨＥＲＯと名の付く融合モンスター１体を、融合召喚扱いで特殊召喚する事が出来る！」

「俺は、墓地のＴＯＲＮＡＤＯとエアーマンを除外して融合！
再び吹き荒れろ、Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ！」

「２枚目！？」

「ＴＯＲＮＡＤＯの効果で、ドラゴエクィテスとガスタ・イグルの攻守を半分にする！
タウン・バースト！」

「くっ！」

波動龍騎士　ドラゴエクィテス　攻３２００→１６００　守２０００→１０００

ガスタ・イグル　攻２００→１００　守４００→２００

再びＴＯＲＮＡＤＯが仁の場に召喚されると、祐騎の場の２体のモンスターに上空から風が押し付けられ、祐騎の場のモンスターの攻守が半分になった。

「バトル！
ＴＯＲＮＡＤＯでドラゴエクィテスを攻撃！
スーパーセル！」

「クゥッ！」

祐騎　ＬＰ４０００→２６００

「俺は、これでターンエンド！」

仁　手札０枚

「僕のターン、ドロー！
僕は魔法カード、貪欲な壺を発動！
墓地のガスタ・ガルド、ガスタの巫女　ウィンダ、ガスタの賢者　ウィンダール、フルール・シンクロン、波動龍騎士　ドラゴエクィテスをデッキに戻してシャッフル！」

「そして、デッキから2枚ドローします！」

「僕の墓地にモンスターが存在しない事により、手札からガーディアン・エアトスを攻撃表示で特殊召喚します！」

「この状況でエアトスを引いたのか！？」

「さらに装備魔法、黒いペンダントを装備して、エアトスの攻撃力を５００ポイントアップさせます！」

ガーディアン・エアトス　攻２５００→３０００

「さらに、エアトスの効果発動！
エアトスは、自身に装備されている装備魔法1枚を墓地に送る事で、相手の墓地に存在するモンスターカードを、3枚まで選択して除外する事が出来ます！」

「そして、エアトスはエンドフェイズまで、この効果で除外したモンスター1体につき５００ポイント攻撃力がアップします！
僕はエアトスの効果で、仁さんの墓地から、Ｅ・ＨＥＲＯ　アナ

ザーネオスとデブリ・ドラゴン2枚を除外します！
聖剣のソウル！」

『いきますよ！
墓地に眠りし魂よ、力を貸して！』

ガーディアン・エアトス　攻３０００→２５００→４０００

エールに装備されていた黒いペンダントが消えると、エールの手に光で出来た剣が現われ、仁の墓地から除外されたモンスターがその剣に吸収され、エールの攻撃力がアップした。

「さらに、黒いペンダントがフィールド上から墓地に送られた事により、５００ポイントのダメージを与えます！」

「くっ！」

仁　ＬＰ３６００→３１００

「いくよ、エール。
バトル！
エアトスでＴＯＲＮＡＤＯを攻撃！
フォビドゥン・ゴスペル！」

『ハアアアッ！』

「クッ！」

仁　ＬＰ３１００→１９００

「僕は、これでターンを終了します。
そして、エンドフェイズにエアトスの攻撃力は元に戻ります」

ガーディアン・エアトス　攻４０００→２５００

祐騎　手札２枚

「俺のターン、ドロー！
来た！
俺は、手札から魔法カード、平行世界融合（パラレル・ワールド・フュージョン）を発動！」

「このカードは、ゲームから除外されているＥ・ＨＥＲＯと名の付く融合モンスターの融合素材となるモンスターをデッキに戻してシャッフルする事により、エクストラデッキからＥ・ＨＥＲＯと名の付く融合モンスター１体を融合召喚扱いで、特殊召喚する事が出来る！」

「俺は、除外されているエアーマンとアナザーネオスをデッキに戻してシャッフル！
光を司る英雄よ、今こそ現われよ、Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｔｈｅ　シャイニング！」

「シャイニングの効果発動！
シャイニングは、ゲームから除外されているＥ・ＨＥＲＯ１枚につき、攻撃力が３００ポイントアップする！

俺がゲームから除外しているＥ・ＨＥＲＯは、ＴＯＲＮＡＤＯが１枚、よってシャイニングの攻撃力は３００ポイントアップする！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｔｈｅ　シャイニング　攻２６００→２９００

「バトル！
シャイニングでエアトスを攻撃！
オプティカル・ストーム！」

『キャァッ！』

「エール！？
くっ！」

祐騎　ＬＰ２６００→２２００

仁の場に現われたシャイニングが、エールに攻撃を加えると、その攻撃の余波を受けた祐騎のライフにもダメージが与えられた。

「俺は、これでターンエンド！」

仁　手札０枚

「僕のターン、ドロー！
僕は、手札から魔法カード、死者蘇生を発動します！
このカードの効果により、墓地からエアトスを攻撃表示で特殊召喚します！」

「またエアトスか、だが攻撃力はシャイニングの方が上だぞ」

「ええ、解っています。
ですから、これから僕達の全力をお見せします！
手札から、チューナーモンスター、栄光の天使を攻撃表示で召喚！」

「この状況でチューナーを？」

「いきます！
レベル８のガーディアン・エアトスにレベル２の栄光の天使をチューニング！
風の守護者よ、今こそ栄光をその手に数多の魂を救う翼となれ！
シンクロ召喚！
輝け、煌翼の守護者―トゥインクル・エアトス―！」

「なっ！？」

祐騎がトゥインクル・エアトスを召喚すると、仁は初めて見るカードに驚きの声を挙げた。

「トゥインクル・エアトスの効果発動！
トゥインクル・エアトスがシンクロ召喚に成功した時、お互いの墓地に存在するモンスターを全てゲームから除外します！」

「何！？
だが、除外されているＥ・ＨＥＲＯが増えた事で、シャイニングの攻撃力がアップするぞ！
俺の墓地から除外されたＥ・ＨＥＲＯは、ＴＯＲＮＡＤＯとオー

シャンの2枚。
よって、シャイニングの攻撃力は、さらに６００ポイントアップする！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｔｈｅ　シャイニング　攻２９００→３５００

「わざわざシャイニングの攻撃力を上げるなんて、何を考えてるんだ？」

「いえ、これで良いんです。
トゥインクル・エアトスの効果はまだ有ります。
トゥインクル・エアトスがフィールド上に表側表示で存在する限り、墓地に送られるモンスターは全てゲームから除外され、お互いに除外されているモンスター１体につき１００ポイント、攻撃力がアップします！」

「何だと！？」

「僕が除外しているモンスターは４体、仁さんが除外しているモンスターは７体で合計１１体のモンスターが除外されています。
よって、トゥインクル・エアトスの攻撃力は１１００ポイントアップします！」

煌翼の守護者－トゥインクル・エアトス－　攻３０００→４１００

「さらに、手札から装備魔法、女神の聖剣－エアトス－をトゥインクル・エアトスに装備します！
装備魔法、女神の聖剣－エアトス－は自身の墓地にモンスターが

存在しない時、天使族モンスターに装備する事が出来ます！」

「そして、このカードを装備したモンスターの攻撃力は、相手が除外しているモンスター1体につき、３００ポイントアップします！仁さんが除外しているモンスターは7体。よって、トゥインクル・エアトスの攻撃力は、さらに２１００ポイントアップして６２００ポイントになります！」

煌翼の守護者ートゥインクル・エアトスー　攻４１００→６２００

「攻撃力６２００!?」

「バトルです！
トゥインクル・エアトスでシャイニングを攻撃！
セイクリッド・ソウル・ゴスペル！」

『先程のお返しです！
ハアアアッ！』

「グウゥッ！」

仁　ＬＰ１９００→０

エールが手に持った聖剣をシャイニングに向かって振り下ろすと、聖剣から光が放出され、その光がシャイニングを飲み込むと、そのまま仁を巻き込んでライフを０にした。

「あの、大丈夫ですか？」

「ああ、それにしても何なんだ、あの最後のカード。
あんなカード、見た事ないぞ」

「えっと、あのカードは姉さんが創った物でして、僕達の世界にしか無いと思いますから知らなくて当然かと」

「あー、だからか。
まぁ、何はともあれこれで戻れるんだよな？」

「ええ、そのはずよ」

祐騎と仁が話していると、デュエルを観戦していた蓮が二人に話しかけた。

そして、蓮とティルが祐騎達の側に行くと、仁と伊吹の体が段々と薄くなっていった。

「ッ、これは！？」

「そろそろ、お別れみたいね」

「そうか。
また会えたら、今度は蓮もデュエルしようぜ」

「ええ」

「それでは仁さん、またお会いしましょう」

「ああ、じゃあな」

祐騎達と分かれの挨拶をすると、薄くなっていた仁と伊吹の体は完全に消えていった。

「さてと、これで私達も帰れるわね」

「えっと、そうでもないみたいですよ？」

「え？」

祐騎がそう言って指差した先には、周囲を確認するように見渡している一組の男女が居た。

「・・・今回は連続かぁ」

「・・・みたいですねぇ」

その男女を見た蓮の呟きに祐騎が応えると、二人は同時に溜息を吐いてから困惑している男女に向かって歩き出した。

一周年記念コラボその１　零の英雄の使い手ＶＳ旋風の守護者（後書き）

今回のコラボ、どうだったでしょうか？

まずは、コラボさせて頂いたシルフさん、ありがとうございました。

タイトルにあるのにＺｅｒｏを出さずに、代わりにＴＯＲＮＡＤＯが２回も出てますが、ガスタが相手の場合ＺｅｒｏよりＴＯＲＮＡＤＯやシャイニングの方が有利なので、今回の様な展開になりました。

あと、今回の祐騎の勝ちは、完全にオリカのお蔭です。

それでは、次回はもう少し早く更新しようと思いますので、これからもこの作品をよろしくお願いします。

一周年記念コラボその2　旋風の守護者ＶＳ黒魔導士の師弟（前書き）

今回は、一周年記念のコラボの第二回で、グッチーさんの作品である遊戯王５Ｄ’ｓ～ｍａｇｉｃ　ｉｌｌｕｓｉｏｎ～とのコラボになります。

それでは、一周年記念コラボその2、始まります。

一周年記念コラボその2　旋風の守護者ＶＳ黒魔導士の師弟

～レッド寮前～

仁とのデュエルを終え、仁が元の世界に戻った後、祐騎達から少し離れた場所に現われ、周囲の状況に戸惑っている男女を発見した祐騎達は、話をするためにその二人に近づいていった。

一方、祐騎達の存在に気づいていない二人は、周囲の状況に困惑した様子で会話をしていた。

「ねぇリョウ、此処って何処なんだろう？」

「解らない。
見たところ精霊界みたいじゃないけど・・・」

『リョウの言う通り、此処は精霊界じゃないみたいだよ』

「それじゃあ、此処は一体何処なんだ？
マハード、マナ、二人にも解らないのか？」

リョウと呼ばれた少年が声のした方を向くと、そこにはブラック・マジシャンの精霊であるマハードとブラック・マジシャン・ガールの精霊であるマナが申し訳なさそうな表情でリョウに話した。

『済まないが、私にも解らない』

『ごめんね、リョウ。
私達も此処が精霊界じゃないって事位しか解らないの』

「マハード達でも解らないとなると、どうしようか」

『フム、ならば他の人間に聞けば良いのではないか？』

「そうは言うけど、他の人なんて何処にいるのか、シンには解るの？」

『解るも何も、すぐ其処に居るのだが？』

「「え？」」

シンと呼ばれた真紅眼の黒竜の精霊がそう言うと、ようやく祐騎たちの存在に気づいた二人に、祐騎達は話しかけた。

「あの、あなた達は？」

「始めまして、僕は甲斐祐騎といいます」

「紅龍蓮よ、よろしく」

「あ、始めまして。
オレはリョウ、それでこっちが」

「アリス・ルシエです、よろしくお願いします」

祐騎たちがお互いに自己紹介を済ませると、蓮はアリスの方を見ながら考え込み、そんな蓮の視線に気づいたアリスは蓮に話しかけた。

「あ、あの、私の顔に何か付いてる？」

「え！？

あ、いえ、な、何でもないわよ？（い、言えない、姿がフェイ○なのに名前が○ャロってどうなの、とか考えてたなんて）」

「そ、そう？」

蓮はアリスの質問に動揺しながらも、なんとか応えて話を流した。

「あの、そちらのブラック・マジシャンとブラック・マジシャン・ガール、真紅眼の黒竜は精霊、ですよね？」

「ッ、マハード達が見えるのか？」

「マハードですって！？」

リョウがマハードの名前を出すと、アリスと話していた蓮が驚いた表情で声を挙げた。

『私の事を知っているのか？』

「え、ええ、一応聞いておくけど。

そっちのブラック・マジシャン・ガールの精霊の名前って、マナって言わない？」

『えっ！？

なんで私の名前を知ってるの！？』

「こっちにも色々事情が有るから、詳しくは言えないけど。

私は、貴方達二人と同じ名前の精霊を知っている。
まぁ、それが貴方達とは限らないんだけどね」

蓮がそう言って苦笑いをすると、マハードたちは警戒しながらも一応納得した様子で、蓮に話しかけた。

『色々と聞きたい事は有るが、事情が有るならば無理に聞きはしない。
だが、私達が元の場所に戻る方法を知っていれば教えて欲しい』

「あ、それなら簡単よ。
デュエルすればいいだけだから」

「・・・それだけ？」

「はい、それで元の場所に戻れるはずですから」

「そうか。
そういう事なら、やろうかマハード、マナ」

『ああ、私達は構わない』

『うん！
だいじょう、ぶ？』

「マナ、どうしたんだ？」

『え、えっと、なんだか、誰かに見られてるような・・・』

「・・・まさか」

マナが何処からか来ている視線に身震いすると、蓮は思い当たった様子で、近くの物陰を探すと、そこには、息を荒げながらマナやマハードを見ているティルが居た。

『ハァハァ、いつもみたいに直接行くと蓮が怒るから、趣向を変えてみたけど。
これは、これで良いわ～』

「ほぉ～、ついにストーキングにまで手を出し始めたのね？」

『違うわよ～、これは少し離れた所から視姦してるだけ、よ？』

「いい加減に、しなさい！」

『グフッ！？
い、痛い。
けど、それが良い！』

「黙れー！」

蓮がティルに攻撃を加えると、ティルはその場に蹲るが、直ぐに嬉しそうな顔になり、そんなティルを見て蓮は大声を挙げ、その様子を見ていたリョウ達は呆然としていた。

『か、彼女はいつもああなのか？』

「はい、残念ながら」

『危ない人、じゃないの？』

『大丈夫だと思いますよ。
あれ以外では、良い人ですから』

『『ッ！？』』

『あ、驚かせたようで、申し訳ありません。
私は、マスターの精霊をさせて貰っています、ガーディアン・エアトスのエールと申します。
以後よろしくお願いします』

『『・・・ガーディアン、エアトス』』

エールがリョウ達に自己紹介すると、マハードとマナは複雑な表情でエールを見つめ、その視線を受けたエールは不思議そうに首を傾げた。

『あ、あの、何か？』

『・・・（私達が解らないという事は別の存在か）
いや、何でも無い。
気にしないでくれ』

『は、はぁ』

マハードがそう言うと、エールは不思議に思いながらも頷いた。

そして、エールがマハード達と話し終えると、ティルに折檻していた蓮が祐騎達の所に戻って来た。

そして、エール達のやり取りを見ていたアリスの隣に立って溜息を吐いた。

「ふぅ、ようやく大人しくなったわよ、あの変態」

「あ、あの、大丈夫なの？」

「ええ、アレくらいでどうこうなる奴じゃないわ。それにしても、見事にエールに反応してたわねぇ」

「それって、マハード達の事？」

「ええ。
でも、これで私が知ってる二人と、あの二人が同じって事は確定ね」

「貴女は一体？」

「悪いけど、詳しくは言えないわ。
けど、貴方達に危害を加える事はしないから、安心して頂戴」

「・・・解りました」

「あ、そうそう、私達と貴方達は違う世界の存在だから、戻ってから私達の事を探しても無駄だからね」

「え、別の世界って、どういう事ですか？」

蓮がリョウ達と自分たちが別の世界の存在だと告げると、その言葉に疑問を持ったアリスが蓮に質問し、蓮はこの世界で出会う人達

が色々な世界から来ていた事を告げた。

「なるほど、ここはそういった場所なのか」

「そうよ、だからデュエルが終われば元の世界に帰れるはずよ。何回も経験してる事だから、間違い無いわ」

「そうか、それなら早速やろうか」

「それでは、僕がお相手になります」

「ああ、お互い全力でいこう」

そう言うと、祐騎とリョウはお互いに距離を取ってデュエルディスクを構えた。

「「デュエル！」」

リョウ　ＬＰ４０００

祐騎　ＬＰ４０００

「先攻は貰う、ドロー！
オレは魔導騎士　ディフェンダーを守備表示で召喚！
そして、ディフェンダーの効果で自身に魔力カウンターを１つ乗せる」

「カードを１枚伏せて、ターンエンド」

リョウ　手札４枚

「僕のターン、ドロー！
僕は、ガスタ・ガルドを守備表示で召喚！
カードを２枚伏せて、ターンエンドです」

祐騎　手札３枚

「オレのターン、ドロー！
オレは手札から、マジシャンズ・ヴァルキリアを攻撃表示で召喚！
そして、ディフェンダーを守備表示から攻撃表示に変更」

「バトル！
まずは、ディフェンダーでガスタ・ガルドを攻撃！」

「ガスタ・ガルドの効果発動！
ガスタ・ガルドがフィールドから墓地に送られた時、デッキから
レベル２以下のガスタと名の付くモンスター１体を特殊召喚する事
が出来る！」

「僕は、デッキからガスタ・イグルを守備表示で召喚します！」

「なら、マジシャンズ・ヴァルキリアでガスタ・イグルを攻撃！」

「ガスタ・イグルの効果発動！
ガスタ・イグルが戦闘で破壊され墓地に送られた時、デッキから
レベル４以下のチューナー以外のガスタと名の付くモンスター１体
を特殊召喚する事が出来る！」

「僕は、デッキからレベル2のガスタの巫女　ウィンダを守備表示で特殊召喚します！」

「またか、オレはこれでターンエンドだ」

リョウ　手札4枚

「僕のターン、ドロー！
僕は、手札からガスタ・サンボルトを守備表示で召喚！
カードを1枚伏せて、ターンエンドです」

祐騎　手札2枚

「オレのターン、ドロー！
オレは、手札から速攻魔法、サイクロンを発動！
さっき伏せたカードを破壊させて貰う！」

「くっ！」

リョウが発動させた魔法カードによって、祐騎が伏せていた異次元からの帰還が破壊された。

「オレはマジカルフィシアリストを攻撃表示で召喚！
効果により、自身に魔力カウンターを1つ乗せる！」

「そして、マジカルフィシアリストのカウンターを1つ取り除き、魔導騎士　ディフェンダーの攻撃力をエンドフェイズまで500ポ

イントアップさせる！」

魔導騎士　ディフェンダー　攻１６００→２１００

「さらに、レベル４のマジシャンズ・ヴァルキリアにレベル２のマジカリフィシアリストをチューニング！
白き魔術が重なりし時、百戦錬磨の魔術師が現われる、光差す希望となれ！
シンクロ召喚！
冴え渡れ、高尚（こうしょう）なる魔術師（まじゅつし）　トエル・カウロ（攻／守２３００／１５００）」

『ホッホ、さて一仕事といこうかのぅ』

「あれって、まさかトルンカ？」

「トルンカの事まで知ってるの！？」

リョウがトエル・カウロを召喚すると、その姿を見た蓮がトルンカの名前を呟き、その呟きが聞こえたアリスが驚いた様子で声を挙げた。

「ま、まぁね（トルンカが居るってことは、まさかこの二人って５Ｄ’ｓの世界から来たって事？）」

「貴女って、本当に一体何者？」

「・・・悪いけど、それは言えないわ」

「なんで、ですか？」

『まぁまぁ、そのくらいにしておいた方が良いわよ～？
あんまりしつこい人って嫌われるわよ～』

「解り、ました」

アリスは蓮がトルンカの事を知っている理由を聞こうとしたが、
蓮はその質問に応えず、ティルの言葉も有り、アリスは一応納得し
てデュエルの観戦に戻った。

「高尚なる魔術師　トエル・カウロがシンクロ召喚に成功した時、
墓地から魔法カード1枚を手札に加える事が出来る！
オレは墓地から、サイクロンを手札に加える！」

「バトル！
まずは、ディフェンダーでガスタ・サンボルトを攻撃！」

「クッ！」

「リクルーターじゃ無い？
なら、高尚なる魔術師　トエル・カウロでガスタの巫女　ウィンダを攻撃！」

「ガスタの巫女　ウィンダが相手モンスターの攻撃によって破壊された事により、デッキからガスタと名の付くチューナーを特殊召喚する事が出来る！」

「僕は、デッキからレベル２のガスタ・スクイレルを守備表示で特殊召喚します！」

「オレは、バトルフェイズを終了しｔ「この瞬間、墓地のガスタ・サンボルトの効果を発動します！」なっ、このタイミングで発動する効果だって！？」

「ガスタ・サンボルトは戦闘で破壊されたターンのバトルフェイズ終了時に、墓地に存在するガスタと名の付くモンスター１体を除外する事で、デッキから守備力１５００以下の風属性、サイキック族モンスター１体を特殊召喚する事が出来ます！」

「僕は、墓地からガスタ・サンボルト自身を除外して、デッキから守備力１１００の風属性、サイキック族モンスター、ガスタの静寂　カームを攻撃表示で特殊召喚します！」

ガスタ・サンボルトの効果に驚いて声を挙げたリョウを見ながら、祐騎はデッキから緑色の長い髪を後ろで束ね、手に身長よりも長い杖を持った女性型のモンスターを召喚した。

「また、モンスターを減らせなかったか。
カードを１枚伏せてターンエンド！

そして、エンドフェイズにディフェンダーの攻撃力は元に戻る」

魔導騎士　ディフェンダー　攻２１００→１６００

「エンドフェイズにリバースカード、オープン！
永続罠、卓越風（たくえつふう）！
このカードは、自身の場に風属性モンスターが２枚以上存在する時、ドローフェイズ時にカードを２枚ドローする事が出来ます！」

「ドロー強化カードか」

「はい、ですが卓越風には自身の場に風属性モンスターが存在しない時、ドローフェイズにカードをドローする事が出来なくなる、という効果も有ります」

「なるほど、そういう効果のカードか」

祐騎が卓越風の効果を説明すると、リョウは納得した表情で祐騎のプレイに意識を集中し、祐騎のターンになった。

リョウ　手札３枚

「僕のターン、卓越風の効果で２枚ドロー！
さらに、ガスタの静寂　カームの効果発動！」

「ガスタの静寂　カームは１ターンに１度、墓地に存在するガスタと名の付くモンスター２体をデッキに戻し、シャッフルする事でデッキからカードを１枚ドローする事が出来ます！」

「僕は、墓地のガスタ・イグルとガスタ・ガルドをデッキに戻してシャッフルして、カードを1枚ドローします！」

「そして、レベル4のガスタの静寂　カームにレベル2のガスタ・スクイレルをチューニング！
疾風と共に在る乙女、今こそ一陣の風と共に全てを包み込め！
シンクロ召喚！
舞え、ダイガスタ・スフィアード！」

祐騎が場のモンスター2体をチューニングすると、祐騎の場に風が吹き抜け、場に金色の仮面を着けた女性型のモンスターが現われ、そのモンスターが杖を振ると、祐騎のデッキから1枚のカードが飛び出して手札に戻っていった。

「ダイガスタ・スフィアードがシンクロ召喚に成功した事により効果発動！
スフィアードがシンクロ召喚に成功した時、墓地に存在するガスタと名の付くカード1枚を手札に加える事が出来ます！」

「僕は、墓地のガスタの静寂　カームを手札に加えます！
そして、今手札に加えたカームを攻撃表示で召喚して、効果発動！」

「墓地から、ガスタの巫女　ウィンダとガスタ・スクイレルをデッキに戻してシャッフルし、カードをドローします！」

「実質コスト無しで、手札を3枚も増やした!?」

リョウは、祐騎が通常のドロー以外で手札を3枚増やした事に驚

いて声を挙げ、祐騎はドローしたカードを見て少し悩むと、バトルフェイズに入った。

「バトルです！
ガスタの静寂　カームで魔導騎士　ディフェンダーを攻撃！
サイレント・ソニック！」

「ディフェンダーの効果で魔力カウンターを取り除き、破壊を無効にする！」

「ですが、ダメージは受けてもらいます！」

「クッ！」

リョウ　ＬＰ４０００→３９００

「ダイガスタ・スフィアードでディフェンダーを攻撃！
エクストリーム・ソニック・ザンバー！」

「やらせない！
速攻魔法、ディメンション・マジックを発動！
魔導騎士　ディフェンダーをリリースして、手札からブラック・マジシャン（攻／守２５００／２０００）を攻撃表示で特殊召喚！」

「来い、マハード！」

『ハァッ！』

「さらに、ディメンション・マジックの効果でダイガスタ・スフ

ィアードを破壊する！」

「くっ！

流石に、そう上手くはいきませんか。

バトルフェイズを終了して、カードを2枚伏せてターンエンドです」

祐騎　手札４枚

「オレのターン、ドロー！

オレは罠カード、賢者の導き（けんじゃ　みちび）を発動！

このカードは、自分の場にブラック・マジシャンが存在する時、デッキ又は墓地からブラック・マジシャン・ガール１体を特殊召喚する事が出来る！」

「デッキから、マナを攻撃表示で特殊召喚！」

『ほっほ、豪華な顔ぶれじゃのぅ』

『本当、三人揃うなんて、珍しいね』

『それだけ、相手が強いという事だろう。

リョウ、出し惜しみせずに行こう』

「ああ、そのつもりだ。

オレは、さらにチューナーモンスター、マジシャンズ・シンクロン（攻／守０／０）を攻撃表示で召喚！」

「レベル７のマハードにレベル１のマジシャンズ・シンクロンを

チューニング！
黒き魔術が集いし時、新たな光の力が目覚める、光差す希望と為れ！
シンクロ召喚！
ＳＦ（スター・フェザー）ブラック・マジシャン（攻／守２９００／２４００）！」

「さらに、マジシャンズ・シンクロンをシンクロ素材にした時、このカード以外のシンクロ素材が魔法使い族モンスターだった場合、デュエル中に１度だけ墓地から特殊召喚する事が出来る！
オレは、墓地からマジシャンズ・シンクロンを攻撃表示で特殊召喚！」

「そして、レベル６のマナにレベル１のマジシャンズ・シンクロンをチューニング！
黒き魔術が交わりし時、新たな絆の幕が開く、光差す希望と為れ！
シンクロ召喚！
ＳＦ－ブラック・マジシャン・ガール（攻／守２４００／２０００）！」

リョウの場のマハードとマナがマジシャンズ・シンクロンと共に光に包まれると、リョウの場に光る翼を持ち、服装が白を基調とした物へと変化したマハードとマナが現われた。

「ブラック・マジシャンとブラック・マジシャン・ガールのシンクロ、ですか」

「ああ、これが俺達の全力だ！
高尚なる魔術師　トエル・カウロの効果を発動！
１ターンに１度、相手モンスター１体の攻撃力を半分にする事が出来る！」

「ガスタの静寂　カームの攻撃力を半分にする！」

ガスタの静寂　カーム　攻１７００↓８５０

「バトル！
ＳＦ－ブラック・マジシャンで、ガスタの静寂　カームを攻撃！
ＳＦ－ブラック・マジシャンは、自分フィールド上にこのカード以外のＳＦと名の付くモンスターが存在する時、相手の場のモンスター全てに攻撃することができる！
スター・イリュージョン・マジック！」

「くっ！」

祐騎　ＬＰ４０００↓１９５０

「良し、マナでダイレクトアタック！
スター・イリュージョン・バーニング！」

「罠カード、フローラル・シールドを発動！
相手モンスター1体の攻撃を無効にして、カードを1枚ドローします！」

「なら、高尚なる魔術師　トエル・カウロでダイレクトアタック！
シルバー・グランス！」

「罠カード、ガード・ブロックを発動！
戦闘ダメージを1度だけ0にして、カードを1枚ドローします！」

リョウが自身の場の3体のモンスターで総攻撃を仕掛けるが、祐騎は伏せていた罠カードを使い、その攻撃を全て防ぎきった。

「良し！
オレは、カードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

リョウ　手札1枚

「僕のターン！
僕の場に風属性モンスターが存在しないため、卓越風の効果により、ドローフェイズにカードをドローする事は出来ません」

「僕は、手札から魔法カード魂の開放を発動！
墓地に存在するカードを5枚選択して、ゲームから除外します！」

「僕は、僕の墓地からガスタの静寂　カーム、ダイガスタ・スフィアードを、リョウさんの墓地からマジシャンズ・ヴァルキリア、ブラック・マジシャン、ブラック・マジシャン・ガールをゲームから除外します！」

「この状況で墓地のカードを除外？
何をするつもりなんだ？」

「それは、これからお見せします」

祐騎はそう言うと、手札から1枚のカードを手に取り、そのカードをデュエルディスクにセットした。

「僕の墓地にモンスターが存在しない事により、手札からガーディアン・エアトスを攻撃表示で特殊召喚します！」

『さぁ、いきますよ！』

「なっ、レベル８のモンスターをコスト無しで召喚した！？」

「まだです！
さらに、手札からチューナーモンスター、栄光の天使を攻撃表示で召喚！」

「レベル８のガーディアン・エアトスにレベル２の栄光の天使をチューニング！
風の守護者よ、今こそ栄光をその手に数多の魂を救う光となれ！
シンクロ召喚！
輝け、煌翼の守護者ートゥインクル・エアトスー！」

「・・・あっちもシンクロを」

「トゥインクル・エアトスの効果発動！
トゥインクル・エアトスはシンクロ召喚に成功した時、お互いの墓地に存在するモンスターを全てゲームから除外します！
天界のオペラ！」

「なっ、墓地のモンスターを全て除外するだって！？」

エールが手に持った剣を頭上に掲げると、リョウの墓地に存在していたモンスター達が除外され、元々除外されていたモンスター達と共に、エールの剣に吸収された行った。

「そして、トゥインクル・エアトスはゲームから除外されているモンスター1体につき、１００ポイント攻撃力がアップします！
僕が除外しているモンスターは5体、リョウさんの除外しているモンスターは6体、合計１１体のモンスターが除外されています」

「よって、攻撃力は１１００ポイントアップして、４１００となります！」

トゥインクル・エアトス　攻３０００→４１００

「攻撃力４１００!?」

「バトル！
煌翼の守護者ートゥインクル・エアトスーで高尚なる魔術師　トエル・カウロを攻撃！
セイクリッド・ゴスペル！」

『ハアアアッ！』

『ヌゥ、これはキツイのぅ!?』

「くっ、トルンカ!?」

リョウ　ＬＰ３９００→２１００

エールが手に持った剣を振りかぶると、その剣から光の線が放たれ、リョウの場のトエル・カウロを破壊しダメージを与えた。

「さらに、トゥインクル・エアトスがフィールド上に表側表示で存在する時、墓地に送られるモンスターは全て除外されます！
よって、高尚なる魔術師　トエル・カウロは墓地には行かず、除外されます！」

「そして、除外されているモンスターが増えた事で、トゥインクル・エアトスの攻撃力がさらにアップします！」

煌翼の守護者ートゥインクル・エアトスー　攻４１００→４２００

「ターンエンドです」

祐騎　手札３枚

「オレのターン、ドロー！
オレは、手札から魔法カード、千本ナイフ（サウザンド）を発動！
このカードは、自分フィールド上にブラック・マジシャンが表側表示で存在する時のみ発動する事が出来、相手フィールド上に存在するモンスター１体を破壊する！」

「ＳＦ－ブラック・マジシャンは表側表示で存在する時、ブラック・マジシャンとしても扱う。
よって、発動条件は満たしている。
千本ナイフの効果で、トゥインクル・エアトスを破壊する！」

『フッ！』

リョウが千本ナイフのカードを発動すると、マハードの周囲に千

本のナイフが現われ、マハードがエールに向けて手を振り下ろすと、そのナイフ達はエールに向かって飛んでいった。

そして、飛んでいったナイフ達がエールに刺さろうとした時、エールの体が淡い光を放ち、飛んできたナイフを全てはじき返した。

『何！？』

「破壊出来なかった！？」

『残念ですが、栄光の加護の前にそのようなカードは無意味です！』

「トゥインクル・エアトスのシンクロ素材となった栄光の天使の効果を発動させました。

栄光の天使をシンクロ素材にしたモンスターは、カード効果によって破壊されるとき、攻撃力を５００ポイントダウンさせる事で、破壊を無効にする事が出来ます」

煌翼の守護者－トゥインクル・エアトス－　攻４２００→３７００

「くっ、伏せていた速攻魔法、サイクロンを発動！

卓越風を破壊する！」

「そして、マハードとマナを守備表示に変更して、２体目の魔導騎士　ディフェンダーを守備表示で召喚！」

「ディフェンダーの召喚時の効果により、ディフェンダーに魔力カウンターを１つ乗せる。

さらに、マナの効果発動！」

「ＳＦ－ブラック・マジシャン・ガールは１ターンに１度、墓地に存在するカードを除外する事で、除外したカードの発動条件が満たされている場合、そのカードの効果を使用する事が出来る！」

「オレは、墓地の千本ナイフを除外して、トゥインクル・エアトスを破壊する！」

「栄光の天使の効果で、攻撃力を５００ポイント下げて破壊を無効にします！」

煌翼の守護者－トゥインクル・エアトス－　攻３７００→３２００

「オレは、これでターンエンド！」

リョウ　手札０枚

「僕のターン、ドロー！
僕は、手札から魔法カード、アームズ・ホールを発動！」

「このターン、通常召喚を行わない代わりに、デッキの１番上のカード１枚を墓地に送り、墓地又はデッキから装備魔法カード１枚を手札に加えることが出来る！」

「僕は、デッキの１番上のカード、貪欲な壺を墓地に送り、デッキから装備魔法カード、精霊神器－エクセリオン－を手札に加えます！」

「そして、今手札に加えた精霊神器－エクセリオン－をトゥインクル・エアトスに装備します！
精霊神器－エクセリオン－は、発動時に支払うコストによって、３つの効果の中から１つを選択して発動します！

「僕は、トゥインクル・エアトスの元々の攻撃力を半分にして、精霊神器－エクセリオン－を装備します！」

煌翼の守護者－トゥインクル・エアトス－　攻３２００→１７００

祐騎がエールに精霊神器－エクセリオン－を装備すると、エールの手にしている剣の柄の部分が変化し、剣全体を金色の光が覆った。

「精霊神器－エクセリオン－を装備モンスターの攻撃力を半分にして装備した場合、装備モンスターはダイレクトアタックをする事が出来ます！」

「さらに装備魔法、団結の力をトゥインクル・エアトスに装備して、攻撃力を８００ポイントアップさせます！」

煌翼の守護者－トゥインクル・エアトス－　攻１７００→２５００

「バトルです！
トゥインクル・エアトスでダイレクトアタック！」

「マナの効果を発動！
マナの効果は相手ターンでも発動出来る！」

「墓地のサイクロンを除外して、団結の力を破壊する！」

「なっ！？」

煌翼の守護者ートゥインクル・エアトスー　攻２５００→１７００

「くっ、ですが、バトルは続行されます！」

「グゥッ！？」

リョウ　ＬＰ２２００→５００

エールの攻撃がリョウに当たる寸前で、エールが装備していた団結の力が破壊され、エールの攻撃力がダウンして、リョウにライフを削りきる事は出来なかった。

「決められませんでしたか。
なら、僕はカードを１枚伏せて、ターンエンドです」

祐騎　手札１枚

「オレのターン、ドロー！
オレは、マハードとマナを攻撃表示に変更！」

「バトル！

マハードでトゥインクル・エアトスを攻撃！
スター・イリュージョン・マジック！」

「この瞬間、速攻魔法、サイクロンを発動！
サイクロンの効果で、精霊神器ーエクセリオンーを破壊します！」

「やらせない！
マハードの効果発動！
フィールド上のカードを破壊する、魔法、罠、モンスター効果が発動した時、自分フィールド上に存在するこのカード以外のモンスター1体をリリースする事で、そのカードの効果の発動を無効にして破壊する！」

「オレは、魔導騎士　ディフェンダーをリリースして、サイクロンの発動を無効にして破壊する！」

「くっ、ですがトゥインクル・エアトスの効果により、ディフェンダーは除外され、トゥインクル・エアトスの攻撃力は１００ポイントアップします！」

煌翼の守護者ートゥインクル・エアトスー　攻１７００→１８００

「だが、攻撃力はマハードの方が上だ！
スター・イリュージョン・マジック！」

『ハァッ！』

『クゥッ！
済みません、マスター』

「エール！
くっ！？」

祐騎　ＬＰ１９５０→８５０

祐騎はエールに装備していた装備魔法を破壊しようとするが、リョウはマハードの効果でそれを防ぎ、マハードの攻撃によって、エールは破壊され祐騎はダメージを受けた。

そして、破壊されたエールが墓地に送られると、祐騎とリョウが除外していたモンスター達がそれぞれのデッキに戻って行った。

「・・・これは」

「トゥインクル・エアトスの最後の効果です。
トゥインクル・エアトスはフィールドから離れる時、お互いに除外しているモンスターを全て持ち主のデッキに戻します」

「そうか、ならこれで終わりだ！
マナでダイレクトアタック！
スター・イリュージョン・バーニング！」

「くっ、あああああっ！」

祐騎　ＬＰ８５０→０

マナの攻撃によってライフが0になりデュエルが終わると、祐騎とリョウは蓮達の居る所に向かった。

「お疲れ様、惜しかったわね」

「はい、もう少しだったんですけど、上手く対処されてしまいました」

「そう、けど楽しかったでしょ？」

「ええ、それはもう」

蓮と祐騎が話をしていると、アリスとの話を終えたリョウが祐騎達の方にやって来た。

「良いデュエルだったな」

「はい。
もし次やる事が有れば、その時は負けませんから」

「ああ、次も全力で戦おう」

祐騎とリョウが話をしていると、次第にリョウ達の体が透けていきだした。

「っ、これは？」

「そろそろお別れみたいね」

「そうですか。
あの、また会えますか？」

「多分会えるわよ、実際同じ世界の人と何回か会ってるから」

「それじゃあ、またいつか」

「ええ、またね」

「それじゃあ、またデュエルしよう」

「はい、その時はよろしくお願いします」

祐騎達がお互いに別れの挨拶を済ませると、リョウ達の体は光に飲み込まれ、辺り一面を光が溢れ出し、その光が収まると、リョウ達の姿も消えていた。

こうして、旋風の守護者と黒魔術師の師弟の時代と世界を超えた初めての出会いは、終わりを迎えた。

一周年記念コラボその2　旋風の守護者ＶＳ黒魔導士の師弟（後書き）

何度かコラボをさせてもらっていますが、やっぱり他の作者の方の作品のキャラは書くのが難しいです。

キャラの口調等がちゃんと出来ているか不安ですが、どうだったでしょうか？

次回は、一周年記念のコラボの最後か、本編の続きになります。

後、今回戎鴛さんから提供していただいたオリカを使わせてもらいました。

戎鴛さん、オリカの提供ありがとうございました。

それから、投稿して頂いたオリカの説明を新しく乗せますので、良かったら確認してみてください。

そして、一応人気投票についてはそれなりの数の票が集まるまで続けようと思っていますので、良ければ投票してくださるとありがたいです。

それでは、これからもこの作品をよろしくお願いします。

第三十五話　ＶＳメタデッキ　飛び立て、黒羽の竜騎士　（前書き）

今回は本編の続きになります。

３つ目のコラボは次回になります。

それでは、第三十五話始まります。

第三十五話　ＶＳメタデッキ　飛び立て、黒羽の竜騎士

～ＢＦの巣～

蓮がブラック・ガーデンで試練に挑んでいる頃、ティルによって精霊世界にあるＢＦ達の巣にやって来た小羽とマリナは、試練の事を知っている精霊を探していると、二人の上空から黒い翼を持ち、アメリカインディアンの民族衣装の様なものを着た人型の精霊が降りて来て、二人に話しかけた。

『人の子に、魔術師の少女よ、ここになんの用だ？』

「あ、あの、貴方は？」

『ん？

ああ、失礼した、某はここブラック・フェザー・ヴィレッジで番人をしておる、ＢＦＴ（ブラックフェザー・テイマー）漆黒のホーク・ジョーと申す』

「は、始めまして！

私、紅龍小羽って言います！」

『私は、マリナだよー。

よろしくね！』

『うむ、して小羽殿にマリナ殿、此処に何用で参った？

此処は我等ＢＦの聖地、興味本位で来たのなら早々に立ち去って頂きたいのだが』

「あ、あの！
私達、此処で冥界に行くための試練が受けられるって聞いて来たんです！」

『・・・何だと？』

『「！？」』

小羽が冥界へ行くための試練を受ける為に来たと言うと、それまで友好的な雰囲気を出していたホーク・ジョーは一転して険しい表情で二人を見つめだした。

『冥界の試練を受けに来たと、それは真か？』

「は、はい」

『どういった理由が有るか知らぬが、主等では無理だ』

「な、なんでですか！？」

『冥界の試練とは、冥界門から漏れ出す冥界の気を利用し、その門が存在する場所の精霊の力を借りて行う物。
故に、その門のある場所に居る精霊の力を借りられねば、試練を受ける事自体叶わぬのだ』

『あれ？
なら、貴方が協力してくれれば、出来るんじゃ？』

『残念だが、此処ブラック・フェザー・ヴィレッジで試練を受けられるのは、ＢＦの力を持つ者だけと決められている。

いくら某が協力しようとも、試験の前提条件が満たされなければ受ける事は出来ん』

『そういう事ゆえ、済まないが今回は諦めｔ「あ、あの、私、ＢＦ使いです！」なん、だと？』

『本当だよー。
ちなみに、私もＢＦ化出来たりして～』

『・・・ふむ、そういう事なら、ついて来られよ』

小羽とマリナが自分達もＢＦの力を持っていると言うと、ホーク・ジョーは複雑な表情をしながらも、二人を冥界門のある場所まで連れて行った。

～冥界門（ＢＦＶ）～

『ここが、この地に存在する冥界門、冥界の試練を受ける場所だ』

「これが、冥界門」

ホーク・ジョーに案内され暫く歩くと、小羽達の前に黒い羽や、鳥の足の様な装飾品から伸びる鎖で開かない様にされている巨大な門が現われた。

『・・・さて、確認するが、本当に試練を受けられるのだな？』

「はい！」

『そのために来たんだしね～』

『・・・試練に敗れればそなた等の命が消える、と言ってもか？』

『「・・・え？」』

ホーク・ジョーの言った試練のリスクを聞いた小羽たマリナは、いきなりの事で驚いてホーク・ジョーの顔を見た。

『その様子では、やはり知らなかったようだな』

『それで、どうするのだ？
某としては、このまま試練を受けずに帰って欲しいのだが』

『・・・小羽、どうする？』

「・・・私、やるよ。
お姉ちゃんもジョシュアさんも試練を受けてるはずだし、なのに私だけ逃げ帰る訳にはいかないもん！」

『本当に良いのだな？
今ならばまだ引き返す事も出来る。
下手な意地を張って、命を無駄にする事は有るまい』

「けど、この試練を超えられないと冥界には行けないんですよね？」

『ああ、天使族やアンデット族を除いて、冥界の瘴気に耐える事が出来るのは試練を無事終えられた者だけだ』

「だったら、私は試練を受けます！
そして、必ず試練をクリアしてみせます！」

『・・・よかろう。
ならば、構えよ』

小羽が試練を受ける事を伝えると、ホーク・ジョーは小羽から距離を取って構えると、ホーク・ジョーの腕に黒い翼の様な形のデュエルディスクが現われた。

「いくよ、マリナ」

『うん！』

ホーク・ジョーがデュエルディスクを構えると、小羽もデュエルディスクを構えてホーク・ジョーと対峙した。

『「デュエル！」』

ホーク・ジョー　ＬＰ４０００

小羽　ＬＰ４０００

『某の先攻、ドロー！
某は、ライオウ（攻／守１９００／８００）を攻撃表示で召喚！』

「っ、ライオウ！？」

『その様子、お主はこのカードの効果を知っているのだな。
ならば、説明は不要。
某はカードを２枚伏せて、ターンエンド』

ホーク・ジョー　手札３枚

「私のターン、ドロー！
相手の場にのみモンスターが存在する事により、手札からＢＦ－暁のシロッコをリリース無しで攻撃表示で召喚します！」

『シロッコか、この状況で出すモンスターではソイツが妥当であろう。
だが、甘いな』

「え？」

『罠カード発動！
奈落の落とし穴！
攻撃力１５００以上のモンスターが召喚された時、そのモンスタ

ーを破壊して、ゲームから除外する！』

「そんな！？」

小羽が召喚したシロッコは、ホーク・ジョーの発動した罠カードによって現われた穴に吸い込まれていき、除外された。

『ＢＦのセオリーに沿っているだけでは、某には勝てぬぞ？』

「くっ、カードを2枚伏せてターンエンドです」

小羽　手札３枚

『某のターン、ドロー！
某は、手札から聖なるあかりを守備表示で召喚する！』

「聖なるあかり！？
そんな、ライオウだけじゃなく、そのカードまで有るなんて・・・
まさか！？」

『さよう、某が試練において使うデッキは対ＢＦデッキ。
生半可な戦術では、突破など出来ぬぞ？』

「くっ！」

『バトル！
ライオウでダイレクトアタック！
ライトニングキャノン！』

「罠発動！
聖なるバリアーミラーフォース－！
このカードの効果で、ホーク・ジョーさんの場の攻撃表示モンスターを全て破壊します！」

『なに！？』

「良し、ライオウを破壊出来た！」

『ふむ、ライオウ1体に対してミラーフォースを使う、か。
これからどうするか、見ものだな。
某はこれでターンエンドだ』

ホーク・ジョー　手札3枚

「私のターン、ドロー！
ううっ、モンスターをセットしてターンエンドです」

小羽　手札3枚

『某のターン、ドロー！
聖なるあかりが存在している状況では、モンスターをセットする事しか出来ぬか。
ならば、今のうちに攻めるとしようか』

『某は、手札から光神機－桜花（ライトニングギア　おうか）（攻／守２４００／１４００）を自身の効果により、リリースなしで攻撃表示で召喚！』

『バトル！
光神機－桜花で裏守備モンスターを攻撃！』

「させません！
罠カード、ゴッドバードアタックを発動します！」

『ッ、なるほど、そのカードが有ったか』

「私の場のセットモンスター、ＢＦ－大旆（たいはい）のヴァーユ（攻／守８００／０）をリリースして、ゴッドバードアタックを発動！
ゴッドバードアタックの効果で、ホーク・ジョーさんの場の聖なるひかりと光神機－桜花を破壊します！」

小羽が罠カードを発動させると、小羽の場にセットされていたヴァーユがホーク・ジョーの場の２枚のカードに向かって飛び込んで行き、２枚のカードを破壊した。

『ならば某は、カードを１枚伏せてターンエンド』

ホーク・ジョー　手札２枚

「私のターン、ドロー！
私の場にカードが存在しない事により、手札からＢＦ－逆風のガストを守備表示で特殊召喚します！」

「さらに、自分フィールド上にＢＦと名の付くモンスターが表側表示で存在している事により、手札からＢＦ－漆黒のエルフェンをリリース無しで攻撃表示で召喚します！」

「そして、墓地の大旆のヴァーユの効果を『リバースカード、オープン！』えっ！？」

『永続罠、暗闇を吸い込むマジック・ミラーを発動する！
このカードが表側表示で存在する限り、フィールドと墓地で発動する闇属性モンスターの効果は無効となる』

『よって、ヴァーユの効果は無効だ』

小羽が前のターン、ゴッドバードアタックのコストでリリースし、墓地に送られていたヴァーユの効果を発動させようとするが、ホーク・ジョーが伏せていた罠カードを発動し、発動した罠カードの効果によってヴァーユの効果は発動出来ずに終わった。

「そんな、墓地の効果まで無効になるなんて・・・」

『ＢＦが相手だと判っている以上、フィールド上のみを対象にし、闇属性以外のモンスターの効果まで無効にするスキルドレインよりも、このデッキにはこちらの方が都合が良いのでな』

「くっ、ならバトルです！
エルフェンでダイレクトアタック！」

『罠カード発動！
ガード・ブロック！
戦闘で受けるダメージを１度だけ０にして、デッキからカードを１枚ドローする！』

「くっ、カードを１枚伏せてターンエンドです！」

小羽　手札１枚

『某のターン、ドロー！
手札から永続魔法、神の居城－ヴァルハラ－を発動！』

『某は、このカードの効果により、手札から天使族モンスターＴｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳを攻撃表示で特殊召喚！』

『そして、ＶＥＮＵＳの効果によりフィールド上に存在する天使族モンスター以外のモンスターの攻守を５００ポイントダウンさせる！』

ＢＦ－逆風のガスト　攻９００→４００　守１４００→９００
ＢＦ－漆黒のエルフェン　攻２２００→１７００　守１２００→７００

『さらに、手札から勝利の導き手（しょうりのみちびきて）　フレイヤ（攻／守１００／１００）を守備表示で召喚！
そして、フレイヤの効果でフィールド上の天使族モンスターの攻守を４００ポイントアップさせる！』

Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ　攻２８００→３２００　守２４００→２８００
勝利の導き手　フレイヤ　攻１００→５００　守１００→５００

『バトル！
ＶＥＮＵＳで漆黒のエルフェンを攻撃！』

「させない！
罠発動、ＢＦ（ブラック・フェザー）イリュージョン！」

ホーク・ジョーがフレイヤの効果で攻撃力の上がったＶＥＮＵＳで小羽の場のエルフェンを攻撃すると、小羽は伏せていた罠カードを発動させた。

そして、小羽が罠カードを発動させると、小羽の場からエルフェンが消え、エルフェンが居た場所には？マークの描かれた箱が代りに現われた。

『これは、一体？』

「罠カード、ＢＦ・イリュージョンは自分の場に存在するＢＦと名の付くレベル６以上のモンスターが相手モンスターの攻撃対象となった時発動する事が出来る罠です！」

「このカードが発動した時、攻撃対象となったＢＦと名の付くレベル６以上のモンスター１体をリリースする事で、デッキ又は手札からブラック・マジシャン・ガール１体を効果を無効にして攻撃表示で特殊召喚する事が出来ます！」

「さらに、このカードの効果で特殊召喚に成功した時、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択し、選択したモンスターと特殊召喚したブラック・マジシャン・ガールの元々の攻撃力を入れ替えて強制的にバトルさせます！」

『なんだと！？
だが、某の場のＶＥＮＵＳとフレイヤのどちらを選んだとしても、２体の効果がある以上ブラック・マジシャン・ガールでは、倒す事は不可能だぞ！』

「いいえ、それが可能なんです！
ＢＦ・イリュージョンの効果により、このカードの効果の対象となったモンスターの攻撃力は、このターンのエンドフェイズまでこのカード以外の効果では変化しません！」

『なっ！？』

「私は、漆黒のエルフェンをリリースし、デッキからブラック・マジシャン・ガールを特殊召喚！」

『それじゃあ、いっくよー！』

「そして、ＢＦ・イリュージョンの効果の対象にＶＥＮＵＳを選択します！
よって、ブラック・マジシャン・ガールとＶＥＮＵＳの元々の攻撃力をエンドフェイズまで入れ替えます！」

ブラック・マジシャン・ガール　攻２０００→１５００→２８００　守１７００→１２００

Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ　攻３２００→２８００→２０００

「さらに、ＢＦ・イリュージョンの効果で攻撃力を入れ替えたブ

ラック・マジシャン・ガールとＶＥＮＵＳは強制的にバトルします！
ブラック・イリュージョン・バーニング！」

『ぐっ！』

「きゃっ！？」

ホーク・ジョー　ＬＰ４０００→３２００

小羽　ＬＰ４０００→３２００

小羽が発動させた罠カードによって攻撃力が入れ替わったマリナに攻撃をしかけたＶＥＮＵＳは、返り討ちに会い破壊された。

そして、ＶＥＮＵＳが破壊された時に発生した衝撃で、ホーク・ジョーだけでなく小羽のライフも同じだけ削られた。

そして、ＶＥＮＵＳが破壊された事で、フィールド上のモンスターの攻守が元に戻った。

逆風のガスト　攻４００→９００　守９００→１４００

ブラック・マジシャン・ガール　守１２００→１７００

『何故、お主のライフまで減っているのだ』

「罠カード、ＢＦ・イリュージョンの効果によって戦闘が行われ

た場合、その戦闘によって発生する戦闘ダメージは、お互いのプレーヤーが受ける事になるんです」

『なるほど、そういうことか。
某は、カードを1枚伏せてターンエンドだ』

「エンドフェイズに、BF・イリュージョンの効果により、ブラック・マジシャン・ガールの攻撃力は元に戻ります！」

ブラック・マジシャン・ガール　攻2800→2000

ホーク・ジョー　手札0枚

「私のターン、ドロー！
私は手札から、魔法カード黒羽の宝札を発動します！」

「手札から、BF－精鋭のゼピュロスを除外してデッキから2枚ドローします！」

「逆風のガストを攻撃表示に変更して、バトルです！」

「逆風のガストでフレイヤを攻撃します！」

『罠発動、和睦（わぼく）の使者（ししゃ）を発動！
このターン、某の場のモンスターは戦闘では破壊されず、戦闘によって受けるダメージは0になる！』

「くっ、カードを1枚伏せてターンエンドです」

小羽　手札１枚

『某のターン、ドロー！
手札から、強欲な壺を発動して２枚ドロー！』

『さらに、天使の施しを発動して、３枚ドローして手札２枚を墓地に捨てる！』

「連続で手札増強カードを！？」

ホーク・ショーは連続でデッキからカードをドローし、天使の施しの効果で手札からシャインエンジェルと天空の聖域を墓地に送った。

『そして、手札から閃光（せんこう）の追放者（ついほうしゃ）（攻／守１６００／０）を攻撃表示で召喚！』

『さらに、フレイヤの効果で閃光の追放者の攻守は４００ポイントアップする！』

閃光の追放者　攻１６００→２０００　守０→４００

『バトル！
閃光の追放者で逆風のガストを攻撃！』

「させません、リバースカードオープン！
マジカル・ピジョン！」

ホーク・ジョーの場の閃光の追放者が小羽の場の逆風のガストを攻撃しようとすると、閃光の追放者の眼前に白い2羽の鳩が現われ、閃光の追放者の攻撃を止めた。

「罠カード、マジカル・ピジョン。
このカードは、相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事が出来、自分フィールド上に表側表示で存在するブラック・マジシャン・ガール1体をリリースして発動します！」

「このカードが発動した時、相手モンスター1体の攻撃を無効にして、自分フィールド上にレベル1、攻撃力、守備力0の鳩トークン2体を守備表示で特殊召喚します！」

「さらに、発動したターンのエンドフェイズに、自身の墓地にブラック・マジシャン・ガールが存在する場合、自分フィールド上に存在する鳩トークンを含む全てのモンスターを破壊する事で、墓地に存在するブラック・マジシャン・ガール1体を効果を無効にして表側守備表示で特殊召喚します！」

『なるほど、そう来るか。
某はこれでターンエンドだ』

「エンドフェイズを迎えましたが、私の墓地にブラック・マジシャン・ガールが存在していないので、マジカル・ピジョンの効果は発動しません」

ホーク・ジョー　手札2枚

「私のターン、ドロー！
私は、場の逆風のガストをリリースして手札から、ＢＦ－流離（さすら）いのコガラシ（攻／守２３００／１６００）を攻撃表示でアドバンス召喚！」

「そして、レベル１の鳩トークン２体にレベル６の流離いのコガラシをチューニング！
皆の痛みを翼に乗せて、今こそその力を解き放って！
シンクロ召喚！
羽ばたいて、ブラックフェザー・ドラゴン！」

『・・・来たか、黒羽の龍』

「流離いのコガラシをシンクロ素材にしてシンクロ召喚に成功した事で、ホーク・ジョーさんはこのターン中魔法、罠、モンスター効果を発動する事は出来ません！」

「バトルです！
ブラック・フェザー・ドラゴンで閃光の追放者を攻撃！
ノーブル・ストリーム！」

『ぬぅ！？』

ホーク・ジョー　ＬＰ３２００→２４００

「私はこれで、ターンエンドです！」

小羽　手札０枚

『某のターン、ドロー！
某の墓地に天使族モンスターが４体存在する事により、手札から大天使(だいてんし)クリスティア（攻／守２８００／２３００）を攻撃表示で特殊召喚する！』

「っ、クリスティア！？」

『大天使クリスティアが自身の効果により特殊召喚に成功した事により、墓地に存在する天使族モンスター１体を手札に加える事が出来る！』

『某は墓地から、聖なるあかりを手札に加えて、そのまま攻撃表示で通常召喚！』

『そして、クリスティアと聖なるあかりはフレイヤの効果で攻守が４００ポイントアップする！』

大天使クリスティア　攻２８００→３２００　守２３００→２７００

聖なるあかり　攻０→４００　守０→４００

『そして、フレイヤを攻撃表示に変更して、バトル！』

『大天使クリスティアでブラックフェザー・ドラゴンを攻撃！
シャイン・バニッシュ！』

『ギュアアアアッ！！』

「ッ、ブラックフェザー・ドラゴン！？」

クリスティアがブラックフェザー・ドラゴンに両手を向けると、その両手から無数の光の剣が飛び出し、ブラックフェザー・ドラゴンを串刺しにして破壊して小羽のライフにダメージを与えた。

小羽　ＬＰ３８００→３４００

『さらに、フレイヤと聖なるあかりでダイレクトアタック！』

「グッ！？」

小羽　ＬＰ３４００→２９００→２５００

『某はこれでターンエンドだ』

ホーク・ジョー　手札２枚

「くっ、私のターン、ドロー！
手札から魔法カード、強欲な壺を発動！
デッキから、さらに２枚ドローします！」

「そして、手札から魔法カード光の護封剣を発動します！」

『ほう、この状況で強欲な壺から護封剣を引くか』

「私は、これでターンエンドです！」

小羽　手札１枚

『某のターン、ドロー！
勝利の導き手フレイヤをリリースして、手札から光神テテュスを攻撃表示で召喚。
フレイヤがフィールドから居なくなった事で、某の場のモンスターの攻守は元に戻る』

大天使クリスティア　攻３２００→２８００　守２７００→２３００

聖なるあかり　攻４００→０　守４００→０

『そして、聖なるあかりを守備表示にしてターンエンドだ』

ホーク・ジョー　手札２枚

光の護封剣　１ターン経過

「私のターン、ドロー！
くっ、ターンエンドです」

小羽　手札２枚

『某のターン、ドロー！
ドローしたのは、天使族モンスターのコーリング・ノヴァ、よってテテュスの効果でもう1枚ドローする！』

『2枚目のカードは天使族では無い、よってテテュスの効果は発動しない。
そして、コーリング・ノヴァ（攻／守１４００／８００）を守備表示で召喚して、ターンエンドだ』

ホーク・ジョー　手札3枚

光の護封剣　2ターン経過

「私のターン、ドロー！
くっ、手札から速攻魔法、異次元からの埋葬を発動します。
このカードの効果で、ゲームから除外されている、ＢＦ－精鋭のゼピュロス、ブラック・マジシャン・ガール、ＢＦ－暁のシロッコを墓地に戻します」

「私は、これでターンエンドです」

小羽　手札2枚

『某のターン、ドロー！
ドローしたカードは、天使族の神聖なる魂（ホーリーシャイン・ソウル）、よってテテュスの効果でさらにドロー！
2枚目は天使族では無いため、効果は終了する』

『そして、ジェルエンデュオ（攻／守１７００／０）を守備表示で召喚！
さらに、カードを１枚伏せてターンエンド』

『そして、このターンで護封剣の効果は消える！』

ホーク・ジョーがターンの終了を宣言すると、ホーク・ジョーの場に現われていた光の剣が消え、光の剣によって動きを制限されていたモンスター達は自由を取り戻した。

ホーク・ジョー　手札３枚

「私のターン、ドロー！」

『逆転のカードは引けたか？』

「うっ！」

『・・・その様子では、引けなかったみたいだな』

「ま、まだです！
手札から魔法カード、闇の誘惑を発動！」

「このカードの効果で、デッキから２枚のカードをドローして、その後手札から闇属性モンスター１体をゲームから除外します！」

『さて、それで本当に逆転のカードを引けると思っているのか？』

「・・・引けるか引けないかじゃないです、引くんです！

そして、貴方に勝って、お姉ちゃん達の力になるんです！」

『姉の為、それがお主が試練を受ける理由か』

「はい！」

『・・・サレンダーするならば、これが最後の機会だぞ？
サレンダーならば命を失う事は無い、試練は2度と受けられぬがな。
お主の姉とやらも、自身の為にお主が命を落とす事など望んでは無いだろう』

「私も、そうだと思います」

『ならば「けど！」ぬ？』

「だけど、それじゃあ駄目なんです。
お姉ちゃん達が戦っている時に私だけ何も出来ないなんて、そんなの絶対に嫌なんです！」

「だから、私は自分の意思で、自分の為にも、貴方に勝って試練を超えてみせます！」

『・・・良いだろう、ならばお主のその意思、見事貫いてみよ！』

「はい！
闇の誘惑の効果で、カードを2枚ドロー！」

小羽がホーク・ジョーに自分の思いを告げてデッキからカードをドローすると、ドローしたカードは光の線を描いて小羽の手札に加

わった。

「これなら！
私は、闇の誘惑の効果により手札から闇属性モンスター、ＢＦ－陽炎のカームをゲームから除外します！」

「さらに、手札からＢＦ－極光のアウロラを墓地に捨てて、手札から魔法カード、ブラック・コアを発動します！」

「ブラック・コアの効果で、大天使クリスティアを除外します！」

『クッ、だがそれで終わりでは無いだろう？』

「もちろんです！
さらに、魔法カード、貪欲な壺を発動！
墓地のエルフェン、ヴァーユ、ゼピュロス、コガラシ、アウロラをデッキに戻して２枚ドローします！」

「良し！
手札から、魔法カード、ミラクルシンクロフュージョンを発動します！」

「ミラクルシンクロフュージョンの効果で、私は墓地からシンクロモンスター、ブラックフェザー・ドラゴンとブラック・マジシャン・ガールを除外して融合！」

「融合召喚！
飛び立って、黒羽の竜騎士（ブラックフェザー・ドラゴンナイト）（攻／守３０００／２６００）！」

小羽がミラクルシンクロフュージョンを発動させ、墓地からブラ

ックフェザー・ドラゴンとブラック・マジシャン・ガールを除外して融合させると、小羽の場に黒い騎士の甲冑を着て、羽の形に似た姿の槍を持ったマリナが跨っているブラックフェザー・ドラゴンが現われた。

『黒羽の竜騎士だと！？
だが、聖なるあかりが某の場に居る以上、闇属性のモンスターは特殊召喚出来ないはず！』

「黒羽の竜騎士の属性は闇属性では無く、光属性です！
よって、聖なるあかりや暗闇を吸い込むマジック・ミラーの効果を受けません！
いくよ、マリナ、ブラックフェザー・ドラゴン！」

『うん！』

『ギュアアア！』

「黒羽の竜騎士の効果発動！
黒羽の竜騎士は1ターンに1度、手札に存在するＢＦと名の付くモンスター1体を墓地に送る事で、フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して破壊し、相手プレーヤーにこの効果で墓地に送ったＢＦと名の付くモンスターの元々の攻撃力分のダメージを与えます！」

「私は手札から、ＢＦ－激震のアブロオロスを墓地に送り、黒羽の竜騎士の効果を発動！
黒羽の竜騎士の効果で、聖なるあかりを破壊します！
フェザー・ブレイク・マジック！」

『いっくよー！
ハァッ！』

『グゥアアアッ！』

『なるほど、だが・・・！？』

小羽が黒羽の竜騎士の効果を発動させると、マリナの持っている槍にエネルギーが集中し、その槍を振り下ろすと、それに合わせてブラックフェザー・ドラゴンが口から黒い光線を吐き出し、マリナが振り下ろした槍から出た光と合わさり、ホーク・ジョーの場の聖なるあかりに向かって行った。

ホーク・ジョーは黒羽の竜騎士の効果が発動する時、場にセットしていたカードを発動させようとしたが、ふと小羽の方を見ると、小羽の背中に一瞬だけ黒い翼が現われ、ホーク・ジョーはそれに驚いて、もう一度小羽の方を見たが翼は既に消えていた。

そして、ホーク・ジョーは小羽たちが気づかないほど僅かに笑みを浮かべると、セットしていたカードを発動させようとしていた手を戻し、黒羽の竜騎士の効果がそのまま発動し、放たれた光が聖なるあかりに直撃すると、その光は聖なるあかりを貫通してホーク・ジョーに命中した。

「黒羽の竜騎士の効果によって、相手モンスターを破壊した事でこの効果のコストとして墓地に捨てたアブロオロスの攻撃力、２６００ポイントのダメージを与えます！
これで、終わりです！
ブラック・ブレイバー！」

『・・・』

ホーク・ジョー　ＬＰ２４００→０

「な、なんとか、勝てたよ～」

『やったね、小羽！』

「うん、マリナやブラックフェザー達のお陰だよ！」

小羽とマリナがデュエルに勝利した事を喜んでいると、ライフが０になった時の衝撃で膝を着いていたホーク・ジョーが立ち上がって二人に近づいてきた。

『さて、これでひとまず試練は終わりだ。
お主等、これからどうするのだ？』

「とりあえず、迎えが来るまで、ここで待たせてもらっても良いですか？」

『別に構わんが、出来れば某と出合った辺りまで戻って貰えないだろうか？
一応、此処の守護をしている身としては、あまり長い間此処に留まって居て欲しくないのでな』

「はい、判りました！
行こ、マリナ！」

『うん！』

ホーク・ジョーの言葉に笑顔で応えた小羽は、マリナと一緒にホーク・ジョーに出合った場所へ駆け足で向かって行った。

『フッ、試練を終えたばかりというのに、元気な娘達だ。
存外、某の見る目も捨てた物では無いのかも知れんな』

ホーク・ジョーは、駆け足で去っていく小羽達の背中を眺めながら、嬉しそうに微笑むと、デュエルディスクにセットされたままになっていた、機械族のモンスターに雷が落ちている様子が描かれた罠カードを自身のデッキに戻しながら、小羽達が向かった方向とは違う方へと飛んでいった。

第三十五話　ＶＳメタデッキ　飛び立て、黒羽の竜騎士　（後書き）

どうだったでしょうか、今回出したオリカも今まで同様、オリカ説明の方に乗せますので、気になった方は確認してみてください。

後、今回だした黒羽の竜騎士は、原作無印での竜騎士ブラック・マジシャン・ガールのＢＦ版です。

また、マジカル・ピジョンも同じ原作のオリカを作者なりに解釈した物です。

それでは、これからもこの作品をよろしくお願いします。

一周年記念コラボその３　アイドルＶＳ旋風の守護者（前書き）

今回は、１周年記念のコラボの３回目です。

今回のコラボのお相手は、呉羽さんの作品である遊戯王マスター一アイドル達の絆の繋がり一から、アイドルマスターのキャラである天海春香になります。

それでは、コラボその３始まります。

一周年記念コラボその3　アイドルVS旋風の守護者

～祐騎の部屋～

祐騎の部屋でデッキの調整や、課題等をしていた祐騎と蓮は、もう何度目かになる周囲の変化を感じて、溜息を吐いていた。

「ハァ～、また此処か～」

「これで何回目ですかね？」

「さぁね、もう数えるのもめんどうだわ」

「それじゃあ、今回の相手の方を探しに行きますか？」

「ええ、そうしましょう」

祐騎と蓮はそう言うと、部屋から出て、今回の相手を探し始めた。

～アカデミア校舎前～

「あ、あれ？
ここどこ！？」

祐騎達が部屋から出て、対戦相手を探している時、アカデミアの校舎前で困惑した様子で声を挙げている一人の少女が居た。

「な、なんで私こんな所に！？」

『ハァ、判らない事だらけだけど、とにかく少し落ち着きなさい』

「う、うん、ごめんね。
閣下ちゃん」

『別に良いわよ。
それにしても、此処って何処なのかしら？』

「見たところ、学校みたいだけど・・・」

『それにしては、人の気配が無いわね。
とりあえず、人を探しましょう、何か知ってるかもしれないから』

「そ、そうだね」

アカデミアの校舎前で一人で会話をしていた少女が、人を探すために動き出すとすぐに、人を探しながら歩いてきた祐騎達を見つけ、二人に向かって走っていった。

「あ、あの、すみま、ふぎゃ！？」

「だ、大丈夫？」

「ふぁ、ふぁい、だいじょうぶれす」

少女は祐騎達の近くまで行き、話しかけようとした時、何も無いところで盛大に転んでしまい、蓮が心配して覗き込むと、鼻の頭を擦り剥いていたが、平気な様子で立ち上がった。

「えっと、はじめまして。
私、７６５プロダクション所属の天海春香（あまみ　はるか）と言います！」

「はじめまして。
僕は、甲斐祐騎です」

「紅龍蓮よ、よろしくね。
それにしても、７６５プロダクションだっけ？
それってもしかして、芸能事務所？」

「あ、はい、そうです」

「ってことは、貴女ってアイドルなの？」

「はい！」

蓮が春香と名乗った少女にアイドルかどうか聞くと、春香は笑顔で肯定した。

そして、アイドルである事を知った蓮は引き攣った顔をして、冷や汗を流し出した。

「ア、アイドル、ねぇ」

「あ、あの、どうかしたんですか？
顔色が悪いですけど」

「ちょ、ちょっとね、少し前にアイドルがらみで色々あって、少し苦手になってて」

「そうなんですか」

蓮が自分がアイドルの事が苦手と言うと、春香は少し残念そうな顔になったが、それに気づいた祐騎が話を変えようと、春香に話しかけた。

「そ、そういえば、僕達に用事が有って話しかけたんじゃ無いんですか？」

「あ、そうでした！
あの、此処って何処か判りませんか？」

「あ～、貴女はここの事も知らない所から飛ばされた訳か」

「え？」

「実は・・・」

祐騎の言葉に、自分の最初の目的を思い出した春香が、この場所

について尋ねると、祐騎と蓮は春香にこの世界についての説明をした。

「えっと、つまりこの場所は色々な世界から来た人達の集まる場所で、デュエルをすれば勝敗に関わらず、元居たところに帰れるんですね？」

「ええ、そうよ」

「それじゃあ、早速お願いしても良いですか？」

「祐騎、頼んでも良い？」

「はい、もちろんです」

そう言うと、祐騎と春香は適度な距離を取り、蓮は二人の邪魔にならないように距離を取った。

「準備は良いですか？」

「はい、いつでもＯＫです！」

「では」

「「デュエル！」」

祐騎　ＬＰ４０００

春香　ＬＰ４０００

「先攻は貰います。
僕のターン、ドロー！」

「ガスタ・イグルを守備表示で召喚して、カードを2枚伏せてターンエンドです」

祐騎　手札3枚

「私のターン、ドロー！
私は、手札のヘカテリスを墓地に墓地に捨てる事で、デッキから神の居城－ヴァルハラを手札に加えます！」

「そして、手札に加えたヴァルハラを発動！
私の場にモンスターが存在しない事により、ヴァルハラの効果を発動します！」

「手札から、天使族モンスター、アテナ（攻／守２６００／８００）を攻撃表示で特殊召喚します！」

「さらに、手札からコーリング・ノヴァを攻撃表示で通常召喚して、アテナの効果発動！
アテナがフィールド上に表側表示で存在する時に、天使族モンスターが召喚された事で、相手に６００ポイントのダメージを与えます！」

「くっ！」

祐騎　ＬＰ４０００→３４００

「そして、アテナのもう一つの効果を発動します！
私の墓地に天使族モンスターが存在する時、私の場のアテナ以外の天使族モンスター１体を墓地に送り、墓地から天使族モンスター１体を特殊召喚します！」

「私は、場のコーリング・ノヴァを墓地に送り、そのコーリング・ノヴァを攻撃表示で特殊召喚します！
そして、天使族モンスターが特殊召喚されたことで、アテナの効果がもう１度発動します！」

「やっぱり、そうきますか」

祐騎　ＬＰ３４００→２８００

春香がヴァルハラの効果で召喚したアテナが、春香の場にコーリング・ノヴァが現われる度に祐騎に向かって光の羽を飛ばすと、その度に祐騎のライフが減っていった。

「良し、バトルです！
コーリング・ノヴァでガスタ・イグルを攻撃！」

「ガスタ・イグルの効果発動！
ガスタ・イグルが戦闘により破壊され、墓地に送られた時デッキからガスタと名の付く、レベル４以下のチューナー以外のモンスター１体を特殊召喚する事が出来る！」

「デッキから、レベル４のガスタ・サンボルトを守備表示で特殊

召喚します！」

「なら、アテナでガスタ・サンボルトを攻撃です！」

コーリング・ノヴァによって破壊されたガスタ・イグルの効果によって特殊召喚されたガスタ・サンボルトがアテナの攻撃によって破壊され、春香がバトルフェイズを終了しようとすると、祐騎の墓地からガスタ・サンボルトのカードが現われた。

「バトルフェイズ終了時に墓地のガスタ・サンボルトの効果を発動します！

ガスタ・サンボルトは、戦闘で破壊されたターンのバトルフェイズ終了時に、墓地に存在するガスタと名の付くモンスター1体を除外する事で、デッキから守備力１５００以下の風属性、サイキック族モンスター1体を特殊召喚する事が出来ます！」

「僕は、墓地からガスタ・サンボルト自身を除外して、デッキから守備力１４００のガスタの疾風　リーズを攻撃表示で特殊召喚します！」

「それじゃあ、私はカードを1枚伏せてターンエンドです」

春香　手札2枚

「僕のターン、ドロー！

手札からチューナーモンスター、ガスタ・ガルドを攻撃表示で召喚します！」

「チューナー、もしかしてシンクロ召喚を！？」

「いいえ、違いますよ。
僕は、ガスタの疾風　リーズの効果を発動します！」

「ガスタの疾風　リーズは1ターンに1度、手札1枚をデッキの1番下に戻す事で、自身の場のガスタと名の付くモンスター1体と、相手の場のモンスター1体を選択して、選択したモンスターのコントロールを入れ替えることが出来ます！」

「え！？」

「僕は、手札1枚をデッキの1番下に戻して、僕の場のガスタ・ガルドと春香さんの場のアテナのコントロールを入れ替えます！
チェンジ・ストーム！」

リーズが効果を発動すると、祐騎の場のガスタ・ガルドと春香の場のアテナの周囲に風が集まり、その風が交差すると、風に包まれた2体のモンスターのコントロールが入れ代わっていた。

「バトル！
ガスタの疾風　リーズでガスタ・ガルドを攻撃！
ソニック・ザンバー！」

「きゃあっ！」

春香　ＬＰ４０００→２６００

「そして、ガスタ・ガルドの効果発動！」

「へっ？」

「ガスタ・ガルドが破壊され墓地に送られた時、デッキからガスタと名の付くレベル２以下のモンスター１体を特殊召喚する事が出来ます！
僕は、デッキから２体目のガスタ・イグルを攻撃表示で特殊召喚します！」

「あっ、そのためにモンスターのコントロールを入れ替えたんですか！？」

「ええ、これがリーズの効果を使うときの基本ですから。
それでは、バトルを続行しても良いですか？」

「あ、はい」

「では、アテナでコーリング・ノヴァを攻撃！」

「罠カード、くず鉄のかかしを発動します！
くず鉄のかかしの効果で、アテナの攻撃を無効にして、くず鉄のかかしは再び場にセットされます！」

祐騎は、リーズの効果でコントロールを得たアテナでコーリング・ノヴァを攻撃しようとしたが、春香が発動したくず鉄のかかしの効果で攻撃を無効にされた。

「では、バトルフェイズを終了して、メインフェイズ２に入ります。
僕は、手札から魔法カード、ガスタの交信を発動します！」

「魔法カード、ガスタの交信は墓地に存在するガスタと名の付くモンスター2体をデッキに戻す事で、相手の場のカード1枚を破壊する事が出来ます！」

「僕は、墓地のガスタ・イグルとガスタ・ガルドをデッキに戻しシャッフルして、春香さんの場にセットされたくず鉄のかかしを破壊します！」

「うっ！」

「そして、レベル5のガスタの疾風　リーズにレベル1のガスタ・イグルをチューニング！
疾風と共に在る乙女、今こそ一陣の風と共に全てを包み込め！
シンクロ召喚！
舞え、ダイガスタ・スフィアード！」

「ここでシンクロを!?」

「ダイガスタ・スフィアードがシンクロ召喚に成功した事で、効果を発動します！
ダイガスタ・スフィアードがシンクロ召喚に成功した時、墓地に存在するガスタと名の付くカード1枚を手札に加える事が出来ます」

「僕は、墓地からガスタの交信を手札に加え、そのまま発動します！」

「墓地から、ガスタの疾風　リーズとガスタ・イグルをデッキに戻してシャッフルし、春香さんの場の神の居城－ヴァルハラを破壊します！」

「そんな、ヴァルハラまで破壊された！？」

祐騎がスフィアードの効果で手札に戻した交信によって、春香の場のヴァルハラが破壊されると、春香は驚いて声を挙げた。

「僕はこれで、ターンエンドです」

祐騎　手札２枚

「わ、私のターン、ドロー！
手札から速攻魔法、月の書を発動！
月の書の効果で、祐騎さんの場のアテナを裏側守備表示にします！」

「そして、コーリング・ノヴァを攻撃表示に変更して、バトルです！」

「コーリング・ノヴァで裏守備表示に変更したアテナを攻撃！」

「やはり、アテナを狙ってきましたか」

春香は、月の書の効果で裏守備表示に変更したアテナにコーリング・ノヴァで攻撃すると、攻撃を受けたアテナはそのまま破壊された。

「私は、モンスターをセットして、ターンエンドです」

春香　手札１枚

「僕のターン、ドロー！
僕は、手札からユニオンモンスター、ガスタの守護者（しゅごしん）（攻／守５００／５００）を攻撃表示で召喚します！」

「えっ、ユニオンモンスター！？」

「ガスタの守護神の効果を発動！
ガスタの守護神は、１ターンに１度自分フィールド上に表側表示で存在する、ガスタと名の付くモンスター１体に装備カード扱いで装備、又は装備しているこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する事が出来ます！」

「ガスタの守護神を、ダイガスタ・スフィアードに装備カード扱いで装備します！
そして、ガスタの守護神を装備したモンスターの攻撃力は６００ポイントアップします！」

ダイガスタ・スフィアード　攻２０００→２６００

祐騎の場に召喚された、ガスタのモンスターに共通して付いている紋章が中央に刻まれた天使像が分離して祐騎の場のスフィアードを囲むように動き出すと、スフィアードと天使像を風が包み込み、その風が止まると、天使像を鎧の様に装備しているスフィアードが姿を現した。

「バトル！
ダイガスタ・スフィアードでコーリング・ノヴァを攻撃！
エクストリーム・ソニック・ザンバー！」

「きゃあっ！」

春香　ＬＰ２６００→１４００

「コーリング・ノヴァの効果で、私はデッキから2体目のコーリング・ノヴァを守備表示で特殊召喚します！」

「僕は、これでターンエンドです」

祐騎　手札2枚

「私のターン、ドロー！
私は、カードを1枚伏せて、セットモンスターを反転召喚！
セットモンスターは、メタモルポット（攻／守７００／６００）です！
効果により、お互いに手札を全て捨てて、デッキから新たに5枚のカードをドローします！」

春香の場にセットされていたメタモルポットの効果で、春香は手札から紅天騎士ヴァルキュリアを墓地に送り、祐騎の手札からガスタ・イグルとガスタ・スクイレルを墓地に送り、二人ともデッキから5枚のカードをドローした。

「そして、私は場のコーリング・ノヴァとメタモルポットをリリース！
来て、私のエースモンスター！
蒼天騎士（そうてんきし）ヴァルキューレ（攻／守２８００／２０００）を攻撃表

示でアドバンス召喚！」

「蒼天騎士ヴァルキューレ、それが春香さんのデッキのエースモンスターですか」

「はい！」

「ですが、僕の場のダイガスタ・スフィアードは戦闘では破壊されず、自分フィールド上に存在するガスタと名の付くモンスターの戦闘によって発生するダメージは相手が受けるという効果があります。

そのモンスターでは僕にダメージを与える事は出来ませんよ」

「なら、私は手札から速攻魔法、禁じられた聖杯を発動します！禁じられた聖杯の効果により、ダイガスタ・スフィアードの攻撃力を４００ポイントアップさせる代わりに、効果をエンドフェイズまで無効にします！」

ダイガスタ・スフィアード　攻２６００→３０００

「さらに、サイクロンを発動！

装備カードとして装備されている、ガスタの守護神を破壊します！」

春香が発動したサイクロンの効果で、スフィアードに装備されていたガスタの守護神が破壊され、スフィアードの攻撃力がダウンした。

ダイガスタ・スフィアード　攻３０００→２４００

「バトル！
蒼天騎士ヴァルキューレでダイガスタ・スフィアードを攻撃！」

「くっ！」

祐騎　ＬＰ２８００→２４００

春香が聖杯の効果によって効果が無効になったスフィアードをヴァルキューレで攻撃すると、その攻撃によって効果が無効になっているスフィアードはそのまま破壊され、祐騎はダメージを受けた。

「良し！
私は、カードを１枚伏せてターンエンドです」

春香　手札１枚

「僕のターン、ドロー！
僕は、手札のフルール・シンクロンを墓地に捨てて、魔法カード、ライトニング・ボルテックスを発動！」

「ライトニング・ボルテックスの効果によって、春香さんの場の表側表示で存在するモンスターを全て破壊します！」

「ですが、蒼天騎士ヴァルキューレが相手によって破壊された事で効果が発動します！」

「蒼天騎士ヴァルキューレが相手によって破壊された時、墓地に存在する蒼天騎士ヴァルキューレ以外の天使族モンスター1体を特殊召喚する事が出来ます！」

「私は、ヴァルキューレの効果で墓地から、紅天騎士ヴァルキュリア（攻／守３０００／１２００）を攻撃表示で特殊召喚します！」

祐騎の発動した魔法カードの効果で春香の場のヴァルキューレが破壊されると、破壊されたヴァルキューレが居た場所に、ヴァルキューレに似た天使族モンスターが現われた。

「っ、蘇生効果持ちのモンスター！？」

「そうです！
そして、この紅天騎士ヴァルキュリアもヴァルキューレと同じく、相手によって破壊された時、墓地の天使族モンスターを特殊召喚する事が出来ます！」

「なるほど、ヴァルキューレとヴァルキリアは、お互いを蘇生させる事も出来るという事ですか」

「はい！
この2体が私のデッキのエースモンスターです！」

「なら、こちらもエースモンスターでお相手します！
手札から魔法カード、貪欲な壺を発動！」

「墓地から、ガスタ・イグル、ガスタ・スクイレル、ガスタの守護神、ダイガスタ・スフィアード、フルール・シンクロンの5体のモンスターをデッキに戻してシャッフルし、2枚ドローします！」

「そして、僕の墓地にモンスターが1枚も存在しない事により、手札からガーディアン・エアトスを攻撃表示で特殊召喚します！」

「コスト無しでレベル8のモンスターを召喚した！？」

「まだです！
さらに、手札からチューナーモンスター、栄光の天使を攻撃表示で通常召喚します！」

「チューナー、まさか！？」

「いきます！
レベル8のガーディアン・エアトスにレベル2の栄光の天使をチューニング！
風の守護者よ、今こそ栄光をその手に数多の魂を救う光となれ！」

「シンクロ召喚！
輝け、煌翼の守護者ートゥインクル・エアトスー！」

「これが、祐騎さんのエースモンスター・・・」

「トゥインクル・エアトスの効果発動！
トゥインクル・エアトスがシンクロ召喚に成功した時、お互いの墓地に存在するモンスターを全て除外します！」

「そんな！？」

祐騎がトゥインクル・エアトスを召喚すると、祐騎の墓地から2枚のカードが除外され、春香の墓地からは6枚のカードが除外され

た。

「そして、トゥインクル・エアトスはお互いにゲームから除外されているモンスターの数×１００ポイント、攻撃力がアップします！」

「今ゲームから除外されているモンスターは僕が3枚、春香さんが6枚。

よって、トゥインクル・エアトスの攻撃力は９００ポイントアップして、３９００になります！」

煌翼の守護者ートゥインクル・エアトスー　攻３０００→３９００

「攻撃力３９００!?」

「さらに装備魔法、黒いペンダントをトゥインクル・エアトスに装備します！

黒いペンダントを装備した事により、トゥインクル・エアトスの攻撃力はさらに５００ポイントアップします！」

煌翼の守護者ートゥインクル・エアトスー　攻３９００→４４００

「バトル！

トゥインクル・エアトスで紅天騎士ヴァルキュリアを攻撃！

セイクリッド・ゴスペル！」

「罠カード発動！

聖なるバリアーミラーフォースー！

このカードの効果により、祐騎さんの場に存在する攻撃表示モンスターを全て破壊します！」

「させません！
トゥインクル・エアトスのシンクロ素材となった栄光の天使の効果発動！
栄光の天使をシンクロ素材としたモンスターは、カード効果で破壊される時、攻撃力を５００ポイントダウンさせる事で、カード効果による破壊を無効にすることが出来ます！」

「よって、トゥインクル・エアトスの攻撃力を５００ポイントダウンさせて、破壊を無効にします！」

煌翼の守護者ートゥインクル・エアトスー　攻４４００→３９００

「そして、破壊が無効になった事でバトルは続行されます！」

「きゃあ！？」

春香　ＬＰ１４００→５００

「さらに、トゥインクル・エアトスがフィールド上に表側表示で存在する時、墓地に送られるモンスターは全てゲームから除外されます！」

「よって、破壊された紅天騎士ヴァルキュリアはゲームから除外され、除外されているモンスターが増えた事で、トゥインクル・エアトスの攻撃力が１００ポイントアップします！」

煌翼の守護者ートゥインクル・エアトスー　攻３９００→４０００

「効果破壊への耐性まであるなんて・・・
けど、なんとかこのターンは凌げた」

「いえ、このターンで終わりです」

「え！？」

「速攻魔法、サイクロンを発動！
サイクロンの効果で、トゥインクル・エアトスに装備している黒いペンダントを破壊します！」

「自分のカードを破壊した！？」

「黒いペンダントが破壊された事で、トゥインクル・エアトスの攻撃力は５００ポイントダウンします。
そして、黒いペンダントの効果発動！」

煌翼の守護者ートゥインクル・エアトスー　攻４０００→３５００

「黒いペンダントはフィールド上から墓地に送られた時、相手に５００ポイントのダメージを与えます！
これで、終わりです！」

「きゃあっ！？」

春香　ＬＰ５００→０

祐騎が黒いペンダントを破壊した事で、黒いペンダントの効果が発動し、その効果で春香のライフが０になり、デュエルが終了した。

「あぅ、負けちゃいました」

「大丈夫ですか？」

「あ、はい！
大丈夫です」

「まぁ、今回はデッキの相性が悪かったって所ね」

デュエルが終わって祐騎が春香に話しかけると、離れて観戦していた蓮が近づいてきて、春香に話しかけた。

「あの、これで元の場所に戻れるんですよね？」

「ええ、そのはずよ」

「そうですか」

春香の質問に蓮が応えると、春香の体が少しづつ透けていきだした。

「こ、これって！？」

「ああ、そろそろお別れね」

「こ、これが、そうなんですか！？」

「はい、今までの方の大半はそんな感じで帰っていきましたから」

「そ、そうですか。
あ、あの、デュエル楽しかったです、また機会が有ったらデュエルしましょうね！」

「はい、喜んで」

「それじゃあ、元気でね」

「はい！
お二人もお元気で！」

春香と祐騎達が互いに別れの挨拶を済ませると、次第に春香の体は消えていき、元の場所へと戻っていった。

こうして、異なる世界のアイドルとの出会いは終わりを告げた。

一周年記念コラボその3　アイドルＶＳ旋風の守護者（後書き）

どうだったでしょうか？

今回の話で、1周年記念のコラボは一応終了になります。

そして、今回のコラボ企画でコラボしてくださった皆様、本当にありがとうございました。

これからも、この作品をよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3495l/

遊戯王GX～旋風の守護者～

2011年8月30日10時09分発行